# 謳われない英雄への鎮魂歌

EXDEATH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
謳われない英雄への鎮魂歌

【Ｎコード】
Ｎ０３６６Ｎ

【作者名】
ＥＸＤＥＡＴＨ

【あらすじ】
この物語は、ある英雄の物語だ。誰にも賞賛されることはなく、愛する者にすら、その意志は理解されない。
誰にも感謝されず、常に恐れられ、それでもなお人を救おうとした歴史には語られない英雄。
彼は常にその身を犠牲にし、そして常に人々の陰でありつづける。
歴史という大きなＤＮＡの中のエクソンではなく、常にイントロンであった人間。

誉められることは無く。
己自身の正義だけを信じ。
ここで彼は幾多の人生を超えて……生き延びていく。
『ＴＨＥ　ＵＮＳＵＮＧ　ＨＥＲＯ』より改題しました。

## プロローグ（前書き）

この作品は作者の処女作である『君状』を加筆修正したものであり、基本的にはストーリはその形で進みます。
この作品における中二病は貴方の優しい心で華麗にスルーしてくださいね。

# プロローグ

かつてはかれらも英雄になろうとした。
かれらは、いまでは放蕩者でしかない。
かれらにとって、英雄は恨みと恐怖の対象だ。

byフリードリヒ・ニーチェ

英雄、というと、おそらく人は『アーサー王』だとか、そういった煌びやかで絢爛な騎士を思い浮かべると思う。
英雄と呼ばれる人は、その経緯がどうであれ人の憧れる人物像のイメージの根本だ。ヘラクレスやギルガメシュだとかクー・フーリンといった戦場で無敵の強さを誇る人たちは常に人民の期待をその背中に受けている。無論、時には最後に魔女として処刑されたジャンヌ・ダルクやランスロットと言った主君に反逆した人を英雄と呼ぶ人も少なくないだろう。

……だが、もちろん彼らだけが英雄ではない。時には英雄として語られることのなかった者、認められなかった者。それらは数多く居る。英雄と言われた者たちはその中で光を浴びた者達のことだ。

では、英雄とはなんだろうか。
優れた能力を持ってして敵を薙ぎ払う者か？
それとも知力を尽くして人民を導く者か？

――この物語は、決して謳われることのなかった英雄の話。
賛美されることはなく、ただひたすら自らの運命の意味を問い続

けた青年の物語。
英雄（ヒーロー）ではなく、謳われない英雄（ジ・アンサング・ヒーロー）としてあり続けた青年の物語。
彼は最後まで『英雄』で在り続けた。『謳われない英雄』として。

☆

道端に少年が二人。肩には重そうなリュックを抱え、その右手にはケータイ、左手には黒いバッグを担いでいる。
そこは、田舎とも都会とも言えない建物が立ち並ぶ町。そして、青年達が生まれた場所。
周りにはビルは無く、あるのはコンビニと家。それと畑や水田ぐらいだ。だが、それを気にするものはこの町にはいないだろう。この町にそんなビルを望む人間なんていないからだ。
くだらなくも素晴らしい、といった感じの町で、二人は一緒に育ってきた。
彼らは今、ちょうど学校から帰ってきている頃で、気分はすこし晴れ晴れとしていた。

だが、少し肩が疲れたのか彼らはそのバッグとリュックを気怠そうに地面に置いた。

「なぁ、一つ質問があるんだが」

ポケットにケータイを突っ込みながら青年は隣にいる人物に話し掛けた。話しかけられた青年は、太陽のおかげでケータイのディスプレイが映らないのにイラつきながらも、同じようにポケットにケ

ータイを突っ込んみ、首だけ向けた。

「もし人間が、いや…人間の限界を超えた時、一体ソイツは何を見るんだろうな」

質問した青年の名は『松下（まつした）　和哉（かずや）』といった。

身長はそこそこで、切れ長のつり上がっている眼が特徴的な青年だった。

「人間の限界を超越…か。人間の限界がわからなきゃ、その質問には答えられない」

松下――俺から受けた質問を、その青年は歩きながら揚々と返した。

彼の名は『矢島（やじま）　祐樹（ゆうき）』と言った。顔は整っており、見るものを優しい何かで包むような包容力を持っていた。

彼らは親友だった。何時も同じように行動し、同じように一緒に帰る。それが彼らが長年そうした習慣だった。

「やれやれ、暑いな。何℃あるんだろうな」

俺は一人愚痴を言った。

今は昼過ぎの午後一時だ。太陽が容赦なく照りつけ、ゆっくりと肌を焼く。季節は夏だ、と言ってもこの暑さは流石にこたえるものがあった。

「ああ。本当に」

矢島も額に玉のような汗を流した。汗は矢島の制服に落ち、すぅ、と服に吸収されて消えた。

相変わらずの夏の陽気が、今日もそこにあった。

その日、彼らはこの世から姿を消した。

ただ、忽然と神隠しのように、その世界から消えてしまったのだ。
そしてそれを皮切りに、運命の輪（ＴＨＥ　ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＹＮＥ）はただ静かに、そしてゆっくりと、回って行くのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 青年達の世界

万物の終わりが迫っています。だから思慮深くふるまい、身を慎んでよく祈りなさい。
何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。
不平を言わずにもてなし合いなさい。

ペドロの手紙―４．７―９

◇

柔らかい風を、俺は頬に感じた。とても涼しい風だった。

「――ッ！」

俺はその中でゆっくりと上半身を起こした。
その時頭に痛みが走った。後頭部をバットか何かで投げられた時に似た、鈍い衝撃の波紋が俺の脳を駆け巡った。『痛い』とはまた違った痛みが断続的にかつ反響して響いた。
しかし、それ以上のその痛みを忘れる程の衝撃を、俺は目の当たりにしたのだった。

「野原……？」

見渡せば、そこにあるものは一面のオオアマナという花だった。とても白く、純潔を象徴するかのような花だ。それ以外の草は見当たらない。木すらなかった。ふと隣を見てみれば、未だに眠ったま

まの矢島の姿があった。
俺は矢島の首筋の脈を確認したあと、矢島を起こすことにした。
「おい、起きろ…矢島！」
ゆさゆさと揺さぶりをかける。
しかし矢島は目を覚まさなかった。その時、矢島はかなり寝起きが悪いという事を思い出した。
そう、こいつは何時になっても一人で起きるのが苦手な奴なのだ。しかし、このまま寝られていてもそれはいろいろと困るので叩き起こす事にした。
俺はおもむろに顔を七回位やや強めに叩き、更に鼻をつまんだ。つまんだ時、苦しそうに矢島がうなされていた。
「…んーッ……！？」
「やれやれ…起きたか？」
はぁ、と俺は思わず溜め息をついた。矢島は上半身を起こし、頭をまわす。それから、俺は改めて周りを見渡した。
「い…今は何時だっけ？」
「知るか」
矢島からの問いに素っ気なく答えた。正直この異常な事態にマトモな答えを出せなさそうだったからだった。
そこで、俺はまたあることに気付いた。
「矢島、質問に答えてくれ」
いつになく真剣な眼差しをした俺に、矢島はすこし身構えた。

矢島の知る限り、目の前の青年の真剣な眼差しをしていた時は、やたら答えにくい質問ばかりだったからだ。

「…お前、ここに来る前のことを覚えているか？」

「……いや、思い出せないな」

「俺もだ。俺の記憶巣はそこだけ完全な空白になってしまっている」

思い出そうにも思い出せない。

何故ここにいるのか。

どうやってきたのか。

全くの空白地帯があった。嫌な予感が悪寒となって俺の背筋を通って脳に伝達された。

自分の記憶巣には、自らの住んでいた町にこんな場所はない。アスファルトによって舗装されているはずだ。それが、ここではその気配は全く感じられなかった。むしろ田舎のような居心地の良さが感じられた。

「どこなんだよ、ここは……」

矢島はスッと立ち上がり、草を踏みながら歩いた。

「変だな…。こんな場所があったかい？」

「わからん。全くもって不明だな」

吐き捨てるように言った。

そして、矢島はすこし考えるような素振りを見せ、こう言った。

「まさか…いやそんな筈が…」

「どうしたんだ、矢島？」

「有り得ないんだ。この温度が」
「温度……？」
「ああ。季節は夏の筈なのに…今は春のような晴れ晴れとした天気だ。俺達の町だったら既に熱中症にかかっているぐらいだよ」

言われてみればそうだ。空には爛々とした太陽が照っている。今の温度は人間が活動しやすいような涼しい状態である。流石に有り得ないことだ。
疑わしいことだらけだ、と俺は心の中で毒づく。

「……まさかね」
「いや、お前の考えていることは意外と合っているかも知れないな」
「え……？　いや、まさかそんなはずが…」
「認めるしかないんじゃないか？　この世界は『異世界』ということに」

しかし、まだ確証は出来てはいない。いくらおかしかろうと、まだ完全に証拠は出揃ってはいない。俺はそう考えながら非常識な考えを退けようとした。
とりあえず視察をしようとここら辺を歩き回ろうと決め、スッと立ち上がった。
あまり理解したくはなかった。
『異世界』という世界は存在しない、それは想像の世界だ、というのが共通意識であり、常識だ。人間は常識によって行動していると何かの本に書いてあったのを思い出した。
現実の範疇の外に理想を求めることはできない。しかし現実は、異世界という疑いを孕ませるには十分なほどだった。

「…しかしこれが現実なのか？　理解したくないものだな」
「まぁ、実際に現実としてみているから理解するしかないだろうけ

れど……、異常ってことには変わりはないよね」
「異常ならまだいいさ。いずれ正常に戻るんだからな。しかし……異常とかそういう範疇の話じゃないような気がする」

もしかして、これが正常なのかもしれない。異常なんてもともと無かった――と、俺はふとマトリックスのようなことを思い始めて、すぐにその考えを捨てた。
間違いなのか、どうなのかは今すぐには分からないが、一応これは夢ではなく現実なのだ、と心の中で確信した。

（空は変わらんようだ）

上には、いつもの青い空が広がっている。
雲は、一つも無かった。

◇

「矢島。行くぞ」
「え？　どこにさ」
「向こうだ。この丘の終わるまで」

しばらくは現実から逃避して考えを巡らせたいと思っていたが、そうもいかないようだ。
俺は頭に片手を付き、ぐるぐる回る思考を少しでも整理しようとした。

オオアマナに見たことのない虫が付いて何かをしている。恐らく蜜でも吸っているのだろう。その代償として花は受粉を手伝ってもらう。これが自然だ。

やがて考えながら歩き出した。絶望と失望、そして期待と希望を抱えながらふと空を仰いだ。その青さは先ほど見たときより、いや――本当に藍より青かった。

to be continued...

**街へ**

Time misspent in youth is sometimes all the freedom one ever has

若い頃に無駄に過ごした時間が、人生で唯一の自由であるかもしれない

Anita Brookner

◇

正直、このオオアマナの丘は奇妙な感じがした。ここの空気は何か、どこかおかしいと俺はふと感じた。

どこが、とは詳しくは説明出来ないが、とにかく自分の世界の空気とこの『異世界』の空気の匂いが混ざっている感じだ。

「……」

かれこれ二時間は歩いただろう。既に八キロ程は歩いていたような気がする。それまでオオアマナに埋め尽くされていたこの潔白の丘も、見るからに雑草が混じり始めている。

矢島も何も言わずにのそのそと隣を歩いていた。しかし汗は出てはいない。大した奴だ、と思った。

「もしかしたら…人類はいないかもな」

俺は彼にそっと投げかけてみた。それに少しびびったのか、矢島瞬間的に俺の方へ首を向けた。

「考えてみれば、人類ってのは恐竜が絶滅してから誕生したんだ。この異世界でも同じような生命のサイクルが無けりゃ、人類は誕生してはいないだろう」

「松下はロマンが無いのな…」

「無いな。そんなものは…」

矢島は残念だ、というようにフッと笑った。皮肉ではない、お互いの性格を知り尽くした上での同意ある笑いだった。そうだなと言わんばかりに、俺も密かに唇の端をほんの少し吊り上げた。

矢島は「流石にこの花の丘には飽きたぜ」と呟いてしゃがみこんだ。正直、俺も長く歩き回って少し疲れたので休憩を挟むことにした。

喉が渇いた、と矢島は呟いた。流石に二時間も歩き続ければ、この春のような涼しさでさえ体温は上昇し、切実に体は水分が欲しいと訴えてくる。しかし、ここらあたりには水が無いようだった。地下水ならあるだろうが、そんなことは出来る訳もなかった。

「……ん？」

矢島は視界にある奇妙なものを捉えた。もっと正確に言えば、何か人工的な何か――

更に目を細めてジッと見つめた。

「街だ！」

矢島はそう認識すると、先程まで休憩を取っていた体に脳が動け

と命令して立ち上がらせた。そして一目散にその人工物に向かって駆け出した。

（街……）

そんな矢島を諌めることはせず、ただゆっくり立ち上がり、矢島を追った。

◇

その人工的に作られた街…と認識すべきだろうか。とにかく、その街の少し手前まで俺達は走って来た。

最初に感じたのは、明らかに人の手が入っていると思われる造りだ。家一個にしても一軒家の大きさで、更に言えば石造りだ。その風景はどこか中世ヨーロッパ風な、ある種のカルチャーショックに似た衝撃が松下を揺さぶった。

「で、ここに人間が住んでいるか……という疑問だが――どうやら、問題はなかったようだな」

スタスタと早足で街に入ってゆく。

周りを見渡せば、そこには人が行き交っていた。ある者は片手に荷物を抱え、またある者は買い物を楽しんでいる。

恐らくここは、一般の商業都市のようだ。

「いよいよもって現実として理解し難い状況になったな。完全に」

矢島は爛々と目を輝かせてその中世ヨーロッパのような都市を見ている。

自分にとっても非常識な部分ではあるが、田舎から都会に来た上京したての学生のような眼差しで見た。
正直、自分達が住んでいた家と比べても（田舎ではあるが）、一戸の家は一見頑丈そうだったが、実は脆いという内的な欠点を持っている事を容易に想像できた。その部分から考えてみれば、やはり自分達の世界より文化レベルが三世紀ほど遅れているのでは？　という疑問が心の中で起こった。
しかし、耐震性が非常に高い日本の家屋と比べるというのは少しおかしいと思い、その疑問はすぐさま脳内から消え失せた。

「パラレルワールドか……？」
「なんだって？」

聞き慣れない言葉に、彼は聞き返した。
目を丸くしている彼に、どう説明しようかと約二秒ほど考え、

「…簡単に言えば、パラレルワールドってのは、ある世界あるいは時空から分岐し、それに並行して存在する別の世界や時空を指すんだ。「四次元世界」とかとは違って、俺達の宇宙と同一の次元を持つ世界のこと。普通に並行世界・平行世界と訳されることがある」
「……」
「…わからんか？」
「そりゃあもう」
「……俺達の世界のもう一つの可能性だよ。もし、俺達がああしていたら…とか、ケネディが生きていたら…と、樹形図のような分岐がある世界。わかるか？」
「えっと、つまりここは…？」
「『もし、中世ヨーロッパの世界が続いていたら』辺りの世界だろ。流石に魔法なんてチャラけたモンは無いだろう」

矢島は俺のおおざっぱな説明ではあまり理解が出来なかったらしいが、矢島は矢島らしく『ああ、そういったものか』と概要だけを理解したらしい。別段、俺としてもその考えで全く構わないと思うのでそれ以上の説明はしなかった。

◇

その街を見て回っている最中、矢島は疑問に思ったことがあったようで、彼はこう質問を投げかけてきた。

「なぁ、これからどうする？　宿を探すにしても、金はないぜ」

無論。それを聞かなかったように、いや――敢えて無視したようにそのまま考え込んでいた。

矢島はそれを見かねて二、三回声を掛けて、そこで初めて俺はは深い思考の中から抜け出した。

「……松下ってさぁ、一度考え始めれば止まんないな。ある意味尊敬すべきところだ」

「よせよ。そこは誉める場所じゃない」

自我を謙遜して、そこで再び矢島は先程の問いをした。

「ああ…金か。確かにそれは最優先事項だな」

そう、金だ。それが無ければなにも始まらない。結局初歩的な部分で足踏みをする結果だ。

異世界の金がどんな形態で、いくらほどの価値があるか。夢か現実が良く分からない世界の物価や流通しているものなんて知るわけがない。

（金か。そう簡単には手に入るわけもないだろうし……ん？　あれは……）

そうだ、この手を使えばいいのか。

俺は矢島に教えるように、ある建物に指を指した。

「あの一番デカい建物の場所へ行こう。恐らく金持ちだろ。一晩位は泊めてくれるさ」

その建物は、ある意味では想像し難かった。何百人も収容が出来そうな建物で、学校のようだった。

しかし、それ以外のよい案も矢島の脳内には確立されなかった。渋々…というより流されるままに俺の案に従った。

「はぁ、異世界……か。やれやれ、とんでもない事になっちまったようだ。面倒だなぁ」

そう、小さく零した。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 城、そして出会い（前書き）

夏休みって一概に言っても、高校生にとってはただの補習期間でしかないわけで……。
しかも特進クラスなら尚更のことで……。

## 城、そして出会い

Ｄｅａｔｈ ｉｓ ｎｏｔｈｉｎｇ ｔｏ ｕｓ， ｓｉｎｃｅ ｗｈｅｎ ｗｅ ａｒｅ， ｄｅａｔｈ ｈａｓ ｎｏｔ ｃｏｍｅ， ａｎｄ ｗｈｅｎ ｄｅａｔｈ ｈａｓ ｃｏｍｅ， ｗｅ ａｒｅ ｎｏｔ

死は我々にとって何ものでもない
なぜなら我々が存在する時には、死はまだ訪れていないのであり、死が訪れたときには我々は存在しないのだから

Ｅｐｉｃｕｒｕｓ

◇

「……やれやれ」

俺達は、眼前に広がる途方もない程の大きさの建物――というより城を見上げていた。
石造りの建物を見上げて感じたことは、ただ一つの、たわいない……そう、本当にたわいのない、くだらないという実感だった。

（無駄だな）

松下はその城のように大きな建物を一瞥すると、ゆっくりその中に入っていった。
矢島もしばらく呆けて突っ立っていたが、置いてけぼりにされていると知るやいなや、すぐさま松下を追った。

中に入ってみれば、そこはまた外見にそぐわずに豪華な造りだった。所々に絵画が飾ってあり廊下を彩っている。どれも見たことがない絵画だった。
そのまま真っ直ぐ進むと受付のような女性がいた。正確には仕事中の、だ。
俺は躊躇なくその女性に声を掛けようとしたが――その時、ふと横から声が聞こえた。

「あなた達、ここで何をやっているのですか？」

その声はまたも女性だった。それも同年代のような。
すぐに声のした方をふり向けば、其処には美少女、と言っても構わないような、とても華奢でいたいけな少女が立っていた。

「何をやっていると聞いているのですよ？」
「ああ、すまない。無駄に大きな城があったものでな。つい入って見たくなったんだ」
「……あなたは無駄に大きな城があれば入るのですか？　非常識な」

非常識はどっちだ、と言いたくなったが敢えてこらえた。まんま相手の言うとおりだったからだ。
とりあえず、その美少女の容姿をジロリと見た。
ドリルを想像させるような髪型に金髪、蒼く大きな瞳。整った顔立ちを見て、どこか『お嬢様』という単語が脳内に出現した。元の世界におけるライトノベルの影響だと言われれば反論は出来ないが、とにかくそんなイメージを持たせる相手だった。

「この城に勝手に入ったのは謝ろう。しかし…君がこの城の所有者なのか？」

女は首を横に二回、素早く振った。
「此処は城でも無ければ私の所有物でもない。学校よ」
思わず耳を疑ってしまった。
確かに学校だ、と言われればすんなり受け入れられそうだったが、それでもこの大きさは学校規格の大きさでは無い（あくまでも松下達の学校という概念の基準としてだが）。
そもそも城のようにする必要があるのか、という疑問もまた、松下の脳内に噴出した。
「ではお聞かせ願おう。この学校は何を教えているのか？」
「……？　何を言ってるのか理解しかねるわね」
「何故？」
「あなた達は本当に何も知らないの？　どこの田舎から出て来たのかしら」
「未だに石造りの建築から抜け出せていないこの時代遅れなこの世界の住人には言われたくない言葉だな」
矢島は酷い言いようだな、と思った。しかし、現代人にとっては当然の感情だと思うし、彼自身も実はそう思っていた。しかも開いては金髪ドリルである。どこの中世貴族だと突っ込みを入れてみたい。
しかし、俺の言葉はどうやら相手のプライドを著しく傷付けたらしく、その額にシワを寄せていた。
「やれやれ、話を戻そう。此処では何を教えているんだ？」
「…ま……よ」
「なんだと？」

「魔法だって、言ってるでしょ！」

相手の女はいきなり激情に刈られたらしく、目をつり上げて怒っている。その怒りようは見るものをたじろがせるようなオーラを発していた。

「おいおい、冗談はお前の髪型だけにしておけよ。魔法なんてあるわけがないだろう」

「か…か、髪型をバカにしたわね！？　『荒れる炎よ、ファイア』ッ！」

女が手を前に突き出し、少し力を込めたかと思うと瞬間に彼女の手のひらから火の玉が出現し、それが俺に目掛けて一直線に投擲された。

グシュウウウウウ！

その投げられた火の玉は俺の顔のすぐ真横をかすめたのち、地面に当たって焼けるような音を奏でながら燃えた。

（……おい、これはちょっとおかしいんじゃないのかよ！）

いや、ちょっとどころか実際におかしかった。なにせ、呪詛らしきものを唱えただけで炎を何も無い空間から作り出し、かつそれを投擲したのだ。

それは、もはや驚きとしかいいようがない。

「貴様…今何をした？」

「…フン！　いいリアクションね」

「何をしたのかと聞いているんだ！！　答えろ！」

「さあね。あなたのような平民ごときが、私のような魔法使いにそんなタメ口を聞くのがおかしくなくて？」

矢島は確かに『プツン』という何かが切れるような音を聞いた。その隣を見れば、完全にブチ切れている自身の親友の姿があった。
額にシワがより、口元は少し半開きで攻撃的な感じがした。矢島の知る親友は元々めったに切れるような人間ではない。しかし、プライドだけは高く、それを貶されればすぐさまキレる。自身も決定的な欠点だ、と語っていたのを矢島は思いだした。彼は体こそ鍛えられてはいなかったが、本当に姑息な手段で復讐をする。

「魔法だかなんだか知らないが、あんたの言い方は気にいらんな」
「…フン、平民が」

俺はその女の下へ全力で走った。手には何も持ってはいないが、男としての力は女をぶん殴ってケガさせるには十分な程の力はあった。
女の方も手を翳してなにやら呟いている。瞬間、女の周りの空間に魔法陣らしき何かが展開され、それは赤く光っていた。

「魔法使いに反抗したこと、万死に値するわね。『空気よ、凍れ！ブリザド』ッ！」

その魔法の標的は明らかに目の前に立つ俺だった。
俺の周囲の空気が冷やされていたのだ。その次の瞬間、足が氷によって固められていた。

「残念。あなたは魔法使いを侮辱した罪で監獄に入れられる運命ね。ま、当然といえば当然だろうけど」
「くッ…やってくれる…」
「別に此処で殺してあげてもいいんだけど？」

金髪でドリルな髪を揺らしながら意気揚々と近づき、にやりと笑いながら前に立った。その差は俺の攻撃範囲のギリギリ外だった。彼女もこの近さでは魔法で対処は難しいと考えているらしい。

「……やれやれだ。俺は死も望んじゃいないし、牢に入る気は全くない」

「あらそう。じゃ、そのまま氷が溶けるまでそこで這いつくばってなさい。足が凍傷にならないといいけど」

「……」

その勝ち誇った顔で笑う女は美しくもあったが、俺にとっては何よりムカつくことだった。

そうしている間にも、俺の足は感覚が消えかかり、ゆっくりと凍傷に向かってゆく。痛みさえ感じなくなってきそうだった。俺はその時、手に力を込めながら女の方を憎々しげに睨み付けた。

「なによ、その目は。この私に向かって…」

それが逆に女の気分を損ねかけているようだ。それ以上気分を損ねてしまったとしたら、今度は確実に彼の命はない。そう感じた矢島は女の前に進み出た。

「すみません！　俺の親友が迷惑かけたようで…本当にすみません！」

「な…なによ…今頃になって…」

「コイツは俺の唯一の親友です。だからもう許してくれませんか？」

金髪ドリルの女はちょっと心が揺らいでいるようで、顔を赤く染めたりしていた。

矢島はさらにスパートを掛けるように、頭を下げながら謝った。

そこで折れたのか、

「わかったわよ…解放するわ」

そう言うと、女は指をパチッとならした。

すると、俺の足に付いていた氷は一気に氷解し、水へと変化した。

「良かったわね。いい友達のお陰で生き残れたわよ」

「――ッ！！」

女がそう皮肉を言ったとき、矢島は隣の彼がなにやら呟いたのを聞いた。

すると、いきなり俺の右手に光が生じ、それがとてつもない程の熱量を生み出していた。その光の珠を思いっきり女に向かってブン投げたのだ！

「な……ッ！！」

その光の球は女が咄嗟に回避したために当たる事は無かった。しかしそのまま球は直線的に進み、壁に激突して大きな穴をこじ開けた。

「平民が……魔法を！？」

女は目を丸くして驚きを隠せないようだ。手が震えている。

「これが……魔法、か」

ついつい呟いてしまう。

あの光の玉が出た時、どこか力が抜け出ていく感覚を覚えていた。

「松下！　お前、一体今何をしたんだ！？」
「…わからん。ただ、頭に言葉が浮かんだだけだ」
「それだけって…本当に！？」

矢島は驚きを隠せなかった。
あの現実主義な彼が、幻想的な行動をした。それだけで驚きだった。
そしてなにより、自身の親友に魔法が扱えたことが矢島を揺さぶった。

「あなた達は…一体何者なのよ！？」
「…教える必要はないな。行くぞ、矢島」

俺はゆっくりと立ち上がって出口へ行こうとした。しかし、女はこちらを睨み付けながら服を引っ張っていた。

「なんだ、何か用か？」
「あなた達は監視するわ」

その一言を聞いた瞬間、俺はその腕を払って睨み付けた。

「別に監視というのは牢に閉じ込めるとは違うわ。もっと別よ」
「何をする気だ」
「あなた達は、この学校に入学しなさい」

その一言が、後に松下と矢島の離別を生むとは、誰が想像しただろうか。

to be continued...

## 目の前に立つ女

Ｆｒｅｅｄｏｍ ｃｏｎｓｉｓｔｓ ｎｏｔ ｉｎ ｄｏｉｎｇ ｗｈａｔ ｗｅ ｌｉｋｅ， ｂｕｔ ｉｎ ｈａｖｉｎｇ ｔｈｅ ｒｉｇｈｔ ｔｏ ｄｏ ｗｈａｔ ｗｅ ｏｕｇｈｔ

自由とは、ただ好きなことをするということにではなく、我々がなすべきことをなす権利を持つことにこそある

Ｊｏｈｎ Ｐａｕｌ ＩＩ

◇

「――お前、自分が言っている意味が分かっているのか？」
「当たり前じゃない。丁度、私はこの学園の理事長と生徒会長を兼任しているわ。その程度は簡単よ」
「…何を考えているのか理解出来ないな。却下させていただく」
「そう。だったらそこのアナタは？」

ピシッと女は指を矢島に差した。
指された矢島は少しオロオロしながら言った。

「えっと…俺としては、世の中を学習するのにいいチャンスかな～なんて思ってたり…して」

そう言いながらも松下の方を横目でちらちらと見た。しかし面倒くさいのか、松下はそれに反応せず、ただ淡々と言葉を紡いだ。

「確かに、俺達はこの世界の知識が乏しいが…」
「だろ？　やっぱ入学した方がいいと思うぜ」
「…しかし、俺はあまり乗り気じゃない」

お断りだ、と簡潔に意志表示してフン、と鼻を鳴らす。彼の心には、まだ現実主義としての、悲しい性があった。

◇

松下は元々友達が多い訳では無かった。
容姿からしてみてもモテるはずもなく、彼自身もそれでいいと思っていた。
ある日のことだ。
松下は矢島と一緒に学校へ登校していた。たしかその日はバレンタインデーだった。
ただ普通の、なんのたわいもない無駄話をしていた。アニメや好きな漫画、雑学やくだらない教師の影口をたたきながら。
そもそも、松下はバレンタインデーなんていい思い出は無かったから当然の反応だったのだが。しかし…それは更に深くなる。
学校へ丁度登校した時だった。その時、校門で待ちわびていた女子達が一斉に矢島へ押し掛けたのだ。あれよあれよと人の波が押し寄せてくる中、危険を感じ取って逃げたのは英断だったようで、あっという間に矢島は囲まれて丁寧に包まれているモノを受け取っていた。
松下は別に関係ない、と楽観視していた。だが、『あんた、図々しいわよ。矢島君に近づかないで』、と太っていて二重顎の女子に言われ、とばっちりもきっちり松下の方へ来たのだった。

それ以来、学校生活における矢島との距離は少し開けたままだった。だから…という訳ではないが、この怪しい魔法を教えるという

学校に入るという選択はしたくは無かった。
別に勉強が嫌いという訳ではない。ただ、厄介なことは起こされたくは無かっただけだった。

◇

「――で、何をする気だ」
「あら、ちゃんと来たの」
「フン、ただ単に金も無しに生きていけるかよ」

松下達はある一室に連れて来られた。中は何もない訳ではないが、かなり質素な造りだ。窓が複数あって机と椅子、あとは本棚が一つあるだけだ。
女は一つしかない椅子にふんぞり返り、机の引き出しから二枚の紙を取り出した。

「コレに名前を」

そういって差し出してきた紙を渋々受け取る。しかし鉛筆も無ければ書く机もない。

「何か書くものと机を貸してくれ」

そう要求すると、小さな小言を言いながらもペンを投げつけてきた。しかし、ペンとは言っても羽ペンだった。おそらくは魔法か何かでインクが切れないように細工されているに違いない。
下敷きも貸してもらって、羽ペンを握った。
しかし、そこで奇妙な事を思った。

（読める…この文字が）

ダンスを踊っているミミズのような文字が目に入った途端、脳が見た文字を日本語に変換しているような感じだ。

だだの文字の羅列を読み進めれば、大体のことが掴めてきた。

そして…読み進めたことによって分かったのだが…この紙は『入学届』だ。

「――入学届、って事は一年生か」

「いちねん？　何よそれ」

松下は一瞬耳を疑ったが、考えてみればここは異世界だ。こちらの世界の常識は通用しないだろう。つまり、この世界における概念は違うのだ。

そこまで考えて頭が痛くなってきた。

「とりあえず説明してくれないか？。頭がパンクしそうだ」

「本当に常識知らずなのね。どういう教育を受けたのよ？」

「…貴様は疑問文には疑問文で答えろと、この学校で教えているのか？」

はぁ、と溜め息混じりに女は頭に手を当てた。

「この学校は、魔法を教えるって事は説明したわよね」

「一応な」

「この学校の名前は『エンプラス特殊学院』って言うの。赤のマントは入学したての人が着て、蒼のマントは二年目の人が。そして黒いマントを羽織る人は、三年目の人よ。それで学年が見分けられる」

「そういうあんたはどうなんだ？　みた所、今は私服の様だが」

「私は今度で蒼よ」

誇らしく腰に手を当てて胸を張っている。しかしその胸があまりにぺったんこだったのは本人の目の前では言わなかった。
松下はだんだん話すのが面倒だ、と感じてきていた。そこで、話の矛先を自分から矢島へと変わらせる為、矢島に自らのサインを記した紙を持っていくよう頼んだ。矢島は快く了解してくれ、彼に手渡した。
ちなみにこの世界の文字も日本語を書くようにほぼ無意識に書くことが出来た。

「はい」
「ん、ありがとう」

女は紙を両手で掴み、その書かれたサインの名を確認している。

「マツシタ・・・と矢島君ね。よろしく」

何故か自分の名前が片言でいわれたのに少しイラッときた松下だったが、その無常な感情を殺し、ただ二人の会話を聞くことにした。
矢島はしっかりと相手の目を見て話す。それは矢島の癖であり、人の心を捉える効果的なワザだ。あのワザのおかげで先生達の矢島に対する評判は鰻のぼりであり、常に一目置かれた存在であった。しかもそれを慢心とはせず、常に平等に接する態度は松下でさえ一目置いていた程だった。

「そういえば……名前はなんと言うんですか？　出来たら教えてくれるとうれしいです」
「そ、そうね。名前を名乗らないのは失礼ね。私の名前は『フィルナ・ブランフォード』よ。よろしくね」

そういう女――もといフィルナ・ブランフォードは顔を赤くしながら言った。
その後、フィルナは矢島から差し出された手を握り締め、握手をかわした。
よくあんな風に女に接するものだ。俺だったらたとえ握手を求められようとも必要がないなら絶対にしない。まあそれが彼の魅力であり、自分には備わっていないんだな、と松下は心の片隅で思った。

「これで終わりか？」

松下はそんな二人を見ながら言った。

「一応はね。本来もっと書類を書かなきゃいけないんだけど、後は私がやっておく。貴方達は今日は寮に泊まるといいわ。手配しておくから」

とりあえず、その言葉に従うことにした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 目の前に立つ女（後書き）

なんか変だよね。
ＰＣからの観覧を推奨。

## 男達の怠惰

ＴＨｅ ｒｅａｓｏｎ ｙｏｕ ｈａｖｅ ｎｏ ｍｏｎｅｙ ｉｓ ｂｅｃａｕｓｅ ｙｏｕ ｄｏｎ'ｔ ｌｏｖｅ ｉｔ ｆｏｒ ｉｔｓｅｌｆ ａｌｏｎｅ．
Ｍｏｎｅｙ ｗｏｎ'ｔ ｅｖｅｒ ｓｕｒｒｅｎｄｅｒ ｔｏ ｓｕｃｈ ａ ｆｌｉｒｔ．

君に金がない理由を教えてやろうか。それは君が金だけをひたすら愛さないからさ。
金というものはね、何もかも愛するような浮気者には身をまかせないものさ

Ｆｉｎｌｅｙ Ｐｅｔｅｒ Ｄｕｎｎｅ

別に、異世界に来たからと言っても何をする訳ではない。
逆に何を成せばいいのか、どうしてこの世界に来てしまったのか、全く分からない。
この魔法が扱える世界で、生きていける気は全くない。第一この世界に来てしまったら、元の世界では大騒ぎの筈だ。
そもそも、何故この世界に来る寸前…つまり召喚された際の記憶がないのはなぜだろう。
心のどこかにポッカリと大きな穴が空いたような気分がして気持ちが悪い。

「帰れるのかな？　俺達」

矢島は心配そうに俺の横顔を眺めた。だが、どう答えていいかよく分からなかったので敢えてその質問には答えなかった。

俺らが今居るのは、この学校の敷地にある寮だった。フィルナ・ブランフォードに連れられてその寮に案内をしてもらったのだ。
その寮は石造りではあったが、人が十分住めるような構造で一人一部屋ずつだ。正直一人部屋としては十分広い。

「……やれやれ」

そう一言つぶやいて矢島の方に向き直る。

「矢島、この世界で――いや、違ったな。俺達の元の世界で人類史上もっとも売れ続けているベストセラーの本ってなにか、知っているか？」
「聖書…だろ？」
「ああ、そうだ。だけどまぁ、一概に聖書とは言っても宗教によって聖典とするものは違う」
「へぇ」
「よく言えば、聖書は主に二つに分かれている。旧約聖書と新約聖書がそれだ。前者はユダヤ教の聖典だが、新約聖書は主にキリストの生涯の教えを説いている。キリスト教の聖典はこの二つをまとめて聖書と呼んでいるな」
「う…ん、宗教関係はよくわかんないな」
「分からんもなにも、宗教、というのは人間の規範と大切にすべき事柄を象徴して語っている。文明を作るとき、まず最初にできたのは宗教だと思うんだ」

矢島は分からない、と言いたそうに首を傾げている。
松下は溜め息をつきながら、おもむろに立ち上がって机の横の本棚から一冊の本を取り出した。
それはダークブラウンのような色で舗装されていた。

「これはおそらく聖書だ」

それを矢島に手渡した。矢島はその本のまず一ページ目を開いた。まず目に入ったのは『創世記』だった。

「その本は、この世界において聖典の役割を果たしているに違いない。つまり宗教の発生、発達した文明があるということだ。我々の世界で発達した文明は機械やテクノロジー、インターネットだが、こちらの世界で発達したのは魔法だったのだろう。宗教は文明と密接に関わっているのだからな」

「うん？　つまり、文明レベルは変わらないのかい？」

「そうかも知れないし、違うかも知れない」

その聖書の記述は、複数の文書から成り立っているようだった。そのどれも、かなり昔に製作されているようで、なかなかの読み応えだった。

しかし、よくよく読んでみればもともとの聖書とは違った部分が見受けられる。ノアの箱舟の話が無かったり、または新しい物語が挿入されていたり。

「この世界を知るには宗教を知るのが手っ取り早い。彼らが信望している神が、どのくらい信用が置けるのか分からないしな」

「ははっ、信用って・・・」

「もしかしたら、本当に居たりしてな。神が」

俺は矢島から聖書を取り上げると、再び本棚に戻した。

「ちょっくら、あのムカつくフィルナのところに、今後の日程を聞きに行くぞ。お前も来い」

ちょっと待って、と嘆く矢島を尻目に、やや呆れながら彼を鼻で笑った。

◇

スタスタと廊下を我が物顔で歩き、その石造りの海のような寮を見て、まさに迷路だと思った。

その構造はまさに複雑そのもので、いたるところにドアがあったり階段があったりする。正直、ここの建築者はバカじゃないのか、とムカつくぐらいだ。

しかしそう安易に迷っていられる時間も無いのだが、今はただただ右往左往するしか無かった。

「……」

第一フィルナがいる場所すら分からない。そのことをフィルナ自身に質問する前に彼女はすぐに消えてしまった。なんでも、生徒会関連だそうだ。

恐らく俺達の入学関連でのことだろう。そこはすまないと思う。

ところで、この寮は人が少ない。

実際、がらんとしていて、ふと心に一理末も不安がよぎる。幽霊でも出るぞと言われても簡単に信じられる程だ。全く奇怪な寮だ。

そこに矢島はあるものを見ていた。どうやら何かの張り紙のようだった。

「なんだ？　そりゃあ」

その張り紙をまじまじ、と見つめる矢島の頭を押しのけてそれを

見つめた。

☆

「……なん、だ？」

奇妙、という言葉がぴったり似合うようだった。
それは奇妙というか何と言うか…何処か変な張り紙だった。
その張り紙には、こう書かれていた。

『生徒会委員、募集中』

その張り紙には、その文字がプリントアウトされていた。いや、プリントアウトというよりは何か魔法チックなものを感じる。しかし、問題点は其処ではなかった。その『プリントアウトされている文字の背景』だ。
ある意味、まさに『異世界』を感じさせる、というより現代を思い起こさせた。

「いくら勧誘でも……おかしいだろ、これ」
「あはは……面白い、ね……」
「どこが？」
「あ、いや。彼女達が着ている服だよ」
「んなことは分かっている。むしろ失笑ものだぞ？　これ」

その張り紙の文字の背景は、最初に目にした人物が写っていた。
そして、その人物が着ているものがどこかおかしかった。

「なぜ、生徒会の部員と生徒会長兼理事長は『メイド服』を着てい

るんだ？」

そこに写っていたのは。

メイド服を集団で着込んでカメラ目線でピースしている、恐らく生徒会であろう女子の集団が写っていた……。

（……メイド萌えって異世界にもあるのか）

ただ、どうしてもそれが気になったのだが。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

**歩きの最中で**

おまえたちには計り知れない事だろうが　最後にひとつ言っておく。

『時は加速』する

わたしの能力は……完成したようだ。　そしてこれは……おまえたちを始末するための能力ではないし、『最強』になるための力でもない…。

この世の人類が真の幸福に導かれるための力なのだ。

ｂｙ　プッチ神父〔ストーン・オーシャン〕

◇

先ほどから時は幾らか過ぎ、俺達は何とか迷路のような寮を脱出し、再び城のような学校へと潜った。

ただ、その道のりはそこまで険しかった。

ただ寮の迷路を言ったり来たりを一時間繰り返し、更に寮から学校まではなかなか長い。正直二、三度ほど帰ろうか、と思ったほどだ。しかし、その度に、

『やっとの事で寮を脱出したんだし、せっかくだから行こうよ』

という矢島のにこやかな笑顔に、その度足の進路方向を変えなくてはならなかった。

度々思うのだが、この矢島という奴はどうも苦手だ。いや、性格や内向的な部分ではなく、だ。

今まで親友として馴れ合ってきた間柄とは言え、矢島と一緒に居

るとどこか疎外感を感じてしまう。それが虚偽の物で、ただ自分が勝手に感じてしまっているのなら、それは謝ってしまおうと思う。
こうして二人で歩いていると、彼の身長の高さが自らの身長と違うというのが少しだけ実感できる。
俺の身長は矢島と比較して、大体五センチほどの差がついている。たかが五センチとは言うが、実際はその差は結構大きい。その点で、やはりどこか『違う』と感じてしまう。

そもそも、だ。

どうして女という生き物は背の高い男に惹かれるのだろうか。
個人的な憶測だが……恐らく、身長が高い＝防衛能力が高いという所に理由があると思う。
女はどこか『自分を守ってくれる人』という願望があるに違いない。多分それは本能的であるにしても、それが身長が高い人物を好きになる一因なのだろう。
それが『シンデレラ・コンプレックス』と呼ばれる、女性の願望に繋がっているかもしれない。

まぁ、なんて事はない。ただの嫉妬、という奴だ。

「そういや、まだこの世界に来て一日と経っていないな」
「ん…まぁ、いろいろあったけどね」

矢島もこくりと頷く。

「夢だったらいいなぁ。本当に」

それは本心から出た言葉。
こんな現代社会からかけ離れ、文化のギャップに驚かされる事が

全て夢だとしたら、どれだけホッとするか。
夢落ちなら、いいのに。

「そうかい？　そこまでこの世界はくだらなくないと思うけど…。まぁ、それは個人の考えだよね」

本当に、コイツは。

「でも、気楽に行こうよ！」

楽観的過ぎて、面白い奴だ。

◇

まぁそんなこんなで、城に潜入した訳だが。
そこも素晴らしい程広いわけで。

「前は事務所の裏口からだったが…改めて見回してみれば、マジにデカいな」

下駄箱を抜けた先は廊下がある。廊下自体はあまり大きくは無く、至って普通だ。しかし、本当に広いのはその先だ。
廊下を真っ直ぐ進み、その真横の部屋を覗いてみれば、そこには正に『パーティー会場』のような感じがする場所だった。
何に使うのか全く計り知れないが、恐らく何か催すのだろう。
この学校はこの世界でも一線を越えるのかも知れない。

「なんつーか、マジにクレイジーな場所だな…。夢なら覚めて欲しい位に」

現実的ではない程の設備に、少々どころかクレイジーと言い放つ程に段々と慣れてきた松下だった。

更にそこから数十メートル。

もう、失笑すら出来ない。

眼前に広がるは教室、ではなく食堂らしき部屋。

その部屋の奥に広がるのは正にレストラン、とでも言えば伝わるであろう。

そこには、数名の料理人が仕事に従事していた。

「うっわ…すごいねぇ。やっぱこの学校はお金持ちなんだなぁ」

たしかに、学校に料理人は必要は無いはずだ。

学食とはいえ、そこはパートの人が従事するのが妥当。学校に本業のコックは要らない。

正直、自分が通っていた学校とは大きくかけ離れている、と感じた一瞬。

「……ッ！？」

『キャッ！』

その後ろから誰かがぶつかってきた。

それは全くの予想外で。

不意打ちのようにぶつかって。

そしてそのぶつかった人物を矢島が支えて。

「あ……ありがとう、ございます」

ぶつかってきたのはどうやら、矢島が支えている腕の中の美少女

だったようだ。

「ん…と、大丈夫？」

「あ、はい。なんともありません…よ…」

そういうと、いたいけな少女はプイッと顔をそらす仕草をする。

またそれが反則級な可愛らしさだった。（補足するが、あくまで俺の主観的な評論であって、決して俺が惚れたという意味ではない）

自らの城から初めて外に出た箱入り娘のようなあどけなさを持つその可憐な少女は、桃色の髪を持ち、顔立ちは品性あふれるお嬢様だ。

その様子を例えるならば、お姫様とそれをエスコートする婚約者のようだった。

「……」

だがそんな桃色の空気の蚊帳の外にいる俺は、ただただその静寂を守るしかなかった。

もっと正確に表現するならば、その空気に踏み入る勇気が無かった。

とにかく、この後どう行動すべきか――？

「あ、あの……」

その少女は恥ずかしそうに矢島を見る。

唇と唇か重なりあうその距離は約、数十センチ程。

しかしその少女が言いたそうなことを察したのか、矢島は少女から支えていた腕を離し、すぐに距離を取った。

「す、すいません！　こ、こんなことをして……」

「ああ、いいえ。構いませんよ。助けていただいたのですから…」
「でも……」
「ふふっ、面白い方ね。もういいのよ？」
その仕草も、お嬢様らしい。
（おいおい、俺には謝罪の言葉一つねーのかよ）
その空気に入れない青年は、心の中で愚痴をこぼした。
そのままゆっくりと立ち上がり、ハア、と溜め息をこぼした。
――で、俺の存在にやっと気づいたのかどうかは知らないが、その美少女はこちらを振り向いてこう叫んだ。
『……ッ！　きゃあああああああ！』
そしてそのまま走り去っていった。
「……」
そうしてその場に残るのは。
振り向かれたとたんに逃げられた哀れな青年が発する負のオーラがあった。
「矢島」
「ん？」
「自殺したい」
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 話し合いとめぐり合い

Ｗｈｅｎ　ｏｎｅ　ｄｏｏｒ　ｏｆ　ｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｃｌｏｓｅｓ，　ａｎｏｔｈｅｒ　ｏｐｅｎｓ；
Ｂｕｔ　ｏｆｔｅｎ　ｗｅ　ｌｏｏｋ　ｓｏ　ｌｏｎｇ　ａｔ　ｔｈｅ　ｃｌｏｓｅｄ　ｄｏｏｒ　ｔｈａｔ　ｗｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｓｅｅ　ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｗｈｉｃｈ　ｈａｓ　ｂｅｅｎ　ｏｐｅｎｅｄ　ｆｏｒ　ｕｓ．

１つの幸せの扉が閉じたとき、別のドアが開く。
しかし、時として我々はその閉まったドアをとても長く見つめているために、その開いた幸せの扉が見えないのである。

Ｈｅｌｅｎ　Ｋｅｌｌｅｒ

よく、『自分の幸せは自分では気づかない』とか何とかいわれることがある。
一理ある。
例えば、失って初めて大切だと気づくもの。それは教科書であったり、親だったり。
つまり、気づいたら手元に無いものだとも言える。
そして、いざ失ってしまったら虚しいものだ。

「そして俺達が失ったものは……もとの平穏な毎日、ってところか？」
「ん？　何か言ったかい？」
「いや別に。……ここだな。生徒会室ってのは」
正直ここまで来るのには本当にきつかった。

迷路――という事はなかったが、それでも広大な敷地を散策するのは拷問のように感じられる。この学校に通っている人間はどれだけ体力があるのだろうか。魔法を抜きにすればの話だが。
ま、そんな事はどうでもいい。とりあえずは目の前にあるドアを開けることに集中しよう。

「んっと……」

少し大きな扉を片手で開ける。
すると、その先には――

「あら、誰かと思えば」

フィルナ・ブランフォードのお出ましだ。
ピン、と跳ね上がったアホ毛が彼女の存在感を更に引き立てている気がする。まぁそれは個人と個性の問題であるのだが。

「うわぁ……すげー！」

つい矢島が感嘆の言葉を漏らす。
そして俺も同じように少しびっくりしてしまった。
なぜなら、まず目にいくのは部屋の大きさだ。
生徒会室、というと少しこじんまりしたものを想像してしまうが、目の前にある光景はそれを見事にクラッシュしていた。
その部屋に備蓄されているのは机やイスを除いても十分活用できそうなスペースが広がっている。
俺と矢島は恐れ多く感じながらもいそいそと生徒会に入室し、一番手間のソファに腰掛けた。
ふむ、このソファもなかなかの質感だ。高級な感じがする。

「誰が座っていいと許可をしたの？」

そう言いながらギロッと睨み付けてくる。

どうやらあの女は少しばかり性格が荒いのかも知れない。

「まぁいいわ。で？　何しに来たのよ？」

「うん、それなんだけどね。実は、この後の日程を教えてもらいたいんだ」

すかさず矢島が応答する。

多分俺とフィルナの睨み合いを止める為なんだろう。

すると、急に此方から目を離し、

「ああ、言ってなかったわね♪」

と、柔らかな声で応対した。無論俺とは全く別の、柔らかくて暖かみのある、言わば猫なで声という奴だ。

どうしてこうも対応を瞬時に変える事が出来るのだろうか。不思議でならない。

「明後日に入学式があるの。あなた達にはそれに参加してもらうわ。勿論、それからはこの学校の学生として過ごしてもらう。これで良いかしら？」

「そうか……。わかった」

「あなたには言ってないわよ！」

「お前はさっき”あなた『達』”と言ったじゃないか」

「あーも！　うるさい！」

……どうやら、短気でもあるらしい。

その後、教科書について、食事についてなどの説明を受けた。
正直この教室にいるのはかなりの苦行だったが、飢えて死ぬよりはマシと割り切って耐えしのんだ。途中、三度ほど餓死でもいいかと思ってしまったが。
とにかくこのフィルナ嬢の言い分をまとめてみた。

一、この学校は政府によって援助されており、実質の授業料はゼロ。
二、教科書などは無償で受け取ることが出来る。
三、戦闘で名を上げる素質のある者が入学する。

「この三つ目に関してなんだが」
「なに？」
「何か選出でもしているのか？」
「……？」
「戦闘で名を上げる、というが、それなら何故俺達を通わせる？こんな俺達を」
「それは簡単なことよ。『あなたは魔法が使える』」
「魔法だと？」

確かに俺はあの時、魔法らしきものを使った。だが、アレは偶然の産物であって、故意に出した訳じゃあない。
そもそも俺が魔法を使えるなんて、俺自身がびっくりしている。

「魔法が使えるのが入学条件なのか？　なんておかしな世界だ……」
「あなたはその世界で育ったんでしょうが」

その言葉に、俺は反論は出来なかった。
今ここでは俺はこの世界で生まれた設定にしておかなくてはならない。そうしなければ、いろいろ面倒になってしまうためだ。

『異世界出身』とか言うならば、すぐさま精神病院へブチ込まれるだけ。それか異端者扱いだ。つまり、言動には注意を払わなければならない。
あのゼロ魔の主人公でさえそうしなければならなかったのだから。

「すると矢島は？　あいつは使えるようには見えないが」
「魔力よ」
「魔力？　確認できるのか？」
「違う。イース魔法よ」

彼女によれば、イース魔法とは相手のおおよその魔力を測ることが出来るとのことだった。
それはまたおかしなことだ、と俺は毒づいた。しかもそのイース魔法を掛けたのはさっきらしい。
全く、先が見えない娘だ。

「……もともと魔法というのは主に貴族が扱える代物だった。自身の強さに応じて社会的な地位が向上していたりするの。でも、あるときにある一般庶民が魔法を操りだしたことによって、それは少し変化した」
「……その一般の人は貴族或いはそれに通ずるルーツがあると？」
「そう。その祖先はもともと貴族である場合が多いの。或いは売女が貴族の子を孕んだりして、ね」

おかしなことよね、とフィルナは呟いた。

「その一般人は社会的な地位は向上したのか？」
「あんまり。さっき言った通り、祖先が没落貴族や売女だったりす

るからあまり高い地位は望めない。ただし、一般階級社会においては変動するけど」

納得したように矢島はうんうん、と頷いた。

確かに、下位社会で魔法を使えるならばどんなことでも出来そうだ。しかしそれが上位社会になれば話はまた変わってくるものだ。

いづれにせよ、魔法が社会階級を作っていると言えよう。

「……って、あなた達は本当に知らなかったの！？」

「ああ。全くな」

呆れた……とフィルナは溜め息をついた。

流石に『異世界から来ました』などはいえなかったが。

いや、あきられることを前提としても話すべきだったか？　……だめだな。完全に異端者扱いされる。

ま、大体の事情は把握した。そろそろ帰ってもいいだろう。

少し名残惜しいが、ふかふかの高級ソファーから立ち上がった。

「あら、戻るの？」

不思議な顔でフィルナはこちらを見てきた。見てきたとは言っても、威嚇するような目つきだ。矢島の時のような猫かぶりの目はしてはいない。

別にどんな目で見られようが構わないが、それはそれで一理末の寂しさを度々感じてしまう。

「日程さえ聞けば用は済んだ。んじゃ」

「え！？　ちょ、おい！」

後ろの方から俺を呼ぶ声は完全に無視し、そのまま矢島を置いて

生徒会室を出た。
さて、これからどうするか。暇つぶし図書館へよってみるか。流石にこれほどの金持ちならばさまざまな文献や資料があるはず。
ならばまずは図書館を探すべきか。

「……あなたはそこで何をやっているのだ？」

ふと、声がした。
何だろう、後ろを振り返ってみれば、そこには凛とした女性がそこにいた――

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｍｕｅｄ．．．

## 巡り合い

Character cannot be developed in ease and quiet. Only through experience of trial and suffering can the soul be strengthened, ambition inspired, and success achieved.

人格は何もしないでは簡単に形成されるものではない。
試行と苦しみを経験することによってのみ魂が強化され、大いなる希望が生まれ、そして成功するのである。

◇

「あなたはそこで何をしているのだ？」

その声が聞こえた瞬間、心がギュッと握りつぶされたような感覚に捕らわれた。無論、それは錯覚の類だろうけども。
俺はその奇妙な感覚を持ちながら後ろを振り向くと、そこには女性がいた。
金の髪をなびかせる女性だった。此方に蒼い目を向けて、じっと睨んでいた。
俺はどう答えるべきか悩んだ。下手に答えれば自分が望まない展開になるのは短くも長い年月から学んだ事だ。一度ここは黙るべきだろう。

「貴方はここで何をしているのか、と聞いているのだ。それとも、

答えられないのか」

いやに男風な口調だ。しかしそれも一つの個性だ。無駄に考える必要はない。

それより考えるべきはこの状況だ。彼女は明らかに俺に質問をしている。これに答える必要性はあるだろうけども、何をこたえようか……。

仕方ないので、今考えたことと事実を織り交ぜることにする。

「あー…、俺は今年入学する人間で、少し諸用があったから生徒会室に来ていただけだ」

結局事実のことを話しただけだった。それは別に気には留めないことにする。

彼女はふーん、と言った感じにこちらを見てきた。

女性にそんなことをされた事がない俺は、少しドキドキとしてしまったが、まぁそれは仕方なかった。なにせ、あまり女性に興味を抱かない松下の好みのタイプのストレートを行く人だったからだ。

「そうか、それはちょうどいい。私も今年入学するので、今後の日程について質問をしに来たのだ。もし良かったら……教えてくれないか？」

別に構わない、と言って先ほど生徒会長に受けた日程を噛み砕いて話す。なぜ噛み砕く必要があるかといえば、あの会長は要件を言った後のくだらない話が多かったからだ。多分矢島自身もあまり理解してはいないだろう。

彼女は俺から約一メートルの距離まで近づいて話を聞いている。その姿は凛々しくもあれば男らしくもある。それはどこか騎士を連想させるような出で立ちで、少し警戒感を与える。しかし、残念な

がら彼女からは女っ気というのは感じなかった。
恐らく高貴な生まれなのだろう。ここまで背中を伸ばし、凛々しくある女性は元の世界でさえ見かけない。

「……わかった。すまないな、説明をしてくれて」
「礼には及ばん」

ぶっきらぼうに返す。
何故か知らないが、どうも女性には慣れない。こんな格好いい女性が俺を頼ってくるなんて、一生に一度あるかないかのチャンスなのに、ワザワザ棒にふるのが俺の癖だった。
そんな俺の様子を見て頭に疑問符を浮かべると、何か思い付いたようにその疑問符をかき消した。

「ああ、私の名は『コゼット・アナスタシア』だ。気軽に『コゼット』と呼んでくれても構わない」
「……そうか」

どこかその言葉に突っかかりを覚えていた。
コゼットといえば、名作『レ・ミゼラブル』の少女の愛称で本名が『ユーフラジー』と言った……と言うことを思い出した。多分それは偶然だろうけども。

「俺の名は……松下だ」

コゼットは小さく『マツシタ…？』と小さく呟いた。と、不意にこちらを見上げる形で上を向いた。

「松下、だな。わかった」

蒼い瞳が揺れるその中に、松下は映っていた。
コゼットがその映像に対してどう感じるかは彼女次第だ。嫌悪感を抱くかもしれないし、好意を抱くかもしれない。俺としてはそのどちらも抱いては欲しくはないが、嫌悪感を抱かれるよりは好意を抱かれたい。それはくだらない願望だろうけども。
俺はそんなコゼットから離れるように後ろに方向を変換する。

「どうした？　……どこか行くのか？」

コゼットが不思議そうな顔をしながら俺の肩に手を乗せてきた。白く、とても綺麗な手だった。
俺はとりあえず彼女に寮に帰る、と言ったら、

「ちょうどいい。私も寮に行く」

そのまま俺の左側を陣取った。
この事態は――何だろうか。
俺の人生の中で、こう言ったゲームやライトノベルのような体験はしたことはない。……いや、そもそも女性と隣り合って歩くなんてことはしたことはない。

これは――気まずい。

「では、行こう」

どうしようもない、正にその言葉がピッタリと合致する。そんな事態が俺の身に起こった……気がする。

◇

どうでもいいことだが、皆さんは女性と一緒に歩いたことがあるのだろうか？　はっきり言えば、俺は無い。
あれからどうなったか――俺とコゼットの二人は玄関から出た。あの迷路のような場所を事もなしに真っ直ぐ玄関まで着いたのはコゼットなしには出来なかっただろう。
それはともかく。

「「……」」

相変わらず会話はない。
お互い、何を話そうか。どんな事を話題にしようかということを考えていた。しかし、お互いに話す事も無く、現在に至っている。
この時ばかりはしまった、と思った。とその時、不意にコゼットが口を開いた。

「貴方は私に気を使わないんだな」

初めはその言葉だった。
なんの話か、と身構えた自分がおかしくなる程、変哲もない。

「普通、『アナスタシア家』と聞けば、誰でも媚びを売るものなのだが――貴方は違うのだな」
「売る必要はないだろ。同世代の人間で、媚びを売るなんて馬鹿げたことはな」

王族だと変わるかも知れないが――と、付け加え、ポリポリと頬を掻く。
どうも慣れない。何故このコゼットという女性はこうも真っ直ぐした性格なのだろう。この俺のようなひねくれ、ねじ曲がった性格

とは違う。
こんなに純粋で、真っ白なオオアマナのような花を連想させる。
そして、騎士のような攻撃性を持つ蜂をも。
それが俺が抱いた『コゼット・アナスタシア』という女性のイメージだった。

「――そういえば、貴方はどこの部活に入る予定なのだ？」
「部活？」

脳全体に『部活』という単語を検索する。
聴覚による検索ヒット……一万二千件
視覚による検索ヒット……五千二百件
さらにそれに最近という単語を入れる。
聴覚による検索ヒット……二件
視覚による検索ヒット……零件
それによれば、最も最近で『部活』という単語を耳にしたのは数十分前、つまりフィルナ・ブランフォードの説明らしい。
確か適当に聞き流した為、脳に蓄積されている記憶はあまりに少ない。仕方ない為、適当にはぐらかすことにした。

「部活には入るつもりはない」
「そう……なのか。残念だ」
「何が？」
「いや、共に社交部に入って欲しかったのだが――」

『社交部』の検索ヒットは一件。
その部活は部員の推薦及び紹介が必要らしく、主に良い成績を持ったエリートが入るらしい。

「そうだ。入らない？」

「だが断る」

全く持ってくだらなさそうな部活だ。入る気にはならない。そんな人の眼を気にする必要のある部活には絶対に入りたくはないものだ。

コゼットはそれを聞くと、落胆したように肩を落とす。「そうか……残念だな…」と呟いたのを聞くと、少し罪悪感が湧いた。

「ともかく、だ。どうせもう逢うことはないだろう。俺に干渉する必要はないぜ」

「ふふ、面白い男だ。これから同学年になるのに、そんな事を言うとは」

「なんとでも」

そこで笑ったコゼットの笑顔は、とても綺麗で美しかった。

そのまま社交部の事を話ながら――大体はコゼットからだったが――俺達は寮に着いた。

「じゃあ、私はこっちだから」

笑顔でコゼットは言った。

俺は彼女と別れ、左側へ進んだ。彼女は俺と逆へ進んだ。どうやら男女別とはいっても、同じ館内らしい。

また迷路を戻っている時、ふと気づいた。

「矢島は……？」

果たして、帰ってこれるのだろうか。

to be continued...

# 哲学

Learning is not attained by chance, it must be sought for with ardor and attended to with diligence.

学びとは偶然に得られるものではありません。
情熱と不断の努力をもって、自ら学ぼうと求めなければなりません。

byアビゲイル。アダムス

本当にくだらないことだが、これを読んでくれている君に問題を出そう。
『聖書の中で、もっとも人を殺した人物は誰か』
その答えは意外と簡単だ。
創世記より人を作り、導き、そして気に入らなくなったら虐殺した人物。
そう、神だ。
人間が生まれた時より……いや、生まれる以前からおられる人物。
すべての頂点であり、起源。

ここで、ある話をしようと思う。
神の子として人間を導いた、ある一人の人物を。
実のところ、俺はその人についてあまり知らない。だけども、彼の人間を導く規範を再確認させ、人の愛について説いたことは知っている。
『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』

この言葉はあまりにも有名だ。
彼は『イエス・キリスト』と呼ばれた。彼は神の子と呼ばれ、人間の愛を説き、信じ、そして磔刑に処せられて死んだ。それは自ら選んだ死。そして予言を実行するためだ。
もともとイエスは大工の子として生まれた（ちなみにイエスが生まれた年は曖昧過ぎて分からないらしい）。ダビデの末裔のヨセフ、その妻のマリアの間に生まれた。
彼はその後成長し、民衆を導くカリスマを持った。
イエスの周りには、彼の言葉を信じた弟子達が集まってきた。みなそれぞれ民衆の出であったり、漁師の者もいた。イエスはその中から十二人を選び出し、『使徒』とした。
その使徒となった者達は、イエスの死後、自らの命をかけてイエスの言葉を、愛を世界に知らしめた。道中、磔刑にされ、死んだ者もいる。
その彼らのおかげで、私達は精神での、ある種の心の規範を手に入れた。

だが――時折思うのだ。

神は人間を愛していたのだろうかと。

☆

俺達がこの世界に来て二日目。
俺は自分の部屋でこの世界の『聖書』を読んでいた。
その理由は簡単だ。いかんせんすることが無い。
矢島はフィルナから直々の呼び出しで既にいない。その呼び出しは朝っぱらに行われたものだから、矢島にとってしてみたら途轍もなく苦痛に感じただろう。そこは同情すべきだ。

俺は……といえば、朝ごはんを寮内の食堂で食べ（無料だった）、それから部屋に戻った。そして前述の通りすることが無くて、ただ聖書のページの文章をつらつらと読んでいく。
約千五百ページはあるだろうか。この聖書に使用されている紙はなかなかの高品質だ。ページがめくり易い。
ちなみに豆知識だが、活版印刷機は聖書を一般に広める為に作られたそうだ。

ただそこに書いてある文章を目で追う。

その聖書の中身は、かつて自身が読んだことがある聖書のものとほとんど同じだった。
いま読んでいるのは、かつての世界における旧約聖書に非常に酷似している。
土の塵から生まれしはアダム、その骨から作られたのがエヴァ。
楽園を追い出され、子を産む。それがカインとアベル。
その兄であるカインが、弟アベルを殺す。ストーリーが全く一緒だ。

「もしかして、この世界は元の世界の分岐した世界なのか……？」

分岐世界。
異世界と言うには少し違うが、分岐した世界ならば、説明が着くかも知れない。
パラレルワールド、というＳＦの単語が脳内をよぎる。
馬鹿馬鹿しいと思われても仕方ないだろうが、人生経験の少ない俺にとっては重要なことだ。
分岐をした世界だろうと、元の世界に帰れそうに無いからだ。せめて、自分の居た世界との繋がりを意識したかったのかも知れない。
いや、そうに違いない。

「くっだらねぇ……。俺をこんな世界に送った奴は磔刑にしてやる」

自分でも変なことを言ったと後悔した。

そんなことをしても、帰れないことには変わりは無いなら、スパッと諦めるのが俺の特技だったのだが。

しかし――疑問に思う。

「何故に俺まで来る必要があるんだよ……？　矢島一人で十分だろ」

あいつなら、この世界での世渡りが上手そうだし、十分生きていけそうだ。社交性あふれる主人公補正がかかったアイツなら。

対して俺なんか、コミュニケーション能力が低い。おかげで男子以外――まぁ女子だが――とは喋らなかった。前日のあの人……アナスタシアといったか、あの人と話すのもドギマギしたものだ。

「異世界召喚もの……か。想像したことはあるがなぁ……」

俺だって昔は異世界に行って見たいとは思ったことはある。しかし、実際に行ってみれば、それはかなり面倒な世界であることには間違いはないだろう。

魔法だの剣だの、主人公はヒロインを守りながら若しくは共に戦いながら成長していかねばならない。それは大抵の場合、魔王討伐や、敵国と戦いながら成長する必要があるのだが……。俺はそこはすべて矢島に任せるとしよう。ヒロインを守りながらの戦いなんてしたくはないし、そもそも守りながらの戦闘なんて無理にも程がある。

（そんなファンタジー染みたことがあってたまるかよ！）

そんな事を、聖書を読みながら思っていた。

☆

読んでいるうちに、奇妙な記述に出くわした。
その記述はなんの変哲も無い、ただただ普遍的なものだったのだが。

『神は、ある人間に鍬を、そしてまたある人間には火を生み出す力をお与えになった。
道具を持った人間はすぐさま出かけて行き、その鍬を使った。その人間が耕した土からはさまざまな植物の芽が出た。
そして火を生み出した人間は、その力を高める為に更に神に願った。その願いを神は聞き届け、その世界の自然を操る力をお与えになった。』

「これは……魔法の起源に関する記述？　まさか！？」

その続きをすぐさま目で追った。

『神は鍬を持つものと自然の力を持つもの二人の住む場所を分けられた。
その分けられた地では、二人が会うことは無かった』

どこか、心に引っかかる記述だ。
これでは、元の世界とこの世界がもともと世界は一つだったというような記述だ。
鍬を持つ人間が元の世界ならば、この世界はさしづめ自然の力を

持つ人間の世界。
俺達の元の世界が鍬、つまり道具を扱った世界なら、こちらは魔法を扱う世界……？　つまり、伸びる力が根本から違うわけか。
しかし皮肉なものだ。元の世界では『魔法』は非科学的といわれるが、この世界では常識だ。面白いことになったものだ。
では……この世界において科学は？　どういうことになっているのだろう。単なる妄想として処理されているのか？　それか誰か科学について考えたものはいるのか？

「考えれば……悪くは無いかも知れないな」

この世界の聖書から学び取れることは多そうだ。ホームシックにかからずに済むかも知れない。
戦うことに重点をおく学校らしいが、暇つぶしにはいいかも知れない。

「しょうがないか。後ろは既に見れないんだからな」

過去は過ぎ去ってしまって見えない。ただ後悔するしかない。
それなら。
それなら、未来を見るしかない。
未来をどう生きるか、それは俺個人が決めることだ。他人に干渉されず、恥じらいなく生きるしかない。
それには人生の意味を、生きるということの価値を、理解する必要がある。そうでなければ、どんなに素晴らしく生きようが、充足を得られない。形や概要だけでいい――ただ大まかに理解すればいい。

「哲学……ニーチェ、読んどけば良かった」

これもまた。

過去への後悔だった。

to　e　continued・・・

## 一握りの握手（前書き）

この話は一人称です。

## 一握りの握手

Hatred paralyzes life; love releases it.
Hatred confuses life; love harmonizes it.
Hatred darkens life; love illumines it.

憎悪は、人生を麻痺させるのに対し、愛は、人生を苦しみから解放する。
憎悪は、人生を混乱させるのに対し、愛は、人生に調和を与える。
憎悪は、人生を暗くするのに対し、愛は、人生を明るくする。

by Martin Luther King, Jr.

『魔法』というものは、正に危険だ。
それは、人をたやすく殺してしまう力を持っているからだ。
しかし、その魔法を扱うには相応の覚悟を持ってあたらなければならない。
人を殺すことの出来る魔法は、この世界にゴマンと存在するらしく、それぞれが危険を伴うのだ。
しかし、その魔法によって生かされている人間もいることは事実。
魔法全てを否定するわけにはいかない。
「と、いう訳で、魔法の扱いには十分注意を払うこと。これは戦いにおいて、もっとも重要なことである！」

教壇の前で好調先生の熱意の弁が振るわれる。
今、入学式の真っ只中だ。
全く、こんな暑苦しい会場に生徒を押し込めるなんて冗談ではない。
しかし、そんな生徒の慎ましい願いなんて聞く事はなく、着々と先生の話は進んでゆく。

「君達はこの学校で戦闘技術を学んでもらう。ただの兵士ではなく、戦場で活躍できる兵士を育成する――それが、この学校の目的である」

この学校にはいくつかのコースがある。
一、剣士及び魔剣士育成コース
二、白魔法育成コース
三、黒魔法育成コース
以上の三つが大まかな区分けだ。
俺はどうやら一番に区分けされたらしい。だからだろうか、ほとんど男子の集まりだ。男むさいことこの上ない。
個人的には黒魔術コースが良かったのだが、基本男子は剣技系にいくとのこと。

「明日から戦いについての勉強や技術を学んでもらうので、今日は十分休むこと。以上！！」

初老の先生がそう言い放ち、その言葉で入学式は閉幕した。

「いや～暑かったね。この会場内は」

俺の隣にいた矢島はそういいながら、自前のイケメンフェイスで

笑いかけてくる。そのあまりの眩しさに、少しだけ立ちくらみを覚えてしまう。
多分この矢島、という人間はたとえ暑くても体からマイナスイオンや何やらを放出しているのは間違いないだろう。一体、俺の体の構造と彼の構造ではどこが違うというのだろうか。

「でも、この学校が戦う人を育てるところだったとは驚きだなぁ。異世界ならこう……ラブ・ファンタジー的な要素があってもいいと思うんだけど」
「……お前が異世界に対してそんな事を思っていたのかは図り知れんが……お前の考えている世界だったら、俺は既に死んでいるかもな」
「ははは、冗談が過ぎるよ。君は悪運だけは強いじゃないか」
「……これからお前に対する評価を改める必要がありそうだ」

コイツの思っていることは破天荒すぎてついていけない。
しかし、それゆえの能力があるのだから、行く先々で次々に成功収めている。この世界に来る前なんかは生徒会副委員長の座を射止めてすらいる。この矢島に着いて行きさえすれば、ほとんど出世できるだろう。
しかし、その補正は俺には掛からなかったようだ。
行く先々でコイツとペアを組んでいる事から実感したことは、コイツはお人好し過ぎることだ。それゆえの事柄が非常に厄介になってしまう。
むしろ、不幸を俺がもらってやっているのだから感謝してもらいたいものだ。

「……やれやれだな」

矢島は優しすぎる。
彼はいつか、その優しさで身を滅ぼすことにならなければいいのだが……。
「じゃ、入学式も終わったことだし……教室に行こう！」
全く、この甘ちゃんは。
いつでも明るいな。
本当、うらやましい。

☆

教室は、会場からまっすぐ行き、左に二回、右に三回、更に段を五回上がったところにあった。……それ以前にキツイ。この複雑さは何のためなんだろうか。
それはともかく、その教室はあった。
部屋自体はそう大きくはない。とは言いつつも実は十分に大きかったりする。
俺達はその教室内にぞろぞろと入った。
その時、ふと見知った顔が俺の前をよぎる。しかしそれもつかの間、その顔は俺の顔を認識するや否や、立ち止まった。
「だから言ったでしょう？　同じ学年になるって」
その顔は、一昨日出会った人物と一致した。
コゼット・アナスタシアだ。彼女が、俺の目の前にいる。
「……これはどうも」

何とか返事をする。

「やはり貴方は敬遠はしないな。ふふっ、つくづく感心する」

「なんに感心しているのかが分からないが……」

「気にするな。どうでもいいことだ」

しかし、何故彼女がここに？　ここは主に男子が入る場所、その観点から見れば、女性は魔術系に行くのが普通だ。なぜ彼女がここに？

そんな俺の疑問の念を感じ取ったコゼットは不愉快そうに、

「貴方はジェンダー意識にまみれているだろう？」

「まさか」

「まぁいい……私はもともと騎士の血統を受け継いでいてな。はるばる隣国の『クルド』から、己の力を磨くために留学してきたんだ」

「それで、この剣技系のクラスにいると？」

「そう」

その俺達の関係に興味を持ったのか、矢島が隣からヒョイッと顔を出し、

「お二人は知り合いなのかい？」

「いや、違うだろ」

「何を言っているのだ？　知り合いじゃないか」

という会話をした。

なんとも無い会話のはずだが、この時は初めてこの世界で友人ができたことに、内心喜んでいた。

このコゼットとは恋愛が成立する訳も無いが、せめて、いい友達

でいたいと思った。
しかし同時に、コゼットのことを知りたいとも思ってしまう。

……。
……。
…。

いや待て。俺は何を今思ってしまったのだ？

「どうしたのだ？　松下殿……いやに顔色が悪そうだが……？」
「き、気にするな。動揺していただけだ」
「そう、か。私のような美人に声をかけられたからか？」
「茶化すなよ……」
「ははっ、もう仲良しになってるね」

どこをどう見たら仲良しに見えるんだ？　俺はお前の脳内を覗き込んでみたいぞ。
頬をカリカリと掻きつつも、コゼットを見る。
その出で立ちはまさに騎士そのもの。今は制服を着ているが、恐らく戦いになれば豹変するタイプなのだろう。
それがまた彼女の魅力なのかも知れない。

コゼットは不意に、俺に向かって手を差し出してきた。
そのコゼットは、当たり前というように手を伸ばしている。

「握手、だ」
「すべきか？」
「親しい仲になったときは、皆こうすると聞いている。貴方もそれに習うといい」

戸惑っている俺はどうしようともしなかったが、彼女は強引にも俺の腕を取り、強制的に握手させた。
その白い手はひんやりと冷たかった。
「これで、私達は晴れて友となった。気兼ねなく話しかけてくれて構わない」
依然として騎士口調だったが、彼女の好意には甘えるとしよう。
しかし、やっぱり恥ずかしいものだ。
こう……ダイレクトに女性話したことはないからなのだが。
「では、今後とも」
「あ、ああ……分かった」
ぎこちない答えであったが、一応は様になるように返事をした。
俺は自分の奇妙な後味の悪さを噛み締めながら、これからどうなるかということを考えていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 矢島と俺（前書き）

神だとかに殺されて異世界トリップ&その神からチート能力をもらうような感じじゃないこういった小説もアリだと思うんだけどね……しかもハーレムモノじゃないし。

ううむ、現実世界でハーレムとかさ、スクールデイズの二の舞になるしね……ハーレムとか非現実過ぎるのね。てか誠死ね。てかリア充死ね。

全国の誠さんすいません。

## 矢島と俺

No man can be happy without a friend, nor be sure of his friend till he is unhappy.

何人も友達がいなくては、幸福になれないものである。
だが、自分自身が不幸な目に遭うまでは、自分の友達の真偽なんていうことに関しては、はっきりとした確信をもつわけにはゆかないのである。

by Thomas Fuller

「くうう〜疲れた〜」

そういいながら矢島は俺の部屋のベッドに倒れこむ。
俺はそれを半目で一瞥し、ベッドの近くのイスに座り込んだ。

「ああ〜松下のベッドは何故こんなにふかふか〜？」
「それはただ単に隣の芝は青く見えているのと一緒じゃないのか……」

矢島は更に深く『ぶふぁあ〜』と言いながら俺の布団に顔をうずめていく。
一体何が楽しいのかサッパリ理解できそうにない。この矢島という人種は、ある意味新人類つまりニュータイプなのかもしれない、というくだらない予想すら脳裏によぎる。

教室でのＨＲが終わったあと、俺達はすぐさま寮に帰った。
俺個人としては一度図書館を覗こうと思っていたのだが、その道中に矢島につかまってしまったのだ。
そして一言。

『ちょっと話があるから、寮にかえろ？』

俺はもちろん断った。俺は用があるから、としつこい要求に対して何度も防衛をした。
結局は、図書館にはいつでもいけるからと俺を説得し、現在に至るわけである。
しかし現状は、あのまま図書館に行ったほうが良かったのかもしれない。

「で、話はなんだ？　せっかくついて来てやったんだ。それ相応の話なのか？」

矢島はうう～ん、と間抜けな返事を返すと、

「実は生徒会に入りたいな～とか思ってるんだけどさ……どうかな？」
「……お前はそれだけの為に俺を呼んだのか？」

なんとくだらない。
それは矢島自身が決めることであって、俺が干渉すべきことじゃない。そのことは彼自身が分かっているはず。俺個人があーだこーだ言っても、それは結局彼の意見ではなくて俺の見解だ。
だから、俺は賛成の立場も取らないし反対の立場も取る気は無い。そのことについて、矢島に説教しようと思ったが――やめた。

いまさら説教したって、この矢島は変わらない。

「はぁ……お前がしたいようにすればいい」

いっつもこんな感じだ。

もう既に、これと同じような説教を繰り返してきている。多分、矢島は暗記している程に。

しかし、そのパターンに慣れてしまっているというのも事実で。

しかもそれを容認してしまった自分がいるわけで。

「大体な、お前は――」

「優しすぎる、でしょ？」

「……ああ」

「やっぱり、そう言うと思った」

矢島は毛布をもふもふするのを中断し、その整った顔をこちらに向ける。

矢島の精神年齢はいくつか、と聞かれれば、すぐさま『十歳未満』と答えきれる自身はある。彼は身長は高く、大人の雰囲気を持っているのに……惜しいものだ。

それが、演技だと信じたい。

「じゃ、本題に移ろう」

その瞬間、幼児のような目から一気に青年の目に変わった。

その眼差しは、俺自身もかつて何度か見たことはある。そのいずれのパターンにおいても、前の矢島を感じさせない冷血さを表わしている。

だから俺はその変容に動揺せずにいられるのだ。

「一つ思ったんだ。なぜ学校は兵士の教育をしているのか」

その疑問は、至極当たり前の疑問だ。

なぜこのような学校があるのか。なぜ戦闘員を作り出さなくてはならないのか。

「それは……戦争をするためだろう。どうせ何処かの戦場に送るための駒を育成しているに過ぎん」

「確かにそうなんだけど……」

「第一、この施設があるって事は……この世界は戦争経済で成り立っているのは用意に想像が付く。魔法が使えるのが貴族の家系だろうが、結局は戦場で兵を操るための指揮官を養成しているだけだろう」

戦争が与える経済効果は計り知れないものがある。

かつて日本が戦争に敗れ、貧窮の極地にいたときに起こった戦争が――朝鮮戦争だ。

日本はここぞ、とばかりに戦車などを製造し、莫大な利益を得、それを元手に復興の道を歩き出したのだ。

人が死ぬことによって、国家間の勝敗が決まる。戦争を否定するのは構わない。しかし、その全てを否定することは出来ないのだ。

「おっと、話がずれたか？　……ともかく、これからどうするんだ？」

「……とりあえず、僕はこの学校を卒業して考えるさ」

「……全く、優柔不断もいいところだ」

矢島は計画性がないね、といってはにかんだ。

俺達は決して望んでここにいるわけではない。だが、望まなくてもしなければならないことを考えることは必要だ。　その判断が今

課されているわけでないのなら、答えはギリギリまで伸ばす。それが矢島の考えだった。
決して望んではいない時空旅行。それがどのような意思が絡んでいるかは知らないが、それなら俺だって選択できるはずだ。選択する、ということが俺達の人生だから。
なら、俺もいずれは選択しなければならない。どのような選択肢があるのかは分からないが、それは自分の意思で選ぶ。
それが俺の生き方だから。

「さて、明日から授業だっけか？」

わざと話を逸らす。うん、という返事が返ってくる。

「やれやれ、異世界トリップモノは辛いねぇ……」

自嘲するように、そして嘲りのような言葉が自分の口から漏れる。
そんな俺の言葉を聞き、頭を傾げて、

「辛いかい？」
「いや、むしろおもしろそうだ」

こんな状況になってしまったら。俺ならどうする？
楽しめばいい。この非日常を、滅多に味わえない子供のような好奇心で。
この先、どんな困難が待ち構えようと進めばいい。

「じゃあ、食堂にいこうか。少し早いけど、その分早く寝ればいい」

矢島がベッドから抜け出し、俺の腕を掴む。もちろん付属の笑顔は忘れない。

その笑顔に俺はつくづく負けると実感する。それは無論スペック的なこともあるのだが、元々根本から優劣が決まっていることが俺の中に敗北の念を生み出しているに違いない。
そんな俺の心境を知ってか知らずか、更に俺の腕を強く引っ張る。
「？」
嗚呼、コイツが女だったら。ふと危険な考えが頭の中をよぎる。
「了解すればいいんだろ」
俺は彼の腕を払いつつ、イスから立ち上がる。
仕方ない。ここまで乗せられたのだ、一緒に行くしかない。
「やれやれだぜ……」
「ほら、いくぜ～」
「だああ！！　引っ張るなァ！　そして走るんじゃあない！」
「置いていくぜ？　松下！」
「……ったく、勝手にコマを進めんなよ！！」
そして俺は全力で走り出した。これなら矢島の出鼻を挫ける。
「……っておい！？」
そのまま、時間は過ぎていく。
気楽なままの時間を。この先どうなるか分からないからな。
こういう生き方も、アリなのかも知れない。

to be continued...

## 矢島と俺　2（前書き）

長崎では、至るところの墓地でロケット花火が舞ってますが、気にしないでね！

## 矢島と俺　2

Among those whom I like or admire, I can find no common denominator, but among those whom I love, I can: all of them make me laugh.

私が好きになったり、賞めたりする人達の共通の特徴というものは、一向に見当らないが、私が恋をしたり愛したりする人達の場合には、共通の特徴なるものを指摘することができる。

つまり、それは、彼らは一人残らず全部、私を笑わせることができるという特徴である。

by W. H. Auden

それは一般的にブロードソードといわれる類の剣だ。

その剣は、主に重さで叩き切るということに念頭をおいた刀剣であり。

その形は中世時代のサーベルに似ており、中世の世に活躍した刀で、扱いやすいといえば扱いやすいのかもしれない。

今、なぜそのような話をしているか、といえば。

――目の前に、そのブロードソードが迫ってきているからだ。

「ってオイ!?　あ……あぶねえ!」

瞬間、俺は身を屈めてギリギリのところでかわす。その折に髪の毛がほんの二、三本持っていかれた。
いくら入学したてだからといって、あの凶器を振り回す奴の気が知れない。いや、知りたくも無い。

「あ～、大丈夫だったかい？」

そのブロードソードを持っていたのは校内随一の超絶美形である矢島だ。
矢島はそのブロードソードを鞘に収めながら、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

「お前……わざとだろ」
「いやいや。ただ単に操作を誤っただけだって。ほら、傷は無いんでしょ？」
「髪の毛は数本切られたぞ、全く……。慰謝料を請求しても構わないな？」

ははは～とニコニコと笑いながら手を差し伸べ、俺は少々イラッとしながらもその手を掴む。
端から見ればほほえましい限りの光景。
周りの人間が全員武器を持っていなかったら、の話だが。

なぜ矢島がブロードソードを持っているのか。少し時間を戻らなくてはならない。
さかのぼること、五分前。

☆

朝八時（時間の単位は変わらないようだ）。俺達は学校に当たり

前のように登校していた。そして何の変哲も無いように教室に入り、適当に矢島と駄弁っていた。
しかしそのつかの間の時間も、先生の登場でオジャンになる。
先生の出現を機に各個人はそれぞれの席に着く。

『今日から授業を開始します。入学して間もないかも知れませんが、くれぐれも怪我が無いように！』

教室内に女性教員の声が響く。その声は女性特有の甲高い声であり、少し抵抗を感じた。
しかし心の抵抗を感じるまでに、その女性教員の姿を見てから二秒と掛からなかった。
――魔法使い。その言葉がしっくりくる。
例えるなら、某有名魔法映画の中に出てきた魔女の服だ。だが、その衣装を映画で見るのとナマで見るのとはクオリティーが違う。
この女性も例によって黒いローブを着ているが、その実用性が高そうで魔法がかかっていそうな雰囲気だ。しかも先生が手に持っているのは明らかに杖。その長さは先生の足から胸のところぐらいまである。
恐らくは魔法専門なのだろう。特に黒魔術が。

「今日は武器を使った訓練らしいのですが……残念ながら担当の先生がお休みですので、適当に武器の練習をしといてください。私は『いい男・女を捕まえるための紳士淑女の会』という大切な任務がありますので」

ハーイ、と男子二十九人とコゼットの、総勢三十人一同が声を合わせる。
その不協和音はかなり頭に来るモノだったのだが、先生は気にも留めずに「今日はいい男が出席……ふふふ」と呟きながら教室から

トラのごとく駆け出した……。
そういえば、あの先生はまだ独身だったっけ？　という言葉もちらほら。
で、その後の結果が冒頭に繋がるのだ。
「む、矢島殿と松下殿ではないか。どうしたのです？　そんな死を確信したような顔は」
そんな折に、向こうからコゼットが走って近づいてきた。
コゼットよ、逆に聞きたい。それはどんな顔なんだ、と。
「……っと」
コゼットが俺の横につく。
その姿は正に騎士のようだ。
鎧を身に纏い、腰にはレイピアらしき刀が。あれで刺されたら痛そうだ。
「松下殿、貴方はどんな武器を選んだのですか？　見た所……武器らしいものは持っていないようですが……」
「いや、ある」
そう言うと俺は懐に入れていたモノを取り出す。
「投げナイフだ」
その武器の選択が意外だったらしく、矢島とコゼットは驚いたような顔をする。

「投げナイフ、ですか？　そんな武器は普通は選択しないでしょうが……」
「ああ、全くだね」
「何を言っている。お前がそんな危ない武器を振り回すよりは安全だと思うんだがね？」

俺がこの武器を選んだ理由は、実はあまり動きたくはないことに由来する。
攻撃なら普通に魔法で十分だろうし、そこまで白兵戦を繰り広げるつもりはないからだ。だからこそ、魔法の展開が出来ない状況に陥ったときの武器が投げナイフだ。
この武器なら時間は稼げるだろうし、そこから再び魔法を展開すればいい。そう命を課して剣で戦う必要はないだろう。

「だからといって、私達の在籍しているコースは剣技系ですよ。ちゃんとした武器をつかったほうがよろしいかと」

コゼットがキッパリいった。
やはり、普通の武器に変える必要があるのか？　俺個人としてはこの投げナイフを使いたいのだが。

「んじゃ、チャレンジしてみるか」
「分かりました。では、私が見繕ってきますから、そこで待っていてください」
「それじゃ意味無いんじゃないか。そこは俺の感覚を……」
「なんか変な予感がするんです。投げナイフの次はチャクラムだとかへんな武器を使いそうですので」
「チッ……ばれていたか……」
「何か言いましたか？」
「い、いや……別に」

勘の鋭い娘だ。顔立ちは良いんだが、ちと性格がきつそうな感じを受ける。
あんな娘と結婚したら、恐らくは一生尻に敷かれる気がする。
ぶっちゃけていえば、俺はＤＩＯに憧れて投げナイフを使いたかったのだ。あのナイフをブレードグリップ法で投げてみたいという少年ながらの夢があったのに。時でも止めて絶対に逃げられないようにしてナイフを展開してみたかったのに。
まぁそれは諦めるしかないらしい。残念だ。

「じゃあ、これを使ってみてください。貴方の体格ならばこれが一番しっくり来るはずです」

そう言われて手渡されたのは……両手持ちのロングソードだった。

「これは……え？」
「それはクレイモアと呼ばれる武器です。矢島殿が持っているブロードソードが基本『叩き斬る』のが攻撃の主体なのに対し、こちらは重さプラス切れ味が良い武器です。貴方なら持てる気がしますが……？」
「どんな気がしているんだよ！？　……ったく、持てばいいんだろ」
「物分りが良くて助かります。では」

見れば、刃の部分が一メートルほどあり、意外に重そうな印象を受ける。
コゼットがこの武器を選んだ意図は、彼女の真剣な眼差しからは推測できそうにもない。
持ってくれ、といわんばかりにクレイモアを手渡してきた。
「ん？　意外と軽いもんだな。見た目とは全然違う。これぐらいな

ら片手でも扱えるな」
「え！？」
片手に持ち替え、そのまま一振り。
そこでコゼットがびっくりした顔をする。
「クレイモアは両手持ちですよ！？　片手で扱えるほど……」
「いいじゃないか？　現に片手で扱っているんだしな」
「しかし……」
「そうそう、気にすることはないよ。彼はいつもこんな感じさ」
矢島はそういいながら、一度鞘に収めたブロードソードを抜き、松下に突きつける。
ブレードソードも重い武器に入るだろうに、それを軽々と片手で持ち上げている。
「いっぺん、やるか？」
そう挑発しながらも、素人さながらにぎこちなくも構える。
これはいいチャンスではないか――武器の練習になる、と松下は思った。
その挑発に乗るように、クレイモアを構える。
「じゃ、行くぜ！」
先に動いたのは矢島だ。
すたたた……と、武器を持っているはずなのだが、それを感じさせないスピードで接近してくる。
矢島は振り上げてくるのか、そのまま悪・即・斬のように牙突で突っ込んでくるのか――

「――牙突か」

松下は矢島の動きを見極め、彼の攻撃範囲から外れるように左へステップを踏んだ。

その直後。

もといた場所に矢島の牙突が炸裂した。

「何！？」

「無駄だな」

牙突を失敗してしまった代償は大きい。

矢島の背中が開いているのを確認し、そのままクレイモアの腹の部分を叩き込む。

速いとか速くないのレベルではない。全ては一瞬だった。

一瞬で相手の動きを判断し、最小の動きで仕留める。合理性との共存。

戦いの基本どころの話ではない。そんな動きは熟練した達人の域だ。それがたった一回の戦闘で出来るはずが無い。

「これは……どういうことですか？　そんな動きは私でさえも――」

その流れるような松下の動きに終始呆然としていたのはコゼットだった。

彼女はもともと騎士の血統。そればかりか、幼い頃より剣術の腕を磨いてきた。

その自信を、松下はいともたやすく打ち砕いた――

ただただ驚くばかりだった。

「変だな……。こんなことが……出来るはずが……」

「松下殿！　貴方はどこの騎士の出なのですか！？」
「は？　何をいって――」
「私は幼い頃より鍛錬してきました。ですが、その努力を一瞬で消し去ってしまうほどの……強さが、貴方と矢島殿に見えました。こんな事は初めてです。ですが、貴方達が貴族の出ならば納得できます！」

コゼットは屈辱のせいなのか、いやにしつこかった。
これはどのように答えようか。このまま『貴族です』といえば家柄を聞かれる。しかし『異世界からきました』なんて言えば確実に信じてもらえそうにない。
嗚呼、これは将棋やチェスでいうチェックメイトという奴なんだろう。いわゆる詰みって奴だ。
ぶっちゃけ、俺たちは武器を触るなんて初めての体験だ。
こんな命のやり取りをする武器を持つなんてことは、日本ではまず無理。しかも剣道は習ってはいなかった。
どうしたらいいものか、悩む。
と、その時。

「俺達は昔、家を取り潰されたんだ。だから二人で旅をしていたんだ」

と、地面に伏していた矢島が立ち上がりながら答えた。
なるほど、それなら一応は体制を取り繕うことができる。

「俺達の家族は全員死んだ。生き残ったのは俺達二人だけだよ」
「そう……ですか。失礼しました。野暮なことを聞いて……」
「気にしないでいいよ。昔のことだし」

慰めるようにやさしく矢島は言った。

その時、空に花火が舞った。

「あの花火は授業終了の合図です。戻りましょうか」
「じゃ、武器も戻しに行くか」
「ああ、それは必要ないようです。学校側が支給するらしいので、持っていても十分だそうです」
「そうかい。じゃあもらっとこう」

そのままコゼットは教室に戻っていった。
取り残されたのは俺と矢島だけ。

「矢島、体に異変を感じないか？　俺はなんかクレイモアを持ったときからおかしいんだが……」
「奇遇だね。俺もコイツを持ったときに奇妙な力を感じたよ。何なんだろうね、これは」
「さあな。『スタンド』とか『複写眼』とかそういった類の超能力じゃない。もっと別の、それこそ『ガンダールヴ』のような自己強化系のもんだ。しかし……素人がいきなりあんな動きが出来るとも思えないしなぁ」
「さっきやったじゃん。痛かったぜ～。アレは」
「それなんだよ。流石にチートだかなんだか知らないが、現に出来てしまった。奇妙だな……」

いまだに信じられない、といったように松下は首をかしげる。
しかしそんなことを気にするようなそぶりを見せない矢島は、

「気にするなって。せっかく魔法も使えるんだし、正に夢に描いたようなファンタジーじゃないか」
「それにしてはファンタジー過ぎると思うんだがね？」

「それに、結局はなるようにしかならないよ。とにかくね、生きているのだからインチキをやっているのに違いないのさ」
「それがお前さんの人生論か。そういう人生は面白そうだな」
「面白いさ。俺が保障する」

そういって矢島は俺の背中をばしばしと叩く。

「あんたの保障は詐欺が多そうなんだがな。仕方ないか」
「そうさ。つまらない人生を送るよりはまだマシだと思うよ？　荒波に襲われて、それでもなお立ち上がるっていうのが一番面白い人生なのさ」

まったく、と吐き捨てるように呟き、出しっぱなしにしていたクレイモアを鞘に納める。
それに関しては、松下自身は干渉するつもりは無かった。それが矢島の生き方だったから。それに首を突っ込むことはしないほうがいい。
この世界でやるべきことはサッパリ分からない。だとしたら、矢島の人生論もいいのかもしれない、と松下は思った。
教室にもどろう、と矢島がせかしたのを聞き、自身の重い足を前に動かし、教室に戻っていった。

（そういや、俺まだナイフも持っていたな。……ま、いっか）

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## リンクス（前書き）

中二病じゃなくて高二病の気がしてきた。

**リンクス**

Therere are only two ways to live your life.
One is as though nothing is a miracle. The other is as though everything is a miracle.

人生には、二つの道しかない。一つは、奇跡などまったく存在しないかのように生きること。
もう一つは、すべてが奇跡であるかのように生きることだ。

by Albert Einstein

あれから一週間がたった。
その一週間の経過を教えようと思う。
まず一つ。それは矢島が生徒会に入ったことだ。本当にどうでもいいことなのだが、やはりそのことについてはフィルナが一枚噛んでいることは間違いない。
そして、あの生徒会に入ったことで、同時に社交部の入部が決定されたらしい。
もともと社交部は学校の顔としての位置づけらしく、生徒会のように実権をもたない組織、として言われている。
しかし気がかりなことがある。
あの社交部は、生徒会全員が入部しており、そこの部長を務めるのもフィルナとなっている。

実権を持っていないとか言っておきながらも、実質は生徒会の下の組織であり、ぶっちゃけ人を動かす実権を持っているのが現状だ。
第一、戦士や魔法使いを育成するこの学校が社交部なんてものを作る必要はあるのだろうか？　謎過ぎる。
しかも同時にコゼットも社交部に入部したらしい。推薦人は矢島、ということだ。
だが、彼女自身によくよく聞いたところ、『特別推薦』ということでの入部らしい。なんに関しての特別なのかは分からないが、とにかく入部したらしい。

二つ目は、松下について。

「これでゆっくり本が読める」

図書委員になっていた。
その理由は『ただ一人で考えたい』。
そんな陳家な理由で、と思われるだろうが構わない。
今はただ、この世界の文献を読み漁りたいのだ。
思想や歴史、その世界で活躍した人物は誰か。それを知らなければならない。何しろ、自分達はこの世界にまだまだ対応できてはいないのだから。
そんな松下は今日もまた、図書室に篭もって読書していた。

「マイケル・フィリップス、か。吸血鬼についての考察が面白く書いてある。こんな面白い本があったとは……捨てたもんじゃないな」

『吸血鬼には注意』。それが今、彼が手に持っている本だ。
この本は小説の形式になっており、サスペンスホラーとしてのジャンルだ。
巻末まで読んだとき、これはフィクションだということに驚きつ

つ、パタンと本の表紙を閉じる。そして丁寧に、自身の脇にある本の山に置く。
そんな淡々とした作業のなか、それに快感を覚えてきた今日この頃だ。

そんな事が一週間のサイクルで回っていた。

無論、ちゃんと授業には出席していたし、そこのところは問題はない。ただ、この世界で教えるレベルが明らかにやさしい。
どうやら兵士には教養はいらないとの方針らしい。
個人的には状況を判断させるためにちゃんと教養を身につけたほうが良いと思うのだが……。

「アルファは始まりであり、オメガは終わり。始まりの世界は終わりの世界」

一人そう呟いた。
この言葉はこの世界の聖書の言葉だ。
神が自ら作り上げた世界に対して、初めて発した言葉。
そんな言葉が聖書に書いてあるなど、人間の妄想も凄いところまでいったなと感じる。
結局は宗教なんてそんなものだ。人間に対する規範を与える代わりに信じることを課する。最後は崇めることが階級をつくっていくのだ。

そんな事を思う折、外が茜色に染まってきていた。
ふと思い立った松下は、目の前に手をかざし、少し集中する。
とたんに空間に円が発生し、その中に時計が現れる。

「おっと、こんな時間だとは気がつかなかった」

その魔方円の指す短い針は、既に五時を回っていた。
既に二冊は読んだし、この程度が一番きりのいい時だろう。
そう考え、脇にある本の山を片付けようと立ち上がった。無論、山とは言っても七冊程度の塊に過ぎないのだが。
それを三冊程度に小分けしてもとあった場所に直して図書室を去る。

「矢島は今日は確か……社交部のなんかで遅れるって言っていたな……。先に飯を食ってしまっても良いか」

そんな楽観をしながら、自身の部屋に戻っていった……が。

「しばらくですね、松下殿」

その途中、コゼットに遭遇してしまった！

「……」
「……そんな迷惑そうな顔をしないでいただきたいのですが」
「……はぁ、何か用か」

コゼットはそう言うと、ずいっとこちらの顔を覗き込んできた。

「社交部へ行きませんか？　私なら特別会員だし、推薦してあげられるのですが……」
「何故に？　理由はなんだ？」
「い、いや……特にはないのですが……」

若干暗い表情をしながら俯く。
それなら別の人を誘えば良いではないか。俺でなくとも構わない

ではないか。
あんなくだらない部活に入るということは読書時間も消え、いいことはないではないか。
自分には社交性がない。コミュニケーション能力もない。そんな自分が、学校の顔である社交部に入部するなど、愚かしいのを通り越して笑いさえ出てくる。

「で、もしも俺が入ったとして、俺にとってのプラスになることはあるのか？　どう考えても、あの生徒会の連中とは上手くやっていけない気がするんだけど」
「プラス――というより、評価が上がります。本ばかり読んでないで、たまには人と話したりしてみたらどうですか？」
「そんなことより本を読んでいたほうが、よっぽどマシだな」
「本当、矢島殿に聞いたとおりに放任主義ですね。あきれるほど」
「あきれようがなんだろうが、俺には関係ないな。　それより、自分の次に取るべき行動を考えたらどうなんだ？　そろそろ社交部に出席しなけりゃいけないんだろ？」

あ、と気づいた様に時間を確認する。時刻は大体五時二十分を過ぎていた。確か社交部の門限は五時半のはず。後十分ほどしかない。

「ああ、ええと……」
「速く行ったらどうだ。俺は君に付き合っている暇はないし、付き合う気にもならない。社交部自体にも興味は無いんだ。だからさっさと行け」
「……分かった。だが、私は諦めない」

その真っ直ぐで力強い眼差しは、しっかりと松下の姿を捉えていた。そして不意に走り去っていった。

どうすればいいのか。
このまま追えばいいのか。
普通であったなら、他人に説得されて追っかけるシーンになるんだろうけれども。

しかしそんな気は起きなかった。

コゼットが走りさった後の廊下を見て、少しの罪悪感すら沸かなかった。
これが相思相愛の関係だったら多少なりとも沸くだろうが……ただそのくらい廊下をみたまま、何も行動は起こさなかった。
それが、今松下が出来る最大限の行為だった。

そのまま、暗くなってきた外を見ながら時が経つのを待っていただけだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## スクールデイズ事変ａｃｔ１（前書き）

ここからプロットどおりに物語は進行していきます。
実は元々この部分はオマケとして書いていたのですが、その後に描いた物語でこの場面の位置付けが大きく変わっていました。

ま、ギャグパートとして。

## スクールデイズ事変act1

The key to realizing a dream is to focus not on success but significance — and then even the small steps and little victories along your path will take on greater meaning.

夢を実現するための鍵は、成功することではなく重要性に集中することである。
そうすればどんなに小さなステップや勝利でもより大きな意味を持つようになってくるであろう。

by Oprah Winfrey

人間とは扱いづらいもので、他の動物よりも知能が高い。
その知能のおかげで、たいして身体能力が高くないにも関わらずに地球の覇者になった。
ふと、おかしく感じてしまうことがある。
もし、人間より知能が高くて、体格もよく性欲も強い生き物がいたとしたら。
どうなっていたのだろう？

☆

時間が過ぎ去るのはとても速く、俺達が入学して既に三ヶ月が経った。
入学したのが元の世界での四月としたなら、今は七月ぐらい。夏休みはもう目の前、という感じだ。
しかしまぁ、どうやらこの世界にもちゃんと月の区分があるらしく、現在は？の時だという。何故ローマ数字が使われているのか――そもそもあるはずが無いのだが――分からないが、ともかく、今は現代でいう七月だ。
この世界は奇妙なことに、気候もケッペンの気候区分でいうｃｆａといった所だ。分かりやすく説明すれば、北海道などを除く日本本州の気候のことだ。
そして今。

「暑い……」

猛暑が襲っている。
暑い。とにかく暑い。
窓を開けっぱなしにしても、ちっとも涼しくないのだ。
しかもそれはほかの人にも言えたようで、

「ふふ、死ぬよ。絶対死ぬ。教室に篭もる男～な感じのくぐもった匂いが更にこう……精神に殴りかかってくるよ」

矢島はなかなかの狼狽振りを見せ、見事にノックアウトしていた。机に『ぐにゃ～』と伸びている様はある種のスライムが液体になっているようだ。
この学級は剣技コースの為、嫌でも汗臭い匂いが充満しているのだ。無論、制汗剤なんてものはこの世界にはない。それぐらい魔法

でどうにかして欲しいものなんだが。
向こうにいるコゼットすら顔が溶けたような顔をして机に伏している。もちろん汗をかいている……のかも知れない。

「なあ、松下〜」
「なんだ、爽やかなイケメン」
「汗かいている女子って、何処かよくね？」
「はぁ？　この暑さで遂にイカレたのか？　それなら速く保健室に行ったほうがいいな」
「いやいや、俺はいたってまともさ。狂ってるのは君の感性だと思うよ？　第一さぁ、汗かいた後の女性の服って若干透けるじゃん？　その下着にロマンを感じない？」
「そりゃあ……感じるけど」
「だろ！？　だからさ……」

そういいながらも矢島は耳を寄せろ、とジェスチャーをする。

「んで……ごにょごにょ……」
「……だが断る」
「どうしてだい？　君なら協力してくれると思ったのに……」
「……涼しくなるなんて出来るわけがない」
「まず最初に言っておくよ。君はこれから『できるわけがない』というセリフを……４回だけ言っていい」

いきなり真剣な顔になった矢島が言う。

「黄金率、というものがあるのは知っているよね？　１：０，６１８の比で構成されたこの黄金率は人間の感性的に美しいと感じる比だ」
「待て、黄金率は知っているが、話になっていないんだが……」

「僕らはその黄金率を、うら若き女性達に見出した」
「おいコラ待て。するとこの話には周辺の男子も含まれているのか？」
「「その通り！！」」

適度に日焼けされたその男達は、自身も関与している、と主張した。
その大合唱でコゼットがこちらを向いたのだが……すぐに机に伏した。
なんということか、この計画は恐ろしいことに周囲の男子からの賛同を得ているというのか。下手をしたらこちらは徹底的に撲殺されるのに。嘆かわしい奴らだ。

「流石に出来るわけがない。第一、この計画は生徒会の了承を得るべきではないのか？　いくら矢島が生徒会役員だとしても、あのフェイルが賛同してはくれないんじゃないか？」

しかしその疑問に対して、矢島は白い歯を見せつけながら『問題ない』と親指を立てた。

「会長は俺に弱いからね。適当にもっともらしい理由をつければ問題ないさ」
「んなものなのか……？　しかしここは戦闘員を養育する学校で、そんな計画はできるわけがなさそうなんだが」
「問題ない！！　この暑さをひと時でも癒せるのであれば、俺達は命を懸けてその作戦に望もう」

松下は心から思う。

『こいつらは暑さにやられる前からイカレていた』

そう、間違いはない。

こんな愚かしい作戦を立てるなんて普通は考えられない。しかし、そのバカを具現化したような奴らが目の前にいるのだ！！

いくら暑くても、人間性が崩壊したようなそのような計画は……流石に……。

「どうした？　我らの計画に乗らないのかい？」

ニヤついた顔をしながらじりじりと後退できないような雰囲気に持っていこうとする矢島。

よし、落ち着いて考えてみよう。

～思案中～

「しょうがない。そこまで言うんだったら、協力しないほうが失礼だよな」

「「ヨッシャァァァァァァ！！」」

「じゃ、最初に……この作戦を、『オペレーション・スク水・ディズ』と呼ぶことにする！！」

「「ＷＲＹＹＹＹＹ！！！」」

この出来事は、後に『スクール・デイズ』と呼ばれる程の、血で血を洗う戦いになるとは……誰も予想は出来なかった。

後半へ続く。

## スクールデイズ事変ａｃｔ２

Ｔｈｅ ｂｅｓｔ ａｎｄ ｍｏｓｔ ｂｅａｕｔｉｆｕｌ ｔｈｉｎｇｓ ｉｎ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ ｃａｎｎｏｔ ｂｅ ｓｅｅｎ ｏｒ ｅｖｅｎ ｔｏｕｃｈｅｄ．
Ｔｈｅｙ ｍｕｓｔ ｂｅ ｆｅｌｔ ｗｉｔｈｉｎ ｔｈｅ ｈｅａｒｔ．

この世の中で最高でもっとも美しいものには決して見たり触ることはできない。
心の中で感じられるものである。

ｂｙ Ｈｅｌｅｎ Ｋｅｌｌｅｒ

人が何を考えているのか、はたまたどういう思想で動いているのかは松下には理解できない。いや、うかがい知ることはできない。
かの哲学者の考えていることを表わした本を読んでみても、それが著者の考えの全てではないし、そもそも書くことは出来ない。
しかし、容易に推察できる人間もいる。思春期の男子がそれだ。
彼らは一日中妄想にふけり、常にエロいことを考えている。
別に咎めたりはしない。それが男子、という生き物だからだ。女子は知らんが。

矢島の脳は今、思春期の真っ只中にいる。無論松下もだ。だからあんな計画を承諾してしまったのだ。
『この学校にプールを設置し、スク水を着らせる』

それが彼らを突き動かした原動力だ。別に理由なんてものは彼らの性欲以外は存在しない。ただスク水を見たいだけだった。
しかしそんな裏事情があるとは言え、現にぶっ倒れそうなぐらい暑いのも事実。こうでもしないと死ぬ、と矢島はいった。
「そのくらいじゃ死なんだろう」と反論してみたが、矢島を含む周囲の男子は聞いてはいなかった。どうやらそんな事を聞くだけの精神がこの猛暑で死んでいるらしい。
だから、とはいえない。もともと自分も一瞬の葛藤の末にｙｅｓと答えたのだから。
そして、その作戦の概要を――無論、オブラートに包んでいる――生徒会長に知らせる必要がある。
そんな大役に、男子のむさくるしい暑い要望から選出されたのが。

「なんで俺まで……」
「気にすんなって。俺が説得してやるからさ」

矢島と松下だった。
端から見れば妥当な判断だとは言えるかもしれない。だが、その真実はその奥にあった。要するに、『イケメンな矢島を連れて行けば会長は確実に落とせるし、堅物な松下を連れて行けば姦しい事ではない』と知らしめることができるという、くだらないようで説得力のあることだった。
確かにそれは確実だろう。だが実態というか男子の考えることは皆一様だった。それは『下手したら見抜かれた上に拷問刑に処せられる』、という現実味のある、紛れもない事実だ。フィルナはそれを見抜ける眼力というか、女の見抜く力がある。つまり、下手な要因では最悪のケースが実現してしまう可能性があるのだ。そこで立てられた使者が、総大将である矢島と寡黙で考えの読めない松下に抜擢されたのだ。要するに、計算されつくしてある知略と、まだ命を散らすわけにはいかないという生存本能が彼らの考えをまとめた

のだ。

そして、時は移り変わってまずは第一関門であるフィルナを説得する。

「こんな真面目な文面なのに内容は変態か……ギャグは封印したはずなんだが……」

「何をいっているんだい？　これはオマケだよ。こんなことがあった、ということを説明しているだけじゃないか」

「そうなんだがね、なんか俺がお前と同等の存在として扱われるのが無性に悲しくなってくるもんだからなぁ……」

なんて愚痴をこぼしつつも、彼らは長い廊下を抜けて別塔に入る。前にも来たことはあったが、何故生徒会室が別の塔にあるのかが分からない。別に本塔でいいじゃないか、とフィルナに言ったところ、

「生徒会は基本的に権力をもってたりするの。つまり私達が基本。ま、いわゆる治外法権って奴よ」と皮肉にも聞こえることを言われたことがある。

そんな無茶な、とは思っていたが、その権力はなかなか強く、生徒はおろか教師陣でさえ反旗を翻すやからはいない。それほど生徒会は恐れられ、且つ尊敬されているのだ。

くだらない権力だなと松下は思いながらも、その歩みは一向に止める気配はない。

「また来てしまった……お前が行け」

「分かった」

生徒会室の扉の前で選手交代する。

コンコン、と扉を叩く。

『どうぞ』

返事が聞こえたので躊躇なくドアノブを捻り、その扉を開ける。

「やぁ、こんにちは。会長」

「フィルナでいいですよ、矢島さん。……あら、松下じゃない」

「フン、無視して構わん」

「そう。じゃ、盛大に無視させていただくわ」

二人の視線が交錯した瞬間、その空間に火花が散る。これは幻覚ではない。二人の眼力にこめられた魔力が視線として空を舞い、それぞれがぶつかって干渉を起こし、空気中に火花を発生させる。その視線はもはや殺人ができるんではないか、と思わせるレベルだ。

「おっと、こんなプレッシャーのぶつけ合いをしている暇はなかったわね。で？　貴方は何をしにきたの？」

「俺を無視するんじゃなかったか？」

「仕方ないじゃない。貴方は生徒会役員ではない以上、ここに来る理由はないわ。でも現にここにいるということは、それなりのことがあるはず。いいから吐きなさい」

「俺より矢島に聞け。俺はただの傍観者に過ぎん」

「か～～～～！？　ムカつくわね～～～！！」

暑苦しい奴がもっと暑苦しくなるのは見るに耐えないものだが、フィルナはそこそこクール的な雰囲気を持っているので許容できる。

第一、なんにムカつくのかを言ってもらいたいものだ。それが修正できるものだったなら聞いてやらないこともないのだが。

フィルナはそんな松下からプイッと目を離し、その視線を矢島に注ぐ。

「あんな根暗な奴はほっといて……今日は何の用かしら？」
「ああ、今日は相談があってきたんだ」
「相談……？　ストーカーとか、あの松下に掘られたとか！？……殺す」
「いやいやいや、そうじゃない。第一俺はそんな趣味はないから！」
俺もない、とついでに付け足しておく。
フィルナはその言葉に無い胸を撫で下ろし、「作者、あとで殺す」と虚空に警告をしておき、
「じゃあなんの相談かしら？　貴方の悩みならすぐに解決して差し上げるのに……」
「相談というより提案だけどね。それでも良いって言うんなら……」
「もちろんよ！　貴方の提案なら、提案される前に閣議決定済みよ！」
どんな閣議なんだ、と心中でツッコミを入れる。
いや、いまさらツッコミを入れても遅いか。元が元なんだし。
「今、物凄く暑いよね？　それについての提案なんだけどさ」
「ああ、確かに気温はどんどん上昇してますわね。この生徒会室ですらところどころに氷魔法を使って冷やさねばやっていけないレベルにまで」
その言葉通り、この教室のところどころにバケツ（なぜ現代の利器があるんだ？）のなかに氷がぴっちりと入っている。
この世界にクーラーがないということが悲しい。クーラーの素晴らしさを子供の頃から知っている現代っ子にとっては信じられないだろう。

それほどクーラーは素晴らしかったということだ。
氷魔法を使って部屋を冷やしているフィルナは、その矢島の提案に興味を示し始めた。

「提案ってのは……ここの学校に『プール』を作ろうって話なんだけど……ダメかな？」
「ぷーる？　なにそれおいしいの？」
「あ、そうか……『プール』っていうのは、水を入れた……堀？」
「堀？　堀を作ってどうするのよ？」

流石に堀じゃわからんだろう。堀じゃ。
仕方ない、とばかりに松下がズイッとでて、

「要するに涼しくなれる施設を作ろうってことだ。悪くは無いだろう？」
「涼しく？　なんれ？」

どうやらフィルナは本格的に参ってきたように上ずった声を発する。そして少しばかりろれつが回らなくなり始めている。
そして胸の部分を少しあけながらパタパタと手で風を送り込んでいる。

「あ～～～よくわかんないしややこしいけど、確実に涼しくなれるってんならその件は貴方達に一括して任せるわ。資金も支給してあげる……あづぅ～～～」

そこでいきなりフィルナが折れた。
すぐに机から水筒をとりだし、きゅッきゅとのどを鳴らしながら一気に水分を取り込んでいる。ちなみに少し可愛かったりする。

「ぷは～～。やっぱ暑いわね～」
「で、さっきの件について、我々が好き勝手やっていいんだな？」
「さっきも言ったでしょ。こちらにも利益があるならご自由に。ｗｉｎ－ｗｉｎってやつね」
「相互利益か。そうだな。では交渉は成立だ」
「じゃ、これで帰るね。会長も倒れる前に帰ったほうがいいよ？」
「うん、わかった。そうする」

そうして、『スクールデイズ』と呼ばれる事態に発展していく……。

「女子の水着はどうしようか？」
「心配するな。俺がデザインして業者に作ってもらう」
「なら安心だね。……ひょっとして、意外と乗り気？」
「……」
「そうかい。君の沈黙で察することにするよ」
「そうしてくれるとありがたい」
「……ＡＩＲの季節だね」
「ああ。ＡＩＲの季節が始まるんだ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．？

## スクールデイズ事変ａｃｔ３

Ｃｈａｒａｃｔｅｒ ｉｓ ｌｉｋｅ ａ ｔｒｅｅ ａｎｄ ｒｅｐｕｔａｔｉｏｎ ｌｉｋｅ ｉｔｓ ｓｈａｄｏｗ．
Ｔｈｅ ｓｈａｄｏｗ ｉｓ ｗｈａｔ ｗｅ ｔｈｉｎｋ ｏｆ ｉｔ； ｔｈｅ ｔｒｅｅ ｉｓ ｔｈｅ ｒｅａｌ ｔｈｉｎｇ．

人格は木のようなものであり、評判は木の影のようなものである。
影は我々が人の人格をどう思うかであり、木こそが本物である。

俺は、これが青春っていえるような行動を今までしたことがあるだろうか。
恋愛、スポーツ、合宿、エトセトラエトセトラ……。よくよく考えてみれば、俺は今までまともな青春を送っていないんじゃないか？
第一に国公立へ受かるために勉強、第二にテストで良い点を取るために勉強……。結局、自己の存在を主張することは無かった。この一度の青春、勉強だらけだ。
特技なんてピアノぐらいしかない。でも、クリスマスに『Ｍｅｒｒｙ Ｃｒｉｓｔｍａｓｓ，Ｍｒ Ｌａｗｒｅｎｃｅ』を弾いてみたって、自分は今年も一人か、と悲嘆にくれるだけ。

だったら。

この世界なら、そんな青春を、少しでも謳歌しては良いんではないか？　別に彼女なんて要らないし、そもそも色恋沙汰は勘弁だが……。

だったら。
やってみよう。
自分の存在価値が、この世界でどのようになっていくのか。
それにはまず……。

☆

どたばたと廊下を走る音。その音は小さな音からやがて大きな音へと変貌していく。誰かが走っているのだろう、その音はある教室の前でピタリと止んだ。
次にばばーん、という音を立てながら教室の音が開かれ、その扉から一人の男子生徒が入ってきた。
その男子生徒は、その左手になにやら青い『何か』を持っていた。
その『何か』の材質は良く分からないが、とにかくなにか奇妙なものだった。
男子生徒が口を開け、静かに告げる。
「完成した……。これがお前達の欲望の塊、青春の輝き！」
青年は大きく手を広げ、そして高らかに叫んだ。
「これぞ、『スクール水着』だ！」
「じゃねえだろうが！　ここにはアナスタシアの目もあるんだぞ！」
「……なんなんですか、それ」
「ああ、コゼットさん。これはですね――」
言おうとした瞬間、矢島がその青年の口を塞ぐ。

ここで知らせるわけにはいかない。特にコゼットにはだ。知られた暁には、「な、なんだ……この、不埒者ォォォォ！」と言われながらここにいる男子全員が制裁される。

これは現時点では秘密事項なのだ。ぶっちゃけ、この『スク水』のことは生徒会ですらリーク出来ていないのだ。ここで不用意に隙を見せれば即オジャンなのだ。

そこで制するように低く松下の命が飛んだ。

「おい、男子聞け。今から屋上へ行く。これからのことを話す」

これから……とは『オペレーション・スク水・デイズ』のことについての会議だということに気づいたのか、全員が「了解」と寸分違わずに、野太い声で返事をしたから、松下は一瞬頭が揺さぶられるような、悶々とした感覚にとらわれた。無論、これはただの感覚にしか過ぎないのだが……。

それから、、生徒会には気をつけろ。あいつらのリーク能力は伊達じゃないからな。そこで情報が漏洩してしまえば俺達は終わりだ。分かったなら今すぐに屋上へ行け、と注意し、男子全員を屋上に向かわせる。

命令された青年達は、さまざまなことを思いつつもその指示に従った。その理由は、なぜか彼に従ってしまう、いわゆるカリスマめいたものを松下に感じたからだ。無論、そのこと自体は誰も話題にはせず、彼ら自身の胸にしまっていたのだった。

そして教室に残ったのは松下とコゼットのみ。

何を話すべきか。

そもそも話すべきなのか。

いろいろな思いが交錯し、頭が回っていたところへ唐突にコゼットが「さっきの騒ぎは？」と聞いてきた。

松下にとってそれは答えがたい質問だった。下手すれば首が飛び、この教室は阿鼻叫喚の地獄へ一瞬のうちに様変わりするだろう。数

分後にはこの事件を表に出したくない学校側の働きかけで焼却炉に入れられることに……？　それでは『オペレーション・スク水・デイズ・プロジェクト』はどうなるのだろうか？　やはり廃止か――

それだけは避けなくてはならない。

「さっきのはお前さんには関係ないことだ。アナスタシア、君はこの教室に残っておいてくれ」

「なぜです？　返答しだいでは、このアナスタシア家の一族の誇りの剣が光を放ちますよ？」

真剣な目でちらりと、その『一族の誇り』とやらの剣を見せる。

……あれはかなり切れそうだ。立派に首が切れそうなほどに。

さてどうしたら良いものか。久々に頭をフル回転させて考える。

その高性能な脳が導きだした答えは、自分でさえ驚いた。

松下は既にその教室から逃げ出していた。

☆

「最初に言っておく」

屋上に集まった男子はコゼットを抜いた男子全員。よくもまあこれほど集まったな、と思う。

この男子は個性的な人物はあまりいない。恐らく全員が上官の指示に従うタイプだ。それはある意味統率力を持っているといっても

良いのかも知れない。
そんななか、もっぱら弁を振るうのは松下と矢島だ。彼らはこの世界の住人ではないにしても十分な個性派だ。だから、とは一概にはいえないが、その個性がこのクラスを引っ張っているようだ。
そこで参謀の松下が口を開く。
「俺は女子のきたスク水には興味はない」
その言葉に、いきなり全員がええ、と驚く。
「で、では、貴方はなぜこの作戦に参加したんですか？」
「……簡単に言えば、自分はどこまで引っ張っていけるか試したかったんだ。自分の存在価値がどんな風に確立できるか、試したかった」
「そうだったのか……。てっきり、僕は君がただ単にスケベなだけかと思っていたんだけど」
「……いや、それなりに性欲はあるんだが……？」
「でも色恋に興味なし、か。君らしい考え方だよ、全くね」
ふふふっと爽やかに笑ってみせる矢島のそのかっこよさは尋常じゃないだろう。流石の松下でさえフラッシュバックのような光が目に焼きつくような幻覚を見てしまったのだから。
しかしそれでも矢島は好感を持てる奴だ。彼が女だったならばすぐにでも告白してしまいそうな、そんな感じ。
「で、話はなんだい？　ここで自分の性癖でも打ち明けようっての？」
「性癖って、お前なぁ」
そこでこほん、と一区切り。

「先ほど分かったように、このスク水に関しては既に完成済みだ。それも学校中の女子生徒分のな」
「へぇ〜、意外とやるじゃん」
「では、それぞれの現場監督者からの現在の進展を発表していただこうか」

今、それぞれに現場監督を置いてあり、それぞれがその場の指揮を執る、という方式をとらせてもらっている。こうしたほうがそれぞれが働きやすいし、何より戦場での指揮の練習にもなる。
こういった場を活用しながら能力開発をしていくのが本来の学校のとるべきスタイルだと思っている。
その男子の中で「では、私から先に」といって出てきたのが一人。

「現在、第二学年、第三学年の協力を得て、『プール』の基本工事が完了。後は水を入れるだけです」
「そうか。先輩達が……。では次」
「はい。今のところ、生徒会においては『プール』についての議論はされていません。許可をだした生徒会長ですら完全に忘れているようです」

それは会長としての仕事は全うしているのか？　という疑問を抱かずにはいられなかった。
本当に大丈夫なんだろうか。この学校は。
とにかく基本的なことは終わっているらしい。後はスク水を着せて人魚達を泳がせるだけだ。

「そうか。では明日から実行に移す。矢島、お前は生徒会室にいってこの事実を伝えろ。ほかのものはこのスク水がばれないよう、情報管理にはくれぐれも気をつけてほしい。以上！」

その松下の解散宣言から一日後。

『スクール・デイズ』は始まる。

Endless continued.....

## スクールデイズ事変act4

With nobler desires, greater earnestness and wider sympathy not limited to just a few ... the weakest of us may attain success.

高い志と熱意を持ち、少数だけでなく、より多くの人々との共感を持てれば、どんなに弱い者でも事を成し遂げることができるでしょう。

by 津田梅子

「こちら松下。至急そちらの状況を報告せよ！」
＜ガガガ……こ…ら…サージ・アメスト……生徒会の奴らがやりやが……こち…は壊滅状態！　繰り返す！　こ……は壊……ガーー＞
「クソッ！　サージの奴までやられたか……」

松下は今、危機的状況に立たされていた。いや、それどころか生徒会の奴らまで動き出してしまっている。
この暑い中、まさに恐ろしい事態が発生してしまったのだ。
それは誰もが恐れていたこと。
情報の漏洩を防いでいたのにだれが……？

「い……忌々しい奴らがァァァ！」

それを語るには、少し……そう。ほんの少し時をさかのぼる必要があった。

―十分前―

「こちらスカイアイ。メビウス1、スタンバイ完了。他の部隊は状況を報告せよ」
＜こちらメビウス2、スタンバイ＞
＜メビウス3からメビウス7、スタンバイ＞
＜メビウス8、スタンバイ＞
「出撃準備完了。これより行動を開始する。各員、望遠魔法をつかえ」

スカイアイ、と呼ばれる人物の指示どうりに男子は望遠魔法を空間に展開させる。
彼らは皆一様にホフク状態にある。そして展開した魔法を使ってどこか遠くの、そう、桃源郷を覗き込んでいた。

「でもさ、そんな覗きにまでコードネームを使う必要はないんじゃないか？」

松下の隣にいた男子が言う。
しかし、松下は違う、と言い、

「この魔法通信は盗聴される場合がある。身元がばれないようにする最大の防御策だ。だいたい経由してるサーバーだかなんだか知らんが、これは個人間通信じゃないんだから」
「へえ。面白いけどさ……」
「なんだ？　おかしいか？」

そう聞き返した。しかしその男子はおかしくは無いけど、と付け加えながら、

「覗きにコードネームも何もないって。だいたい一人吊るされたら芋ズル式にばれるんだしさ」

「それはバレた場合だろ。捕まらなければ良い話だな。……と言いながらちゃっかり見てるし！」

「いやぁ、男としてはたまんないからね。一度はこういう事をして見たかったんだ」

若干ショタ系のような顔立ちの（童顔ともいう）男子生徒が照れくさそうに言った。

説明しよう。

今現在、『プロジェクト・スク水・デイズ』の計画を実行に移している。

その驚愕の計画内容とは、

一つ、覗き。

二つ、盗撮。

三つ、スク水を堪能する。

これが基本的な計画内容だ。無論、立案及び準備したのは松下ではなく矢島だ。

彼曰く、「これが夏の醍醐味さ。暑い中、涼んでいる女性を見ることでこちらも涼しくなろう」とのことだ。大いにツッコみを入れる箇所があるのだが、それは矢島には効かない。それどころか、計画に参加している男子には基本的には効かない。

しかもくだらない、と日々言ってきている松下でさえ参加しているのだ。これはある種の革命といって良いだろう。

遠くにある桃源郷を望遠魔法で覗く、という事は男子であればス

テータス、基本なことだ、と後の人は言う。

「そういえば、あのスク水は見たことないな……どこから仕入れたんだい？」

「アレは俺と物好きな奴らの合作だ。それを業者に依頼して作ってもらったんだ。……無論、生徒会からもらった資金でだが」

「うわ、いつにも増して黒くなっちゃってるよ……」

「それに、俺がこうして覗いているのもスク水がどこまで女子に合うかが気になってな。こうしてキャッキャと言いながら水の掛け合いをしているのを見ていると、何処か心が落ち着く。不思議な感覚だな」

「確か盗撮班もいるんでしょ？」

「ああ。あいつらは男子の『夜のオカズ』を生産する大事な部隊だ。盗撮されている女子には悪いとは思うが、俺はここ一週間一人でヤっていない、速く作ってもらわないと理性が抑えられなさそうなんだ」

「はは……そのままコゼットさんでも襲う気かい？」

「フフフ、冗談は大概にしとけ。アナスタシアを襲った暁には俺の首と胴が永遠に別れなけりゃならん」

望遠魔法に写るのは、胸の辺りに名前が書かれている女子の映像だ。ここから約五百メートル先には男子が作ったプールがあり、今は女子の涼む場所と化している。

そのことに全く気づいていない女子達はけなげにも胸をゆっさゆっさと揺らしながら遊んでいるのだ。それを覗かずして、一体どのように生きて行けというのか。

「こちらスカイアイ……そっちはどうだ？」

＜こちらジャン・ルイ。バッチリだ。オカズは当分困らないだろうぜ！＞

「そうか。では更なる戦果を期待する。Ｏｖｅｒ」

そういいながら望遠魔法と併用していた無線魔法を保留にする。

彼らはそのために、自らのプライドを捨てている。自らの欲望のために、全てを。

ふと、顔を上げると……。

「……！　アナスタシアか！？」

「え！？　本当に！？　どこどこ！？」

「あの集団の端っこだ」

確かにその端にコゼットが水着姿でいた。

その姿を男子側も視認したのか、無線魔法から「女神光臨」だの「コゼットたんマジ天使」だの、いくつもの歓声が湧き上がっていた。

しかもそれを強調するかのごとく出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいた。しかも彼女自身、体を鍛えているのでそりゃもう筆にはかけないほどの美しさを誇っている。凄まじい……戦乙女とは彼女の為にある言葉だ。

「なかなか……いい、な」

「うん……僕、この作戦に参加できたことを心から嬉しく思うよ！」

「俺もだ……＜ジャン・ルイ！　見ているな？　アナスタシアをできる限り撮りまくれ。そしてそのデータを早急にプロテクトにかけておけ＞」

＜了解＞

これは当分オカズには困らないだろう。

しかし、その瞬間、

＜うわあああああああ＞

という絶叫が無線魔法から聞こえてきた。

そして何かが爆発するような音とともに声が聞こえた。

＜こ、こちらメビウス６……やられた…奴らが来た！＞

＜どうしたメビウス６！　状況を報告しろ！＞

＜なんてこった……『雷鳴よ……』！　ち……さすが、か……＞

どうやら向こうで何者かと戦っているようだ。ところどころ呪文の詠唱が聞こえてくる。

時折爆発音すら響いている。

これはなにかが起こっている。

何かヤバイ。

＜スカイアイ……作戦は中止してくれ！　奴らが……学院最強の『風紀委員長』が来た！　な……うわ！？＞

＜メビウス６！？　応答せよ！　状況を報告しろォォォォォォ！……クソ！＞

聞いた事がある。風紀委員長の噂を。

確か学内最強であり、『氷の姫』の仇名を持つその人は！

『パス・クルーエル』。クルーエル家の一人娘であり、その実力は三学年魔法科主席の実力を遥かに上回るという、蒼の髪を持つ美少女。

平和、という名前を持つがそれにふさわしい程、容姿端麗とのもっぱらの噂だ。

そのクルーエルが……俺達を潰しにきたというのだ。

その事実を知った松下の行動はすばやかった。

すぐに魔法を開き、全ての男子に告ぐ。

＜これ以上の行動は不可と判断、これを聞き次第、速やかに散開し、自らの身を守れ。敵は風紀委員だ。交戦は認める。だが――交戦規定はただ一つ＞

『生き残れ』

その瞬間、各地でうおおおお！　という男子の雄たけびが聞こえ、その一秒後に爆発した。どうやら既に戦いが始まっているらしい。

こうしてはいられないと松下は立ち上がって辺りを見回すが、周りには敵はいないらしい。

「やばい……風紀委員までもが！　このままだと確実に全滅か……？」

「ねえ……なんかやばいような気がするんだけど……？」

そういいながらショタ系の男子生徒が魔法を展開している。

彼が今展開しているのは音で敵を感知する、サラウンドインジケーターのようだ。っそれによれば、敵の動きが激しいようで、常に大きな音を指し示す指数が大きくなったりしていた。

今一度戦況を確認しようと無線魔法をひらいたとき、爆音が響いてきた。

「ちい！　そろそろ離れるぞ！」

「わかってる！　あっちへ！」

先にショタを先行させ、音を頼りに敵のいない場所へ逃げる。

その間も無線から悲痛な声が聞こえてきた。

＜ああ！　ジャン・ルイがやられた！＞
＜落ち着け！　ジーン。指揮を引き継げ！＞
＜俺達は生き残るんだ！　生きて生きて生き延びて！　そして……！＞
＜スカイアイ！　もうダメだ。指導室へ戦線離脱する！＞

散り行くものたち。
そして生きようともがき苦しむものたち。
みな、必死に生きようとしている。

＜こちらアルファ１！　ヤバイ！　奴らも参戦しやがった！＞
＜こちらメビウス５．状況を報告しろ、アルファ１＞
＜生徒会だ！　奴らが魔方陣を展開していやがる。やばいぞ＞
＜落ち着け、落ちつくんだ。いいか？　素数を数えて落ちつくんだ。……もう一度聞く。『生徒会』が参戦したのか？＞
＜そうだ！　フィルナ会長がスク水を着て爆発魔法を振り回してやがる！　こんな天国と地獄は見たことがない！＞
＜なんだと……？　至急応援に向かう＞

ある意味物凄い戦いのようだ。
しかし風紀委員ならともかく、なぜ生徒会にまでばれてしまったのだろうか？
各個人の不注意でこれを招いたのならともかく、こうも簡単にばれる筈がない。
この戦い……もしかしたら、内通者がいるのか……？　そういえば矢島はどこに？
俺は奇妙な思いで矢島のことを探したが――

「ばかな……いない、だと？」

矢島の精神の波長がどこにも見当たらなかった。
この無線魔法は精神波長を登録さえしていれば、後は自動的にコールしてくれる。何故無線という名前なのかは知らない。
しかしおかしい。
あれほど強力にこの計画を推進していた矢島が、この場にいない……？

嫌な予感がする。
ねっとりとした汗が服の内側にねっとりと絡み付いて嫌な感覚。
しかもそれがすっきりしないような。
このままでは、終わらない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## スクールデイズ事変act5

If you have made mistakes, even serious ones, there is always another chance for you. What we call failure is not the falling down but the staying down.

もし間違いを犯しても、それが深刻なものであったとしても、いつも別のチャンスがある。失敗というものは、転ぶことではない。そのまましゃがみこんだままでいることである

by Mary Pickford

人間ってのは、不可能を可能にしてきた。

だが、こうまでして進化してくる必要があったのかは、物凄く疑問だ。

それのおかげで、俺たちはこんな状況に陥ってるのだからな。くだらないものだ。

いっそ三月記のように虎になれば良いのに。

☆

どこか遠くで爆発音がなる。

それと同時に放たれる閃光……

それらが次第に消えて行き、そして数十の時の時を刻んだ後に再び光る。

これは一方的過ぎる。単なる検挙ではない、なにかおかしい――

今、この学院では大規模な戦闘が開始されていた。それはもはや男子対女子という構図だ。
しかし戦況は男子の劣勢となっている。その戦況から恐ろしい敵だ、と屋上にいる松下は思った。

「ショタ、この戦いをどう思う？」

と近くにいた童顔の持ち主――ノア・レッドフィールドは首をすくめながら、「僕はショタじゃないよ。ノア・レッドフィールド」と文句を言った。

「うーん、どうなんだろう。ここの女子の能力はずば抜けて高いから、男子の劣勢も一応は理解できるけど……」
「そうだな。剣と魔法じゃ、遠距離から攻撃できる魔法科の女子の方が断然有理なわけだが……俺達は残念なことに魔法よりは剣術を学んでいたからなぁ」
「でも君は試験のときはかなり優秀じゃない？」

しかしそれに対して松下は複雑な顔をして肩を落とした。

「優秀、というかなんていうか。ただ昔から魔法には興味を持っていたからな。それなりに練習した成果が出ただけだ」

しかし、そこまでがんばって練習していた訳じゃない。ただ単に本を読んで、その組成を理解し、どう展開したら速くなるかを検証して使うだけだ。
むやみやたらに練習したって上手くなるわけじゃない。それは勉強でも同じことだ。　しっかりとそれについて理解し、頭にイメージが出来てしまえばあとはその公式を利用して魔力を送ればいいだけ。これは数学と同じなのだ。

「で、学院側の対応はどうなっている？　まさかこれだけの騒ぎを知りませんでしたといえるはずがないんだが」
「ああ、それについては学院側は『放置する』ことにしたらしいよ」
聞けば、『これは訓練にもなる。放って置いても問題はない。むしろ戦闘してろ』というのが学院の回答だ。この情報はノアが使っているＲＳＳ機能をもつ魔法で学院側の生徒への通達によって分かったことだ。
そこまで破綻しているのか……などと愚痴りながら、松下は眼前の敵を見据える。そこには女子が二人。
やるか。

「先に出る。援護しろ」
「へ！？」

瞬間、松下は自身の剣を抜き、屋上から身を投げた。
ここは高さ六階だ。下手をすれば死ぬ。下手をしなくても死ぬ。しかし落下中に展開した魔法で地面との衝突の衝撃を緩和する。
「な……！？」
「どこから！？」
「少し眠ってもらう」

瞬間、女子が魔法を展開する前に剣を突きつけ、当て身で頚動脈を攻撃し気絶させる。まず一人。
そして流れるように二人目の女子の腕を掴んで柔道のように地面に倒す。そこからクレイモアを突きつける。

それが全くの一瞬だった。松下は汗一つ掻いていないようだった。
「……って援護が必要なかったようだな」
そんな事を漏らす。
しばらくして、屋上からノアが走ってきた。
「遅かったな。飛び降りれば一瞬だったんだが……」
「僕はそんな自殺紛いの芸当なんて無理だって！　てゆーか、倒しちゃったの？」
「もちろん死んではない。気絶してるだけだ」
伸びている女子が一人と松下に見事にホールドアップされている女子計二名が床に伏している。
そんな状況を一言でまとめると――
「これは……強姦現場に見られても不思議じゃないよね……」
「……否定は出来ないみたいだな。逃げるぞ！」
松下が女子をロープでなぜか『亀甲縛り』にしているのを見たノアは松下の頭をぶったたき、急いでここから脱出した。

☆

ちょうどその頃。
場所はそこからそう遠くはない学院内。
戦いに敗れてしまい、風紀委員に捕縛されたものを収容する学校。
そのある一室では、また一人と女子に逮捕される男子の数が増えていっている。助けてくれ、あの風紀委員長から拷問を受けたくない、という悲しみと疲れ、そしてそれに伴って起こる『黙れ』の声。

ここでは女子の水着を覗き見ようとした男子が強制的に入れられる地獄。
男臭く、蒸し暑い中で捕縛された男子はその数、二百を超える。この学校では男子の数が総数二百五十人と意外と少ない。つまり、それがどういうことかと言えば、『オペレーション・スク水・デイズ』がそれほどの男子を動かす計画だったということだ。
その中で、なぜかスク水でいるフィルナは、団扇で自身に風を送りながら風紀委員長と話をしていた。

「で、何人集まったわけ？」
「二百人越えは確実ね。これじゃ、男子のほとんどが参加しているといっても過言じゃないわね」

そういう風紀委員――パスは楽しげに言った。何がそんなに面白いのかサッパリ分からないが、その美貌は常に笑顔の花で咲き乱れている。
そんなパスを見ながら、はあ、と溜め息をつき、

「あ～あ、『国の要請』だからってこの状況……泣けるわ」
「じゃあ泣いちゃえばいいじゃない？　私の胸で抱きしめてあげるわよ？」
「……あんた、ムカつく」
「ふふ、それが私だもの」

そういいながらもパスの胸の大きさが何処かムカつく。そしてイラつく。
そんなことはお見通しなのか、笑顔を絶やさないパス。
二人は仲が良いのか悪いのか。端から見ればただの面白い喜劇にしか見えない。

「そういえば、あの松下はどうしたの？」

ふと、フィルナは気になった。

あの男は今、どこにいるのだろうか。今もどこかで隠れているのだろうか。

その疑問にパスは、

「その松下って人がどんな人かは知らないけど、今ここにいる男子の中にそんな特殊な名前はないわ。多分今も逃げ回っている最中じゃないかしら。情報によれば男子全員が蜂起を起こしていたそうだから、残りの五十人の中にいるのは確実ね」

「じゃ、私達も出撃する？　ここにいてもただ臭いだけだし」

「そうね……ここにいたらなんだか妊娠しちゃいそう」

「妊娠って……あんたねぇ、そんなおかしなことを言わないで」

「でもこれでも処女よ？……まぁここにいると男子に強姦されそうになる危機感がたまらないんだけど」

「うわ、どんなドMなのよ……」

「あと拷問するのにも感じちゃうわ～」

「……あんた偏りが激しいわね。恐ろしい子……」

呆れながら少しあくびをする。

そんな事がパスの目に入ったのか、つかつかと歩いてきて、

『ズキュウウウウウン！』

そのフィルナの桃色の唇に熱烈なキスをした。

「あなた、キスはまだよね？」

「ああ……あああ！？」

「貴方のファーストキスは男性じゃないわ！　このパスよ！」

ファーストキスを奪われたショックからか、へたへたと地面に座

り込んでしまうフィルナ。
しかし、そのことを偶然にも見ていた男子や女子からは、「百合……あれが！？」「ああ、姉さまの初めてがぁん……」「お、俺……不覚にも…」といった発言が飛んで来、物凄い勢いで顔を真っ赤にした。
そんなフィルナに、パスは手を差し伸べると、

「ふふ、既成事実ですよ？」

と、ニコニコ顔で言い放った。
なんて凄まじい精神力なのだろう、この人にはかなわないとフィルナは思う。しかし、不覚にも『あれ？　嫌な感じがしない……』と思ってしまい、同時に憤激したが、そこでパスに手をとられて教室の外まで引きずられていった

「じゃ、いきましょうか」
「なんだか、先の見えないわ。はぁ……」

もはや溜め息をつくぐらいしか生徒会長は抵抗できなかった。そこが少し悲しい。
どうしてこんな女に唇を――思い出しただけでも、少し恥ずかしい感じがする。
でも、悪くはない。

（あれ？　私、百合の道に……？）

しかし、その疑問に回答するだけの猶予は無かった。
なぜなら――

「ああ、そうそうフィルナちゃん」

「ん、なに？」
「やりませんこと？」
「やらないわよ！？」
そういいながら、戦場に向かって歩き出した。
to be continued・・・

## スクールデイズ事変ａｃｔ５（後書き）

基本的に、名言のつぎに書いてある文章ってのは、その話で主に書かれている人物の心のぼやきです。

見ている人が少ない……でもいいんだ。これを見てくれている人が居るのなら、いくらお気に入り登録数が少なかろうと、関係ないのさ。

……でもそれはそれで落ち込むんだ。

## スクールデイズ事変ａｃｔ６

Ｔｈｅ ｋｅｙ ｔｏ ｒｅａｌｉｚｉｎｇ ａ ｄｒｅａｍ ｉｓ ｔｏ ｆｏｃｕｓ ｎｏｔ ｏｎ ｓｕｃｃｅｓｓ ｂｕｔ ｓｉｇｎｉｆｉｃａｎｃｅ － ａｎｄ ｔｈｅｎ ｅｖｅｎ ｔｈｅ ｓｍａｌｌ ｓｔｅｐｓ ａｎｄ ｌｉｔｔｌｅ ｖｉｃｔｏｒｉｅｓ ａｌｏｎｇ ｙｏｕｒ ｐａｔｈ ｗｉｌｌ ｔａｋｅ ｏｎ ｇｒｅａｔｅｒ ｍｅａｎｉｎｇ.

夢を実現するための鍵は、成功することではなく重要性に集中することである。

そうすればどんなに小さなステップや勝利でもより大きな意味を持つようになってくるであろう。

ｂｙ Ｏｐｒａｈ Ｗｉｎｆｒｅｙ

これ以上の抵抗はかなり難しくなって来ていた。

ただ、力任せに女子が男子を駆逐する――全く、シンプルな理由だ。

魔法と剣。どちらが優れているかと聞かれればこの世界の住人は間違いなく口をそろえて『魔法だ』と答えるだろう。それは反論するまでもなく正しいことなのだろう。

遠距離から攻撃し且つ広範囲にわたってダメージを負わせられるという事は、剣には出来ない芸当だ。しかも魔法にもいろいろ種類があるために戦況に応じて使い分けが容易だ。

対する剣は攻撃するためには接近しなくてはならない。相手が魔法が使えない一般兵だったならそのまま戦えるのだが、相手が魔法

使いだとするとどうなるだろうか。答えは想像しなくても簡単に分かる。
『接近する前に殺される』
だから剣士は魔法には勝てない。
仮に接近できたとしても攻撃できるかが怪しいものだ。相手の魔法使いも接近用の魔法は備えてあるはずだあから結局は一太刀も浴びせられないだろう。
しかし、それを補う役割が『魔法剣士』だ。
彼らの役割は『アンチ魔法使い』として存在している。魔法を使いながらも接近戦を兼ね備えた魔法剣士は正に良いとこ取りをしていると言って良いだろう。
しかも鍛えれば大規模魔法を使うことも可能だろうし、それこそ鬼神のごとき強さを発揮できるのだ。
しかし残念なことに魔法剣士の適正者はかなり少ないのが現状だ。それこそこの学院における男子の少なさを見れば分かるだろう。
だが戦場における強さは折り紙付きと保障は出来る。たとえ数が少なかろうが、エリートであることには代わりはないのだ。

「だから、どうなんだって……ツッコミを入れたいもんだ」
「は！？　なに？　どうしたの！？」
「気にするなよ。独り言だ」

そういいながら遠くの爆発を見る。
現刻？の時。いまだに戦争は続いていた。いや、既に戦争は終わって残党狩りが始まっていると考えて良いのかも知れない。
こんな『非』現実的な戦いが起こるなんて想像していなかった。
むしろ異世界召喚モノらしく、自分を勇者として召喚してくれた巫女やら何やらと冒険して魔王を倒す旅に出るとか、そんなものを想像していたばかりに、この境遇はあんまりだ、と何回思ったか数え切れない。

「人間、下手な妄想を抱いていると良いことにはならないって事だな。今後は気をつけるか……」
『そうですね。以後はそのようにしてもらいたいものですわ』

その声は、凛とした女の声。
瞬間、松下はその場を飛びのいた。
ちょうど退いたその時、元居た場所にクレーターが出来た。そのクレーターが指し示すのは敵が自分達を見つけた、ということだ。
「え！？　ちょ、なに……」
「あら、ノアちゃんじゃない。そんなに驚くことは無いんじゃない？」

その声がする方向。
そこに、蒼い髪を後ろに束ねた女がいた。その女は敵意を感じさせない笑顔でこちらを見ていた。
存在が分からなかった。
そんなバカなことがあるのか。自分に気づかれずに背後に立てるのだろうか？　しかし現に女は立っている。
その時、ノアが驚いたような口調で、「あ、貴方は……！？　そんな……」と口をあけていた。

「ノア、逃げるぞ」
「ああ……そんな！」
「ノア？……どうした？」

ノアが硬直したまま動かない。このままでは逃げることが出来なくなってしまう。このままノアを置いて逃げるか？　いや、そんなことは出来ない。

ここで逃げてしまえば自分自身を許すことが出来なくなってしまう。それは人間のとるべき選択肢ではない。少なくとも、彼を何とかして正常な状態の戻さなくては。

「しっかりしろって。おい！」

しかし、それには全く反応を示さない。

これ以上は無理、か。

しょうがない。ここは戦うしかないようだ。

（ヤバイな……全く隙がない。殺意を感じさせないあの笑顔のせいで心が読めん……！）

女の目を見、心を読もうとしたのだが、あっけなく全て封殺。

このままでは非常にマズイ。行動が読めない。

その状況に松下は焦っていたのだが……。

「あらあら、そんなに怯えなくてもいいわよ。大丈夫、私は貴方達を捕縛しに来ただけだから」

「ほう、捕まえにか？」

「ええ。出来れば穏便にしたいの。だから、ね？　おとなしく捕まりなさい」

その言葉は嫌に穏やかさと官能的なニュアンスを含み、何処か変な気分にさせる。そんな劣情を抱いてしまった自分自身を押さえ込みながら、真っ直ぐ女のほうを見た。

「だが断る、という選択肢はあるか？」

恐らくこの答えはＮＯだろう。しかし、敢えて聞く。

「だったら、私は貴方を沈黙させなきゃいけないわ。どう？　降参する？」
「いや――」
『僕は降参する』

――そう言ったのはノアだった。

「お前、何を言って――」
「僕はむざむざ死ぬ気にはなれない。そもそも相手が悪すぎるんだ。あの人には、僕は勝てない」
「……なんだと？」

ノアはそういってゆっくりと女のほうへ近づいていく。
どういうことなんだ。何故ノアが降参するんだ？
そんな疑問を払拭するかのごとくノアは、

「あの人、風紀委員長だよ」

仕方が無いじゃないか、と言わんばかりに、諦めた口調で言い放った。
そしてそのまま女のところまで走っていった。
裏切られたのか？
どうなんだ？　この状況は。

「そう。良い子ね」

そういって、近づいてきたノアを抱き寄せて――

「う……」

瞬間、糸が切れたようにノアの体が沈んだ。
その一瞬が全く見えなかったが、恐らくノアに当て身をして気絶させたのだろう。その気絶させた女は気失っているノアを抱きかかえ、そしてゆっくりと地面に横たわらせた。

「呑気なものね。何故そう易々と敵のほうへ投降するかしら。愚かしいにも程があるんじゃないかしらね」
「……あんた、結局何がしたい？　暴れたいのか」
「そうね。暴れたいわ」

まるで、雪女のような姿。
季節は既に夏だというのに、女の体の周りには冷気を帯び始めてきていた。

「私の名前は、『パス・クルーエル』。風紀委員の仕事を全うする！」

その声を認識すると同時に、いてつく氷のようなものが飛んできた。まるで花京院典明のエメラルド・スプラッシュのようだ――と考える暇もないほど性格に且つすばやく飛んできていた。
松下はそれを何とか見切り、サイドステップでかわすのと正に同時に第二波が飛んできた。さらにそれもギリギリで回避する。
それは美しいといったほうがしっくりくる。だが、その美しさの裏にはかなりの殺傷力が潜んでいることは間違いはない。バラにも棘がある――という奴だ。
そこで松下は考える。どうすれば奴の攻撃を止められるのか、と。
いや、女――パスの攻撃はこれだけではないはずだ。学院最強といわれる実力、このほかにもさまざまな魔法を駆使してくるはず。

「俺ならどうする？　この状況……」

クレイモアを抜き、相手の間合いを見極める。
ここからパスまでの距離はどのくらいだろうか……。約十メートルといったところか。近くもあって遠くもある。
剣で戦うのは不利なのかもしれない。第一相手は魔法科の秀才だ。そう易々と接近させてはくれまい。

「貴方は逃げるのですか。ま、それは妥当な判断でしょうね。『凍てつく風に乗り、敵を蹴散らせ！　ブリザド！』」
「ちい…無茶なことをなさる姫様だ！」

パスの目の前に小さく、透明な氷の粒が現れ、それが凍てつくような風とともに飛んでくる。
その攻撃を難なくかわすことは出来るのだが、このままではこちらの体力が尽きるのも時間の問題だろう。早急に手を打たなければこちらが殺される。
これ以上、退く訳には行かないのだ。
松下はこんな状況でさえこんな冷静な事を思えることに、少し驚きつつも、相手を屈服させる手立てを考えていた。

（この状況で、一体どんな風にすれば逃げられる？……いや、逃がさないだろう。逃がしたとしても次は更に大編隊で襲ってくる。それは避けたい。つまりここで彼女を再起不能にしなけりゃならない。しかしそれは俺に出来るのだろうか……あの雪女の実力は確実に俺より上のはずだからな…。あのブリザドでさえかなりの威力なのは見れば分かる。しかもアレ以上の殺傷力を持つ魔法を彼女が会得していても不思議はない）

考えれば考えるほど自らが如何に不利な状況に追い込まれている

のかが理解できる。それが理解したくない情報であっても、それが今の状況を打破できる数少ない情報だったならば、受け入れるしかない。

この状況下で『逃げる』という選択肢は、考えても全く出てきそうに無かった。

to be continued・・・

## スクールデイズ事変ａｃｔ７

Ｔｈｅ ｐｒｏｐｅｒ ｏｆｆｉｃｅ ｏｆ ａ ｆｒｉｅｎｄ ｉｓ ｔｏ ｓｉｄｅ ｗｉｔｈ ｙｏｕ ｗｈｅｎ ｙｏｕ ａｒｅ ｉｎ ｔｈｅ ｗｒｏｎｇ． Ｎｅａｒｌｙ ａｎｙｂｏｄｙ ｗｉｌｌ ｓｉｄｅ ｗｉｔｈ ｙｏｕ ｗｈｅｎ ｙｏｕ ａｒｅ ｉｎ ｔｈｅ ｒｉｇｈｔ．．

友人の務めとは間違っているときでも味方するということである。あなたが正しいときにはほとんどの者があなたの味方になるだろう・・・。

ｂｙ Ｍａｒｋ Ｔｗａｉｎ

日はまだ暮れてくれそうには無かった。

一向に涼しくなる気配のないこの戦場に、『涼しくなれ』なんていう戯言は通じてくれそうに無い。そう、そんな戯言を聞くわけが無い。

本音を言えば、そんな戯言は通じて欲しくは無い。なぜなら、後ろの方からドンドン冷気を親切にも投げて寄こしてくれる人がいたからだ。

「どんどん逃げれば次第に体力が少なくなるわよ？　『覗き魔』くん」

冗談ではない。何故そんな不名誉極まりない名前で呼ばれる必要があるのだ。そんな不名誉な仇名なぞ、矢島にでもくれてやって欲

しいものだ。
しかし、そんな無駄なことを聞く時間は無い。
下手をすれば死ぬ、それが今の状態だ。
一応相手も相手で殺すことはしないだろうが、それでも一撃のダメージは大きい。それこそ脇腹に穴がドンと空く程度には。

「ええい、なんて威力だ……風紀委員長の攻撃力は化け物か！？」
「化け物なんて失礼しちゃうわね。これでも女の子なのに……」
「知るかっての……」

サイドステップで後ろからの攻撃をかわす。
どうやら彼女としては生け捕りとしてやりたいらしく、松下に対しての確実なダメージを与えられるような弾道コースを避けているようだった。
それはそれでありがたいが――このまま行けば、先ほどもパスが言ったように松下自身の持久力が尽き果てるだろう。いや、これは彼女がそれを狙っていると考えていいのか。
とにかく、今はこのままではいけない、という事実が松下の脳裏を掠めていた。

「やれやれ、そろそろ反撃したいところだがっ！？」

松下の鼻の正に数センチの距離で横切ってゆく氷。弾丸に見えるそれは花京院のハイエロファントの感じがして複雑な気持ちになる。承太郎やＤＩＯもこんな感じだったのだろうか。
くだらないことでまた現実逃避をしてしまった。
とにかく、ここで打開策を提示し、それを実行しなければならない。

「逃げるってのは……きつい…な！　『荒れる炎よ…ファイア』！」
松下の放った炎は真っ直ぐパスに直撃する弾道コース。
一応手加減はしてあるが、これは様子見のモノだ。
「もう、私に魔法なんて……笑っちゃうわね」
そういいながらパスは瞬間的に氷のバリアをつくり、その炎を回避した。残るはすこし溶けた氷の盾のみ。
もはや笑うしかない。
このまま捕まるのか。
捕まったら何をされるか。
逃げなきゃ。
そんな生き恥を晒すぐらいなら抵抗をしなくては。
「くそッ…！」
松下は自己の走る能力を上げる魔法を使いつつ、彼女の攻撃から逃げた。
しかし、それすら半分絶望を感じながらの逃亡だ。そんな緊張した状態では、そう持久力が高かろうが関係なく力が抜けていく。
一歩、また一歩と彼女が徐々に距離をつめる。
そしてまた呪文の詠唱を開始する。
『凍てつく風に乗り、敵を蹴散らせ！　ブリザド！』
これ以上、退却は出来ない。
「鬱陶しい！　『雷撃よ、空気を振るわせろ！　サンダー』！」

言った瞬間。
迫ってくる氷に雷が衝突し、砕けた。

「へえ、面白いことしてくれるじゃないの。どう？　お姉さんと一回、やってみる？」
「その、返事は…また今度にさせて、もら、おう、か……」

あまり体力は残ってはいない。しかし彼女が逃がしてくれるはずはない。彼女は風紀委員長としての責務を全うするまで追い続けるだろう。
勝機も賞賛も、それを考えるだけの脳を動かす力も残りわずかだ。これ以上、戦いを続行できるのかすら怪しい。
彼女の能力が更にどれほどのものか、まだまだ判別出来はしない。今見せている力はほんの、そう、ホンの一端でしかなかったのなら。
これ以上の戦闘は、命を落とすことになりかねない。
しかし。それは偶然だったのだろうか。

（……なら、避けることが出来ないほどの魔法は？）

考えろ。考え尽くせ。
そうだ、思い出せば、何故こうも他の生徒が戦っていたとき爆発が乱発していたのだ？
ただのホロコーストか？　いや、違う。それが敵を倒せる攻撃だったからだ。
そうか、爆発系なら彼女を足止めできる。再起不能にはならなくても、それで逃げられるのなら――試す価値はある。

「どうしたの？　辛いんでしょ？　苦しいんでしょ？　やめなさい。無駄な抵抗なんて。ただ見てるこっちが辛いの。だから貴方が倒れる前に投降して」

「……断、る」
「……もう、本当、貴方って変な人ね。こんな圧倒的な戦力差で諦めないなんて、よほどのお馬鹿か天才の領域よ。ほら、今だってその抑えてる脇腹。一発、私のが入ったんでしょ？」

松下の右手は既に赤黒い血で染まっている。そう、一発の彼女の氷の弾丸が脇腹に入り、貫通していた。ゆっくりとその血は松下の手をすり抜け、ポタポタと地面に落ちていった。
その痛みは今までに感じたことのない、暑さを伴うような激しい痛みだった。傷口で虫が自分の肉体を小さくちぎっては食べられるような、どこか気の遠くなるような痛みだった。
松下はその痛みによる苦痛の表情を抑えながら、クレイモアを杖代わりにして何とか立ち上がった。その動くたびに赤黒い血が手からすり抜けていく。

「その傷はかなり痛そう……」
「あ、たり…まえだ。痛くて、泣きそうな、ほどに」
「でも、これで貴方を安全に捕獲できるって訳ね。フィルナちゃんはどのくらい喜ぶかしら？」
「確か生徒、会…も参加しているんだった、な……」
「ええそうよ。だってこんな事態は異例よ？　覗きで男子女子間の戦争なんて開校以来の大事件らしいし。あ、でも、貴重なデータは採取できたらしいんだけど」

恐らくデータというのは男子と女子の戦闘力のことについてなのだろうが、そこまではパスは言及しなかった。
しかし、それはどうでもいいとつぶやきながら松下は、
「……そうか。なら、アンタに聞いて、良いか？　くだらない、こと、だが」

「ええ、構わないけど？」
「生徒会の、く……『矢島』について、なんだが……」
「矢島……ああ、あの人なら、もうすぐ対面できるはずよ。彼については直接対話したら？」
「ああ、感謝するよ……『凄まじい業火よ、轟け。イオ』！」

瞬間。
目の前が赤黒い火の玉が現れたかと思えば一瞬のうちに外へ外へと膨張し、一気に。

炸裂した。

「これは……」

その一瞬。
一気にまばゆい光が辺りを照らし、そして。爆発した。
その爆風は凄まじく、一気に数メートルほど松下の体がぶっ飛び、そのまま地面に伏せた。
だがこれは相手とて同じこと。松下より近い位置で魔法が炸裂したのだから松下と同等或いはそれ以上のダメージを追っている筈だ。
そう。
ダメージを追っているはずだ。

しかし、雲が晴れたその先には――

「大丈夫でしたか？　パス先輩」

なんと、矢島がいた――
しかもパスを安全な場所に連れて行っている。
なぜだ？

何故彼が此処にいる！？
訳が分からなかった。何故彼が此処にいてパスを助けているのか。
「なん、で……？」
かすれる声でその言葉を腹から捻りだした。それが精一杯だった。息も絶え絶えになり、松下の体力の限界は近い。
あれほど逃げ回り、腹に穴が空いた状態では今の意識を失わずにいられるとは到底思えない。
しかし、ここで意識を手放したりすれば俺の今見ていることが幻想なのかどうか、思い返すことはできない、という思いが松下の意識をつなぎとめていた。
「矢島は…俺達の側では、なかった、のか？」
「厳密に言えば、そういう事になる」
「どう、して？　なぜ……」
「今回のことはもともと生徒会の思惑だったのさ。この学院が所属している『エンプラス』からの要請で動いていたんだ」
『そして、私達はそれを実行せざるを得なかった』
左から声がした。
そこには、なぜかスク水を着た、フィルナがいた。
「私達は、国側の要請――学院にいる『魔法使い』と『魔法剣士』の力を国は知りたがった。それこそ、最近戦争がないから私達も怪しんだのだけど。でも結局は受けたわ。生徒を傷つけてまで、ね」
それでは、俺達はただ生徒会の手の平の上で転がされていただけなのか？　この脇腹にある傷でさえ、それの結果生じた、ただ『しようがない』で一括りされるだけの代物なのか？

俺達は、ただ戦わされただけなのか？　そうか――
あの時、何故いきなり『オペレーション・スク水・デイズ』なんてふざけた作戦を提唱してきた理由がそれだったのか……。
それが全て彼らの思惑通りだというのか？　それが俺達を傷つけてまでやることなのか――

「もっとも、僕だってそんな事をするのは気が引けたさ。でも、やらなくちゃいけない。これは正義なんだ」
「正義……？」
「そう。君達の戦闘力を計測し、それを管理する。そのことは皆のことを導く、重要なことなんだ。これは軍隊でもそう。選び抜かれたエリートは一つの部隊に集められ、それが重要な任務につく。例えば『ＣＩＡ』や『ＳＡＳ』、『スペツナズ』や『ＳＷＡＴ』に代表されるね」
「つまり……なんだ？」
「簡単に言えば、国はエリート部隊を作りたがってるってことさ。それこそ戦場の英雄を」

なんて、愚かなんだ。
英雄なんて、結局は人殺しじゃないか。
それが欲しい？　馬鹿馬鹿しい。

「私達は、この世のあり方を変えることが出来るの。ある意味、英雄は勇者より力を持っているわ。国民の支持と栄光を」
「だから僕達は協力した。少しやり方は卑劣だけど、それで世界が変われるなら――」

こんなはずじゃなかった。
俺は、一体何をしているんだ。
こんなふざけた考えを持っている奴をぶちのめしたくはないのか。

その考えを一発殴って変えさせられないのか。
動けよ。動いてくれよ。この役立たずの体を、動かさなければ――
こんな奴を、ふざけた奴を――
こんな――世界なんて――
こんな世界――もとの世界よりダメじゃないか……。
なんで――神は、こんな世界に――
よりによって、こんな世界に――

そこで、松下の意識は完全に潰えた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 目覚め

If you limit your choices only to what seems possible or reasonable, you disconnect yourself from what you truly want. And all that is left is a compromise.

もし可能性のあるものや妥当なものだけを選択するならば、あなたが本当に欲するものは手に入れることができない。

残るのは妥協だけだ。

by Robert Fritz

俺の目覚めというのはかなり気分が悪い。

いや、自分に限らずとも、学校に行くために毎朝早く起きるのは誰しも気分が悪いものだろう。それでこそ良い夢を見ていたというのに、そのおかげで起きざるを得なかった時は物凄く消失感が体に圧し掛かる。

悲しいかな、それが自分のなすべきことなら、もっと鬱になる。

ああ、できるなら覚めたくはなかった。

☆

ツン、と鼻にくる消毒液の匂い。
松下はそれらの異様で独特なものを感じて目覚めた。
何故此処にいるのだろう、そんな事をいまだに覚めぬぼんやりとした頭の中で思った。
此処は保健室だった。
辺りを見回してみても誰もいない。ガラン…としたゴーストタウンのようだった。先生はいないか、と首を伸ばして奥の部屋を覗こうとしても、やはりほかのベッドやらカーテンやらが邪魔をして奥を見させてくれそうにはない。
ただ、人間が消失してしまったかのような静けさがそこにあった。

「全く…今は何時、だ？」

魔法を展開して表示する。そこには、まだまだ昼真っ盛りの？‐？の時間だ。いわば飯時。
腹が少し減ったな。なにかあるか…？　いや、ない…か。
セミのようなうるさい昆虫がこの世界にいないのは、いささか風流に欠ける。いくら五月蝿くて邪魔であっても、そこにあるはずのものがないような感じ。消失感というかなんというか……。
そんな消失感と風流を楽しめないにしても、この静けさは何か嫌な感じがする。それこそ……この前のような戦いのときのようなクソッタレな気分に。

「そういや、体はすこぶる快適だな…？　脇腹の穴も無いようだし……魔法か何かで治療したのか？」

見れば、そこにあったはずの脇腹の傷――穴が綺麗サッパリ消えうせていて、ちょっとだけびっくりした。ここの魔法はそこまでの

精度なのか。なら、いつか本でも読んで使わせてもらうとしよう。
と、そこへガラッと扉がスライドする音が聞こえた。

「起きていたのですか。良かった」
「アナスタシア？　何故君が此処に？」

この保健室の扉を開けたのは、かなりの美人。それこそ、校内人気ランキングでは一位二位を争える程度の美しさ。切れ長の青い目。髪は美しいにも程があるほどの金髪、長い髪を後ろに束ねて。
それが、『コゼット・アナスタシア』という女性だ。
松下的には可愛いとか、凛々しいというような印象はなく、むしろかっこいい。
騎士を連想させる動作や言葉の丁寧さ。それが彼女の品格を更に高めているといってもいいのではないか。
そのコゼットが、何故この保健室に来たのだろう…？
そんな疑問を感じ取ったのか、コゼットは、

「私は貴方のお見舞いに来ました。まあ、その様子だと十分良くはなったようですね。……良かった」
「ふ……ん。見舞いに、か。そりゃすまないな。あんたの時間を割かせてまで。感謝する」
「その感謝は受け取っておきましょう。では、此処に座らせていただきます」

コゼットはそういうと松下のベッドの傍にあるイスに座った。

「そういや、あの後はどうなった？　戦後処理は？」

松下の質問にたいし、コゼットは少しうつむいて考えるような仕草をし、

「そのことについては、後ほど生徒会室に行かれたほうが分かるのではないでしょうか。少なくとも、私の口からは何ともいう事は出来ません。状況が状況ですから」
「……分かった。深く立ち入らないことにする。じゃ、次。俺が此処に来てから何日が経っている？」
「三日です。三日間、貴方は此処にいました。ずっとベッドで寝ていましたよ」
「三日？　そんなに俺は寝てたのか……」
「ああ、多分貴方の傷の治療の為に人為的に眠らされたのではないかと思います」

そういうことならしょうがない。
しかし、松下が現在感じている疑問はもう一つあった。そう、現在進行形で進んでいるあることが。
だが、それを口に出してよいものだろうか？　考えてみれば、物凄く恥ずかしいことなのだが……。

「で、なんで俺は素っ裸なわけ？」

すると、その疑問に、それこそコゼットはそのことに気づいたらしく。
そしてもの凄く顔を真っ赤にして、

「……」

見事に押し黙ってしまった。
そして真っ赤な顔をしながら、松下のある一点を凝視する。
それは男子の下半身にあって……しかも『それ』は朝立ちならぬ昼立ちもといジョジョ立ちのような真に立派な――

んで、松下もその視線に気づき――

「……な！？　なんですとおおおおおお！？」

「ああ……なんて、禍々しい……い、いや、逞しいといえば……あわわわわ！」

「だーー！　何か隠すものを！　何で毛布がないんだよおおおおおお！」

「そ、そんな大きさ……幼き頃に見た父より……遥かに……」

「感心するんじゃないッ！　そして凝視するんじゃない！　は、はやく隠すものを……！」

「そんな大きさが普通なのか……いや、しかし…彼が特別なだけかも…」

「冷静になってんじゃねーよ！」

☆

十分後。

「なんてこったい……」

なんとか毛布を見つけて隠すことに成功したのだが、なぜか服がないのには困った。洗濯にでもだしているのだろうか。

「ま、まったく…驚かさないでください！」

「いや、こっちだってもの凄く恥ずかしかったのだが……」

「知りません！」

そんな風に言いながら再び顔を赤く染めるコゼット。

その姿は騎士の恥じらいを垣間見たようで、とっても初々しかっ

た。これがギャップ萌えとか言われる類だろうか。そうだとしたらコゼットのギャップを見れたことはとても珍しいのだろうか。
しかしこれ以上裸になるのは危険と思い、松下はコゼットに服を持ってきてもらうことにした。

――更に十分後――

コゼットは男子塔の、更に松下の部屋から予備の服を持って走って保健室に入った。
なんだか彼女に世話になりっぱなしだ。こんなことをしてくれるとは、なんと騎士道精神あふれたお嬢さんなのだろう。こんな、そこまで顔の良くない、更に言えば性格が黒い松下の世話をする必要はないのに。
しかしコゼットははそんな事を気にするそぶりは全く見せない。ただ純真な親切心で動いているのだろう。そこに感動する。
……映画化決定！　とかにはならないだろうが。

「これが予備の服です。それからこれを」

コゼットは服とともに、なにやら変な封筒を手渡してきた。
一体何なんだろうか。脅迫状だろうか。
『コゼット嬢にいかがわしいことをしたら殺す』なんて血で掻かれた手紙が入っていたとしたら嫌だ。むしろ怖い。それに第一、松下にそんな度胸はないというのに。
そんな恐怖と戦いながら封筒ののりしろの部分をビリビリと破く。
しかし、松下の思いとは裏腹に、数枚の写真のようなものと、なにやら手紙が入っているようだった。

『私はジャン・ルイだ。この前撮った、一番レアな写真を数枚、君に送る。

これはコゼット・アナスタシア嬢の水着写真だ。くれぐれも彼女に見つからないようにしてくれ……と書きつつも、この封筒をコゼット嬢に渡したのはおかしいか？

とにかく、今回の君の事はよく聞いている。そしてこの学校と国と生徒会の密約も。密約の件に関しては一切の証拠はないが、俺はやはり矢島が一枚噛んでいるに違いないと思っている。

では全快したら、また会おう。そして、いつか私の故郷であるクルド国へ連れてってやろう。ああ、そういえばコゼット嬢も同郷だったか。

最後に、私達は君に再びあえることを期待している。　――ジャン・ルイ――』

その手紙の奥には、これまた数枚の、すべてコゼットの姿が収められた写真が。

（やってくれるじゃないか、ジャン・ルイ）

「ん？　どうしたんですか？」

「ああ、い、いや。別になにも無いぞ」

「うろたえているのはミエミエです。その袋の中身は何だったのですか……まさか、女性のいかがわしい写真なんて……」

なんて勘のいい娘だ。そんなピンポイントに、的確に写真の内容を予言するとは。

しかもこの写真に写っているのが自分自身だったなんてことになると、下手すれば数週間はこの保健室に居候するハメになるだろう。

それを避けるため、なんとか話題を逸らす。

「封筒なんてどうでもいい。今は、生徒会室に行く」

よっこらせ、と爺臭い言い回しでベッドを降りる。
その松下の行動にコゼットは、

「なら、私もついていこう。貴方だけで道中、何かと不便だろう？」
「いや、一人で行ける。あんたは社交部の部活があるんだろ？　そっちを優先すべきだ」
「……だったら、私はその途中までついていく、というのはだめか？」

その懇願するような目に、松下は折れざるを得なかったことは、仕方の無いことだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

# 目覚め（後書き）

## 考えることへの執着

Ｅｘｐｅｒｉｅｎｃｅ ｉｓ ｎｏｔ ｗｈａｔ ｈａｐｐｅｎｓ ｔｏ ｙｏｕ．
Ｉｔ ｉｓ ｗｈａｔ ｙｏｕ ｄｏ ｗｉｔｈ ｗｈａｔ ｈａｐｐｅｎｓ ｔｏ ｙｏｕ．

『経験』とは、あなたに降りかかってくることではない。
あなたに降りかかってくることに対して、あなたが対処することが、『経験』である。

ｂｙ Ａｌｄｏｕｓ Ｌ． Ｈｕｘｌｅｙ

「貴様……最初からデータ収集が目的だったのか？」
「ええ。そうよ」

場所は変わって、生徒会室。
そこでは、正に一触即発の空気が流れていた。
理由は簡単だった。松下は憤激していたのだ。
先の戦いは生徒会によって仕組まれていたこと、それによって何人もの犠牲者（死んでいない）をだしてしまったこと。そして何より、矢島が裏切っていたことだ。
松下は裏切られるまで矢島のことを信頼していた。その信頼を、何故こうもあっさり裏切ってしまったのかが不思議でならないのだ。
そして分かっていた。
この目の前にいる生徒会長、フィルナが知っていると。

「そんなことの為に？　お前は生徒の事を考えてその決断をしたのか？　どうなんだ！」
「そう睨まないで。私だって良心が痛みながらの決断だったのよ。そう、生徒会長である私が生徒のことを想っての決断なの」
「それにしては、お前は半裸状態で男子生徒を攻撃していたようだが？」
「そ、それは……」
「それに、だ」

松下がそこでフィルナの言葉をさえぎる。

「本当に生徒のことを考えているというのならば、たとえ国からの指示だったとしてもそんなことは許可しないはずだ。もし仮に実行に移すとしても、男子に対しての何らかのアクションがあってもいいはずじゃないか？　だが、お前さんや矢島、ここに所属している生徒会の奴らはそんな事をしなかった。……なにか国から交換条件でも持ちかけられたか？」

本当に生徒のことを想っているのなら、大規模な戦闘なんて行わせないはず。
そんな事をしなくても、生徒一人ひとりの個別の能力を測れば良かったのではないのか？
しかし、フィルナはそうはしなかった。
先の戦いを実行しないのであれば、国からの、何かしら、不利益なことがあるに違いない。逆に考えれば、実行することで彼女達に多大なメリットがあるという事だ。
そして、松下の問いにフィルナはこう答えた。

「鋭いとこまで推測できるのね。そう、確かに私達は国から条件を

突きつけられた。こんなくだらないことをね。
『実行するのであれば、君達の卒業後の出世コースは保障する。だが、実行しないのであれば、君達を社会的に抹殺する。どちらが最良の選択か、考えずとも分かるだろう』
……なんて、脅し半分に私達に迫ってきた。私だって貴族、私のせいで家名に泥をつけるのは出来ない。だから私は実行したまでよ」
「だったら、なぜ戦闘させた？」
「分からない？　国は奇襲、統率力、その場に応じた状況判断での行動……それらを見たかった。それの為には、このような行動をするほか無かったのよ」

愚かしい。
それでは、この国『エンプラス』が近いうちに戦争すると言わんばかりの行動ではないか。
そんな、愚かな行動を使用というのか……
いや、それをするからこそ、この学院は存在している。
考えてみれば、思い返してみれば、、学院は戦闘教育をしている。しかも剣技系や、魔法系に分かれているくらいだ。
簡単に言えば、このままだと戦争になる。
愚かな殺し合いが、起こる。

「矢島君は反対していたわ。そんな事をすべきではないって。でもね、私だって……やりたくは無かったのよ……。でも、さっきも言ったように私は貴族…いいえ。ここに所属している人間は矢島君を除いて全員が貴族の出。その要求を飲む以外に道はなかったのよ」
「だからといって、その行動は許されるわけではないだろう。現に俺だって脇腹に穴が空いた。血もいっぱい出た。痛みもあった。それをお前たちは強要したんだぞ。今頃悔いても、懺悔しても……俺は許すわけにはいかない。お前達にどんな事情があろうとも、苦し

んだのは俺達男子生徒だ。それは変わらない」

それもそうね、とフィルナは呟く。

松下だって、今頃になって謝罪をしてきたりしても許す気にはなれない。無論、矢島であってもだ。

彼はこの行動が『正義』だといった。だがそれは一体なんだ？

正義とはなんだ？　自分の綺麗ごとか？　自分が一番正しいと思って、その価値観を他人に押し付けることか？

ならば『悪』とはなんだ？　俺達のような『絶対的な価値観』から追われる、相反することか？

戦いが正義なのか？　国の存在が、この生徒会の存在が『絶対的な価値観』だというのか？

いや、『正義』や『悪』なんてものは誰にも定義されない。

なぜなら。

『個人』が正義だから。みんな、自分が『悪』だとは思ってもいないから。

「誰が正しいなんていうことは出来ない。戦争に備えるという国の行動は正しいようにも思えるし、お前達の行動も正しいんだろう。だから、俺はこれ以上は何もいえない」

「……ええ。分かってくれてありがとう」

しかし松下はそこで首を振った。

「ただし、俺は俺の信頼を裏切ったお前たち生徒会を許すことはないと思っておけ。

『この世で最も大切な事は『信頼』であるなら、

最も忌むべき事は『侮辱』する事』

俺はそう思っている。お前達は俺の信頼を裏切り、侮辱した。そのことに関しては俺は命を賭ける。殺人も神は許してくれると思っ

ている」
「つまり、次『侮辱』をしたら『殺す』……」
「いや、俺はお前らとは決別する」

それは、間違いなく松下の本心だった。
決別する。これは、松下の大きな決断を表わしていた。

『俺はこの学校を自主退学したいと考えている』

その言葉を聞いた瞬間、フィルナは驚いた形相を浮かべた。

「それって……学校を辞めるってことでいいのよね？」
「ああ。そうだ」
「なぜ？　理由はなんなの？」
「……俺はお前達についていくよりは、世界を見たい。こんな世界であっても、どこかに俺を必要とする人がいるはずだ。それが俺にとっての『正義』だ」

そしてもう一つ。
決して口では語らない、松下の心の奥底にある理由。
『戦争で人の駒となって働くのは嫌だ』
『異世界と元の世界について研究したい。その為の資料が学院にない』
これがもっともな理由だった。
くだらない、臆病者と罵られても構わない。自分自身の思う道を歩いていきたい。
そんな理由だった。

「でもそんな理由じゃ、退学には……」
「表向きは今回の覗き事件の首謀者として責任を取った、としてな

らいける筈だ。学院側だって、表沙汰にはしたくは無いはずだからな」
「……本当に、後悔しない？」
「しない」
「後悔、すると思う。今なら引き返せる」
「しない」
「コゼットのことはどうするの？　彼女が別の男と付き合うかも知れないわよ？」
「……アナスタシアについては、俺は関係ないだろう。付き合っている訳でもないんだから。男と付き合うにしても、それは彼女自身の選択だ。俺がとやかく言える義理じゃあない」

しかし、コゼットの存在が松下の心を大きく陣取っているのは本当だった。
仮にでも、彼女が別の男と抱かれているのを考えただけでも鬱になる。でも。
それが彼女の選択ならば。
喜んでそれを祝福しよう。
彼女が幸せであれば、それでいい。

「……俺は、いつも一人だった。だから、これからも一人で生きていく」
「……了承したわ。貴方の『正義』を信用しましょう。では、今日限りで、貴方はこの『エンプラス特殊学院』から追放します」
はっきりと、大きくいった。
その目には、涙こそ無かったが、悲嘆の表情だけは分かった。
「生徒に迷惑を掛けないよう、今日の夜にでも出発しなさい。荷物はこちらで準備させてもらうわ。それと」

不意に、フィルナは机から一枚の羊皮紙をを取り出した。
「ここに、貴方の個人データが記入された紙があるわ。今までの功績、学籍が全てそこに入っている」
その紙を受け取った。
そこには、松下の今までの個人データが、今までの全ての情報が書かれていた。
これを、どうすればいいのか。
「本当に出る気があるなら、それを破り捨てなさい。それで、本当に貴方はこの学院から追放される」
「……フフ、最初からだせよ」
そういって松下は腕に力を込めて……
ビリィ！
真っ二つに破った。
そして、それを幾度となく何度も何度も破ってしまった。
「これが、俺の覚悟。これで終わりだ」
そういった松下は、酷く悲しそうだった。
☆
松下は、フィルナに向かって最後にこういった。
「俺が出て行ったら、俺の部屋に一冊のノートがある。それを保管

しておいてくれ」
「？　なんで？」
「そこに、俺にとって大事なことが書かれている。俺が纏めた、世界と異世界についてのレポートだ。頼んだぞ」

to be continued・・・

## 考えることへの執着（後書き）

正直、プロットどおりに進むとはいえ、学校を辞めるとか過去の自分は何を考えていたんだ。

……ま、別にいいか。

**Anthrax**

If a man will begin with certainties, he shall end in doubts; but if he will be content to begin with doubts he shall end in certainties.

もし確信を持って何かを始めたのなら、きっと疑惑を持って終わるに違いない。

しかし、疑ってかかって何かを始めたのなら、きっと確信を持って終わるだろう。

by Sir Francis Bacon

これで、楽しかった学院生活は終わりを告げる。

これからは、全て一人で生きてゆく。

今までの思い出を胸に秘めつつ、青年は重たそうな荷物を軽々と担ぐ。

「……やれやれ、だ」

その悲しそうな声は、無常にも暗い、夜の空気を震わせた。

一人で生きるという事は自立することだ。人は誰かの助けなしに生きていけない、というが、実際は違う。人は偽善で助けているだけ。みんな一人で生きてる。

だから、青年は決めた。

この世界から脱出する方法を探す。もしそんなことが出来ないならば、仕方がないのだが……。

しかしこの松下の行動が、歴史に影響を与えるのだが……それは、まだ彼自身さえ気づいてはいない。

☆

翌日。

今はもぬけの殻になった松下の部屋に、一人の美少女がいた。

フィルナ・ブランフォード。

現職生徒会役員で学院を治める会長兼理事長。

その彼女の髪型はドリルを思わせるようだ。顔立ちは整っており、それこそ美人とは彼女のことだろう。

そのフィルナが、なぜかこの誰もいない部屋にいる。

既に主が消えた、この部屋に。

不意に、フィルナは机の上においてある一冊のノートを手に取った。

「これね……」

そのノートを、ジッと眺めた。

そのノートはなんの変哲もない、授業に使うただのノートだ。しかし、そこそこ使い古された感じがある。

そこで、フィルナは疑問に思った。

なぜ松下はこのノートを保管して欲しいといったのか？

（なぜ？　なぜ彼はここを去る必要が？）

しかし、そこでフィルナは考えることをやめた。
そして無心に、そのノートを開いてから――目を疑った。
（なによこれ……次元の超越？　重力？　召喚……一体なにを…彼は研究していたというの！？）
びっしりと文字と図で埋め尽くされたノート。それについての考察。
曰く、次元を超えることは可能か。
曰く、それは既存の魔法では可能か。
曰く、それを行った際の魔力消費量はいくらか。
理解が出来なかった。少なくとも、これは一介の青年がたどり着けるレベルのレポートではなかったからだ。
この世界には無い、いろいろな概念がびっしりと書き込まれ、それをどのように理解したらいいのか、という風な書き込みもあった。
フィルナには理解できない。
重力とはなにか。
次元とはなんなのか。
そして、松下が何をしたかったのか――それは、一番最初のページに記してあった。
（でも、やっぱり分からない）
何かをすっぱり諦めたように、そのことを頭から追い出した。
「私はこれを保管することが頼まれたこと。これ以上の詮索は必要はないわ」
そう呟くと、そのノートを脇に抱えてそそくさと部屋を出る。
ドアを開けたその先に。

そこにはコゼット・アナスタシアの姿があった。
少しその意外な人物に驚いてしまったが、そこは生徒会長。少しの動揺も見せずにコゼットを見る。
「あら、コゼットさん。どうしたの？　ここは男子寮よ？」
するとコゼットは不思議そうに顔をしかめ、
「では聞きます。なぜ貴方は男子寮であるここで、しかも松下殿の部屋で何をしていたのですか？」
「答える必要はあるかしら？　今、答えなくてもいずれ分かることよ」
「そうですか……？　では、その脇に抱えているノートは？」
「……これは、頼まれたのよ」
「誰にですか？」
フィルナは少し言葉に詰まった。
これは説明すべきだろうか――いや、説明したらしたでどうにもならないだろう。
ここは、適当にはぐらかすべきか、それとも本当のことを言うべきだろうか？
そこで少し考え、
「無論、松下からです。もういいですか？　私はあまり時間は無くて忙しいのですから」
そういって適当にはぐらかしつつも、松下が出て行った、とは言わなかった。
言ってしまったらすぐにでも追いかけるのだろう、それは避けなければならない。

最低でも、松下が何処か遠く――そう、一日では追いつけない程度に離れた所で、そこで松下がいなくなったと公表すべきだ――と、フィルナは考えていた。
しかし、それを疑うようにコゼットは鋭い眼光でフィルナを見つめて、
「では、なぜ今に松下殿がいないのでしょうか。普通、部屋に立ち入るなら本人が同伴しているのが普通ではないんですか？」
そこで初めてフィルナは自らの過失を認識した。
ああ、なぜこの質問が出ることを予想できなかったのだろう、かなり危機的状況であると、彼女の心が警鐘を鳴らしていた。
ではここでどう乗り切るべきだろうか。
このまま真実をありもままに喋るのが最善だろうか――そこまで考えた時、見計らった様にコゼットが追撃を掛ける。
「貴方はなにか私に隠し事をしていないか？」
「し、していない！」
「ではなぜうろたえるのですか！　貴方に非が無ければそのような曖昧な返答はしないはずだ！　答えてください！　何があったのですか？」
既に質問は一方的なものになっていた。
しかもコゼットは敬語ではなく、騎士のような鋭い口調になっていた。
怖い。
フィルナは初めて、親以外の人に対して思ってしまっていた。
「わ、私は――」

そこで、フィルナはその真っ直ぐな眼差しに屈してしまっていた。

☆

「そんな……ことが……」

案の上、コゼットは物凄いショックを受けているらしかった。
フィルナ自身、コゼットに同情した。松下はどうとも思っていなかったようだが、同性ならわかる、ある感情をコゼットに感じたからだ。
その感情は、人間なら皆が感じたことのある感情。
そしてその感情で人は生まれてきた。
彼自身は鈍感で――というよりも、それについては完全に放棄していた為、コゼットの心のうちに気づくことは出来なかったようだが。

「これは事実よ。彼は既に、この学院内にはいない」

それはいう事も辛く感じた。
胸がちくちくと痛い。まるで針に刺されているかのような、そんな感覚。

「私は……どうすればよいのだ…？　せっかく仲良くなれたのに……」

そんな事を呟くコゼットに、フィルナはこう告げた。
それはどういうことかはしらない。だが彼女はただ無心で自分の

脇に挟んであるノートをコゼットの前に差し出した。
「これは松下のノートよ。なにが書かれているか、一度読んでみなさい」
「え、ああ……」
「一番最初。大体、何が書かれているかサッパリ分からないけど、彼のやろうとしていることが書いてあるわ」

その一番最初のページには、こう書いてあった。

『なぜ俺と矢島はこの世界に飛ばされてしまったのだろうか。
俺達はあのままでよかったのに。
人と人の出会いは重力であり、出会うべくして出会っている。それは『運命』である。それはある人が言った言葉だ。
俺達はこの世界にその『運命』という重力で来てしまったのか？
俺はそれが知りたい。『運命』とはなんなのか。
この世には連続するどうにもできない「運命」というものを認めざるを得ない。しかし一方で「運命」で決定されているとなると、努力したり喜んでも仕方がないという考えも生まれてくる。
だが、運命は事前に知ることはできない。
俺はこの世界でのやるべき事を探す。無論、元の世界に帰る手段もだ。
あのオオアマナの咲き乱れる場所で、何があったのか。
答えはどこにあるのだろうか？
その為に、俺はこの世界で生きてやる』

「――そう、か……」

コゼットは何か、納得した表情を浮かべた。
しかし、それに納得できない人が一名。

「え！？　わかったの？　それ…」
「ええ。異世界とかはいまいち分かりかねますが……要は、『俺は自由に生きたい』と書いてありますよ」
「え～～？」

そこで、今日初めて。
コゼットが少し笑った。

「帰ってきますよ。きっと」
「そう？　なんだか一生帰ってきそうにない気がするんだけど」

そんなことをいうフィルナは、コゼットが笑ったことで、少しホッとしたのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## summer編―ウェザー

No pessimist ever discovered the secret of the stars or sailed an uncharted land, or opened a new doorway for the human spirit.

悲観論者は星の神秘を発見したり、未発見の土地に航海したり、人類の魂への新しい扉を開くことは決してできない。

by Helen Keller

――学院から二日程度の距離――

自分でも、結構長い距離を歩いたと思う。

ふと顔を上げて見れば、遠くの太陽が赤く染まっていっているのが見えた。

しかし、そんな光景に思いをはせるのかと思えば、実際はそうではない。

「暑い……」

背負っている荷物が松下の熱を奪い取って、物凄く蒸し暑い。

重いわけじゃない。むしろ軽い。だけど暑い。熱い。蒸し熱い。

地面からの放射熱やら何やらも同時に松下から体力を奪ってゆく。

夏っていうのはあまり好きじゃない。なぜなら、夏にあまり良い思い出が無いからだ。

昔見たアニメかなんかで、ヒロインが死んでしまうという場面を見たとき、一瞬で涙腺崩壊したものだ。

「もう……ゴールしていいよね…？」

などと戯言を吐きながら……というかあながち嘘ではないのだが……また溜め息をつく。

「……うわ、まんま中二病的なセリフをフィルナに吐いてしまった……！　これがコゼットとかに知られれば、俺は……もうお終いだ…」

そう、今まさに彼を苦しめているのは、最後にフィルナに言ってしまった恥ずかしいセリフだ。

あんなセリフは、正に中二病といえる。むしろ生涯のなかでもう絶対に喋らないセリフ。

『いや、俺はお前らとは決別する』

『こんな世界であっても、どこかに俺を必要とする人がいるはずだ。それが俺にとっての『正義』だ』

『これが、俺の覚悟。これで終わりだ』

こんな感じのセリフ。

「あああああああ！？　なんて恥ずかしいセリフをおおおおお！」

しかしいまさら嘆いたって過ぎ去ったことなのだ。あんなクサイセリフを吐いた事実は変わらない。

そんな忌々しい黒歴史に頭を抱えながら松下は足を休めることはせず、ただただ前に進む。

時は既に日没近い夕暮れ時。そろそろどこかに泊まるべきだと、

一瞬思った。
思ったのだが――
「宿屋が無い……」
それでは金はあろうとも泊まることは出来ない。この時ばかりは学院を出てしまったことを後悔した松下だった。無性に泣けてくる。
宿屋が無いなら仕方ない。最終手段だ、と叫びつつ、松下は担いでいる荷物からあるモノを取り出した。
「野宿セット」
野宿。それは冒険者にとっての最終手段。
野宿。それは冒険には欠かせないこと。
野宿。ここに女キャラがいれば、確実にヤバイ事になること。
その野宿を、松下は決心した。
決めたら松下の行動はすばやかった。
一瞬のうちにテントを設置し、火を魔法で起こす。ぱぱっと手際よく準備をした。
で、そこでまたもや問題が発生した。
「食料がない！　これは…これだけはどうにもならん！」
食料がない。それはすなわち、一歩間違えば餓死する危険性があるのだ。
無論、松下はバラモンのような修行をする気は一寸たりともないし、それこそ仏陀のように骨と皮だけになる気も無い。
そこで松下が考えた行動は、近くの食べられそうなキノコやら生物を捕獲すること。
ちょうどここは山にも近く、ウサギやら魚やらいろいろいそうな

気がする。

「よし、しょうがないな……」

松下はゆっくり立ち上がり、山へ入っていった。

――二時間後――

松下はよろよろと山からテントまで何とか生還。

その手には魚三匹が一本のツルで纏められたモノと、なんか食べられそうな生物。

そこで松下は腰に下げていたクレイモアで魚のはらわたを取り、適当に剣にブッ刺し、火の中に投じた。

次になんか食べられそうな色鮮やかな生物を解体しようと、荷物からナイフを取り出したところで、あることを思った。

「この生き物……なんか無駄に色鮮やかだ…こんな自然界で保護色にならないガラを身に着けているんだろう……？」

カエルを思わせるその生き物は、やたら元気に動きまくる。

「確か何かで読んだことがある……色が鮮やかな生き物は大抵の場合、『毒』を持っている……それも自然界で自らをアピールして毒があることを知らせて危険を回避している…。その主な例は、『ヤドクガエル』、その体に流れている体液の毒は確か……２０μg程で大の大人を殺害することが可能……」

再びその生物をよく見る。

見た感じ、デカイといえばデカイ。食用カエル並みの大きさだ。

その体の表面は青やら赤やら、色鮮やかな色をしている。
これがもし、毒をもっているとしたら……。
そこで松下は、そのカエルを思いっきり山に向かってブン投げた。
ヒューンと飛んでいく色鮮やかなカエル。

「俺は容赦ない主義だけど…自分の命をむざむざ捨てる賭けはできん！」

命あっての人生だ。逃げても良いだろう。むしろ逃げる。
ちなみにその日の晩飯は、魚三匹だけだった。

――深夜――

『ＫＩＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

山で、何かの声が聞こえる。
何処か遠くに、魔物のような声が。
生き物を求めるような、血に飢えた叫び声が。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 二人の子供

The biggest disease today is not leprosy or tuberculosis, but rather the feeling of being unwanted.

現代の最も大きな病気は、ハンセン病や結核ではない。必要とされてないと感じる気持ちだ。

by Mother Teresa

朝。

小鳥やら何やらがピチュンピチュンと小うるさく鳴いている声に起こされた。

で、そこで横になったまま背伸びをして首を回すと――

「あ～、やる気でねぇ。つか首痛い」

正直、寝心地は最悪極まりないものであり、体がだるい。特に首筋が異様に張る感覚に苛まれる。

首が痛い。

腰が痛い。

足腰が痛い。

それでも外に出て、これからの予定を頭の中で立てつつも、テントの外に出た。

松下は少し目を細めた。
その日の天候は晴れ。いや、雲一つさえ見かけない純粋な快晴だ。それに比例しながら、忌々しい太陽の光が容赦なく松下の体に突き刺さる。
これはこれで気持ち良いものだ。もっとも、それはまだ涼しいうちの朝方だから言えることなのだが。

「まぶし……」

城のような学院を出て、既に三日ほどが経っている。
無論、戻る気は全く無い。いくら学院のほうが空調冷暖房完備しているといっても、だ。
それこそ、戻ってしまっては学院を出た意味がないし、それに……学院はもう、俺の戻ることは許されない場所なのだ。
まぁ、それを選択したのは松下自身だし、仕方ないと言えば仕方ないのだ。
さて、今日はどうしようか。まずは食料を確保して、それから……。

「あ〜っと、マジで首が痛てぇ。寝違えたかな……？」

そのままラジオ体操でもしようと思ったが、なんとなく気恥ずかしいので止めた。
そんなことより今後の予定を立てるべく、松下は地図を取り出した。この地図はこの国――エンプラスの国の地図だ。ここらへんなら普通にどういう道があるのか大体分かる。
地図によれば、このまま真っ直ぐの道に行けばそこそこ大きい村があるとの事。

「やはりこのまま真っ直ぐ行くべきか？　いや、このまま迂回して

町まで一直線で入ろうかな……」

この先には二つの分かれ道がある。このまま真っ直ぐ行けば村へ、そして左側の道を通れば町まで一直線に行ける。

しかし、このまま真っ直ぐ行っても結局は町に着く。左に進めば時間は掛かるだろうが町に着く。結局、どちらの道を選んでも変わらないのだ。

そこで松下は考える。どちらの道を通ったらいいのだろうか、と。

迂回して真っ直ぐ町に行くというのもアリなのだが、それでは大体昼過ぎになってしまう。だが、このまま真っ直ぐ行くのは良いのかも知れない。大体到着するのが今から徒歩で一時間、走ればそれ以上は掛からないだろう。

よし、と意気込み、テントを収納する。それから適当に昨日残しておいた魚を火で少し暖めてから食べる。

「さて、暑くなる前に村に行くか」

意外と大きい荷物を軽々と背中に背負い、ゆっくりとその足を踏み出した。

☆

数十分後。

「……暗いなぁ」

村に着いたのは良かったのだが、いかんせん村人が暗い。無駄に暗すぎる。

畑で農作業しているおじさんも溜め息ばかりをついて、あまりやる気がなさそうな雰囲気だった。
そのおじさんを見た後、村に入ってみたのだが、その村の空気があまりにも暗かった。
さして言えば、税金を絞りに絞られ、それでも尚来月にまた搾り取られるといった雰囲気だ。
奇妙な感じだ。

「なんか変な村だな……いや、これがデフォルトなのか？」

村のあちこちを見て回ってみても、元気な大人はいなかった。それぞれが何か抱えている、そんな印象だ。
どこか深い闇が。
何かが苦しめている。
そんな時にいきなり
ドンッ、

「あう！？」

背中に何かが当たる感触がした。
恐る恐る振り返ってみると、そこには、

「すいません！」
「ご、ごめんなさいぃぃぃ！」

二人の小さい女の子と男の子がそこに立っていた。
そしてその手には、サッカーボールぐらいの大きさのボールが大事そうに抱えられていた。
すると、この二人のボールが当たったのか。

「いやいや、構わないよ。それよりお嬢ちゃんたちは？」

すると二人は元気よく、

「私はリリィ！」

「僕はメノだよ」

「リリィとメノ、か。いい名前だな」

「うん。私の名前は可愛いもん！」

「へへへ……」

二人とも、この村にはない元気を持っていた。

この村に足りない活気があった。

松下はそんな二人の頭をなでつつ、こういった。

「さっきから遊んでたのかい？」

少年は自身のボールを見つめ、

「うん。ボール蹴り」

「あのね、メノは結構上手いんだよ。お父さんとタイマンで張り合っても勝っちゃうくらいなの！」

それはどんな勝負方法なのかお教え願いたい。というよりそれはただの喧嘩だ。

「そういや、兄ちゃんはどこから来たの？　そんな大きい荷物を抱えて……重くないの？」

「俺は……何処か遠いところから来たんだ。まぁなんだ、旅をしているつーか、な？」

「おお！　旅をしているの！？　羨まし～い」

その旅はまだ一週間すら経っていませんがね。
松下はそんな子供達をほほえましく思うと同時に、一つの質問をぶつけてみた。
それはさっきから松下が気になっていることで。
「あのさ、ここの村っていつもこんなに暗いの？　俺、結構びっくりしてるんだけどさ」
「うん……」
そこで子供達は黙ってしまう。
子供達の先ほどの笑顔が、みるみるうちに消えていった。
松下はなにか嫌な予感がした。
なにかあるのだろうか？　それこそ深刻な問題が。
と、子供達――その中のメノはいきなり顔を上げて、何かを凝視した。
「お兄ちゃん、それって武器？」
「ん、ああ。クレイモアっていう武器だよ。でも危ないから触っちゃいかんよ」
「じゃあさ、村長に会ってくれないか？」
「はい？」
いきなりの申し出だった。
何故に村長？　かと思ったのだが、メノの意外なまでの真剣な眼差しに、
「あ、あぁ。構わないが……？」
という返事を返してしまった。

その返事を肯定と受け取った子供二人は元気に、

「「じゃ、いこう！」」

そういうと、この二人の小さい子供達は松下の服を引っ張ってきた。

恐らく、その村長とやらに合わせる気なのだろう。そしてそれがこの村が沈んでいる理由の回答なのかも知れない。

松下に断る理由はまったく無かった。むしろ子供達の前では断れなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 境界（前書き）

２４時間ｔｖの出演者にギャラが支払われることを知ってから、私は２４時間ｔｖを見なくなった。

## 境界

Ｉｔ ｍａｔｔｅｒｓ ｎｏｔ ｈｏｗ ａ ｍａｎ ｄｉｅｓ，
ｂｕｔ ｈｏｗ ｈｅ ｌｉｖｅｓ．
Ｔｈｅ ａｃｔ ｏｆ ｄｙｉｎｇ ｉｓ ｎｏｔ ｏｆ ｉｍ
ｐｏｒｔａｎｃｅ， ｉｔ ｌａｓｔｓ ｓｏ ｓｈｏｒｔ ａ
ｔｉｍｅ．

問題なのは、いかに死ぬかではなくていかに生きるかだ。
死ぬということは重要ではない。それはほんの一瞬しか続かないのだから。

ｂｙ Ｊａｍｅｓ Ｂｏｓｗｅｌｌ

「こっち」

そういわれてぐいぐい引っ張られた先には、一見の民家があった。
その民家はさっき言われた村長の家なのだろうが、そのようには全く見えない。むしろただの民家として紹介されても全く違和感を持たないだろう。それくらい普通の家だ。
その家に、我先に、と入っていく子供達。

「ただいま～！」
「おお、子供達よ。お帰り」
（てゆーかお前らの家だったのかよ……）

なんて頭の中でぼやきつつ、その村長を見る。

とても強そうな人だ。あの筋肉は並みの修行では作ることは出来なさそうだ。
メノはその村長に抱きつき、顔をすりすりしていた。よっぽど好かれているんだな。

「あのねあのね、今日はね、お友達が来ているの！」
「ほう、リリィ以外の子供がいたのか……？　どこの子だ？」
「違うよ。今日は大きなお友達！」
「大きな……だって？　ほう……？」

いつの間にか俺の傍らにいたリリィが、家の中に入れ、と催促しているかのように松下の服を引っ張っている。
しかたない、と思って家の中に入る。

「これが、今日出来たお友達！　ほらほら、自己紹介しなって！」
「あ、ああ。分かったよ……」

そこでリリィに押されて村長の前に出る。
しかたない、と思いつつも緊張を抑えながら、村長の目を見て、松下は言った。

「はじめまして。私の名は松下、と申します。つい先ほどこの村にやってきました」
「ほう？　旅人かね？」
「ま、そんな所ですよ」

かーさん、お茶を持ってきてくれ、と村長が家の人に言いつけ、すぐにお茶はやってきた。
その数は二つ。村長の分と松下の分だろうか。

「お掛けなさい、旅人さん」

そう催促されて、松下はイスに座る。
ちょっと硬い木のイスだが、そこは我慢しよう。
と、そこへリリィとメノが松下の両側に座った。

「えーと、松下、といったかな？」
「はい」
「そうか。いやはや、最近は物覚えがあまりよくなくてね。悲しいことに老化が始まっているようだの。ほっほっほっほ～」
「いえいえ、貴方のように体つきが素晴らしい方はいつまでも長生きできますよ。それこそずっと」
「ふむ、面白いことを言ってくれるお人だ」

以外にフランクなお人柄だ。最初のイメージでは、村長といえば物凄く怖くて強いイメージがあったりしたのだけれど。
この間にもリリィやメノの頭をなでている村長は、本当に優しそうな雰囲気を持っていた。
そこで不意に村長は口を開く。

「君は、この村を見てどう思うね？」
「え？　はい……？　それはこの村の見た目、という意味ですか？」
「そうだ。率直に答えて欲しい。旅人にとって、この村はどれ程暗くなっているのかを。別に難しく考えなくてもよい」

瞬間。
背筋に寒気が伝った。そして冷や汗も同時に。
これは何だ？……殺気か？
この強烈な殺気は何なんだろうか？　これは村長から発せられているのか。

なぜこれほどの殺気を放っているのだろうか？
いや、そんなことはどうでも良い。今は村長の質問に答えるのが先だ。

「……自分から見たところ、この村には活気がない。そして生気のようなものも。一体、これは何なんです？」

すると、村長から発せられていた殺気が一瞬のうちに消えうせる。

「君ならいけるかもしれんの……」
「はい？　いまなんと？」
「いや、気にしなくて良い。そうか、活気がない、か……。確かに私の目から見てもそのようにしか見えんな」
「ええ。一体何が起きているんです？　この村で、一体何が？」

そこで村長は一息付いて、お茶を啜った。
そして、こういった。

「ふむ、君はどうやら魔法使いのようだね。それも、魔法剣士のようだ」
「なんだって？　兄ちゃん、魔法使えるのか！」

いきなりの露呈。

（な……なにぃ！？　バカな！　俺が魔法を使えるなんて……分かるはずがない！！）

この村長はどうやって見破ったというのだ。こちらのほうへ殺気を送っただけでわかるはずがない。
それとも何か……別の方法を使ったというのだろうか……？

「私はね、この村が好きだ。この土地も、人も、私は愛している。だが、私は戦うことはできない」
「？……何をいって……」
「松下君、『エンプラス・ゾーンメイト種』っていうモンスターを知っているかい？」
「『エンプラス・ゾーンメイト種』……確か、ドラゴン族・ゾンビ属に属するモンスター……でしたか」

松下はかつて、学院の図書室でモンスター系の本を読んだことがある。
それにはこの『エンプラス・ゾーンメイト種』のことも掲載されているのを思い出したのだ。
それによれば、その『エンプラス・ゾーンメイト種』はエンプラス国原産、単独で生活し、主に魚や動物を食っているドラゴン種だ。全長は五メートルぐらいで一般的なドラゴン種と比べて比較的小さいサイズなのだが……問題はそこではないのだ。
厄介なことは、その特殊な性質にある。
このドラゴン種は恐ろしいことに、人間の『魂』を奪い取ることが出来る。奪い取られた人間は、この村の人間のように、ただ無気力にしか行動が出来なくなる。
これを受けた村や町は大きな損害を被ることになる。しかも『エンプラス・ゾーンメイト種』自体を倒しても結局は元には戻ることはない。

「そのドラゴンが…どうかしましたか」
「忌々しい事に……この村の近隣に住み着きおった。そして、つい先日の事じゃ。わしはその時、この村を離れて町まで家族といっておったのじゃ。その時に……」
「『魂喰い』、ですか」

「そうじゃ。わしらが戻ってきたときには既に……皆の魂は喰われておった」

『エンプラス・ゾーンメイト種』の特性、『魂喰い』。
そしてその特性で『魂』を抜かれたものは……数日以内に死ぬ。

「そして、そのドラゴン種を、俺に退治して欲しいのですか？」

松下は敢えて聞き返した。
このまま頬って置くわけにも行かないが……村長にその気があるのかという事を確認してみたかった。
そして村長は、

「そうじゃ。君に、『ドラゴンスレイヤー』になってもらいたい」

『龍殺し』といわれるドラゴンスレイヤーは並大抵の人間には出来ることはない。
それこそ、こんなまだまだ弱い魔法騎士見習い程度のレベルでは、到底太刀打ち出来るはずがない。
しかし、村長は続けた。

「わしはかつて、『ドラゴンスレイヤー』として名を馳せたものじゃ。そう……かつて『鬼の機龍』と言われたものじゃ……」
「『鬼の機龍』……」
「しかもわしの殺気に耐えたじゃろう？　それだけでも拍手モノじゃ。お主には戦士の素質がある。しかも君は魔法を使えるじゃろう？　わしも昔はクルド国の魔法騎士だったのじゃよ」
「魔法騎士、ですか……しかし、私にはそんな力があるとは思えないのですが……」
「力というものは、万人が持つものではない。それこそ使えるもの

が使うものなんじゃ。そしてそうしてこの世界は成り立ってきた。
君には力がある。それを有効に使うべきではないのかね？」

村長は正しい。
万人が魔法を扱えたら、それこそ戦いはたくさん起こったろうし、
人はたくさん死んでいただろう。
しかしこの世は違う。力は万人が使えるものではない。
だからこそ、力を使う人間は使えない人間の為に使うべきなのだ。
それこそ、人間の価値観における一つの『正義』なのだ。
そして、今。
松下は必要されている。
だから答えは、一つしかないのだ。

「分かりました。お受けしましょう」
「……ありがとう」

そして、日は暮れてゆく。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

# 開幕

The real essence of work is concentrated energy — people who really have that in a superior degree by nature are independent of the forms and habits and artifices by which less able and active people are kept up to their labors.

仕事の真の本質は凝縮されたエネルギーである。
生まれつきこれをほかの人々より多く持っている人々は、そこまで有能でも活動的でもない人々が労働の基準にしている形式や習慣、策略には無縁だ。

by Walter Bagehot

「疲れた……」

そう呟きながら、先ほど借りた宿のベッドに身を投げる。
こんなことになるなんて、夢にも思っていなかった。いきなりドラゴンを狩って欲しいなんて、それこそファンタジーの世界ではないか。
なんだかなぁ……と呟きつつも、意外と寝心地の良いベッドに顔を埋める。

「そういや、ここの人はみんな魂を抜かれているんだっけか？」

ふと窓の外を見てみると、既に日は落ちたというのにまだ働いている村人の姿があった。

これはこれで怖い気もする。ゲームみたいに外を普通にうろうろしている姿はまるでゾンビのようで、ここがあの『ラクーンシティー』ではないかと思ってしまう程に。

しかし、それでも攻撃してこないというところから見れば、まだマシな方なのだろう。それこそ本当にゾンビ化されても困るのだが。

その元村人の手を見てみると、ちゃんと鍬やらを持っている。恐らく、農作業中に『エンプラス・ゾーンメイト種』に襲われたのだろう。

しかし、よくよく見てみればちゃんと仕事はしている。そこがゾンビと違うところなのだろう。

その時、コンコン、とドアが叩かれる音がした。

「入ってもよろしいかね？」

「ああ……どうぞ」

ガチャっとドアが開かれ、そこになにやら変なものを担いでいる村長の姿があった。

「どうしたんです？　その……変なものは……」

「ああ、これかね。実はこれを君にプレゼントしたくての～」

そういうと、村長の担いでいた変なものを机の上に置いた。よく見ると、長い武器のようなものと鎧みたいだ。

なんだろうか、といぶかしむ松下の思っていることを見抜いたのか、村長はこう続けた。

「これは、わしが若い頃使っていた武器と防具じゃ。これを、君に」
「……」
「気に入らないかね？　ま、確かに鎧のほうは固定化の魔法を掛けていなくて、今はボロボロじゃがの。ただし剣のほうは完璧に当時のままの状態じゃ。剣のほうは最初から固定化の魔法が掛けられていたのじゃが、生憎わしは鎧に固定化を掛けることが出来なくての。そこは許してくれぃ」

確かに鎧のほうはボロボロの状態でまともな性能は期待できそうになさそうだ。
しかし剣のほうはピカピカのまま、常に鞘が黒く、そして光輝いている。固定化を掛けているのなら、中の部分も完璧に保存されているのだろうか。
松下はその剣に手を伸ばし、少し鞘から引き抜いてみた。

「おお……日本刀、ですか？　いや、似ている……」
「ふむ、その剣……いや、刀といったほうが良いかな？　その刀は昔、奇妙な遺跡で見つけたものなのじゃ」
「遺跡、ですか？」
「うむ。わしは若い頃に見つけた遺跡で発見したものじゃ。わしが思うに、その刀のおかげで出世できた。その刀には感謝しておるよ」

聞くからに、これはそこそこの年代モノと推測される。しかし、この村長が昔から使ってなお刃こぼれ一つ起こさなかったのだから凄い。
しかも村長はドラゴンスレイヤーだったらしいから、魔物の装甲をものともせずに切り裂けるようだ。
これはかなりの攻撃力が期待できるのだが……。

「これは……長過ぎません？　いくらなんでもこんな長さを振り回

すことは……」
「確かに、わしが使い始めての頃は物干し竿といわれたものじゃがな」
（物干し竿って……）

そう、この刀ははっきり言って長い。いや、長すぎる。
刀の長さが優に１３０センチを超えており、これじゃ振り回すのが大変そうだ。
だがこれを村長は現役時代に振り回していたというから驚きである。
しかし、村長は続けた。

「その刀はわしにとって重くはなかった。その長さで、じゃ。どういうことか分かるかい？」
「さぁ……？　分かりかねますが」
「その刀は人を選ぶ。自分の所有者を自らが決めるのじゃ。現にわしの同僚に持たせてみても、誰も持つことは出来なかったのじゃ」
「そんなバカな……刀が選ぶなどと……」
「インテリジェンス、というものを持っているのじゃろうな。知識が所有者を選ぶ……それは才能あるものが表に立つ為の必要なことなのじゃよ」

そんなことは松下にとっては信じられることではなかった。
武器に意思が宿っているとでもいうのだろうか？

「持ってみなさい。刀を」
「……むう」

手に持っている刀の柄を再びゆっくりと開放していく。
しかし１３０センチもある刀だ、そう易々とは刃を見せてくれる

はずがなかったのだが――

「あれ……？　いつの間に抜けているんだ？」

気づいたときには既に抜刀していた。

しかも、なぜかとてつもなく軽い。まるで包丁を持ったかのような、自由に扱えるような開放感が松下を覆う。

それと同時に、とても安らいだ気持ちになってきた。

なんだろう、この気持ちは。

心臓の鼓動がゆっくりになっていって、とても落ち着く。

すると村長は嬉しそうに目を細めて微笑んだ。

「やはり君は私の思ったとおりの人材じゃ。これから君はその剣と共に生きてゆくだろう。それこそ世界を動かす人間となるのじゃ」

しかし松下はその言葉にこう返した。

「世界？　ははっ、私は世界なんてものは興味はありませんよ。ただここにいる。それで十分です」

「それでも、君は世界に向き合わなくてはならない。君の意思がどうであれ、それが世界が望んでいることなら、君はその大きな片鱗の中に閉じ込められることになる」

そういった村長の目は、どこか悲しげで、その瞳の奥に何かが揺らめいている。

しかし、そういったことに松下はあまり感心がなかった。

世界がどうあっても、自分はここにいることで十分満たされるから。

村長の言う片鱗というものは、はっきり言って分からない。でも、それも一つの考え方なのかもしれない。

こんなちっぽけな存在でしか存在できない自分では容易に理解できないだろうな、と松下は思った。

「さて、そろそろ君の出番のようだの」

村長がふと、外を眺めながらポツリと呟いた。

瞬間。

『ＫＩＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

その声は、確かに外から響いた。

「……松下君、アレが、『エンプラス・ゾーンメイト種』だ」

「ええ、おぞましい奴だ……」

窓から見えるそのモンスター――『エンプラス・ゾーンメイト種』は実に恐ろしい姿をしていた。

腐食した肉。その肉の間から覗く骨。

どこから出しているのか分からないような大きな声。

全てが恐ろしくて、醜い。

そのモンスターが、現実に存在している。

かつての松下だったなら絶対に信じられない。

だけど実際に目の前にいる。その感覚に、体からコンバットハイのような興奮を覚える。

そんな松下を見て、村長は静かに言った。

「……これから君にしてもらうことは、ただの私の個人的な復讐心でしかない。それでも……引き受けてくれるかい？」

それでも村長は確認してくる。

確かにこれは村長の個人的な恨みだ。その恨みを、たった今日であったばかりの青年に恨みを晴らしてくれるように頼み込んでいる。
松下はそんな事情を知っている。
答えは、もう決まっている。

「私は、貴方の復讐にも世界とやらにも興味はありません。ですが……ここでやらなきゃ死んじまうでしょう？　やってやりますよ。むざむざ死ぬわけにも行きませんからね、せめてもの抵抗という奴をさせていただきましょう」

松下は刀を手に持ち、ボロボロの鎧の必要最低限の部分のみを装着した。胸当て、腰……これは一撃ほどしかガードできないだろう。
しかし、逆に言えば当たらなければどうという事はない。当たらないように軽装で行くほうがいいだろう。
そして窓の外にいるドラゴンを睨む。

「わしは子供達とともに避難をしておくよ。君に神のご加護があるように」
「……生憎と、私は神は信じないのですがね」
「おお、それはそれは。では、わしのキッスでも授けようかの？」
「……そ、それは断固辞退させていただきます……」

冗談を飛ばしつつも、松下は思う。
ここで逃げるわけにはいかない、と。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

**修羅場なう**

Ｔｈｅ ｇｌｏｒｙ ｏｆ ｇｒｅａｔ ｍｅｎ ｓｈｏｕｌｄ ａｌｗａｙｓ ｂｅ ｍｅａｓｕｒｅｄ ｂｙ ｔｈｅ ｍｅａｎｓ ｔｈｅｙ ｈａｖｅ ｕｓｅｄ ｔｏ ａｃｑｕｉｒｅ ｉｔ．

偉大な人物の栄光は、それを手に入れるために用いた手段によって常に計られるべきである。

実際、人間がどれだけ人に尽くせるのかなんて高が知れている。いつでも傲慢で、人を裏切り、残虐な人間っていう生き物は、本当にこの世界に必要なのだろうか……とか言いつつも、それが人間なんだし、文句は言えない。

さて、どうやって生き延びましょうかね。

☆

「やれやれ、やっぱり情に流されずにあのまま断っておけばよかったか……？」

松下は戸の裏口で気配を絶ちながら、ついつい本音を口にする。

さて、ここからどう動くか。幸いなことに、あのドラゴンはまだこちらに気づいていない。

このままおもむろに姿を現して不意打ちをつくのも良いのかもし

れない。しかし、その考えを途中で放棄する。

（そんなことが出来たら、足の震えなんか起きてないはずだよな）

ふと視線を落とすと、松下自身の足が恐怖で震えているのが見えた。

そうだ。怖い。

死ぬかもしれない。このままあっさりとドラゴンの餌食として喰われたり、魂を取られるかもしれない。

こんな、つい去年までは『非』現実に憧れるただの男子生徒として生きていた青年が、いきなりドラゴンと戦えなんて無茶も良い所だ。

ただ、死にたくない。

死ぬのが怖い。

（……）

その時、松下はもう頭に言葉は思い浮かべなかった。

戦いに言葉なんて邪魔だ、自分の行動選択の邪魔でしかない。

足はまだ震えている。

だが、ここでやらないと村長の敵が取れないどころか逆に自分が死ぬ。

いずれにせよ、やらなければならない。

そう覚悟した時。

松下は既に戸口を開けて疾走していた。

『凄まじい業火よ、轟け。イオ』

瞬間、松下の目の前に恐ろしいほどの熱量が放たれる。

熱と轟音。凄まじい光。まるで爆弾のようだ。

これは対人用にリミッターを施した貧弱なものではない。パスに放ったときの何倍もの魔力を込めている。
それを『エンプラス・ゾーンメイト種』に向けて攻撃。同時に周囲にいた魂を抜かれた村人をも巻き込んでしまう。
『イオ』と呼ばれた魔法は確かに爆風と熱をドラゴンに浴びせた。
しかし。

『ＫＩＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』
「な……なんとおおおおおおおお！？」

敵は肉体の一部を損傷しただけで、まだ生きている。それも、正にダメージがないと言わんばかりの雄たけび。
ドラゴンはこちらを見た。予想通り、ドラゴンの顔にはなんら変化がない。しかし、このモンスダーは自分のやるべきことを理解している。
殺す。生きているものを、目の前に立ちはだかるものを皆殺しにする。
不意に、ドラゴンの四股が動いた。瞬間に、その強靭な足がこちらに迫る為の運動を開始する。
四つんばいの状態で恐るべきスピードで迫りくるドラゴンは、明らかに松下のほうへ一直線に突進して来ていた。
ここでなにも行動を取らなかったら、確実に衝突は避けられなかった。一瞬の判断で松下は左に飛び出すようにして緊急回避を行った。その０．１秒にも満たないであろう時間でもといた場所にドラゴンが突っ込んでくるのを松下は視認した。そんなドラゴンの無茶苦茶な機動能力に、松下は悪寒を感じざるを得なかったのは仕方のないことだった。
「なんて奴だ……ギリギリかわせたが、今の動きがもう一度来られれば避ける自信はねぇ……」

『ＧＹＡＡＡＡ……』
「だが……生憎と、まだ俺は死ぬわけにはいかんのだ。狩らせてもらう！」

再び突進しようとしてくるドラゴンに対し、松下は一度大きく刀を振り、刀を構えた。
構えは正しいのかは知らない。もとの世界で剣道なんて習っていなかった。だから今の構えはこの世界のスタイルを合わせた我流だ。
そしてまた大きく『ＧＹＡＡＡＡＡＡＳＳＳ！！』と叫ぶドラゴンを睨み、覚悟を決めた。

「モンハンって……現実でやるとメチャ怖ぇ……」

ふと、まだ松下が現実にいたときにはまっていたゲームを思い出した。
事実、ゲームとが言えこれくらいのドラゴンを狩っているハンターはさぞかし恐ろしい思いだったのだろう。流石にこんな腐乱臭はしないだろうが、実際は松下と同じような思いで戦っていただろう。なんだか同情できる。
ドラゴンの現在の損害状況は今、ただ単に皮膚上部を焼かれているだけだ。奴にはあまり爆発系の魔法は得策ではなさそうだ。
ではどのように攻撃すべきか。

（相手の機動力がかなり高いという観点から行けば、先に足を攻撃して動けなくしてから本体に直接攻撃を叩き込むというのが最善の方法か？　なら！）

松下は右手で剣を握り締めながら、左手で魔方陣を空中に展開する。
そしてなにやら唱えると、すぐさまその場からドラゴンと一直線

になるように離れた。
すぐさまドラゴンが突進してくる。四股を使っての凄まじい機動力を誇るドラゴンに、松下は敢えて避けることはしなかった。しかし、このままくたばるわけにも行かない。
ドラゴンの忌々しくも耳を劈く様な咆哮がこの夜空に重く響き渡り、その声が一瞬のうちに苦しい声に変わる。掛かった、と松下は思った。

「オラッ！！」

苦しそうな咆哮をあげるドラゴンのところまで全力で走り、剣を構えた。
ドラゴンは今、松下が先ほど仕掛けた罠――いわゆる痺れ罠という奴に引っかかっている。愚かな奴だ、と思いつつも松下は刀をドラゴンの足を切りつける。その時に今まで発していた声より更に苦しそうな声を上げる。
しかしそれを聞いても尚、剣の乱舞をやめなかった。この罠はあまり多く時間を稼ぐことは出来ない。限られた時間内の中でどれほどのダメージを与えられるかが勝負なのだ。いちいち声なんかに反応していられない。

『ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ！！』

松下が思いっきり剣で切り裂いた瞬間。ドラゴンの骨が砕かれた。
その時、ドラゴンの痺れが解けた。その恐ろしい眼がこちらに向く。
最初はただの虫けらのようにしか思えなかった『人間ごとき』に傷を負わせられた、という腹立たしさを含んだ、血の混じったような眼がこちらを睨む。
その様子に、一瞬戸惑いを覚えずにはいられなかったが、

「なにか分からんが逃げる！」

改めて距離を取った。

一応相手にはダメージを与えてはいるのだが、先ほどの眼が気になる。

一瞬『魂喰い』かと思ったが、それは魂を抜くのに時間が掛かる。それではない。ではなんだろう、と思い、頭を回転させつつ、もう一度ドラゴンのほうを睨む。。

しかし。

その光景には驚愕せざるを得なかった。

「こんなことがありえるというのか……喰ってやがる……村人を……」

ドラゴンが村人を掴み……口に放り投げる。

骨が砕け、肉が裂かれる。口から血が垂れ、真っ赤に染まる。頭から喰われ、背中は牙によって背骨ごと噛み引き千切られる。捕食、といっても差し支えないような情景。そしてそれに伴う肉体の回復。

これがモンスターの行う所業なのか。人間は世界を征服したと言っているけど、結局は根本では負けているではないか。

ドラゴンが行っていることは正しい。ただ奴は傷ついた体を癒しているだけだ。それを邪魔しているのは松下。

だが、ここでこのドラゴンを殺さなければ自身の未来はない。

いまだに村人を捕まえては口に放り投げている、今が奴を殺すチャンスなのだ。ここで奴にダメージを与えなければ勝機は再び現れることはなかろう。

心のなかで恐怖している自分を押さえ込み、血で塗れているドラゴンへ一撃を放つ為に左手を前に突き出す。

「確か奴はゾンビ系だったはずだ……それならこちらにも手段はある」

to be continued…

## 魔法剣

He who loses wealth loses much; he who loses a friend loses more; but he who loses courage loses all.

富を失う者は多くを失い、友人を失う者はさらに多くを失う。
しかし、勇気を失う者はすべてを失うことになる。

by Miguel de Cervantes

「聞きかじった程度だが……魔法剣を試してみるしかない、か……」

左手の前に一瞬のうちに魔方陣を展開。
その魔力を白魔法に変換し、右手の刀に展開する。

「やれやれ……『ジャンクション・ダディア』」

ダディア。ディア系の中位魔法であり、アンデッド系に効果がある魔法だ。その魔法を、松下は剣に『接合』した。直接、剣に封じ込めたわけだ。
そうなれば、それぞれの属性を持った攻撃が出来るようになり、状況を有効に変えることも難しくはない。
これを、ドラゴンに叩き込む。
ドラゴン自体の属性は、こちらの魔法剣と相性が悪いはずだ。ダメージ換算で考えれば、効率は普通に攻撃するより高いはず。
そして同時に松下は駆け出していた。

無論、撃退するつもりはない。
相打ちか――いや、相打ちなぞもとから考えてはいない。
狩る。

「後ろが……がら空きだッ……！」

グチャグチャとドラゴンが人間をいまだに捕食しているなか、一瞬の跳躍で勢いをつけて接近、その上に攻撃を加えようと剣を振りかざす。
刹那――

「ウボァ！？」

腹に、強烈なダメージを負わされていた。
ありえなかった。
今まで喰っていたはずのドラゴンが、一瞬のうちに尻尾で攻撃を繰り出してきていたのだ。それも、正確な位置に。
いくら後ろにいるのは分かっていても、この正確な位置に攻撃を繰り出せるものか――しかし、現に強烈なダメージを腹に負っている。
だが、松下はそれでもしぶとく生きていた。それは生きていることが正に奇跡としか言いようがない、本当に奇跡的な部分。

「なん、で……こんな断末魔なんか……あげなきゃならんのだ……しかし、え？　くそ……だが、こんなオンボロな鎧に助けられているから、まだ捨てたもんじゃない……か？」

既に胸当てとしての機能は先ほどの一撃によって意味を果たさなくなっているほどに凹んでいる。しかし人体自体にも多大なダメージは残っているが活動には問題ない。危なかった、と内心安堵する。

しかし、これでは用意に近づくことはできない。『ディア』系統の魔法を使おうと思ったが、おそらく決定的なダメージを与えられずに相手の怒りを買うだろうと思い、結局は接近戦による直接的な攻撃が必要だと結論した。

そのとき、こちらの一瞬の隙をついたのか、はたまたただの気まぐれを起こしたのかはわからないが、ドラゴンが急に民家の方へ移動を始めた。

すると、一度こちらを禍々しい眼で睨んでから、自身の尻尾を振り回し始めた。振り回された尻尾は所々の民家に当たり、その威力に根負けした家々は一瞬の内に崩壊を始めた。

まるで、子供が木の家を崩すような軽快さで家々を崩壊させるドラゴンは、崩れた家の一部分――主に家を支えている木を黒く、滑らかな尻尾でつかみ、そのまま……こちらに投げつけてきた。

あの木に当たってしまえば、こんな貧相な人間では身が一瞬で潰れるだろう。しかもこの防御力がほとんど無くなってしまった鎧では、結果は見えている。

もう、考える余裕は無い。松下は避けることもままならないまま、本能的に左手を突き出して呪文を唱えていた。

『ジャンクション・ファイラ！』

静かに、刀に魔力を込めなおす。すると、刀に煌くような熱い輝きが生じて松下の手にほのかな暖かみを与える。ジャンクションしたのは炎系統の中でも中位に位置する魔法で、『ラ』系統に属する。その魔法を使用する魔法剣は、主に焼き切ることを前提とした攻撃的な魔法剣だ。

そして飛んでくる飛翔体を、松下は刀で切り裂く。そして同時に、剣に少しの爆発をさせて切断した後の飛翔体の弾道ルートを修正させる。

「まだ来るのか？　ええいうっとおしいッ！」

松下は飛んでくる木などを的確に切り裂いてゆく。切り裂かれた木は魔法剣の熱量にせいなのか、切断面にこげた跡があった。それだけ熱量があるということは分かっているので、刀本体の取り扱いには十分留意している。

十、二十程度は切り裂いただろうか、すでにドラゴンからの攻撃は停止していた。終わったか、と松下は呟いたのだが、実はそうではなかったらしい。

月光を遮る影の存在を、松下は気づいた。いや、正直にいえば、ドラゴンの姿がどこにも見えなかったので、まさか……と思いつつ空を見上げたところ、そいつはいた。

そいつは月光の光を全身に浴びた神秘的な姿をしていた。

ゾンビとして腐敗しているはずの肉が、翼が、月光によって冷たい光を浴びている。松下はその姿を、美しいとぼんやりと思いながら眺めていた。

しかし、その一秒にも満たないであろう、まさに一瞬。

『ＫＩＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

ドラゴンが空中で滑走を始めた。こちらに突っ込んでくる。　松下はその光景を目にしながら反射的に軌道ルートから外れるように左へ回避する。その刹那、ものすごい風圧が松下を襲う。ドラゴンがぎりぎりの所を通過していったのだ。そのまま奴は地面に突っ込み、轟々と砂煙を上げていた。

しばらくの沈黙。辺りは全くの無音に包まれる。

しかし、あの程度で死んだとは到底思えない。あの腐った体なら体のあちこちが損傷していても不思議ではないだろうが、それくらいで死ぬような攻撃をわざわざ繰り出す必要も無いだろう。それとも、本当にクサレ脳みそになっていてそれ位の状況判断すらできな

いというのだろうか。
だが、結局は安否を確かめなくはならない。その上で、然るべき止めを刺さなくてはならない。
そろそろ体力も限界に近い。今まで味わった事のない緊張状態で、足は常時震えっぱなしだ。いくらコンバットハイの影響でエンドルフィン（脳内麻薬の一種）を多量に分泌させて疲れを忘れさせていたとはいえ、その分の疲労は足に確実に溜まっている。いつ足が疲れによる崩壊を起こしてもなんら疑いの余地は無い。
ここで決着をつける、と言わんばかりに全力で走り出した。あのドラゴンを止めなくては。

「ジャンクション・ダディア」

もう一度ジャンクションし、ドラゴンの元へ突っ込んでゆく。
タイムリミットはそろそろ尽きかかっている。これが最後のチャンスになるだろう。
松下は左手を突き出し、魔方陣を展開させた。

「天来よ、来い……サンダラァ！！」

瞬間的にいくつもの光が発生する。その光は一瞬しか視認できなかったが、いくつもの光の束になって飛んでいく。
その先に、ドラゴンがいた。
しかし当たる直前、一瞬のドラゴンの動きがその光をはじいた。

「ちぃ……効かんか！」

もちろん今のはフェイク。ただ生きているかどうかを確認しただけだ。松下の脳には、一つだけ策があった。即興だが、これで殺るしかないだろう。

相手は先ほどの電撃による攻撃で少し怯んでいるようだ。先ほどのフェイクが意外と役にたったな、と思いつつ松下は思いっきりドラゴンの腹まで容易に到達した。このままダディアをつけた魔法剣をドラゴンの腐った腹に突き立てる。その痛みからか、ドラゴンは腹から大きな声を、重苦しい声を絞り出した。耳が破れそうだ。実際、頭がグラグラ揺れている感覚が襲う。

だが、ここで止めるわけにはいかない。これはチャンスなのだ。このまま魔法剣を更に深く突きたてながら上に持ち上げる。

無論、ドラゴンもただやられている訳ではなかった。強靭な四股がバタバタともがき始めており、非常に危険だ。何時また体勢を立て直すのか分からない。だから早期に討滅する必要がある。

辺りに腐った肉のなんとも言えない匂いが立ち込めてくる。気持ちが悪い。

松下はいくらか刀を上に持ち上げて数十センチ程切り裂いたのを確認し、そこに更に魔法剣を込め直す。その魔法剣は、傷を完治させないようにするため、内部から焼くためにファイラをジャンクションした。

突然、ドラゴンの傷から透明な液体が流れ出てきた。今まで流れてきていたどす黒い血ではない、少し粘り気の混じった液体。一瞬腸液か、と思ったのだが、今はそんなことを思っている暇はない。

すると、ドラゴンが痛々しい悲鳴を上げた。内部から焼き裂かれているのだ。無理も無い。頑強な鱗で守られていようが、裏を返せば中身は切り裂くことも容易。しかも松下自身の使っている刀が軽がるとドラゴンの鱗を切り裂けるので、ある意味天敵なわけだ。そんな境遇を、今となってはドラゴン自身がこの運命を恨んでいるに違いない。

その悲痛な声を上げるドラゴンに、更に追撃を行うべく、松下は魔方陣を素早く展開する。

このまま、仕留める。

『凄まじい業火よ、轟け。イオ』

ドラゴンの腹に、真っ赤な爆発が起こった。松下はその返り血を浴びて、血まみれになっていた。松下はそんなことを省みないで、ドラゴンの肉体の中枢を焼き払ったのだ。非常に強力なモンスターであるはずのドラゴンもそれに耐え切れずに倒れる。人間を捕食するはずのドラゴンが、その獲物に返り討ちにされ、その理不尽さに悲鳴を上げる。

松下はドラゴンが倒れる前に既に腹から脱出していた。しかし、彼の息遣いは荒い。

体中に赤い血液とべっとりとした透明の液体を一心に受け止めながら、そのまま膝を着く。既に彼のコンバットハイは効果を無くしてしまっていた。既に立ち上がる気力も残っていはいない。

しかし、最後に確認すべきことは一つだけあった。

松下はゆっくりとドラゴンの元へ近づいていき、

「死んだ、か……。俺も、もう……」

ドラゴンの生死を見極めた後、ドラゴンのすぐ傍で意識を失うように地面に倒れこんだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 魔法剣（後書き）

気づいたことがある。
こんなダラダラ続けていったらいずれは手に負えなくなるのではないのか？
こんな根堀葉堀な文だと、読んでいる人は飽きるのではないだろうか？
他の人が書いているように、パッパと場面を切り替えるほうがいいのかなぁ…なんて思ってたり。
でも、こんなラノベのような文体じゃない作品もアリだと思いますがね！
伊藤計劃さんの文体を真似していたりする所もある（特にシリアス）のですが……読みづらいですか？

## 戦いの後の一時

Ｙｏｕ ｍａｙ ｂｅ ｄｉｓａｐｐｏｉｎｔｅｄ ｉｆ ｙｏｕ ｆａｉｌ， ｂｕｔ ｙｏｕ ａｒｅ ｄｏｏｍｅｄ ｉｆ ｙｏｕ ｄｏｎ'ｔ ｔｒｙ.

もし失敗すればがっかりするかもしれない。しかし、もし何もしなければ絶望するであろう。

ｂｙ Ｂｅｖｅｒｌｙ Ｓｉｌｌｓ

首が痛い。頭も痛い。むしろ全身が痛い。

この理不尽な体の痛みは何だろうか。

筋肉もそれぞれが疲れたと自己主張し、頭はそれを受け入れている。

腕すら起こせず、立つこともできない。いや、しようとはしていない。

今は何時だろうか。

何かキリキリとしたなんとも言いがたい頭痛が襲ってきている。

まるでインフルエンザか何かに感染したような感覚だ。

目を開けようとするが、それを覆すような眠気に襲われる。

ここはどこだろうか？

今寝ている場所は少なくとも地面ではないようだ。いや、外ですらない。

ではどこだろう？

確かあの時、完全にドラゴンを仕留めたと思ったら寝てしまった。
つまりここは屋外ではないのか？
そこで、初めて。

「……ん？」

目を開けた。
眼前に広がるのは広々とした部屋。
木でできた部屋。
ベッドぐらの最低限の設備しかない部屋。
窓の外には、晴れ晴れとした太陽の陽気。
あのドラゴンはどうなったのだろうか。実はあの時死んだフリをしていたのではないか？
いや、そうだとしたら今頃は死んでいるはず。つまりあの時倒したのか。

ではここは？
誰が運んだのだろう。

「……ここ何処なんだよ？」

松下は所々が無駄無駄ァ！　といわんばかりに痛い体を起こし、ベッドを出る。
と、その傍にはクレイモアと刀、それにぶっ壊れたはずの鎧が完全復旧されてそこに置かれていた。
いまいち体が重いのでそれらの装備は後回しにして、部屋のドアを開ける。
すると、その先には、

「今起きたのかね？　……まあいい。これから朝食じゃ」

村長がお茶を啜りながらテーブルに座っていた。
「なんであなたがここに？　避難したのではなかったのですか？」
「ま、ここがわしの居場所じゃからの。わしがわしの故郷に居ることはそんなに悪いのかね？」
と、ごく当たり前に言われたとあっては反論できない。
別に松下自身にとってもそんなことを気にすることはなかった。
「別に構いませんよ」と、受け応えしながら松下は村長の傍の席に着く。
村長に一杯のお茶をもらいながら松下は少し背伸びをした。
ああ、こんなふとしたことが幸せなんだと思う。
生きててよかった。
そんな時、村長はふふ～っと一つため息をつきながら、
「それにの、青年。わしはむしろ感謝してもらいたいのじゃがな。君の倒れているところを回収してこの家に運び込んだのはわしじゃぞ」
「そうでしたか。それは感謝しますよ」
「全く、愛想が無い青年じゃのう。そんなことだから女性が近づいてこんのじゃ。男はもっとこう……昨今に言われる肉食系にならんといかんのじゃぞ！　分かっておるか？」
「……さぁ？」
「いかんのういかんのう～。君はすばらしい逸材じゃのに、自らの幸福を望んでいないと見えるぞ？　君は剣に認められたのじゃ、胸を張るがええ」
「剣に認められたぐらいで胸を張れますかね？」
「できるとも。少なくとも、わしは出来たぞぃ！」

そんなに胸を張らなくても……とか何とか思いつつ。
確かに村長の言っていることは当たっているのかもしれない。
松下自身はあまり幸福自体を歓迎しているわけでもないし、それこそ色恋沙汰なんてこれっぽっちも興味がない。
理由なんて今になっては思い出そうとも思わないものだ。

「まぁ、胸を張っても女性は寄ってこないのが現実じゃ。じゃからわしは武勲を立てようとしたのじゃ。あの刀での」
「あの刀、何時から使っているのですか？」
「わしが確か――二十後半になってから入手したものじゃな。あの頃はもう人生を諦めていたのじゃがね」
「……」
「あの刀を使っていたら、どんどん武勲が……どうした？」
「いいえ、別に。なんか話のオチが見え始めたので」
「……まぁよい。とにかく、わしはあの刀を手に入れてから変わった。人生の転機を迎えたのじゃ」

そんな昔話をする村長はどこか楽しそうだった。
何かしら昔にあったのだろう。
しかし、これ以上昔話に花を咲かされるのも少しアレなので、松下は話の方向を変えようと思った。

「ところで、俺が倒したドラゴンはどうなったんです？　まさか、この日差しの中で放置とかしていませんよね？」
この天気だと、下手をすれば軽く腐りそうな気がする。しかも元々腐っていたからどんな腐敗臭がするのか。
無論万全じゃ、と言わんばかりに村長が頷き、
「鱗とか翼とか、金になりそうな物や使えそうな物は奴から剥ぎ取

って、後は地面に埋葬したよ。あんなところに腐ったドラゴンなんかあっても邪魔なだけじゃからのう」

確かに、窓の向こうに移る光景に、ドラゴンの姿は無い。恐らくはこの村長が処理をしたのだろう。小柄な龍だったが、村長ならばそれくらいの埋葬などは簡単なのだろう。

そしてそれが残したモノもちゃっかりと回収しているあたり、なかなかの狡猾な人物であるともいえる。

村長は話を続けながら、あるものを机の上に置いた。それはビンに入れられた、透明な液体のようだ。

そんなものを、なぜ、と問おうとしたが、松下はそれに見覚えがある気がした。

「これは龍の解体中に手に入れたものじゃ」

「……なんですか？」

村長はもったいぶりながら、ふるふるとビンを揺らしている。揺らされる度に透明な液体がビンの中で空気と混ざり、そして抜けていく。

「これは……人間の魂の液体なのじゃ」

何だって、と松下が叫ぶ。

松下自身にはあまりに信じがたいことだった。あの液体が、龍の体内から出てきて松下を濡らしたあの液体が魂だというのか。

そこで村長はよく聞いてほしい、といって、

「これは『エンプラス・ゾーンメイト種』のみが持っている、食べた人間の魂の結晶なのじゃ。わしだって、見つけた時にはびっくりしたぞぃ」

「それって無駄にネトネトしてますもんね」
「うむ、これを使えばローションプレイもはかどること間違いなし、子作りがはかどるもんよ……ちょ、そんな目で見ないで！　嘘じゃ！　嘘だからね／／／」

という無駄な話をする村長を白い目で見ながら、

「はぁ……あなたがものすごい人だということは理解しましたよ。で、それがどうしたんですか？」
「……君の言うものすごいという言葉は、わしの醜態を皮肉っているというところが鬼畜じゃが……まあよい。続けるわ。この液体は非常におもしろい性質を持っているのがついさっき分かったのじゃ」
「おもしろい性質？　どういう性質ですか？」
「うむ、ローションプレイでヌルヌルを……嘘じゃ」
「次言ったら帰ります」

席を立つ松下をちょっと残念そうな顔で村長は引き留めていた。

「全く、最近の若者は下ネタによく喰い付くというのに……ぶつぶつ」
「なにか言いましたか？」
「いや、別に」
「ついでに言っておきますけど、俺は下ネタにはあまり食い付かないですからね。それ重要ですから」
（むむむ……これはこれで主人公的に問題があると思うがのう……）

煩悩が多い村長よりはマシだと思うのだが。
とにかく、ということでもう一度仕切りなおしにした。

「この液体は、端的に言えば義手に利用できる」

村長は自信満々にそういった。
しかし言われた側の松下には理解しがたいようで、義手がどうかしたのか？　というような質問をした。
それに対して村長はもっと胸を張りながら、
「わしは、魔法剣士として活躍しながらも、義手や義足についての開発をしておった。しかし、いくら作っても全く意味を成さず、今日に至るまでは完全に放棄していたのじゃ」
なおも村長は続ける。
「自分の意思で扱える義足や義手を、わしは作りたかった。しかし、それを実現するためには神経やら何やらの問題があったのじゃ。しかし……この液体はそれを完全にカバーできる。これで腕がなくなっても問題は無くなる。これで救われる人は多いだろう」
つまり、義手と自分の神経をつないで自分の意思で動かせるためにこの液体が使えるらしい。
人の魂がどうとかは関係ないらしいが、そこのところはあまり追求してはならないのだろう。
「君が腕をなくした時、此処に来たらいい。その時君に腕でも足でもくれてやろう」
この時の村長はどこかうれしそうな笑みを浮かべていた。
それほどうれしい発見だったのだろう。
夢を叶えることは誰しもうれしいことだ、と最後に村長は言った。
「さて、君は何時この村を出る気かね？　わしとしてはずっと此処

に居てほしいものなんじゃが」
「……俺は今日、ここを出ますよ」

もう、ここに居る必要はないだろう。
この村長が居る限り、何度でもこの村は復興するだろう。
だとしたら、もうここにいる必要は無い。
ただ、ここにもう一度来るとしたら、そのときは腕をなくした時。
その言葉に村長は頷き、

「だったら、この金を持っていきなさい」

そういわれて手渡されたのは、ずっしりと重い金貨の入った皮袋だった。

「それは君に対する報酬じゃ。持って行きなさい」

そういってにやりと笑った。

ｎｅｘｔ　矢島編（学院編）
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 戦いの後の一時（後書き）

次は矢島編なんですが……期待はしないで下さい。
ぶっちゃけ、ネタ章なんですから。

## 矢島編（前書き）

これは、作者が暇つぶしとして書いた話で、主にラノベ調になっています。
別にはっきりした目的を持って書いた訳じゃ無いので、批判はご容赦願います。

## 矢島編

Next in importance to freedom and justice is popular education, without which neither freedom nor justice can be permanently maintained.

自由と正義の次に大事なことは普通教育である。
教育がなければ自由も正義も永遠に維持することは不可能である。

by James A. Garfield

聖書というものは物凄い官能小説だと思う、と僕の友達が昔言っていた。
確かに、僕自身あの本は一度最初から最後まで読んだことはある。そしてその内容に驚いた。 なんていうか、結構エロい。特に旧約聖書の方。
一応オブラートに包んであるんだけど、それはそれで面白くもあるし官能的で扇情的にも感じられる。
まぁ、今回の話には全く関係ないんだけどね。

☆

彼が去ってから、ずいぶんと時間は経った。

あのあと、彼が去ってしまったことを生徒会長から宣告された。
僕は驚いた。そう、とても。
確かに、僕は生徒会の仕事で彼を貶めるような行為をしてしまった。だけど、まさか松下がこの学院を辞めてしまうなんて思っていなかったんだ。
……結果的に僕は彼を裏切り、貶めてしまった。すべての責任を彼に負わせてしまった。
僕のこの罪は重い。
でも、僕は未だにこの罪を払拭することはできないでいる。
僕は……。

「な～に疲れたツラをしてんの？」
「会長！？」

そんな僕に声をかけてくれたのはフィルナ会長だった。
落ち込んでいる僕を励ます為か、コーヒーもついでに、と渡してくれる。

「あなたはもう生徒会役員よ。そうなったからには、多少の責任は付き纏うもの。そんな過去のことをグダグダ引きずっていてもしょうがないでしょう」
「ですが……僕は」
「はいストップ」

会長は僕の口に人差し指を当てて黙りなさい、といって来ている。
正直、今の僕の気持ちとしては少しドキドキしている。だって女性の人指し指が口に当たっているんだよ？　ドキドキしない人は松下と同じぐらい女性に興味がないのか、それとも松下と同じぐらい放任主義で相手に興味がないか。
でも、僕は彼とは違ってちゃんとした青年です。びっくりもしま

すとも。

「はぁ、あなたまさか童貞？　処女の私が言うのもアレだけどさ、なんだか初エッチの時ぐらいに心が動揺しているわよ」

「……なんで童貞って分かったんですか？」

「なッ／／／」

「まさか松下と同じように、『匂い』で分かったとかじゃないですよね！？」

「ば、バカなこと言ってんじゃないわよ！　童貞に特有な匂いでもあるっていうの！？　だったら処女にもあるの！？」

「あー確か松下が処女だ、って言った人は絶対に処女でしたよ。たぶん同じような匂いがあるんでしょうね」

たぶんこれが松下の愛用していたエロゲーなら……多分こうなっているだろうな。

『そ、そんなに匂うのなら……いっそ消したいわ……』

『そうですか？』

『あ……あんたも消したいと思わないの？』

『ま、そりゃぁ思いますけど。……どうしたんですか？　会長？』

『こ、これは利害が一致したと思っていいのよね！？　だったら……協力しても……いいけど』

『はい？』

『協力していいと言っているのよ！　何度も言わせないでぇ！！』

『え？　ちょ……』

『は、早く服を脱ぎなさい！！　も、もし……出来たら責任とってよね！！』

なんておいしい展開があるんだろうけど、現実はそう甘くはない。松下は『エロゲーは生き方』なんて名言を残したけど、ゲームを

人生に据えちゃだめだよ、松下……。

「なにニヤケながら落胆しているの？　少しキモいんだけど……」

なんて言いつつも、しっかりと会長はご自分の制服の匂いを確かめていらっしゃる。そこまで気にすることだったのか？

「全く……泣けるわ……」

と、若干落胆している会長。双肩にかかるツインドリルが少しだけ儚げに揺れている。

ああそうそう。ツインドリル、なんて言った日には松下が瞬殺されていたのを見かけて以来、絶対に口には出さないようにしている。

「もう松下に関しての話は決着よ。戦闘データもきっちり国に送ったし、ほとんどすることはないわね」

「そういえば、『姫』に関することがあるんじゃないですか？　確か、今学期に編入する……」

「プリミル・プリミッシェル、だったかしら。名前と姓が三文字被っているから発音がややこしかったのが記憶にあるけど」

「あー、はい。その方で合っています」

実は今学期から新しい仲間が増える。それもこの国のお姫様だというのだ。

写真をジャン・ルイから見せてもらったところ、まさにお姫様って奴だった。それも超弩級の美人さ。

美人、といっても可愛さと麗しさ、それに大人びた体つきが本当に素晴らしい。彼女に会えない松下は本当に可哀想だと思う。

「彼女はあなたと同じクラス……じゃダメね。あんな男臭いクラス

に配属しちゃったら面目が保てない上にいつ襲われるか知れたものじゃないわ。第一剣技系だし」
「そりゃ残念。お近づきになれないなんて報われないなぁ」
「全く……彼女が学院に慣れるまではあなたが案内しときなさい。それで『姫』を落とすのもいいし、好きにしたら？」
「了解」

それだったらいいかも。この気に乗じて、玉の輿にのるという手もアリかもしれない。
多分今の僕の顔はいつになくニヤニヤしているだろうけど、それに僕は気づこうともしなかった。

☆

「なぁ、ジャン・ルイ。なんのようだ？」
翌日。僕は教室でジャン・ルイに話しかけてみた。
実は彼から『姫』に関する情報が手に入ったといわれて彼の元を訪ねていた。
「そうだな。これをお前にやろう」
そう言われて手渡されたのは、封筒に入った手紙だった。
なんだろう、と思いながらあけようとすると、
「君に期待しているよ。本当に」
「へ？　なんの事だ？」
「いや……君の顔つきに関してだよ」

という奇妙な顔をしながら言ってきた。
最近のジャンは若干挙動不審なところがあるからな。それに周りの男子も、若干殺気立っている。近いうちにある文化祭について、なにか計画しているんさろうか？
ともかく、この手紙を開けなきゃ始まらない。
ビリリリッ
そんな軽快な音を立てながら封筒を破る。そして、その中にある一枚の紙を引っ張って中身を読む。

『今回は文化祭の企画の一案としてこの企画をさせてもらった。
今日から文化祭まで、君は男の娘として働いてもらう。
ちなみにこれは松下氏の残した手紙にそう書かれていた。
よって彼の言葉に従い、我々は君を洗脳させていただく。
心配するな。仲間はちゃんと居る。コゼット嬢とノア氏だ。
君のその童顔を呪うがいい。
では、健闘を祈る。　ｂｙ　剣技系文化祭実行委員と在籍生徒一同ならびに松下和哉氏』

「図ったなあああ松下ーーーーー！！」
「君の顔と、君の友人を呪うがいい」

そういいながらジャン・ルイは空中に魔方陣を描いていて……
「私は、彼を信頼していた。だから裏切った君を……社会的にも精神的にも抹殺する」

直後、彼が描いていた魔方陣が光を放って、気づいたら、僕はいつの間にかロープで捕獲されていた。

「さて、次はノアとコゼット嬢だが……ノアは良いとして、コゼット嬢はどうしようか……」

そんな恐ろしいことを呟いていたジャンの後姿が、どこか松下に見えた……っていうか、これから僕はどうなってしまうんだ！？

『姫』が来るって言うのに……。

まったく、松下風に言えば、

『やれやれだぜ……』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

**策略**

Ｔｈｅ ａｉｍ ｏｆ ｌｉｆｅ ｉｓ ｓｅｌｆ－ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ．
Ｔｏ ｒｅａｌｉｚｅ ｏｎｅ'ｓ ｎａｔｕｒｅ ｐｅｒｆｅｃｔｌｙ － ｔｈａｔ ｉｓ ｗｈａｔ ｅａｃｈ ｏｆ ｕｓ ｉｓ ｈｅｒｅ ｆｏｒ．

人生の目的は自己の成長である。
人間性の成就を実現するために我々はここにいるのである。、

ｂｙ Ｏｓｃａｒ Ｗｉｌｄｅ

「う……ん？　ここは……どこ？」

僕は若干の頭痛を覚えながらで目を覚ました。いやに目覚めの悪いことだ、ひどく頭が痛い。
しかもここは何処なのだろうか。無駄に照明を暗くしていて、目が慣れるまでに時間が掛かりそうだ。
しかし、状況を掴もうとした瞬間、一瞬のフラッシュバックを起こす。目まいがして、貧血のときのような……。
そうだ。確か僕はジャンに嵌められて……。
その時、いきなりまばゆい光が差し込んできた。

「目を覚ましたようだな、矢島」
「ッ！？　ジャン……」

そこに居たのは紛れもなくジャン・ルイその人だった。
この僕を貶めた、張本人。
光を背にしたジャンは、片手になにやら奇妙なものを持っているようだ。何かの衣装のようだが、この薄暗い中では容易に把握できない。
でも、それが僕にとって物凄くマイナスになる要素だということは理解しているつもりだ。だって……。

「いろいろ言いたいのはあるんだけどさ、この縄を解いてくれないか？」
「許可できんな」

現状。今、まさに僕は、ロープで縛られているのだ！
それは典型的な体に巻きつける型なんだけど、手足を堅く結ばれているのが結構痛い。抜け出そうとしてもさっぱりなほどに。
……まあ、松下だったら亀甲縛りをしているんだろう。そこだけはホッとした。

「如何にお前がイケメンで童顔で女顔という恵まれた主人公補正の持ち主だとしても、我々は譲ることはない。諦めてくれ」
「いやいや、僕はそこまで出番は多くないし、それにそこまで主人公補正は掛かっていないと思うんだけどさ……」
「あん？　『主人公補正が掛かっていない』だと？　たわけが！」

そこでジャンはツカツカと歩み寄ってきて僕の前に立つ。

「だったら、今ここで笑ってみろ。今すぐに」
「え？　……笑う？」
「連れて来い！」

ジャンが合図したら、彼の向こう側から数人の女子が連れてこられた。
いったい何をするのか全く理解できない。僕に笑わせることと、女子と、一体なんの関係があるというのだろうか？
そこでまた「笑ってみろ」という、ジャンの正直笑えない、本当に冷たい声が僕の耳に聞こえた。
……まぁ、笑っただけでは僕の命には別状は無いだろうし、少しはにかむぐらいでいいかな？

「あ……あはは……（キラッ）」

その時、盛大な女子の歓声が上がった。
え？　これは一体何事ですか？　なぜに僕が笑っただけで……ジャン君？　顔が笑ってナイデスヨ？

「殺せ」
「え？　ちょ、まって……え？　マジで？」
「無論、社会的にも、人格的にも……」

それはヤバイのではないでしょうか？
というか本当に嫌な予感がするのです。そう僕のシックスセンスが警鐘を鳴らしている！
そして不意にジャンが片手に持っていたブツを僕に見せ……僕は本当に社会的に抹殺されるようです。ありがとうございました。

「フフフ……我等を罠に掛けたこと、その罪の重さをその身で味わえ！」
「うわあああー！　それだけは！　それだけはやめてくれ！」
「何を言っている？　無論完璧にするための用意は出来ているのだ。

地獄に堕ち、苦しむがいい……メイクアップ隊、準備」
「「了解」」

すみませんお母さん、お父さん。僕は一生お婿に行けません……。

☆

「う……うううう……」
「ほらほら矢島、鏡を見てみなさい。意外と似合っているわよ」
「ああ……僕は……僕はあああ」
「こら、ノアちゃんも……そんなレイプされた後に取り残された女性みたいに泣かない！」

僕は……もう、松下にあわせられる顔がない。
なんで……なんで！

「なんでメイド服なんですかぁーーー！」

僕はメイド服を着用させられていた。しかもこれの着付けをしてくれたのはあの会長。これがジャンの考えていた計画だと思うと、僕はこれから部屋に鍵を掛けなければならないようだ。
それに、何故か隣にはノア・レッドフィールドというとても可愛らしい女の子がさめざめと泣いていて、少し可哀想だ。だってどうせ他のクラスからわざわざ引っこ抜いてきたのだろう？　それがこんなメイド姿になって、級友に自らの醜態を晒さなくてはならないのだから。

「はぁ……そういえば、ノアちゃんっていったよね？　君は何処の

クラスなんだい？」

ものすごく落ち込んでいるノアを励ますために、僕はそんな風に声を掛けた。

だけど、ノアちゃんは絶句したように震えだし、

「ぼ、僕は……そんなに影が薄いのかい……？　僕は……」

「え？　いやいや、そんなつもりは……」

「僕は……だ……じゃない……」

「え？」

なんかすごく小さな声だったので聞こえなかった。もう一度お願いします。

そんな感じに思いながら、ノアちゃんの肩に手を置いた瞬間――

「僕はれっきとした男だ！　女の子じゃない……いつだってそうだ……姉上や妹なんかはいつも女扱いして……おおおお女の着るものを男が着るものだって騙して……しかもそれに気づいたのは七歳の頃になって初めて……。クソッ！　今ここでズボンを――じゃない、パンツを脱いで証明したろかオラッ！」

「え、ちょ、それはマジに止めろ……俺たちの潤いをなくしてはならん！」

「離してくれよジャン！　僕は……男なんだあああ」

「違う！　お前は……俺にとっては女なんだ！」

……これはどういうツッコミを入れればいいのだろうか。

ジャンが泣きながらノアちゃんに何かを懇願しつつ（土下座中）、それを楽しそうに眺めている会長がいる。

……なんで会長がここにいるさね？

「なんでここに居るんですか、会長」
「ん？　いいじゃない。私たち生徒会は生徒のために存在しているのよ？　いちゃ悪いわけ？」
ここに居て当然、という顔をしないでください。若干それいいか、と思ってしまったじゃないですか。
「まぁ、居ても別にいいんですが……取り合えず理由を教えてくださいませんか？　理由が変な理由だったら一言言いたいんですが」
「別に気にすることはないわ。でも、経緯程度は教えてもいいけど。聞く？」
もちろん答えはイエスなのだが。
このまま聞かないでいる方が良かったかも知れないな。
しかしこのまま話そうとする会長はうんうん、と無駄にニヤニヤしながら、
「いや、ね？　矢島をメイド服にさせるから許可をくれって、ジャン・ルイと名乗る一人の好青年が――」
「んにゃろ、覚悟してろ」
「しかもそれを面白がった私がいる」
「会長、今の発言で僕の信頼がゼロになりましたよ」
「しかも用意周到な計画を立てて、あなたとノアちゃんとコゼットを誘拐――協力を呼びかけて」
「今はっきり誘拐といいましたよね会長。しかも協力の呼びかけすらなかったのですが」
「それに加えてメイクアップ担当の女子生徒を派遣して」
「今信頼度がマイナスに振り切れましたよ」
「……そして現在に至る、と」
「それが全容なんですかそうですか絶望したッ！」

今、僕は最高に怒っている。彼女に？　いや、自分自身にだ。
なぜこんな童顔で女顔に生まれてしまったのだろう、嗚呼、この身を出来たならば呪ってしまいたいぐらいだ！
なぜ神は、こうも無慈悲で救ってくれないのだ？　これが神の成すことか――

「今の心の叫び、クレームが来る前に取り消し『誰が主人公補正だゴラァァァァァ！？』……無駄のようね」
「僕はれっきとした男だ。女なんかじゃない！」

それぞれの思惑が交錯するなか、この番外章は始まりの時を迎えるのであった――――

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 思い出の一つ

One must not lose desires.
They are mighty stimulants to creativeness, to love, and to long life.

人は欲望を失ってはいけない。
欲望は創造性、愛、そして長い人生の強力な興奮剤である。

by Alexander A. Bogomoletz

一つ、僕――この矢島が君たちに一つ言いたいことがあるんだ。
なぁに、本当にくだらないことだよ。そして、くだらない中にもちょっぴり共感できる部分があると思う。
じゃ、いくよ。

『胸を強調するかのような服や、ブラや胸の開いた服を着ている女性が「男が胸ばかり見る」とか文句言う資格ねーだろ』

どうだい、くだらないだろう？
でも、これから記す物語には関係あるのかも知れないね。いや、本当に。

僕ら（僕とノア）は若干顔を引きつらせながら着々と準備を進めていた。お互いの顔を見合ってため息をついたり、しょうがないさ、とお互いを慰めあっていたんだ。
別にホモだとかいう類のものじゃない。ただ単に、自らの置かされた境遇の不満を、同じ位置にいる友と慰めあっているだけだ。
しかし、その都度女子が「どっちが受け？」「やっぱりノアちゃんじゃない？　攻めは矢島君にぴったりよ」といった、全く笑えないブラック過ぎてシュールなジョークに背筋が凍る。
そんな女子トークのネタになりながら、一生懸命周知に耐えていたのだが、そこで気分を変えようと思い立ち、ジャン・ルイという男子を呼んだ。
そこで僕は「ちょっとコゼットさんの所に行って見て来てくれないか」と頼み込んでみた。
正直、「俺は死にたくはない」といった返事が来ると思っていたのだが、以外にもジャンは承諾してくれた。

「じゃ、逝ってくる」

若干発音のニュアンスが違う、と思いつつも、どうせすぐ帰ってくるだろうと思い、ノアとおしゃべりをしていた。

それから、約二分後。

「う…うわあああああああ」

廊下に響き渡る絶叫。
僕はそれがジャンのものであると思って、急いで廊下に出た。
目指すは、女子の着替え室。

そこは、一面の地獄と化していた。

☆

「お、おおおーッ！？」

僕はそのあまりの光景に恐怖を覚えていた。そう、その言葉の指し示すとおり、僕は目の前の光景が信じられなかったのだ。
その光景はあまりにも美しくて、それでいて……。

「修、修羅……修羅がおった……」
「ジャン、大丈夫か！？　何があったんだ！」

僕は血まみれになっている級友を抱き起こし、ぺちぺちと数回ほど顔面を叩いた。
助けてくれ……と低く区唸っている口は、少しばかり切ったのか血を出している。彼の瞳には既に光は無い。
痛々しいその姿は、何かで切られたような傷跡が数箇所。それにあわせて頭から腕、足に渡って若干の出欠が見られた。

「くそ……アレは、まさに戦乙女って感じだ。気を、つけろよ……」
「一体どうしたってんだ！？　ジャン……」
「やべ……軽く頭を割られたか……あはは、血が止まんねえや……」

そんなやや自嘲の言葉を漏らすジャンの頭は確かに結構な血が出ていた。僕はそれをどうにか止めようとしたのだけれど、彼は不意に僕の腕を掴んで、

「……止めろよ……俺は放って置いてくれよ」

辺りは彼の血で赤く染まっていて、僕は若干の恐怖に駆られる。でも、ここで僕は彼を置いていくわけにも行かない。それならば、と僕は意気込んで彼に肩を貸そうとしていた。

でも、その時だった。

本当の恐怖を味わうのは。

「見……た……な？」

その声は、実体のあるような、とても澄んでいて聞き心地はよかった。だがその裏にある殺意が、その場の空気を一変させる。

僕はゆっくりとその声がした方向を、非常にゆっくりと、恐る恐る振り向いた。

その先にあるもの――それは女神、といってしまっていも良いような。

そして、その右手には既に抜刀している状態のサーベル。

そのうえ、その身にまとっているのは、薄い水色の……ウエディング・ドレス。でも、今の僕にそのことについてツッコミを入れることは出来なかった。

そう、松下曰く『少しデレの入った戦闘神』。

そして僕曰くは。

「……コゼットさん……い、いや……阿修羅……」

僕は無意識に後ずさってしまった。その圧倒的な存在感に。

そして、あまりの美しさに。

僕はいまだにメイドの格好をさせられているがゆえに、走ることは難しい。かといって、あの阿修羅モードのコゼットさんに太刀打

ちできるとは思えない。
逃げられない。
僕の心にサイレンが鳴り響き、頭から何かが分泌されるような感覚に襲われる。
足が動かない。腕も、腰も。
僕は――死ぬのか。

「止めなさい！　コゼット！」

その時だった。
この廊下に響き渡ったのは、いつも聞きなれた会長の声。なぜこの場にいるのだろう、と考えた。しかし、コゼットさんのインパクトが強すぎて、曖昧なままの脳ではいまいち結論が導き出せない。
でも、その思考はすぐに消えた。なぜなら、会長が僕を守るように、僕の目の前に立っているからだ（ちなみにこの時、思いっきりジャンを踏み付けていた。しかもジャンは若干嬉しそうだった）。
会長が「大丈夫？」と言いたそうな顔でこちらを見てきたので、僕も二回、縦に頭を振った。

「か、会長……彼女は一体どうしたって言うんですか！？　アレは流石にヤバイと思うんですが！」
「……いや、私たち女子が彼女にメイド服を着させようとしたのだけれど、彼女は頑なに拒否しちゃってね。で、しょうがないからウエディングドレスならどうか、って言ったら承諾したのだけれど……」

そこで、会長の額に汗が流れる。

「よりによって、このジャン・ルイという破廉恥なバカが覗きに来たのよ。で、激憤したコゼットが暴走しちゃって。私たちも当たり

前として傍観していたわ。でも……何故か『松下殺す』とか何とか言いだして……」
「……で、今に至るわけですか」
「そうよ……と言うか、立てるなら立ってくれない？　そろそろ攻撃が来そうなんだけど」

僕は恐怖に屈している体に鞭打ちながら、よろよろと立ち上がった。
しかし、これからどうしようって言うんだ？　あの修羅状態の彼女を相手にして、生き残れるっていうのだろうか。
だが、それでもただ会長は怯みもせずに、ただコゼットさんを見つめていた。
そのあと不意に、会長が口をあけた。

「コゼット、聞こえてる？　私よ、フィルナ・ブランフォードよ」
「フィルナ……？」
「ええ、そう。そして、私はあなたの秘密を握っているただ一人の人間」

そういった瞬間、コゼットさんがサーベルを床に落とし、今までの修羅の如き雰囲気を更に増大させてこちらに突っ込んできているのが見えた。あれは、そう、まさに……嵐。
――秘密ってなんなんだ？

「あーあー、コゼットの好――」
「言ったら許しませんよ！　フィルナ嬢！」

そこで、ようやく気づいた。
コゼットさんの持っていた雰囲気が、一瞬のうちに騎士のものになっていたんだ。しかもそれとはまた違った、緩やかな雰囲気。も

ともと彼女自身が持っていた雰囲気が、彼女に戻っていた。

「あはは……」

やや皮肉な笑いをしつつも、何とか彼女が戻ったことに一安心。

僕は、もう戻ろう。とういうか疲れた。寝よう。

それが、この十分のなかで起きた一つの小さな思い出だった。

☆

でも、それはこの先も続く長い長い人生における、たった小さな思い出に過ぎない。

これが、この関係がいつか変わってしまう。あるいは、離れ離れになってしまう。

この瞬間を、もう一度再現することは二度と出来ない。だから、僕たちはこうして生きているんだ。

二度と後悔しないように。

何時離れたって、涙を流さないように。

☆

「……もう、ゴールしてもいいよね……？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

『姫』

Ｉ ｆｉｎｄ ｔｅｌｅｖｉｓｉｏｎ ｖｅｒｙ ｅｄｕｃａｔｉｎｇ. Ｅｖｅｒｙ ｔｉｍｅ ｓｏｍｅｂｏｄｙ ｔｕｒｎｓ ｏｎ ｔｈｅ ｓｅｔ， Ｉ ｇｏ ｉｎｔｏ ｔｈｅ ｏｔｈｅｒ ｒｏｏｍ ａｎｄ ｒｅａｄ ａ ｂｏｏｋ.

テレビは非常に教育的なものだと思う。

誰かがテレビをつけると私はいつも別の部屋に言って本を読むからだ。

ｂｙ Ｇｒｏｕｃｈｏ Ｍａｒｘ

問題っていうのは、ほんの小さなことから発生する。

何時、どういう風に、そしてそれの発生が僕らには予想できはしない。しかも、その問題を解決するのに膨大な時間と労力が必要になってくる。

だから僕はその問題を先に見つけて排除しなくてはならない。これが、周りの人が自分のせいで傷つかないようにするための出来ることなのだから。

☆

あれから一週間が経過し、学院祭の活気が息づく学校。

僕はがんばって学院祭までにクラスの出し物を完成させようとしてせっせと作ったりしている人の隣を通り抜け、まっすぐある場所へ歩いていた。

僕はそのままっすぐ行き、見慣れたドアの前に立つ。そこで二

回程度ノックをし、中に居る人物に対して入室許可を得る。

「失礼しますよ」

僕は適当にフレンドリーな感じに言った。これは別に怒られることを覚悟して発言した訳じゃない。怒られないからだ。事実、目の前に座って書類を処理している人物――フェイル会長は全く怒った雰囲気を出さずに、僕に対して軽く手を上げた。

僕はさっきここへ呼ばれた。何故かは知らないのだが、『即刻来なさい』と言われたのであれば、そこそこ重要なことなのだろう、と僕は思った。

そこで、会長は僕にこう言った。

「覚えてるかしら。『姫』に関してのこと」

ああ、と僕は思い出した。確かこの国の『姫』が学院に転入するんだっけか。すっかり忘れてしまっていた。

「いい？　今日にも『姫』が来るらしいから、ちゃんとエスコートしなさいよ。分かってる？　矢島」

「ゑ？」

「『ゑ』じゃないわよ。今日『姫』が来るから、エスコートしなさいっていっているのよ？」

会長職に着く彼女は、せっせと大量の書類を処理しながらそう僕に指示した。そこで僕は初めてカレンダーを見た。そうだ、今日が『姫』の転入する日じゃないか。今まで学院祭のことに集中していたおかげで全く気がつかなかった。

僕はフェイル会長に一言告げ、急いで自分の部屋に戻り、きちんとした礼装――制服に着替えた。

そこで、着替えながら自らの思った疑問を考えてみる。
今まで考えていなかったこと。それは非常にシンプルなことだ。
なぜ『姫』がこの学院に転入するのだろうか。
『姫』という立場で考えれば、彼女――プリミル・プリミッシェルにとって言えば、彼女自身は指揮官だ。そして僕たちは軍人、つまり『駒』に過ぎない。それならば、彼女の歩むべきはそれ相応の施設へ行くべきじゃないのか。
でも、それは彼女自身も理解していないのかも知れない。いや、知らなくても僕たちは上官の指示に従うのみ。余計なことは知らないほうがいいのかもしれない。
僕はそう考えたところで、制服の着替えを終わらせてしまっていた。
急ごう。僕の中でその思いが、先ほどの思考をシャットダウンさせた。

☆

この学院は無駄に広い。その為、『姫』が到着するまで時間はあったとしても走らなければならない。事実、『姫』あと十分ほどで校門の到着する。自分の部屋から校門まで走れば間に合うだろう。だが、もし『姫』の方が早く着いてしまったらいけない。人を待たせることはいけないことだ。それも、国家権力を将来的に有する人物となれば尚更のこと。
そんなことがあるために、僕は本気で走った。
そしてようやく校門に着いたとき、全力で走ったおかげなのか、幸いにしてまだ『姫』は到着はしていないようだった。
「……っと、危ないところだったな……キツイけど」

僕はもうすぐで来るであろう『姫』に、今の息切れ状態の自分を見せるわけにもいかないので、すぐ傍にある木の木陰に入り、壁に手を付いて呼吸を整えた。
汗は出てはいないので『姫』に不快な感覚を与えないとは思うが、まだまだ夏真っ盛りな今、汗はすぐに噴出すのだろう。出来れば自分としてもこの暑さから逃れたいので、早く『姫』には来て貰いたいものなのだが。
……と、そんな僕の願いを叶えるかのごとく、何かが土煙を上げるような、そしてやはりどこかで聞いたことのある軽快な音が聞こえる。
そして、何処からか馬らしき声が。
いや、まさかそんな……。

「……マジかよ」

まさかではなく、本当に馬車だった。
もう一度馬が声を上げ、学院の校門の隣につけられる。
そこからおいでなさったのは、一人の美少女。

「プリミル様、お手を」
「ありがとう」

従者であろうおじいさんがその美少女に手を差し伸べ、その手の平に柔らかい仕草で手を乗せる。
すべての行動において気品というものが感じられた。それは、この学校では感じたことのない、見るものに優雅さを見せ付けるような。
それに加えて彼女の容姿がこれまた眩いばかりの美しさ。きれいな桃色の髪にしなやかで白く、美しい腕や足。人為的に作られたのでは、と疑ってしまうほどの整った顔。すべてを見繕っても、最上

級の人だ。

「あら……♪」

そこで彼女は僕の存在に気づいたようだ。

「ああ、僕は――」

「いいえ、こちらが先に名を名乗るのが礼儀だったわね」

そこで僕の紹介を遮り、その今にもはじけそうなくらいの胸を揺らしながら（そのふくらみを見ずにはいられなかったのは秘密だ）、彼女は優雅に話し出した。

「私の名前は『プリミル・プリミッシェル』というわ。これから仲良くしてね♪」

とろけるような声。

僕はその声に少し心奪われたようで、少し惚けてしまった。そんな不甲斐無い僕は、今の自らの状態を修正して、出来るだけ上ずらない声で自己紹介しようと心に決める。

「あ、はい。僕の名前は『ヤジマ』といいます。よ、よろしく」

「んもう、そんなに緊張しないでね？　私が王女だからって、そんなに畏まった風にされるのは嫌よ～？」

難しい人だな。

「じゃ、じゃあ行きますよ。学校を案内しましょう」

「わかったわ」

そういうと、彼女は僕の隣に付き、春の日差しのような笑顔を振りまきながら僕の腕を勝手に組んだ。
僕はそれを拒むことはできず、結局成すがままにされる僕の腕。
が、その時に何処からか殺気のようなものを感じた。
その出所は……

「お嬢様、そういうことを易々となさいますな」
「ええ～？　駄目なの？」
「何をおっしゃいますか！　あなたがそのようなことをなされば、この小僧が調子に乗ってしまうではありませんか！　お嬢様は一国の姫なのですぞ！　もっとご自分のお立場をお考えくださいませ！」
「ふんだ、そんなことを言うから爺やなんて嫌いなのよ、もう！」
「な……こ、小僧……貴様さえ居なければ……」

そこでなぜ僕を睨むのかは全く分からない。
その爺やと言われた人が、このお嬢さんを娘のように思っていることは分かった。ふむ、それで僕は恨まれているのだろうか？
しかもこの娘、物凄くわがままな気がする。流石は姫って奴なのだろうか？

「じゃあ、行きましょう」

そんなこんなで、僕らは歩き出す。
彼女が僕たちの運命をどんなに狂わせ、そして狂気の世界へと引きずり込むのか。
例え、それが決定されていたものであっても、覆すことの出来ないことであっても。

僕は、そのときばかりは。

その時ばかりは、それを考えることすらしなかった。

to be continued・・・

## 『姫』（後書き）

姫のモデルだって？

プリンセスラバー！　のヘイゼルリンク嬢に決まっているじゃないか…

ちなみにコゼットはシルヴィアね

本編はイイ感じに不思議化してきました。

## 『姫』の思い付き

Ｉ　ｎｅｖｅｒ　ｔｈｉｎｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ　－
ｉｔ　ｃｏｍｅｓ　ｓｏｏｎ　ｅｎｏｕｇｈ．

私は未来のことは決して考えない。未来はすぐにやってくる。

ｂｙ　Ａｌｂｅｒｔ　Ｅｉｎｓｔｅｉｎ

☆

人生の中でもっとも成功するときは何時なのだろう。多分その時は自分自身が気づかない、ほんの一瞬の時なのだろう。

例えば、女子にモテるだとか恋人が出来る、商売が上手くいったとき。そんな時に僕らは勝手に『成功している』と思い込んでいるんじゃないだろうか。

でも、一概に言えることは、それらが全て『運』が付いて回る。そして『幸福』って言うものは、全く予期せぬときにばかりやってくるもの。

……何が言いたいかというと、僕はその時の中に居るのかもしれないってことだよ。

☆

僕が最初にプリミル・プリミッシェルというお嬢様と出会ってか

ら、もう一週間が経つ。この間に、僕は彼女を観察しようと思い始めた。

まず一つ目。

彼女はとても天真爛漫だということだ。それが行動の一つひとつによく現れている。

出会って僕は彼女の付き人らしい人になった。だからこそ、よくそれが分かる。彼女はいつでも子供らしい、無邪気で見ているだけでほほえましくなる。いわゆる子猫みたいな人だ。

そして、それがもっとも現れているのが発言。

元々育ちがいいのか、それとも甘やかしたのか。それは全く計り知れないことなのだけど、どちらもあるんだろう。時には場を和ませたり、時には奇妙なほどに的確な所を突いてくる。

流石、権力者の娘って感じがする。

そして二つ目。

彼女は隔たりなく、自由に接している。

僕としても、それは凄い、と思わざるを得なかった。いや、何しろ親友に『嫌いな奴には意地でも喋り掛けない。それが女子なら尚更だ』と豪語する人物が居たものだから、少し感動してしまっていたんだ。

でも事実、そのスキルは社交界などにおいては非常に大事だと会長に言われたことがある。考えてみれば確かに納得できることだ。社会には、自分の気に入らない人が少なからずいる。だけども、それに嫌でも作り笑いをして酒を飲み交わさなければならないときもあるのだろう。だからこそ、彼女のスキルはとても有効だというわけだ。

そして三つ目。

そしてこれが重要になるのだ。

彼女は……彼女の一言だけで、僕らのクラスの出し物を変更してしまったのだ。
むしろこれは歓迎すべき、といわれるだろうけど、僕はそうは思わない。なぜなら、変更内容があまりにも恐ろしいものになっていたのだから。
それは、彼女の発言からだった。
あの一言で、僕らの出し物は一気に覆され、剣技系主催の学院規模の出し物へと変貌した。ああ、そうさ。僕らの企画していたものが取り消されたのさ。
その時の、すこし簡単にまとめた話をしよう。
あれは、彼女が偶然僕らの教室に来たことから始まったのだ。

☆

あれはまさに、電撃のような衝撃だった。
時は放課後の、ある日の事。
僕らは松下の残したメイド服（の設計図？　みたいなモノ）を元に、女子の手を借りながら着々と服所の製作に取り掛かって準備を進めていた。
もうその頃には、僕は完全に吹っ切れていた。ここまでやるのなら仕方ない、徹底的にやっちまおう、という僕の自棄になった考えが、積極的に僕を男の娘に仕立て上げていった。でも、一応は百七十センチはあるので、女子にしてみたら物凄く背が高い。だから結構服に関しては時間が掛かるのだ。
……そんな前置きはどうでもいい。
「おっはろ〜！　来てみたわよ〜！」
あるとき、その声が教室内に響き渡る。その声はとても澄んでおり、乾いた心に芯から潤すような、艶のある滑らかな声。僕らはそ

の声を聞いた途端にああ、彼女が来たか、ということが分かる。
僕もその声をたくさん聞いているので、わざわざ見なくても分かる。この声は『姫』だ。
すると、ある一人の男が率先して『姫』のところへ歩み寄った。
「ああ、これは『姫』ではありませんか。どうしてこんな紳士・淑女の集まりに？」
ジャンが至極正論を述べる。それもとても紳士風に。実は彼は今、紳士モードと化している。なぜか、なんて野暮なことは聞かないでほしいが、彼はいつもプリミルの前では紳士モードになっているのは確かだ。
その問いに、彼女は『？』という記号を頭に浮かべて頭をかしげた。
「私が居ることに、何か不都合でもあるの？　やっぱり不味かったかしら……」
「あ、いえいえとんでもないですよ！　我々は、どんな人物が来ようとも大歓迎なのです！」
「ふふ、ありがとう♪」
「ああ、その美しき笑顔、その眩いばかりの髪……っくゥーー！　生きててよかったァーーイ！」
「……喜びすぎだよ、ジャン」
ジャンをそこまで狂わせるとは、ある意味彼女は物凄く危険なのかもしれない。
そんな喜びまくっているジャンを華麗にスルーし、彼女はキョロキョロし始めた。その視線が、やがて僕の所に視点が定まるやいなや、

「あら、矢島じゃない。どうしたの？　そんな召使さんのような服装をして～」
「え！？　こ、このメイド服のことかい？」
「メイド服……？　ああ、あなた達は召使の服のことをメイド服、というのね？　勉強になったわ～♪」
「……やべッ、恥ッ！」

なんだか、物凄く恥ずかしい。
このクラスの男子の視線には慣れたのだが、やはり本当の女の子からそうまじまじと見られるとかなり恥ずかしいというかなんと言うか。
だが一応僕だって立派な男子だ。流石にここで動じるわけにはいかない……と心の中で決意したときには、既にプリミルは目の前にはおらず。

「まあ、こちらは可愛いメイドさんね。お名前はなんていうの？」
「あわわわわわわ……本物の姫が……しかも僕って女の子に見られてるの！？」
「ふふ、やっぱり可愛いわね♪　最近の女の子って、僕っ子が多いのかしら？」
「僕はれっきとした男の子ですよ！？　断じて女の子なんかじゃないんだあああああ」
「？」

また彼にトラウマが生まれたようだ。
「それにしても、あなた達はどんな出し物をするの？　ヤジマがメイド服を着ていることに関係しているのかしら……？」
その疑問をいち早く察知したのか、さっきまで喜び悶えていたジ

ャン・ルイが一瞬のうちにプリミルの傍まで接近し、先ほどの紳士モードを展開していた……仕事速えぇー。

「私達が計画しております出し物は、このクラスを使った『ボーイズ&ガール喫茶』というものを企画しておりまして……」

「ふぅん、どんな企画？」

「それがですね、なんとあのヤジマとこのクラスのポカリスウェットと言われる可憐なノア嬢と、クラスのアクエリアスといわれる美しき騎士、コゼット嬢をお客に奉仕させようというのです！！」

「え？　奉仕って『禁則事項です』とか『ピーー』とか『ズキュウウウン』？」

「……姫様、何処からそのような低俗な言葉をお知りになったのですか……」

「違うの？」

「違います！　決してそんな『ズダダダダダ』や『ＷＲＹＹＹＹ』や『検問より削除』などということはさせられません！　というか我々が許しません！」

ジャン、君こそその口を閉じて脳内にある姦しい単語を全消去したまえ。

「と、とにかくですね、我々はそのようなことをします」

「……でも、なんかデジャヴねぇ……在り来たりだわ。どうせするなら、もっと派手にやらかしたらいいのに……」

そんなことをいうプリミルに、少しジャンは疲れた口調で、

「じゃあ、あなたならどうしたんです？」

「そうね……あ」

すると何かをひらめいたように可愛い表情を称えながらポン、と手を叩くと、プリミルはこう言った。

「そうだわ！　ミスコンをしましょう！」

「「……ゑ？」」

みなが唖然とした表情になる。

……さっき、『しましょう』っていったのかい？　僕の聞き間違いじゃない、よね？

……ゑ？

……。

……。

…。

一応、確認はしてみるか。

「……あの」

「？」

「しましょうって、まさか本気かい？」

「ダメなの？」

「え？　いや、ダメって訳じゃぁ……ないけどさ」

「じゃ、決定ね♪」

「あの、そうじゃなくてさ……もう既に生徒会側に提出してしまったし――」

ガラガラ…ッ！

その時、誰かがこの教室に入ってきた！

そしてその人物がいきなり発する言葉が――

「いいわよ、許可します」

「会長！？　何故にここへ！？」

そこには、悠々自適の言葉を体言なさっているフェイル会長がいたのだ。

僕は正直恐ろしかった。何が恐ろしいかって、何故タイミングよく、そして『許可』するのだろうか、と。

しかし、相手が相手だ。彼女に言葉と命令は通じない。

「私達生徒会は、『姫』であるプリミル・プリミッ――なんだっけ？……ああ、プリミッシェル嬢の願いを叶えることこそ存在意義が成しえるのである。例え、『姫』が『一晩で家を作れ』と言われたのなら作らなければならない。よって、先ほどの案は議決、このクラスの出し物はそれにする！！」

「「賛成！！」」

「……」

僕とノアは声が出なかった。おそらく、この場にコゼットがいたなら、彼女も同じ行動をしていただろう。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 『姫』の思い付き（後書き）

やられた。
母上にインターネット回線を遮断されてもうた。ケータイで投稿。
実は、よりによって番外編で詰まったので、メイド喫茶は止めざるを得なかった。
（本当はしたかった）

## 黄昏

Ｙｏｕ ｃａｎｎｏｔ ｅｓｃａｐｅ ｔｈｅ ｒｅｓｐｏｎｓｉｂｉｌｉｔｙ ｏｆ ｔｏｍｏｒｒｏｗ ｂｙ ｅｖａｄｉｎｇ ｉｔ ｔｏｄａｙ.

責任を今日逃れることによって、明日の責任から逃れることはできない。

ｂｙ Ａｂｒａｈａｍ Ｌｉｎｃｏｌｎ

僕はこれほどまでに運命を呪ったことはない。恐らく、これから生きていく人生の中でも、これ以上呪うことはないだろう。

この世は『運命』というものが在って、 これから起こる事柄はすでに決定されているのか。それは古代からの疑問だ。そして、今。僕らが生きているこの時にも続く難問だ。

でも、僕は確かにこう思う。

『この世には連続するどうすることもできない『運命』というものが存在する』

そして、僕はこの『運命の奴隷』なのだろうか？

僕は……それが知りたい。

☆

ここ、生徒会室というところはあまり一般生は立ち入ることはな

い。元々『クラスのエリート』として選出された人たちがここに集っている為に、必然的に近寄りがたい雰囲気を醸し出しているからだ。それを言葉にすれば『見えないエリートオーラ』といったところであろう。
そんな殺伐とした生徒会室に続く廊下も、この夏の陽気のおかげで、前述した『見えないエリートオーラ』の効果も薄れているようで、生徒会室では結構な人数が揃っていた。
そんな中、少し制服をはだけさせて少しでも涼もうとしているのは、この生徒会長フィルナ・ブランフォードだ。彼女は胸を特に涼ませようと思っているのかは知らないが、結局は胸を強調するような着方をしている。（ただし、彼女は貧乳であるがゆえに男子からの視線はない）

「あっづぅ～」

一応氷系統の魔法を使って部屋の温度を下げているのだが、あいにくとこの生徒会室には十人近くの人間がおり、なかなか温度が下がらないのが現状だ。
はぁ～、よ、憂鬱そうに溜息を吐く。
彼女はここ最近、文化祭のことで大忙しだった。許可申請が出されたならば会議を開き、また別の案件での書類審査。フィルナにとってはこの時期が一番嫌いだった。

「はいはい、そんなことでだらけないの！」

とても澄んだ声が、フィルナを激励する。
この声の主は、現会長の補佐をしている、この学院において最強と謳われる風紀委員長、パス・クルーエルだ。
彼女は生徒会役員ではないが、この生徒会においては副生徒会長というポジションを確立してしまっており、しかもそれに誰も反論

しない、ということが起きている。
　実際は副生徒会長が存在してはいるのだが、生憎とこの前の『スクールデイズ事変』に関わっていた為に生徒会内では若干居場所がないのだ。

「……全く、この間のことで意気消沈してんじゃないわよ」
「ひいッ！　すいません、あの時は僕の煩悩が理性を駆逐してしまいましたから……」
「んなこと聞いてないわよ！」
「ひいいいい！？　すいませんすいません！！　生きてて御免なさい！」

　――あれから、大体こんな感じだ。
　実はあの時、唯一彼だけが生徒会役員の中から『スクールデイズ事変』に参加していたのだ。しかも諜報とかそういった特命を帯びた者ではなく、ただ純粋に煩悩に従っていた。
　ある意味では素晴らしい人材であるのだが、彼自身も『国が学校側に与えた命令』を知っていたはずなのだが……そこのところは依然として不明である。
　そんな副会長を見下すような目と口調でフィルナは、

「謝罪の意があるのなら、ここにある書類を全部片付けなさい！
それとも……こう言われたほうが良いのかしら豚野郎！」
「ブ、ブタ野郎って……」
「あの～、フィルナちゃん？　流石に豚野郎は……」
「ブタ……」
「そうよ！　あなたは人間より劣り、家畜の底辺に位置しなければならない存在！　ここにいる事すら問題だわ……でもね、この心優しいフィルナ・ブランフォード様がこのブタ野郎に人間並みの仕事をあげようとしているのよ？　むしろ感謝されるのはこっち！　分

かったら……」
「フィルナちゃん！」
「仕事しろおおおおおおーーッ！」

すでにフィルナはぜいぜいと息を切らして、『ブタ野郎』と呼ばれた副会長を睨む。
そこで普通ならばフィルナに向かって副会長が一言言ってもいいはずなのだが……。

「ＷＲＹＹＹＹ！！　なんか僕の中で何かが目覚めましたァァァァァーーッ！」

その時の副会長は、何かに漲っていた。

☆

「で、結局抜けてきて僕らのクラスへ来たんですか？」
「そりゃ、ドＭに目覚めた気持ち悪い奴ち同じ空間にいられるわけないじゃない。あんなブタ、さっさと養豚場へ行けってーの」
「……フィルナちゃん、世間の目を気にしなさい」

所変わって剣技系の僕らのクラス。
物凄くテンションが高い会長を前にして、僕らは少しビビッていた。
……しかし、何故今頃になって出し物を変更にしてしまったのか。
「会長、流石に先ほどの提案は無理があると思うんですけど」
「ん、下っ端が私に意見しようというの？」

どこかいらいらしているのだろうか、何時になく会長は怒っているように見えた。鬼の形相――そんな言葉が心に浮かんだが、時と場合を考えれば、この際の口に出すことはしないほうが懸命のようだ。

しかし、ここまで会長がイライラを体で表しているとは珍しいものだ。

「んー、あの、会長――」

「はいはい、少し待ってね」

僕が何故怒っているのかを問おうとしたところ、いつの間にか出現していた風紀委員長のパスさんが僕の傍にいて、口を人差し指で塞いでいた。

「ん！？……」

「どうせフィルナちゃんに怒っている理由を聞こうとしたんでしょ。えっち」

そういった後、パスさんはすぐに唇から指を離して、僕の耳に届くような小さい声でしゃべり始めた。

「今日は彼女、アレの日なの」

僕はそれを聞いて、つい思わず会長の顔を凝視してしまった。なるほど、だからあれほど荒れていたのかと納得できる。

男には一生理解できない、重い痛みとか言われるが、正直全く分からない。だが、アレがそれほどの威力を誇っているということだけはなんとなく理解しているつもりだ。それに会長すらイラつかせるアレが大体一ヶ月に一回来るというから驚きだ。

「女の子の辛いところね。これが一ヶ月に一度来るの。男子とは大違いよ」

僕も異論はなかったのでそうですね、と同意した。

彼女もそのアレの力は身にしみて分かっているのだろう、いつもより声のトーン落ちているように感じた。しかし、流石は風紀委員長といったところだろうか、彼女はいかにも落ち着いた雰囲気だった。

「あなたなら、何時のときの時代の変換の時でさえも生き残れそうね」

その時、彼女がふとポロリ、と漏らした言葉がひどく小さくて聞こえづらかった。「え？」と僕は聞き返したが、

「……え？　あ、私、さっき何か言った？」

「……いえ、別に」

彼女はそれを覚えていないようだった。

☆

「はぁ、結局ノアちゃんとヤジマのメイド服姿をカメラに捕らえることが出来ず仕舞い、か。俺はどうやって生きていけばいいんだ……？」

「とりあえず、そのカメラを壊したらいいと思うよ」

「のあッ！？　……ノアか。びっくりさせんなよ」

「……なんだかね、ギャグに見えたよ」

二人は屋上に来ていた。
一人は何かを失ったように落胆し、もう一人は出し物が潰れたことによる歓喜を胸に抑えながら、日の暮れる地平線を見ていた。
――そういや、俺が故郷からこの国へ来たとき以来、ずっと夕日なんて眺めてなかったな――
ジャンは、暮れ行く太陽を感慨深く見つめていた。その光景は自分とノアの故郷である国でもいつでも見られる光景だったはずだ。いつから自分はこんなにも美しい夕日を見なくなったのだろう？
ジャンは無意識にカメラを構え、その茜色に染まる太陽を撮影した。そして思いついたように隣にいる友人に向かって一枚の写真を撮った。

「撮らないでよ。恥ずかしい」

ノアは黄昏ている自分の姿を撮られることに快く思っていなかったようだった。
しかしこの眺めから見えるノアの姿はとても人間だとは思えない。むしろ夕日を浴びた吸血鬼のようにさえ思えた。
ジャンは一つ軽く溜息をつき、ゆっくりと深呼吸した。

「……やれやれ、という奴かい？」

かつての仲間であった青年の口癖だった言葉。
彼は今、何処で何をしているのだろうか。ちゃんと生きているのだろうか。そんな、自分『らしくない』ことを思ってしまう。

「やっぱあんたスゲェよ……なんで、行っちまったんだ……？」

その言葉は、虚しくも茜色に染まる世界に吸い込まれて行った。

to be continued...

## 黄昏（後書き）

今理解した。
学院編は失敗だったと。

# 開式

Ｌｉｆｅ－ｔｒａｎｓｆｏｒｍｉｎｇ ｉｄｅａｓ ｈａｖｅ ａｌｗａｙｓ ｃｏｍｅ ｔｏ ｍｅ ｔｈｒｏｕｇｈ ｂｏｏｋｓ．

人生を変えるようなアイデアというのは、常に本から得られるものである。

ｂｙ Ｂｅｌｌ Ｈｏｏｋｓ

守りたい人を守る時、私達は非情にならなければいけない。
そうしないと、守りたい人が本当に守れなくなる。

☆

文化祭、当日。

ある剣技系のクラス。
そこには、そのクラス全員が出揃っていた。
僕はその真ん中に立ち、その男達を激励する。

「みんな、今日まで本当によく頑張って来た。途中、出し物が変わったりしたけれど、僕はそれはそれで良いと思ってる」

「それはただ単に自分がやりたくないだけだろー？」
「……まあな。とにかく、既に会場設営は完了している。みんな、各自の仕事を完璧にこなせ！　いいか！」

うおおおおおおお！
地面の地鳴りを思わせる男達の咆哮が、僕らの戦意を増大させ、活気付かせる。
今日は文化祭なのだ。絶対に失敗は許されない。いくら自分達の出し物が『女性を主にしたミスコン』だからと言って、任務は着実にこなすのが一番大事なのだ。

「ヤジマ、ちょっといいか？」

僕が会場に向かおうとして少し背伸びをしたとき、いきなり首根っこ掴まれて引きずられた。
掴んだ人は誰だ？　と思って顔を確認すると、

「ジャン、そろそろ離してくれよ」
「ん、すまん」

ジャンは正直に手を離してくれた。掴まれたところが少し痛いけど、これは別にどうでもいいことだ。
問題は彼――ジャンだ。彼は確か、撮影係で早めに行ったはずだったんだが……なにか問題でも起きたのだろうか。
僕はとりあえず首の筋肉をほぐし、どんとこい、という風な感じでジャンの言葉を待った。

「……」
「……」

そのまま見詰め合うこと、約十秒程度。
流石に恥ずかしいな、と思い始めた矢先に、先に動いたのはジャンだった。
「はっきり言って、これはお願いなんだが……」
そういうと、ジャンはどこかソワソワしながらそっぽを向きながら、少し顔を赤らめる。
……ん？　このパターンはどこかで見たことがある。何処だったか……確か、こういうシチュエーションは告白やら何たらの場面で見たことがある。
大体ライトノベルとかの十代向けの本には、こういったシーンをよく見かける。
つまり、僕はこのジャンから告白されるのだろうか……鬱だ。憂鬱にしかならない。
しかし、そんな僕の心境を無視するかの如く、ジャンは言葉を続けた。
「じ、実はな……お前にしてほしいことがあるんだ」
「してほしいこと……？」
「ああ。そうだ」
その真剣な顔は、それこそ彼の重大な決意の表れだと僕は感じた。
「いや……これは事実、君と『ノア』にしか出来ない特殊な事柄でね……。君に依頼することはただ一つ」
僕は、その先を聞きたくはなかった。
なぜなら、『ノア』という単語が出た瞬間に、もう既に予想が付いたからだ。

だからだろうか、僕の体は無意識に彼から逃げていた。

「くくく……まだまだアマちゃんだな、ヤジマ。お前のこれくらいの行動を予想できなくて何が盗撮家だ！　お前の行った先には既に部隊が設置済みよぉぉぉ～！」

「は……ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

僕の腕をグイッと掴み、決して逃がさないようにがっちりと力をこめるジャン。

「正直に言って置こう。俺は男が嫌いだ」

「じゃあ離してくれ。痛いんだ」

「だが、俺は『男の娘』には弱い」

すると、何時か見たような感じがした。

彼の動きはまさに一瞬だった。彼の手が魔方陣を描き、聞こえもしないような速いスピードで詠唱していた。

すると、彼の手から縄が出現して僕の体を縛り付けていた。

「な……ッ！？　しま……」

すると彼はにやりと笑い、じりじりと近づいてくる。僕は逃げられない。

彼はある計画を実行に移そうとしているのだろう、だからノアと僕を捕まえにきているのだ。

僕は恐怖した。逃げられないという恐怖、ジャンという個人に対しての恐怖。二つの黒い恐怖が僕の体を駆け抜ける。生ぬるい感触だ。多分今感じているこの感触は汗がシャツに染み付いているに違いない。僕はそんなことを、この絶対絶命の状況で考えていた。

すると彼は、

「もし抵抗するのなら……分かっているよな」
もちろん抵抗するに決まっている。
だが、彼は本気だ。ここで僕がじたばたと暴れてしまって彼の気分を害してしまったら、彼に掘られかねない。
そうして、僕は一生忘れられない舞台に立つことになった。

☆

「えー、本日はこの私達の出し物であるミスコンにお集まりくださいまして、ありがとうございます」
時刻は昼過ぎ。ミスコンの開幕である。
しかし、開会式の司会を務めているのは矢島ではなく、なぜかジャン・ルイが握っていた。
「……あれ？　ヤジマはどこに行ったの？　ってか、なんであなたがいるのよ？」
同じく司会という役割を担っているフィルナが疑問をジャンにぶつける。
その返しにジャンはニヤニヤと醜悪な笑み（そこそこイケメンなのだが）をしながら、
「いや、すぐに分かるって」
「すぐって、何時よ？　彼のことだし、遅刻することはないはずだし……あなた、何か隠してるでしょ」
「いいえ、全く隠してないですよ」

「あんたバカァ？　もうすぐ分かるってことは、隠してるって事でしょうが！」
「はっはっは、会長殿は推察能力がお高いことで」
「殺すわよ？　ブタ野郎……」
「ああ、もっと、もっと罵声を浴びせてください！　その美しい唇で、私をなじってくださあああい！」
「うわ……副会長並みの変体性……」

フィルナがジャンに向かって酷く軽蔑した目を送る。しかし、その目線を感じたジャンは更に興奮し始めた。

「ああ、ああ！　この感触……たまらん！」

この侮蔑の目線でさえ自らの糧にしてしまうジャンを、フィルナは正直キモいと感じていた。
なんだかなぁ、と感じる。

「はぁ、くっだらないことをやってしまったと今になって後悔し始めたわよ」

どうして私の周りには変体ばかり集まるのかしら、コイツもそうだし副会長もそう。松下だってクール変体だった。いかんせん、私は男運がないのかしら。
フィルナはそう考えると、無常に憤りを感じた。私が悪いんじゃない、全部ホイホイ寄ってくる男達が特殊なだけだ、と自分に言い聞かせた。

「さて、このゴキブリ以下のカスは放っておくとして」
「もっともっと！」
「死ね、クズ以下のゴミめ」

☆

とある三人組が、それぞれマイクを片手にしている。もう間も無く一番が入ってくる時間だというのに、彼らは司会の席を占領してしまっている。

そして、彼らが口を開くと、

「さぁ始まるざんすょ」
「いくでがんす」
「ふがぁー」
「まともに始めなさいよ！　というかいろいろヤバイネタ使ってんじゃないわよ！　それとあなた達誰よ！？」
「それがしは剣技系コース、ネス・クルルーシ」
「そして同じく剣技系コース、クロス・ジェファード」
「そしておなじみジャン・ルイ」
「消えなさい。私が殺る前にさっさと消えうせなさい」

フィルナが本気で殺しにかかってきたので、ネスとクロスはぴゅーっと立ち去っていった。

まったく、バカにも程があるでしょうに、と独り言を言いながら、フィルナはマイクを手に取り、先ほどのアナウンスの非礼を詫び、

「では、気を取り直していきましょう。まずは一人目！　リーム・フェイリュ―嬢の登場です！」

こうして、僕達の忘れられない思い出が紡がれていく。

to be continued...

**宴**

In men of the highest character and noblest genius there is to be found an insatiable desire for honour, command, power, and glory.

高潔な人物や高尚な天才の中には、貪欲なまでの名誉や権力、栄光への欲望があるものだ。

by Cicero

僕達は、この文化祭を通して何か足跡を残せるのだろうか。

……いや、別に残らなくてもいい。残るか残らないかは、実際に試してみるしかないのだ。

でも。

だからと言って、僕はこんな思い出は御免だ。絶対に。

☆

「……」

出演している人たちを見て、会長は呆然としていた。そして、一つの重々しい溜息をつく。

その隣で代行司会をしているジャンはそんな会長を見てなんだかなぁ……、という気分になっていた。
いくら話しかけても会長は出演している人たちを眺めるばかり。だが時には、自分の胸を触り、そこから更に大きな溜息をつく。

「会長、何を眺めているんですか。しかも溜息ばかりついて……」
「……」
「会長！」
「……ハッ！？　あなた見ているわね！」
「……あなたこそ何を見ているのですか」
「あ、いや別に……」

そこで会長はそっぽ向きつつ、大きく溜息をつく。
そんな会長の今までの反応を見て、ジャンは一つの仮定を導き出してみた。実際には彼女の一つの悩みを考察してみたら意外と簡単に導きだせたのだが。

「もしかして、会長は彼女達の胸とご自分の控えめの胸を比べてええええええ！！」
「あなたの度胸を買ってあげても良くてよ」
「ぐおおぉぉぉ……鼻がぁ……俺の東方は赤く燃え…いや、染まっているぅぅぅ」
「次言ったら、あなたを家畜小屋に入れて解体処分してあげるわ。だから以後、下手な口聞きは避けたほうが懸命よ」

絶賛流血中の鼻血をハンカチで拭きつつ、よろよろとジャンは立ち上がった。
しかしまだ血が出ているので、慎重に。
そんなジャンを、まるでブタ小屋の家畜を見て、『可哀想だけど、明日にはバラされて店先に並ぶ運命なのね』って感じの冷たい目線

を送りながら、再び出場者の方を向き直った。

「ふぅん、なかなかに綺麗な人が多いわね。少し嫉妬するわ」

「いえいえ、そういう会長も彼女達に負けない程に美人ですよ」

「あら、今頃媚び諂うの？」

「ええ、もちろんですとも」

「……」

「……」

しばしの無言。

「お、コゼットじゃない」

興味を無くしたのか、会長は前を向いたとき。

その先に、ちょうどこのミスコンに出演していたコゼットの姿を見つけた。

そして、会長は息を呑まずにはいられなかった。

彼女の服装……ジャンが前に見たウエディング・ドレスを更に美しく、華やかに。そして儚げにデザインされている。また、その気品あふれる服装を更に映えさせているのはコゼットの『騎士』としての自覚だ。

コゼットの姿は、まさに戦乙女としてではなく、ただ一人の、今まさにヴァージンロードを歩く花嫁。その時ばかりは、皆が呼吸するのを忘れるのだった。

そして、ただひたすらに冷たい表情を称えている。

「……きれい」

ただその一言に回帰するのみ。

ジャンもコゼットの美しさにひたすら呆然と立ち尽くすのみだっ

たが、やがて我に返り、感銘に浸る自分を律しながら息を一つ飲み込むと、

「す、素晴らしい……あのコゼットさんがあれほどまでに美しかっただなんて……」

「ええ、私も正直驚愕したわ」

会長自身も前にコゼットに対してドレスを着させたことがあるのだが、あれほどまで輝きを発してはいなかった。それがどうだろう、衣装一つであれほどまで輝いている。これは感嘆せずにはいられない。

しかし、同時に会長はコゼットに対して一つの疑問を抱いた。

（笑っていないわね……目は虚空を見つめて、心ここにあらずと言った感じ）

どうしてあれほど美しい衣装を着ているというのに表情はいつもの硬いままなのだろう。普通の女の子だったなら、ウエディング・ドレスを着るということはうれしくて仕方ないというのに。だけどもコゼットは表情を全く変えずに壇上を移動している。

しかし、隣にいたジャン・ルイは、はは～ん、なるほど、と何かを納得したようにしていた。

「どうしたの？　そんないつもの二倍は気持ち悪い笑みを浮かべて」

「いえいえ、コゼット嬢が何故表情を変化させないのかが分かったので」

「……どういうことよ、それ」

会長は首をかしげ、頭の上にはてなマークを浮かべる。

そんな会長に、優しく諭すようにジャンは言葉を選んで話を続け

た。

「彼女の心を読めば簡単なことですよ。彼女は自分自身の着ている服をあまり良くは思っていないんですよ」

「何ですって？　ウエディング・ドレスは女の子の夢よ。喜ばないはずがないじゃない」

「すいません、分かりやすく訂正します。ハッキリ言えば、彼女は自分自身に対して何かしらマイナス的な思考を抱えています。自分は女心がサッパリ分からないのですが」

「……分かんないわよ」

「……私もです。ただ、彼女の貞操観念から言えば、好きな男以外に自分のドレス姿を見られるのが嫌なんでしょう。実際のところ、私も含めてこの会場にいる人間の視線を一心に集めているのですから。彼女ほどの人間であれば、そこに恥を見出しているに違いないでしょう」

確かに彼女は一向に観客のほうを向こうとはしていない。それどころか、極端な露出さえしてないのだ。

それは騎士さながらなのか、なんなのか。

「ま、一つ言えるのは……松下が大きな影響を及ぼしているのは確かでしょうね」

「……そのようね」

そんな風に言い合いながら、コゼットの出番は終了した。

☆

僕は王子様にはなれない。そんなこと、誰にも言われずとも分か

っている。
だけど、僕はなりきることは出来る。心を偽り、体を望みに任せる。
そうして、僕は……。
「えっと、次はヤジマ・ユうううう！？」
司会の驚きの声が聞こえる。ああ、無理はないだろうね。なぜなら。
「なんで僕が……ミスコンに出なきゃならないんだよ……」
若干キツイ仕様になっている『メイド服特別バージョン：後巣路利』を着ている僕は、正直羞恥心で今にも壊れそうだった。
今にも壊れそうな自分の心の痛みを紛らわすために目をきつく瞑って、頭を振る。しかし、そんなことでこの悪夢が終わるのならば文句はないわけで。
そろそろ行かなきゃ。
僕は、フリフリのスカートみたいなものを踏みつけないように気をつけながら会場へ入場していく。
その途端に、会場のあちこちから黄色い歓声（男子も混じっているが）があがる。
「はぁぁぁぁ！？　な、なんだってえええええ！」
僕は……男、のはずだ。
☆

あれから僕は、ほとんどのことを覚えていない。
唯一つ覚えていることは、興奮したジャンが僕に抱きついて来ようとした所を会長が魔法で止めていたことぐらいだ。
ああ、まず結果を言わなくちゃならないね。
僕は、あのあと『男の子』だと言うことがバレてしまった。どこから情報が漏れたのかは知らないが、同時に出場していたノアも男だとばれてしまった。
でも、そこで頭を利かせたのがジャンだった。
彼は特別枠として『男の娘』も出場が可能だと言うことにしてしまったのだ。
やはり彼は恐ろしい人だ。ましてや彼を敵に回すことは絶対にしたくはない。
ついでに、結果は……というと。

「おめでとう、三位のヤジマちゃん！　なかなか可愛い格好だったわ」

そう囃し立てるのは、姫だった。
そういえば、彼女がこのミスコンを立案したんだったっけ。まぁ、そのとおりに『ミス』コンにはなったのだけれど。
まあ、僕としてもほめられるのはうれしい。それが物凄い美人の人ならば尚更。そこのところはキッチリ僕だって男だ、松下のような女子がイマイチ苦手ということはない。
今回のミスコンで、僕が三位、ノアが二位。そして、誰もが認めたのはコゼットさんだった。
彼女は表彰のときにはすっごい顔を赤くしていたっけ。あれは松下が惹かれるのも理解できる。残念だ、彼女も松下のことが気にかかるのは見え見えだというのに。

「うううう……僕は、僕は男なんだ！　それなのに……純正な女の子に勝って二位……鬱だ、死のう」

向こうでどう考えても女の子なノアが何かを飲みながらしくしくと泣いている。

何を飲んでいるのだろう。そういえば、少し顔が赤い気がするのだが……。

「おっす、ノア～元気にしてるか……って、お前が手にしてる奴は……」

「ああ酒だよ！　もうこうなったら自棄酒に浸るしかないんだよ！　大体何なんだい、僕の衣装は！　何で上が白い服、下が赤いズボンのようなものを履かなきゃならないんだよ！？」

そういえば、ノアは巫女装束だった。記憶を辿れば、あの衣装が彼を二位に押し上げた一因なのかもしれない。

彼の姿に魅了された男子はほとんどノアに票を入れていたな。あれは当然だろう。

「なんだかんだ言って、結局はみんな楽しんでいるんだな……」

「当たり前でしょう？　私達生徒会の管轄する文化祭なのよ？　面白くないはずがないわ」

そういいながら会長が隣に腰を下ろした。

「仕事はよかったんですか？　片付けないと、パスさんから一言言われちゃいますよ」

「大丈夫よ、仕事は副会長を罵倒して踏みつけたら感激して仕事を全部やるって張り切っていたから全部任せてきたわ」

なんだか想像が容易くできる気がする。
恐らく会長は『この豚野郎！　この程度の仕事なら、あんたのような人権も認められていない奴にもできるわよね、どうなのこの家畜野郎が！　ほら、どうしたの？　地べたに這い蹲ってでも出来るんじゃなかったの？　それでも私の家畜なの？　このご主人様があんたのような下等生物にわざわざ話しかけてやっているだけでもそこらへんの家畜より価値は高いのよ？　そのことに私に対する最大級の感謝とともに仕事しなさい！！』とか無茶苦茶なことをいいながらあの副会長をゴミみたいに扱ってるんだろうな。しかもそれにビクンビクンと悶えてながら仕事する副会長も。あの人、普通にいい人なんだけれど。

「ま、こういう文化祭も悪くはないわね。去年なんかよりずっと」
「え？　去年は何をしたんですか？」
「聞きたいの？」
「ええ」
「バトルロワイアルよ」
「へ？」
「スクールデイズ事変の戦いの規模を、仲間単位の全校規模でやらかしたのよ。そしたら、学校は倒壊寸前までぶっ壊れるわ、けが人は続出するわ、コンバットハイで無駄無駄叫ぶ男子とか邪気眼発動しまくった奴とか出現するわで、結構大変だったわ。ま、結局残ったのは生徒会チームだったけど」
「へぇ。生徒会が、ですか」
「まぁ、私なんかは後方で回復魔法で回復させたり道にタールを仕込むトラップをしたりする地味な係だったけどね。もっぱら敵を薙ぎ払っていたのはパスだったりするの」

聞くからに物騒な人たちだ。道にコールタールを仕込むなんて、まさにシンデレラが引っかかってしまったトラップそのものじゃな

いか。
確か、グリム童話の原作では、シンデレラが落としたのはガラスの靴じゃなくて金の靴だったのだけれど。考えてみれば、ガラスの靴なんてガラスの仮面より危険な代物だろうな。どうでもいいことだけれどさ。

「さ、次は舞踏会よ。文化祭が終わったら、すぐに準備に取り掛かるわよ。分かってる？」
「理解してます。でも、僕がドレスを着るなんてことをさせないでくださいね」

若干皮肉をこめながら言ったのだが、そのことを分かって尚「それもいいかもね」と言ってのける会長は、本当に凄い人なんだな、と実感したよ。本当に。

その時の僕は、平和を実感していた。
でも、考えてみればその時が僕の青春の終わりの始まりだったのかも知れない。
責任無しに平和を実感することは、あってはならないことだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 宴（後書き）

これで番外編は終わります。
次は……本編。
何とか読者様に分かるレベルかなぁ……

## Requiem for the air（前書き）

ここから松下編に入るのですが…

**Requiem for the air**

We are such stuff as dreams are made on, and our little life is rounded with a sleep.

我々は、夢の素に似て、ささやかな生もまた、眠りに取り巻かれている。

by William Shakespeare

奇妙な夢を見た。
本当に奇妙で奇怪な夢を。

その夢の始まりは、ただただ唐突に始まったのだ。
俺はその夢の中では、自分はおかしいことに女になっていた。しかし、その夢の中の自分に胸というものはそこまでなかった。
俺は、その夢に対してその時は疑問は感じなかった。
ああ、俺は女になっているのか。そういう思いがただただ自分の心の中を去来した。

その世界では、自分の名前が『イクス』となっていた。
――『イクス』。その名前は、自分には聞き覚えがない。
その名を、今、自分が持っている。しかも、女として。
奇妙なことだった。
そんな事を、俺はうっすらとした意識の中で一つの疑問に感じていた。
『イクス』として存在している自分は、ゆっくりと歩んだ。

ここは何処だろう。
見渡す限り、ここは人工物など一つもない。ただの、荒野。
何故俺はここに立っているのだろうか？　そんな当たり前の疑問が頭に浮かび上がる。
俺は俺だ。他の誰でもない。そのことを自覚してさえ今の状況は説明できない。
夢の中の自分――『イクス』。
彼女は何を思ってここにいるのだろう？
俺は、夢の中の自分を観察してみようと思った。例え、この世界が自分の脳が作り出した幻影だったとしても、これは何か意味がある夢なのかもしれないと思ったから。
彼女の心の中を覗き込んでみた。

彼女の心は空虚だった。何もない、ただの空っぽ。でもそれでも、彼女の心には一つの記憶があった。
かつての敵と再会したとき。
仲間がディラックの海に消えていったとき。
数々の生物を見、その一つひとつの生き物が死んでいく様を、自分は何もすることが出来ずに眺めていたとき。
その全てに悲しみが溢れていた。
彼女はかつて、神に抗った。
そして長い長い、旅の末に神に会い、その神を否定した。
彼女は、その生き方を恥じてはいないようだった。むしろ、恥じてしまったら仲間の死を無駄にすると思っているようだった。
彼女を見ていると、俺は彼女の生き方をもっと知りたくなった。
夢だとしても、それを知ることは構わないだろう。
俺は、彼女の中。秘められた意思を知るために彼女の心の中へダイブした。

☆

彼女は、遠い昔、人知れず誰かに生み出された。
薄暗い一部屋で、彼女は泣いていた。
親もいない。
生み出した人も見当たらない。
ただ、そこに自分がいる。
彼女の世界は、その薄暗い一部屋に集約されていた。
食事は彼女が空腹を覚えれば人知れず机に出されてあり、遊びたい、と考えれば幼い彼女にあった遊具が出現する。その過程で、彼女が望まないモノもあったのだが。
彼女が気づいたとき、それは三歳になる頃だったか――彼女は言葉を覚えた。
机に平然と準備されている学習道具。彼女はそれに興味を持った。
イクス。
その名前は彼女が自分につけた名前だ。
そして、彼女は天才だった。
自分が誰なのか、と言うことを既に五歳の頃に考えた。
なぜ、私はここにいるのか。

彼女は人知れず、ここから逃げることを考え始めた。
この狭い世界では、自分は耐えられない、もっと人と接してみたい。
イクスはそのことに希望を見出した。
彼女は心で『ここを出ることの出来る力』を欲した。すると、彼女の体の中が熱くなり、彼女はそれを『力』だと認識した。
誰に与えられたのか。そんな疑問は抱かなかった。ただ、彼女はここを出たいが為に、力を使った。

「消えろ」

瞬間。
光が、青白い光が辺りを包み込んだ。
俺はその光景に目を瞑った。
このイクスが俺の中の夢だとしても、その光景は酷く真実味を持ったものとして俺の頭の中に入ってきていた。
恐怖せざるを得なかった。
この少女は、俺より遥か高みへ上っている。精神にしても、力にしても。
次に目を開けたとき、彼女のたった一つの世界が崩壊していた。
彼女はゆっくりと歩き出す。
この先のことは知らない。ただ、殻から脱出できたことに無常の喜びを感じていた。

そして、彼女にとって既に帰る道はなく、新たな百億と千億の日々がイクスの前に在るだけだった……。

☆

「……ッ！」

自分の心の中で、何かが再構成される感じがした。夢が覚め、一気に現実に引き戻される、嫌な感覚。
俺は後味の悪い夢だったと思いながら辺りを見回す。
ここはエンプラス国の隣国『ランスロット』の中の港町だ。そしてここはその中の普通の宿屋。
寝違えたかどうかは知らないが結構首の筋肉が痛む。そしてついでに言えば、かなりの寝汗をかいて服がグッショリと濡れている。

疲れているのだろう、と心で肯定したとき、さっきまで見ていた夢の内容を思い出す。

「……イクス、か。彼女は何なんだ？」

夢に出てきた彼女は誰なのだろうか。いや……どうせ夢だ。この現実に関係はないはずだ、と心で自問自答する。

変なモノだ。ここまで後味の悪い夢だとは。レム睡眠の時は結構ぐっすり眠れるとばかり思っていたのだが。

しかし、変な気分だった。自分が女になっているなんて。

夢は脳が見せる幻覚やら何やら言われるが、別に女でなくても良いんじゃないだろうか。

一つあくびをする。寝たりないと思いながら近くにあった時計の針を見る。時間は朝だ。

どうしようか。これから。

時間は有り余るほどある。この先、２４時間をどう使おうか。計画を立てながら、俺はベッドから這い出した。

そのままカーテンを開け放つ。

眩しい。太陽の光が俺の冴え切らない頭をデフラグするかのようだ。

「……ったく、やれやれって奴だ。こんなレクイエムまがいの体験（エクスペリエンス）は変なもんだな……ん、飯でも食べるか」

俺は一回背伸びをしてから、服を着替えて朝食を食べるために朝の町へ繰り出していった。

時に、夢と言うものは自分の思っている以上に思いがけないことをすることがある。
その時の俺は、その夢を『ただの夢』だとしか思っていなかったのだろう。
俺は。その日から『イリス』の夢ばかり見るようになった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## Requiem for the air（後書き）

この話は松下の『夢』です。
特に深く考えないで、ああ夢なんだなぁ～っと読んで下さい。
一応物語の三人目の主人公みたいな位置付けなのですが……
まぁ、いつか人物紹介します。そこで詳しく説明しますよ。
とにかく、夢です。

## Requiem for the river（前書き）

松下の『夢』が入る場合は『Requiem』が題名に入ります。

# Requiem for the river

『根掘り葉掘り聞き回る』の…『根掘り葉掘り』…ってよォ〜〜。
『根を掘る』ってのはわかる…。スゲーよくわかる。根っこは土の中に埋まっとるからな…。だが『葉掘り』って部分はどういう事だあ〜〜っ！？葉っぱが掘れるかっつーのよーーーッ！ナメやがってこの言葉ァ超イラつくぜぇ〜〜ッ！！葉っぱ掘ったら裏側へ破れちまうじゃあねーか！掘れるもんなら掘ってみやがれってんだ！チクショーッ。どういう事だ！どういう事だよッ！クソッ！葉掘りってどういう事だッ！ナメやがって、クソッ！クソッ！」

by　ギアッチョ

闇夜の中にただ月光が光り輝く。その月明かりの下に、俺の意識はあった。
「ここは一体何処なんだ」俺はそう思った。
少なくとも、俺の記憶の中ではこんな闇夜を照らし出す月光下にいたことはない。ならば、ここは一体？
俺はそのままこの場に居続けた。ただただ、月明かりを見ていたのだ。そして、俺は気が付いた。

（またなのか……？）

意識がハッキリしていくうちに、俺はまた『イクス』の中に入っていることに気が付いた。窮屈でもなんでもない、彼女の中に。
途端に、彼女――イクスはふと立ち上がり、そして倒れた。
体が動かない。

俺は、彼女が何故倒れたのか考えた。
この娘、イクスはまだ五歳程度の幼い子供だ。しかも今は彼女の世界ではない。だとしたら、まさか空腹で倒れているのではないのか？
どうやら、そのとおりのようだった。彼女のお腹が小さく、くぅ、と可愛らしく鳴く。このまま行けば餓死は免れないだろう。
俺は彼女が考えていることを覗いて見た。興味本位だが、この娘は何を考えているのだろうか。

（……誰か、助けて）

――彼女は、誰かに救ってもらいたいと願っているようだった。それは当たり前だ。まだ五歳の子供が、親もなしに生きていける訳もない。
俺は彼女の体の中で、ただジッと時が過ぎ去るのを待つしかなかった。この月明かりの下、誰かが通り抜けるとも思わない。俺は彼女のことを気にかけた。
イクス。
彼女は俺の夢の中の住人だとしても、なぜか親近感を持ってしまう。いや、それは俺が彼女を自分自身だと思っているからだろう。俺は彼女が誰かに救ってもらうのを願いながら、彼女を感じていた。

「……ここで、死ぬの？　私、ここで……？」
（……）
「まだ……死にたくない。こんな所で……一人で寂しく死んでいくなんて……嫌」

俺は、心の中では「一人ではない。俺もいる」と言いながらも、彼女を励ますことの出来ない自分を悲しく思った。
実際、世界なんてそう上手くは行かないものだ。せっかく殻を破

って生まれ出てきた瞬間に死ぬなんて、自然界には在り溢れている。ただ自分自身が気づかないだけで、自分の周りにはそういった自然の摂理がある。

俺だってそうだ。食べなければ死ぬ。それも自然の流れ、力の流れに過ぎない。

この世に『神』なんて居るのならば、そうそうに救ってほしい。だが、結局は『神』なんて人間が作り出し、それを崇める対象としてしか存在しない。

そう、俺自身の作り出した『夢』に、神が存在するのならば。『神』が存在するのならば、今すぐこの少女を救って見せろ。

「……」

彼女は泣いていた。

今まで、ほとんど涙を流さなかった彼女が、今、悲しみに溢れている。

俺にはどうすることも出来ない。せめて、俺が代わることが出来るならば。

しかし、彼女は俺の予想を覆した行動をとった。

イクスは、何かに希望を持ったように、震える足で体を支えて立ち上がった。彼女が何を見て、何故そういった行動に出たのは分からなかった。ただ一ついえることは、彼女は意味を持ってやっていることだ。

彼女はよろよろと立ち上がり、次に小さな手を上に上げて大きく振った。まるで誰かに信号を送っているような。その行動にイマイチ疑問を持ちつつも、俺は彼女の中で彼女を見守った。

すると月明かりの中から、一人の男が走ってくるのが見えた。

男はすぐにイクスに駆け寄り、その小さな体に服をかぶせた。そして水筒とパンを何も言わずにイクスの目の前に差し出した。

イクスは何も言わずに受け取り、一気にパンを食べ始めた。よほどお腹が空いていたのだろう、勢いあまって少し喉に詰まらせてしまう。その光景を見かねたのか、男が水筒の蓋を開けてイクスに手渡し、彼女はそれを飲んだ。

俺はそこで初めて男の顔を見た。

一目見た感じは優男といった感じなのだが、それでいてどこか力強さを感じさせる。大体十八から二十代前半といった感じだろうか、若々しい男だ。そして、『イケメン』の類ではないのだが、それでもカッコいい男だった。

しかし、俺は奇妙なことを感じた。

男が背負っている武器、その武器に見覚えがある。

何処だったか、それを俺はここ最近見た気がするのだ。しかし、重要なところで思い出すことが出来ない。しかし、結局これは俺の夢だ、と思い、疑問を放棄した。

イクスは何とか全部食べ物を食べきった時、そこで初めて男に対して口を利いた。

「……あり、が、と」

たどたどしい言葉であったが、男はその言葉を聞いたとき嬉しそうな顔をした。その顔を見て、同じようにイクスも自然と笑うことが出来た。

男はイクスの頭をなでながら、こう聞いた。

「――君の名前は、なんて言うんだい？」

「……イクス」

「イクス、か。いい名前だ」

男はどこか夢現（ゆめうつつ）にその名前をかみ締めるように言った。

彼は一体誰なのだろう？　夢の中の俺でさえ、その正体を計り知れない。
ただ、彼の存在によってイクスが救われたことは確かだ。そこは感謝しなくてはならないだろう。
男はふと思い立ったように「ああ、忘れていた」と呟いた。
「俺の名前は……イタリイースト・カレッジ。変な名前だろう？」
「……ううん、別に悪くない。でも呼びにくい」
「うーん……じゃ、俺の二つ名から、『スカー』って呼んでくれ」
「……スカー？　傷…？」
「そう。俺は胸に大きな傷があるのさ。ま、気にするな」
自分から『スカー』と呼んだ男は、慈悲深い笑みを称えてイクスを立たせた。俺は一瞬、その姿がとても大きいものに感じた。
「一緒に、来るかい？」
「……うん」
スカーはイクスに手を伸ばし、彼女もその手を掴む。
これは……本当に夢なのだろうか？

☆

「……クソッ」
小さく舌打ちした。
これで二度目の『夢』だ。目覚めが悪いことといったらありゃしない。夢見が悪いといえばそれまでかもしれないが、やはりこういった類の夢はいつも疲れる。

夢が異常に現実味を持っているなんて、いざ目覚めてみれば気持ち悪いものだ。まったく、どうにかならないのか。
俺はとりあえずベッドから降り、汗でびっしょりの寝巻きを脱いで服を着た。
やはり首やら何やらが痛い。

「イクスにスカーだと？　興味深い夢なもんだ……二度寝したらまた『夢』見ちまうかな？」

寝たらまたあの『夢』に襲われそうになるかもしれない。そうなると、結局は起きているしかないのか。
現時刻は朝五時辺り。うっすらと日の光が差し込んでいる。早起きは三文の得とか何とか言われるが、実際三文は元の世界で大体三十円程度。別に早起きしても、それを長年続けなきゃ意味がないような気がする。
頭が『おい、まだ寝てな。脳はまだまだ休眠中だぜ』というシグナルを完全に無視しながら洗面台に向かい、顔を洗う。
鏡越しに見る自分の顔は、いつも以上に不細工に仕上がっていた。長年この顔を見てきたが、一向に慣れないのは何故だろう……

「やっぱ疲れているのかなぁ……でも休んだら余計に疲れるだけだろうし、どうするかな、今日……仕方ない、ここの図書館にでも篭るか」

適当に顔を拭き、背伸びをする。
その時、窓から涼しい風が吹き込んできて俺の頬をなでる。
そういえば、もうすぐこの輝かしい夏は終わる。この、長かった夏が。

「……そろそろ夏は終わり、か。次は……ＣＬＡＮＮＡＤ？　違う、

Ｋａｎｏｎ？　違う……ん？　秋シリーズは無いのか……？」

考えてみれば、夏は『ＡＩＲ』、冬は『Ｋａｎｏｎ』、春は『ＣＬＡＮＮＡＤ』。『リトバス』は春から夏にかけての物語。秋をテーマにした作品が無い。

「……俺にとっての秋は『夢』だったりするかもな」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

# 英雄

如何に至徳の人でもどこかしらに悪いところがあるように、人も解釈し自分でも認めつつあるのは疑いもない真実だろうと思う。

by　夏目漱石

俺は今日の朝から晩まで、この国ランスロットの港町に作られている図書館に篭りっきりだった。嫌になるほどの本を読破し、知識を蓄え、そして自己満足しながら帰路に着く。

さすが港町と言うだけあって、空気は潮の香りが微かにし、その空気を纏った風が俺の体を突き抜けていく。

午前中はいまだに残暑で暑く、町行く人々は皆汗を流していた。その中で、意外と空調設備が整った図書館に篭ることは、まさに幸福だった。考えてみれば、図書館といった施設は大抵は涼しかったりして人間の活動がやりやすい。それはそれで読書もはかどるものだから、尚更嬉しいものだ。

そんな折、一冊の本にであった。

その本はかなり古く、図書館の奥深くで埃を被ったまましまわれていた。その本に気付くことが出来たのは本当に奇跡に近い。

「異世界という概念とこの世界の関係」と題名が打たれたその本は、ザッと見たくらいで三百年程度は経過している。モノスゴク古い本だ。しかもこの本は意外と薄い。

俺はそれを読んでみた。

中身はそこまでなかった。簡単に言えば、『もしこの世界と同一の世界があるとしたならば、その世界は平行世界として我々の隣にある』と書かれており、その当時の人間が『平行世界』を考えていたという証拠だった。

しかし残念かな、俺が調べたところ、その考えは当時の学会で全く無視されており、その考えに賛同する人は居なかったという。
俺はその本を読んでみて、一抹の、否定せざるを得ないことを考え始めた。

「簡単に言えば、そういう『別の世界』に行くとか考えた人間は居ないわけで、つまり帰る手段は皆無だと。そういうことか？」

なんだかなぁ、とおもむろに溜息を吐く。
そうだ、元々自分が悪かったのではないだろうか。
俺は『確固たる理論で纏められた魔法』で帰ることばかり考えていた。だから学院に居た頃に次元を超越する魔法の案の考えをノートに纏めてフィリスに渡したのだ。ま、あのノートは理論は成り立ってはいるだろうが、その先が全く駄目だったのでどうでも良かったのだが……一応あのノートを研究すれば、意外と魔法が出来上がったりして。
……考えている時。やはりこれが一番の暇つぶしになる。

「どーでもいいや……飯でも食うか」

一応今は金は持ってきている。どこかで安い食事でもして宿に帰ろう。
俺はそう考えて、一番近くにあった店に入る。
そして適当な場所を陣取り、『今日のオススメ』と推薦されているものを注文する。そして気だるく水を一杯、適当にすすり飲む。
――その時だった。

「隣、よろしいかな？」
「？……どうぞ」
「おお、すまんね」

俺の隣に、一人の男が座る。
歳は俺より七歳程度上だろうか、なかなかの顔の熟成度だ。容姿的にはなかなかイケメンだ。
そしてその男は腰に立派な剣を下げていた。軍の人間だろうか？
俺はそんなことを疑問に思いながら男に質問した。

「軍人ですか？」
「どうしてそう思う？」
「いや、別に」
「フ……敬語は止めたまえ。君には似合わない」

俺の露骨な質問に、男はわざと驚いているのかどうか分からないような表情を見せ、そしてニヤリ、と笑って、

「ま、正解かな。私はご覧のとおり軍人だ」

男は本当は少しびっくりしているようだった。しかし、彼は表情を変えずに言ってのけた。それは彼自身の『別にいいか』と言った考えを表している気がした。しかし、別に不思議でもなんでもない気がした。なぜなら、彼自身の目は無邪気そのものだったからだ。
しかし、この男は何か別の、軍人と言うより貴族、のような感じがする。
そこで俺は一つ、言ってみた。

「この国の軍人なのか？　ランスロットの」

しかし、男はその答えには答えずに、二度、首を左右に振った。

「俺はこの国の軍人じゃあない。もっと言えば、この国の近隣諸国

の軍人でもないさ」
「なら何処なんだ？」
「聞きたい？」
「……まあ、一応」
「本当に？　本当の本当に？」
「……？」
「マジに聞きたいの？」
「じゃあ別にいい」
「……しょぼーん」

本来は擬音かなにかで表される文字を、この男は口に出していっている。少し危ない人なのかもしれない。

「私は、クルド国の人間だよ」
「クルド……ああ、あの牛タンの味噌漬けで有名な」
「そうそう、牛タンの味噌漬けで……じゃないッ！　決してS市杜王町でもないし、都市の花がフクジュソウでもない！」

俺はその『クルド』という国の名前に聞き覚えがあった。
確かコゼット・アナスタシアがその国からの留学生で、ついでにジャン・ルイもその国の出身だった筈。
そして男は話を続けた。

「……英雄で有名な国だ」
「英雄？」
「そうだ。戦いにおける天才、そして幾多の勝利を導いてきた戦士がそこにいる。その軍にな」
「英雄、か……くだらないものだな」
「……？　なぜそう思う？」
「英雄、という存在は、いくら民衆に支持されようがプロパガンダ

の材料でしかない。それに人を殺しておいて『ＨＥＲＯ』になるなんて失笑すら出る」

俺は『英雄』というものは好きではなかった。

『英雄』とは、常に民衆を導き、そして全ての行動を肯定できる人間でなければならない。それには『カリスマ』や『容姿』その他全てのステータスが高くなければならないのだ。

かの有名なナポレオン・ボナパルトはその点においてはとても優れており、かつては戴冠式で皇帝になったほどだ。

しかし、彼の末路は非常に悲しいものとなっているのは皆知っているだろう。

俺がそんな思いで居るのが分かったのかどうかは分からないが、彼は少し悲しそうな顔をした。

「――そうだな。英雄とは気苦労の多い職業だな」

「まるで、あんたが『英雄』みたいじゃないか」

「……かもな」

男は何か考えているらしく、その目はどこか虚空を見ている。

そんな隣にいる男のことは少し気になるものだったが、運ばれてきた料理の魅力に打ち勝てずにそのまま料理を頬張った。

すると男はそんな俺を見て、小さく溜息をついた。

「『英雄』って、そんなに良いものじゃない」

俺は何を唐突に、と思ったが、男がそのまま続けたので話しかけるのを止めた。

「英雄なんて、君の言うとおりくだらないもんさ。挫けたらいけない、負けたらいけない。戦いには絶対に勝たなくちゃならない。そ

んなものを目指す若者もどうかしてる」
「……そういうあんたは、一体『英雄』の何を知っている？」
「ああ、俺？　……そ、そうだなぁ～大体半分ってとこじゃないか？」

男は少し狼狽しながら、話を切るためにだろうか、一気に水を煽った。で、少し気管に入ったのか少し咳き込んで「大丈夫かい？」と店のおばちゃんに心配されていた。
俺は正直言うと、この男に対して少し興味を持った。
彼は何を体験したというのか。
彼にとっての英雄とはなんだろう？
俺は一心不乱に飯を食べるフリをしながら、彼と同じように水を飲む。
すると突然、男は俺の腕を掴んで来たのだった。　気持ち悪いと思って振り払おうにも、相手のほうに宝があるようで、全く動かない。

そのまま男は俺を睨みながら、

「君は『フィリッポ・リッヒ』という男を知っているか？　聖職者なのに人妻と不倫して画家になった男だ」
「い、いや知らない……ッ！」
「そうか。彼はなかなかにいい絵を書くのだがな。知らないとは残念だ」
「あ、生憎と俺は美術には疎くてな……ッ！　そろそろ離してくれないか？」

何かおかしい。
いきなり正確を豹変させて、迫ってきやがった。このままでは何をされるか分かったものじゃない。早く振り払わなければ。

しかし、彼の力はずっと強くなっていくばかりで、俺の力では遠く及ばない。手首を掴まれたまま一向に動かすことが出来ない。
だが、男はそのままの状態で口を動かす。
「君は『引力』を信じるか？　私とこの場で出会ったことに意味があることを！？」
彼はそう力強く言った。
『引力』だと？　コイツは何を言っているのだ？
「？……何を言っているのか良く分からないが……」
「そうか」
そこで俺は気付いた。彼の手の中で回っているものを。
それは確かに『石の矢の先端』だった。
その『石の矢』が、ある時急に止まり、その『矢の先端』が俺のほうを向いていた。
彼はそれを嬉しそうに眺め、俺に向かって、
「俺の『英雄』の話を聞いてくれてありがとう。お礼に、この『石の矢』をプレゼントしたい。まぁ、君が必要なければいいんだが……」
「こ、これは一体なんなんだ？　何故これを俺に渡す？」
「……人の行いとは必ずしも『意味』がある。そしてそれは『出会い』にしても同じだ……。そしてその『出会い』とは引力ではないのか？　君が私に対してどういった印象を持ったか分からないが……」
彼はそのまま俺の手の平をあけ、その石の矢を俺に握りこませるように手渡しした。

「私は『人材』を探してこの付近を旅している。……いつか、君が私に会いたいと思ったら、その『矢』に気持ちを念じてみてくれ。何時だって構わない。……いいな？　心の片隅にでも置いておくがいい」

「これは……」

「ただ、また出会うためのおまじないさ。信じなくともいい。だが、人は『出会い』という名の『引力』に惹かれていることは覚えていてほしい。……もちろん、私と君の『出会い』も一緒だ」

彼は俺の手首から手を離し、席を立つ。

「俺の名前は『ハンス・パーシヴァル』。君とは、いずれ、また」

そういって、彼は店を出て、この夜の暗闇に溶け込んでいった。

彼が言いたかったのは一体なんなんだろうか。そして、この石の矢とは……？

俺はただただ、彼の行動に首を傾げずには居られなかったのである。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 英雄（後書き）

プッチ神父を知ってるならば、この後の展開は意外と読めるかもしれません。

多分この章で主人公をチート化させますよ。その理由付けの為に『矢』を出したのですからね。

しかし……この小説は本当に人を選ぶようです。現時点でお気に入り登録者が３５名しかいない……。

いや、引力に引かれていると考えるんだ。

## 暑い日

It's choice — not chance — that determines your destiny.

運命を決定づけるもの、それは選択である。チャンスではない。

by Jean Nidetch

ハンス、と名乗った男と出会って、既に二週間が経過した。

あれから俺は、何度もあの『夢』を見ながら日々を送っていた。

このランスロットの町で。

彼から貰ったあの奇妙な『矢』は一応自分の胸ポケットに入れてある。別に彼が再び出会うためのおまじないを信じているわけではないが、こう見えても俺は占いとか言った呪いを信じるタイプだ。

くだらねーとか言われるだろうが、信じないよりはとりあえず信じるほうがまだ良いものだ。それで裏切られようが、それはその時にどうかする。それが自分のやり方だ。

俺は『矢』をどうにか調べられないのかなぁ、とか思いつつも宿屋をチェックアウトを済ませ、旅の支度をした。

そう、俺はこの町から出て旅を再開する気だ。

そこそこ重い荷物を背負いながら、宿のドアを開ける

すると、何時にも増して涼しい風が頬を撫で、そしてそれに追撃をかけるように熱い日光の光が俺の肌を焼く。

もう秋に近いのに、まだまだ季節は夏を残し、その清清しいほどの空が心の中をくすぐる。俺にとって、この季節の移り変わりが一番好き。

春から夏へ、夏から秋へ。秋から冬へ、冬から春へ。

この四つの繰り返しが、永遠に繰り返される。それぞれの季節が

終わりを迎え、新しい季節へと移り変わってゆく。人の出会いも同じ様なものだ。
そして俺は外へと歩き出す。誰と出会うか分からない、その大気(AIR)の下へ。

☆

いざ町の外へ出てみると、まずその暑さに心が折れかかる。
残暑のせいだろうが、流石にこれは、と心の中で愚痴らずにはいられない。
そんな時、いつも俺は心の中で素数を数えている。これもくだらねーとか思われるのだろうが、意外と落ち着くものだから不思議だ。

（落ち着け……2，3，5，7，11，13，17，19，23……素数は1と自分の数でしか割ることの出来ない数字、俺に勇気を与えてくれる……）

だが、非情にも太陽から発せられる熱は一向に収まらない。流石に体中が痛い。素数でも、それだけはごまかすことは出来ない、恐ろしい現実。
ああ、俺もう駄目かも知れねぇ。でもそんなことは無駄無駄、俺が倒れることは人生の中でもトップ3に入るレベルで無駄だ……あ、そうだったら魔法使えばいいじゃない？　ロシアで暖炉がなければウォッカを飲めばいいじゃない、そういうことか。
ということは？　ああ、数学より簡単じゃないか。熱いなら倒れる……じゃない、熱いなら冷やせばいい。
俺はそのことに気付き、すぐに氷魔法を展開させた。
シュッ……
一瞬のうちに消え去る氷。

そしてそのことに衝撃を受ける俺。
どうしようか。これ、消えちまったよ。
どうしたものだろうか。俺の体は今や現代っ子の体に非常に近い。機動力や体力が違うとはいえ、クーラーと扇風機に慣れた現代っ子を甘く見てはいけない。
体は自然と汗を出し始めた。そして体は冷房を。
このカラッとした天気の中、流石に素数では持ちこたえられなくなってきていた。いくら素数は砕けないからと言って、自然を打ち破るには力が足らない。
俺はそれでも足を前へ進めようとし――

一瞬のブラックアウト。

視界が酷くゆがむ。一瞬のうちに世界が沈み込む。意識が飛ぶ――
俺はそのことに全力で抗った。頭で三桁台にまで素数を数え、この世界に留まろうと必死で目を開ける。ここで死んだら絶対に死に切れない、そんな思いが、俺を現世にかろうじて留めていた。
そして数分。
俺は日陰でジッとしていた。
頭がクラックラする。なんだろうか、この感触。
熱中症、もしくは熱射病か。これでは旅を続けることは出来なさそうだ。
頭が少し痛く、汗が噴出しているようだ。俺は流石にヤバイ、と思った。
そんな折に、なぜか魔法を使おうと思った。
そして幸いなことに、俺はランスロットの図書館で白魔法の本を読破し、それを自由に使いまわすことが出来るようになっていた。
そして早速その魔法を自分に掛け、体力の回復を待つ。いくら白魔法で病気を治せると言っても、人の失われた体力を回復することは出来ないからだ。だからこの木影で俺は塩でもなめて体力の回復

を待つ。

（そういや、こんなにじっくり空を見上げることってあまりなかったな。何か懐かしいモノを感じる。……ま、こういう気持ちに浸るのもアリ、か）

頭の歪な違和感は既に消えていた。代わりにそこにあったのは、穏やかな感覚。

懐かしいようで、悲しいモノ。

だが、自分はそんな気持ちを一蹴し、もう一度空を見上げた。

雲が転々として、日照りは容赦なく地面を照りつける。そして決してアスファルトで舗装されているわけでもない道は、ゴロゴロとした小石で一杯だ。

俺は一度立ち上がると、日陰によりながらその道を歩いていった。

それにしても、まだ暑いな。このことを何回言っているのだろうか。どこか団子屋でもないだろうか。そうしたら、いくらでも団子を買ってやっても良いのに。…いや、とりあえずはいっぺん汗を流したい。

この日照りでは、流石の俺でさえ体力が持ちそうにない。さっさと涼みたいものだ。

――この先に川か何かがあればいいのだが。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 暑い日（後書き）

人生に疲れて来たよパトラッシュ……
もう…ゴールしてもいいよね…？

## ある城主の悩み

He hasn't an enemy in the world — but all his friends hate him.

彼には世界中に一人も敵がいない。しかし彼の友達はすべて彼を嫌っている。

by Eddie Cantor

ランスロットより遥か北――クルド王国。
その国は、ある一つの不名誉極まりないあだ名があった。
それは、ある意味で全くそのとおりであり、また別の意味で虚しいもの。

『国際武力における、最強にして最強の弱者』

それが、クルド王国であった。
そして、その国の都市の中心である城――ティンタジェル城のとある一室に、その国の女王である『エリン・グィネヴィア・クルド』はいた。
彼女は憂鬱そうに一つの大きな溜息をついた。

「はぁ……諸外国の言いなりとして国を動かしていくべきか……それともこのまま『彼』の影響力を頼りにしていくべきか……」

彼女は若干十八歳という若さでこの国の王座に着かざるを得なかった。それゆえ、まだまだ政治策略には慣れてはいなかった。しかも、王位に付いた途端に諸外国との折り合いの悪化。これは悩みの種にならない訳がなかった。

この国の武力はハッキリ言って非常に弱い。ある人物がこの国の戦闘力を見て『貧弱貧弱ぅ！』と声高々に叫んだからも、どれほど貧弱なのかが想像できるのだ。

大体、この国は武力を持つことよりも国力の増加を図った。

それのおかげで、人工は決して多くはないが、国全体にさまざまな事業が展開できた。それは先代の女王のおかげなのだ。

だが先代女王が死んでしまったことによって事態は一変する。

先代からの付き合いだった近隣国のリンドバーグがなぜか敵対関係になってしまった。貿易は打ち切られ、お互いの国に出入りさえままならぬ関係。

無論、それはエリン女王が一番分かっていることで、いまだ若い彼女に圧し掛かっているストレスの一因でもあった。

――このままじゃヤバイ。うん、それは分かっている。このまま行けば、リンドバーグから攻められてしまう。

でもかといって此方から攻めるのは絶対に不可能だわ。……そう考えると何だか癪だわ。でも、今まで武力を養って来なかった私達が悪いってことは分かる。スゲー分かるわ。

ああ、どうすれば良いのかしら？

エリンは王位を継承してからまだ一年と経ってはいない。彼女はこの状況において、どう行動すればいいのか分からない。

むぅ……、と頬をつきながら一段と大きい溜息を吐く。

その時、扉をあけて一人の人間が入ってきた。

誰だろう？　私の許可なしで入ってくる超が付くほどの無礼者は。

エリンは椅子から立ち上がり、その人物を確認しようとして。驚いた。

「お久しぶりでございます。エリン女王」
「あなたは……！　よく帰りましたね、ハンス」

驚く女王をよそに、ハンスはとても落ち着いた表情を見せる。

「あなたがいなくなってからというもの、我々は何時リンドバーグに攻められるかと内心ヒヤヒヤしていたところでした。本当に、よく無事で帰ってきましたね」
「ええ、私も早くこの祖国へ帰りたい一身で旅をしていましたよ」

ハンスは道中であった出来事を事細かに説明していった。
さまざまな都市の様子。
各国がどれくらいの武力を保持しているのか。
リンドバーグがこの国に侵攻してくる可能性はあるのか。
ハンスという男が、その国で思ったことをレポートとしてまとめ、それを女王に説明していく。そしてそれを聞いて、エリンはまた一つの大きな溜息をついた。

「結局、開戦は避けられないのですか」
「……ええ、それは間違いないようです。この国の最高権力者が変わったことによるいざこざに戦争を始めるようです」
「彼等の狙いはなんなのですか？　この国は人口も少なければ目立った特産物はほとんどありません。メリットが薄いのではなくて？」
「いえ、彼らが勝って得られるメリットはあるのです」

そこでハンスは一息ついた。
これから、ありのままを伝えなければならない。この社会の有り様を。

「彼らは、ハッキリ言ってこの大陸全土を支配しようと考えている

ようです」

それを聞いた瞬間。エリンは目まいがした。

馬鹿げている。エリンはそう思った。なぜなら、その思惑自体が常軌を遺脱しているからだ。

この大陸はさまざまな国が統治して成り立っている。さまざまな人が住み、さまざまな人種が入り乱れている。

恐らく、誰もがそんなことを望んではいないであろう。ただ、一部の人間が、支配することを望み、剣を取るつもりなのだ。

エリンは酷く嫌な悪寒が背筋を這い上がるのを感じた。

「彼らが何を望んでいるのかは計り知れませんが、もうすぐ各地で戦いが始まるでしょう。おぞましい戦争の幕開けが、我々の近くに蔓延っているのです」

「……だったら、私達は何をすればいいの？　彼らはあなたという『英雄』としての抑止力を無視して攻め込んでくる。我々には戦力も何もない……」

「……私は、今まで自分のことを『英雄』だと思ったことはありません。抑止力としての自覚も、何も。ですが、あなたは違う。あなたは『力』を操る立場の人間だ。弱気になってもらっては、本当に攻められた時に兵は困るのです。ですからもっと王らしくなさってください」

エリンはハンスからジッと睨まれる。

そう、今、彼女に足らないのはハッキリとした言動と指導力（カリスマ）だ。上官がそんな弱腰では、兵は動こうにも動けなくなってしまう。ハンスはエリンに対して成長して欲しかった。

精神の成長、意思の誇示。全てにおいて、彼女は成長しなくてはならない。

だが、ハンスは少しだけ怖かった。

彼女はまだ子供だ。いくら王位について間もないとはいえ、立派に最高権力者だ。まだ精神が成熟し切っていない彼女が、今後の国際問題に関与していけるだけの心の強さがあるのだろうか、と。

「結局、私達はどうなる運命なんでしょう……最後にはリンドバーグに一生鎖に繋がれることに……」

「エリン様！」

「え？……ああ、ごめんなさい。私がこんなだったら駄目ね」

「そうですとも。あなたは成長しなくてはならないのですよ。はやく王の風格を手に入れなければなりません」

「うううう……」

エリンは何も反論することは出来なかった。下を向いて、涙を堪えるのに必死だった。

「……エリン様。あなたの不徳は我々が全力を持ってカバー致します。だから今は、自分のあるべき姿へ代わってください。それがこの国を救う手段なのですよ」

ハンスはそう言うと、立ち上がってエリンの手を撮った。

「別に怒ってはいません。私だってまだ未熟です」

「……そう、ですか」

「ええ。焦らずとも、じっくりやって行きましょう。我々に、勝利があるように」

ハンスは勤めて明るい声を出しながら手の甲にキスをし、サッと立ち上がった。

そしてハンスは一つ思い出したように「ああ、そうだった」と呟き、

「エリン様。我々に、新しい『英雄』が加わるようです」
「『英雄』……ですって？」
「ええ。『矢』に選ばれし新たな『レクイエム』が、我々の力になるでしょう。そう……遠くないうちに」

彼はそう告げると、彼女のいる部屋から出て行った。
取り残されたエリンは、彼の言った言葉を反復し、考えた。
――彼が言った『新しい英雄』とは一体誰のことだろうか。彼が言うからには、それなりの能力が見込めるに違いないわ。でも、『近いうちに』ということは、まだこの軍にいるわけではなさそうね。
で、この国で、唯一の戦力といえば『英雄』と『アナスタシア家』。

アナスタシア家は騎士の家系で、魔法剣士として一族全員が非常に能力が高い。血統も折り紙つきの人物ばかりだ。
では、その『アナスタシア家』から出る人物なのだろうか。そういえば、コゼットという私と同じ年の人がまだ軍に入っていなかったっけ。
彼女は今、留学中だけど、そこのところはどうなんだろう。
彼は『れくいえむ』って言ってたけど、サッパリ訳が分からない。うーん、と唸るエリンだったが、途中で『考えることを止めた』。こうなれば、もう宇宙で放浪してしまって考えても無駄無駄レベルで考えることをやめよう。うん、それがいい。
そう思い込むと、エリンはその足で部屋の扉を開けて庭に行こうと思った。

あそこならグッスリ眠れる。ハンスに怒られるかもしれないけど、その時はその時だ。

◇

ハンスは一人、廊下を歩いていた。
ただ、行く宛もなく、自由に。
「だが……果たして彼は、レクイエムを受け入れるだろうか……？」
彼は誰もいない寂れた廊下で、そう漏らした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 奇妙な女の子

Ｉｇｎｏｒａｎｔ　ｍｅｎ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈａｔ
ｇｏｏｄ　ｔｈｅｙ　ｈｏｌｄ　ｉｎ　ｔｈｅｉｒ　ｈａｎｄｓ
ｕｎｔｉｌ　ｔｈｅｙ'ｖｅ　ｆｌｕｎｇ　ｉｔ　ａｗａｙ.

愚者は自分の手の中に持っているものを手放したときに初めて、その素晴らしさに気がつく。

ｂｙ：Ｓｏｐｈｏｃｌｅｓ

遥か上空では、いまだに禍々しい太陽が直射日光を地球に対して叩きつけ、それと同時に熱が空気を暖める。

まるでサウナの中だ、と俺は思った。この季節はそろそろ秋に移行してもいい頃だと思うのだが、この世界ではいささか元の世界とは違うらしい。元の世界は『地球温暖化』だ『オゾンホール』だと、さも地球滅亡を揶揄するかのように叫ばれていたけど、この世界ではそんなことを絶叫する人はいない。むしろこの環境がデフォルトだと思っているから不思議なものだ。

そんなことを思いながら、俺は顔を上げる。

目の前には青々とした雑草が生い茂っていて、その傍らには小川が流れている。こんな風景に故郷の日本を思い出す。あの頃はまだまだ小さくて、一欠けらの汚れさえなかった、まさに純潔そのものだったのに。

「どうしてこんなにも汚れちまったのかなぁ……」

一応付記しておくが、未だに俺は童貞である。別に誇ることでも

ないのだが、これでも生粋の魔法使い（一生童貞）予備軍なのだ……というよりも女性に対してはあまり近寄りたくはないタイプであるので、恋愛に関しては奥手なだけだったりする。実際、恋はしても全く相手に喋る気にはならなかった。

そしてどうでも良いことなのだが……なぜ異世界転生やトリップ系のメディア作品は、大抵場合美人のヒロインが付いて回るのだろう。邪魔で鬱陶しいだけではないだろうか。だって性行為するわけでもないし、特に連れ立って旅をする必要はないと思う。食費は二倍になるわ、宿屋に泊まったら泊まったで『昨日はお楽しみになられましたか』とか何とか言われるに違いない。

俺はそんなくだらないことを思いながら、その小川の脇を通っていく。

声にならない感嘆が俺の喉を唸ならし、水の中に小さな魚達が泳いでゆく。一種の輪の協調、ともいえる光景を見て心は落ち着いていく。

「一息着くのもあり、か」

小川の脇に座り込み、俺は何も考えずにジッと水面を見つめる。

――そうだ、あれは何時だったか。あのスクールデイズは。

ザッと換算して実に二ヶ月あまりが経とうとしているだろうか。あれから俺は一人になってしまった。別に寂しいわけじゃあない。ただ、良い思い出だと思うだけだ。

ふと、『奇妙な矢』と一緒に入れていた写真を取り出す。

「コゼット……元気にしてんのかねぇ」

あのジャン・ルイから貰った写真をみながら、記憶の中にいるコゼットの姿を復活させる。その記憶のなかの彼女は未だ鮮明に現れ、

写真と同じ容姿をしている。
やはり、俺はあの頃へ帰りたいと思っているのだろうか。
なんだろう、この奇妙な感覚。懐かしさか？　いや違う。それとはまた別の感覚だ。恋？　それも違うのかもしれない。
しかし、その考えも止めた。
これ以上考えると、あのフィルナに笑われてしまうからな。意気地なし！　とか何とか罵声を浴びせかけられるに違いない。
俺は写真を再び『矢』と共に懐へ収め、リラックスしている最中の足の筋肉を動かして立ち上がる。その時に足から『もっと休ませろ』と抗議が来た木がするが無視する。
そんな俺のリラックスしている時間をを、突然の後ろからの声が破った。

「お兄さん、ここで何やってるですか？」
「誰だ？」

後ろを振り返ってみると、そこには白い服を着た小さな女の子が立っていた。
一体この子は何なんだろうか。
その子供は、この太陽の下で妙に肌が白いようで、目は赤い。アルビノか、と俺は推察した。

「君は？」
「私ですか？　私の名前は『アニュス・デイ』。女の子に似合わない名前です」
「いや、そんなことはないが」

俺は警戒しつつも彼女から距離をとる。
――一体何時、俺の後ろに立った？
俺の脳に、そんな疑問が出る。彼女は一人のようだが、それゆえ

に気配を隠せるとは思えない。
　しかし、アニュスと名乗った女の子は可愛らしく微笑むと、こちらにゆっくりと歩いてきた。そして同時に俺は少し後退し始めた。
「慎重なのですね。流石です」
「何を言っているんだ？　お前は何時から立っていた？」
「質問は一つづつしてくださると助かるです。そして私はただの女の子ですよ？　怖がる心配なんてないです」
「く……」
　彼女はそのまま俺の腰に引っ付き、手を回して抱きついてきた。
「おいおい、一体何をするんだよ」
「スキンシップです。気にしないでくださいです」
「そういうわけにも行かないだろう。とりあえず離れてくれよ！」
　俺がそういって彼女を引き離すと、若干芝居がかったように彼女は一言「はぁ……」と深い溜息をついた。
　――変な奴だが敵ではなさそうだ。しかもただの幼い子供だな。
　とりあえずアニュスと同じぐらいの高さまで屈み、俺は彼女の目を見た。
「えっと、アニュス、と言ったっけ……君は何処から来たんだ？」
「ん、私の名前を呼んでくれるですか？　珍しいです」
「？……まぁいいか。とりあえず、家はどこだ？　送っていってやるぞ」
「別にいいです。家なんてありませんから……」
「家が無い？　それなら今までどうやって過ごしてきたんだよ。流石に肉親ぐらいいるはずだろう？」
「いいえ。みんないませんよ。とっくの昔に消えちゃいました」

アニュスはそれでも笑顔一杯だった。
しかし、彼女の言うことが事実ならば、アニュスは今までずっと一人で生活してきていることになる。信じられない。
彼女の今現在身に纏っている服を見ても、全く乱れ一つ無く、サバイバルしてきた形跡が見受けられないことにも疑問を感じる。全く奇妙すぎる娘だ。
そこで「世話してくれる人間はいるのか」と質問しても、それも『NO』らしい。彼女は今までひとりで生活してきたというのだ。
――確かに、ここから次の町まで数キロあるし……彼女のような子供では町にたどり着けないのは確かなんだろうけど……。
と、俺が頭の中で考えていた時に、不意に彼女は口を開いた。

「ところで、あなたの名前は何ですか？」

俺は予想してなかった質問を喰らい、つい頭の中が真っ白になってしまう。
しどろもどろしながらも、冷静にその質問に答えようと、俺は頭の中を何とか整理しながら少しだけ沈黙を醸す。

「……名前なんてどうでもいいじゃないか」
「別に聞いたっていいじゃないですか。減るわけじゃないですし」
「……いや、確かに減らんだろうがさ……」

どうしたものだろうか。このよくわからない娘に、ホイホイと青い作業服を着た男について行くように名前を教えてしまっても良いのだろうか？

「……」
「……」

沈黙の春、という本があるのを不意に思い出してしまった。

「……名前、か」
「はい」
「……聞きたいのか？」
「ええ、とっても」
「……」
「……」

またしても沈黙ばかりだった。
俺はどうもこの娘に対しては頭が上がらなさそうだ。
とりあえずこの沈黙から抜け出すべく、頭の中で一旦シュミレートして、それから現実に答えてみる。

「えっと……松下、だ」
「姓？　名前？」
「姓だ」
「ふーん。名前は何なのですか？」
「……気にするな。どうせ誰も覚えてくれないような平凡な名前だ」

ふーん、うなずきながらも常に笑顔を振りまいているアニュス。
不思議な娘だ。全く、不思議そのものだ。
俺がそういう風に思いながらアニュスをジッと見つめていると、
突然彼女がいやーん、と体を隠すように悶え始め、

「もしかしてお兄さん、人類の中でも最低ランクの『ペドフィリア』だったりするですか？」
「それはねぇよ。……よくそんな言葉知ってるな」
「ふっふ～ん。私に欲情したら駄目ですよ？」

「しない。俺は幼女に興味はない」

俺のその発言に、大して驚かず、彼女は今も常に笑っている。

「……ところで、何のようだ」

「何がですか？」

「何で俺に話しかけた？　何か用事でもあるんじゃなかったのか？

……まぁ、初対面の人間に用がある奴なんてほとんどいないだろうけど」

アニュスはゆっくり歩いてきて俺の隣に座った。俺としても別に構わないことなので少し右にずった。

（俺はとことんロリに因縁があるらしい）

以前訪れた村でも先ず最初に子どもに会った。そして次はこのアニュスだ。

これが女運だとしたら何よりだが、どうも現実はそうではない事を実感する。

「……」

「……」

「……腹減ったな」

「……？」

俺はこの沈黙を破る為に腹ごしらえをしようと思った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 子供との出会い

うんざりさせるための秘訣は、なんでもかんでもしゃべることである。

by Voltaire

彼女は一体何者なのだろうか。

俺と同じ、ただの放浪者なのだろうか？……いや、彼女に限ってそれはないと思う。

彼女の服装は至って軽装で、更に言えば服に破れているところや泥がついている形跡がない。今まで彼女がここで生きていたならば、普通ならば服はボロボロになっていてもいいのではないか。

俺がそんな風に推理している時、アニュスと名乗った娘は今まさに俺が作ったご飯を貪り食っている――じゃない、とてもたくさんの量を食べている。少しこちらが心配になる程に。

「おいおい、そんなに急いで食ったら喉に詰まるぞ」

「むきゅっむきゅ……大丈夫ですよ。詰まったことありませんから」

「……そうか。だが、そういう奴に限って――」

「みゅ！？　みゅきゅきゅきゅ～！」

「――喉に詰まらせる奴が多い。ほら、水」

なにやら喉に詰まらせてしまったらしいアニュスに水筒を渡すと、彼女はとても焦りながらグビグビ飲んでいく。

俺はそれをただただ何も思わず観察していた。

それからしばらくして彼女は水を飲み終え、俺に空になった水筒を渡した。

「……死ぬ所でしたよ」
「だろうな。まさか言ったそばから本当に喉に詰まらせるとは予想もしていなかったぞ……いや、俺の一言がフラグを立てたのか……？」
「フラグ？　なんですか、それ」
「気にするなよ。こっちの話だ」

一応これはこれで面白い場面が見れたからよかったのだが、恐るべしはフラグだった。何気ない一言が次の行動に影響するとか本当にあるのか。正直驚いた。
彼女はそういった無意識的な天然な能力を持っているのかもしれない。俺にとっては『天然』というのはあまり好きではない部類に入るので気をつけなければなるまい。
それからしばらく後、俺達は食事を終えて、火を囲んでいた。

「それはそうとアニュス、君は両親は死んでいるんだよな？」
「――はい。もう、私に帰る場所はありません」
「親戚は？」
「……いません」
「死んだ、か……」

それは確かに事実らしい。
つまり彼女はどうやら本当に一人ぼっちで生きてきたようだった。この年齢で、たった一人で。
アニュスの両親がどのような死因で死んでいったのかは俺は聞かない。……なぜなら、彼女の歳で人の死を体験している。それを思い出すことは辛いはずだから。
現に俺の友達が自殺したとき、俺はその友達の家族に声すらかけ

ることが出来なかった。でも彼女は、それでも懸命に生きているのだ。

「……やれやれ、お前さんはこれから天涯孤独ってことになるわけ、か……」

「仕方無いことなんです。人に死は平等にきます。ただそれが速いか遅いか、それのどちらかにしかすぎませんから……」

「全くその通りだな……あまりこういうことは言いたくはないんだが」

「構いませんですよ、私もいつか死にますし、あなたも死にます」

いずれ俺達人間は死に至る。人間の体の活動の限界による死、致死的な傷による死、病気による死……。いずれにせよ、俺達は『人生』という筋書きの中で踊っているダンサーにしかすぎないということに他ならないのだ。それは避けられない結末、終焉を迎えなくてはならない。だけれども、その終焉を真近で見たアニュスにとっては受け入れ難い真実だったのかもしれない。

彼女の悲しみも、怒りも、憂いも、すべては終焉に向かうための必然。だが、それを彼女は納得するのだろうか？

今まで一緒だった人が、もう一生会えなくなる。その悲しみを俺はまだ知らない。いや、今となっては知る事すら出来やしない。

「あなたも、寂しいのですか？」

俺は思わず目を見開いた。

「あなたも、今は一人孤独にしているです。同じ、人です」

「何故そう思う。俺の何が分かるってんだ？」

「貴方は何かを喪失しようとしていませんか？　何処かに帰る、だとか、何か目的なものを放棄しようとしていませんでしたか？」

「……ッ！」

――確かに俺は元の世界へ帰ることを諦めかけていた。

俺は言われて初めて気がついた。そう、俺はだんだん調べていく内に「帰れないのではないだろうか」と思い始めていたのだ。俺は初めからそう思っていたのではないのか、初めから帰るつもりではなかったのか、と。

だが、俺は内から湧き出る疑問を否定する。俺は元の世界に帰る為にあの場所を、帰る場所を捨てた。今頃そう思っても遅い。

俺は彼女の問いに少し時間を掛けて、

「……いや、何もない。失ったモノなんて、な」

嘘をついた、と俺の心は俺の脳を糾弾する。

そしてそれとリンクするかのように彼女のため息が漏れる。

「まぁ別に深くは追求しないですけれどね」

「……どうもお前さんは子供っぽくないな。本当は大人か？」

「いいえ、子供ですよ。ちゃんとした十歳です」

――どうだか。さっきは全くそんな気がしなかった。

この娘は子供の時の人格と大人の時の人格の二つの人格が存在しているのではなかろうか。そうとしか考えられないレベルの精神年齢だ。詐欺、と言っても過言ではなかろう。

可愛いとは思うが、さすがにこれは見た目とのギャップがありすぎる。

「……本当にティーンだと思われたいなら、まずは子供らしく振舞ってくれ。どうもお前さんの大人びた言葉遣いじゃ、子供の相手とは思えん」

「……一応善処はしてみる、です！」

最後の語尾を上げて子供らしさを演出するアニュスは、それはもう可愛かった。だが、いかんせん先ほどのこともあり、複雑な心境を抱く。

俺は立ち上がり、少し荷物を纏め始めた。そしてふと、アニュスの方を振り返った。

――ひとり、か。

俺はその言葉を思いつつ、こう告げた。

「どうせ帰る場所がないんなら……よかったら、俺と来るか？」

そして彼女はその申し出に少し戸惑いつつも、

「はい！」

そう元気に答えた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 子供との出会い（後書き）

決めたよ。
この小説に宗教ネタを使ってやるわ！！
最近のファンタジー小説には宗教成分がない。ならば入れるしかない。
旧約聖書ネタとか新約聖書とか最後にある黙示録とか、終わりだとか使ってやんよ。ちょうど私はキリスト教の学校に通っていてね、そういったものの解釈は学んできているのよ。

……まぁ、未だに主人公がチート化してないこの小説を見てくれる人は少数なんでしょうが。……ラノベを読んでいる感覚で読むよりは、ＳＦを読む感じで読んだほうが面白いのかも分からん。

既に一つ、宗教ネタでＡｇｎｕｓ－Ｄｅｉを使っているのだけれど……気付いた人いるのかな？

## アニュスと俺の珍道中

私は隣人に対する愛を諸君に勧めない。
私が諸君に勧めるのは、いと遠きものに対する愛である

ｂｙ　ニーチェ

「……どうでもいいのですが、どうして私がこんな重い荷物を背負わなくてはならないんですか？」

彼女がそういって俺に文句を言い放ってきているが、俺はその文句を聞き入れることを無視した。代わりに俺は真っ直ぐ続く目の前の道をせかせかと歩く。疲れた、と喚いているアニュスはペタリ、とその場で俺に対して更に講義の声を続ける。

おいおい、と思うと同時に、まさかコイツは付いてくるだけ付いてきて荷物は持たないつもりだったのか……と言ったような声にならない文句を心の中で俺は喚く。そもそも旅に付いてくるのならば荷物ぐらい持って当然だろう。それなのに、この娘は文句をおっしゃる。大層な身分だ。

俺は未だに敬語でチビチビ文句を言っているアニュスの方を振り向き、

「……例えばの話だが」

「はい？」

「お前さんは二人で旅行に出かけたとする。その時、荷物は割り勘で持つ派か、それとももう一方の人間に持たせるのか。お前さんはどっちだ？」

俺の問いに対して、少し「？」といった感じに首をかしげていたが、唐突に顔を上げて言い放った。

「もちろん私は他方に持たせますよ。何を言ってるんですか？　当たり前じゃないですか」

「……普通なら割り勘で持つべきだと思うのだが」

「私はまだティーンエイジャーですよ？　もっと言うならロリですよ？　そんなか弱き少女に、貴方は荷物を持たせるというのですか？」

「いや、当たり前だろ。十代だか少女だか知らんが、そこは平等に持つべきだろ」

「子供相手ですら？」

「ああ。当然だ」

「……」

「……」

「――え？」

「――は？」

「……本気なのですか、それ」

「――本気、とは？」

一体なんなんだろうか、この空気は。この常識の噛み合わない、微妙な。

そしてアニュスも信じられない、という感じで頭にエクスクラメーションマーク＋クエスチョンを混ぜた記号を浮かび上がらせている。彼女は先ほど俺に向かって言った言葉がこの世の常識だと認識しているらしい。そんな完全なアニュスイズムが何処にあるというのだろう。

そもそも、彼女が常識を知っているとは思えない。そう思う。

彼女は俺を見上げ、若干目をうるうるさせながらこちらを睨み付けてきた。

「……もしかして、子供に情を掛けることをしない人なんですか？」
「当然だ」
即答してやった。
俺は元々そこまで優しくはないし感情を表に出すこともしない。だから他人が俺を頼るといったようなことはなかったのだ。俺は他人とそこまで関わらなくなったことで『他人のすることは自分が介入する必要はない』と思うようになっていた。元の世界でも文化祭の時だって俺はほとんど介入しなかったし、その時先導したのは矢島率いるクラスのリーダー的存在だったから、介入しなくても殆ど物事が進んでいった。子供に対してもその姿勢は崩したことはないのだ。
もちろんそれは別の意味もある。俺は子供を『一人の人間』として扱う。それ故、手伝うことはない。
彼女は確かに子供であり女子だ。だが、子供だからといって甘やかすことはしない。責任を果たせる大人になるように自分がすべきことは自分ですべきだ（と俺は思っている）。
「やれやれ、使えねーとか思っているんじゃないのか？」
「他に何を思えばいいんでしょうか？」
「……」
「……」
「俺にどうしろって言うんだよ……」
まさに溜息の生産工場と化している。
普通という常識が彼女には伝わらない。なかなか手強い人間じゃないか。
そんな困っている俺の反応を見て気を良くしたのか、アニュスは今度は子供らしく声を出して俺を弄ぶ。

「どうなんですか？　あなたが私と同じ年齢なら、他の人に持ってもらっているでしょう？」
「いや全然」
「今になってひねくれてるからそんな事を言うんですよ。貴方が私と同じ歳だったら絶対に『持って持って』とおねだり祭りを開催しているですよ」

彼女の言い分は更に俺の子供の時までエスカレートしていった。
確かに、その位の年齢の子供ならば、そう考えるのがごく自然である。だがしかし、俺がアニュスと同じ位の歳には、既にこの娘と同じように早熟していたのでそういう言葉は全く通用しない。
俺は一度やれやれ、と何かを諦めるような仕草をしながら、ひとつ大きなため息をつく。

「おねだりしたって無駄だ。それはお前さんが持つ分、これは俺が持つ分。それでいいじゃないか。何か不満か？」

アニュスはそれを聞いて少し焦りながら、

「いいじゃないですか、子供ですから……」
「子供子供って、あんたを俺は殆ど子供扱いしていないぞ」
「……」
「……」
「それって喜ぶべき所なんでしょうか？」
「知らん」
「じゃ、私も知りません」

そういうとアニュスは溜息をついて、また彼女の本来持つべきリュックに手をかけ、それを背に背負う。

一度は駄々をこねたものの、結局は言われた通りにする所がなんとも言えない奇妙な感覚を覚えさせる。先程まで玩具をねだっていた子供がいきなり大人の言う事を聴き始めた時の、何か企んでいるのではないか。そういう疑問が俺の心を過ぎる。

しかし、それを知ることは結局の所は無理だ。彼女が何を企んでようと、彼女が行動を起こさねば対処が出来ない。ここは彼女のしたいことをさせるべきだろうか。俺が俺がそんな風に悶々と考えている時、不意にアニュスはこちらを見上げて言った。

「どうしたんですか、早く行くですよ」

俺はその声に分かっている、とやや上擦った声で返事をした。

アニュスが何を企んでようと、所詮は子供だ。何をしようとどうでもいいか。

俺はそう考えて、コンクリートで舗装されていない砂の大地を蹴った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## アニュスと俺の珍道中（後書き）

……いや、分かっている。他作者様の文体と大きく異なっていて、
それが読者を逃しているってことぐらい。
でも、こういった作品があってもいいじゃないか。例え第一話しか
読まれなくて、ここまでたどり着くって人がほとんどいなくてもさ。

簡単に言えば、寂しいってことよ。

## 英雄と黒装束

平和は神から人間への贈り物ではなく、人間同士の贈り物であることを忘れてはいけない。

byイーリー・ウィーゼル

☆クルド国

深い闇が、このクルドの中心に聳え立つクルド国の城を覆う。
その城は、この大陸の中でも一、二位を争うほどの美しさで、この城を見上げる者は皆心が洗われるかのような錯覚に陥ってしまうという。
そしてその白い城のバルコニーにて、一人の男が景色を眺めていた。
男は、世界が認める英雄。そして、この国の軍人。そんな人間だった。
彼――ハンス・パーシヴァル。世界で最も強く、また人間味溢れていると言われている。
ハンスはこの空を見上げ、感傷に浸っていた。
その時彼は、後ろに何かの気配を感じた。何者か、と後ろを振り向くと、そこには黒装束の一人の男が膝を着いている。
「パーシヴァル卿、報告です」
「……少し驚いたな。幽霊だと思ったじゃないか。別に城内では気配を殺す必要なんてないんだぞ？」
「それは申し訳ありません。しかし、どうもこういった城には慣れませんので……次からは音を立てて参りますよ」
「……なんだか君は次からわざと音を立てて歩く姿が想像できるな」

ハンスは苦笑しながら言った。
正直、ハンスは少しだけ幽霊か！？　と思ってしまっていたのだ。
それでなくとも、この城に伝わる何かやばいモノ――幽霊だとか、幽霊だとか――を想像してしまっていたのだ。
これっきり、そういうタチの悪いいたずら紛いの行動は止めてもらいものだ。

「で、報告とは？」

そうハンスが質問すると、突然、黒装束の男は顔を強張らせて、

「さっきそこで足のない美人の幽霊が――」
「よし何処だ？　何処にいるんだ？　今からそこにいくぞ！」
「――あの、パーシヴァル卿」
「どこだ？　どこなんだ！？　もちろん美人なんだろ？　さぁ待ってろよ！」
「……」
「……」
「……本当に英雄、なんですか？」
「……ああ、多分」
「あ！　あそこに美人の幽霊がッ！！」
「なにィーー！　どこなんだ！」
「……」
「……ごめん」
「……いいんです。別に」

少し涙ぐみながら、ハンスはもう一度その幽霊を探してみる。
いなかった。

「もう一度戻ろう。して、報告とは？」
「はっ！」
黒装束の男は懐から数枚の紙を取り出し、ハンスに提出した。
ハンスはそれを受け取り、その文面を見た。
「……これはどういうことなんだ？　まさか、奴らがそんなバカなことをマジに考えているとでもいう気なのか？」
「ええ、私が直に纏めたレポートですので本当のことなんですが……私も耳を疑いました」
彼が提出したレポートには、あるはずのないことが書かれていた。
それはそれは、本当に理解し難いことが。
「まさか……リンドバーグの奴らが『究極の力』を求めているなんてな。全く、予想を斜め上に行く奴らだ」
その中に書いてあったのは、『リンドバーグが究極の力の捜索を開始した』と題されて丹念に纏められている。
だが、そもそも『究極の力』は古代文明の崩壊と共に消え去ってしまっている。元々そういったものは存在していないとまで言われているものだ。それを、リンドバーグが探しているという。
ハンスはその事実に首を傾げずにはいられなかった。ハンス自身もその『究極の力』とやらの存在を信じてはいなかったのだ。
「確か究極の力、とかいうのは魔法だったよな。それを探しているとなれば――」
「ええ、彼らは決定的な軍事力を欲していると考えてもいいでしょうね。それも、国一つを簡単に滅ぼせる力を。つまり彼らは戦争をする気なのでしょう。そうとしか考えられませんよ」

やや呆れたような声を発する部下は、妙に暗くて表情が見えない。だけども、彼も同じように疑問に思っているに違いない。
だが、それも国の判断なのだ、とハンスは一人心で納得し、黒装束の男に命令した。

「よし、君は以前と同じように諜報活動に参加してくれ。……期待しているぞ」
「はっ！」

そう、部下に告げると、次の瞬間には消えていた。
ハンスはもう一度、そのレポートの題名を見た。

「全く、次から次へと仕事が増えていく……昔みたいにキャバクラ行きたいもんだねぇ……」

そう呟いて、ハンスはバルコニーを後にし、部屋から廊下へ出た。
すると、ちょうどその廊下を歩いている人物に眼を留めた。

「お、ちょうどいいところにいたな……おーい、ガウェイン……」
「オリャアアアアアーーーーッ！」
「な……なんですとオオオォォォォーーッ！」

いきなり相手の剣が抜かれ、ハンスの頭の上をぎりぎりの領域で横切る。無論ハンスは持ち前の運動神経でその攻撃をよけていた。
が、未だに攻撃は止まらない。相手は攻撃が避けられたのを悟ると、そのまま剣を振り下ろす。

「おいガウェイィィィン！！　攻撃はともかく理由を説明しろオオオォォォォ！」

「貴様のような腑抜けた男が、私に近寄るんじゃあないわよ！」
むしろ近づいてきたのは貴女ではないか、と心の中でハンスは絶叫した。

☆

「で、貴女はなぜ私を殺そうとしたんだよ……あのままだったら、俺は死んでいたぞ？」
ハンスは目の前にいる女――ガウェイン・エムシーマという女性は、ふん、と鼻を鳴らして剣を下げた。
それを見て安心したのか、ハンスも一つため息をつく。

「まったく……この国にはこういう女性しかいないのかねぇ。泣けてくる」
「それはこちらが言いたいセリフよ。あんたみたいな人間がまさか英雄だとは……世も末ね。そろそろ死んでくれない？」
「フフ……丁重にお断りさせていただこう。もっぱら、まだ生きていたいんでね」
と、小さく吐き捨てる。
それからガウェインは何か思ったように顔をしかめて、口を開いた。
「で、こんな夜更けに何をしに外にでているの？　何か問題でも起こった？」

それに対してハンスは頷き、

「ああ、一応はな」

「はっきりしないわねぇ。問題が起こったのならさっさと上に報告しなさい。それが普通でしょうが」

「いや、軍の中での一番上は私だったりするのだが……」

「知らないわよ。で、その問題って、一体なんなの？」

ぐいぐい押してくるガウェインにビビりつつ、事の顛末をわかりやすいように、尚且つ丁寧に話した。

曰く、部下から受け取ったレポートに奇妙なことが書いてあったこと。

曰く、それが、ほとんど信じられないようなことだったこと。

曰く、それがリンドバーグの首脳部で決定されたことで、既に隠密部隊が動いているであろうということ。

そしてもし本当に存在していたとして、それが奪われてしまったら、確実に戦争が起こること。

こんな馬鹿馬鹿しい話はないだろう？　と話の最後に付け足した。

ガウェインはその話を何も反論せずに聞いていたが、やがて意を決したように顔を上げた。

「それは危険じゃないの？」

「どうしてそう考える？」

「そりゃ、相手は確固たる証拠があって、それで探しているんでしょう？　もうすぐ戦争が始まりそうだって時に、戦力を分散させるような真似は普通はしないわ」

「……そうだ。確かにな」

「だったら、さっさと貴様の諜報機関群（インテリジェンス・コミュニテ）だのＮＲＯ（国家偵察局）だの使って、さっさと調べればいいこと。それ以上は私は関与するつもりはないわ」

と言ってため息をついた。
ハンスは「それは既に手配済みだがね……」と心無くつぶやく。
そもそも、この件については証拠が少なすぎる。あの黒装束の男の情報は信頼できるとはいえ、流石にこういったことに関しては慎重にならざるを得ない。
これがもし嘘の情報でこちらを出し抜くための罠（トラップ）、という可能性も否定はできない。それが見え透いた嘘のような情報でも、慎重に調べることに越したことはない。それに、それが英雄として名を馳せているハンスに対しての罠だったりしたら。

「罠……ね」

ハンスは今までに幾度となく罠に掛かってきた。それに伴って友を失い、親を失った。それが英雄になるための条件だというように。
だから彼はここまでのし上がってきた。罠だけじゃない、自分が存在したせいで死んでいった人たちの為に彼はのし上がるを得なかった。
それを少しだけ思い出し、すぐさまそれを打ち消す。どうせ、帰ってこないのだ。

「……この件に関しては、一応王女様に伝えておく。そしてこれに関しては私が全ての指揮を執るから、そのつもりで騎士隊も準備をしておいてくれ」
「私達の魔法騎士隊をこき使おうっていう気？」
「そうじゃない。いざって時の為の保険みたいな感じだ。何にも無けりゃ、それで十分」
「そう。了解」

ガウェインがそう言うのを確認して、ハンスは廊下を歩いて王の待つ部屋へと歩いていった。

to be continued...

## 英雄と黒装束（後書き）

これから究極の力の捜索戦ですね。ハンスは優しい上官的な人に。

しかし、どうしてこうなった

## 英雄と謎

Ｔｈｅ ｇｒｅａｔｅｓｔ ｍｉｓｔａｋｅ ｙｏｕ ｃａｎ ｍａｋｅ ｉｎ ｌｉｆｅ ｉｓ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕａｌｌｙ ｆｅａｒｉｎｇ ｙｏｕ ｗｉｌｌ ｍａｋｅ ｏｎｅ．

われわれが人生において犯す最大の過ちは、間違いを犯しはしないかと絶えず恐れていることである。

ｂｙ Ｅｌｂｅｒｔ Ｈｕｂｂａｒｄ

――クルド国。

その日に限って、ハンスは無駄に忙しかった。

一つは元々の仕事――つまり軍関連のことがあったのだ。

朝早くから起き、次々と提出されてくる報告書に目を通す。それだけでかなりの重労働なのだ。それはハンスにとって、まさに地獄の仕事であり、元々頭がいいとは言え、流石に目を使う作業は辛い。いわゆるデスクワークが苦手なのだ。

その時、ドタドタと廊下から何者かが走る音が聞こえ、ハンスは書類を処理しながら耳だけその音に傾けた。

「パーシヴァル卿！」

だが突然、ハンスが仕事をしている部屋のドアがノックも無しに盛大に開かれた。それに少し驚き、ハンスは仕事をしていた手を休め、その失礼極まりない侵入者に対して目をやった。

それは一人の女騎士だった。

女――もともとこの城にいる人間は、大抵が女だ。魔法が使え、更に剣を扱える者、つまり魔法騎士団がこの城に駐在する。彼女はその身なりから推測して、ハンスはその魔法騎士団だと思った。
ハンスは立ち上がった。女騎士もそれを見て、ハンスが仕事をしている机の前まで歩いてくる。

「どうしたんだ？　そんなに慌てて……」
「報告いたします。つい今しがた、リンドバーグより特殊部隊の『レイヴン』が出撃したとの情報です」
「レイヴンだって？　あの『黒い女達』とか言われる、あの……」
「はい」

レイヴン（ワタリガラス）――ハンスはその者達のことを聞いたことがあった。
曰く、常に三人で行動する、リンドバーグの偵察兼隠密。彼女達は常に黒い服を着ていることで、その名前がつけられたのだという。
もっとも、彼女たちの戦闘力も半端ではなく、その力は部隊一つを壊滅させることが出来ると言われている。

「チッ……カラス共め、ついに我々と相対する気なのか……。で、彼女達は何処に向かったんだ？」

女騎士は懐から折りたたんだメモ――もとい報告書を取り出し、それを読み上げる。

「情報によると、彼らは『インストリアル皇国』に向かったの事――これだけでは、彼女達が何をしたいのか、私には……」
「インストリアル皇国？　確かあそこは宗教国だろ？　それもリンドバーグの宗教とは別の……あそこに何かあったっけ？」
「いえ、特には。あそこは宗教が盛んなだけに、オカルトなどの研究も進んでいるぐらいですよ。あそこに行ってプラスになることは

ないと私は思います」

女騎士は毅然とした態度で在りながらも、やや口調のトーンを落とした。彼女も疑問に思うところがあるらしかった。

しかし一瞬、ハンスの目が光ったのを女騎士は見た。それは、何かを閃いたときと同じような目の輝きの光だった。

「……まさか」

「え？」

「ああ、いや。もう下がっていい。それと下がるついでにガウェイン騎士団長を呼んで来てくれ」

はっ！　と高い声で返事をする女騎士は、ドアのほうへ向き直って歩いていき、そのまま退出した。

ハンスは、奇妙な引っかかりを覚えていた。

なぜリンドバーグは、レイヴンはインストリアル皇国へ向かったのか。宗教も、食べ物も、国も、理想も、何もかもが違う国に、なぜリンドバーグは特殊部隊であるレイヴンを送る必要があるのだろうか？

それとも、あの『究極の力』について、何か手がかりがあるというのだろうか。

今は戦争に突入する寸前の、いわば台風がくる寸前のあの曇り。両国間の緊張が、デタントすることの無いこの、今になって。

――これは一度調べる必要があるのかもしれない。

前に部下の情報局が奇妙な動きをしていると報告してきた時、あれからたったの数日しか経っていないではないか。やはり何か『究極の力』とやらの手がかりを掴んだというのだろうか。

「解せぬ」

だが、彼はそのうち考えるのをやめた。
――このことは、ガウェイン騎士団長が来るまで保留ってことで。
そう結論づけ、ひと時の休みを得るためにまぶたを閉じた。

☆

真っ暗な闇。
その完全な闇のなかに時たま見える、赤い光。恐らく光がまぶたを通る赤い血を透過して目に見せているのだろう。
一体どれぐらいの時間が経ったのだろう。未だに目は開けるつもりはないので時間の経過が分からないのは仕方ないとして、ガウェインは来たのだろうか。
――来たわけじゃなさそうだな。
ガウェインは気の強い上にサドスティックなのだ。私が寝ていたら、恐らく剣か何かでここぞとばかりに斬られてしまうに違いない。今、意識があるということは、多分まだ来ていないんだろう。
ハンスはそう思うと、再び惰眠を貪ろうと一瞬考えたが――止めた。いや、止めざるを得なかったのだ。
目を閉じていて、初めて分かる人間の目線。この目線には身覚えがあるような気がする。
「もしかして……」
嫌な予感がしつつも、うっすらと目を開ける。すると――
「……やっと起きたのね。バカ」

ハンスの喉元の、約一？足らずのところで寸止めされているレイピアと、それを突きつけている女性。ガウェイン。
――フッ……どうやら、ここで『第三部、完！』という結末を迎えるのだな、私は。主人公ではないのだけれど。
だが、まさか喉元に突きつけられるとは、流石に予見が出来なかった。普通の彼女ならば、すぐさま剣で私を起こしてくれるものと思っていたものなぁ。……いや、俺の寝顔を見て嘲っていたのだろうか。計り知れない人物だ。
ハンスは覚悟を決め、再び目を閉じて心を落ち着けた。
しかし、覚悟を決めてから、何時まで経っても剣は襲ってくる気配がない。
あれ、おかしいな。そう思うと同時に目を見開くと、既にそこには剣は無く。

「ありゃ、殺さないのか？」
「いま貴様を殺しても、この国に何のメリットが無いからよ。ただそれだけの話」
「……つまり戦争していなかったら殺していたと、言うわけですか？」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（そのとおりでございます）」

表情を全く変えずにハンスの言ったことを全肯定する。そのことが無性に負けた気分になって、ハンスのモチベーションがダウンする。
だが、それでも持ち前の切り替わりの速さで気分を無理やり戻した。

「君を呼んだのは他でもない」
「私を襲うため？」
「違う。そんなことをしたら殺されかねんよ」

「じゃあ何？　私はそろそろ仕事に戻りたいのだけれど」
ガウェインは一つ大きな溜息を吐いてハンスを鋭い眼光で睨みつける。だが、それでもハンスは構わず話を続けた。
「リンドバーグの隠密部隊の一つ、レイヴン共がインストリアル皇国に行ったことは知っているか？　話はそれについてなのだが」
その問いに、ガウェインは頷く。
「ええ、カラスが行動を開始したことぐらい私も知ってる。それが？」
「それについて、君に一つ任務を与えたいと思っている。簡単だろう？」
冗談は止めろ、といわんばかりに更にガウェインがハンスに送りつける眼光の鋭さが増した。しかし、それを流れるようにして受け流してゆく。
ハンスは立って窓辺まで行き、既に秋に染まりつつある外の概観を眺めた。それから後ろにいるガウェインの方を振り向き、口を開いて言った。
「私は、彼等の行動理念が理解できない。……いや、理解しようとも思わない。だから私は君に彼等の行動を探ってもらいたい」
「それは命令か。それとも私的な願い？」
「命令だ」
一つの間も置かずに断言する。
これは私的な命令ではない。すなわち、上官が下官に対する絶対的な服従命令を意味している。ガウェインの階級では、彼に従わざ

るを得ない。

「……上官命令なら、それを聞き受けるしかないわね。全く、『やれやれ』って奴ね」

「すまないな。だけど、これは君と君の騎士団にしか任せられない仕事だ。レイヴン（カラス）が動き出した以上、我々はそれを調べる必要があるんだ。……分かってくれ」

「わかる、わからない以前に、私は兵よ。上官に従うわ」

「……いつか仕返しされそうなんだけど」

「なんなら、今すぐ殺ってあげても？」

「それは……止めてね？」

自らの薄ら笑いの中に、彼女に対する恐怖が混じっていることに、ハンスは少しだけ悲しくなった。

そしてこれからは勤務中には絶対に寝ないようにしよう、と心に誓った。

「ああ、後一つだけ頼まれてくれるか？」

ハンスは、退出しようとするガウェインに言った。

ガウェインはその声を聞き、何だ、と思ってハンスのほうを振り返る。

そこには、先ほどまでの陽気な顔ではない、どこか真剣な眼差しをしたハンスがそこに居た。

その男は、こう告げる。

「……人を探してほしい」

「誰を？」

ガウェインが疑問に思って聞き返す。

ハンスは静かに答える。

「……世界に安息を与える、鎮魂歌（レクイエム）を」

to be continued……

## 英雄と謎（後書き）

私は現在高校二年なのですが、今自分の書いている作品を見返してみると、「あれ、この文体って俺と同年代の人は読みづらいんじゃない？」と思い始めてきた昨今。
最近は活字離れが問題なのが嫌ですよね。

で、本題。
この話に『レイヴン』という偵察組織が出てきましたよね？　実はそのキャラクターを皆さんに考えて欲しいのですよ。
だって御登録者が３８人程度しかいらっしゃらないのですよ？　多分これ以上の人気は出ないでしょう。
ならば、その人たちと仲良くやる為、キャラ作りを……
では、一つ。
キャラの性別は女。そして口癖、容姿、髪型、得意な武器、その他……を感想に書いていただければよろしいので。ああ、ご登録されていない方も『可』ですので。
……ま、だれも書き込まなかったら自分で考えますから心配は無用です。ただ作者の心に傷が付くだけです。

ま、呑気に行きましょうや（笑）

## 正義の話

この世界にハーレムなんてものは存在しない。
もし在ったとしても、俺が認めない。

ｂｙ　作者

もう、夏の色も見えない。

最近では、既にあの夏の辛い暑さでさえ季節の移り変わりによって減退し、色褪せ、萎れていく。夏の頃はまだまだ青くて、暑くて、涼しかったあの青春は、今の秋という季節にはもう見られなくなっている。

俺がこの世界に来て、もうどれだけ時間がたっただろうか。

あの日、俺は元の世界からこの世界へ飛んできてしまった。それが偶然であるか、それとも誰かが仕組んだことなのかは、今でも分からない。だが、現に俺はこの道を歩んでいる。それは事実だ。

あの時、初めて見た場所は、オオアマナの花畑。

それから少しの漂流。そして学院入学。

そして学院からの追放。旅。夢。いろいろなことが俺の中に巻き起こっている。いや、これからも何かしらの不思議なことが確実に起こるだろう。

だが、今となっては関係ない。

俺は、ただそれでいいのだ。誰にも縛られずに生きていくこと。

それこそ俺の充足なんだ。

そして俺の旅の道連れは一つ。

それは俺と共に生きることを選んだ娘、アニュス・デイ。

彼女は俺の唯一の心の拠所であり、彼女を守ることが俺の、保護

者としての任務。
俺は彼女を連れ、歩く。
特に行く先は決まっていない。だが、それでいいのだ。　どうせ、俺たちに平穏なんてないのだから。

「兄さん」

俺の隣でとてとてと歩いているアニュスが俺の名前を呼んだ。
呼ばれたので彼女のほうを振り向くと、彼女は特に笑いもせず、泣きもしないような顔で俺を見た。

「これから正義の話をするです」
「いきなりだなオイ」
「黙っててくださいです。レディのお話中に口出しすることはまなぁ違反なんですから！」

そういって怒ったようにぷんぷん、と怒ったような仕草をする（ちなみにこういった仕草にいちいち『可愛い』と思ってしまっているのは秘密だ）。
俺はとりあえず彼女をなだめ、話を聞くためにそこらへんに座る。
――しかし、一体なにを読んでそういう話を出すのだろうか。非常に疑問だ。

「で、正義の話って何だ？　俺に説教するのか？」
「別に兄さんに説教とかする気はありませんです。……といっても、本当は言いたいことがあるのですが、ここは別にいいです」
「……そうですか」
「そうです！」

そういうと、彼女はぽかっと俺の頭を叩いた。別に痛くは無い。
多少なりとも彼女の話には興味が沸いている。だから話が聞きやすいように俺は子供をあやすように俺の膝上にアニュスを乗せた。それが嬉しいのだろうか、アニュスは得意げに『わふー』とか言っていた。
そして俺の膝の上でアニュスは自分のお尻の位置のベストなポジションを探り当て、押し付けるように深く座り込む。
そして準備が整った彼女は、その愛らしい小さな口で言葉を紡ぎだした。

「例えばですね、魔法使いがいたとしますです」
「唐突だな」
「例えばの話です。口を挟まないでください」
「分かったって。必要以上は喋らん」
「そうしてください。……話を戻しますです。
その魔法使いは、ある特殊な魔法を使おうとしたです。ですが、その魔法はまだまだ完成していなくて、暴走しちゃったんです」
「ほう……それで？」
「その魔法は、自分以外の誰かを殺さないと消えることはなく、誰かを犠牲にする必要があったんです。ですが、それをクリアできるだけの現状が残っていました。実は、左と右に人がいたんです。右には一人の男が、そして左には五人ほどの男達が。そして魔法はもうすぐ起動してしまいますです……そこで質問なのですが、お兄さんはどちらに魔法をぶつけますか？」

彼女が言うことを纏めると、こういうことか。
まず魔法を使う人間が一人。
魔法は自分以外の人を殺さなければならない。
そして左には一人の男。
右には多人数の男達。

もうすぐ魔法は発動する。
これは、普通に考えると『左側』に魔法を放つだろう。だが、それではその左の男は死んでしまうことになる。つまり犠牲を強いるということだ。
だが、かといって右に放てば五人を殺すことになる。つまり、一人の為に五人を犠牲にするということだ。
なぜ、この質問をするのかいまいち理解が出来ないのだが、俺はその質問に答えることは出来なかった。

「……沈黙、ですか」

アニュスは少し嬉しそうな、それでいて少し理解したような表情をしながら俺の目を見た。その赤い双眼が俺の姿を映す。
――彼女はこの話で何を伝える気だったのだろうか。

「この答えは……答えられないんです」
「……まぁそうだよな。いくら聖人君子だろうと、この質問を答えることはないだろうな。それこそ人間としての性質が問われるんだ」
「ええ。この質問は功利主義の代表的なものです。とある行動を取って、それによって人類の幸福が増加したかによっての善悪の判断を行う。でも、それは必ずしも正しいとは言えないのですよ」

――なるほど。功利主義の前では善悪などは存在しないと言いたいらしい。
結果が全てであり、過程は関係ない。そういった考え方のことなのだ。そういった考え方は悪いとも正しいとも言えない、ある種の結果優先論なのだ。その過程を無視し、それによってもたらされる事柄を優先すること。
もっと別の例で言えば、
『いま地球が崩壊しかかっている。だが、一人の人間を差し出せば

皆が生き残れる。では、あなたは本当に差し出すか』
　といったような事柄も功利主義の問題の一端であるだろう。

「兄さんには、一つ知ってもらいたいことがあるんです。それは、人間間においては『絶対的な悪』や『絶対的な正義』などといった対極のものは存在しない――いわゆる『正義の反対はもう一つの正義』だということなのです。それだけ……それだけ心に留めていてくださいです」
「……当たり前だ。結局みんな正しいんだからな。魔物だって信じることぐらいある。それを邪魔だといって殺す人間も。別の観点から見ればどちらも正しいことだな」
「そうですか……私はこの世に正しいことなんて存在しないと思っていましたです」
「ふーん……でもさ、本当にこの世に正しいことが無かったら、アニュスの今言った言葉が『正しい』ことになるんだが？」
「はう！？　間違えたです～」
「……まあいい。気にするなよ」
「はいですぅ……」

　自分で墓穴を掘ったアニュスの髪を撫でながら、俺は静かに風を感じていた。

――もう、夏の色も見えない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 正義の話（後書き）

この話は、ただ試験的に主人公の心構えを設定する目的で書いただけなので、特にストーリーには絶対に関係しません。
本編は今日にも投稿します。

主人公の構えとして、正義は存在しない、としています。

（主人公がこの話ではロリコンになってる）
しかし、アニュスが『わふー』と言ったら俺は確実に死ぬ。ハァハァ…

どうでもいいんだけど、ハーレムって私は好きじゃない。だって、多妻制でもない限り、ひとりを選ぶ必要がある。
最近の小説家になろうとか、ラノベだったりすると、そういうハーレムが目立つ。私はそういうのはキャラを書く面でレベルが高いと思うし、それこそギャルゲ並みの精神力を主人公に持たせなきゃならない。
結局、イチャラブするだけやって、最後には一人しか選ばない。では、残された女（或いは男）はどうすればいい？
『奪い返す』だとか『ライバル心を燃やす』とかなったら良いけれど、結局のところ、一人を選ばなければならない。
それの行き着いた先が、『ＳｃｈｏｏｌＤａｙｓ』だと思う。
彼女達は愛故に狂気に走り人生を狂わせた。
では、ハーレムはどうなんだろうか。
それも、結局はｓｃｈｏｏｌｄａｙｓの二の舞を踏むだろう。
物語を書く上で、幾ら妄想であっても彼らキャラクターには人生がある筈で、私達書き手はその人生を書いていく、ある意味では『神』

だ。だから、キャラクターを大事に思うのならば、そういったことを避けなきゃいけない。

私はそう思う。

**熱**

It's not that some people have willpower and some don't.
It's that some people are ready to change and others are not.

意志がある人とそうでない人がいるのではない。
変わろうとする人とそうでない人がいるのだ。

by James Gordon

逃げても逃げても、自分自身の定められた運命からは絶対に逃れられない。
『運命』は、自分の見知ったところからではなくてその裏からヒョッコリ顔を出し、俺達を弄んでいく。
だけども俺達人間という生き物は、それを利用したり、時にはそれのせいにしたりする。愚かなことだ。そんなことで『運命』を知ることは出来ないというのに。

この世には、連続するどうすることも出来ない運命が存在するのだから。

☆

初めてアニュスと出会って結構な時間が経った。
彼女はひと時も俺から離れず、常にくっ付いていたのだが、俺は

なぜかそれを悪くは思わないようになっていた。
ふとした時の親近感。
彼女は健気に、俺に着いて来ていた。
――そして。
あの過酷な夏が終わって秋に変わり、少し冷えた風が俺の体を打つ。
空に雲が点々と浮かび、それが日の光を浴びて白く輝いている。そしてその雲は風にゆっくりと押し流されていく。それらはすでに季節は変わったことを指し示していた。

「は……は……しょん！」
「どうしたですか？　風邪？」
「だろうな。少し熱っぽい」

俺は手を額に押し付け、その手に感じる熱を測っていた。
そういえばここ最近はまともに休んでいないし、疲れも溜まっている。しかも追い討ちをかけるようにこの急激な温度の変化だ。体を壊すことは当たり前だろう。
アニュスはそんな不甲斐ない俺を不思議そうに見つめ、首をかしげた

「私は風邪を引かないから分からないです……」
「……今まで引いたことがないのか？」
「違うです。『引かない』です」
「？……引かない、とはどういうことだ？　生物なら風邪の一つや二つぐらいは掛かったことがあるだろうに」
「う～ん、説明することは出来ないです。でも、何時か分かるですよ」

俺はアニュスの変なことを聞きつつも、「まぁ子供の戯言か」と

思った。別に子供を信じないわけではないのだが、信じられないのだ。常識として。
その時、頭がクラリ、とぐらついたような感じがした。どうやら本格的に風邪を引いたらしい。
とりあえずはどこかに泊まってこの風邪を治すことが必要らしい。そのことをアニュスに伝えたところ、彼女はそれに賛成した。
そして彼女は何処からか地図を取り出し、
「この辺りに町があるです。地図から察するに、このまま北に進めば大体一時間かそこらで着くはずです」
「分かった。……そこに行こう」
アニュスは俺の前に立って歩き出した。どうやら案内するらしい。
「あー、気をつけてな」
「分かってるで……わお！？」
注意した傍からすってーんと派手に転んだ。まるで突っ込み役のように。
「大丈夫か、アニュス？」
「てへへ、転んじゃいました……」
「やれやれ、これからは気をつけるんだな。……大丈夫か？」
「大丈夫です。怪我もないですし、痛くも痒くもありませんです！」
どうやら本当に怪我はないようで、自分の健康をアピールするために足を見せたりしてくる。
それにしても、言ったそばから転ぶとは、なんという娘だ……そのまま芸人になっても十分やっていける気がする。
しかしこれ以上悩み事を増やされたくはないので、アニュスの手

を取って横に付かせた。端から見れば、親子のような。そんな感じに。

「あ……」

「ほら、行くぞ。あんたが怪我したら、結局は俺が世話する羽目になっちまうからな」

「うん！」

――ここから約一時間、ってことは、大体四キロぐらいか。

俺はここから町までの距離を考えつつ、アニュスの小さな手を引いていった。

☆

俺は酷い頭痛を感じながら、何とかランスロット国の北、国境沿いの町のガリバーの町に到着した。

「……キツいな……具合が悪い」

だんだんと体が熱くなってきたのを感じながら、俺は何とか歩いていた。

（……そろそろどこかに宿を取って寝なきゃあ絶対に死ぬレベルになってきたなぁ）

俺は道中で拾った杖を使いながら宿屋を探す。しかし、そうそう幸運は訪れないらしく、なかなか宿は見つからなかった。

この際、ラブホテルでもなんでもいい。とりあえず寝たい。

「……本当に大丈夫ですか？　顔色がゾンビのようですけれど」

言ってくれるじゃないか。アニュスよ、俺はそこまで土色の顔はしていない。そんなことを心のなかで愚痴りつつ、「多分大丈夫だろう」と心無い返事をする。

正直、その時の俺の体力は限界に近かったのだ。それこそ汗は吹き出るわ、目まいはするわ。この体調でこの町をうろつくのは、俺にとっては地獄になっていた。

その時、アニュスは俺を心配して、道行く人に宿の場所を聞き、俺の手を引っ張った。

――これじゃ逆だな。

さっきまではアニュスの手を引いていたが、今度は彼女に手を引かれている。

彼女がそうやって俺の手を引いて歩いていったのは、薄暗い路地裏。流石に危険を感じずにはいられなかったが、俺にその進路を変えるだけの力は残っちゃいない。そのまま彼女の成すがままに従った。

そして――着いた。

その宿屋に入り、受付まで行くと、彼女のポケットから二枚ほどの金貨を出した。

「こんなに……どうしたんだい？」

「病人がいるです。その金額で泊まれますか？」

アニュスの真剣な声に宿屋の主人は頷き、「金は後でいい。まずはその兄ちゃんを部屋に運ぶぞ」と俺を軽々と担ぎ上げた。荷物も一緒に彼は担ぎ上げているので、彼が屈強な力持ちであることが分かる。そしてずんずんと廊下を進み、主人は俺を部屋まで運び入れた。

だがそれ自体は覚えていない。

なぜなら、俺は肩に担がれたときの衝撃で気絶したからだ……。

to be continued…

## 熱（後書き）

私はストックを書きながら執筆するタイプなので、実はこの話を書いたのは9月11日だったりする。

……ぶっちゃけ、ギャルゲの主人公って美少女を振れるだけの精神力を持ってんだなぁ…ある意味凄いよね。

しかも二次元って、目立たないキャラでも美人だよねクソッ！　何だ！？　格差か！？　三次元でも夢を見させてくれよ！！　モブキャラでも意外とイケメンだったりする二次元と三次元の格差はどーなんだ！

……ふぅ、四十話までのあとがきを消去してくる。

**requiem for the nature**

狭い門から入りなさい。
滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。
しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。

by 聖書

☆

気が付くと、そこは見渡す限りの星の海だった。一面の野の花が地面を覆い、空の暗黒の中に点々と星が輝いている。俺はそこで自分が夢の中にいることを知った。そして、いつもと同じように彼女にジャンクションしているらしい。
どうもこの感覚には慣れない。夢にしても、自分が本当に女になった気がして少し嫌な気分になる。どうあがいても、男性器が付いていないことに違和感を覚えてしまう。
一瞬、視界が暗転した。
どうやら仰向けに地面に倒れこんだらしく、眼前には無数の星が不規則に並んでいるのが見えた。
草の青臭いにおい。
昆虫の動く音。
母なる大地のにおい。
仰向けになると、そんなにおいが自然と匂ってくる。どうしようもないことだ。
そこで彼女は何者かの気配を感じた。地面に伝わってくる振動、足音。どれも人間のものだ。しかし彼女は敵意を持たずに後ろを振り返った。

「よう、イクス」
「お帰り。スカー」
スカーは手に魚を持っていた。そしてそれをイクスのほうに放り投げると、
「焼いてみろ。練習だ」
イクスはとりあえず手に力をこめた。どうやら本気で焼くつもりらしい。ジッと集中し、イクスは手の平に熱が集まっているのを感じると、その力の矛先を魚に向けた。
一瞬の光。そしてその光から吐き出される圧倒的な熱量。それらが全てを焼き尽くす。
次に魚を目にすると、それは既にケシミズになっていた。
当たり前だろう。あれだけの熱量ならば魚を炭にすることは簡単だ。それをみて初めて自分がやり過ぎた、とイクスは思った。
そんな落ち込むイクスをスカーは二、三度頭を撫でた。
「イクス、君はまだまだ力の制御が出来ていないな」
「……うん」
「そう落ち込むんじゃない。君は良くやっているさ。それは俺自身が良く分かっていることだからな」
俺はイクスを通じて彼の目を見た。それは強くて真っ直ぐで、清清しい目だった。
イクスの脳内を読んでみたのだが、どうやら彼とイクスは師弟関係にあるらしい。共に行動して以来、ずっとこの関係が続いている。
そして彼はイクスの中にある力に気付いているようだった。だからこそ、彼女に力の制御の練習をさせているようだ。

「君は凄い力を持っている。だからその力を自由に扱えるように訓練しなくちゃいけないんだ。分かるね？」

他ならぬい命の恩人の声がイクスを慰める。

しかしイクスはそれでも落ち込んだ様子でスカーを見ていた。

「私は一人で生きていくだけの力が欲しい。だから別にこんな……」

「イクス、聞け」

スカーは少し強めに言ったことに、イクスは驚いて黙った。

「お前の無詠唱魔法というものは非常に危険な代物だ。下手をすれば、好きなときに人間を殺せる。だが、そうなってしまうと後には戻ることは出来ない。そしてその先にあるのはただの殺人者としての地獄だけだ。君はまだまだ幼い。だからこそ……生きる意味を知って、その力を人々を守ることに使わなければならないんだ。だから、今のうちからその力を自分のものにする必要がある」

このことを聞いて、俺は奇妙に納得してしまった。

俺が見たところ、彼女は恐らく世界を改変させることが出来るほどの力を保持している。そしてその使い方は彼女次第なのだ。しかし、もし彼女が誰かを恨んだりしてその力を爆発させてしまったら。力の加減を間違って使用してしまったとしたならば。もし彼女がひと時の感情の爆発で暴走してしまったならば。

――恐らく彼女を止めることが出来る人間はいないだろう。

だからこそ、今のうちに彼女の力を彼女自身が制御できるようにならなくてはいけないのだ。

スカーは一通り説教を終えると、日を起こし、魚を二匹棒に貫いて日に投じた。

「いいか？　火というものは人間が始めて扱った自然の力の一つでもあるんだ。それこそ劇的に人間の文明を築き上げるほどの、驚異的な力だった。だが、その火は使い方次第では火事を起こしたり人間を殺したり出来る。でもね、扱い方を間違えなければ火を起こしたり、人を救ったりできるんだ。……君も同じだ。君は一つの大きな火種なんだ。扱い方をしくじると人は死ぬ。だから君は自分の中にある火の扱い方を知らなきゃいけないんだ」

「……でも、その火種は平穏を望んではいけないの？　火種はいつも争いの渦中にいて、もっと人を殺すだけじゃないの？」

「望んでいいさ。君は火種だとしても人間だからな……人は幸せに生きる権利があるのさ」

「でも強すぎる力は時として反勢力を生み出す。そして強すぎた力を倒すために勇者がいる……結局、力は平穏の妨げにしかならない」

「イクス！」

そこでスカーはイクスを叱った。

「君はそんなことを考える必要なんてない。子供は子供らしく今を楽しめばいいんだ」

「でも」

「君は人間だ。それ以外の何者でもない。そのまま人としての人生を歩みなさい」

俺からみたスカーという男は、どうやらイクスを何かに巻き込ませたくないように見えた。彼自身も同じような境遇だったのだろうか。

――結局、この夢は俺に何を伝えたいんだ？

俺はイクスの中にいることで、これはただの夢ではないことを感じていた。

この『イクス』が、『スカー』が、一体なぜ俺の夢に出てくるのだろう、俺はそんなことを思っていた。
『傷』の男と強大な力を持つ女の子。この二人は、一体この後どんな物語を紡いで行くと言うのか。そして、この夢の意味することとは。
一体何だというのだろう。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## requiem for the nature（後書き）

恐らくこれから主人公の夢に関しては出ない気がする。（これを絡ませ過ぎたらＳＦ本が軽く二冊書けるレベルになるため）

ま、夢は番外編…？　みたいな感じなので、続きは今日にも。

レクイエムのキリエは良作。あれは素晴らしい曲だ。そして私は水銀党員。

お互いは全く関係ないようだが本当に関係ない。だが私の趣味だ。

それだけだが、それだけで構わないだろう？

**それから……**

わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であるが、見えないものは永遠に続くからである。

ｂｙ　聖書

こんな平穏の中にも幸せはある。今まで気付かなかったような、小さな奇跡が。

俺たちは、その奇跡を当たり前として感じ、そして見過ごしている。

その幸せが、何時か崩れ去るとしても、俺たちはその崩壊に気付けるだろうか。

☆

知らない天井、とはよく言ったものだ。ちょうど俺の目の前に文字通りの知らない天井がある。

どうもまたあの『夢』をみたらしい。まだあの光景が脳裏に焼きついて離れない。もはや、『悪夢』といってもいいのかもしれない。

――凄い倦怠感だ……。

夢自体のリアリティは全く素晴らしい出来だ。しかし、夢を見るたびに体の疲労が蓄積するのだけは嫌だ。でも仕方ない、と心で決め付けてみる。

……と、俺は隣から何かの違和感を感じたのでふと隣を見てみる

と、

「アニュス……何してる、起きろ」

ゆさゆさと体を揺さぶってみるものの、見事なまでに丸まって『まだ寝たりないの！』という自己アピールをしている。

どうしたものか、と俺は思いつつも彼女を抱き上げ、とりあえず俺の布団に押し込んだ。するとアニュスは少し幸せそうに「むにゅにゅ……」という寝言とは考えられない声を発した。

まだ幼女といえど、彼女の白い素肌が服のしたからちらほら見え始め、俺は何だか自分が犯罪を犯したような気分になった。

俺としては彼女に『乙女の恥じらい』を身に着けてほしいものだ。

「もう八時過ぎか……朝ごはんでも食べにいくか」

そこで俺は再び布団の中のアニュスを見たが、「むにゅにゅにゅ～」と反則的な可愛らしさで寝息を立てているのを見て、彼女を起こすのは止めた。

俺だって起こされるのは嫌だし、第一にこんな可愛らしい姿を見せられて起こす人間はいない。

俺は急いで服に着替え、急遽朝の町へ出かけていった。

☆

「おい、起きろ……アニュス！」

「ん……」

「起きなって……ったく」

俺は寝起きの悪い子供をぶったたき起こすために、ぬくぬくに温もっているであろう布団を剥いだ。
するとアニュスは寒そうにして目を瞑りながら手で布団を探し始めた。

「起きろっての」
「……！　お兄さん、もういいんですか！？」
「体は完璧だからさっさと起きて服を調えろよ……」

アニュスは「あわわ……」といいながら服を肌蹴ているのを素早く直した。そしてそのまま俺を睨みつける。

「やっぱりお兄さんって、ペドだったんですね！」
「違うって。どうしてこうなったんだよ……誰が教育したんだ？」

どうしてこんな幼い子供が「ペド」なんて言葉を知っているのだろう。果てしなく奇妙なことだ。
俺は何度も言うが、『ペドフィリア』ではない。ちゃんと『十三歳以上が好きな健全な思春期男子』だ。これだけはハッキリしておく。
もちろん好きな人だっていたし、一般的な青春を過ごしてはいたさ。ただ、告白とかそんなイベントは起こらなかったし起こすつもりも無かった。いわゆる『自分に自信がもてない奴』だったのだ。

「とにかく飯だ。腹減っているんだろう？」
「えっと、そりゃぁ、まぁ……」
「どうせ一晩中看護したのだろう？　だったら飯を食べなさい。一応俺があんたの保護者だからな、倒れたりされちゃ、俺だって迷惑なんだ」
「分かりましたですよぉ……太るなぁ……」

「太る？　バカを言っちゃいけないぞ。お前はまだまだ成長期だからいくら食ったって太ることはないぞ。体脂肪率だってほとんどないだろうが」

そういいながら俺はパンを小さくちぎって口に放り込む。

少し塩味がきいた結構おいしいパンだ。これは好物の類に入れてもいい。

アニュスも気に入ったらしく、そのままガブリと小さな口でパンにかぶりついていた。

可愛いものだ、と俺は思った。

もし俺が親になって子供が出来たとき、きっとこんな感情抱くに違いない。そして年月が過ぎ去って、親元から離れていく。

そしてこの娘も同じように恋をして……そんなとき、俺は笑っていられるだろうか。

「どうしたんですか？　お兄さん、最近ぼーっとし過ぎです！」

「いや、少し、な……」

「なんですか？」

「……アニュスがこのまま大きくなって結婚していく、と考えたら、少し悲しくなってな。なんだろ、この感じは……」

「大丈夫ですよ」

パンから口を離したアニュスが笑いながら言う。

「私は何時までもあなたのそばにいますよ。それこそ一生付いていきますです」

「……嬉しいこと言ってくれるじゃないか。でもな、一生は付いてこなくてもいいんだ。お前さんが好きな男を見つけて幸せになってくれりゃあ文句はない。それこそ俺の本望だぞ」

「うにゅ、違うの。そうじゃないですけど……」

「俺はどうせ結婚して子孫を残すことは出来ないさ。だから、あんたが俺の意思とか何やらを次世代に残してくれたら……俺は生きた証を残せる。自由に生きろ。それが今お前さんに言ってやれることだ」

少し変な方向に行ってしまったか、と俺はそれまでの会話を断ち切って再びパンを屠る。

アニュスは少しだけ困ったような顔をしていたが、また同じようにパンにかぶりつき始めた。

――この娘は成長して、俺の元から離れていくんだろうな……ふん、俺としたことが、少し感情的になってしまったか。

でも。

その時、相手の男が俺の目の前に現れて、結婚のことを告げてきたら。

俺はその時、冷静にいられるだろうか。

だが、俺は一つだけ確実にすることがある。

『その時は、確実に男を殴る』

アニュスを貰うって事は、それだけ覚悟することだ、将来のアニュスの婿よ。俺はそれまで腕の筋肉を鍛えておくぞ。

「兄さん！　また別世界に行ってます！」

俺はその言葉でまた現実世界に引き戻された。

最近妄想世界に行きやすい頭を刺激するように数回頭を振る。

「全く。兄さんはそんなことだからモテないんですよ、分かってますか？」

「はいはい、分かっているから早く食え」

「むにゅ～」

俺はちぎられて小さくなったパンを口に押し込んだ。少し塩味の効いたパン。

そこで俺は窓を見た。外は既に日が光をこの世界に降り注いでいる。

『夢』の中の『イクス』も『スカー』も、場所は違えど、この風景と同じようなものをみたんだろうか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## それから……（後書き）

こんな堅そうな文章を書いていて、一番困るのはストーリーの進むスピードですね。
小説家になろうに投稿していらっしゃる方々の多くは大抵、状況心理説明文＜セリフになっていて、とてもストーリーが進むスピードが速いです。
ですが、私の書き方だとそういうわけにも行かず、ストーリー＜個性になっているわけですのよ。
でもまぁ、こちらだって有利な点は有ります。
登場人物の心理を分かりやすく伝え、且つ個性を作り上げる、これがし易いんです。確かに多くの人がなさってる文章＜セリフでも個性が出るのですが、それは一片にしか過ぎません。（書き方によるけど）

スピードか、個性か。悩みモノですな。

どうでもいいけど、文章＜セリフの文体でハーレムを書ききることは、殆ど無理だと思う。
だって、それぞれの心情を鮮やかに読者の心を掴みながら進めなきゃならん。そう考えてみれば、プロのラノベ作家は本当に凄いのだ。

## 究極の在り処

Ａ weak man has doubts before a decision, a strong man has them afterwards.

弱いものは物事を決める前に疑ってしまう。強いものは決めた後に疑いを持つ。

by Karl Kraus

人間における真理とは、常に争いである。
なぜなら、人間の歴史の中で争いが絶えた時間というものが存在しないからだ。

☆

体調が完璧に治ってから、俺はすぐさま町の図書館に特攻した。
もちろん、アニュスも一緒だ。俺がいないところで変なことを仕出かすと、こちらが責任を取らざるを得ないからだ。
彼女にしてもそれは賛成してくれたらしく、今は俺の隣で本を読んでいる。
俺はここ最近、いつも図書館にいる記憶ぐらいしかない。まぁそれはそうだろう、俺は大抵の暇つぶしは本を読んでいるからな。

「お兄ちゃん、このミューゼスの海ってなあに？」
「ん？」

「ほらここ」

アニュスが指し示したところに、大きく『ミューゼスの海』と書かれている。しかも地図の上だった。

俺が少しおかしいと感じて彼女の読んでいる本を確認してみると、それは『超古代文明の遺産とその論証』と題打たれていた。彼女はこの歳からして、すでに難しい本を読んでいたのには驚いた。

「お前……理解できるのか？」

「うん。簡単」

これは……という驚きの声しか漏れなかった。

少し本の中身を覗いてみたが、そこは文字の海、海、海だ。これは幼女が読めるレベルではないだろう。

いくら『天才』でも、流石にここまでの本は読めまい。この歳で既にこのレベル、というのなら、将来的には有望なことだ。

そこで俺はアニュスに答えた。

「多分、海の名前だろ。どこかここら辺にミューゼス港ってあるだろ、そこの近くじゃないか？」

そこでアニュスは『なるほど』と頷いた。

「そうですか。綺麗な海ですかね？」

「そりゃそうだろう。港があるくらいだからそこそこ綺麗なんだろうな。確か場所は……」

「ウーメラ砂漠の近くです」

「……普通に遠いな」

それからアニュスは再び本に目を落とした。また読書に戻ったよ

うだ。そして俺もそれを見て、また本を読み始めた。
俺が今手にしている本は、『伝説の魔法』とか何とかいうモノを取り上げた胡散臭い代物だ。これは明らかに禁魔術を取り上げているのだが、規制は受けていない。
その本が伝えているのは『アルテマ』と『メテオ』という魔法だった。
本によれば、その魔法は昔――超古代文明が作り上げた、たった一度しか使われなかった最強の大量殺害魔法だったらしい。『アルテマ』に関して言えば、百人程度の人間が一箇所に集まり、一気に呪文を詠唱する。そしてエネルギーに向かうべき場所をプログラミングしたのち、放つ。
その魔法の威力は、実に一度に一メガデス（百万人の死）ものの人間を殺害することが出来たといわれているほどだ。
つまり戦術核並みの威力を持っていることになる。だからこそ、封印されたらしい。

「アルテマね……くだらん」
「アルテマですか？」

そこで再びアニュスがこちらを見上げて、体を動かして俺の本を覗き込んできていた。
なんだかなぁ、とか思いつつも彼女を膝に乗っけてみる。意外と軽い。
そしてアニュスが手に持っている本を俺の膝の上で広げ、ある部分を指し示しながら俺の目を見てきた。

「アルテマって、ここにも載ってるですぅ」

なに？　と思いながらその指が示している部分を見た。
そこには、アルテマとメテオの、何か重大な秘密が隠されている

場所、と書かれている。
しかしどうも疑問を持たずにはいられない。正直、嘘くさいと思っているのは確かだ。

「嘘じゃないのか？」
「そう思うですか？」
「ああ。全くそう思う」
「そうですか……でも、あると思いますですよ？」
「まぁ、確かに存在したとしても、『アルテマ』を求めている人間なんかたくさんいるだろう。それにここに書いてあることを参考にして探しにいった奴がいるはずだぞ。もし在ったとして、そういう奴が先に見つけてるハズじゃないか」
「そうですけど……ロマンがあるじゃないですか」
「ロマンねぇ」

俺としても在ったら凄いと思うし、そこにロマンを感じる。
だが俺はインディー・ジョーンズでもなければ石仮面を作った奴を有名な観光地で見つけるぐらいの心意気もない。
それこそ『悪の秘密結社』や『秘宝を狙う第三者』も嫌いだし、別にそこまで執着することもないだろう、というのが俺の考え方の原点。要するに、欲しい奴がいるならそいつに譲ろう、平穏が一番という楽観視の考え方だ。吉良吉影みたいな生き方がいい。

「むきゅ。メテオとかいう魔法もアルテマと同じように封印されてるらしいです。探してみたいです」
「いやいや。流石に無いって」
「きっと在るです」
「いや無い」
「在るです」
「……」

「……」
「……いや、無いだろ」
「在るです！」

彼女は何時になく真剣だ。これまでに見たことのない、可愛らしいとも怒ったとも受け取れる表情。俺はその顔を見たとき、少しだけ罪悪感を感じた。
それが俺の心を動かした。

「――分かったよ。どうせ暇つぶしだ探してやるさ」

だが、そこで俺の胸に引っかかるのは、ある種の奇妙な欲だった。その力を手に入れてみたい、使ってみたい。
人間の心の中の真理は、常に欲とそこに至るまでの争いだ。俺にも人間らしいモノがあるということか。
だが、この娘は純粋な興味だけだ。それは俺のような汚れた人間ではない。それが俺と彼女との大きな違いだ。
人間は唯一つしかないのものを追いかける。人間と動物の違いの一つなのかも知れない。
俺は本を閉じ、アニュスを抱きかかえて隣の椅子に座らせて席を立った。それを反復するように彼女も椅子を立ち、本を脇に抱きかかえる。
本を所定の位置に戻し、そして彼女の分の本を本棚に納めていく。
だが、いきなりアニュスは俺の腰に抱きつき、

「おんぶしてください！」

などと言い放った。
彼女の無邪気な言動が、俺の心をがっちりと掴んで離そうとはしないらしく、彼女の言うように、彼女の身長に合わせるように腰を

落とし、背中に乗せる。
「むきゅむきゅ～」と声にならない喜びの声を上げて、俺の首周りに手を回してくる。別に苦しくはない。そこのところは彼女が加減しているようだ。
――これが女子だったらな。
そんな無駄無駄なことが俺の頭を過ぎる。だが今、俺の背中に乗っているのは女子ではなく幼女。どこかの誰かがこの有様を見たら何と思うだろうか。

「頭は大人並みだが、まだまだ子供じゃないか？　アニュス」
「むきゅ、私は一端のレディです！」

いささか俺の発言に怒っているのか、俺の腰を足で締め付けてくる。
しかしそこが可愛いと思うのは……一体なんなのだろうか。

「いくですよ！」
「……何処に？」
「まずは国境越えして、えっと……ここら辺で一番こういうオカルトに詳しいインストリアル皇国に行くです！」
「やれやれ……今すぐ行くのか」
「はいです！」

そう元気に告げた。

だが、それはこの物語の始まりの終わり、プロローグの終わりの始まりだった。

to be continued...

## 究極の在り処（後書き）

５０話になって未だに登場者紹介してない現実。
見てくださった皆様、ゆっくりシャダイってね！！

## 聖教都市

平等は言葉として存在するだけだ
ｂｙ　エウリピデス

聖教（グノーシス）都市。
ここは、インストリアル皇国の中心都市。
俺たちはあれから馬車やさまざまな移動手段を用いて都市までやってきた。ここまでの道のりは、恐ろしく長く、それまで何日掛かったのか俺の脳は記憶していない。
隣にいるアニュスは、都市というだけあっての人口の多さにびっくりする。無理も無いだろう、この国は大陸における宗教の核、つまり聖地のようなもの。それだけの理由であれば、この人間の多さも納得できる。
俺はその中でひときわ目に付いたものがあった。それは地面に座り込んで手に看板を持っている。どうやら『お恵みを！』と書いてあるようだ。

「……ありゃなんだ」
と、ややテンションを下げながら言う。

「ああ、あれはただの乞食さんですよ。貧乏な人がわざわざ首都まで進出してきたんだけど、雇ってもらえなかったから今はあんな風に人からお金を貰うようなことをしているんです」
「……へぇ」
「でもそれでも普通に生活できるレベルで収入が得られるというらしいですから、世も変わりましたよね～」
「……そうだな」

そういう俺の声は、いつも通りに悲痛な三点リーダが付いている。それは何時になっても変わらないものだ。その沈んだ声で適当にアニュスに返事をし、先へ進む。

ここは大通り、というほどのものではないのだが、それでも歩行者天国と化していた。本来、車が通るべき道路が無く、その代わりに数々の店とそれに比例するかのような人間が、その道を闊歩している。

俺たちははぐれないようにしっかりと手を繋いで道を歩く。時折、少し汗ばんだ小さな手が俺の手を強く握り締める。

「どうでもいいんですが、これからどうするんですか？　このまま図書館に引きこもるんですか？」

アニュスはそう言いながらも更にしっかり手を握ってきた。

俺は彼女が人波にさらわれないようにしながら答えた。

「……お前さんはどうしたい？　このまま図書館に行って調べものをして一日を潰すか。それとも宿屋に行って今までの疲れを癒すか。どっちがいい？」

「うーん、お腹が空いていますし、このまま図書館に行っても面白くないし……」

「なんなら宿屋へ行くか？」

「……はい、そっちの方向でお願いします！」

と、元気に応答した。

その時のにっこりと笑う彼女は、とても可愛らしかった。

☆

「――で、私達は何とかここに着いた訳だけど……早々に任務を放棄したくなってきたわね」

ガウェインは小さく愚痴を言う。

どうもあの男の指示を受け入れることが、ガウェインの脳内では気に入らないらしく、いつも以上に苛立ちを覚え始めていた。

――どうしてあんなクズみたいな奴が上官なの？　理解できないわね。いっぺん死んだほうが世の中の為になるんじゃないかしら？

イライライライラ。

そのあまりの怖さに、引き連れてこられた彼女の部下の顔が引きつる。彼女の他に、実は数人ほど騎士団員（全員女性）を引き連れて来ているのだ。

その中の一人がガウェインに話しかけた。

「あのー、隊長？　体調が悪いのでしょうか……」

「ん？　いいえ。別に体は何処も悪くはないわ。ばっちりよ」

「そ、そうですか？　私から見たら、凄く顔色が悪そうだったのですけれど……」

「違うわよ。確かにムカついていたのは確かなんだけど……」

ああ、本当にイライラするわね。

ガウェインは今すぐ帰りたくなる衝動に襲われた。今すぐ帰ってあの男の首から上を切り離して、その頭を地面に埋めてやる――なんてことを僅か一秒以内に計画した。……だが、そんなことをすれば、一気にクルド国の戦力は低下して私の首が刎ねられることは間違いない、という事実がガウェインの頭の中を過ぎる。

「全く、この人口の多さじゃあカラスを探すって言ったって無理じゃない……どう探すかまで教えて欲しいものね」

「だったら町中にポスターでも貼りますか？　『レイヴンの人は名乗り出てください』――という風に」
「いいアイデアね。でもそんなことして集まるとは全く思えないから却下ね」

などと言って何とか気を紛らわす。
しかし、まだハンスに対するムカつきが心の中にあり、それがどうもむしゃくしゃする。あの野郎の顔を思い出すだけで胸が痛くなる。
――恋。

「な、そんなことがあるはずがない！！」
「え！？　どうしたんですか！？」
「そんな、私が恋をするはずが……あんな男に……」
「えっと、あの……」

心配する部下をよそに、ガウェインはフッと沸いた言葉に葛藤する。
――ああ、そんなはずが……あいつは私の、いえ、全女性の敵！　セクシュアル・ハラスメントの生産工場！　獣！　エロ！　絶倫野郎エトセトラエトセトラ……。

しかしその時。
目の前に小さな女の子を連れた男が。
その男は背中に剣を持ち、大きな荷物を持っている。
だが、問題なのは子供のほうだ。
男が子供の手を『無理やり』手を引いて、どこかに『拉致』しよ

うとしている。

コイツは……。

「誘拐犯か」

「え？　誰がですか？」

「あの男よ……ミネは左から、エスタは右から奴を囲みなさい。私が直接捌きを下す」

「ええ！？　あの、子連れの人をですか……？」

「ええそうよ。きっとあれはハンス並の犯罪者――今捕まえてやらないと、そばの女の子が後でどんな目にあうか……」

「た、確かに……」

「さ、行くわよ……男は死ぬべきだわ」

「あ、りょ、了解！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

**騎士と俺**

Q．そんな装備で大丈夫か？

A．大丈夫だ、問題ない。

by　エルシャダイ

松下和哉は、自分の一生の中で、ほとんど他人の為に動いたことはない。

そう、一度も、だ。

今まで俺を頼ってくる人間なんかいなかったし、仮にいたとしてもそれを手伝うことはなかっただろう。それはさも普通の、松下自身の性格。他人に干渉することがあまり得意でない、何よりの彼自身の個性。

だけれども、俺はそれまで一切女性に囲まれるという事態に遭遇したことはことはない。そしてこれからも……いや。

それは否――。

「やれやれ、どうしてこうなった……？」

そう、俺でさえ予想をはるかに上回る、奇妙極まりない事態が発生していた――

☆

「……一つ、お前達に質問しよう」

ふと、小さく呟く。

「お前達は、今何をしているのか理解しているか？」

すると、女は言う。

「理解しているわ。これ以上、犯罪を犯させないように、あなたを取り囲ませた」

――いま、俺の身の回りで起きている異常事態。それは。

『なんか得体の知れない女達に囲まれている』

俺は一体何が起こっているのか理解が出来なかった。そう、ありのままを話せば、気が付いたらいきなり女達に周りを囲まれていたって奴だ。……何を言っているのか分からないとは思うが、俺も何をされたのか分からなかった……。

全く理解に苦しんだ……催眠術や幻覚とかそんなもんじゃ、断じてない。これは現実のことだ。

――全く、奇妙なものの片鱗を味わったな……。

「……で、何の犯罪を犯したって？」

俺が静かに聞いて見るが、全く相手は聞く耳持たずの状態で、こんなおかしなことまでも言い始めた。

「男って、やっぱり変な奴が多いわね……あのクソ英雄と目の前にいるロリコン男……ああ、いい男ってみんな変人なのかしら？」

「聞いてるか？　おい」

「うるさいわね、あんたのような男は、例え意外といい男でもそういう性癖を持っているってことが見え見えなのよ！　分かったら、早く地面に伏せて武装解除をなさい！」

――こういう場面に遭遇して、すぐさま解決できる人間に会ってみたい。
俺は頭を抱えずには居られなかった。なぜこういう女が、いきなり俺の目の前に現れたのか。そしてどうして何かしらの被害妄想をしているのだろうか。
周りには既に人は居ない。皆、奇妙に思って何処かへ行ってしまったのだろう。
どうやら、俺ですら理解できない状況に、知らず知らずの内に陥ってしまっている――

「……帰っていいか」
「駄目よ。あなたを逮捕する」
「どうしてもか」
「ええ。拒否権はないわ」
「では罪状を言ってもらおう。俺は何の罪を犯してお前達に捕まるというのだ？　とりあえず納得したい。納得した上でならお前達に逮捕されてもいいんだが……まさか、罪が無いっていうわけじゃあるまい？」

すると、女は当たり前の口調で、
「児童ポルノおよび幼女誘拐の罪よ」

……と言い放った。

「……」
「……」
「……え？」
「だから児童ポルノおよび幼女誘拐の罪よ。それだけで十分犯罪者

でしょう。それにペドフィリアなんでしょう？　社会の底辺のゴミ虫の、あのペドが」
「……帰っていいか？　真剣に」
俺はやや顔を引きつらせながらアニュスの方を見てみる。その顔は既に爆笑する寸前。
いや、笑いたいのはわかる。だが、こういう場合処罰されるのは俺ではないか。しかも相手を見てみれば、確かにかなり腕の立つようだ。さも、騎士団の感じがする。ここでアニュスが一言言ってくれないと、とばっちりを食らうのは俺なのだ。
そういう意味でアニュスとアイコンタクトを取ろうとした、その瞬間――。

「比叡――」

俺の感覚の中の頭に、何かが接近するのが感じられた。それを感じると同時に、体中に酸素と分泌液を送り始め、心臓が激しく鼓動し始めた。
正面――剣を腰から抜き去った女が一気に接近してくる。
俺は一瞬でもアニュスの方に意識を集中したことを悔やんだ。まさか彼女が俺のほうに攻撃を仕掛けようとすることを予想していないとは完全に失敗だった。
――ちぃ！　ここで殺り合う気か！？
最初の一閃を何とかかわし、アニュスを抱きかかえて彼女から距離を取る為に道の端っこの方へ跳んだ。彼女を何とかその場に下ろしてここから離れるように告げ、敵対する女を迎えるために背中から刀を抜いた。
しかし、刀を抜いた瞬間。女が奇妙な反応を起こした。
「それは……『鬼の機龍』の……クラミス元帥の刀ですって？　何

故あなたが……」
「……どうした、来ないのか？」
「……まぁどうでもいいことね…ッ！」

いきなり女が地面を蹴って俺の懐まで侵入する。その間、三秒にも満たない。更にそれを上回る恐ろしい速さの剣。俺はその一撃一撃を未だに使い慣れないこの刀で何とか防いでいく。
一撃。二撃、三撃。四撃。恐ろしいまでの破壊力と共にその整った顔が俺の顔に近づく。
だが、俺だってやられるわけにはいかないのだ。ここで死んでしまったら、アニュスにも、この刀をくれた村長にも、矢島にも、誰にも顔向けが出来なくなってしまう。そう思うと、自然にイラついてくる。
――なんで俺がこうも一方的に攻撃されなくちゃならないんだ？
俺はただ平穏に過ごしていたいだけなのだ、こんな闘争は好まない。だが、こんな理解、納得できない理由で勝手に攻撃されるとムショーにムカつく！　自分勝手な正義を押し付けることと一緒じゃないか、ただの正義ごっこか？　ああイラつく。

「マヌケが……これ以上理解出来ないことをするんじゃあない……接合（ジャンクション）ブリザラッ！」

その一瞬で、こちらまで凍ってしまうのではないかと思うほどの冷たさが刀を持つ手と体に伝わった。それを使って相手をけん制するつもりで軽く一振りする。
相手もそれを見て警戒し始めたらしく、さっき俺を取り囲んでいた女騎士も剣を構えて用心深くこちらの動向を探る。だが、それは問題はない。恐らく俺がこの魔法剣を使ったことで魔法剣士だと理解しただろうから。多分目の前にいる女を除いては俺に闘いを挑むことはしないだろう。

だが、本当に問題なのは、この目の前にいるリーダー格のこの女だ。どういった脳細胞で俺を勘違いしているのかは理解しかねるが、強い。ドラゴンの攻撃をかわせられるだけの集中力を備えていてさえ、彼女の剣製が見切れなかった。

どういった組織に所属しているのかはわからないが相手と戦うにはいささかリスクが大きい。ここは逃げたほうがいいのか、それとも素直に戦って彼女を打ち負かすか。結局、このどちらかの選択肢を取らざるを得ない状況。――だが、ここで背を見せて逃げるのは、彼女のスピードを見てそれは得策ではない。

ならば――ここで決着をつけるべきか。

そう理解したのならば、話は早く済ませたほうがいい。そう思って俺は地面を蹴り、今度は俺が彼女の射程距離に入る。

「まさか……魔法剣士だとは！」

「そんなことはもうどうでもいい……さっさとお前を倒すッ！」

彼女の攻撃――だが、一度その攻撃は見た。既にその剣筋は見えている。俺は思いっきり身を屈めて足に力を込めて、その力を腕に伝達させ、一気に剣を放つ。

――だが、彼女も伊達ではないらしい。俺の攻撃を、氷の剣を意図も簡単に避ける。いや、そうではないらしい。彼女はその場を跳躍して後ろに下がって避けていたようだ。まさに踊る剣士、と言ったところだ。

今、お互いのテンションは高まっていた。ここが『インストリアル皇国』の都市の中での戦闘だろうと、そんなことは既に気にしてはいない。

そして再びお互いの剣が交じり合う。金属同士の擦れ合う乾いた音が、命のやり取りの音がその場に反響していく。

まだお互いの名前すら知ることは無かった。だが、それでもこの中で確かに生きた充足をお互いが感じ始めて行っている。

「……ハッ！」

「無駄無駄無駄――――ッ！」

この声が辺りの建物に響いてゆく。

この秋空の下に。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

# 騎士と俺　2

皇国の興廃この一戦にあり、
各員一層奮励努力せよ。

ｂｙ　東郷平八郎

「……ちぃ！」

刀を一振りし、女をけん制する。が、それを彼女は何とも思わないように軽くさけ、今度は彼女が俺を攻撃する。

ｚａ－ｚａａａ－－

地面の砂が舞い上がり、俺の視界を茶色に染める。その上を人間の靴が擦りつけながら地面を蹴る。

戦いはやや劣勢、剣の技は相手のほうに分が上がっている。無理はないことだ。これまでモンスターとしか戦っていない俺が、白兵戦での剣捌きの面で上に行くことはない。多分、後ろで控えている女騎士達も同じように俺より剣の技は多彩だろう。

――だが、それでも俺は生き残っている。なぜか。

「イス・レ・メディオム！」

俺の周りの空間から炎が生じ、それが女のほうに向かっていく。

だが、それすらも避けることは容易いといわんばかりに、ヒョイヒョイ避けていく。

そう、剣が出来ないのなら近づかせなければいいことだ。だから俺は出来るかぎり接近戦を回避している。

だが、この状態も何時まで持つか、そんなことは既に分かりきっ

ていることだ。彼女の機動能力から推察するに、あと二分と持たないだろう。

「さあ、どうする気？　あなたも分かっているでしょう、このままだと、あなたは確実に敗北することが」

俺はそれに答えず、静かな趣で彼女を見据えた。

「……敗北という前に、自身の過ちを訂正して見せたらどうだ。お前達はこの国で暴れるために来たのか？」

「いいえ、唯の任務の為よ。それ以外に成すべきことはそこまで無いわね」

と、相変わらずの機動力で魔法を避け続けてきた女は言う。

俺は相手が勘違いをしているから、どうにかそれを解かなければ、そんな思いに駆られ始めていた。このままでは本当にこちらの負けになる。俺の体力が尽きさえしまえば、女に接近を許すことになる。

だが――そう時間は残されてはいない。

「比叡――」

その時、再び俺の脳内で嫌な感覚が起こった。

頭の中で何かが警告を鳴らしている――それを認識した瞬間、俺は刀を構えなおして次なる攻撃に備える。

俺は焦った――このまま攻撃がくれば、俺では防ぎきれないかもしれない。

ふと、今まで認識していた女の姿が消えた。だが。

突然、その姿は俺の脳に認識される。それも、俺の射程距離内で。そして響く剣の擦れ合う音。俺はなんとか防ぎきれたのか――

しかし、それからが熾烈だった。

女の剣が、すぐに離れたと思えばすぐに俺の体を貫こうと迫ってくる。一瞬の狂いもない、ただひたすらに正直な剣。俺はそれをぎりぎりの集中力で見切り、刀で防ぐ。
――死がすぐそこまで迫ってきている！
その事実に恐怖を感じずにはいられなかった。今までのモンスターとの戦いですら感じたことの無い、明確にして濃い殺意。だが、それを感じることに少しだけ快感すら感じるのを止めることは出来なかった。
生きている。だけれども、すぐに死ぬかもしれない。それが俺を興奮させ、生きていることの充足を感じる。

「――無駄だッ！」

僅かに女に見えた隙を突いて足で彼女を蹴っ飛ばす。
腹を蹴られた女は少しだけ呻き、再び剣を手にする。
だが、その隙は大きく、俺の接近を容易く許してしまう。
俺は女の剣を持つ手首を掴むと、すぐに近接戦闘モードに入る。
俺の使っているこの技は、いわゆるＣＱＣといわれるものの見よう見まねだ。
とはいえ、剣を主体に扱っている人間が剣なしの近接戦闘の戦闘に慣れているとは思えない。故に勝機があるとすればそこだ。
俺は剣を懐に引き入れ、体勢を崩した女に対して間髪入れずに足をかけて完全にバランスを奪うと、俺は次に彼女の体の上に乗っかって腕をホールドした。それまで約三秒ほどであろうか。
ギリギリと体重を篭めながら、俺はその女に静かに告げる。

「――女、一つ言っておくが……お前は一つ勘違いをしている」
「……ッ！　なんですって？」

分からない、と女は顔をしかめる。

だがそれを無視しながら俺は続ける。

「俺は何も犯罪を犯しちゃいない。しかも俺はお前の思っているような下賤な人間でもないし、ペドフィリアでもない」

「ではあの女の子はどう説明するのかしら？」

「……お前、男と小さな女の子が一緒にいたら速攻で攻撃するのか？」

「当たり前よ。私はあのクソ上官（ハンス）を見てきて男は信用ならないと確信したのよ。全く、これだから男は困るのよ……」

「……あの女の子は唯の俺の家族だが」

「え？」

女が少しすっ呆けたような声を出した。

「……だから、俺の家族だと」

「……」

「どうした」

「……嘘」

「ではないからな」

「……」

「あの女の子は、血縁関係は無いが一応は俺が保護者だ。だから同行していたっておかしくは無いはずだが……あんたの目にはどう映った？」

「そのまま幼女誘拐している犯罪者に」

「……見えたのか」

「……ええ。ばっちり」

「……」

「……」

彼女はどうやら自分自身の間違いに気付いたらしい。

だが、それでもとりあえず今は彼女の上に乗っかる。

「……やれやれ」

俺は頭を抱えた。俺が子供を連れていると犯罪者に見えるとは全く気がつかなかった。いや、このなかなかに鋭い目つきならばそれも納得は出来るのだが……いかんせん掛けられた罪が罪ではないか。よりによって児ポ法と誘拐だとは。

俺はもう一度大きな溜息をついて、空を仰いだ。

「……ごめんなさい」

そう微かに小さく呟いたのが聞こえてきた。無理も無い、自分の失態に気付かないでやっていたことだ。今の彼女は恥辱にまみれていることだろう。

俺は彼女に敵対心は無いことを確認し、彼女の上から退く。その時に、今まで感じたことの無い女の肉の柔らかさを思い知ったのだが、それに少しばかり名残惜しむのは必然だろう。

思いのほか、意外と彼女が自分の失態を認めたので、俺は自身が地面に仕掛けていたトラップを解除した。本当はこれ以上の膠着状態に陥ってしまったとき、彼女をその罠が仕掛けられている場所まで誘導する、という計画を立てていた。だが、それも必要が無くなった。

体勢を立て直した彼女の手を引っ張って立ち上がらせ、ついでに剣も拾って彼女に渡す。

「……今回ばかりは私の失態だったわ。本当にごめんなさい」

と言って頭を下げる。

「……もうそれはいい。だから早く後ろの女達の武装解除をしてくれ。これ以上戦うのは御免被るんだが」
「それはそうね……ディスアーマメント（武装解除）」

女は手を上げて部下達に指示、それに女騎士たちは素直に従う。
つまりこの女は部隊長レベル、というわけか。それなりに権力を持つ、と。

「……で、お前達は何処の組織についているんだ？　まさかこの国ではあるまい」
「どうしてそう思うの？」

そこで俺は彼女達の鎧を指差し、

「この国（インストリアル皇国）に軍隊はないからな。もしあったとしても、こんなに大っぴらに外を歩いているはずがない。……つまり、お前達は何処かの軍属になるわけだが――」
「ええ、確かに私はこの国の人間ではないわね。でも、そんなことはどうでもいいでしょ？」
「――まぁ、確かにどうでもいいがね、せめて善良な一般人を容赦なく攻撃する軍人の所属する国は何処なのか知りたくなっただけだ」
「失礼ね。勘違いとはいえ、犯罪臭がしたから攻撃したまでのことよ」
「失礼はどちらだろうな？」
「お互いじゃない。あなただって女の体の上に乗ったじゃない。何？　私を犯したいっていうの？　私、まだ『ヤった』ことが無いんだけれど？」
「別に俺はあんたの処女性なんか聞いていないんだがね」
「意外なまでに冷徹なのね」
「よく言われる」

『あ、いたいた！　お兄さ～ん！』

と、ここで戦いが終わったことを感じ取ったのか、アニュスが向こうから駆けてくる。

俺はその小さな体を抱き寄せ、二、三度頭を撫でる。

「大丈夫だったですか？　怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「本当にですか？　装備が不十分でゲームオーバー寸前にまで行かなかったですか？」

「俺はイーノックじゃない。そんなヘマはしない」

その言葉にアニュスはやや笑い、俺も少しだけ頬を緩ませた。

「……あら、本当だったの？」

と、女は言う。

やれやれ、先ほどのことは女の勘違いで起こったことだというのに、もう開き直り始めている。凄まじい精神力だ、と俺は思った。

「一つ、聞いていいかしら？」

女が聞く。

「あなたたちは、この国に何をしに来たの？　それだけの力を保有しながら、まさか善良な一般人とでもいう気？」

「それ以外に、一体何を言えと？」

「……でも、この国に来たってことは何かしらの目的があって、その上で来たのでしょう？　私はそれを知りたいだけよ」

「お互いに名前すら知らないというのにか？」

「――そうね。それもそうだわ」

と、女はそう言うと、いきなり背筋をピン、と伸ばし、軍人らしい敬礼を取る。

「私はガウェイン・エムシーマ。とある国の騎士団長を勤めている、ご覧の通りの軍人よ」

とても人間とは思えない、澄んだ声が空気を震わせて耳に聞こえる。とても澄んだ、人間離れをしてまるで何処かの天使のような声色が心地よかった。

俺はその声に数秒だけ聞き惚れていたが、やがてそれが偽者ではないと知る。先ほど俺を襲ってきた人間の声とは思えない代物だ、と心の中でぼやく。

「俺は――松下、だ。そしてこの娘がアニュス。先ほど言ったが、血縁はない」

「そう……大丈夫みたいね。で、あなたがここに来た理由は？」

「聞きたいのか？　くだらないぞ」

「いいじゃない。興味を持った人の話だけは、私はちゃんと聞くタイプよ」

俺は一つ、大きな溜息をつく。俺がここに来た理由が、さぞかし笑われることだからだ、と思ったからだ。

でも一応はガウェインに言っておく必要はあるだろう。もし答えなかったら口を割るまで延々と尋問を喰らうだけだろうからな。

「俺は……『究極の力』の情報を得るために――って、どうした？」

そういった途端、彼女達の顔色が変化した。

一体どうした、と更に続けて言おうとしたのだが、流石の彼女達

の凄みに少し言葉が詰まる。

「――その話、そこの酒場でゆっくりじっくり聞かせて頂こうかしら」

その顔は、まさに『拒否権を与えない』と言わんばかりの、軍人が敵を尋問するような、そんな顔だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 騎士と俺　2（後書き）

今一度最初から読んで見た。駄作だった。
戦闘描写が短い&卑屈だ。

**聴取**

何かを選ぶなら、全力をあげて、心から選びなさい。
いいかげんな気持ちではいけない。
選びつづけなさい。前進しつづけなさい。
決意をもちつづけなさい。

ｂｙ　Ｎ・ウォルシュ

俺はあの後、騎士団に監視されながらアニュスを宿に送り届けたあと、すぐさま酒場に拉致られるという体験をした。
彼女達は美人揃いだったが、何より無表情なのが怖い。俺がアニュスを襲おうとでも思っているに違いない。

☆

むさ苦しい、と言えばいいのだろうか。
今、俺は酒場でガウェインと名乗るどこぞの騎士様から半ば強制的に事情聴取を受け察を受けさせられていた。
無論、俺は全て事実を語った。
特に信じてはいないが、どうせ暇つぶし程度に探していること。
そういうと、彼女は「本当に？」というような目つきで俺を見、その都度溜息をついていた。
「つまり、あなたは何も考えずに求めていた、というわけね？」
「だからさっきから何度も繰り返しているだろうが。俺は『究極の力』とかいう魔法に興味はないと……」
そういうと、ガウェインは更に顔をしかめる。その顔は大変整っ

ていて美しい、というよりカッコいい部類に入るのだが、いかんせんその顔がこういう時に豹変するのだから溜まったもんじゃあない。
それでも尚、彼女達の追及は続く。

「……じゃあ別の話ね。あなたは何処の出身？」
「何処だって構わないだろう、そんなことが何の関係があるというんだ？」
「あなたの所属している勢力がはっきりするわ。あれだけの力なら、何処かに使えていると考えてもおかしくはないわよ」

先ほどの戦いでは、何とか彼女に勝利を得た。だが、それとこれの話は違うのではないだろうか。

「くだらないこと言うな。俺は何処にも仕えているわけじゃあないし、何処にも仕える気はない」
「くだらないことは私は言わない主義なんだけど」
「言うな」
「……まあいいわ。『今日』はここで終わりにする」
「今日は、だと？　また後で何かする気か？」

思わず声を荒げてしまい、俺の声が辺りに響く。だが、ここは酒場。その程度の声は響く前にかき消されてしまう。
ガウェインは一杯酒を煽り、少し赤くなった頬に手を着きながらにやりと笑った。その謎の笑みが俺の背筋をやや寒くしたが、構わず話を続ける。

「私たちは、君の言う究極の力の情報を求めてこの国にいるの。つまり――」
「俺たちと組む、というつもりか」

すかさず俺が口を開いた。
ガウェインはその言葉に頷いて、
「ご名答。私たちと行動を共にした方が、まだ一人よりかはマシと思わない？　そうすれば交通にも困ることはないだろうし、私たちの諜報機関とも連携が取れる。あなたたちにとってすれば、断るような選択肢はないでしょう？」
「確かにそうだろうが――」
「それに、その子にあまり無理は掛けられないでしょう」
確かに、彼女は子供とだけあって俺たちより体力が少ない。無理に旅をし続けようならば、彼女の体に何らかのアクシデントが起こっても不思議ではない。
それに、彼女の言うことも一理ある。俺たちがのんびり探してもそう簡単に見つかる代物ではないだろうし、何より彼女達の国の諜報機関の情報が得られるとあれば心強い。
「……利害は一致する、というわけか」
「そうね。簡単に言えばそうなるわ。……ま、私もそこまで信じちゃいないんだけどね」
「俺もそこまで信じちゃいないさ。だが、一度見てみたい欲には駆られる」
「そう――まぁいいわ。じゃ、今度こそここで解散、としましょうか？」
ガウェインはそう言って酒を最後の一口、と言わんばかりに一気に煽る。飲み干して思いっきり机にジョッキを叩き付けた。
――どうも酒を飲む人は好きにはなれないな。
俺はそう思いながら、無駄に整ったガウェインをまじまじと見る。
胸はなかなか、髪は茶色っぽい。ついでに顔も酒の効力のおかげ

ですっかり赤くなっているが、女を感じさせる以上に男っぽさが感じられる。だが、それでもアルコールの匂いを感じると、俺は生理的嫌悪を感じずにはいられなかった。

「明日はこの国の図書館に集合ね。あの小さな女の子を連れてきてもいいわよ」

無論だ、と答えて、ガウェインが金を支払って酒場を出て行くのを見た――がやはり少し酔っているようで、足元がほんの少し覚束無い。騎士団の奴らに迎えに来てもらったほうが良かったのかも知れない。

☆

わいわいがやがや。

うるさい、と言ってもキリがないほどの騒がしさが酒場に篭り、それと同じほどの熱気と酒の臭さが辺りを漂う。

本当にここにアニュスを連れて来なくてよかったと思っている。もしここにつれてきたりした暁には、彼女は「私はれでぃなんです！　お酒ぐらい飲めるもん！」などと言って酒をがぶ飲みしそうだ。

俺はそんな中、一応未成年なので酒は飲まず、ただただ本を読みながら時間の経過を待ち続けていた。

特に何もすることがない。暇だ。

ガウェインが去ってから、俺はここにずっと居座っている。周りのテーブルは既に人だかりが出来て騒がしいのだが、俺はそれに参加しない。

――だけども、正直それが不味かったのか。

「となり、いい～？」

……正直、身が凍りつく気分だった。

酔っ払い。この世界で俺が唯一苦手とするもの。

それが絡んできた。キタコレ、と心の中で愚痴る。

ふと顔を上げる。だが、そこにあったのは、意外なまでに美人な女の姿だった。

「……」

そしてその片手には『バーボン』らしき酒のビンが。

……もしかしたら、俺は矢島以上に女運が悪いのかもしれない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 聴取（後書き）

ストックを生産中。
実はこの作品、最強系にするつもりなんだけど、それに至る道筋が非常に長くなってるの。
普通の小説家になろうの小説だと、死亡―神様の手違い―転生（イケメン化）―チート最強―ヒロイン出て来る―イチャラブ―ハーレムＳｃｈｏｏｌＤａｙｓ

というテンプレになる訳なのよ。
でも、それだと話が続かないし、何よりもテンプレだから同じような作品が大量に出て来る。
だから私は、最強系にするとは言っても、その過程をたかが一話で終わらせたく無かった。
しかも神様の手違い云々のせいでチート最強転生とか、もう見飽きた。
その結果。
そろそろ６０話に突入するのに、依然として最強系になってない事実が出来るわけです。
文体が難しいかなぁ…でも、ファンタジーでＳＦ化してるし、構わないと思うんだけど。

## 酔っ払い

私は一度、全てを捨てる勇気を持たねばならない。

酔っ払い、という人間について考察してみる。
彼らは大抵の場合、日ごろの鬱憤を晴らす為や、趣味だから酒を飲むという人たちが多い。
子供は酒を飲むことは出来ない。もちろん俺もだ。だから彼ら酔っ払いの心情を知ることは出来ない。
――そういえば、ロシア辺りの国々だったならば、十六歳でもウォッカを飲めた気がする。
俺はそんなどうでもいいことを考えながら、目の前にバーボンを持ってバリバリに酔っ払っている女を見る。

「ふふふ～さぁ君も酒を飲め飲め～！」
「……」

と、赤い髪を肩まで伸ばした、浅黒い女が言う。
触らぬ神に祟りなしとか何とやらだ。なんだか彼女に関わると、物凄くくだらないことに巻き込まれてしまう気がする。
俺はあまり彼女を刺激しないように頭で慎重に言葉を選びながら、口を開いた。

「……おい、あんまり飲みすぎると吐くぞ」
「え～？　あなたが？　やだ困るぅ～」
「俺が吐いてどうすんだよ……やだ困るぅ～はこっちの台詞だ」
「いいじゃんいいじゃん、酒は私の血～へへへ～」

まるでぶどう酒は私の血、と言ったイエスのようだ。だがまぁ、こちらはそのままの意味だろう。別に信じちゃいないが。
彼女は更に酒を杯に入れてグビグビ飲み始めた。
俺はその姿を見ながら、どこかおっさん臭い、どこか変な気分になって来ていた。そう……酒を見たら拒否反応を起こす寸前、あの気持ち悪さ、あの酔っ払いの吐く息の強いアルコール臭……。
ああ、やはり無理がある。俺はそもそも酒は好きではないのだ。それを目の前で飲まれていては気分を害するのも無理はないだろう。
俺は顔をしかめながら目の前で豪快に酒を飲んでいる女に言った。

「この酒場で飲むな、とは言わん。だが、何処か別の場所で飲んでくれないか？　読書が出来ないんだが……」

すると女は「ハァ？」と言ってジョッキを先ほどよりも強くテーブルに叩きつける。

「ここで読書するほうが悪いんでぃ！　それとも何？　私に酒を止めろっての～？　無理無理ぃ～それ無駄無駄ぁ～」
「……」
「あ、論破されちゃって固まってるぅーい！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

と言って思いっきり笑いまくる。
いやはや、どうして俺の周りにはこんな変な女ばかり集まるんだろうか。
思い返せば、やる気の無い生徒会長やら名家の騎士、ドＳな風紀委員長、最近になれば大人びた幼女、人を勘違いで襲ってくる騎士団長。そして今度は酔っ払いと来たものだ。矢島より女運は無いと思ったのだが、ある意味で恵まれて、別の意味で女運が悪いのを痛感する。

いや――考えれば、全て俺の行動が巻き起こしたものではないか？　そうだ、俺が無駄に動かず、ただ吉良ヨシカゲのように平穏な毎日を送れば、そもそもの厄介ごとは起こらないはず――

「ほらほら、青年も酒を飲め～」
「いや無理だから」
「私ぃ～達には～はっぴぃえんどはぁ～ありえない～カンターレラ～！」

更に歌いだした。こうなっては恐らく彼女は止まらないだろう。
だが、カンターレラ～と叫んでいる彼女の声は非常に美しかったのがせめてもの救いだ。声が濁声だったりしたら俺はすぐさまこの酒場から逃げ出していたことだろう。
だが、次に彼女が起こした行動は、恐ろしく俺の感情を揺さぶることになる。

「あーあ、あっちぃ」

彼女はそういうと、着ていた外套を脱ぎ始めた。下着――というより上半身はほぼ裸だといっていいほどの露出をしている。そしてその下から見える皮膚は、程よく焼けている、服の上からは見えない妖艶でとても健康そうな浅黒い肌。
はっきり断言していいが、俺は一瞬だけ発情した。嘘じゃあない。俺は思春期なのだ、いくら女に興味が無かろうがそんなに妖艶な姿を見せ付けられてしまえば誰だって興奮する。
更に酔っているために、やや皮膚が赤くなっているような気がする。それを加味してしまえば、どうやっても興奮は抑えることは出来ない。
だが、一応言っておく。

「……何故脱ぐ？」
「暑いから」
「そうか、秋になっても暑いか」
「ええ。体中が興奮するように……なんて～興奮した？」
「無論」
「したんだ～思春期失春期だ～ＨＡＨＡＨＡッ！！」

一言で片付けられたのには少し虚しい思いが去来したが、俺はそんなことはどうでも良かった。
とりあえず、服を着てもらいたい。
と、彼女はなにかを思いついたようにウン、と頷くと、いきなり彼女は席を立ち、俺の隣の席に座った。その時、彼女の顔を見たが、その顔は悪戯を仕掛ける寸前のわくわくした顔つきになっている。
そして彼女は顔を俺に近づかせて、

「ふ～ん、童貞なんだぁ……いいねぇ～わくわくするぅ～」

そういうと、彼女は俺の体に鼻を近づかせて何かを感じ取るように、ゆっくりと匂いを嗅いだ。それは俺の中の何かを探り出すような。
だが、その時に偶然にも俺は彼女の香りを鼻腔に感じ、あることを知った。

「そういうあんたも、処女のようだがな」

そういった時、彼女の顔がとても驚いたような顔になった。

「あらあら、見抜かれちゃったわね～ヒック」
「あんたと同じような技術だ。どちらも同じようなもんだ」

彼女は俺の顔に手を置き、滑らかに顔の頬から顎へ滑らせていく。その光景はまさに官能的であり、そこにエロスが存在している。
俺は一理末の不安を感じ、その手を退けるが、更に女は手を俺の下半身のほうへ滑らせていく。
――これ以上の描写をすると、このままではノクターンノベルズのほうに移籍しなけりゃならなくなってくる。というより俺の貞操の危機ではないか。
俺は冷や汗が一瞬にして噴出した。まさかこんな展開になってしまうとは、思いもしなかった。いやむしろここで童貞を卒業するというのも……。
などと一瞬考えてしまったが、やはり俺はそういうのは流石にする気にはなれない。

「退けよ」
「や～だぁ～」
「退けって」

下半身のある部分を執拗に触ってくる手を跳ね除け、彼女から若干の距離を取る。
それでも尚迫ってくる、と思った時――

「ふひ～」

クラッ、バタン。

「……」

女が倒れた。

「クー…クー…」

「……寝たのか」

とりあえず彼女が完全に寝てしまったことを確認し、一息つく。

「なんなんだ……一体、コイツ…」

先ほどと相変わらず酒場は活気にあふれている。だが、その中でここまで気分が落ち込んでいる人間は、そうはいまい。

――やれやれ。風邪、引くぞ。

さっき彼女が着ていた外套を手に取る。なんだかやけに重かったが、人のプライバシーに関することだ、気にせず彼女の上に掛ける。

「……ここで帰るべきか、どうするべきか――」

ここで彼女を放置してしまったら、そこらの酔っ払いから何かしらのことを受けるのは確実だろうし、なによりアニュスが黙ってはいないだろう。だが、本心としてはこのまま放置して帰りたい。

俺は何度か考えを逡巡させていたが、未だに解決には至らない。

ふと、彼女の方を見る。

片手には酒――バーボンであろうか、そういう類の酒を放さない。ここまで来ると、もはや恐ろしいの一言に尽きる。

――確かに美人ではあるがね……

さて、どうするか、と呟きながら、俺はとりあえず彼女がちゃんと覚醒するまでコイツを見張って置こうと決意し、テーブルに置いたままの読みかけの本に手を伸ばす。

さて、何時起きるんだろうか。早く起きてくれないとアニュスに起こられるのだがな……。

to be continued...

## 早朝

一つの扉が閉まれば、別の扉が開くものだ。
しかし、人は閉まってしまった扉を長いあいだ、未練たっぷりに見つめてしまい、自分のために開かれた扉に気づかない。

ｂｙ　グラハム・ベル

☆

『翌日ウゥゥ――――ッ！　の早朝オォォ――――ッ！』

朝。新鮮な朝。
その清清しい秋空が広がる空の下の、誰もいなくなった酒場で――いや、たった二人しかいないその酒場で、青年は眠たい目をしながらひたすら本を読みふけっていた。
そしてその隣で眠っている女が一人。
その女に向かって、青年は言う。

「おい、夜が明けたぞ」
「くー…くー…」
「おいおい……やれやれ、起きろっての！」
「むー…くー…」
「……これ以上三点リーダを使わせるな。早く起きろよ」
「ふむ～……」

俺より背が高い女性がこんなに無防備で寝ていていいものだろうか。昨晩だってもっと無防備になっていたというのに。　これだか

ら女っていうものは理解し難い生き物だ。男子とは違って思考とか悩みとか、それぞれの根本から全く違う。だから付き合うのが上手くいかない。

「全く……徹夜しちまったじゃあないか。ディ・モールト（モノスゲー）眠い……」

このまま机に突っ伏して眠ろうか。いや、それは危険な感じがする。昨晩のように下手して貞操を奪われかねない。

しかし、過去に三徹したことのある俺でさえ今の眠気を抑えることが難しくなってきている。ここ最近の疲れはしっかりと蓄積されているようで肩、腰が辛くなっている。まぶたも勝手に下りてくる。

（ここで『アポロ１１号』なんだ、とか叫ぶことも出来るだろうが……どう考えても無理だな。気合でなんとかするか）

そこで大きく深呼吸。

そして彼女の耳元まで近づいて呟く。

「……いい加減に」

それはまるで一つの大きな物音が暗闇の中で鳴り響くように。

空気がその言葉一つ一つを波として伝える準備をする。俺はそれを目を閉じて感じ、大きく息を吸い込んだ。

そして――

「起きやがれえええええええ――――――――――ッ！！！」

大音響。それが女の耳に響き、さらにこの酒場の中でも響き渡る。

俺は思いっきり彼女の耳元でアラームを鳴らしてみた。無論俺の声であるが。

しかし効果は抜群のようで、その声に驚いた女が一瞬で体を起こした。いささか動揺もしているらしい。

「……」
「……」
「……おはよう」
「……どうも」
「……今、何時？」
「……八時少し過ぎたところだ」
「……」
「……」

未だに我、まどろみの中に在りといった感じで目を擦っている。だが、だんだん状況が把握してきたのか、彼女の目が自然と大きく開き始める。

「……あれ？　私ってここで何してんだろ」
「……」
「え？　キミは……誰？」

……。
……。
…。

俺は正直、その一言に腹が立った。正直、いっぺん犯してやろうか、と思ったほどだ。

一晩使って彼女を見舞っていたというのに、この態度はあんまりだ。確かに酒で記憶がぶっ飛んだ、と考えられなくはないが、流石に虚しくなってくる。

俺は一つ溜息をつき、

「じゃあな」

荷物を纏めてその場を立ち上がって、そのまま出口に直行しようとした。だけれど、それを実行する前に、俺を慌ただしい声が呼び止める。

「嘘だってキミっ！　嘘よ嘘！」

「……嘘なら…言うんじゃあない」

やれやれ、といったように溜息をつき、ひとまず彼女の元へ戻る。

「で、キミの名前は何？」

「……言わなくちゃ駄目なのか？」

「もちろん。私がどう呼べばいいか分からないからね」

「……松下」

「マツシタ？」

女が反復する。

「そういうあんたは？」

「私の名前？　聞きたい？」

「ならいいや。別に聞く必要もないだろうからな」

「いやいやいや、そうなっちゃ私の沽券に関わるよ。だからそんな『壁とでも話してろよ』みたいな反応をしないでね」

「だったら、壁とでも話してろよ」

むむむ……と頭を抱え込み始めた女。自己紹介をするはずではなかったのだろうか。

俺は今一度彼女の全体の姿を拝見する。健康そうな程よく日焼けした肌。肩まで伸ばした髪（やたらと髪が荒れているのは起きたば

かりだからだろうか）。俺と大体同じ身長のようだ。
だが、それは今はどうでもいいことだった。既に朝、早く帰らなければ、アニュスとあの騎士団長になにか小言を言われてしまう。
俺はひとまず話を進めようと思い立ち、今度は落ち着いて言った。
「……さ、名前を言ってみてくれ。俺の心の中で女、というのはいささかめんどくさいから」
「？　何のことだか知らないけど……私の名前は『ベラトリックス・フルバーニアン』。これでも一応軍関……行商人よ！」
「よく言う」
俺はあくびをかみ殺しながら、
「多分お前のいう名前は本名なのだろうな。あんたの気配に微塵の嘘も感じられなかった。だが！　その後にいった職業には違和感を感じたが……本当に行商人か？」
「……え…っと」
「……」
「……」
微かな空気の流れを感じながら、その静寂に二人は包まれる。彼女――ベラトリックスは、微かに冷や汗すら感じていた。
俺はそんなベラトリックスの様子を見ていたが――途中でグラン、と頭の中がゆれたように感じた。俺はそれで思い出した。今、物凄く眠いのだと。
俺は無意識にだが、目の前にあった杯を手を伸ばし、その杯の中に冷たい水を入れ、一気に飲み干した。瞬間、喉に冷えた液体が流れていくのを感じ、それで頭を目覚めさせた。
だが、未だに眠いのは継続しており、またすぐさま眠気の波が襲って来るであろうことは想像に難しくない事象だった。

「……だが」
俺は精一杯、気力を振り絞って声に出していった。
「もうどうーでもいい。俺は帰らせてもらう……あんたも帰っていいぞ」
「へ？」
ベラトリックスが素っ頓狂な声を出して、
「……追求とか、しないの？」
「したって意味ないだろうが……眠いんだ、帰らせてくれ」
「……あー、っと？　これってどうしたら？」
「……もう、知らん」
「あれ？　キミ、なんだかフラフラしてない？　ちょ、危ない人に見えなくもないんだけれど！？」
「大丈夫だ、問題ない。十分危険な人間だ」
「いや、さ、そういう問題じゃあなくてさ……なんていうか、今にもぶっ倒れそう？　見たいな感じがするんだけれど」
「無論、あと十分程度で俺の脳内がシャットダウンする予定だ。しかも現在進行形でブルースクリーンとかＶＩＳＴＡのＲＳｏＤも表示している。そろそろ無理かもしれないな。ああ、言っておくがコレはただ単なる情報の一つの表示方法としての述懐した場合の」
「言ってる意味がサッパリわからないんだけどさ……」
「もういいだろ。帰る」
本当に気分が悪くなってきてしまったので、俺はその酒場から出て行った。
酒場を出てから見上げた秋空はとても青く、そして漂白されいる

ような純白の雲が光を一身に浴びてその身をなびかせていたが、その光景は今の俺の睡眠不足の目には過剰な刺激となって脳に伝達されていく。この空の向こうには、空を跳ぶ少女がいる、と親から言われたことがあるのだが、この世界にも同じことが適用されるのだろうか、と俺は思った。

――これからどうすればいいだろう。

これから宿屋に帰って眠るか、それとも何か食ってから寝るか。いずれにせよ、寝るという行為に異論は無かった。

――だが。

秋空の太陽を背に、俺の目の前に立ちはだかった人物がいた。

その人物は、そう、つい最近出会った人物。そして、俺の脳が認識を止める寸前まで現実逃避をする、という程までに考えてしまう人物『達』。

――まさか、こんな時間帯に出没することはないだろう？

その人物の口が開かれる。

「見つけたわよ。さ、行くわよ」

「お兄さん、行くですよ！」

あろう事か……アニュスとガウェイン。そして女性騎士団の面子だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## アカシック・レコード

世界で一番優秀で、一番愚かなのは、人間ではないか？

▽

酷い頭痛がする頭を何とか稼動しつつも、俺たちがやってやってきたのは、この国最大級の、つまり皇立の図書館の前だった。

それの外見を見たとき、言葉にできないほどの感慨深い何かに駆られた。なんだろう、ここは普通ではない。今までにいったことのある図書館の、そのどれとも違う、全く奇妙な雰囲気が、この図書館全体を包み込んでいた。

「さすが皇立、というところかしら？」

とガウェインはこの壮大な光景を見て呟き、その後先導して図書館の扉を開ける。

なんの物音もしなかった。その図書館の中は見たところ誰もいないようだ。

「これが図書館だとでも言うつもりなのか？」

図書館にしては異常、とでも言っても過言ではないほどの広大さを誇っている。入り口から中央部分が見渡せる構造になっているようで、建物自体の構造をうかがい知ることができた。所狭しと並んだ本棚、それに至るための幅広い階段や通路が、この光景を広大たらしめている要因だった。

俺はその光景を見て、アメリカ議会図書館と比べてみてもここが遥かに大きいということを感じた。だが、それでも近代風景はなく、この世界独特の、こじんまりとした造りである。

ガウェインが先へ歩き出したのを見て、それに遅れまいと俺も歩き出す。すると、この図書館の高い天井が目に見えたので、目でその天井を仰いだ。

「天井に絵が書いてあるんだな」

俺が言うと、ガウェインも天井を見上げ、

「そうね、どうやって書いたのかは分からないけど、素晴らしい絵画ね」

その絵はどうやら宗教絵画らしい。子供らしい天使が、誰かよくわからない人物の周りに集まっている。どこか懐かしいような、それでいて怖いというか何と言うか。

現代においてだったならば、あの人物は十中八九イエス・キリストなのだが、ここは現代ではない。なら誰なのだろう。

不思議に思いながら俺は視線を前に戻す。

この図書館は非常に広大であるのだが、歩いてみて初めてここの迷宮さを思い知らされた。ガウェインは何処で手に入れたのかパンフレットの裏の地図を見て進んでいる。だが、それでも彼女もよくわかっていないらしい。その後、入り口から逸れて廊下を進む・

俺はそういえば、と思い出して彼女に問うてみる。

「何処へ行くつもりなんだ？　ここで何を調べるというのだ？」

「……質問は一つずつね」

「それはそれは。俺が間違ったな。では一つ、何処に行くんだ？」

「地図に準拠するけど、ここから二回左に曲がって、そこから百メートル直進、そこからまた左に一回。それから右に一回進んでＮ＝０５室に入室する」

「……ここは迷路なのか」

「あながち間違っちゃいないわね。だけれど、過去数年のうちに三人、地図を持って行かないで餓死したとか何とか」
「ある意味の本当でのＤＥＡＴＨ－ＬＩＢＲＡＲＹってわけか。恐ろしいもんだな……で、そのＮ＝０５室には何があるんだ？」

ガウェインはそれにはすぐには答えなかった。
ザッと十秒程度だろうか、その間に沈黙が流れた。

「過去・現在・未来……全ての情報が包括されている場所。この世全ての真実が保管されている場所、神の意識……それにアクセスする」
「……どういう意味だ、それは」
「神の記憶にアクセスする、っていう意味よ。そのままの意味」
「……アカシック・レコード？」
「？……何、それ」

俺は疑問符を浮かべている彼女に「気にするな」と返事する。
「その、あんたが言うような『神の記憶（アカシック・レコード）』に、俺のような部外者がアクセスしていいのか？　一般人だぞ、俺は」
「構わないわよ、そりゃ」

平然とガウェインは言ってのけた。

「大体、私たちが神の記憶にアクセスできるとは思っていないわよ。そもそも存在すらも信用していないわ。だけど、アレの情報が不足している以上、あらゆる手段を尽くす必要がある」
「究極の力、か」
「その存在だけは知られているけど、それについての有力な情報は皆無よ」

奇妙なものだ、と俺は思わず呟いた。
もともとの情報は何処から出たのであろうか。究極の力という、存在すら疑われる伝説上の魔法は。
溜息を漏らす俺をよそに、ガウェインはそのままスタスタと歩いていく。左に二回、百メートル直進。そして左に一回、右に一回。
こじんまりとした廊下を、俺、ガウェイン、アニュス、騎士団が大所帯で進む光景はどこかおかしく感じられる。いや、事実おかしいのだろう。こんな人数で一箇所を目指して進むということを想定している造りではなかったからだ。複雑な十字路があちこちで結びつき、離れ、複雑な構成を示していた。

「――ここか」

そこ――N＝05室。
我々は、そこにたどり着いたのだ。

☆

そこに在ったのは、どこにでもある、ごくごくありふれたドアだった。

「神の記憶にアクセスするんなら、こんなにこじんまりしていていいんだろうかね」

普通で何も変わらない。ドアノブや材質を見ても、そこらへんにあるドアとなんら変わりはない。意味を成すべき重大な場所であるならば、それ相応の外見をしていてもいいのではないだろうか。
そうしているうちに、ガウェインはもう一度この部屋を確かめる

素振りをし、そのドアノブを微塵の迷いも無く捻る。
――おい、まだ心の準備が出来ていないぞ。
心では彼女にそう叫んだのだが、もちろんそれは彼女に伝わるはずもない。止める間も無くそのドアは開かれてしまったのだ。
「――何も、ない……？」
それは本来本が所蔵されるべき場所ではなかった。むしろ個室（コンパートメント）と呼ぶべきにふさわしかった。
ただ疑問しかなかった。
なぜこのような場所が？　この場所は何をするべき場所なのか？
そこまでは狭くはない。むしろ個人の個室としてならば広いと考えてもいい。俺はその個室に疑問を感じながら入る。
「本当にここなのか？　まだ使われる前の倉庫のような感じなんだが……」
ガウェインも同じく入ってきたところで口を開く。
「間違いはないはず。だってドアに書いているから疑いは持つことはないわ」
「疑問だらけなんだが」
「知らないわよ、私は完璧じゃないもの」
「別に完璧とか聞いてるんじゃないだが……まぁいいか」
俺はアニュスの手を引いてそばに寄せた。
「とりあえず、俺のそばにいろ。この迷宮だ、帰るときにはぐれたら面倒だからな」
「……」

「どうした？」

よく見てみると、なんだかアニュスの様子がおかしく感じられた。普段は赤い目をしているはずが、今は目を黒く染め上げられているかのような、他を寄せ付けない冷徹さを秘めている。

「アニュス……一体？」

「――は、Ａｇｎｕｓ－Ｄｅｉ。――の介――は――い」

しかし、彼女が呟いた言葉は、全ての物音は一つの大きな音にかき消された。

――なんだ？

振り返ってその音の方を見ると、先ほどまで開いていた扉が、周りの壁と同化するかのように静かに外界との通路を塞いでいた。

「……ガウェイン、何で扉を閉めた？」

「え？」

ガウェインが振りかえり、扉が閉まっているのを見た。確かに閉まっている、というのを確認したとき疑問に思い、騎士団のほうに問うてみたが、

「私達は閉めてはいません。命令がありませんでしたから」

騎士団も少し困惑した面持ちでそう答えた。

――嫌な予感がする。

俺は思って急いで閉じられたドアのほうへ走った。だが、それは開くことはなかった。ドアノブが、内側には着いていなかったのだ！

やられた！

ガウェイン達の仕業ではないことは確かだ。彼女達も同じくここ

にいるのだから。だったら誰だ？　ここに閉じ込めたのは、一体誰だというのだ？

「ガウェイン、まさかとは思うが、ここに自動防御システムなんてものは存在していないだろうな？」

「まさか！　何処の世界に図書館にそんな物騒なものをつけるバカが居るのよ！」

「ならこの状況は何だ！？　何故我々は閉じ込められている？」

「閉じ込められた？　本当に？」

「ああ、そうだ」

「……」

俺は舌打ちをして剣を構え、魔法をジャンクションして一気に扉に切りかかった。だが、それですら通用することはなかった。奇妙に思って扉の材質を調べると、それは自分でも知らない合金であることがわかった。

俺は壁も攻撃して見せたが、いまいち手ごたえがない。恐らく、扉以上の防御力を誇っているらしい。

――完全に外界と隔離された！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## アカシック・レコード（後書き）

ここから物凄くＳＦ要素が入ります。
ですから、あとがきの方に補足をつけて参ります。
と、思い出したのですが、６０話突破してました。
やらないか

## 色即是空

「なんていうか…その…下品なんですが…フフ…」（以下、不適切のため省略）

ｂｙ　吉良吉影

冷たい空気が辺りを包んでいた。
この空間に存在たら占めているのは人間、空気、その他この空間を構成するだけの必要最低限の物しかなかった。
俺はそうと知りながらも、何かないかと辺りを見回していた。だが、それも無駄だった。

「……どういうことだ？　ここに何かあるというのか？」

物を認識するだけの最低限の光は何処からともなく、そこにあった。ただ不思議なのはこの空間に光源となるものがない――つまり、光が発生することがないことだった。天井を見上げてみるが、電灯も無ければ蝋燭台もない。
実に奇怪極まりない。
アニュスは先ほど何か呟いたかと思えばすぐに気絶して倒れた。一応彼女をこの部屋の端のほうに寝かせて服を掛けておいたが、彼女の気絶の原因が分からない以上、下手に動かすのは危険だ。だが、かといってそのまま放置するのも不味い。そのことが、更に俺をあせらせ始めていた。

「……騎士団。ここの入出許可とかは事前にとってあるか」

俺が尋ねると、騎士団の中の一人が前に進み出て言った。
「はい。事前に通告して許可は取っています。ですが、こうなるとは言われませんでした……」
「ではここに外部との連絡用の魔法などは使えるか」
「……いいえ。ここにあるマナといった魔法共振物質はこの部屋の外部に伝えることはできないようです。非常の連絡も先ほどから試していますが、一向に良くなりません」
俺は頭を抱えながら騎士団の方を睨んだ。
「――簡単に言えば、ここから外部に連絡は取れない、ということだな」
それはかつて俺が学院で使用した通信魔法と類は同じものだ。マナを共振させて相手に伝達させる――とか何とかの、よく分からない魔法なのだが、とにかく今おかれている状況では、この空間がマナの漏洩を防いでいるらしい。ということは通信も出来なければ助けを呼ぶことすら出来ないのだ。
「一体、ここはなんだというのだ」
一人、ポツリとそう漏らした。
逃れる術は万に一つもないようだった。この部屋の、俺達に対する籠絡は完璧だった。
俺はその場にうずくまり、目をつぶった。
暗い、暗い。何もない色即是空の世界。目に見える暗闇は、全て実体を持たず、ただ『空』。俺はこの空間も同じように色即是空ではないか、と思い始めた。

何も無い、ただ小さな空間。空気や生きる者。その全てが実体の無いものであるなら、確かにこの部屋から出ることはないであろう。
――何をバカなことを。
俺は頭を振ってその考えを頭から追い出した。

「ガウェイン。どうでもいいが、本当にここに神の記憶（アカシック・レコード）とやらにアクセスできるだろうな？」
「私も自信がなくなってきたわ。というより信じていなかったというほうが正しいかしら？」
「……結構余裕だな。閉じ込められてるって言うのに」
「慣れれば面白いものよ」
「こんな状況に慣れてもな」
「慣れるのが一番重要。慣れてしまえば、次同じような状況に陥ったときにすぐに脱出できるようになるわ」
「だが、この状況を脱しなければ意味無いだろうよ。結果も大事だろうが、過程が結果よりも大事な事だってある」
「そうよね。わかってる」

ガウェインが無表情の中に微かな笑みを浮かべるのが分かった。まったく、この女はどこまでも神経が図太い。いや、この女だけではないか。世の女性全員が強いだけか。
やれやれ、という言葉が喉を突いて出てしまう。拒否ができない言葉であって、この状況を嘆く言葉としてぴったりな言葉だ。
さて、と呟き、再びこの部屋からの脱出の方法を知るために腰を上げて立ち上がり――。

『突如、完全なる闇が、俺を襲った』

目が見えない。いや、認識すらしていない。頭痛と目まい、異様なまでの胸の締め付け――。それらが一気に俺の体に圧し掛かって

きていた。
圧迫される。思わず地面に転がった。俺の体全体に、なにか大きなものが圧し掛かっているようだ。苦しい、それだけを口に出すことすら出来ないほどに。
喉が圧迫され始め、何ともいえない苦しみが体に伝う。息が出来ない。それに伴って腹が煮えくり返るようなイラつきを覚える。
その時、苦しそうな呻きが聞こえた。ガウェインたちのほうからだ。どうやら彼女達も同じような症状に陥っているらしい。

「なんだ……コレは！？」

脳が、内臓が、手足が、全ての意識が遠のいていく。一が零に帰るように、手を伸ばしても届かない。
だが、そこで墜ちることは出来ない。
体中に這い蹲る圧力を押しのけ、体を前に進もうと意識を集中させる。
死ぬかもしれない。
そのことが俺の心を一瞬で駆け抜けていった。死ぬというのか。この俺が、今まで満たされることの無かった俺の人生がここで潰えるというのか。
死にたくない。その言葉が心一杯に膨れ上がる。
何としてでも生き抜いてやる。死ぬわけにはいかない。こんな所で死んでしまうぐらいなら、公開処刑で惨めに死んでいくほうがまだマシだ。誰にも見取られずに死にたくない。
だが、時として現実は非情だった。体はあっさりとこの苦痛に負け、俺の身体機能をシャットダウンをし始めた。
意識が揺らいでいく。苦しみが遠く感じられて、自分が自分でないようになって行くようだった。

「く、そ……」

そして俺は、地面に倒れた。

to be continued・・・

## 色即是空（後書き）

淡々過ぎるぜガウェイン…何やってんだ主人公…

多分ここまでは理解可能だと思います。
問題は次話です。
作者も考えなきゃならんかった。

## 究極の存在、将軍の戦い（前書き）

物凄くＳＦチックになっていて、読みにくいと思う。

## 究極の存在、将軍の戦い

神にまします、我等の父よ。
願わくば、御名を崇めさせたまえ。
御国を来たらせたまえ。

by 564

俺という個人が気付いたとき、その身の回りのものが全て無に帰していた。
全てのエネルギーはそこになく、ただ何もない空間として、俺の周りにあった。いや、あったというのはおかしいのかもしれない。『俺』という個人の存在が、その無に割り込んで存在しているというべきだろう。
だが、『俺』の存在も無に帰しているようだった。ただ、俺には意識があった。
ただただ、その移ろい行く時間に俺は残っている意識を集中させようとしていた。
その時だった。
暗黒の中に、一つの光の点が見えた。疑問に思っていると、それは俺の目の前で自然と大きくなり、やがて視界一杯を光で覆い尽くしていった。それは青白い光だった。
俺はその光を静かに見据えていた。ここから何が始まるというのだろう、何が分かるというのか。そんな好奇心で満ちていたのだ。
――死んでいるのか、生きているのか。
俺は、自分が今生きているのか分からなくなっていた。だが、生きていようが死んでいようが、自分は今ここにいるのだ、大して意味はないだろう。そんな風に思って自分を落ち着けた。
しばらく青白い光を見つめていると、光は一瞬のうちに別なるも

のへと変化を遂げた。
それは、戦いの様子だった。
俺は空から戦いの有様を見つめていた。

――退け！　ここから退くのだ！

俺の実体の無いはずの部分――つまり頭のところに、何か声が聞こえた。えらく渋い男の声だ。何か焦っているらしい。
俺は空からその声の主を探し始めた。
あの退却しているところだろうか？　それともあの大勢の塊か？
いずれにせよ、この高さからそれ以上を望むことは出来なかった。
どこにいるのかさえ分からなかった。

《もうすぐアレが放たれる！　そうなればこちらの勝利じゃ！》
（なんだ？　何が起こっているんだ？）
《しかし将軍、我が軍の攻撃部隊は敵に退路を塞がれてしまって脱出することが出来ません！》

また別の男の声が聞こえた。こんどは若い声。
俺はその声に耳を澄ましてい――いや、意識を集中させて聞き入った。

《ならば！　先に残存している部隊を完全に撤退させよ。攻撃部隊はわしが何とかして助けてみよう》
《なりません！　将軍自らが戦場に赴くなど、危険極まりないことであります！　どうか考え直してください！》
《そなたは何を言っておるか。部下に戦わせておいて、上官が高みの見物などあってはならんことだ。そこを退け、ピラトゥス。我を先に行かせよ》
《どうか……どうか！》

《……もうすぐ、本国の者どもがアルテマを使うであろう。メテオを使うであろう。今がチャンスなのだ、奴らとしても、その威力を確かめたがっておろう！　奴らはそのチャンスを逃すことはない。恐らく時間が来たならば、仲間ごと殺すであろう。だからこその撤退なのだ。我々は生きて帰らなければならんのだ。分かってくれ、ピラトゥスよ》

脳裏に響いてくる声は、酷く悲しそうな声だった。
もはや死さえも覚悟している、もの悲しい悲痛な人間の心の叫びが、その声の中に孕まれているのを感じた。
何処かでけたたましい爆発音と、人間の悲痛な叫び声が聞こえてくる。

《行け、ピラトゥス。逃げ延びよ。我も後から続く》
《しかし……！》
《行くのだピラトゥス。ここでお前が逃げないとあらば、我はお前を討つ》
《将軍……》

次に聞こえてきたのは、誰かが走り去る音と、一人の男が動いた音だけだった。
ＷＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！
戦争がそこかしこで始まっている。その中で、俺はようやくその男の居場所を突き止めた。
東にある、一番戦闘が行われていない場所。その中で歩く人間が一人。この人間が、恐らく先ほど将軍と呼ばれた人間なのだろう。
俺は彼に近づいてみよう、と思った。すると、体は自然と降下し、彼の近くに降り立った。
（……神の記憶（アカシック・レコード）なのか？　これ）

そうであるならば、俺は神にジャンクションしているのではなかろうか。俺がイクスにジャンクションしていたことと同じように、今度は神、いや、ここでは世界の記憶といったほうがいいのか。とにかくそれと同じことが起きているに違いないと思った。
ならば、この状況は一体なんなのだろうか。
俺は彼についていくことにした。幸い、歩くとか走ることは出来ないが宙を滑空することが出来る。

《行かなければ》

男は走り出した。鎧を着ているはずなのだが、それを感じさせない速さだ。
俺も見とれている場合ではなかった。彼を追わなければ。

☆

そこにあるのは、おびただしい量の死体と地面に突き刺さってもう振るわれることはないであろう剣だけだった。ある者は焼き焦げ、ある者は氷漬けに、そしてまたある者は剣が体に刺さったまま絶命している。おぞましい光景が、目の前に広がっていた。
男は手を震わせながら死体に近づいた。

《なんだる……こと！》

その死体も他の死体と同じように、五体満足にはなってはいない。左腕は何処かに消えうせ、目は飛び出している。それに血だらけだ。
さらに向こうへ走った。あるのは敵味方関係ない、魂の抜けた物言わぬ死体のみ

。

男は、今度は高い場所へ上った。高いところから状況を確認するためである。

それこそ無駄なことだった。

全て死に絶えていた。

全て。

死んでいた。

ここには綺麗事なぞ一切ない、無常――全ては無だった。

男は散っていった人たちに黙祷を奉げ、空を仰いだ。

《神、全能の神よ！　なぜあなたは我々をお見捨てになったのですか！　何故！　何故……》

既にその言葉を聞く人間はここにはいない。その叫びを受け取る神も見てはいないだろう。

だたそこには死と血、後悔と悲しみしか残っていなかったのだ。

――私は何故戦うのだ？　戦いは絶望しか生み出さないというのに。残るものなどないというのに――

男は顔を上げる。

先にはもう仲間などいないであろう。救える命など、この先にはもう、ない。

――暗い夜に飛び交う、魔法の七色の綺麗なことよ。命を奪う、この美しき光は。

彼は途端に生きる希望を打ちのめされた。

その時である。

闇の中に、不気味なほど青白い『何か』が、俺の目に映った。

（あれは……火球じゃあないか！）

闇夜に照らし出される青白い球体は、轟々と轟きながらとてつもない速度で膨張し、その下にあったもの消えてゆく。恐ろしい風が俺を貫いた。感じはせず、吹き飛ばされることは無かったが、男の方を見れば今にも吹き飛ばされそうなことを見れば、どれほどの風力と衝撃かか理解できた。

――奴らめ、まさか！　アルテマを使いおったか！

怒りが男の中にこみ上げてきたのがわかった。心から、それを嘆く声が聞こえた。。

（まるで核のようじゃないか……正気か！？）

だが、それすらもその後に襲ってくるモノに考えることが出来なくなった。

最悪だった。全てが。

突然、男は血を吐いた。

なんだ。

なんだ。

なんだ。

剣が刺さっている。

何故？

――地面に刺さっていた剣が衝撃で飛ばされたのだ。

（まるで――グラウンド・ゼロのような感じだ）

その時、どこからかうめき声が聞こえた。

俺は目を凝らして辺りを見渡してみたが、そこには死体しかない。生命は存在していなかった。

目の前で男が更に多くの血を吐きながら倒れた。心なしか、先ほどとは打って変わって豹変しているように感じる。

俺は彼に駆け寄った。顔を覗きこむ。身動きをしていない。どうやら呼吸もしていないようだ。
――死んでいる。
彼は既に息を引き取っていた。
俺は嫌な予感を感じ、その場から離れ、周囲を見渡してみる。やはり、先ほどと同じように気配は一切感じない。それどころか、見る限り生き物の影すらない。

（これは現実にあったことなのか？）
――それに答えを探すことはできなかった。
（では一体なんだというのだ！？）
――俺の疑問が、誰にも聞かれることのない叫びとして発せられる。
（ここは一体何なんだ！　なぜ俺はここにいる！）

空気が震えることはない声で何度も叫ぶ。しかし、それに答えるものはいない。

（これは過去なのか……それとも現実に起こっていることなのか？
いや、起こったというべきか）

俺はかつて、自分の故郷で起きた惨劇のことを思い出す。
あの時、俺は生まれてさえいなかった。だが、それは確かに人間が作り出した悪魔そのものだった。それゆえ、俺の先祖は長年に渡る重い病気と辛い過去を背負って生きていた。
それが、もう一度ここで繰り返されているというのか。

（……これは確か、アルテマと言ったか。恐るべき力だ。人類の恐るべき知恵が生み出した悪魔だな）

俺は天を仰いだ。
今は暗く、天には星さえ出てはいない。それがこの究極の力であろう魔法に引き起こされたこととは予想はついていた。
とつぜん、再び自分が別の場所に物凄い速さで移動しているのに気がついた。周りは不自然に婉曲し、どこかの場所へ移動したのか、それとも時間を越えているのか、俺にははっきりとはわからなかった。だが、それでも自分が自分であるということだけはしっかりと認識できていた。
――ある、一人の男が、ある場所を目指して走っていた。
誰だろう。彼は何処かで見たことがある。いや、実際には見たことはないが、声は知っている。
彼の懐には一冊の本が仕舞われていた。綺麗に舗装された、黒い本だ。彼はそれを守るように必死に走っている。
彼はなぜそのようなことをするのだろう。不思議に思った。だからこそ、俺は彼に耳を傾けた。
《ああ、まさか将軍が戦死してしまうなんて。私があの時おとなしく殺されていれば、彼は助かったのかもしれないというのに！》
彼、つまりピラトゥスは、酷く悲しんでいた。
――自分のせいで上官を殺してしまった。止められたかも知れなかったのに、自分は命が惜しいために、自分は彼を見殺しにしてしまった！
《だけれども、私には任務がある。彼を殺した魔法を封印する任務が。この魔法は誰にも見つからない場所へ、どこか遠くへ隠さなければならない。はやく！》

彼の心には、ただそれだけしかなかった。
空虚、といったほうがいいのかもしれないが、かれはそれだけの為に動いていたのだ。
――自らの上官を殺した魔法が憎い。だから私はコイツを封印する。
彼はどこまでも走った。

☆

彼はついに見つけた。
その魔法を封印するに足る場所を。
海――ミューゼスの海。神の名をつけた海ならば、この悪魔を上手く封じてくれるに違いない、そう思ったのだ。
彼はそのミューゼスの海の近くの土地で、海がよく見張らせる場所にたった。彼はそこで小さな洞窟を作り、その奥に祠を建立した。もちろんここは誰にも見つかることはないだろうという期待を篭めながら。。
彼はその祠の裏に、転送魔法を掛けた。これは、合言葉を言わないと発動しないものだ。彼は合言葉を設定し、その転送魔法に乗った。
――彼は、その先にその本を置いてきた。もちろん、さまざまなトラップを仕掛けて。
そして、彼はその洞窟から出て、一人こう呟いた。
「人間など、生まれてこなかった方が、私達にとってよかった」
彼の手には、縄がつかまれていた。
そして一人しばらく歩いたのち――。

自殺した。

to be continued...

## 究極の存在、将軍の戦い（後書き）

解説。
主人公達は図書館でアカシック・レコードにアクセス
←
なんか知らない場所
←
なんか戦争やってる
←
なんか頭に声が響いてくる
←
将軍とピラトゥスという名前の二人らしい
←
聞いてみたら、なんかピラトゥスが将軍を止めたいらしかったが、
威圧されて泣く泣く戦場から離脱
←
主人公、探したら発見。近付く
←
将軍、戦場を駆ける
←
様々な死体やアンリミテッド・ブレード・ワークスのような剣の丘
を見た後、惨状を神に嘆く
←
ふと見たら青白い光が。
←
爆風凄い。
←
剣が爆風に飛ばされて将軍に刺さる
←

場所が変わる
←
ピラトゥスが走っている。脇には舗装された本
←
ミューゼスの海
←
近くの場所に隠す
←
ピラトゥス、自害する。

こんな風になっていました。
ピラトゥスの名前は、ポンテオ・ピラトから。
で、ピラトゥスが最後に言った言葉は、イエス・キリストがユダに対して言った言葉を人類全体に当てはめているのよ。
考えてみれば、宗教ほど考えさせられるものはない。

## 夢からの帰還

幸福な女性とは、悩みを抱えていない人。
陽気な女性とは、悩みを抱えているけれど、そのせいで落ち込んだりしない人。

ｂｙ　ベヴァリー・シールズ

俺が次に気がついた時、そこは確かに図書館の一室だった。
重たい体を何とか起こす。すると、肩や首の付け根部分が筋肉疲労のためか、嫌に凝っていて気分が優れない。
二、三回程度肩を回す
周りを見渡せば、今だに寝ている女騎士やガウェイン、アニュスが目についた。

「やれやれ、寝坊するお姫様たちだ」

そう呟きながら、さて、どうこいつらを起こしたものだろうか、と逡巡する。このまま爆音を鳴らして起こしてもいいのだが……。いや、それは止めたほうがいいのかもしれない。この後のいざこざが面倒になる。
俺はそう思ったが、それに変わる代替案が見つからないのだった。

「おい、起きろ」
相手が女だろうと関係なしに体を揺すりまくってガウェインを強制的に覚醒させようとする。すると、それが睡眠から覚醒するトリガーになったのか、いきなり、

「イー……ノック」
「……どんな夢を見ているんだ？　コイツ」
意味深な寝言を呟く。
「……」
最終手段に出ることにした。文句は言わせない。
☆
その部屋に轟音が鳴り響く。それは雷雲が迫ってきたときと似た、あの恐怖を伴う音だ。
その音に、女騎士、ガウェイン、アニュス共々はすぐさま飛び起き、
「な、ななななんですかいい、い今の？」
「か、雷のような音だったけど……室内で？　まさか！」
その状況を確認しようと、彼女らは周囲を見渡す。
すると、彼女らは一人の男が壁にもたれかかってこちらを傍観しているのに気がついた。
俺はその眠気すら吹き飛んでいる彼女らに言った。
「いいお目覚めだったか？」
「最悪よ！　何？　私達を起こすためにわざわざあんな爆音を出したってわけなの？」

「そうだが……何か問題でもあったかね？」
「ありまくりです、お兄さん」

アニュスが立ち上がっていった。

「私はいつも早寝早起きを心がけて、朝はすっきりリフレッシュしながら目覚めするのが好きなんです！　それなのに、今のは物凄く嫌な目覚めでしたよ」
「子供だからな。いつも十時に寝るようにしておけよ」
「してますって！　それに私は立派な『れでぃ』なんです。そんなぶしつけな態度は許しません！」
「そうだ。それは私も同感よ。私だって女だ、朝ぐらいは快適に起きるのが好き。それだというのに、男ってやつは……」
『そうよそうよ！』

さっきまで目をしょぼつかせていた女騎士団の皆々が俺にクレームをつけるかの如く声を張り上げていた。
だが、それでも俺は自己の正当性を証明することも考えることは無く、ただ愚痴る。

「やれ『れでぃ』だの『朝は寝起きが肝心』だの、どうでもいいことだ。第一今は朝なのか昼なのか、サッパリ分からんだろうが。やれやれ、これだから女ってのは扱いずらい」
「そ……その発言は男尊女卑の言葉と受け取ってもいいのかしら？」
「男尊女卑？　この世間一般では大抵が女尊男卑だろうが。魔法を使えるのは大多数が女だし、男は寂しく農作業をしている現実で、いまだそんなことを言うのか？」
「何を言っているのかサッパリ理解できないわね。現実では、男は畑、女は魔法と家事って決まってるじゃない」
「それこそジェンダーじゃないか。そんな性別で全てを決定しては

ならんぞガウェイン」
「……（だから男って嫌になるわ）」
小さく何かを呟いた後、彼女は不機嫌そうにこちらから背を向けた。
「……で、結局どうしたって訳なの？」
彼女は顎に手を当て、考えるような仕草をしながら唸る。
俺はそれに答える。
「俺の場合は変な夢を見ていたがな」
すると彼女も、
「あら、私と同じじゃない。私も全く気持ちの悪い夢を見たわ」
「どんなだ？」
「女の夢を語らせる気？」
「男の見た夢なんか聞いたって味気ないだろうが」
「それはそうね」
彼女は感情の起伏のない冷徹な声で言った。
まぁ確かに、男が見た夢なんて聞きたい女なんてほとんどいないだろうし、言われたって嬉しいはずはない。だが、それでも少しは聞いてもらいたいのが男心という、意外と繊細なものなのだが。
しかし彼女はそれを全く気にする素振りすら見せず、壁に寄りかかった。
「私は、夢の中では男になっていた。いえ、正しく言えば、体が男に憑依していたって言うほうが正しいかもしれない。その中では私は実体を持っていなかった」

「……男に、だと？」
「ええ、そう。男に、よ。そこで私はある人間の戦いを目にしたわ」
彼女はあまり思い出したくないわね、と言いつつも淡々とした口調で言葉を紡いでいく。
「その中で、私は焦っていた。ある上官を止めるために、私は必死に説得をしていた。だけど結局は無理だった。それから私は必死に逃げたわ。何キロも。それから、いきなり場面は移り変わって……」
「ミューゼスの海にいた、というわけか」
「――ッ！？」
俺は自然と口が出ていた。あらら、と俺は思ったが、彼女はそれ以上に感情に起伏が生じたようだった。
彼女はいきなり俺のそばまで歩いて来、俺の双眼を覗き込むように疑問の言葉を発した。
「なぜ、分かった？」
冷たくも動揺を含んでいた。もはや黙っているわけにもいかなくなった。俺は彼女から一メートル程距離を取り、溜息交じりに壁に手をついた。
彼女は俺の言葉を待っているようだった。
答えるしか選択肢はない。
「俺も夢を見ていた。戦争の夢。俺は天にいたようで、そこから俺は下を覗き込んで何かを見ていた」
俺の言葉が、この部屋に反響する。
「俺は神になった気分だった。ただ興味で俺は下で起きている何か

を見ていた。何か、なんてモノは一発で理解した。戦争だったよ。単純な戦争だ。でも、俺は単純な好奇心でそれに興味をもったんだ。そして、俺は『将軍』と呼ばれている男と『ピラトゥス』という名の男を見つけた」
「『ピラトゥス』！　それは私が憑依していた男の名前だった！」
「そうだろうな。で、だんだん観察して、『将軍』は死んで……場所は移り変わった」
「ミューゼスの海」
「そうだ。そこで俺は『ピラトゥス』を見つけて、追った。彼は本を持っていたようだった」

彼女は深く頷いて言った。

「恐らく、それが封印された品物……究極の力？」
「多分、間違いはないだろう。結果的にピラトゥスは自殺して自分から口封じしたんだからな」

彼は生きのびるつもりはなかったのだろう。あのアルテマを類とした魔法を封印するために、自ら命を絶ったのだ。
結果的に、それによって完全に社会から隔離されてしまった魔法は、ただただ伝説としてのみ現世に受け継がれ、今に至っているというのだ。

「――つまり、あの夢が本当だったならば、究極の力は実在するわけか。だが、このアカシック・レコードは信用していいのか？　この夢がアクセスした証明なんだろうか……」
「多分そうじゃないかしら。アレは大昔にあった出来事、として捕らえたほうがいいのかもしれないわね」
「いづれにせよ、ヒントは得たわけか」

その時、いきなり光が差し込んできた。
俺はその眩さに目が眩んだが、それはどうやらドアが自動で開いたせいだったようだ。

「勝手に開くんなら、最初からパンフレットにでも書いておきなさいよね」
「まったく、同感です！　ついでに兄さんの扱い方も載せてもらいたいです！」

アニュスがいつの間にかガウェインの隣に立ってうんうん頷いている。
彼女達はそう言い合いながらこの部屋から飛び出していき、次に騎士団たちも同じように飛び出していった。
――やれやれ、って奴か。まぁ、脱出できただけでも良(ベネ)しとしておくか。
俺はしばらくそういう風に考えごとをしながら、一回、この神の記憶と呼ばれる部屋を見渡してみた。
――一体、何だったのだろう？　あの夢は。
だが、その問いに答えるものはいなかった。ただあるのは、静かになった部屋と、それから冷たい空気だけだった。
――何もいない、よな？
俺は疑問に思いながら、先に出て行った彼女達の後を追った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 夢からの帰還（後書き）

グダグダになってきている。ヤブァイ

## 酒ー場

「私、二人は幸せにはなれないと思います。二人を幸せになんかしませんから、だって、私はずっと誠君を好きで居ますから、永遠に」

ｂｙ　桂　言葉

現実を見れば、確かにさっきまでの戦いの様子は一欠片の残り香さえ残してはいない。

まぁ、夢だろうがなんだろうが、自分が確かに認識してしまったものは脳に焼き付いて、未だにその情景を思い起こすことが出来る。

「ガウェイン、大丈夫か？」

ふと、目の前で酒をちびちび飲んでいたガウェインに問う。

俺達は図書館から出た後、なんとなく酒場に入った。いや、俺としては是非とも遠慮したかったが、この後のことを聞かなくてはどうにもならない為、彼女についていくしかなかったのだ。

さて、彼女はどう反応するのだろうか。酒が入っているために、どうとも言えないが、酔っていないことを期待しよう。

「あ――……っと」

ガウェインが何とないような声を出す。

「酔ったか」

「いいえ、ぜんぜん」

だが、彼女の肌はほんのりと赤く染まっている。

彼女自身はそこまで酒には強くはないらしい。なら、完全に酔われる前に質問をするしかないだろう。

「はぁ……で、これから何処へ行く気なんだ？」

「ん？」

「ん、じゃない。これから……おい、アニュス、酒をそんな飲みたそうに見つめるんじゃない。まだ早いぞ」

じと、っとガウェインの飲んでいた酒を物欲しそうに眺めていたアニュスを制しながら俺は聞いた。

「ああ、これからのことね。私達はこれから『ミューゼスの海』へ向かうわ」

「あの情報をまんま宛にする気なのか？　それは流石に早計だとは思うんだが……」

「じゃ、どうするのよ。アレくらいしか情報がないのよ？　限られた情報を使うしかないでしょう」

「確かにそうなんだが……」

究極の力、とかいう胡散臭いモノの情報はそれくらいしかないのが現状なのだ、情報が少ないゆえに、それを信じて行動するのは理に適っている行動であろう。

だが、真に俺が警戒しているのは、その情報がブラフ（見せ掛け）だった場合だ。それが嘘で、あって罠だったりしたら――。

だが、彼女は俺の心を見透かしたかのように不適に笑い、

「確かにあんたの不安がっていること――ブラフだっていうことも考えてある。だけれど、信じなきゃ始まらないことだってこの世にはたくさんあるわ。なんでもかんでも疑っていたら他人に先を越されてしまうこともある。それはかなり愚かなことだわ。しかも、信

じるか信じないか、というのは情報の量にもよる。もし情報が膨大にあったら、その中からどれを信じるかを考えなければいけない。だからこそ、情報が限定されているなら、それを愚直に信じてみるのも一つの手段よ」

「……愚直に信じて、仲間に被害を及ぼしたりしたら本末転倒だろうに」

「仲間を守るのも、隊長である私の役目よ」

それもどうしたものか、と俺は思う。

彼女はジョッキに注がれている黄金色の液体をちびちび飲みながら、更に目の前にある焼き鳥に手を伸ばす。よく食べる美人さんだ。太らないのだろうか。

俺はふと、酒場を見渡した。

酒場にいるのは、十人十色のさまざまな人間達。スキンヘッドで肌が褐色に焼けている男もいれば、ひょろひょろの痩せた男もいる。

だが、そのどれも俺の目に留まることはなかった。

探しているのは、昨日（と言っても、徹夜したから今日か？）出会った、確かベラトリックスという女だ。別に一目惚れとか、そういった類の感情ではないが、どうも心に引っかかるものがある。

「……」

やれやれ、と呟かずにはいられなかった。

やがて俺はめんどくさそうな顔を浮かべながらガウェインの方をちらりと見て、

「正直に言えば、まとまって行動するのは得策じゃあないと思うんだ」

瞬間、ガウェインはふーん、と言わんばかりの、何も変化がない

表情を浮かべ、「どうしてか、聞かせて」と言った。
俺はその問いに約十秒ほどの間を置いてから、
「俺はな、もともと団体行動が好きじゃあない。一緒に探す、ということはその騎士団ともあんたとも行動しなけりゃならないんだろう？」
「つまり、あんたはただ単に私達と行動したくないって訳なの？」
「そうとも言うな。もともと俺はコミュニケーションが苦手なんだ。こんな性格のおかげでな。それに、女が数十人いる中で男が俺一人、なんて言ったら、そりゃ倫理的にも不味いだろうが」
「いいじゃない、ハーレム」
「ハーレムは好きじゃあない」

俺はそう言ってから、肘を机につけた。
「……それに、固まって調べるよりは分散して文献を漁っていったほうがまだマシだろう」
――俺個人が、そうまでして他人に干渉するなんておかしいことだしな。
心のなかで小さくそのことを呟いてから、今日何度目か知らない溜息をついた。
ガウェインは静かにグラスを傾けて酒を飲み干す。

「あんまりおいしくはないわね」
「おいしくないのに飲むのか？」
「まぁ、腹を満たすのに十分だし、なによりアルコールを摂取していたいの。日ごろのストレスが、女を太らせる大きな要因になるっていうのはあるんだけど、私の場合は酒。酒でストレス解消しているわ」

「それほどまでにストレスが溜まっているのか？　よくやるな。そんな職場なんか止めてしまえば気が楽になるだろうに」
「職を辞めて家庭に収まれっていうの？　相手がいないわよ。……それとも、あなたが結婚してくれて？」
「喜んで辞退する。あんたみたいな女だと、一生尻に敷かれかねんからな」

それを聞いて『それは何だかね』、とガウェインは笑った。

「……でも、ま。あなたをパーティから外すことはしないわ」

何故、と俺が聞く。
するとガウェインはやや笑いながら、

「そりゃ、ボディーガードの一人ぐらいは欲しいじゃない」
「俺はボディーガードでもない、ただの一般人だぞ？　それでも良いって言うのか？」
「……ま、ルックスは悪くはないんだけれど、平凡より上って感じしかしない。だからこそ、必要なのよ。私達のパーティに」
「あんたのパーティと、俺の容姿にはどんな関係があるってんだよ」
「ハーレム化しないっていうのがあるし、あなたに惚れる女がいないっていうのが関係しているわ。残念だけれど」
「……帰っていいか？」

そうか、確かに矢島なみのルックスならば、すぐさま『勇者パーティ』という名のハーレムパーティが形成されるのは必至だが、俺の場合はそうでもない、と言いたいのだろう。
ハーレムになってしまえば、任務の達成が遅れたり、障害が出てしまうのは間違いはない。つまり、女パーティに入るならば、ルックスは俺ぐらいで丁度いいというわけだ。

確かに、倫理的にも問題は小さくなっただろうが、何だというのだろう、この俺の心の痛みは。

「……ハァ」

俺の中の『男の世界』が、音を立てて崩れ去る一歩手前にまで来ていたのだが、しかしそれはもはやどうすることも出来なかった……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 灯火

心に傷がある人は、同じく心に傷のある人には本心から優しく出来る。
だが、心に傷がない人は真にそういった人たちに優しくは出来ない。
自分はそうではない、という人がいるが、それは表面上の、自分自身の自己満足の心が働いているのであって、それは優しさではない。

by 誰か。

☆

レイブンの本拠地は、ガウェインらがいた酒場より少し離れた郊外にあった。
敵側から遠く離れたそこは、確かにレイブンとしての拠点にもってこいだと言える。もはや目立つ、目立たないとかの問題ではないような場所に立地されているそこは、ただの普通ホテルだった。
バーボンを片手に歩いてる女――ベラトリックスは、そのホテルの門の中に足を踏み入れた。
酒臭い息を吐きながらそのホテルの階段を一段一段、自らが行くべき場所へ向かっている。
一応、このホテルは古臭くはないのだが、それでも築数十年を感じさせる建物だ。地震でもくればひとたまりでもないだろう。
誰もいないことを確認したベラトリックスは何時になく顔を冷たくし、冷静にしていた。

「……どこだっけ」

と、何処となく間抜けたことを言う。

何だか虚しくなってきたが、このままホテルの人に部屋を聞くのは忍びない。一つ溜息をつきながら酒の蓋を開けて飲む。

二口ぐらい飲み込んだところで、その艶やかな口から放し、その酒の蓋をする。ベラトリックスは酒の余韻を残念に思いながらも辺りを見回す。

フロアはそこまで広くはない。だが、窓からは光が差し込んできており、人工的な光がなくても十分な視界を確保できていた。

彼女はそのフロアの一つひとつの部屋を見ていき、自らの行く部屋を探す。だが、このフロアに自分の部屋がなかったらしい。ベラトリックスは、更に上の階に入った。

すると、その目の前に自分の目標の部屋を見つけた。

ベラトリックスは懐から鍵を取り出し、その部屋のロックを開錠する。

彼女はその扉をゆっくり慎重に押した。その際に軽い木の音が聞こえてきた。ドアから覗く僅かな隙間を慎重に覗き、安全を確認する。

ゆっくり足を踏み入れる。自らの特技を使って、音を立てずに。

「……あら、いたんだ？」

ベラトリックスは目の前で本を読んでくつろいでいる子供を見る。その子供はベラトリックスに気付いて体を起こした。

歳は十三、ぐらいだろうか。あまり身長は高くはないが、顔立ちは女風な顔つきを残しているものの、なかなかに美少年ぽかった。

「あれ、ベラトリックス。今着いたのか？」

「まぁ気にしないでよ」

「で、どうだったのさ。偵察」
「ん？　私はただ酒を飲みに行っただけだけど」
ベラトリックスはおもむろにその子供の隣に腰掛ける。
その子供は先ほどの応対に疑問を感じたのか、
「あれ？　確か『究極の力』のことについて調べに来ているクルドの奴らを偵察にいったんじゃないのか？　え？　本当に酒を飲みにいっただけ？」
「何？　酒を飲んじゃ駄目だって言いたいの？　私の生き方とイメージを殺すつもり？」
「そうじゃなくてさ……仕事のことだって」
「分かってる。それぐらいはちゃんと頭に入っているわよ」
「じゃ、作戦内容を復唱して。暗記しているはずじゃないか？」
ベラトリックスは『やべっ』と一瞬思って、酷く顔をしかめた。
だが、目の前にいる子供は全く容赦をするつもりはないらしく、純情無垢な顔で答えを待ち続けている。
彼女はやや狼狽しながらも、微かな声を絞り出しつつ、
「あ――っと、一つ……酒を飲みながら」
「その時点で既に間違ってる！」
「知らないわよ！　私にとってはそれが大事なの！　酒さえあれば、どんな任務だってこなせるわ！」
「それ以前に、酒なんて入ったらベラトリックスは記憶を失いかねないんだよ！？　そこんとこ分かってる？」
「そりゃ、私の酒癖が悪いっていうことぐらいは把握してるけど……」
思わず口ごもってしまう。思えばたくさんの思い当たる節が脳内

を過ぎったからだ。
例えば、自分の上官（男）がなんかいやらしい目を向けてきた暁には、その場で酒を取り出して思いっきりぶん投げてやったり。
更に、暇さえあれば酒を飲んでいることに注意してきた上官（男）に対して、支離滅裂な暴言を吐きまくり、挙句には殴ったり。
しかも、世の中が主に女性中心の社会だったことで、そのことに対する罰は非常に軽かった。
とにかく、ベラトリックスは酒には弱いくせに、酒を好むという偏食傾向があるのだ。そのことを知りつつも、今日も酒を飲むという行為自体はベラトリックスも変に思ったりしたのだが、それが止められない。
そして、それが結果として任務中でさえ酒を飲むという、兵士にはあるまじきことになっている。

「じゃ、テスト。僕の名前は？」
「もういっそ男でもいいんじゃない？」
「僕は女ッ！　それ以下でもそれ以上でもないッ！　ついでに話を変えるんじゃないっ！」
「あ～、そう」
「生半可な返事で……テストの答えは？」

やや苦笑いしながらベラトリックスはその質問に答える。

「『トリシア・ガーベラ』、じゃなかったっけ？」
「……そう。トリシア・ガーベラ。それで合ってる」

若干うな垂れた彼女――トリシアは、そう答えた。

「だが――僕は一つ言っておきたいことがある」

と、更にトリシアは続ける。

「最近、また胸が大きくなってんじゃないか？　ちょ、なんかムカつくったらありゃしないんだけれど？」
「これはまた偉く口調が変わったわね」
「うるさい！　たかが乳がデカいからって、調子に乗るな！！」

トリシアは自分の胸に手をあて、その大きさを確かめ、そして溜息をついた。

「い、いつかあんたみたいな大きさまで私も成長するんだからな！とくと見てろ！」
「はいはい、了解～」

ベラトリックスは生返事をする。
なにがそこまでこのトリシアを駆り立てているのか。いや、その悩みは、一生ベラトリックスのような恵まれた者達には分かるまい。いや否――分かってたまるか、というのがこのトリシアの思いだった。
ベラトリックスはそんなトリシアに、なにか一言励ましてあげたいと思った。

「まぁ、いいじゃない。あなたのような体系だと、特定の層が喜ぶから」
「と、特定の層って！？　私でもＯＫな人がいるのか！？」
「変態と……ＢＬの層」
「な……ななな嫌あああああああああああああ――――――――――ッ！！」

この部屋に甲高い声が木霊する。

いや、ほら、今のは褒め言葉だって。ベラトリックスはなんとかなだめようとするが、当の本人は涙目を浮かべたままこちらを睨みつけてくる。
――どうも私は失言しちゃったみたいだなぁ。どうしよう？
さてどうしようか。ベラトリックスは考えてみたが、いまいちグッとくる答えがなかなか導き出せない。
あそこまでの反応は流石にベラトリックスには予想が出来なかった。もともとベラトリックスとしては、そのトリシアの体系から考えての発言だったのだが、それがどうも彼女をここまで追い詰めたようだ、ということは分かっていた。

「酷いッ！　酷いよベラトリックス！　こんな可愛い妹のことをそんな酷い言い回しでいじめるなんて！」
「……ついに妹キャラに？　しかもむしろ弟にしろや」
「今のは作っただけ。本気にしないでくれ。しかも弟は止めて」

さっきまでの涙目はどこに行ったのだろう。その頬を伝っていた涙は既になかった。変わりに冷静に突っ込みを入れる姿。

「と、とにかく、私はそのうち追いついてみせるッ！」
「そう、がんばれ」
「……なんかムカつくんだけれど」
「気・の・せ・い・よ。もともと、あなたはボーイッシュなんだから、がんばれば美少年としてイケルかもしれないわ」
「でええええええい！　確かに私はなんか知らないけれど男装させられた挙句に男子トイレまで潜入したこともあったりゲイやＢＬ本を勝手に書かれたりするけど！」
「けど？」
「ぼ、僕だって……お、お化粧とか、してみたいんだ……」

などと言って、少し涙目になってベラトリックスを見上げてくる姿は――女の子そのもので。
そしてそれをついつい可愛いなどと思ってしまう自分が、なんだか恥ずかしくなってくる。
ふと、ベラトリックスはこのトリシアのそばまで行って、彼女を抱きしめた。

「大丈夫。もうすぐあなたを気に入る男性が現れるって」
「うう……ロリコンだとか、ＢＬ専門の人じゃなくて？」
「……」
「……」
「……多分」
「なんで多分！？　普通、そこはやさしく励ますところじゃないのか！？　え？　この小説はまともな人が書いてるんだよな！？」
「大丈夫。作者はともかく、あなたのキャラクターを思いついてくれた人も多分そっち系が好きなんだと思う」
「――うう……酷い」

でも、それでもトリシアの心の中では、いつか自分の王子さまが自分を向かえに来てくれる。そんなことを思い続けていた。

「で、これからどうする？」

ややムカついたトリシアが言う。

「うーん……これから究極の力を追うにしても、情報が足りないしね。下手に動くと不味いし……」
「どうすんの」
「……そうだ、いい案があるわ！」
「いい案？　どんな？」

首を傾げるトリシアに、ベラトリックスは小さく耳に口を近づけて耳打ちした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 灯火（後書き）

ああ、どうでもいいけどさ。あの『イクス』とか、主人公の夢に関することは短編に纏めようと思ふ。そうでもしないと、この小説内で終わらせられん。
まぁ、一応は初見の人でも理解できそうな風に作る。ＳＦみたいに作る予定だ。でも時間がないお。来年受験だお。どう考えても危険だ。

でも、一応は『ヨハネ黙示録』をモデルに作ろうかな、と。
一応仏教徒だけど、新約聖書持っているし、あれはネタの宝庫だと思うんだけど。でも天使の戦いを書いたエノク書がないんだよねぇ……買おうかしら。

# S&M

人の欲しがるもの。

住居を与え、娯楽を与え、食べ物と栄養を与え、健康を与えたところで、人はまだ不幸と不満を覚えるだろう。

人は、圧倒的な力というものを欲しがっているのだ。

ｂｙ　ニーチェ

くだらないことだが、俺ははっきり言っておきたいことがいくつかある。

一つ、俺は姉萌えであると同時に妹萌えである。

二つ。男でも取って喰える。

三つ。これで『アレ』を三ヶ月ほどしていない。

本当にくだらないことだ。ああ、自分でもそう感じる。だけれども、これは意外と重要なことだ。

特に三つ目なんて、思春期真っ盛りの男子にとってはまさに地獄だ。いや、本当にコレは精神にくるものがある。

たとえ賢者でさえもこの思春期に差し迫るこの性欲には恐らく勝てまい。これは人間の本能が生み出した産物であり、種の繁栄にとってはなくてはならないものであることぐらい重々周知しているつもりだ。しかし。だから、というつもりもないんだが。

思い返してみれば、こういうライトノベルとかの主人公は、身の回りにたくさんの女子をはべらせておいて、性的な感情に囚われたりしないのだろうか？　そうでなくとも、旅をするパーティなら、絶対に囚われるだろう悩みではないだろうか。

――まぁ、少なくとも俺には全く関係のない話だろうがな。

☆

「――で、なんで俺が縄でグルグルに巻きつけられているのか説明してもらいたい」

俺はその惨状を理解しようと、辺りを見回した。

「質問は許可できないわね。そこでジッとしていなさい」

鋭い声が聞こえてくる。

ふと顔を上げると、そこには凛々しい顔立ちをした女騎士団長であるガウェインがそこにいた。

やれやれ、といわんばかりに溜息を俺はつき、一応この縄を外そうと抵抗をしてみるものの、一向に外れる気配は以前としてなく、ガッチリと俺を拘束したまま沈黙している。

「お前……ハーレムにならないからパーティに入れてやるっていった傍からこの仕打ちとはどういうつもりだよ！　俺は獣か？」

「あながち間違いではないけれど……」

「せめて違うと断言してくれ」

聖教都市から遠く……というほど離れてはいない郊外。

俺達――俺とアニュス、それから騎士団はミューゼスの海を目指して馬車を走らせていた。

だが、ことの顛末（てんまつ）はその途中のことだった。

俺が一つ昼寝でもしようか、と思って馬車の中で眠っていた。そして次めが覚めると、いつの間にか縄で縛られていたのだ。

最初、俺は『ＳＭプレイでもする気なのか？』と思ったが、どう

も違うらしい。馬車の中に数人ほど騎士団がいたのだが、なんとなく俺を見る目がやや侮蔑の意識が入っている気がする。これでは羞恥プレイではないか――。
ガウェインはそんな折に現れ、冒頭に至るのだ。

「ところで、次にガムテープで口を縛ってもらいたいか？」
「却下する。と言うか提案するなよ」
「じゃ、蝋燭で……」
「おい！　それじゃ本当にＳＭだろうが！　あんたは俺を痛めつけて面白いのかよ！？」
「……多分、いけるんじゃないかしら」
「いや駄目だろうが。倫理的にも、精神的にも」

確かに彼女のような性格なら、そういったことにも詳しそうだ。無論それを受けるのは御免だが。
ガウェインは「それは残念ね」と言いながら俺の手首などにくくられた縄を剣で斬ってくれた。まぁ、何が残念なのかはこの際聞くべきではない気がするのはどうしてだろうか。
俺は一度手首をまわし、開放感を感じた。

「一つ、聞いていいか？」
「なに？」

ガウェインはいつもどおりの無表情。
俺はそんなガウェインに、同じような無表情さで言った。

「あと何日かかる？　ミューゼスの海までさ。なんだかこれ以上あんたらとやっていける気がしないんだけれども……」

俺にとってはコレは拷問に近いかもしれない。恋愛対象にはいら

ないからという理由でパーティに参加している（させてもらっている）俺にとっては、羞恥で拷問、先ほどのような縛られることも多々あるだろう。
このような生活が何時まで続くのか。
俺がリタイアするまでか、それともそれまでに目的地に着くか。
いわば俺の精神がどれほど虐げられるのかが知りたい。
ガウェインはそんな俺の心情を察してくれたのか、途端に柔らかい笑顔で、
「あと、一ヶ月よ」
「……」
もしかしたら……俺は廃人になるのかもしれない。

☆

昼過ぎ。
俺はゆっくりと過ぎ去っていく風景を馬車の中から眺めながら、特に何もすることもなく、ただ茫然としていた。
あわてることもなく。ただ自由でそれこそ奔放な生活。俺はそのことに何ら不可解なことを感じはしてはいなかった。
そう……思い返せば、この生活を俺はかつては望んでいたではないか。ただ何者にも縛られることもなく、過ぎ去りゆく風景を眺めるだけの、今の俺の生き方を。
過ぎ去っていく風景は、そのどれもが季節を反映した形になっている。秋は瞬く間に過ぎ去って、次は辛くて苦しい冬が訪れる。彼らはその冬に対して準備をしているのだ。
――寒い。
俺は羽織っていた防寒着をより体に密着させるように動かした。

服が少し冷たくなっていたのか、下着の上からひんやりとした感覚があった。まぁ、別に気にすることはないか、と俺は思って、その冷たさを体温で温め始めた。
その時、誰かが俺を呼ぶような声が聞こえた。女の声――ここには俺を除いて全員が女だったが――のようだ。俺はふと、顔をそちらに向けた。

「アニュスか」

その声の方向にいたのは小さな女の子のアニュスだった。
彼女はどういうわけか知らないが、その右手に毛布のようなものを携えている。俺はそれを見て、それを俺に掛けてくれるのかくれるのか、と小さく期待した。
だが、そういうわけではないらしい。アニュスは俺に掛けるそぶりすら見せず、俺の隣の席に座りこんだ

「あにうえっ！」
「……なんだ、そのあにうえっ！　って」

俺は首を傾げる。だが、それをいった当の本人はなんら気にする様子もなく、笑顔でいっぱいの表情を見せる。

「本に、お兄さんを呼ぶときはそうしたほうがいいって書いてありましたから」
「……どんな本を読んでいるんだよ、お前」
「え？　至って健全な『兄と妹との、禁断の愛！』という、なんかエロチックな本に書いてありましたけど……」
「ええい今すぐそれを廃棄処分してしまえッ！　というより、そんなもの何時読んだんだよっ！　それはどう考えてもＲ１８の如何わしい本だろうがッ！」

「え？　中身はハードなＳＭプレイが……」
「どこで読んだ？　この兄上に言ってみろ」
「ああ、それなら」

と、アニュスは外のほうに目をやり、指をさす。

「外に旅の商人さんが来ているんです。その人から、ガウェインさんが買って、それを私に読ませてくれたんです」
「旅の商人？　そんなものが？」
「そうです。人数は二人でした」
「そういえば、馬車がいつの間にか止まっているな。本当に来ているのか……」

俺は窓を覗き込んだ。だが、どうもその様子は見えない。
旅の商人、か。
俺はふと、あることを思い出した。あの褐色の肌をした女商人（自称）のことだ。
いや、以外とその本人なのかもしれない。とりあえずは外に出てみるのも一興だろう。俺はそう考え、これからガウェインにどんな文句を言ってやろうか、ということを考え始めた。

俺の娘に、こういったエロ本は早すぎる。

少しだけ、その本に興味があったが、後で見よう。
そうくだらないことを頭の片隅で考えながら。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## S&M（後書き）

正直、微妙だ。
やっぱり、はやく物語を進めたほうがいいんですかね？　他の小説をみていると、６０話ぐらいから主人公無双しているんですけども……。
いや、個人的にはこんな風にゆったりしていたいわけでもないんです。ええ、私だって、主人公無双してみたいですがな。でも、それに至る道筋をきっちり書いておきたい派なんですのよ。
でも、実際私が主人公無双したとしても……爽快感は感じられずに、なんだか血なまぐさい描写になりそうですけど。

まぁ、やっぱり……主人公をチート化させるってのは相当な理由が必要なんすよ。神から貰った力で云々より、感情移入しづらいけどやっぱり読んで『ああ、だからチート化したのか、なるほど』で終わらせたいんですよねぇ……。
ま、お気に入りが増えないのも、前述の『神云々』ストーリの方が読みやすいっていう理由があるんだろうね。こういうクドクドわふーの文体だと、絶対飽きるもんね。私だってそうだ。

**矮小なもの**

人が今のように貪欲に生きてゆくならば、いつぞやのノアの大洪水のように死滅してしまえばよい。
そうすれば、少なくとも地球は救われる。
ならば、生き抜くのにどうすればいいのか。
それを考え、行動に移すことこそ我々の使命ではないだろうか。

ｂｙ　作者（中二病＋宗教観＋哲学っぽい何か）

☆

くだらない偶然、というものは非常にくだらない時に起こる偶然という意味だ。いや、また別に言えば偶然自体が非常にくだらなさ過ぎるのかもしれない。
俺は馬車から降りた。サッパリとした空気が俺を打ち付けてくるが、そんなことは気にしてられない。今はその商人とガウェインに会うことが先決だ。俺はふと、馬の方を見る。
すると、そこに人だかりがあるのが見えた。

「……あれか」

正直、気が進まなかった。なぜなら、あの人だかりは完全に女達の巣窟になっているからだ。あの中に突っ込め、というのか。俺はそんなの面倒だからしたくはないのだが。
しかし、一応アニュスの保護者としてガウェインに一言ケチをつけなければ収まらない。ここは一つ恥を押し殺してあの中へ突入すべきなのだろうか。

「しかし……一つ気になることがある」

俺はその集団を眺めて、独り言を呟いた。

「あの女達は、何を買っている？　この状況で、一体何が彼女達を満足させるのだ？」

確かに、この旅は非常に退屈極まりないに違いないのは目に見えて明らかだろう。そしてその退屈を満足させられるだけのものが売られているからこその、あの盛況振りだ。それは認めよう。

しかし、それは一つの問題を生む。

それは、果たして男子が突っ込んでいって倫理的にＯＫな物が売られていうか、ということだ。

先ほどのアニュスがガウェインから貰って読んだ本は、明らかに成人指定の本だ。そしてその内容は明らかに近親相姦であろう。

それならば、目の前にあるあの集団の中では、どれほどのものが売られているというのだろうか。

俺はそのような疑問を持ちつつ、その集団の中に入っていた。

――が。

俺の目に飛び込んできたのは、それこそ元の世界でネットで見たことのある女性が使う『禁則事項です』とか『検閲により削除』だとか『みちゃらめぇー！』な卑猥なモノ……簡潔に言えば、玩具、それも大人の。

「……この場所はマズイ。絶対にヤバイッ！　ここはこの場所から逃れたほうがよさそうだ……」

だが、その時だった。

「ん？　あれは……おーいっ！　もしかしてキミは……」

「……？」

どこかで俺が聞いたことのあるような声が聞こえた気がした。

だが、そんなはずがないのは俺でさえも分かっている。運命などという偶発的要素をポジティブに考えられないのだよ。俺は。

しかし、それでも一応は俺は周りを見渡す。すると、女性軍の中から一人の女性が飛び出してくるのが見えた。

「なっ、お前は……」

「おはろ〜」

「……誰だ？」

「……」

「……？」

「……え？」

女はやや涙目をしながら声を震わせながらいった。

まぁ、なんというか。厄介極まりなかった。主に罪悪感の方面で。

「……いや、悪かった。俺が悪かった。お前のことは覚えているぞ」

「じゃ、名前は？」

「……」

「うう……一度抱いた女を、男ってこうも簡単に……」

「抱いてねーぞ！　嘘も程ほどにしろベラトリックス！」

どうしてここまで俺は女運が悪いのだろう。

一年前の俺にしてみれば確実に羨むこと間違いなしの光景だった

のだが、現実は結局は混沌として真実味が増し、その意味が捉えられなくなってくる。
全く、嫌になる。
そう思いつつも、俺は頭に手を当て、一つ大きな溜息をつかざるを得ない。……なんだか、さいきん溜息ばかりついているのは気のせいだろうか……？

「で？　あんたがこの　馬車に対して商品を売っていたりするのか」
「ええ。結構儲かっているわ」
「何が売れている？」
「……」
「……おい」
「言っちゃっていいのかしら。小説的に一応Ｒ－１５にはなってるけど……」
「大丈夫だ、問題ない。中学生以下の人は自己責任で読んでいるだろうからな。知ったものか」
「あら、そう？　まぁ……『自粛します』とか『アッー！』とか、そういった婦女子向けのものを打ってるんだけれど」
「それはそれは、儲かっているんだろうな」
「ええ、もちろん。欲求不満の人がたくさんいるらしいから」

欲求不満、とはよく言ったものだ。
俺だってかなり溜まっているのだ。このところ、全く一人になれるときがなかったのだ。それゆえ、若い肉体に付き纏う性欲を、俺は三ヶ月ほど解放していなかったりする。
だけども、それで女達がやれ『欲求不満』だとかいうのは構わない。俺だって欲求不満だからだ。だが、俺と同じようにその欲求を体に押しとどめて欲しいのだ。
「全く、女という生き物はつくづく分からん」

「へぇ、私は男が理解できないけれどさ」
「男のほうが野蛮だといいたいのか？」
「そうね。多分」
「……確かに、一般的には男のほうが大胆で野蛮だと思われている。だが、それは体格と行動から印象付けられた事柄にしか過ぎんよ」
「例えば？」
「報復と恋愛に関しては、女の方が大胆で野蛮だ」

報復と恋愛――この二つに関して言えば、この上なく女という生き物は恐ろしいものだ。嫉妬、愛憎、復讐……何時の世にも存在した感情は、主に女性が持っていたのだ。
いくら男が野蛮で大胆でも、コレだけは真似をすることは出来ない。男という生き物は、そういう感情に疎いのだ。だからこそ浮気に走ったりする。
そういうものなのだ。人間という生き物は。

「そういや、お前は一人でここに来たのか？　誰か連れて来ているようには見えないが……」
「ああ、一人いるわ」

ベラトリックスは再び女達の巣窟に戻り、それから数分してのち一人の子供（？）を連れてきた。
見れば、髪は茶髪で、なんだか中世的な感じがする。女の子に近い男か。胸も無いし。
ベラトリックスはその子を自分の前に出し、自己紹介をするように促した。

「……僕はトリシア。トリシア・ガーベラ」

その子はぶっきらぼうに答えた。何だか物凄く釘宮理恵さんの声

に似ている気がするが突っ込んではいけないのだろう。
俺はその子供とベラトリックスと見比べ、
「……お前って結婚してたっけ？」
「してないわよ。なんでしなきゃならないのよ」
「じゃあ弟か？」
「……弟？　弟、ね……ふ、ふふ……そうね、ふ、ふふふふ！」
俺のどの単語に笑える要素があったのかは不明なのだが、なぜだかベラトリックスが思いっきり笑いを押し殺している。
『弟……？』
当の言われた本人は何処か『弟』という言葉に何かしら反応してしまっているらしく、やや体が震えていた。寒いのだろうか。
と、ベラトリックスはその子の肩を掴んで、
「……本当に男らしいと思わない？　コレがもし女の子といったら、あんたは信じる？」
「信じない」
「なぜか教えてくれる？」
唇を不自然に曲げながら言う。何が彼女を笑わしているんだろうか。
俺はその子に視線を集中し、胸、肩、腰周りを注意深く視姦してみることにした。
「そうだな……強いてあげるなら胸が無い。顔つきが女らしくとも見えるし美少年にも見える。肩はそこまで男らしいとは言えないが、その子の同世代の子供と対して変わらん。まー腰周りは女っぽさを

残している感じだな」

どこからか『貧乳はステータス』という言葉が聞こえてきた気がしたが、一体何なのだろう。

だが、男なのだろうから別に胸がなくてもいいとは思う。いや、胸なんかあったら邪魔だろう。この子に取ってしてみたら、これから胸筋を鍛える必要はない。

「で、この子はあんたの弟か？　これまた偉く美少年だな、全く」

「あ、そうじゃなくて……」

「おい、トリシア」

溜息を着いているベラトリックスをよそに、俺はこの子――トリシアに話し掛ける。

トリシアは少し目に涙を浮かべているようだが、どうかしたのだろうか。気にはしないが。

「……一つ、いいか」

「し、知らない！　そもそも僕は……」

「ふん、いい口答えだな。俺にそういう口を利くとは……」

俺はその時、体の奥底から何かが湧き出てくるような、不思議な感覚をもった。しかし、その正体が何なのか。それは分からない。

だが俺はそんなことを考える余裕はもってはいなかった。

ただ、その生まれた感情に巻き込まれる。

動く。

血液は流れ、体は動く。

「……興奮してきた。服を脱げ。トリシア」

to be continued...

# 男色に走る、主人公（前書き）

R＝15

## 男色に走る、主人公

『やらないか』

by 阿部さん

☆

男色。

簡単に言えば、男好きということだ。

例えば、ベンチに座っている男が、いきなり脱ぎだして『やらないか』と言う。そう、コレが男色家だ。

そもそも、男色というものは意外と歴史が古いのだ。

雑学として言えば、戦国時代。その時、数々の武将は戦いに明け暮れていた。だが、そこは人間としての性なのか、性欲も強いらしかった。

だが、その性欲を発散しようにも戦場に女は連れてはいけない、だからどうしたか、というと。

『美少年を常に傍に置いた』

ここまで書けば、その理由がそこはかとなく理解できるはずだ。理屈ではなく、心で。一般的に、その時代は男と寝ても全く恥ずかしくなく、むしろ健全だったとも言われているほどだ。

彼らは、女ではなく男と寝る。それは一時的にでも自らを律するためにしたことといえばなんでもないのだが、それでも現代の社会にとってはそれはタブーとされてきた。

『男を抱く』

それは偏見ではあるだろう。俺だってそんな人を見たら確実に引

く。むしろ引くこと自体が健全であろう。
では、この状況ではどうだろうか。
俺は、自分を律することは出来るのだろうか。

――ん？　なんかおかしい気がする。

☆

「早く服を脱げよ……俺を待たせるんじゃあないぜ……」
俺は強くトリシアの肩を掴んで、馬車に押し付ける。
強く押されてバランスが取りづらかったのだろうか、トリシアは慌てふためきながら後ろに覚束無い足取りで後退し、そのまま馬車に強くあたった。

「な、何をするんだ！　一体……」
「元気だな。その言葉遣いが更に俺を興奮させる」
「な……ベラトリックスッ！　助け……」
「少し、黙っていてくれ」

トリシアがベラトリックスに手を伸ばそうとしたとき、俺はその手を瞬時に掴んだ。しかしそれでもトリシアは振り払おうとするのだが、いかんせん力が足りない。俺は更に力を篭めてその抵抗を払う。
トリシア・ガーベラに取ってしてみたら、存外に恐怖を感じていることだろう。無論、そんなことに気を掛ける俺ではない。恐怖だろうがなんだろうが、俺の体に付き纏っているこの感覚を開放したい、その気持ちが、彼（？）に対する罪悪の気持ちを押さえつけて

いた。

「うわあああぁぁぁ！　やめてぇぇぇ！」

「女らしく泣く奴だな」

実は女なのだが、そんなことは気にも留めずににやりと笑う。

周りでは、なぜだか知らないがそこら中に黄色い歓声が沸きあがっており、その行為を止めようとする人間はいなかった。

もちろん、ベラトリックスとしては松下を止めたかった。だが、その光景が何時か見た『ＢＬ』の光景に似ており、止めることが出来なかったのだった。

その時、ベラトリックスはあることを思っていた。

（……なんか、意外とエロいのが気に掛かるけど、まぁいいか。今晩のネタにもなるし……トリシアにとってもいい経験になるかも知れないなぁ。……ん？）

官能的な行為が目の前で成されているというのに、何かが引っかかる。

――そうだ、彼はトリシアが女だと気付いているのかな？

思い返せば、彼は最初『弟か』と聞いてきていた。と、言うことは……。

「あ、あのさ……」

「……取り込んでいるから、邪魔しないでくれないか？　ベラトリックス」

「あ、はい……ごめん……」

「え！？　そ、そこで止めないでくれ！　た、助けてくれ！」

「大丈夫……多分」

「多分って……ひゃう！？」

トリシアが突然喘いだ。俺はなだらかにトリシアの首筋を指でなぞっていたときだったが、どうやらそこがダントツに弱いらしい。
なんだか、コイツの反応が俺の心を満たし始めている感覚がする。
俺は更に指をトリシアの首筋からその胴体へとシフトさせていった。

「本当に女みたいな体だな……もっとも、俺だって女の体を直に見たことはないが……」

トリシアの服の下から手を入れて、胸のあるべき部分を　撫でる。
今までに一度も俺は女性と性行為をしたことはない。矢島は知らないが、少なくとも直に女の体を見たことはないのだ。
だから、というわけでもないが、俺はどうもトリシアのような体つきの人間が好みらしい。
喘ぐトリシアの声を心地よく感じながら、俺は更にトリシアの胸を撫でる。
それは、凹凸さえないような。まさに平ら……そう、例えれば板のようだった。
だが、もちろん本当に板というわけではない。それはまるで道路工事でなだらかにし損なって少し凹凸が出来てしまったというぐらいのレベルの話ではあるのだが、それでも一応は『何か』がある。

[この後の文章は一部三人称が含まれています]

「ん、いい感度じゃないか」
「く、クソ……こんな男に蹂躙されてしまうなんて、なんて僕は弱いんだ……」
「そうだ、その顔だ。その顔をもっと俺に見せてくれ。その屈辱さ

れて涙が浮かんでいる顔をな！」
「お、お前は自分が何をやっているのか分かっているのか！？　こんな卑猥なことを、しかもこんな公然の目の前で！」
「理解しているさ。しかも、公然というわりには、その観客は手出しをしてこないようだがな」

トリシアは言われて周りを見渡してみると、そこには、

「あ……と、止めなくちゃいけないんだけれど……」
「か、体が疼く……ん！」
「はぁ、はぁ……あんな男が、あんな可愛らしい子を犯すなんて……濡れるッ！」
「駄目ぇ……これじゃ、このままじゃぁん……」

トリシアは、その光景に戦慄せざるを得なかった。
あるものは顔を赤く紅潮させて熱っぽい目線を送ってきているし、またあるものは最早立っていられなくなってしまっているのか、座り込んで股をもじもじと擦っている。
既に、ここはストリップ小屋と化しているではないのか。頼みの綱であるベラトリックスでさえ自身の股を摩っている。つまり、彼女達はこの先の行為を望んでいる、ということになる。
だが、そのことを知ってか知らずか、松下の手は休まることはなかった。

「んん……ふぁん！」

背中がぞくぞくとする感覚に囚われる。
快感は、脳の外へ流れていく感じがする。もともとトリシアの体は既に一人の女として成熟している。だけれども、一人でする、ということはしたことはなかった。

その為なのだろうか、トリシアにとってはこの感覚がとても新鮮に感じられて、知らない男に蹂躙されているというのにその快楽を受け入れ始めていた。
さらに追い討ちを掛けるように、松下は胸からその白い腹へとその指を下げ始める。その時、松下は指を立て、ツーっとなだらかに滑ってゆく。

「ふぁ、ん……そこは、駄目、だ……弱いん、だぁ！」

松下の手はとても冷たくて、とてもひんやりする感覚が背中を駆け巡る。だが、それがなぜか心地よい感覚としてトリシアの脳内に響き渡った。
――自分は、快感を感じ始めているのか……？
考えたくはなかった。こんなことで自分が屈するなどと、到底認められることではなかったのだ。だけれども、それでも自分の肉体が感じてしまう快感は認めざるを得ない――それは、トリシアが心で負けたことを示していた。
だが、その感覚は不意に途切れてしまう。
涙を目に浮かべながら、なぜその感覚が消えてしまったのか。トリシアは疑問を感じた。

（え……？）

先ほどまで自分の体に感じる快感が思考を遮ってしまっていて、まともに松下の顔を見ることはしなかったが、今はその快感が途切れていることで、何とか目を凝らして松下を見ることが出来たのだが……。
その松下の顔は、意外にもシリアスだった。
――何故？
不意に彼が口を開いた。

「お前……」
「え？」
「女かッ！」
「な……当たり前だあああぁぁぁぁぁぁぁ――――ッ！」

トリシアは、まさに絶叫をせざるを得なかった。いや、しなければ自分の尊厳が崩れてゆく。
松下の顔を見てみると、それはもう『なんてことだ』といわんばかりの焦燥感がにじみ出ているのが、更にトリシアの心を傷つけた。

「お、お前はまさか……私を女だと知らないであんな破廉恥なことをしようとしていたのかァァァァーッ！　どうなんだ！？」
「……反省はしている」
「そうじゃない！　私は反省を求めているんじゃないんだ！　ただ……本当に女だと知らないでやっていたことなのか、聞きたいだけ、だ……」
「……すまない。まったく気がつかなかった」
「な――」

トリシアは言葉を失った。

最早、心が崩壊する手前。
トリシアにとって、これ以上の屈辱はなかった。
自分が女性であることを、何時のときも、誰も気付いてはくれない。そう、それはなれたことだ。だけれど、さっきまでのような状況になったとき、初めて自分は女性扱いを受けているんだ、と思ってしまった自分がいた。
たとえ、それが陵辱であっても。初めて自分が女性扱いを受けていることに歓喜していたのに。

それすら無駄だというのだ。これが夢であっても、生々しすぎるくらいに酷い。
そうして、何かに絶望したかの様に松下を押しのけ、ふらふら～っとベラトリックスの元へ歩いてゆき。

「もう、駄目だ……」

思いっきり倒れこんだ。

「え？　ちょ、トリシア？」

彼女はいきなりベラトリックスの豊満な胸に飛び込んだ。いままで散々恨めしく思っていた胸が、トリシアをやさしく包み込む。

「ふにゅぅー」
そうして、枯渇しかかっていた精神エネルギーは。
完璧に潰えた。
そして、その寝顔をベラトリックスは覗き込むと、

「あれ、意外と可愛かったり……」

ベラトリックスに寄りかかって気絶したトリシアは男性的な部分ではなく、もっとも女性らしい素直な寝顔をさらしていた。

☆

「おい、松下」

ふと、松下は後ろを振り返る。

「ん……！？　な、ガウェ……」
「チェストッ！」
ガウェインの腰から抜かれた剣が、躊躇なく首筋に飛んでゆき、
「ぐ……」
そこで意識は消えた。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

**心のサクリファイス**

『アッー！』

ｂｙ……？

☆

馬車に揺られ、俺は馬車に取り付けられている座席に倒れこみながら、俺は天井――馬車の天井を見上げていた。

日は既に傾き、窓の外の風景は暗くなっており、そして肌寒かった。

「……なんだ、ここ」

首筋を摩りながら、傍にいたアニュスに問いかける。だが、それに対する返事はないようだった。

朝。俺は確か、婦女暴行だか何だかで……何をしたって言うのだろう。

何故俺はここに？　どうしてここで倒れるようにして眠っていたのだろう。いかんせん記憶が曖昧で、それに到達するだけのことが思い出せない。

ガウェインがいれば、何があったのかは分かるのだろうが、ここにはいない。どうして必要なときに必要な奴がいないんだろう。これでよく世の中回っていけるな。

「ッ……？　頭が物理的に痛てぇ……どっかでぶん殴られたりした

のか？」

何処かにぶつけたってか、と呟き、俺は上体を起こす。

アニュスはいつものように寝ているし、このまま起こすのもなんだか気が引ける。

仕方がないだろう。こうなれば、彼女を起こさずに行動するしかない、か。

ガウェインは何処に居るのだろう。確か馬車は二台持っていたはずだから、もう一方だろうか。

辺りを見回すと、確かに数十人程度の女騎士団の面々が固まって毛布に包まっている。あの寝方だと、恐らく体を痛めるのは必至であろう。

いっそ日ごろの恨みを発散するべく彼女らの寝込みを襲う、とかいう非常識なことが脳裏に浮かんだが、それは流石に命の危険があるので止めた。いや、命の危険どころの話ではなく、死ぬことは確定していたことだろう。

俺は痛む頭を右手で押さえつつ、再び備え付けられたイスに寝っころがる。

（どうも最近頭が痛い……変だな。偏頭痛の感じじゃないし……）

俺は普段、頭痛とかはしないタイプだ。無論病気はあんまりしないし、熱が三十九度程度あったとしてもテンションが著しく上昇するタイプだし。

だが、今回の頭痛は奇妙だ。

どこか、実体のないところからの痛みだった。何処からか痛みがする。

体から？　いや、違う。これはもっと別の痛みだ。

精神に異常でもあるのだろうか。精神状態によっては、感じられる感覚が、どこからともなくやってくるという話を聞いたことはあ

るのだが。
尤も、これは断じて心の痛みとかいう生易しいモノではないのは確かだが。
ただし、コレは現在進行形である物理的な痛みを伴っていないときの話だ。今はその変な頭痛と奇妙な偏頭痛が起こっている。
やってられない。
俺は目を閉じた。
その時、俺はふと一筋の風を感じた。
（気のせいか？　にしてはリアルだが……窓は閉まっているしな）
キッチリ窓は閉められていた。では、この風はなんだろう。
俺はもう一度上体を起こし、その風が何処から来たのか、その源を探す。
「お目覚め（AWAKEN）？　婦女子を襲った非常識者さん」
その声と共に、俺は風を感じた。その方を振り向くと、そこには軍人であるガウェインという女が立っていた。
どこから入ってきたのだろう、とふとそんなくだらない疑問が脳を過ぎる。
「面白くないな」
「女の目の前で寝起き一発目でその言葉を吐くのが驚きだわ」
「構わないだろう？　取って喰おうっていう意思を明確に否定しているんだからな。あんたら女子にとっては嬉しい言葉だろ？」
「それはアンタが言った時だけ適用される言葉ね。もてない云々意外に客観的に見れば面白いんだけれど」
「どう見れば客観的に見られるってんだ」

ガウェインは、別に笑いもしなければ、俺が言った言葉に対しての憤りを表現する表情も浮かべることはしなかった。
だが、どうってことはない。別に女性から笑みを貰いたいわけでもないし、好かれたい気持ちもない。そんな表情されたって、ただ俺の心の女性から受けるショックに対する耐性がついていくだけだ。
俺は一度窓の外の方を見て、

「そういえば、彼女達はどうしたんだ？　もうどっかへ行ったのか」
「ああ、あの人たちのこと？」

どうやら、ことの顛末を知っているらしい口ぶりだ。

「あの人たちなら、もうミューゼスの海の近くの町に行商に行ったわ。まるで逃げるように」
「逃げる？　何から？」
「あなたから」
「……」
「覚えていない？」
「ああ。午前中のことはあんまり覚えていないな。なんかにぶん殴られたように頭が痛いだけだな、覚えているのは」
「ああ、それよ」

彼女はいつもどおり表情を変化させずに言った。

「あんた、朝っぱらからどうかしてたようで、あの黒肌さんの弟……じゃなかった、妹を襲っちゃったのさ。はっきり言ってどうかしてるわよ」
「……ああ、なるほど」
「で、アンタが突然襲うのを止めてさ、なんかぼけっとしてるんだもの。ありゃ見モノだったわね」

「そうか……そこまで変だったか？」
「まぁ、例えるなら……例えるものがないわね」
「それぐらい変だったわけか」

ガウェインは、本当は心の中で俺を嘲笑しているのかもしれない。だが、残念なことに俺にはそれを知ることの出来る能力なんて持ってはいなかった。

（仮にあったとしても、多分それに絶望するだけだろうさ）

いつもそう思う。
心の中を知れたとしても、真に自分を理解できる人間なんていない。誰かが自分の仕出かしたことを嘲笑っていたとしても、その人間は当人にはその心を隠して接している。
だが、それが露わになってしまえば互いの中は決裂する。今だってそうだ。
そう、思い出してきた――俺はどうしようもない性欲に振り回された挙句、相手が女であることを知ると、途端に萎えたんだった。
笑える。自分が、こうも男の娘に欲情するだなんて、信じられない。
自分でも真に理解できていないんだ。結局は。

「笑うか？　アンタは」
「？……誰を」
「俺を、だよ。他に誰がいる？」
「……私は……そうね」

ガウェインは俺の隣に座り、冷たい声を震わせながら、

「別に笑わないわね」

全く表情を崩さず、冷たく言い放った。だが、その言葉には一欠けらの冷たさは篭ってはいない。
俺が何故？　と問い返す前に、その答えの声が帰ってきた。
「正直、あんたがあんな奇行に走ったのには驚いたわ。でも、慣れてるから」
「慣れてる？」
「上官に、あんたみたいな変な人間がいるのよ。いえ、あんたよりもっと変人。私はそいつにいつも振り回されて生きてきた――違う、付き合ってきたって言ったほうがいいかしら」
「好きなのか？　そいつを」
「好きか嫌いか、そのどちらかの感情じゃなきゃいけないのかしら？」
「……いや、恋愛感情でも友情でもどちらの感情でも構わん」
すると、今まで冷たい表情を称えていた彼女の表情は一変し、
「嫌い」
と、にこやかに言った。
正直、俺はあそこまで愉快そうに『嫌い』という感情を表情で表現した人間を見たことがない。あの笑顔の裏には、どこか危険な感じがする。
さしずめ、そのガウェインの上官は辛い人生を歩んでいるに違いなく、今彼女がいないこの時を満喫しているに違いない。
「やれやれ、頭が余計に痛くなってきたじゃないか。どうしてくれるんだ」

「私のせいじゃないわ。勝手に痛くなったアンタのせいよ」
「言ってくれるな、ドＳ女め」
「褒め言葉として受け取っておくわ」

全く、どうしてこの世界に来たときから女運が悪くなったのだろう。
会長、風紀委員、頑固なアナスタシア、毒舌な幼女、酔っ払い、ドＳ騎士長。コレまでは女に出会わないことを『女運が悪い』と言ってきたが、ここにきて『女運が悪い』という意味が『強気な女しか出合わない』に変わってしまった。
嘆きたいが嘆く相手がいない。
ここで、自分の心が相手に伝わらないデメリットを思い知ることとなった。

「ああ、あんたを後ろからぶん殴って気絶させたのは私よ」
「元凶はテメェだったか！　そういえばアニュスに本を渡したのもお前だったな！」

俺達のくだらない話し声は、もう秋を感じさせることのない冬の空に、ただ虚しく響く。
そして、青年は『目覚め』、そして『レクイエム』が謳われる。
だが、今はそんなことは知らず。
ただ、季節はＫａｎｏｎの時へ移り変わってゆく。

レクイエム編―了。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．間章

## 心のサクリファイス（後書き）

と言うわけで、この章は終了となります。
ま、次は間章……ネタ章っすね。
ただ、次は矢島が出るんだけど……みんな彼が嫌いになると思う。
いやマジで、そう言う風に書いたからね。

…ネタ、か……読み切りにします

## 矢島の苦悩

平等は言葉として存在するだけだ

ｂｙエウリピデス

朝に二度寝できる、ということはとても幸福なことだ。だが、いつもいつもそういう風に考えてそれが常習になってしまえば、それは不幸なことだ。

人は、常に何かを求めて生きていると言ってもいい動物だ。ありとあらゆる物を支配できる力を備えているし、それ故に自らの欲求は、人間が進化するごとに次第に高まってきている。

そうなると、人間は自分がすべきでない事を次第に肯定し始める。二度寝を認めてしまう、だとか。遅刻欠席だとか。

言うなれば、知による堕落、識による怠慢。それらが進化するごとにエスカレートしてきて言っているのだ。

そして、その堕落や怠慢が人間を支配する。つまり、ありとあらゆることが人間の知、識によってではなく、それらが生み出した二次的なもの――堕落や怠慢が、全てを支配する。

「人間ってのは……いつでも正義を追い求めなきゃいけない。でも、何時の時代でもそれに抗う人はいるのさ」

「ん……矢島君は、それを信じて？」

プリミル・プリミッシェルは、矢島の胸に抱きつきながら、彼と繋がっているその快感を感じていた。

矢島はその彼女の髪の毛を撫でた。しっとりとして、とても触り

心地がいい。

「もっとも……松下に言わせれば、『絶対的な正義なんて存在しない』とか言われるだろうさ。けれど……」

「マツシタ？」

「ああ、君は一度も会ったことがなかったね」

「どういう人？」

「……どういう人か、と問われてもね。僕にははっきり言うことが出来ないけれど……強いて言うなら、彼は僕の親友だったよ」

「親友？　それはさぞかし素敵な方なんでしょうね……？」

プリミルは小さく笑いながら、矢島の頬にキスをした。矢島としても、彼女からそういうことをされるのは悪くはないな、と思っていた。

だが、プリミルは更にその口付けを下に伸ばす。彼の裸の見ても、既にお互いに恥ずかしいという感情を抱くことはなくなっていたが、矢島は流石にそれをされるのはなれていないらしかった。

矢島は彼女を顔をひょい、と上にそらし、その唇に軽くタッチするようにキスをする。

「ん……」

「……」

それは長い抱擁と接吻だった。お互いに、お互いを貪りあう。

かつて松下はそんな恋愛紛いのことをするドラマなどは著しく遠慮する傾向にあったが、矢島はそうではなく、その時に得られたテクニックをこの場で使っているのだ。

これが堕落だとはこの二人は気付くことはない。

やがてお互いが満足してその接吻を終わらせると、その一方である矢島はベッドから這い出して服を身に着け始めた。そしてそれと

同時にプリミルもシャワーを浴びに、矢島の部屋の浴槽へ歩いていった。

「……セックス、か。なんだか、変な気分だな」

満足感はある。だけど、それだけだった。

彼女とは一週間に一回はしている。最初はいきなり部屋に押しかけられて押し倒されたあと、逆レイプではないかと思うぐらい彼女リードで行ったのだ。

もともとセックスなんて元の世界でも体験していたし、次から矢島リードで物事は進んでいったけれど、やっぱり知り合ってそこまで時間が経っていないのは大きかった。

彼女は王族だ。それも姫だ。そんな人と、自分は繋がってしまった。そのことは、実際に彼の心に大きなプレッシャーとなっていた。

「まったく、と言っても尽きないぐらい、僕はダメな人間だな……。よほど人間として達観していた松下のほうが、彼女に似合うのに」

だが、同時に『彼はプリミルを避けるだろう』ということが思い浮かんだ。理由はなかったが、どうしてかそうなるのを勘で理解していた。

矢島は時計をちらりと見たが、生憎その時間は既に登校時間を大幅に過ぎているのをみて、少し憂鬱になった。

「……行かなきゃなぁ」

とは言ったものの、未だに登校への準備さえ出来てない。このまま学校へ行っても嫌な気分に襲われるだけかもしれない。それでも嫌々学校へ登校する準備するのは、もともとの世界からの習慣だった。今の矢島にとっては、それが否応無しに鬱陶しいものに感じた。

☆

その日の午後だった。

いつも通り、体が憂鬱であんまり動きたくはなかったのだが、何とかその日の戦闘訓練を全て終わらせたあと、矢島は一人生徒会室へ向かっていた。

彼は生徒会の人間であり、更に言うと『社交部』という部活に所属している。

社交部。それは一部のエリートのみに入部を許可されるという。

彼はその部活には出ず、今日はなぜかこの部屋に来ていたのだった。

「失礼します」

矢島はドアを開け、一礼する。生徒会室に入出する際は、いかなる者でさえこの礼を忘れてはいけない、という意味が分からない規則の存在のためだった。

そして、その奥に鎮座しているこの部屋を仕切る主と相対する。

「？　どうしたの、珍しい」

フィルナ・ブランフォード。それが矢島の目の前にいる女性の名だった。

この学院を実質統治し、管轄し、君臨する。そして一種の頭領の如き威圧感を備えている。

「ではお構いなく、失礼いたします」

やや言葉がおかしい気がした。だが、気に留めることはなかった。
矢島は、嘗て友人が『会長』と読んでいた女性を見る。
「最近、悩みが増えましてね……その悩みを解消してほしいんです」
「それだったら、カウンセリングに行くか、先生に聞いてもらったほうがより良い回答が得られるんじゃなくて？」
フィルナは手に持ったお茶を机に置き、イスから立ち上がって、矢島の座っているイスの目の前のイスに座る。
まるで尋問だな、と矢島は思ったが、事実、彼女は自分の心の内を聞き出すので同じようなものだと感じた。
矢島は一つ、溜息を吐いてから、
「実は、プリミルが俺の部屋に押しかけてきて困っているんですよ。なんとかなりませんか？」
「『姫』が」
「はい……」
『姫』というのは、プリミル・プリミッシェルの裏の呼び名だ。
一応は王女なので、敬意と尊敬を篭めつつも皮肉る目的でこのあだ名をつけているのだった。
「……それは」
彼女がポツリと漏らす。「え？」と聞き返したが、ややあって彼女が口を開く。
矢島もその声を聞き取ろうと、何とか耳を潜める。
「それは自力で解決なさいな。私の管轄じゃないことね」

だが、矢島に向けられたのは冷たい言葉だった。

「え、それって……」

「自分のことは自分でやりなさいな。私はこれでも忙しいの！　話は終わり？」

「でも！　僕は体を使わざるを得ない状況になっているんです！」

「それなら彼女を愛しなさい」

「でも……そんなのって」

「愛、じゃない？」

「……」

矢島は言葉が出せなかった。それが自分の心の中で上手く言葉に出来なかっただ。

「はぁ……アンタみたいな、自分中心的な愛を振りまいている奴を見ているとイライラするわ。いい？　愛っていう奴は厄介で、そう簡単には作り出せないものよ。それは分かるでしょ？」

「ええ。でも！」

「でもね、人間、動物でも愛せるの。だったら人間だって愛せて当然でしょうが。『姫』はアンタに体を奉げたんでしょう？　それだったら受け入れてしまうしかないの。自分を騙してまで、愛する必要だってあるの。あの子だって、自分を抑えられなかったんでしょ」

「……うーん」

「チッ……甘ったれた奴ね。矢島、アンタの悩みは分からなくもないけど、少し傲慢すぎるわ。人の中には、誰にも愛されない人だっているもの、アンタの悩みは贅沢すぎる」

そういいつつも、フィルナ・ブランフォードは自分に彼氏と呼べる人がいないのに気がついて、嫌な気分になった。

最初はこの矢島を気に入っていた彼女であるが、最近ではそんな

思いは一欠けらも残ってやしない。未だにあの頃の自分が信じられないのだった。
何時からだろう。矢島を特別視しなくなったのは。でも、そんなこと覚えてはいない。
だからなのか……今、無性に腹が立っていた。
だけど。矢島はそれに気がつくことはない。
もとからコミュニケーション能力が高いと自負してきた彼だ、他人と仲良くするのはわけないという思いが何処かにあり、それと同時に他人の考えていることを考慮する力にも長けていると思っている。だが、その能力は実際は心を許した相手のみにしか適用されない。
つまり、フィルナは矢島に対して心を開いてないのだ。

（……どうしてだろう、なんで私はこんなにも彼を鬱陶しいと思うようになったんだろう？）

自分でも、わからない。

「そうですか……」

矢島はすっかりうな垂れて、肩を落とす。
フィルナはそれを見てややすっきりした気分を得ると同時に、自分の仕事を思い出して、焦った。

「どうしたんですか？　会長」

矢島が聞いてくるが、正直答えようか迷う。無駄に正義感が強い男だから言うのが躊躇われる。
しかし、とりあえず彼女は言うことにした。

「今……クルド国から連絡があってね。あの国の出身の人間を全員送り返してほしいんだって」
「なんでですか？」
「さ……あ？」
「クルド？　確か、コゼットさんも、ジャンも、ノアもそこの出身でしたよね？」
「ええ……そう、だったわね」

正直、ノアとコゼット・アナスタシアのことは覚えていたが、ジャンという生徒はおぼろげだった。

「戦争でも、するんですかね……？」
「そうでないことを祈るわ」

やがて、その文面を読んでいっている内に、もはや矢島のことなどどうでも良くなってきて、そのうち意識するのを止めた。

ただ、最後に一つ。

（今年のクリスマスも、中止ね）

実はこの世界にもクリスマスがあったのだった……。

ｔｈｅ　ｅｎｄ．．．
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 矢島の苦悩（後書き）

もう七十話です。

特定キャラを読者に嫌わせることなんて、簡単なんです。
要は性描写を入れればいい。処女性を重んじる人は、大抵そのキャラを嫌いになる。
……とか言いながら、なんか矢島がプレイボーイ過ぎて憎めない。
うーん……どうしようか？　トコトンまで性描写でも入れれば良かったかなぁ……。あんまり憎めないなぁ。

ま、さておき。
今年のクリスマスは中止。その日はＬＯＮＧＩＮＧ／ＬＯＶＥでも練習するよ。楽譜が奇跡的に手に入れたので。

## コゼット・アナスタシアの一日（前書き）

はい、読者ですらあんまり覚えていないだろうヒロイン、コゼット嬢の一日です。
個人的に私はこういった凛々しいキャラを愛しています。
はっきり言えば、このキャラは将来に主人公のヒロインとして君臨させる。いや、させなきゃならんの。

しかし…プリミルを書いててていらいらしてきた。やはり主人公と戦わせたいというのが作者の希望なんだけれど、それに至るまでが長そうだ。

## コゼット・アナスタシアの一日

「大人になっていくにつれ、何かを残して何かを捨てていくのだろう。時間は待ってはくれない。握りしめても、開いたと同時に離れていく」

by Altimicia

ある日のことだった。
その日は、クリスマス・イブを明日に控えた、その前日。
私――コゼット・アナスタシアは、あからさまに暇を持て余していた。そう、何もすることがない……ただ、時間を過ぎるのを求めていた。

（だからといって、そう易々と時間は過ぎ去るものではないのはわかっているけど……）

剣の修行をしようにも、どうしようにも力が入らない。最近怠けていたとかそういったものではなく、もっと別の倦怠感が私を包んでいたのだ。
現に、こうしてただぼんやりと空を眺めているだけだ。
どうしようにも、ない。
倦怠感を感じても仕方ないだろう。私は剣を鞘に納め、汗を拭いてその場所から立ち去る。

「あら、もしかしてあなたはコゼットさん、かしら？」

その際、私の名前を呼ばれたような気がした。気になって振り返ってみると、そこにはこの国の国王の娘であるプリミル・プリミッシェル――通称『姫』と呼ばれている女性がそこに立っていた。

「こんにちは、プリミッシェル嬢。こんなところにどうしておいでに？」

「やだ。私は一応は同級生よ。嬢、なんて付けられたらこっちが困っちゃうわ」

「じゃあ、どういう風に呼べばいいのでしょうか」

やや苛立ちと憤りを声に孕ませながら言い放ってみた。

だが、その言葉でさえも彼女はものともせず、造られたような笑顔で「そうね……」と考え始めた。そしてふと顔を上げて、

「私はプリミルでいいわ。敬語もなし。これでどう？」

『姫』は満面の笑みで言った。

「そうですか。ではそのようにします。プリミル殿」

「そんな敬語はいらないって言っているでしょ？」

「……そうか、わかった」

「フフ……凛々しい人ね」

どうも私はこの人物を好きになれない。

私の祖国であるクルドにも女王で、私とそこまで年が変わらないエリン・グィネヴィア様がいるが、その方はこの『姫』よりももっと友好的で、お淑やかだ。私も幼いころより共に遊んだことがあるので、どうも王族としての基本を女王様としてしまう。ここから見

た『姫』の印象は、ただの箱入り娘か、温室で育てられた花としてしか見られない。
私は第一印象で人を見るのは嫌いだが、相手が王族や国の関係者ならばどうしても第一印象で決める傾向があるのは知っている。悪い癖だとは思う。だが、それも結果として相手が内を見せないからだった。
だが、この『姫』はこうして易々と身をさらけ出している。どういうつもりなのだろうか、私は疑問を覚えてしまう。

「どうしたの？　そんな怪訝な顔をして……どこか痛いの？」
「……いいえ、別に」

言われて顔に出てしまっていたらしい。
私はすぐに心を入れ直すと、とりあえず彼女に何か話題でも吹っ掛けてみようかと思った。

「そういえば、どうしてここにいるのですか？　ここら辺は剣技系の人間ぐらいしか立ち入らない場所のはずですが」
「？　別に散歩していただけ。それだけのことよ。それとも、なにか私がいて不都合なことがあって？」

彼女は屈託のない卑屈な笑みを浮かべる。恐らく彼女は心から自分がいても文句がないと思っているらしい。
私には相手にしたくない人だけあって、思考が読み取れることに感謝すべきか。とりあえず私はその言葉を否定しておく。

「あの、どうでもいいことなんだけれど……」

すると、彼女は途端に切り出した。

「どこかこの学園でデートスポットとか知らない？　最近来たばかりだから、あんまりここの構造は知らなくて」
「それは他の誰かに聞いたらどうです？　そもそもどうして私に……」
「あら、知らないの」
「知りませんよ、そんなもの。私のように騎士を目指している者にとって全く無縁の場所ですから」

第一私はこの学園で騎士を目指すために来た。恋だの愛だの、そんなものをする余裕なんて、今の私にはない。私はそれを知っているのだ。好きな人が突然消えてしまう体験を、この体で体験している。だから私はそれからもっと修行に励むようになっていた。
だが、この女はどうだろう。甘やかされて育ってきたような匂いが鼻にくる。そして頭にくる。
ここは体を鍛える場所であり、同時に精神力を鍛える場所だ。そしてここに恋愛という言葉はない。
現に、ジャン・ルイという男は好色でありながら一切異性に手を付けていないという紳士だ（注：男の娘に手を出そうとしている噂がある）。もちろん彼だけじゃない。私の剣技系のクラスの男子は一人を除く、すべての男子が童貞である。もちろん私を襲おうとしたことは皆無だ。

「そう、残念」

彼女は長い時間の間を置いてそういった。私を哀れんでいるのか、それとも心の中で呪いの言葉を吐いているのか、それはわからない。
彼女は『じゃあ私、これから彼のところへ行かなくちゃ』と言って後ろを向いて、歩き出した。
私は、そんな彼女を哀れに思った。人に造られた人格を持ち、人から教えられた知識を持ち、そして王位を持つ彼女を。彼女はその

殻に閉じこめられて生きているに違いない。……いや、閉じこめられていること自体を知らないのだ。
それが彼女に与えられたポジション、操作される人生。明確な生きる目的を持たない人形。それが彼女という存在。

「プリミル」

私はあえて、彼女が目覚(AWAKEN)めることを信じて言葉を投げかけてみた。

「あなたの敵は、あなたのすぐ隣にいる。それを忘れないでください」

彼女は振り向かなかった。聞こえていて無視したのか、それとも本当に聞こえなかったのか。
それは、彼女こそが知り得る事柄であった。

☆

「クリスマス……か。空が暗くなってきた」

私は空を見上げてみる。そこには黒い雲が浮かんでいて今にも降り出しそうな雰囲気を醸し出している。
憂鬱な気分になるものだ。

「何か、変なことでも起こらなければいいけど……」

ただ一人、私は呟いた。

to be continued...

## コゼット・アナスタシアの一日（後書き）

次は本編を再開すべきか、それともジャンとノアの一日を書くべきか。気が進む方を書こう。

さて、クリスマスは一人でＬＯＮＧＩＮＧ／ＬＯＶＥを練習するお。結構弾けた

## コゼットと『姫騎士団』

どうにもならないのかもしれない。
それでも、もう、どうしようもないって思うまで努力してみてくれ。

ｂｙ　アーヴァイン・キニアス

☆

私は『姫』と分かれて、自分のクラスに戻った。
時刻にして、だいたい四時だろうか。今日は休日とあってか学校内の人だかりは思った以上に少ない。今日は聖日なのだ、ほとんどの人間は自分の仕事を休んで、自らの家族の時間を満喫していることだろう。
だが、どうやら私達のクラスの男子はそれに該当しないようだった。
私の目の前に、どういうわけか女装をした――というより女装させられたノアが、男子に取り囲まれているのだった。

「……何だろう、あれは」

一言。そう、その一言に究極的に尽きるのだ。
私の脳内では、これから何がどう起こるのか全く予測できはしない。だが、この状況からキング・クリムゾンするには、ノアは何かしらの行為を受けるだろう。とりあえず真実を知るために彼らに言葉を投げかけてみた。

「なにをしているのだ？　それにノア、なぜ貴殿はそのような女装を……」
「あ、コゼットさんだ。こんにちは」

しかし、予想していたより意外と落ち着いた言葉が返ってきた。私はそれにとりあえずの安堵感を覚える。
だが、その彼の女装に慣れてしまっている自分も心のどこかにいることに少しだけ焦燥感を感じたのは秘密だ。

「で、もう一度聞くが……なぜ貴殿はそのような格好をしている？　似合ってはいるが、流石に目覚めたとかそういうものではないのだろう？」
「ははは……そんなこと、世紀末でも来ない限りは目覚めないよ。なんたって僕は『男』だからね」
『『な、なんだってエエェェェ――――ッ！』』

途端に男子の大合唱が私の耳を劈く。

「ノ、ノアちゃん……そんな幻想をまだ抱いていたのかい……？」
「君はレッキとした女の子だ。男だと認められるはずがないじゃないか」
「そうだそうだ！　世紀末が来ようと何が来ようと君は女の子だ！　そして我々の光でもあり全てであるんだぞ！」
「え……、僕は、『男』だよ？　それはいつもの冗談だよね？　目が本気と書いてマジになっているんだけれど……」
『『マジですッ！』』

と、全員が頷く。
ある意味、ここまで行くともはや宗教団体そのものだ。教祖がノアで、それを支えて崇めるのがこの男子達。恐ろしい統率力だと、

我ながら思う。
　でも、確かにノアは女の子らしくてとても可愛らしいし、もっと言えばそこらへんの女性より可愛いのは確かだ。そして彼が男である事実が、このギャップを生み出し、さらにその愛らしさを増しているのだろう。これがＢＬにとって見たらどういうことになるのだろう。
　その時、彼らの一人が私のところへ来て私に、

「どうでしょうか、姉御」
「姉御！？　そ、それはどういう……」
「我々は、あなたに敬意を評してそういう呼び方になってしまったのです。特に気にすることはありませんよ」
「えっと？　ああ、まぁそういうなら……構わないが」
「では姉御、我々の天使をどう感じますでしょうか。同性ならば分かることがあるはずです」
『ちょ、レク君！　天使云々はともかく同性ってどういうこと！？　あ、無視しないで！　説明して！』

　と言われても女の子じゃないですか～、とそのレクと呼ばれた青年は難儀に答える。ノアは頭を抱えながら『僕は男だ』などといい始め、それに驚いた男子も慰めようと、こういう風に声をかけている。

「な、泣くなって……ほら、君は俺達の天使なんだからさ。ほら」
「そうだぜ！　ノアちゃんという天使の居ない世界なんて俺達の世界じゃねえ！」
「天使ちゃんマジ天使」
「ノアちゃんマジ天使」
「今頃言うのも何なんだけど……好きだ、付き合ってくれ」
「ちょい待て。貴様……俺のノアちゃんに『付き合って』などと言

ったのか？」
「ああそうだぜ。なんたって、俺は男の娘をも喰える人間なんだからな。しかも好きなものは好きなんだ……そう、俺はノアちゃんが好きだ。愛しているといってもいい！」
「何をッ！　俺が……この俺がこのクリスマス直前にノアちゃんに告白するんだぜ！　貴様が付き合っていい人じゃあねーんだよこのウスノロがッ！」
「ほーう？　貴様にその決定権があるとでも思っているのか？　その思いこそが人間を堕落へ導くんだぜ？」
「だが、堕落してしまったのならそれ以上墜ちることはないんだぜ？　なんたって、墜ちるところまで墜ちちまったのなら、そこから這い上がることしかできねーんだからな。だから俺は例えノアちゃんが『男』であっても愛するッ！　それが俺の存在意義、存在価値だからだッ！」

と、その男が『ＵＲＹＹＹＹＹ』と声を張り上げ、ノアちゃんに襲い掛かろうとする。
だが、そうはさせまいと周囲の男子は一斉に声を張り上げ、そして抜刀する。

「させるかッ！」

一人の男が前へ出て、その男の首筋に一寸の微動も無く寸止めし、停止させる。
その男は……『ジャン・ルイ』と呼ばれた変態という名の紳士だった。
「先ほどまでのノアちゃんに対する敬愛の言葉、確かに我々は心を振るわせた。だが、君は間違っているぞ」
「な……ジャンッ！？」

「俺達は、もともとノアちゃんの貞操を守るために存在する者達だ。そう、全ては敬愛するノアちゃんの為に。だがなァ……『守る者』が『守られる者』に危害を加えちゃいけない。それは我々の規範である。いくら愛して止まないからと言って……ドミネ・クオ・ヴァディス！　お前は……磔刑だアァァァァァ――――――ッ！」

瞬間、ジャンはその右の手を握り、その拳を思いっきり男の腹に打ち込む。

さらにそこ拳は男の顔へ吸い込まれる。そして更に、更に、更に、更に、更に……打ち止めのない、容赦のない鉄拳制裁を男は反抗することなく受け続けている。

「お、おい……ジャン！　そこまでにしておいたらどうなんだ！」

私は思わずそう叫ばずにはいられなかった。だが、彼がその鋭い拳戟をやめる様子は無かった。しかもジャンは男の服の襟を掴んでいるので彼の連続攻撃を可能にしていて、又そのせいで口を切ったのか、既に男の口から血が滲み出ていた。

私は流石にやり過ぎだ、との思いから彼のところまで歩み、その手を掴んで、訊いた。

「いくら大切な者の為とはいえ、流石にやりすぎじゃあありませんか！　そういう行為は、戦士としての規範が問われる行為ですよ！！」

だが、彼はその言葉を聞いて尚こちらを振り向かず、

「いいえ、姉御。これは正式な懲罰の行為であってあなたの言う戦士の規範に反しているつもりはないですよ」

「？……それはどういうことか」

そこで、彼は襟から手を外し、こちらを振り向く。

「私達、『姫騎士団』はちと特殊な人間の集まりでしてね。それ故、我々の間にはとある盟約が取り交わされているのです」

「盟約？　なんですか、それは……」

「そう……簡単に説明するなら、私達はノアちゃんのことに関しては熱くなりやすい傾向にあるのですよ。あなたも見たでしょう？先ほどの『狂気』を」

『狂気』

そうだ、思い出してみると、さっきから周囲のノアに対する目が非常に性的なものを含んでいる気がする。しかも先ほどの言動だ。

『ノアちゃんマジ天使』

この言葉辺りから変化してきている気がする。それはまさに狂気と言っても過言はないほどの熱気と性的興奮を孕んでいた。

ジャンは頷き、続ける。

「だからこその盟約。曰く――暴走した暁には、どんな手を使ってでもその暴走を鎮圧すべし。特に『守られる者』の第一筆頭者であるノアちゃんに危害及び性的行為が発生する可能性がある場合は武力を使用することも考慮せよ――これが、私達の盟約の第二十一箇条の五つ目に記されている事です」

「……」

「だから私達は止める必要があった。いや、我々はノアちゃんの貞操を守らなくてはならないのです。そう、『既成事実』からも」

『既成事実』からも――この言葉には、非常に大きな言葉が含まれていることを天の声から説明せねばなるまい。

この世界では、実は非常に貞操観念が強く、結婚するまで性行為

は行うことはタブー視されている。それ故、この世界で『既成事実』という言葉は非常に重苦しい意味を持つ。
元の世界でいう『既成事実』は妊娠させてしまって結婚せざるを得ない状況に陥る事柄を女性側から見た言葉なのだが、この世界で『既成事実』というのは婚前行為をしてしまった時点でアウト。つまり結婚を約束されたことになる。
簡単にまとめていうなら、セックスしちゃったら結婚の約束になっちゃうというのだ。だからこの世界では処女が非常に多いし童貞も非常に多い。むしろ女性が男性をレイプする事件が起きるのだ。
つまり、セックスしてしまった矢島はもう既に魔の手に落ちてしまっているし、それは『姫』による計画的犯行だったといえよう――

という謎のモノローグを天の声は言い、去っていた。
ともかく。

「……つまり、これは規範に則った罰、という解釈でいいのか？」
「ええ、構いませんよ姉御」

と、ジャンは言った。
それから私は殴られた男の方を見てみると、その顔は既に静観しきっており、冷静な眼差しを称えている。

「……そうか。誤解して悪かった。すまない」
「いえいえ、説明していなかった私達が悪いんですよ。ですからそうやって我々に頭を下げないでくださいよ、姉御」

私は頭を上げ、ノアを守る騎士たちを見た。その顔つきはどれもさまざまな雑念があったが、それでもノアに対する愛情が大きいのが分かった。
私は本心では羨ましかったのかもしれない。本来、ノアの置かれ

ている境遇は女の子が夢見るお姫様の地位だ。騎士から守られ、優雅に暮らす。それは松下に言わせると『シンデレラ・コンプレックスか？』と言って来そうだが、それでもやはり羨ましいものだった。
だけれど、やはりそれぞれの置かれた環境は違い、その夢は叶わないものは居る。私もその一人なのかも知れない。

「フフ……貴方達は『本物』の『姫』の騎士団なのかもしれないな」

と言ったとき、ジャンは、

「当たり前ですよ。ノアちゃんはあんな甘ったれた『姫』よりはよっぽど『お姫様』らしいですさ」

そう言って笑った。その笑顔はまさに『紳士』そのものであった。

☆

「あれ？　僕の『騎士団』なんてそんなものあっただなんて聞いてないんだけれど……というか僕、男なんですけれど……？」

その言葉は、例によって誰も聞いてはくれず、ただただ虚空に消えていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 喫茶店にて――トリシア

さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。

それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。

この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。

ここに、知恵が必要である。思慮ある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。

ｂｙ　ヨハネの黙示録　第十三章

「それはどういうことだ？　ベラトリックス」

とても重苦しい、とは思えないような口調で、トリシア・ガーベラは疑問を口にした。

松下たちから程よく離れた小さな町の喫茶店で、トリシアとベラトリックスは席を同じくして相席で座って居た。ベラトリックスの服装は、松下たちと会ったときの商人の服装ではなく、自らの礼装――自分の部隊の戦闘服を着ていた。だが、その服装は一般人が着

ているものとなんら代わり映えはしない。
　トリシアにとってしてみれば、その彼女の服装はいまいち好きではないものだったのが。

「どうしたもこうしたも、そろそろ時間がなくなってきているって話よ。考えてもごらん。この頃の国の情勢が劣悪になっていっている。そろそろ私たちは任務を遂行しなくてはならないの」
「しかし……任務を遂行するっていったって、情報がないじゃないか。そこはどうするんだ？」
「だからこそ、私たちは彼らに接触した」

　そこでベラトリックスはひとまず話を止め、コーヒーを一気に喉へ押し込む。

「恐らく、彼らも私たちが狙っているものは同じだと思うわ。通称『６６６の悪魔』」

　ベラトリックスの笑い顔に、やや苦い表所が混じる。
『６６６の悪魔』。全く実態の掴めないものとして語られるそれは、果たしてどういった物で、どういった結果をもたらすのか、それは彼らの国『リンドバーグ』の伝説として語られる。
　曰く、大量殺戮魔法。
　曰く、悪魔
　曰く、神。
　トリシアはそれらはただの偶像、もしくはただのおとぎ話として認識していた。物心ついたころから言われていたことだし、なによりその伝説は様々なパターンと様々な脚色によってほとんど原型は留めていないものだったからだ。
「で、その『６６６の悪魔』を、彼らはどういう風に解釈していたんだ？　国は違っても解釈は同じというわけじゃあるまいしさ」

「……彼らは、究極の力だといって、それは魔法だって思っていたらしいわね。実際はどういった物かは知らないらしいけど」
「そうなのか？　嘘はついているというのは？」
「どうかしらね。エロ本売っている最中に聞いたから……」
「ああ……エロ本か」

ふと、あの悪夢が脳裏を過ぎる。その途端、トリシアは自分の顔に血が集まったことを感じた。
それに気づいたのか、ベラトリックスはニヤニヤと笑いながら、

「おやおや？　トリシアちゃん、顔が赤くなっているけど？」
「な……違うッ！　これはただの……」
「えっと？　確かあの時トリシアは顔を赤くしながらも息づかいを荒くして」
「だから違う！　断じて感じてなんかいないんだッ！」

と、必死に弁解するトリシア。
だが、それでも悪趣味な表情を浮かべてトリシアを挑発するベラトリックスの手は休みそうにないらしい。確かに自分の中ではどう思っていたのかははっきり覚えているが、改めてそれを指摘されてはトリシアは顔を赤くするぐらいしか抵抗が出来なかった。
そのやり取りをいくらか続けて、トリシアはふと、話題を変えようと思ったことを口に出そうと思った。

「ところで、彼女はどうしているんだ？」
「彼女？」
「私達の隊長。あのいけ好かないビッチ女だよ」

ベラトリックスは「ああ、あの女ね」と言って、二杯目のコーヒーを口に運ぶ。

「あの女がどうしたの？」
少し苦味が後を引いているのか、ベラトリックスは表情を堅くしながら、疑問にならない疑問を口にする。
トリシアはああ、と言って、「そのことでね、僕達の任務に障害が生じるかもしれない」と答える。
「実は、あのクソビッチ女が、軍を率いてこの辺りに潜伏しているらしい」
「なにかする気？」
「分からないけど……何か、確実に行動を起こすだろうね。あの男の行き先が『ミューゼスの海』なら、彼を偵察している私達に障害が出るかもしれない」
「……『ミューゼスの海』、か。確かその近辺の『ミューゼス国』は『クルド国』と同盟を結んでいるはずでしょ？　確か、過去『ミューゼス国』からの軍隊を雇ったという話は聞いたことがあるけど……関係が？」
「分からない」
トリシアはそう言って一息置き、言葉を続ける。
「だけれど、あの女が軍を率いるとなれば……」
「多分、『ミューゼスの港町』の人間は皆殺し……？」
「ありえる話ではある。彼女は過去に数回やったことがあるしな。今回だけ、ってことはないだろう。元々僕達『レイヴン』の分裂は彼女がやったことから始まったしね」
「そうね……前任の隊長を殺して成り上がった奴だったからね、増長したのかも。情報員なのに、今では軍を率いてる」

彼女は思い出していた。あれは何時のころだったか。
あの日、隊長を惨殺して私達の上官となったのは。アレほどまでにおかしい奴に、隊長が負けるはずが無いと思っていたのに。
そう思い出して、意気消沈する。だが、ベラトリックスはその様子を他人には表さない。それが、前任の隊長に教わった一つ目の情報員の掟だから。
萎えた気持ちを無理やり震え立たせようと、店員に「酒ッ！」と注文する。

「酒ッ！　飲まずには居られないッ！」

そういいながらジョッキに注がれて出された酒――まぁビールだが――を一気飲みする。
コーヒーとはまた違った苦さが舌を包み、また炭酸が刺激する。ベラトリックスに取っては、これが一番好きなひと時であった。

☆

「サイサリス『隊長』か。また何か仕出かすんだろうな……って、何時の間にベラトリックス！　どうして酒を飲んでいるんだアァァァァ――――ッ！　酒はともかく理由をいえエェェ――――ッ！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 喫茶店にて――トリシア（後書き）

ま～こんな２５００文字にこれだけのキーワードをぶち込めたな、と。そう思っている私です。
ふと見ただけでは何気ない話かもしれないですが、「６６６」だったり、ヨハネの黙示録関係だったり、いろいろっす。
というか伏線は「６６６」だけです。あとはサイサリスだけですわ。
うん。

正直、一月は疲れていました。本当に。小説を書く暇なんてない程度に。

ああ、ちなみに『レイヴン』のキャラは三人ともガンダムＧＰシリーズです。
まぁベラトリックス・フルバーニアンの場合はゼフィランサスが正しいのですがね。

あとは……ステイメンとデンドロか。無理です。

## 全ての始まり

待ってても起こらないんだろ、奇跡って。
だから俺たちで起こそうぜ、奇跡。

ｂｙ　映画　遠くの空に消えた

今までに自分がしでかしてきた悪行は、その全てを思い出すことは容易ではない。
そりゃそうだろう。人間というものは、自分の都合の悪いことはすぐに忘れて逃げてしまう生き物だから。それはいつの時代でも、どんな世界でも変わらない不変の法則だ。
俺は、そういったことを考えながら、すっかり冬を感じさせるこの空を見上げた。晴れているというにはあまりにも雲が多くて、空気は冷たい剣を練成し、俺の体を突き刺して来さえする。
雪は降らないらしかった。この世界に天気予報があるわけではない。ただの自分の勘だ。

「兄さん！」

ふと、自分の名前が呼ばれたのに気付く。こんな寒い世界でさえ心を温めてくれるような、透き通るような、赤外線で熱を伴っているかのような……そんな声が、空気の剣の世界に響く。
松下はその声に振り向き、何処となく冷めた目つきでアニュスに目線を動かす。

「……って、なんなんですか。その目」
「いや、ただ単に寒かったからな。とりあえず目線も冷たい目線に変更してみただけだ。……気に入らなかったか？」

しかしアニュスはむむぅ……と唸り始め、

「気に入らないっていうより……まぁ、とりあえず聞きますけど、その冷めた目線のコンセプトはなんですか？」

「コンセプト？……ああ、それは『結婚してから数十年経って、もはや離婚することも出来ず、ただ食事を用意する妻と金を稼いでくるだけの関係になってしまった夫婦の、主に妻側の夫に対する目線』だったな。己ながらこのコンセプトには痺れて憧れる」

「あー……そう、なんですか。私にとってはガウェインさんが養豚場のブタを見下ろして哀れんでいるかのような目に見えましたけれども……」

「そりゃ違いないな」

アニュスは内心、どうしてこの人はクールに見えるのにこんな性格が破綻しているのだろう……と呟いた。

他人から見た自分のことなど微塵すら気にしないのが松下の特性であった為にアニュスが思っていることなど知りもしない――否、知ろうともしないのが悲しいところではあるといえるだろう。

「で、どうしたんだ。俺になにか用事か？」

俺はただ楽観しながら口を開いた。

アニュスは『そうでした』と小さく呟いて、言った。

「今晩、ミューゼスの港町に到着するそうです。ですから早めに移動の準備をしておいてください、とのガウェインさんからの連絡です」

「なんだ……ホテルにでも泊まるっていうのか？　今月に入って何度目だよ……」

女の思考はどうなっているのだろうといつも思う。
ついこの間も近くの村に寄って泊まったりしていたのだ。その理由というのがただ単にお風呂に入りたい、というのだったから驚いた。
曰く、いつも綺麗でいたいとか、風呂には一週間も入っていないから、とかそういうのだった。
だったら、水の魔法を使って水を作り、火の魔法とかでそれを沸かせればいいではないか。それが無理ならビームサーベルで温泉を作った陸戦型ガンダムの真似事でもやれば良いだろうが……いや、これは流石に言うのは止めておいたのだが。
だが、その時はきつく言っておいたほうが良かったのかも知れなかった。

「やれやれ……これでこの女ハーレムから開放されるのには素直に喜ぶべきだな。いや、本当に地獄だったよ」
「ハハハ……全く冗談になってませんよ」
「冗談じゃあないんだがね」
「マジですか」
「そうだったろう？　この一ヶ月の生活を見ていてさ……」

もうこんな生活は御免だ、と思う。
アニュスはそんな松下を見ていて、物凄く不憫に思った。思い返せば、彼の生活は酷く悲惨なものだったからだ。

「まぁ、同情しておきます」
「そうしてくれ」
「じゃ、早めに起きてくださいますか？　手伝ってください」
「了解」

実は先ほどまで寝ていたが、アニュスはそれを注意したのだろう。俺は首び違和感を感じながらも起き上がる。
実際には腰も痛かったりする。
アニュスはそれを見てよし、と呟き、向こうへ歩いていった。そして俺はそれを見計らって、
「さて、今日は……二度寝でも……」
と、背伸びをして。
「ダメですよ！」
「んなッ！？　何時の間にアニュスッ！？」
いつの間にか戻ってきていたアニュスが、呆れた顔でこちらを睨んでいた……。本当何時戻ってきたんだろう。
俺は仕方なく……アニュスの後をついて行った。

☆

夜。
馬車が止まる。
アニュスの荷物の手伝いを終わり、その荷物を持って馬車から降りる。
すると、その先には、
「あら、準備したの？　豚」
「酷い出会い頭の挨拶だな、ガウェイン……歪みねぇな」

晴れ晴れとした、この夜の冬空を見上げながら、その寒い中で目の前にいたガウェインに口を出した。
流石に『豚』は酷いだろうが、と思いつつも、特に感慨深くも思わなかった。
ガウェインは冷たい空気を一息吸って、

「寒いわね」

それから、手に息を吐きかけた。
確かに気温は非常に低い。これが異世界の寒さかと思うぐらいだった。もともと俺は九州地方生まれであり、冬でもそこまで（それでも寒いが）はなかった。
だが、これが現実だろう。環境の変化には素早く適応するのが日本人の特徴、それをフルに使ってこの環境に慣れてゆくしかない。

「でも、意外とこういう風景を見ていると感慨深くなるものよね。あんたはどう思う？」

と、ガウェインは問う。
俺は持っている荷物を一度地面に置いて、

「感慨深く思う以前に、さっさと暖かい場所に行きたい」
「……風景を美しく見る心を持っていないのかしら」
「それは時と場合によるだろう？　そりゃ暖かい場所で風景を眺めるなら何か思うこともあるだろーが、生憎俺の手は今にも死にそうなんでな」
「じゃ、霜焼になっていなさいな」

などと言って、ニヤリと笑う。
俺はいつも『彼女はドSではないか』という疑問を抱いていたが、

それはほぼ今ので間違いないだろう。いや――そんなこと、当の昔に知っていたことだ。
そこで俺は「テメーもなってろ」とか何とか言おうと思ったが、止めた。どうせ何かしらの罵倒を受けるからな。

「これから、歩いて町に入るわ」
「馬車は？」
「部下が馬車小屋とか何とかに入れる手筈」

と、言って彼女はこの暗い夜空を仰いだ。その光景は、なんというか……夜の女神という感じだった。
だが俺はそんな光景に全く感傷せず、気にしようとも思わない。

「兄さん……」

すると、俺の傍にはリュックを背負ったアニュスが何時の間にかそこに顕現していて、俺を驚かす。もちろん、声には出さない。

「……トルノデス」
「は？」
「あ、いいえ。気になさらず～」
「？」

最近のアニュスの行動が分からなくなってきたが……。
ともあれ、我々は無事にミューゼス港にたどり着くことが出来たのである。

☆

何処かで、俺は間違ったのだろう。
人生は、まだまだ続いてゆくというのに……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 全ての始まり（後書き）

はい、これから『謳われない英雄』の物語は本格的に進んでいきます。
この章では、そう……ついに！　主人公がチート化するのです。本当はもっと後にしたかったのですけれど……。

でも、私は以前、『力を得るには理由が必要』といいました。
だから、私は書くんです。自己満足ですけれどね。はっきり言うと、私は『転生―神から力を貰う―異世界へ―暴れるｏｒ原作崩壊』とかいうパターンはあまり好きじゃあないんですよ。
だって、在り来たりで話が詰まるんです。確実に。
まぁしかし。この作品の主人公もそのパターンを組んでますし、一概には言えないのですが。
でも、ま。ハーレムだけは私は書きません。現実じゃありえませんからね。

では、今年も皆様が良い年でありますように。

正直、私はこの章を書きたくは無かったのですがね。

**夜明け前より……純白な**

苦悩の美徳を教える僧侶に耳を傾けるのをやめようではないか。
なぜなら、快楽こそ善だからである。

ｂｙ　アナトール・フランス

俺は、今までデートというものをしたことがない。
何を今更、と思われるかもしれないが、これは事実であり、しかもそれを改善しようとも思わない。
実際、俺は毎年十二月の最後あたりにある『クリスマス』という行事は祝った覚えがない。というより、俺は何時もいつも『クリスマス』を中止してきた。
何故？　簡単だ。俺はモテないのだ。
先に断っておくが、俺は女の気を引く気はない。もっと言うなら、俺は女という種族に絶望すら感じているのだ。それなのにモテたい、という感情を持つこと自体無理だろう？
この季節になれば、町には恋人達で溢れかえる。店はその恋人達をターゲットに、さまざまな商戦を展開する。　正直に言おう。目障りだと。
確かに、『クリスマス』は祝うべき行事であるし、そういう風なことをするのは構わない。だが、本来の意味を思い返して欲しいのだ。
そういうことを思うと、やっぱり恋人がいちゃいちゃするのは間違っていると思う。
まぁ、それは昔の話ではあるのだがね……全く、参ったよ。

☆

「朝……ねぇ」
「そうですね……」

時は夜は明け、それから少し仮眠を取って約二時間後。朝の鬱陶しい太陽が目に刺激をもたらす。
朝の弱い光が窓越しに俺を照りつけて、夢から強制的に覚まさせる。

「……ん？」

ふと、自分の体よりも暖かい物体がベッドに潜り込んでいる気がするが……気のせいだろうか？
俺はとりあえず自分のベッドの中を確認する。すると、

「……なんでいるんだよ」
「どうも、みんなのアイドルマスター、アニュス・デイちゃんです！」

そこに、白い髪を持った女の子がいた。
俺のベッドの中に潜り込んで来ていて、俺のの腰に抱きついている形だ。言葉にもならん。
まぁ子供なので、別にこのベッドから引き剥がす真似なんてしない。第一この寒さでそれは出来ないことだ。どれ、頭でも撫でてやろうか。

「むにゅ……気持ちいいです」

彼女は目を瞑って気持ちよさそうに喘いだ。俺としても彼女の銀髪のさわり心地がいいので、更に続ける。
そういえば、彼女と出会ってからどれぐらいが経つんだろう。一人旅から二人旅に変わったあの日から。俺が旅立ってもういくらになるんだろう。
朝の眩しい光と冷たい空気を肌に感じ、俺は上半身を起こす。

「おら、アニュス。そろそろいい加減にしろって」

布団を強制的に剥いで、アニュスをこの空気にさらす。
すると、それにアニュスは驚いて、次に刺すような空気の冷たさを感じて身震いを起こした。多分寒いのだろうが、そうすると俺の体も冷たい空気の元にさらけ出されて寒く感じた。
アニュスは抗議するように俺を睨みつけると、

「な、何するんですか！　寒いんですよっ！」
「知らんよ。俺だって滅茶苦茶寒いんだ、我慢しろ」
「嫌ですっ！」
「断るッ！」

するとアニュスは頬を『むにゅぅ～』と膨らませて、

「なんなら、こうするしかないようですねっ！」

いきなり俺の上半身に抱きつくようにダイビングを掛けてきたのだ。

「なッ！？」
「とりゃあああ！」

ふがー、と言いつつ飛び掛ってきた彼女は、それをされることを予測できていなくて動かなかった俺の胸に飛び込んできた。
ドスッ……。
布団に思いっきり体を打ちつけ、その衝撃をベッドは吸収する。そのとき、思いっきりベッドは揺れ、ぐわんぐわん、と俺とアニュスを揺らす。

「あ――っと……」

衝撃はベッドに吸収されたので体は痛くはないが、なんというか……酷くからかわれている感じがする。
ふとアニュスの顔を見てみる。

「ふにゅにゅ～」

してやったり、というような顔を浮かべて、俺の胸に顔を埋めている。しかし、その顔はやはり子供らしくて可愛い。いや、それは否――尋常でないほどの可愛さだ。例えるものがない程、に。
俺はその幸せで身悶えているのか分からないが嬉しそうに俺の胸に張り付いているアニュスの髪を撫でた。

「幸せそうだな、アニュス。なにかあったのか？」
「あるんですよ、今日は」

と、アニュスが顔を上げて応答する。

「今日がなんの日か、知ってますか？　兄さん」
「……いや、知らんな。知っていても、俺には関係なさそうだが……」
「今日は、クリスマス・イブですよっ！」

その言葉を聴いて、俺は自らの耳を疑った。

「クリスマス・イブだって？　何故？」

「え？　どうしたんですか？」

「アニュス、それは誰かの誕生祭……なのか？　それとも普通の祭日？」

その俺の言葉に彼女は首を傾げて「誕生祭ですよ。それが？」と平然とした顔付きで言った。

どういうことなのだろう。『クリスマス・イブ』といえば『イエス・キリスト』が生まれた日の前日の行事で、元の世界の行事のはずだ。どうしてこの世界にクリスマス・イブがあるのだろうか。

俺はアニュスを引き剥がしながら……引き剥がしにくいが……そのことについて考えていた。

彼女はむりやり引き剥がされても尚可愛い顔で『むにゅ、酷い人ですっ』と言って頬を膨らませた。

「なぁ、アニュス。どうでもいいが、クリスマス・イブってのは誰かの誕生祭だと言ったな……誰が生まれたんだ？　くだらない質問だが、答えてくれないか」

「？……『キリスト』さんですけど？　どうしたんですか？」

「『キリスト』……？　救世主？」

奇妙だった。『キリスト』という『油を注がれた者』の名を持つものが、この世界に居ようとは思わなかったのだ。彼がこの世界にいるというのならば……いや、既に死んでいるのか。

俺はそういぶかしみながら、その概略を考え始める。

――要は、この世界に『キリスト』なる人物が居て、今日はその降誕日前日か、またはそれに関係する何かの祭日か。

「つまり……俺にとっては厄日なわけだな」

そして再び眠りにつこうと、アニュスを抱きかかえて傍に置き、布団を被ろうとした。

「ああ、待ってくださいです！」

布団を持つ手を彼女は掴んで止める。

どうしたのだろう。なんか厄介なことを考えてはいないだろうかと、ふとそんなことが俺の頭を過ぎる。

彼女はやや顔を赤く染めて恥ずかしそうに身をよじりながら、

「兄さん……その、なんというか……」

「？　なんだ」

「わ、私と……むにゅう…ここは覚悟を決めるですぅ」

不意に、彼女がしっかりと俺の目を見る。

そして数秒後、その口が開かれた。

「そ、その……私と、『でぇと』してくださいっ！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

# 宝であり、娘

メリークリスマス！
メリークリスマス！　ミスター・ローレンス
ｂｙ　戦場のメリークリスマス

☆

確かに、町はクリスマス一色だった。
だが、クリスマスとは言っても、いつも見るような緑や赤のような色は俺の目には入っては来ない。目に付くのは、それを楽しんでいるかのようにイチャイチャしながら歩く二人組のカップルだ。
別に鬱陶しいとか、嫉ましいとか、そういう感情に支配されてはいないのだが、それでも何故だかイライラするのは何故だろうか。
――まぁ、そういうものか。俺は無理やりに納得させる。
彼らが、今、自分が何をしているのかなどということは承知のはずだ。俺はそれに対して何かしらの感情を持ち合わせることも許されてはいないし、持つ気にもなれない――はずだが、今はそれを考える余裕はなさそうだった。

「お兄さんっ！」

相変わらずの可愛さを振りまきながら、彼女――アニュス・デイはここぞ、とばかりに俺に甘えてきている。ああ、可愛いとは思う。それはもう飛び切りに、だ。
ロリコンとかペドフィリアとか言われたら、今の俺では否定がし

辛い。いや……否定される前に「ああ、言わなくても分かってる」とか言われるのだろうが……。
と、ややテンションを下げ調子の俺に疑問を持ったのだろうかどうかは知らないが、

「お兄さんっ！」
「……」
「兄さんっ！」
「……あー」
「兄貴っ！」

と、矢継ぎ早に俺のことを呼びつづけてきたのだ。
俺にとっては天使のようで悪魔な娘である彼女の声は、それこそ天使そのものであるのだが、流石にその裏にある意図が読みづらく……

「……って、お兄さんっ！　私の発言の中で何かしらの意図を感じさせる台詞がありましたか！」
「なッ！　俺の心を読んだとでもいうのか！？」
「いいえ、ただ単にモノローグを読んでいただけです。心なんか読めるわけないじゃないですか」

と、彼女は平然とした口調で言った。
続けて、

「更に言えば、私は今までの私に対する性的欲求を感じさせる文章を多数読んでいます。よもや、お兄さんが私なんかに欲情だなんて……」
「……なんてこった」
「えっと……『俺はアニュスが好きだ』『アニュスを犯してやりた

い』ｅｔｃｅｔｃ．．．変態さんですねッ！」
「ちょっと待て、俺はそんなことを考えた覚えはないが……」
「そうでしたっけ？」
「そうだ。捏造するんじゃないぞ」

と、俺はこの寒い空気に耐えながら彼女の頭をゆっくりと撫でてみた。
すると、やはり思ったとおりに彼女は目を瞑り、『うにゅう……』というような嬉しそうな声を出し始めた。
猫に似ている、と言えばそうなのだろう。事実、彼女は猫に似ていて、気持ちいいときには何かしらの声を出す。――多分不可抗力なんだろうが、それ抜きでも猫らしい少女だった。……猫だろうが犬だろうが、どちらでも構わないのだが。
しかし、さきほどから思っている疑問は唯一つだけ。
なぜ彼女はいきなり『デート』をするなどといい始めたのだろうか。

「なぁ、聞くが――なんでお前はいきなり『でぇと』をしたいなんていい始めたんだ？」

すると、彼女はさも疑問に思ったような顔をして、

「『でぇと』をするのに、理由なんて必要なんですか？」
「……必要はないだろうが」
「だったらいいじゃないですか。どうせお兄さんは『でぇと』という恋愛チックな物を体験したこともないんでしょう？」
「意外に心をブレイクしてくる娘だな、あんた」
「そりゃ、お兄さんの妹（暫定）だからですよ」
「なんで暫定が付くんだッ！　むしろ俺はあんたを娘だと思っていたんだが？」

「娘？　そりゃまたおかしいことを仰いますね。あなたが一人の女性をレイプして私を孕ませたとしても、そのときのあなたは一体何歳だというんですか？」
「……おい、俺はまだ童貞だし、レイプもしたことはない。捏造すんなよ。ただ単に例えにしか過ぎんぞ。まったく……」
「で、これからどうするんですか？　ラブホテルにでも行きますか？　行っちゃいますか？」
「断固拒否する。幼女を抱いた所で、その時点で児ポに引っかかる。……ア○ネスが飛んでくるぞ」
「そりゃまた困りますね。私のようなロリ属性は意外と読者受けがいいというのに……でも、あえて言います！　来いよ石○ァ！　アグ○ス！」

それから彼女はまたにゃはは、と笑った。
ここまで裏がなさそうで、実は薄暗い部分を持つロリはいないであろう。まぁそれが彼女の見所というか特徴であるので、特に口を挟むことはしないが。
だが、現実的に考えて彼女のような性格の人を相手するのにはとても疲れる。実際、いまの俺がそうであるように。

「……そうか」

俺はなんだか心が洗われたような感覚を、いつの間にか彼女に対して覚えてしまっていた。これは恋とかそういった感情ではないのは理解できるのだが……いまいちその感情の正体が掴めないのだった。

「あ、お兄さんっ！」

アニュスが何かを見つけたような声を出し、それから彼女の目に

映るモノを彼女は指を指した。
それは、なんの変哲もないような、ただの写真屋だった。
何故それを指差したのか、俺には到底計りえない事柄だったが、彼女は確かにそれを指差している。

「写真屋がどうかしたか？」
「あの……ぶしつけで何なんですが、お願いがあるんですっ！」
「お願い？……いいだろう、言ってみろ。クリスマス・プレゼントだ、我侭ぐらいは許容してやろう」
「じゃ……じゃあ、私と『写真』を撮ってくださいませんか？」

☆

「オイオイ……お兄ちゃんよォ、いくら無表情で無愛想だからって、頬の筋肉一つ動かさないってどんな裏技なんだよ……」
「と、言われてもな……デフォルトだからな」

ふと、俺の目の前にいた写真屋の主人がぼそりと呟く。
なんかやたらと大きい写真機みたいなものが、一瞬の閃光を放つ。
その一瞬が幾度となく点滅し、そのたびに俺の瞳孔が動く。

「大体、何で写真を撮らにゃならないんだ？　しかもクリスマスに」
やや不満げに俺は口を開いたが、その言葉に反応してアニュスはこちらを振り向いて、
「いいじゃないですか。クリスマスだろうが新年だろうが、こんなに可愛いアニュスちゃんの成長を記録しなくちゃならない義務を、

全世界の人間は負っているのですよ！」
「そんな義務なんてないッ！」
「ありゃ、兄ちゃん知らなかったのか？」
「写真屋は写真を撮ってろ――――ッ！　というよりアニュスの言ったことに同意するんじゃないッ！」
「え？　世界で一番のお姫様の成長日記を毎日記録するべきじゃないんですか？」
「確かにあんたは俺にとって一番の宝モノだが、その記録を毎日記録できねぇよっ！」

と、つらつらと言葉を吐く。
俺はもともとツッコミの人間ではないが、今回ばかりは反応してしまったらしい。もっと自分を治めなくてはならないようだ。
そう思いつつも、俺はいつものようにアニュスの頭を撫でながら写真を撮らせる。
今、アニュス・デイが着ている服は全身が純白の服を着ていた。どんな服か、とか言われてもファッションに疎い俺に聞かれても困るのだが、とにかくスカートが組み合わさった服だ。
うん、可愛いとは思う。いや、可愛くないはずがない。
もともと人間レベルの可愛さではない彼女に、それに付け足すように美しいものをくっつけてしまったならば、それこそ人間兵器と化す――簡単に言えば、最終兵器幼女とかいう奴だ。

「可愛いだろう？　その服は俺が選んでやった奴で、素材は超一級品だ」
「流石だな。彼女が良く映える服になっている。そのまま俺のほうもコーディネートして欲しかったのだがな」
「それは遠慮してやるぜ、兄ちゃん」

写真屋とくだらない口論をしながら、パシャ、パシャと取らせて

ゆく。
それから五分と経たず。
「これで終わるか」
そういうと、彼はカメラを片付け始めた。どうやら撮影は終わりらしい。
ちなみに、なぜ何十枚も撮られたのか、といえば、『久々の客だったし、女の子が可愛かった』からだそうだ。これぱっかりは呆れるしかない。
そうして、彼はなにかしらの作為を含んでいるのだろうが、それでも何枚でも一定の金額で供給してくれるそうだから感謝すべきか。
「現像してくるから待ってなよ。なぁーに、三十秒で終わるぜ」
そう言って、彼はこの写真屋の奥のほうへ歩いていった。
それを見送って、アニュスはにやり、と笑ってこちらを見た。
「どうでしたか？　思い出は作れましたか？」
「……思い出？」
「そうです。私と、兄さんの、思い出。ずっと一人だった私にとって、これ以上のプレゼントはありませんよ」
彼女の思い出。それは、俺が想像するものより遥かに小さく、薄く、意味の成さないものであったに違いない。
だが、それは俺だってそうだ。この世界に来る前は、思い出なんか意識したことなんてほとんどなかった。ただ物心付いたときには、保育園に入れられ、成長すると小学校、中学校に進む。その過程で、思い出なんてほとんどあるわけがなかった。
それは高校に入っても一緒だった。

好きな女の子が居ても、その人が俺に振り向いてくれる訳もない。そうした考えが俺に染み付いて、ほとんど傍観者となっていた。
矢島はそんな俺を見て、言う。

――楽しいかい？　裏方ばかりしていないで表舞台の壇上に上がってこないのかい――

楽しいわけがないじゃないか。ちっともつまらないさ。
だから、俺はこの世界に来て、初めて思い出が作れたのだ。入学、追放、旅――今はこのくらいしか思い出がないが、それでも十分すぎるほどの幸せを得ている。
彼女は、俺と出会って、思い出を作っていたのだ。今までの人生の中の空白を埋めるが如く。
それがアニュス・デイの生き方。そして俺の生き方。
どちらにしても、変わりはない。不変なのだ。
だからこそ、俺は彼女を抱きしめ、

「……お前さんと出会って、本当に良かったよ。今の思い出は俺の人生の中で最も輝いているモノかもしれない程にさ」
「……ほんと、お兄さんってツンデレさんなんですね」
「そう、かもな。意外と」
「そうです。ツンデレさんです」

そういう彼女は、今まで見てきた女性の中でも最も可愛らしくて、無垢で。
俺が触れてしまえば穢れてしまうような。そんな可憐さと清楚さを持っていて。
これが俺の家族なんだと、ついつい忘れてしまう。
離したくない。だが、いつかは離れないといけない。虚しいほど、その事実を思い出してしまって胸が痛くなる。これが娘を嫁にやる

父の気持ちなんだろう。
俺は彼女と抱擁するのを止めて、彼女を抱っこしてみる。

「軽い」
「失礼ですね！　『れでぃ』に軽いだなんて禁句なんですよ！」
「じゃあ重い。重すぎる」
「逆の切り替えししても一緒なんですよ！」

なんて会話、今まで何度やっただろう。ツッコミとボケのコンビの誕生か。
だが、その会話も、
「おい兄ちゃんッ！　外で戦闘やらかしてるぞ――――ッ！」
写真屋の男によって遮られる。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 戦いの幕開け

正義――忠誠・税金・個人的奉仕に対する報酬として、一国の政府が市民に売りつける品質の落ちた商品。

ｂｙ　アンブローズ・ビアス

いつの間にか、悲鳴が辺りの空気を震わせていた。町に人が逃げていく様が見え、その人々が行ったかと思うとその数秒後に爆発音が聞こえた。

「写真屋ッ！　これはどういうことなんだ！？」

俺は目の前で口を開けて呆然としている写真屋の男に言った。だが、男は答えずにただ首を振る。

「……ちぃ！」

俺は小さく舌打ちし、今の状況で出来ることを考えねばならなかった。

ここは既に戦場と化し、店の前で魔法が炸裂して爆発している。だが、こんな状況で娘を連れて脱出できる自信はない。それどころか突破する前に俺かアニュスのどちらかが死ぬだろう。それだけは避ける必要があるのだ。　今の俺にとって一番大切なものはアニュスの他ならない。こんなところで失うわけには行かない。

ではこういう時、どうすればいいのだろう。

こういう時、俺が知っている英雄はどのような行動を取るだろう。
そして相手はどういった心理で戦っているのだろう。
――これしかない。
俺は男のほうへ近づいてゆき、懐から財布を取り、その中からいくらか金を取り出し、

「いいか、これはお前にやる。だから俺の言うことを聞いてくれ。遂行してくれたならこれの倍を追加で出す」
「そ、それはどういうことだい、兄ちゃん……」

先ほどまで威勢の良かった写真屋の男の声がやや掠れている。無理もないだろう、こんな状況で正常な精神を保っているのが俺でさえやっとなのだ。彼にとってすれば立って置くのも辛いだろう。
だが、だからこその任務だ。『使命』を帯びた人間はそれを遂行するために必死になることが出来る。このまま彼をここに置いて逃げることは出来ない。ならば逃げる為の口実を作ればいい話だ。

「いいか、俺は今から外の雌豚共を沈黙させてくる。その間にこの子を連れて逃げてくれ」
「……それって、まさか兄ちゃんが囮になるってのかい！？」
「そうだ、どちらも生き残るにはそれしかないだろう？」

だが男は顔を強張らせ、

「ダメだ！　相手は魔法使いなんだぞ！　男が女に勝てるわけがねぇ！　女の得意分野は相手を誑かすことと魔法なんだぞ！」

彼の言葉には、かすかな苛立ちがあった。棘を孕んでいるかのようだ。
しかし、最早時間はない。もうじき攻撃は来ることだろう。この

ままでは、ジッと死を待つようなものだった。

「……『試練』には必ず『戦い』があり『流される血』がある。それ故、『試練』は『強敵』であるほど良い……」

「お兄さん……まさか、戦う気なんですか！」

「そうだ。『試練』は立派であるほど意味がある。立派であるほど良いッ！　私は行ってお前達を逃がす……頼まれてくれるよな？」

「……だが」

「時間はない。最早一刻の猶予は無いんだ。いずれにせよ、生き残りたいんなら俺に従ってくれ」

その時、光がこの場所近辺を覆い、爆発した。そしてそれに伴って家々を揺るがすような音と衝撃波が襲う。どうやら外の連中は派手にやらかしているらしい。

俺は一度、ひび割れて今にも壊れそうな窓の外を見やる。人が数人、地面に伏していた。その周りに血が流れている。

この店の立地は周りの建物の影に位置しているからあと少しだけ持つだろうが、何時崩壊してもおかしくはない。

俺は、彼の戸惑いが見て取れる腕を無理やり捕まえ、硬貨を握らせる。

「ここから数キロ離れた郊外に、俺達の仲間が駐在している宿がある。名前は『森のふくろう』だ。そこに彼女を連れて行って、そこで保護してほしい……頼む」

「……了解」

男はそれだけ呟いた。俺はそれを聞いて安堵し、同時にアニュスの手を握って、

「いいか、よく聞いてくれ。アニュスはこれからこの兄ちゃんにつ

いていって逃げろ」
「……分かってます。がんばって、ください」
「分かっている。俺はまたあんたと旅をするさ。だから……今は逃げろよ？」
「はい！」

そう返事をし、小さな手を渡すように男に握らせた。
もう退くことは出来ない。これからが戦争だ。ポケットの中の戦争。小さな戦争。俺は人間と戦わなくてはならない。

☆

敵が動いたのが分かった。こちらに近づいてきている。今、襲われてしまえば、アニュスもろともケシミズにされてしまう可能性がある。時間を稼がなくてはならないらしかった。俺は写真屋の出入り口まで向かった。それまでの間、敵は気付いてはないようだった。
「……敵はどういう理由で、この町を襲ったんだろう？」
俺にとって、それが疑問だった。この町に、何か襲われるような要因でもあったんだろうか。
「戦争――ね。全く、奇妙なものに巻き込まれたものだ」
戦争といえば、記憶に残っているのはスターリングラード戦線とハンス・ウルリッヒ・ルーデルぐらいだ。まぁ第二次世界大戦中の戦いと英雄の話は割愛させていただくが――とにかく、この状況をどうにかする必要がある。

戦争か。くだらないものだ。

俺がこういうものに介入したくないと運命とやらは知っているのだろうか？　俺は内心そう思いながらも「やれやれ」と半ば呆れ口調で呟く。

「来たか……これまた面倒な」

俺は写真屋の戸口を開け、外に出る。まず最初に煙臭いものを鼻腔に感じて、それから目が人の死体を捕らえた。正直その光景に足が竦みそうだったが、尚敵の方を探す。

それから、刀を抜刀する。太陽の光を反射し、よく光るものだ。

だが、その時殺気を感じ、後ろを振り向く。

「ほう……敵さん自らお出ましって訳か」

そこに、これまた奇妙な服を着た女達の姿があった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 戦いの幕開け（後書き）

BOY NEXT DOOR♂

## 刀嵐

主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしください。
神よ、シオンではあなたに賛歌が捧げられ、エルサレムでは誓いが果たされます。
私の祈りをお聞き届けください。
すべての肉体はあなたの元に返ることでしょう。
主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしください。

ｂｙ　Ｉｎｔｒｏｉｔｕｓ

そこに、女達が居た。各員がそれぞれ、軍服らしき物を着ていることから、どうやら何処かに軍隊であるのは確実なようだ。
俺は彼女達を一瞥しながら、彼女達が動くのを待った。その時、彼女達の方から魔力の圧縮が起こっていることを感知した。

「ちぃ！　早速かァッ！」

俺がそれを知覚すると同時に彼女達の側から一瞬の閃光があり、その場から跳んで避けると時を同じくして着弾、そこに火と硝煙、それから地面に穴を開けた。
そしてそれによって発せられた衝撃は俺の体を打ちつけた。

「意外と、魔法の力は強いらしいな……」

それが俺が抱いた感慨だった。ここまですっきりとした殺意はむしろ清清しいものだった。
やはり戦場はゲームや仮想空間での出来事とは違うのだ。こういう考えは女には理解できないものであろう。

「やれやれ……とりあえずアニュスが逃げるまでここで食い止めねばならんな……ん！？」

目の前に、影が見えた。人影か？
俺は疑問に思いつつ、更に続く彼女達の攻撃をかわし続けた。
だが、やはり敵の気配が濃くなっていっているのは分かる。それは間違いない。
だが、先ほどの攻撃の一瞬でここまで近づくとは思えない。そうだ、少なくとも十秒は無ければここまで接近されるわけがない。女共と俺の距離は約百メートル以上はある。
そんなスピードで接近するなど、あるはずがない。
だが、その考えは数秒後には覆されるのだった。

「女か？　……敵かッ！」

敵はまるで豹や虎のように俊敏に動いていた。
俺ははっきり悟った。彼女は、とんでもない技能を持つ人間だと。そして同時に、彼女は俺を討ち取らんとしていると。そうだ、彼女は俺を殺そうとしているのだ。
もともと俺達を狙っていたのか、もともとこの町を攻撃するつもりだったのかは分からない。だが、やはり出会うべくして出会ってしまったのだ。

俺は絶望的な目をしながら周りを見渡す。もうすぐ日が暮れるの

か、太陽は傾き始め、やや薄暗い街中の風景がそこにあった。
ここで戦うのは得策ではない。今、この敵と白兵戦をすれば遠距離からの攻撃に飲まれることは必至だ。ならば、まず遠くの敵から叩くしかあるまい。
しかし、この敵はそれを許すだろうか。いや、それはないだろう。俺が後ろを見せたとき、俺の敗北は決定するのだから。

「だが……賭けるしかないなッ！」

体をめぐっている血の感覚を感じる。そして同時にその中にある魔力に集中する。それを次は空間と同期し、その力を展開させる。

「イオ」

小さく叫んだ瞬間、空間へ展開していた魔力は一瞬にして爆ぜる。その爆発はこの空間に衝撃を撒き散らし、かつ俺の逃走経路を指し示すものだった。
ここに一人、そして向こうに数人。そして俺は爆風によってその数人の固まった場所へ飛ばされた。
そして、俺は彼女達は恐らくこの状況を飲み込めてはいないのだろう、一人の女はこちらを見たまま固まっている。俺はその中の三人ほどを刀をふるって切り伏せた。他の女はそれを見、更に殺意を露わにした。しかし、それはまた一瞬のことで、俺は魔法を刀にジャンクションし、彼女らを切った。
そしてここに残ったのは一人。目の前に居る女だけだ。

「いや――もう一人か」

その刹那。先ほど俺の目の前にいた女が、俺の後ろにいることを悟った。剣は突きつけられていない。

「これはまた、奇妙な男がいたもんだねぇ……」
女は――俺の後ろにいる女は言う。
振り返ることは出来ない。
「……アンタは」
振り返ることは出来ない。
「私かい？　私は私さ。他の誰でもない……ただの、殺しが好きな人間さ。でもねぇ、それでもってんなら、答えてやらないこともないけど」
「……」
「どうしたんだい？　こっちを向いて話をしようじゃないか。一人じゃつまらないんでねぇ。……そうだ、分かったよ。あんたの向いている方に私の仲間がいるんだろ？　こっちを振り向いたら反撃されるからって。ああ、そうなのか、そうなのか」
振り返ることが、出来ない。
この場に存在する、全ての出来事が、事象が、物が、それら全てに均等に緊張と死が分け与えられていた。風は吹き、日は落ちている。俺はその空間で耳を澄ました。もし後ろからの攻撃が来ようと、出来るだけ最小限のダメージで抑えられるように、敵の初動を感知するためだ。物体が発する運動エネルギーは感知しやすい。だが、それを知らない相手ではないだろう。しかし、それでも敵の恐るべき能力は大体を伺い知ることは可能だ。
だが、敵は何をしているのだろう。俺は死を伴う甘美な誘惑に飲まれそうになる。

だが、それでも振り返ることが出来ない。

その時だ。俺はその時、風を感じた。後ろから前へ、俺を追い抜くような、自然では発生しないイレギュラーな、そういう風を。

そして目を疑った。一人の女が、もう一人の女の首元に剣を突きつけている。

どうしたというのだ！？

何が起ころうとしているのだ！？

俺は足を懸命に動かそうとした。だが、動かない。いや、その表現では足りない。

自分の自意識が、動くことを拒んでいるのだ。

脳が、体が、神経が、精神が、自分の欲求と心を抑制し、凍結させている。自分の知りたいという気持ちと生き延びるという生体的防御反応が干渉しあっているというのか――

「ククク……邪魔者は、消さないと」

俺は思わず目を見開いた。

女が、女の見方であるはずの、まだ若い少女（十六歳と言った程度か）を殺そうとしている。

どういう訳だ？

なぜ殺そうとしているのだ？

単純な疑問が、俺の脳内をめぐる。

次に女は、剣をゆっくりと、その少女に　刺し込んでゆく。

「きゃあああああああああ！！」

ねじって。

差し込んで。

血しぶきを被りながら。

その女は、その少女を殺害した。

to be continued・・・

## 刀嵐（後書き）

……なんか、やはり読みにくいのかなぁ？
地の文が多くて会話文が少ないからなぁ……ラノベみたいに読みたいんだろうか？
じゃあ、いっそ厨二病みたいに、

『その時、俺の背中には漆黒の翼……そう、闇で闇を切り裂くような禍々しくも、かく美しい、永遠の闇』

『その名も――光闇円月翼』

みたいに？　……なんて。
ま、もっと会話文を多くしたいと考えてます。あと、ＰＣでの観覧を推奨します。携帯じゃ読めないからね。
いっそＰＤＦで観覧すると普通に読めるかもしれませんよ？

**サイコ**

誰も教えてくれなかったかもしれないが、無知も罪だぞ。
教えてくれる者がいなければ自分で学び取れ。
それができなきゃ死ね。

ｂｙ　ＪＵＤＡＬ

それは、ただの仲間割れと考えるにはいかないような光景であった。しかし奇妙なことに、その少女を殺した女からは喜怒哀楽の感情を感じ取ることができなかった。それはどことなく造られた人形、もしくは感情を持たない兵器を感じさせた。ただ戦いにのみ生きる――そういう行為でしか生きられないような哀愁を、俺は女に感じていた。

「一体、お前はなにをしたんだ？　なぜ殺した？」

俺は自らの体にある恐怖と緊張を感じながら、声を押し殺してその言葉を口から出した。すると女は静かに、だが正確に少女に刺した剣を抜く。途端に、女は返り血を浴びる。『サイコパス』と、そう呼ぶにふさわしいような冷徹さを持った彼女を俺はやや畏怖を込めた眼で見る。

「なぜ殺した、ね。私は疑問に思ったことも無かった」

彼女は顔色を全く変えずに、剣をいじりながら言った。

「……そう、あえて言うなら、それこそが私が生きる理由さ。幾多の屍を築き上げた時、私は幸福を感じる。だから殺す。理由なんて、どんな言葉を並べても表せないものさ」
「……」

風が俺たちの間をすり抜けていった。やや血なまぐさく、生暖かいものだった。

「あんたはどうなんだい？　なぜここにいて、剣を構える？」
「俺に聞いているのか」
「当たり前さ。近辺に人間はいないからね」
「……俺に理由なんてない。俺はここにいて、剣を構えて敵を討つ。ただそれだけの為にここにいる」

俺は答えた。すると女は少し驚いたように眼を少しだけ見開き、

「へぇ……『恋人とかを守る』とか、そういうつまらない理由じゃないのかい？　これはおもしろい人間がいたもんだ。自分を『勇者』とか言う奴は、大抵くだらない自分だけの正義感を振り回しながら戦ってきたのに。……まぁ、そういう輩を斬るのも楽しかったけれどね」

彼女が斬ってきた人間の中で、果たしてどのくらいの人間が恋人の為に、もしくは社会的・個人的な正義の為に戦ってきたのだろうか。どうして戦い、いつまで戦い続けるのか。恐らく、彼女にはそういった『正義』を理解しないまま殺し尽くしてきたのだろう。
やがてそういう正義は社会に利用され、蹂躙されるのがわかっているのだろうか。それとも、そういう偽善的な正義を疎ましく思っていたのか、それは俺の知るところではない。だが、彼女に殺されていった者たちに関して、全く関心を持つところではなかった。

「さて、戦うかい？」

女は血のついた剣を構えた。禍々しくも、どこか強く引きつけられる。それに応じ、俺も刀を構える。

「やれやれ……面倒だが、やるしかないという訳か」

俺は先ほどからジャンクションしていた炎系の魔法を解除し、氷系の魔法へ換装する。

この、初めて明確に『敵』と呼べる人間を相手にするのは初めてだった。だからなのか、いささかの戸惑いが、このまま人間を相手取って戦ってしまっていいのかという心の自制心を呼び起こす。

だけれども、アニュスをこの場から逃がす為だ、仕方ない。俺が死んでも守るべき価値が、あの娘にはある。それは俺が知らない未来、俺とは違う未来。

「……陳腐な正義感を振り回すわけじゃあないが」

女の冷たい視線を体に浴びながら、呟く。

「俺には大切な『娘』がいるんでね。ここで再起不能になるわけにはいかないんでね」

「その歳で、かい？　最近の若者は激しいね」

「言うなよ。それに……」

剣を構え、走り出す。

「俺は童貞だ」

☆

時を同じくして。
その時、ガウェインらは自らが拠点に腰を据え、窓の外に広がる町を見ていた。
この宿場一帯には既に自らの部下が出撃しており、あちこちの建物が何かしらの被害を被っている。ガウェインはそんな状態にある町を見て、奇妙なものね、と感想を口にしていた。。目をやれば、そこにはたくさんに人間が地面に伏している光景が目に見える。

「伝令！」

その時、ドアが勢いよく開け放たれて、一人の女騎士が入ってくる。
ガウェインは窓から離れてどうしたと聞いた。するとその騎士は、「戦況を報告します」と言った。

「まず、最初に攻撃があったのはこの町の西門のほうからですね。死者は我が隊からは出ておりません」
「そう。それは良かった。では攻撃してきた者の数は？」
「不明。その次の攻撃があったのは町の中心部のほうからです。そこへ我が隊は二人ほどの偵察を派遣しています」
「……敵は何処の人間か分かった？」
「恐らく……『ルーイン』からの者達かと。リンドバーグとの同盟を組んでいる国家の中でこの国に一番近い所ですから」

と、女騎士は言った。
ガウェインにとって、この状態での攻撃は全く予想してはなかった出来事だった。

もともとの指令が『究極の力』の捜索だったからに、こういった攻撃があるものとは思っても見なかったのだ。正直、今でも自分の部隊に死者が二人も出ている事実に、自分の不甲斐なさを呪っていた。

この国――『ミューゼス』はもともと故郷であるクルド国と同盟を結んでいる。だから攻撃されても別におかしくはないのだが、それでも奇妙だった。

「……なぜこんな港に攻撃をするんでしょう？　第一ここを攻略するとしても開戦してからにすればいいのではないのでしょうか？」

部下が言う。

「それは……同盟国のクルドを表舞台に立たせる切欠にするのかも知れないけれど……問題はそこじゃないわ」

「え？」

「『究極の力』とかいう胡散臭い力の捜索に乗り気になったわけ？　やれやれね……簡単に言うと、私達の情報がどっかから漏れたのかしら？」

「はぁ……」

部下は意味不明、と言った感じに頭をかしげる。

正直、どういうわけで襲ってきたのか知ったものではない。彼らにはどういった理由で攻撃してきても、ガウェイン達に今の状況では計り知れないのだ。実際、知っても意味がない。

今はこの町を守ることが先決であるのだ。ここで考察している場合ではない。ガウェインは目の前にいる部下達に指示を出し、彼女達を戦場へ送り出す。そして自分も窓の外を眺め、目を細める。

「……来たッ！」

## サイコ（後書き）

どうも、死を超える者です。
今回は、実生活でも使えるような名言を用意しました。ぜひ皆様も自分の子供や友達へ向けていってください。確実に関係にヒビが入るでしょう。
まぁ、今回も何と無しに戦闘描写です。やはり戦闘描写は必要なんでしょうが……ねぇ、読みにくいよね。
ライトノベル風に書いてみても、やっぱり長くなる。というか私自身の文書の作風がＳＦみたいですから仕方ないのですが。
まぁ、なんとか善処します。

ところで、『光瀬　龍』というＳＦ作家がいるのですが、その方の作品の『百億の昼と千億の夜』という作品がこの『ＴＨＥ　ＵＮＳＵＮＧ　ＨＥＲＯ』の元ネタであり、土台であるということを明記しておきます。
全くストーリー展開が似ていないのですが、『百億の昼と千億の夜』の超越者がこの作品に置ける『神』の存在のモチーフです。ぜひ一度あの作品を読んでみてください。

ちなみにテスト中ですので、まともに投稿できません。よろしーく。
ああ、もし聖書などでわからない所があれば、若輩ながらも教えて差し上げてもよろしくてよ！　と、いう作者はシャルロッ党員。

**凶星**

人は、運命を避けようとしてとった道で、　しばしば運命にであう。

ｂｙ　ラ・フォンテーヌ

「ククク……まさか、ここでいい男と出会えるなんて思っていなかったよ。最高だ」

彼女は笑った。それは俺の心を凍らせるような、冷たい笑みを含んでいた。

だが、それを知覚した瞬間だった。彼女の剣は俺を切り裂こうと、彼女は攻撃を繰り出してくる。

「なんとォ！」

ガキィィン！

冷たい金属音が俺の耳を劈く。その刀に込められた力は物凄く、これが女性の力なのかと疑問を持たざるをえない。しかし、問題はそこではない。

「……ちぃ！　さすがにレベルが違いすぎるか！」

彼女の技術が恐ろしいほどに凄いのだ。今の俺では敵わない、力

が遠く及ばない存在のように感じられるようだ。
まるで悪魔だ。
その悪魔のような存在が、今俺を殺そうとしている。背筋を寒くするような事実だった。戦わなかったほうが懸命だったのかもしれない。、

（……今頃遅いか？　だが、何とか生き延びるしかない）

そう小さく決意しながら、相手と距離をとりつつ彼女の隙を見極めようと目を凝らす。その時だ、彼女は俺の視界から消えうせていた。

「どこ見てんだい？」
「――何？」
「ここさ」

突如として剣が虚空を舞う。それを何とかギリギリのところで回避することに成功する。俺はその決定的で短い時間の隙を逃さないように、全ての神経を集中する。
俺の名の無い剣が彼女のわき腹を狙い、それを彼女は察知していたのか、一秒も経たないうちに体をそらす。この戦いには勝てないのかもしれんが、生き残ればいい。俺はそう考えながら、呪文を唱えつつ、彼女から距離をとる。
『爆発』という名前の呪文を唱え、前方の空間に魔力を押し込んで展開する。その爆発は近隣の家を吹き飛ばし、その瓦礫にも一瞬にしてこげ後と穴を開ける。俺はその直後に崩れている建物の影に身を隠した。既に壁はヒビが入っており、いつ崩れてくるか分からない。そして爆発によって巻き上がった砂と埃が視界を悪くしていた。
二メートル程度しか見えない状況である。いつ襲われても仕方ない。

奇襲を恐れて壁に背中を預け、敵の気配を感じようとする。しかし、感じられるものはほとんどなく、聞こえるものは砂の落ちる音だけだった。

（アニュスは逃げれただろうか？　心配だ……）

いや、多分あの男が責任をもって送り届けているはずだ。男の方が死なない限りの話なのだが。だけども、あのアニュスがそう簡単に死ぬわけがないと確信していた。根拠のない自信だったが、それは同時に俺の心に『生き残る』という感情を起こした。

☆

――それから、どれくらいの時間が経ったか。五分？　十分？　たかが数百秒の時間が、俺にとっては悠久のものに感じられた。

しかし、その間は誰も動く物体は無かった。あるのは、最低限の呼吸と、崩れ落ちていく建物の砂、瓦礫のみだった。ここでもう敵が去ったと考えて動く方がいいのか、それとも俺を待ち伏せしているのか。それは俺の知りうることではなかった。

ここであの女を観察できれば、あるいは、隙を見計らって討つか。逃げるか。どちらにしても、ここから動く必要がありそうだ。

俺は建物を壁伝いで警戒しつつ、外を伺う。

瓦礫の上に、そこに女が憂鬱そうに空を見上げて立っていた。色白の肌と痩せ細った体躯に、薄暗いようなグレーの服を身にまとっていた。

女は何をしているのだろう。俺にとって、索敵もせずただ空を見つめる彼女を不思議に思った。しかし、その姿のどこかに何かに対する憎悪と悪意に充ち満ちていた。

不意に、女は動いた。その左手からはじき出された赤黒いエネルギーの矢は的確に俺の居場所まで届き、その空間ですさまじい爆発

を起こす。
その矢が届ききる前に、俺は行動を起こした。体中から魔力を捻りだし、自身の周囲の空間で展開し、防御空間を作り出す。矢はその一秒にも満たない間に防御空間に接触する。同時にすさまじい爆音と衝撃が周囲を襲う。続き、赤黒の炎が目の前で炸裂する。

「ぬおおおおおッ！！」

その炎の収束と同時に俺は防御空間を排除し、そのままありったけの魔力を込めながらの光弾を彼女の方にぶち込む。
その光弾は彼女の手前で拡散し、さながらショットガンのように女に襲いかかる。

「……なかなか、冴える魔法じゃないか」

しかし。彼女は表情を全く変化させず、ただただ光弾の間を避け続ける。
もはや言葉すら出なかった。自分ですら避けられないような魔法を、あそこまで簡単に避けられると落ち込む。いや、本当は落ち込んでも居られないのだが……。
やってられん！　俺はそう吐き捨てながら彼女に接近戦を挑もうと、身を隠していた場所から飛び出し、それに対応するように女も剣を持つ。
ガキィィン！
そのような金属音が辺り一帯に響き渡り、剣と剣が接触しあい、お互いの肉を斬ろうとした。そしてそれを受け止めるが如くお互いがまた剣を重ね合う。それはまさに、一つの音楽のようだった。そしてその命を賭けた音楽は、途絶えることはなく。そして互いに決定打を与えられることは無かった。

「……ッ！」
「へぇ……なかなか続くね、あんた」
続く、とか言われてもな。心で吐く。剣戟を見切り、女の腹を思い切り蹴っ飛ばし、なんとか距離を取る。
俺は一瞬、女の顔を見た。その顔は苦しみだとか、悩みではない。もっと恍惚とした表情を称えている。それも、狂気を秘めた美しさを伴って。
その時。俺は悟った。
『これが本物の狂気。これが本物の殺人者』
どこか、その事実が俺の心を直撃した。どうしてだろう、俺はその感覚を知っている。いや――それは俺が生まれたときから、その感覚が心に隠れ続けていた。
なんだ？
どうして理解できる？
「――これは……？」
理解できることに理解が出来なかった。
だが。それは今考えることでは無かった。瞬間、心臓が呻いた。
顔を上げると、それは美しい狂気を秘めた女が立っていた。
「お前」
彼女はその場所から動かず、目線をこちらに寄越したまま言った。
「やはりお前は……レクイエム？」
彼女は俺に少なからず興味を持っているようだった。奇妙な好奇

心がその声に内包されていた。

「お前は『レクイエム』……いや、『恐るべき御稜威(みいつ)の王』？」

その言葉を自分が理解するのに数秒掛かった。今、なんと言った？

to be continued…

## 凶星（後書き）

最近全く書けていないＥＸＤＥＡＴＨでございます。
まぁ書けていないというと嘘で、実は書いてはいるんですが……ストーリーがかなり厄介でして、展開が進みにくいったらありゃしない。
ここでアニメみたいに『新技』とかで相手を一撃で葬り去るとかやってみたいんですが、どうもね、こういう作品だと変になっちゃう。
しかもストーリーが結構鬱展開らしく、さきほどまで先の話を書いてたんですが見事に鬱になりかけました。
いや、ね、人生を深く考えすぎたらやばかったです。

うーん、難しい。頼れる仲間が主人公に居ないからか？　でも書くと何かしら鬱要素入れそうだし……
まぁ、真剣に厨二要素を入れたらいいのか？

## 道標

善には常に悪が混じっている。
極端な善は悪となる。
極端な悪はなんの善にもならない。

ｂｙ　ヴィニィ

俺はただただ、女を見ることだけしかできなかった。

「おい、貴様。お前はさっきから何を言っているのだ？　俺について何か知っているとでもいうのか？」

俺がそう問うと、彼女は無表情でホールドしたまま口だけ動かした。

「知っているともなにも……同じ種類だからねぇ。知らないわけがないさ」
「……は？」
「そうだよ……またお前という人間は私の目の前に現れた。そしてこうして私の剣から生き延びている」

女はそのまま剣を水平へ持ち上げ、俺の目の前につきだした。

「また、運命の輪《ＴＨＥ　ＷＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＹＮＥ》が回り出したということさ。くだらない神の思想の為、人間は知らず知らずのうちに自分自身の役目を果たそうとしている。あんたはその内の安息を与える人間なのさ」

「どういうことだというのだ？　貴様の言っている意味が分からないぞ！」
「分かっているさ。あんたはまだレクイエムじゃあない」
そこで女は無表情だった顔を初めて崩し、整った顔を醜悪に歪め、
「それは……」と言った。
「歴史は繰り返すものさね。この邂逅も、その先の未来も、全て運命意思によって決定される……私も、お前も」
「運命意思、だと？　お前は一体……何を言っているのだ。さっきから一方的に話されているだけでは、疑問も持てやしない」
「疑問……？」
ふと、女が首を傾げ、彼女が言った。
「疑問なんて持たなくても、『神』に聞けば分かるさ」
「『神』？　超越者にか！」
「そう。この世を造り出し、尚お前をこの世界へ縛り付ける者さ」
神。それは全ての上に立つ人間の、さらに上に位置する存在。そして、未だ会ったものはいない。神の子と呼ばれたイエス。キリストでさえ人生の中で対話しか出来なかった存在。
その『神』に聞けという彼女は、至極真面目だった。しかし、その態度が『何か』を俺に語ろうとしていることだけは理解できた。
「恐るべき御稜威の王、だといったか？　それはどういうことだ。そんなもの、俺は知らないが……なにより」
この世界で生まれたわけじゃない、そう言おうとして言葉を詰まらせた。

突然、なにか脳内で蠢くような頭痛が襲ってきたのだった。

（なんだ……いきなり！）

最初はただの頭痛だった。しかし、その頭痛がいつしか無視出来なくなるほどに大きくなり始め、さらに目眩まで併発しはじめた。それはインフルエンザにかかったときのような、意識を薄く引き延ばされるような感覚だった。

そして、剣を落とした。そして俺は膝を着く。ここで攻撃がくれば、一瞬の内に殺害されるだろう。

時に、女はそんな俺を見て、一つため息をつく。

「やっぱり、まだ矢に貫かれていないようだね。さしずめ、あの娘も……」

俺は視界がぶれる中、必死にはいつくばっていった。

「一体……何を、した？　あの短、時間の中、で、なにか魔法を？」

「掛けちゃいないよ。ただ、まだアンタは『対応者』にしか過ぎない。受身の対応者は私の前に立つ資格はない」

すると、女の言ったとおり頭痛がやがて収まり始め、視界も元に戻り始めた。そこで俺は剣を取り、さらにおぼつかない足取りで彼女から距離をとる。

「『運命意思』すなわちこの世界の意識。その意味も、あんたの物語の最後でわかるだろうよ。そこからは私の知ったことではないけれど……そうだ、また一つ、物語を進めるとしよう」

と、彼女は言い、刀を俺の方ではなくよその方へ向け、

「ミューゼスの海。その近くにある『イントレランス遺跡』。あそこにお前は行かなくてはならない。そこで……お前は『神の子』になる。それが運命だ」
「運命だと？　……くだらん。俺が生きてきた足跡を、『運命』だとか何とかで決定されてたまるか！　しかも、あんたが教えるとなれば、それは罠かもしれない。信じれないな」
「だが、あんたは行かなくちゃならないのさ……細かい出来事が違っても、結果は変わらないものさね」
「……」
「信じるか、信じないか。それはあんたに任せるさ。だけどね、私は知っているよ。あんたは必ず『来る』ッ！　いくら覚悟して決意していても、運命は変わらない……じきに分かるよ。それが進むべき道、そしていずれ決断しなくてはいけない事柄……」

そう言うと、彼女は笑いながら剣を納めた。そして背中を向けて去ろうとした。
俺はその後ろを攻撃しようと、すこし考えた。だが、先ほどの会話が妙に気にかかって、結局は剣を振り上げることも、歩くことすらも出来なかった。
だが、せめて、最後に一つ聞きたかった。彼女の後ろ姿に、どうしても聞きたい言葉があった。俺はその疑問を頭で文書にし、それを言葉に置き換えて喉から発声した。

「最後に聞く！　お前の名前は？」

その声は、届いたらしかった。
彼女はふと立ち止まり、振り返ると、

「サイサリス。サイサリス・ラストレンジさ。また逢おうとしよう

かね、『謳われない英雄』」

☆

その頃。

アニュス・デイという名前を持つ少女は、『ただ一人』、とある一軒家の屋根の上で沈みゆく太陽を眺めていた。

彼女の他に、誰もいなかった。彼女ともに逃亡したはずの写真屋の姿も見受けられなかった。ただ、そこにアニュス・デイ、彼女だけがそこに佇んでいた。

彼女は笑っていた。なぜか？　それは彼女自身にも分からなかった。

ただ、彼女を突き動かしていたのは、自分の『父親』である松下の為。どうしてかは分からないが――自分には記憶が無かった――ただ、自分の使命を果たすため、動く。

「……ああ、そろそろ私の出番のようですね」

小さくため息をつく。そして青い空を見上げ、

「世の罪を除き給う天主の子羊、われらに平安を与え給え……なんて。私は歌なんて歌う余裕はあるんでしょうか？　ふふ……」

そう呟くと、彼女はとある場所へと動き始めた。

神の子羊は、この後、何をするのか。そして、どういう影響を与えるのだろうか。

しかし、それは未だ知るには遠く、遠くで打ち寄せる海の波の音の残響にさえその未来を知られることはない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 道標（後書き）

伏線というか厨二病的な何かをぶち込んだこの話ですが、正直回収できるかなぁ……？

運命意志やら恐るべき御稜威の王やら、作者にも難しい厨二病表現。ああ、一応全部キリスト教に関連してます。

特に『恐るべき御稜威の王』を英訳すれば、これまた章の名前になりますし、レクイエムでもあります。

……でもやりすぎた感が否めません。アニュスにしても。

## 昼の終わり、夜の始まり

生きる限り、我々は『運命』というものに縛られている。
だが、我々は選択することが出来る。左、右のどちらの道に進むのかは自分の意思次第である。
故に、『運命』は縛るものでありながら非常に緩い縄の手錠のようなものである。

ｂｙ　作者の考え。

俺にとっては彼女――サイサリスという女との邂逅が、これまでに起きた奇怪の中でも一番の彩色を持ったものであることは間違いないだろう。しかし、それゆえに彼女が何処かへ去ってしまった後、俺の心にはただ空虚しか取り残されなかった。
ただ――俺にとってはそれは良い影響を与えるのか、それとも悪影響を与えるのかという心の疑問には、すぐには答えることは出来ない。それは俺自身が今後の人生で決断を下すべきで、今この問いに答えるほど人生を歩んでは居なかったからだ。

「――俺は」

ただただ、沈み行く太陽を見ながら、一人呟いた。もはや自分の中には何も無く、考えることすらも容易ではない。だが、そんな状態でも様々な疑問が沸々と沸いてくるのを感じた。
『レクイエム』。その言葉はラテン語で『安息を』という言葉を意味する。全てのものに平和を、救いを願う言葉でもある。そして同時にサイサリスが言った謎の言葉でもあるのだ。

（一体……何を知っているのだ？　彼女は預言者？）

そう思った。

預言者というものは人の生死、未だ先の見えない未来の運命について話すのだが、あまり鮮明に語ることはない。その予言が本当に起こるかどうか不明瞭であるからだ。

だが彼女はきっぱりと鮮明に予言した。まるで、自分が未来を知っているかのようにだ。それはそれで気味が悪かったし、また恐怖すら感じる。

「ええい、面倒だ。これからのことは後々決めるとして、まずはアニュスを探さなきゃならん……」

顔を数回振り意識を思考の中から切り離し、剣を鞘に入れて一つ溜息を吐く。

周囲を見渡すと、やはり先ほどの戦闘の残り香が残っており、建物と呼べるものはほとんど原型を留めてはいなかった。

やはりここが本物の戦場。恐らく、このような肉と肉の殺し合いを近代で体感した日本人は居ないだろう。それも、こんな状況を想像することもないのだ。そういう観点から見れば、どれだけ日本は平和なんだろう、とつくづく感心する。どこの世界にも、こういう戦場があり、また平和な場所も存在するというわけだ。

さらにそこから数十メートルほど先まで歩くと、そこは瓦礫と人間の死体が混在した場所があった。

ここは元々一般人用の簡易病院だろうか。やはり病院独特の消毒液の匂いと、そこかしろに包帯や瓦礫でつぶれたベッドが在った。また、その瓦礫を退かして見た所、既に息絶えた男性を見つけた。先ほどの女達の襲来によって怪我し、運ばれたここが崩れたために

死んだのだろうか。

彼は、どういう経緯でここに来たのだろう？　俺の心に、ふとした疑問が生じた。

彼に恋人は居るのだろうか。家族は？　そして友は？

彼の人生の中でどれほどの多くの人間が携わってきたのだろう。百人か、千人か。それともっと多くの人間か。彼と話し、愛し、共に時間を費やしたことのある人間はこの世界にどれだけ居るのだろう。

そして、その人生がこうもあっさりと終わっている。数十年の歴史が、今日という日で強制的に終わらされてしまった。

彼にも理解が出来なかったかもしれない。ここで人生が終わるなんてことなど、想定していなかったのかもしれない。

俺はその死体から目を背け、空を見上げた。すると、太陽は日没し始めていた。

赤く染まっていく景色が、この場所の情景をより幻想的なものへと変化させているようだった。そしてまた、それは戦場であることを忘れさせるように美しかった。

まるで死後の世界だ、と俺は思った。

「……」

言葉は出なかった。出す気力もない。

美しいとか、幻想だとか、そういう感情やがこの戦場を彩っていることに、ただただ感慨深い奇妙な感情を抱いていただけだった。

やがて、風が流れ……空気が淀み、そしてその『紅色』は微かな残光を残しながら消えうせていく。まるで人生のようだと思わずに

は居られなかった。

（昼は青春で夜は……なんだろう？　秋か冬か……）

人生の時間は一瞬で過ぎていく、と先人達は言う。いずれ私達もその時間の流れを疎ましく思い、そして懐かしく思うときが来るのだろうか。後悔と満足感と……あとに様々に入り乱れる感情が、この後の人生でどれほど懐かしく感じられるんだろう。

どのような未来が待ち受けているのか。それは神ですら知らないものだ。

なぜなら、自らの運命は自分で選ぶのだから。

だから覚悟しなくてはならない。

この後の人生で待ち受ける未来を。

そして運命を。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 昼の終わり、夜の始まり（後書き）

もう少し文を読みやすいようにしてみます。

**極**

生命のあるかぎり、希望はあるものだ。

ｂｙ　ドンキホーテ

時は既に日没を迎えていた。

もう既に残光は見えず、そこにはただ空から降り注ぐ星の煌きがあり、それらがこの町を照らし出していた。

「……ったく、体中が傷だらけだ。全く、凶は厄日だな」

と、俺は愚痴るように言葉を吐いた。

しかし、実際には傷は大したことは無く、治癒魔法を掛けて傷は早くも癒えてきており、満身創痍というわけじゃない。先ほどのサイサリスという女との戦いの中での傷はほとんど癒えた。

疲れは著しく残っているが、戦えないというわけではなく、少なくとも宿泊所までの距離ならばこのまま敵を駆逐しながらでも進むことは可能であろう。

厄日ならば事前に教えておいて欲しかったぐらいに、今日は厄介なことが多すぎた気がする。町に着いたらいきなり敵に襲われ、挙句に殺されるところだった。平穏から緊張までの転換が早すぎるように感じる。デートからの戦いは本当に予想が出来ないことであった。

（やれやれ……それにしてもこの町の状態は酷いものだ）

目をやれば、あちこちで火が燻っていたり建物が倒壊していたりと、町は滅茶苦茶に破壊されつくされていた。また、道路のあちこちで穴などがあり、とてもじゃないが人間が利用できる状態ではない。獣道のほうがよっぽど通りやすくて良いだろうと思わせる惨状だった。

俺はそのような道路の状態を無視しながら突き進んでゆく。

その瞬間だった。

私の目に、奇妙なものが映った。

それは……一人の男だった。

嫌な予感がする。俺は思わず彼のところへ走った。走らざるを得なかったのだ。

信じたくない。理解したくない。見たくない。考えたくない。

だが。そこにあったのは、紛れも無い事実。

「そ……そんなバカな……」

そこにうつ伏せに倒れていたのは、血に塗れた写真屋の男だった。嫌な感じの汗が俺の頬や背中を伝っていくのを感じた。彼から全く生命の息吹が感じられなかったのだ。そして彼を仰向けにしてみると、その理由がはっきりと分かった。

「心臓を一撃で打ち抜かれているのか……？」

彼の胴体の真ん中、心臓のあるべき場所は無残にも穴が開いており、そこからかなりの血が彼の服を汚していた。どうやら至近距離からの一撃必殺のようだ。もちろん彼は既に死んでいる。

俺は辺りを見回すが、そこには誰の気配も無かった。それもそうだろう、彼の体は冷たくなっているし、血も固まっている。ということは、俺がサイサリスと戦って間もない時間の間に殺害されたと

考えるのが妥当だろう。

しかし誰が……？　一体誰が彼を殺ったのだろう。

今一度、彼の死因であるその傷をよく見直してみる。その傷は酷く血で汚されていたが、血は固まっており、痛々しいというかグロテスクでさえある。そしてその傷を作った攻撃は魔法だろうと結論する。

「しかし、なんだ……嫌な予感しかしない」

そうぼやきつつ、周囲を見渡す。

周りは瓦礫しかなかった。見える範囲には、誰一人として人間は居ない。気配すら絶たれている。この町で何人の人間が生き残っているのかは知らないが、少なくともこの周囲に生きている人間は存在してはいないようだった。

（アニュス……逃げれたのか？　彼が死んで何処へ行ったというんだ？）

星の光ぐらいしかないこの町でちゃんと逃げるのは難しいと思う。元の世界ならば懐中電灯などがあるだろうが、この世界は魔法で光を得る。しかし、アニュスが魔法を使えるとは思えない。

となれば、やはり何処かへ保護されたと考えるのが妥当だろうか？

それでも、ただただ何も出来ない自分の無力さに虚無感を覚えるだけしか出来ない不幸を呪った。

一瞬、俺の目に映ったものがあった。

何と無しに、もう一度男のほうに目落としてみる。男の懐に何か

あったのだった。
しゃがみ、それを掴んでみるとそこには封筒に入れられた数枚の写真があった。
「アニュスの写真、か。そういえば受け取ってなかったな……」
あの時、戦闘は一瞬にして始まったのだった。辺りに響き渡る悲鳴、次ぐ怒号、爆音、無音――それらのいざこざの中で、俺は戦場に赴いたのだった。
「……もらうぞ」
そう言って、俺は写真を着ていたコートの中へ仕舞った。

その時だった。
その時、圧倒的にまで恐るべき威圧感が俺を押しつぶした。途端に悪意とは全く別の、透き通った意思を感じた。
そしてまた、同時に瓦礫の上に俺は見た。
全てを浄化するような、白銀の『天使』を。
☆
「ア、アニュス……だというのか……？」
俺は自分の目を疑うしかなかった。

確かに今目の前に居る彼女はアニュス・デイ本人だ。しかし……その姿にはたった一つだけ、おかしい所があった。

『血塗られていた』のだ。その服も、そのか細い腕も。黒澄んだ血が皮膚に塗りたくられていた。それは実のところ、血なのかも良く分からない。だけども……彼女の目には、既に俺の知っている『アニュス・デイ』という少女の光は無い。

「お、おい……アニュス？　そんなところに居たら危ないぞ？　こっちへおいで……」

「……」

「どうしたんだ。危ないったら……」

「……」

しかし、彼女は反応を示すことは無かった。そしてまた、威圧感も消えては居なかった。

嫌な汗がシャツを濡らしていくのを感じた。

こんなにも彼女を疑ってしまっている自分が恐ろしいのだ。彼女が、アニュスが人を殺しているのではないか、という疑問が俺の頭を支配しつくしていた。

だが、疑問は既に回答を待たずして正解を開示された。

「ＧＬＡＣＩＥＳ（グラキエス）」

彼女の口から小さくその言葉が漏れると同時に一瞬で彼女の周りに氷の矢が形成され、

「サジタリウス（神の弓矢）」

また言葉が漏れると同時に彼女の手に弓が出現した。
アニュスは氷の矢を弓に番え、構えた。

「！！……本気か！？」

俺は、得心した。このまま行けば、確実に死が待ち受けていると。
確信して刹那の間に俺は回避行動を取った。直後に氷の矢は俺の元居た場所に寸分の狂いも無く着弾した。
これで間違いはないと、心で確信した。

「そんな……ア、アニュス……アニュス！」

彼女は『敵』だと。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 極（後書き）

私がシンガポールに修学旅行に行っている間に、どうやら日本はヤバイ状況になっているようですね。
連日地震の放送が絶えず、東北や関東で大混乱になっていると分かったときには驚いたものです。
皆様の住んでいいらっしゃる地区は大丈夫でしょうか。特に被災された地区に住んでいる方は大丈夫でしょうか。
私が出来ることは、募金をしたり、この小説を書くぐらいしかありません。
高々、一介の高校生の身分ではございますが、被災された方々の安全と、亡くなった方々への黙祷を捧げる次第でございます。

追記
ｇｌａｃｉｅｓ＝ラテン語で氷
サジタリウス＝射手座。もしくはサジタリウスの矢。この小説では弓矢として表記。
これらを統合して『神の弩弓・サジタリウス』と厨二テイストで名づけますか。弩弓……アニュスは持てないだろうなぁ。

**空即是色**

死の影の谷を行くときも　わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける

ｂｙ　聖書　詩篇　２３編　４節

「なんてことだ……こんな、こんな最悪なことが……」

俺はただ何もすることが出来なかった。
いくら目の前から矢が飛んでこようとも、それを回避するだけしか出来なかった。その時の俺は最早戦意を失っていたからだ。
いくら俺でさえも、大切な者に……愛している者に剣を向けることなぞ出来はしない。

「……」

なおもアニュスは俺を射止めようとその体に合わぬ弩弓でこの心臓を的確に狙い、矢を放つ。無慈悲で在りながら冷徹さを持つその矢に当たることは、今の俺には出来ぬ。
ここで死ぬことは出来ない。ここで彼女を殺すことは出来はしな

い。だが、いずれかはどちらかを選ばなくてはならないのだろう。

「く、そオォォォォ！」

声にならず、掠れきった声を張り上げた。俺と共に旅をしてきた彼女を再び我が胸で抱きしめる為に、我が『娘』の為に。

「アニュス、目を覚ませ！　覚ましてくれ！」

「……」

「俺は……あんたを、斬りたくはないんだ。まだ、まだやり直せる。お願い、だ……！」

しかし彼女は答えず、ただ彼女は矢を放つ。今度は顔スレスレの軌道だ。

言葉では無駄か、そう思った瞬間に俺は彼女に接近しようとして、目を見張った。彼女が手を上に上げたのと同時、周りに展開されていた氷の矢が、彼女の手の降下と同期し、一斉にこちらへと飛んできたのだった。

『無慈悲な恵み』と俺の脳内で考えたのと同時。その矢の軍勢は次々と俺の肩、足、腕に突き刺さり、血が氷を赤く染め上げると同時に俺の目は暗黒の空を見上げた。

「な……く、ああ……」

絶望。死。心の中にあったのはその二つの言葉であった。『空即是色』が全てである俺の心に、その二つの言葉は非常に重すぎた。それら全てが俺の体を蝕み続けた。『空』の中に『絶望』が渦巻き、『色』の中に『死』が接近しつつあった。

心の死――精神の死が、そして体の死の両方が俺に近づきつつあった。

彼女にこのまま殺されるのか――いや、それもいいかも知れない。
では死ぬか――だが断る。俺は生きたい。
ではどうするか――簡単だ。彼女を取り戻す。
体は静かだった。もはや動くことは敵わないだろう。回復すら出来ないこの状況で、戦うことすら出来ないのだ。彼女を救うことさえ敵わぬのだ。そしてそれは死ぬことより辛いことだった。

（俺は生きて、彼女を救う。死ぬなんて……出来るわけがない）

生きたい。また彼女の笑顔を見たい。

（そうだ。俺はまだ彼女を置いて死ぬことは出来ない）

いずれ彼女と結ばれる相手をぶん殴るまで、俺は死ぬことを許されないのだ。

（まだだ、まだ終わってない）
（そうだ、ここで終わるわけがない）
（俺は生きる。死ぬわけにはいかないんだ）

よろよろと力なく立ち上がる俺を、アニュスは薄暗くくぐもった目で見つめる。不思議なことに、現時点では彼女からの攻撃は無かった。
ただ、二人の間には生存本能のために生きる一人の人間と、戦うために立っている人間がいただけだった。そして俺とアニュスは同時に地面を蹴って走る。
彼女がラテン語で呟く――ルクス、光という意味だ。次に彼女はまた別の魔法を使おうとする。
だが俺はその寸前のところで彼女の懐に入り、自分の娘を折檻する親の心境で拳を作る。

「……悪く思わないでくれよ」

そのまま振りかぶって彼女の腹をぶん殴ろうとして……その拳は彼女に届くことはなかった。目を凝らすと、俺の拳はうっすらと光る障壁によって阻まれていた。衝撃すら通り越してはいない。

しかしそのことに疑問を持つ前に俺は再びその障壁を殴りにかかる。一撃、二撃、次々と殴り通してゆく。だが、その連撃を全く受け付けることはなく、依然としてその光の障壁は俺の目の前で健在していた。また、剣を抜いて切りかかったものの、それすら意に介さなかった。

（これは……まさか）

確かめることがある、と俺は思った。奇妙だったからだ。

彼女の魔法は明らかにこの世界のマナ媒介魔法ではない。この世界での魔法は空気中に腐るほどあるマナを通して物事に変化を加えるのが主流だ。俺のジャンクション然り、風や炎の魔法だってその例に漏れることはない。

しかし、どう考えても彼女の魔法はおかしかった。物理で殴っても全く効果がないのは不思議なのだ。通常、バリアであってもいくらかの衝撃を緩和する程度が精一杯だろうと思う。だけれども、アニュスの扱う魔法は攻撃を無力化している。

「媒介元が違うのか？　バカな……そんなわけが――ッ！」

無言でアニュスの周りに、先ほどの氷の矢――否、『槍』が展開され始めていた。そして間髪居れずその数多くの槍は飛来させて来た。無論俺だって先ほどのようには行かない。すかさず後ろへ跳び、剣と炎でその多くを斬り、または溶解させた。

その時、自分の傷からの出血が更にひどくなった。もはや痛みすら感じず、意識も朦朧とし始めている。
アニュスはそんな俺を悠々と観察していた。おそらく、俺がこの意識を手放した瞬間に討ち取るつもりなのだろう。
彼女はこの時、初めて明確な笑みを浮かべた。

「……父さん」

アニュスは言いかけて口をつぐんだ。彼女の瞳は、その上空を見つめていた。そしてこの状況で俺は意識を失いかけながらも叫んだ。

「まだだ」

その上空にあるもの――俺がこの世界のマナを使用してではなく、恐らく彼女が使っている魔法と同じ媒介で使われている魔法。

「まだ終わってない！」

薄い水色をしたエネルギーの固まり――フレアを、彼女へ落とした。
突如として凄まじい爆風と炎の渦が眼の前に広がった。煌々としたその炎が空間を渦巻いてゆく。建物はその炎によって側面を舐められ、爆風によって倒壊を始めた。どれほどの規模でこの空間を襲っているのか、今の俺には理解できなかったが、少なくとも彼女を怯ませるだけのことは出来たと思った。また、この爆発に巻き込まれてくれるな、という希望を少なからず抱いた。
今の俺には地面に倒れ伏して前方にエネルギー障壁を展開してこの爆発のエネルギーを緩和するしか出来なかった。体はもう動くことも叶うまい。
命が果ててゆくのを感じていた。そして理解していた。次、攻撃

がくれば死ぬと。それは確信を伴っていた。
――アニュスはどうなっただろうか？
周りを見渡すが、誰もいなかった。あるのは瓦礫が炎によって蹂躙され尽くされたあとの破壊だけであった。人間なぞ、存在すらしていなかった。
では討ったのだろうか。
それは違うと俺はぼやける意識の中で呟いた。
彼女は俺の娘なのだ、この程度で死に絶える程度の人間ではない、彼女は俺の娘なのだ――その確信は、どうやら外れてはいないらしい。
一瞬だけ、感じたのだ。彼女は生きている。それも俺が向かうべき場所へ向かっていると。それは親子の情なのかそれとも、別の情なのか――確認する術はない。
次第に消えてゆく意識の中で、ただ、アニュスのことを思い浮かべていた――

☆

松下が意識を失っているとき、一瞬だけ彼の懐に大事にしまってある『矢』が光った。
『矢』がどうして光ったのか、それは分からない。
ただ――何かに反応したようだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 空即是色（後書き）

戦闘描写が軽いなぁ……

ああ、一応エネルギー元はアレです、なんというか、その……ＳＦとかに良く出てくるアレです。マイナスエネルギーというか虚数世界に満ちているエネルギーを流用しているのです。

いわゆる『〇〇〇〇〇の海』という奴です。ここは後ほど書きます。

ただの巨大なエネルギーの塊としてしか書いていませんがね。

**day after tomorrow**

A single death is a tragedy, a million deaths is a statistic.

ひとりの死は悲劇になるが１００万人の死は統計になる。

by ヨセフ・スターリン

『死ぬより辛いこととはなにか』

このことを聞かれたら、俺は一体どう答えるだろう。いじめ？テスト？　それとも避けられない運命を体験すること？　俺にとってはそれは答えられない質問だ。

もちろんそれは俺が一概に決め付けられるものではないだろう。ある人は『自らの名誉を全て失うこと』と答えるだろうし、またある人は『生きる事』だと言うだろう。それは人それぞれの価値観の上に成り立っていて、またそれが千差万別であることなんて明白だ。

「――アニュス」

だだ――その答えは今の俺には必要なのかもしれなかった。こうして地面に倒れこんで、ただゆっくり自分の傷の修復を行うしか出来ない自分は、そうやって暇を潰していた。

外は肌寒く、体は凍えて小刻みに震える。火系統の魔法が使えればそれも克服できるだろうが、それすら出来ないほど体の端から端まで痛みで動かなかった。

俺は先ほどまで気絶していた。脳が体の駆動系をを強制的にシャットダウンさせ、俺を眠らせていたのだ。感じは悪いが、どうやら痛みに耐え切れなかったらしい。しかも寝ている間、これは誤算だと言って良いが体の治癒魔法は働くことはなかった。そんな治癒魔法なんて掛ける余裕は無かったから当然の結果ではあるが。

起きてからというものの、一瞬で激しい痛みに襲われた。足や腕に穴が開いては仕方ないといえるかも知れない。無論、恐ろしく痛む体を更に痛めつけながら治癒魔法を掛けた。出欠多量で良く死ななかったものだ、と感嘆しながらの作業だった。

――今、何時だろう？

少なくとも二時間は寝ていたとは思う。気絶する寸前に見た星の位置が少しずれていたからだ。星の位置の記憶なんてアテにならないかも知れないが、大体で十分だ。時間なぞ、勝手に過ぎ去ってゆくものだからだ。感じることは出来ても、永遠に意識の中に閉じ込めて置くことなど出来るわけがない。

そう考えている間、俺は石像のように動かなかった。『考える』ことから『視る』ことへ集中した。そうして周囲をうかがった。

敵や戦闘の気配は無かった。

完全なる静寂がこの場を支配し、空間に暗黒があった。しかしそれは心地よく、静かに俺を見守っていた。瓦礫の崩れる音は絶えず放たれていたが、それは今の俺の耳には聞こえなかった。

瓦礫から出た砂は、元々は整備されていたであろう道に堂々と落ち、レンガや木はあちこちに散乱している。まるで戦中の大空襲にあった都市のようだ。いや、そちらのほうがまだ酷かったかも知れない。この町は辛うじて文明の爪あとを残しているのだから。

その光景を見て、ああ、闘争とはこういう風なのか、と半ば呆然としながらもそう考えていた。

「ああ、ヤバイな……こりゃ、マジで死ぬかもしれん」

軽くジョークを飛ばしながらも、傷が治るのをただ祈った。そしてその祈りの一瞬、ふと脳裏に過ぎった光があった。

懐かしい記憶、かぐわしい世界。青春の時代。

――あれはどこだっただろうか？

――あれは一体いつごろだっただろうか？

この世界に来て、俺は確かに心が躍動したのを覚えている。巡り合い――初めて『彼女』にあった時、軽い会話を交わしただけで、俺は『彼女』に惚れたのかもしれない。

俺はふと思い立って、『彼女』が映っている写真を取り出した。

「今頃……どうしてるんだろう。コゼット……アナスタシア」

そこには、金髪碧眼の美しい女性、コゼット・アナスタシアが映っていた。俺はそれを見て、取り留めなく虚しい気持ちに襲われた。

――今、彼女は幸せだろうか？

――誰かを愛しているのだろうか？

俺にとって、幸せは一つの扉だ。一つの幸せの扉が閉じたとき、別のドアが開く。しかし、時として俺たちはその閉まったドアをとても長く見つめているために、その開いた幸せの扉が見えないのだ。

だが、せめて――今、開いている幸せの扉を見つめ続けていなくてはならない。

俺には、アニュスの幸せの扉を開け支えておく義務があるのだ。

☆

それから数時間経過した後、俺は一人で立ち上がれる程度までに傷は修復した。
今だ夜は明けず、空の星が綺麗に輝いている。流れ星は見えない。

「腕が痛む……骨は大丈夫、か」

傷はあらかた塞がっていたが、痛みはあまり消えなかった。それでも意地で筋肉を動かし、立ち上がる。その時にキリリとした感覚が足に走るが、気にしてはいられなかった。
これからしなければいけないことは漠然としていてよく分からなかった。このあと、アニュスを追えばいいのか、それとも別のことをすべきか。

「とりあえずは……ガウェインと合流すべきだな。確か森のふくろうは……」

目を細めて見渡し、その場からさほど遠くない場所に宿があった場所を知る。この体でも十分歩いてゆける距離だ。
それから約二十分ほど、この荒れた道を歩いた。瓦礫やらなんやらが街道中に転がっていて歩きにくいことこの上なかった。
そして俺は目を見張らざるを得なかった。

「何と言うか……何故これだけ立っているんだ？」

目の前にあったのは宿屋。これだけ言えばなんの変哲もないように感じるだろう。だが、問題はそこではない。
たった一つだけこの宿が健全なままであることがおかしい気がす

るのだ。
なにせ、文明が蹂躙されつくされたあとのこの町の中で、以前と同じ状態で残っているのだから。そしてそれが目立っていた。窓はいくつか割れているのは仕方ないと思うが、他は全く生き残っている。
荘厳さすら感じる。
俺はそんな宿屋を呆然と見上げていると、ふと声が聞こえた。

「あら、生きていたの」
「生きていた、とは失礼な奴だ」

ガウェインは目を擦りながらこちらに近づいてきた。どうやら見回りの途中であったようで、その手には剣が握られている。
俺は彼女を一瞥し、すぐ宿のドアを開けて中に入る。すると、中には疲れ切った表情でぐったりしている騎士団の女達がいた。その中の数名は眠っている者や怪我している者もいた。

「彼女らは勇敢に戦ったわ」

ガウェインはいつの間にか俺の隣にいて騎士団の様子を眺めていた。

「死者は？」
「出てはいない。だけど、負傷者は騎士団の約半数を占めている。ま、半数でよく助かったっていうのが今の私の感想ね。敵はそれほど強かったわけ」
「半数が今は再起不能（リタイア）か……痛いな。今再び攻撃を食らったら全滅か」

よくこれだけの人数で防衛できたな、と感嘆する。

だが、この半分がリタイアしてしまった状況は非常にまずい。看護に当たっている人間が四分の一、更に警備に当たっている人間が四分の一だと考えれば、戦力は大幅に低下していることは明白だ。この状況でまたここが戦場になれば――全員が死亡するだろう。

「ここから退避するにも、人手は足らないし逃げる場所もない。将棋やチェスでいうチェックメイトという奴だな……状況は劣悪、衛生状況も悪い。オメガ十一のようにイジェクトできない。最悪だ」

「オメガ十一？」

「……気にするな」

とは言いつつ、逃げられない状況ではこの先全滅は目に見えている。けが人を放っておけないような騎士団のことだ、恐らく最後まで戦うことだろう。

援軍は期待できない孤立した状況の中で、この難易度は高すぎる。死ねと言わんばかりの鬼畜である。いつだったか、日本軍は同様の状況に置かれたのではなかったか。あの時は離脱する者は置いて行き、常にゲリラと戦い、食糧難に喘いで死んでいった。この状況はそれと同等かそれ以下ぐらいだ。それでも難しい状況であることには変わりはないのだが。

「……一般人の生存者はこの宿にはいるのか？　話を聞きたいのだが」

「それは出来ないわ。確認する範囲では、誰一人として生き残ってはいないから」

「――そうか」

小さく、拳を握った。

to be continued...

## day after tomorrow（後書き）

☆以降の文章は、小説家になろうで流通しているような文体で書いてみた。
これからは厨房表現は抑え目に……したい。会話を多くしたい、簡単に書きたい。難しくかきたくない。でも難しく書いちゃう。ツンデレ。

なにより改善したいこと。

読みづらいこと。最強系にするはずが、未だなっていないこと。八十話超えて尚最強系になっていないのは笑える。

# 悩みのち、決意

人は「運命を切り開く」と考えられているが、もしかしたらその切り開くことすら運命の中に組み込まれているのかもしれない。

ｂｙ　荒木飛呂彦

現在の日時――十二月二十五日。
現在の時刻――午前五時二十五分。

この町は海の近くにあるとは知ってはいたが、その海の音がこれほど明瞭に聞こえるのはこの町が開拓されたころから一回も無かっただろう。今夜の海もいつもどおり、荒々しい波音を立て、また風は冷気を伴って瓦礫の山と化した町に吹き付けている。。

寄せては返し、またその繰り返し。

この世界が始まってから、その繰り返しは途絶えたことはない。人間の文明が始まった以前より古い歴史を持つ海は、その自然を悠然と人間に対して牙を向け、あるいは共生し存続してきている。

「ガウェイン、一つ聞きたい」
「え？」

ガウェインはいきなりの松下の問いに少し戸惑いを孕んだ声を出した。何を驚いているのだろう、松下は一瞬そう考えたが、自分の脳内にある『戸惑い』を言語に直す行為を再開する。

「……お前は、自分の大切な人へ剣を向けられるか？」
「――？」
「あるいは」

そこで松下はいったん言葉を切り、一息ついてから言葉を紡ぐ。

「殺せるか？」

ガウェインは何を思ったのか、しばしの無言の後、長い溜息と共に松下の方を向きなおし、こう言葉を放った。

「――わからないわ」
「なぜだ？」
「その状況になってみないとわからないもの。私達人間って、体験から物事を予測していく。だけど、逆に言えばそれこそ『体験』していなければそれが善悪か判断できない。愛しているなら尚更よ。悩んで、それでも悩んで。それで殺すかどうかを判断すればいい」
「『体験』――そんな体験なんぞすべきじゃあない」
「じゃ、あなたは？」

そこで松下は、言葉を詰まらせる。
――俺？　俺がアニュスを殺せるかだと？　簡単だ、できるわけがない。
松下にとって、アニュス・デイという少女は命にも代えがたい『守るべき象徴』だ。理屈抜きで、彼は心の奥底からそう思っていた。だが、数時間前の彼女の裏切り。それが松下の心を粉々に打ち砕いていた。
「俺は……分からない」

自分が彼女に対して攻撃をしてしまったこと、そして彼女の意図が自分に分からないことが全て彼の重圧となっていた。そのことが、この回答を渋らせていた。

答えなんてない、といえばそれまでである。だが、実際その問いを現実で突きつけられたとき、人間は一体どのような行動を取るのだろう。皆一様に先人達が取った行動を取るのだろうか、それとも、自分で決着をつけるのだろうか。

そういう考えが松下の中を渦巻いていった。

「そういえば――アニュスは何処へ？」

その時だった。その言葉はガウェインから漏れた。その言葉が松下の心臓を大きく刺激した。

「確か、アンタが連れ歩いていたわよね？　で、どこにいるの」

「……」

「――死んだ、の？」

「……いや、死んではいない」

その言葉を口に出すだけで精一杯だった。脳が苦しんでいる。悩み、苦しみ。それらが松下を唸らせ、苦悶の表情を作らせていた。

「彼女は間違いなく生きている。いや――そうであってほしい。俺が彼女を取り戻す」

「取り戻す？」

「――もう、聞くな。少なくとも、今は」

ガウェインの瞳に射抜かれて、つい松下は身を引く。その瞳がアニュスと重なったからだった。

松下はその場にいられなくなった。席を立ち、頭を冷やしに外へ出た。
夜空は綺麗だった。どこか神秘的であり、月光が辺りを照らしている。町が破壊された今、その光景は原始を思わせた。
そんな時、地面を踏む音が聞こえたので振り返ってみれば、
「ガウェインか」
何の高揚もない声でそういうと、やはりいつも通りの無表情で俺の顔を眺めてきた。全く持って何がしたいのか理解できない。女心とかいう奴か？　まったく理解出来ない。
そんな中、彼女はこういった。
「私はアニュスとあなたとの間に起きた出来事を知らないわ。だけれど、たった一つだけいえることがある」
「……なんだよ」
「親なら、ちゃんと連れ帰ってきなさい！　例え血縁があろうが無かろうが、ちゃんと教育するのが親の責任でしょ？　なのに――」
「分かっているさ！　分かっている。そんなこと、言われなくても……」
そうだ理解している。理解しているつもりなのだ。
彼女の本当の父と母が、ごく普通に当たり前の責任を果たし、そしていつまでも幸せでいられる家庭を。俺とは違う未来を背負っている彼女を、俺は親代わりとして導かなければならない。
ただ――松下はそう考えれば考えるほど、アニュスの離反が信じられなかった。それが、何より松下を悩ませていた。
「俺は所詮偽物の親だ。本物にはなれない」

ガウェインが松下のヘーゼルアイを見つめる。松下は『また説教か』と身構えたが、その必要はない、と言わんばかりに彼女は夜空を見上げた。

「偽物とか本物とか、子どもにとってはそんなもの関係はないわ。責任も、義理とか関係なく発生する。要は本人次第よ。でも……あなたならどうする？　この状況を」

愛する者を取り戻す――それはどんな善人であれ悪人であれ、戦うには十分過ぎる理由。しかし、それ故に個人的で、エゴイストにならざるを得ない。決して他人の為に戦うことは出来ない。

出来るだろうか、この俺に。

（いや――違うか。怖がっているだけだ）

場合によってはアニュスを殺してしまうかもしれない、取り戻せないのかもしれない。だが、それでも希望を望めるのだとしたら――

彼の心を強く閉ざしていた何かが、一つずつ剥落していき、その心の中に覚悟と使命が入り込んでくるのを感じた。

（選択肢なんていつも一つだった。ただ目を逸らしていただけだったのかもしれない）

やるかやらないか、ではない。

出来るか出来ないか、ではない。

しなくてはならないのだ。それが俺に課せられた任務、それが俺に課せられた義務。

自分にしか出来ない。他人に任せられることではない。

「――ガウェイン、『イントレランス遺跡』の場所まで案内してくれ。彼女はそこにいる」

そうだ、やらなくてはならない。

家出娘を、連れ帰る。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 悩みのち、決意（後書き）

勉強合宿から帰ってきて、その翌日から三十八℃の熱を発している『えくすです』と申す者です。
正直、この話をどういう風な展開にしようか完璧に忘れていたので前半と後半は書き方は違います。
これから三人称で書くべきか、従来の文で行こうか迷ってます。
というか寝よう。うん、そうしよう。幻覚を久々に見たよ。

## 疑問と行動

自国の生存のために、必要であれば血の最後の一滴までも投入する決意を固めた強力な国家を、
腑抜けた国家の連合によって包囲攻撃することなど不可能である。

ｂｙアドルフ・ヒトラー

時は少し戻るのだが……松下がアニュスと戦った後の一時間後のことである。

とある二人の男女……ではなく女達がその町に居た。
ある意味兄弟といわれても仕方のないような女達はまさしくベラトリックスとトリシアである。

「なんというか……悲惨としか言えないわね、これ」

ベラトリックスは砂利道と化した街道を進みつつ、そう呟いた。
正直、これほどまでの悲惨さとは思ってはいなかったのが本音であった。もちろん、自分の上司であるサイサリスがこのような性格で、これほど悲惨な作戦を企てるとは知ってはいたのだが、それを再三思い出された。

「う……やっぱり人が死んでいるのにはなれない……」

既にトリシアはベラトリックスの腰に引っ付いて離れない。トリシアにとってもこの惨劇は恐怖に感じられたのだろう。ベラトリックスはトリシアをなだめるように彼女の華奢な体を抱きしめる。
自分自身もこの惨状には若干の恐怖と自身らの隊長であるサイサリス・ラストレンジに対する恐れを感じている。こういった惨状を見ることは久しいのだが、やはり何処か人の死体に対して恐怖を抱いてしまう。
そんな時にトリシアが引っ付いてくる。このことは、少しベラトリックスを安心させているのだった。

「単純な作戦な作戦がこうも荒廃を招くとはね……軍の守りがほとんどないって聞いていたのだけれど、やっぱりこうなったわけか」

ミューゼス港は実際には兵隊がそれなりの人数しか配備されていなかった町であった。武器と言った軍事系統のものは何一つないこの町は商業と漁業で成り立っていたからだ。ベラトリックスにとって、いくら敵であってもここを攻撃するのは間違っているとしか思えなかった。軍の指令を受けてベラトリックスらは旅を続けていたベラトリックスは、外から見た祖国の判断は甚だしく疑問に感じていた。

「……ほとんど生存者は残ってないでしょうね、この有様だと。町の至る所は崩壊、瓦礫の山。見事に作戦を遂行したわけか」

その言葉には苛立った感情も含まれていた。
そんな折、ふとトリシアは声を発し、

「そういえばベラトリックス。僕達はどうしてここへ来たんだい？
僕達は来る必要はないと思うけど……」
「ええ、普通はそう思うでしょう。でも私達の『隊長』に会わなき

ゃならないの」
「『隊長』って、ベラトリックス！　サイサリスと会う気なのか？　じ、冗談はよしてくれよ！」

トリシアにとってもサイサリスは恐怖の存在であったし、何時の日か『犯されるかもしれない』と密かに思っていたのだった。それ故にどうしても相容れない存在として日ごろから捕らえていた。
しかし、それでもベラトリックスは『会う』と言った。

「じゃあ文句でも言うつもりなのか？　隊長に？」
「大体はその予定だけれど……やっぱり怒られるかしら？」
「当たり前だ！　しかも僕もついでに怒られる！」

どうもトリシアは心の奥底からサイサリスを恐れているらしい、とベラトリックスは微笑みながら思った。
既に道なき道と化した町を進んで行き――彼女達は自らの隊長と会うために歩みを続ける。

☆

町外れ。
ベラトリックスらがサイサリスの拠点に着いた時には既に日は落ちていた。拠点、とは言っても小さなテントが幾らかあるだけなのだが。
これほどの戦力でよくもあれだけのジェノサイド作戦を結構出来たものだ、と思わずベラトリックスは感心した。いや、ただ単に攻撃しやすかったから戦力が要らなかったのか、それとも本国と同盟国の戦力が落ちてきている証明なのだろうか。

ベラトリックスはテントの傍で警備をしていた女を見つけたのでそそくさと歩いてゆき、自己の身分証明をする。

「これは……『レイヴン』の、ですか」

その女は目の前に立っている二人が自らの階級的上官であることを認め、慌てて敬礼する。少しだけ怪訝そうに顔を引きつらせたのは気に喰わなかったのだが、あえて無視する。

「隊長は今どこに？」

「隊長……？」

「この作戦を指揮しているサイサリス・ラストレンジの事よ」

すると女は『ああ、それなら』と理解を示したように指を向ける。

「あのテントにいるとは思いますが……」

「それだけで十分よ。ありがとう」

随分素っ気無い感謝の言い方ね、と自分に対して心の中で呟いた。どうしてこういう風に相手に感謝するのは苦手なのだろうか。感謝することもされることも、どうしてもどちらも気に喰わない。ベラトリックスはそう自己評価を繰り返していた。

（だから未だ彼氏なし、麗しの処女……嫌ねぇ）

これまで人を好きになった経験がほとんどない彼女にとって、それこそ『愛』という感情には疎かった。親の愛は理解できるが、他人を愛する感情がどうにも良く分からない。だから今回のジェノサイドの現場を見ることで何か分かるかも知れなかったが、こみ上げてきたのは虚しさとサイサリスに対する怒りだった。

ベラトリックスらは示されたテントまで移動し、少しだけ怖がりながらも声をかけずに入ろうとした。その時であった。

「待っていたよ……二人とも。やはりアンタ達は来るか」

声がした。そして間違いなくこの声はサイサリスのものだ。

二人はゆっくりと振り返った。そこには服がボロボロ、と言わないけれども所々切れているサイサリスが立っていた（ちなみに彼女は基本鎧なんぞ身に着けないらしい）。

「ど、どうなさったのですか、その服は……」

トリシアがやや裏返りそうな声で言う。

「いや、ね……いい男と少し殺し合ってきただけさ。なかなか面白い人間だった」

「殺したのですか？」

「いや、まださね」

疑わしいものだったが、サイサリスがその時に見せた背筋も凍るような笑みの前にはそれを確認する術はない。しかしまだ、という受け答えを見せ、かつ冷たい笑みを浮かべるというのなら、その敵は生存していることだろう。

ふと、その人物はだれだろうとベラトリックスは疑問に思った。彼女にこれほどまでに楽しそうにさせ、かつこのジェノサイドを生き延びた上に彼女からも生還している。どれほどの戦死であろうともそれはかなり難しいであろうことは想像には難しくはない。

だが――今このことについて触れることは必要なことではない。

ベラトリックスは少し息をつき、それから覚悟を備えた眼で眼前のサイサリスを捕らえた。

「隊長。私たちはこの作戦についていくつか不満があります」
「分かっている。お前たちの文句は既に理解しているよ」

それなら何故、とベラトリックスは嘆いた。しかし、彼女は未だその笑みを浮かべたままで、

「確かに私たちは一般的に言われる『ジェノサイド』を引き起こした。そしてこれは社会的に見れば完全悪だろう。だがね、ベラトリックス。この世の『悪』とはなんだ？　『正義』とはなんだい？」
「それは……私たちの――」
「私たちの？　規範？　常識？　社会？　私は生まれた時からずっと悪いことばかりやってきたさ。殺人、拷問、様々な犯罪行為に手を染めた。だが生きる為に必死だったんだ。それを『悪』と『正義』二分化できるかい？」
「しかし！　それは議題をすり替えているにしか過ぎません！　私はどうしてこのようなことを引き起こしたのか、それに対する罪悪感を抱いているか知りたいだけなんです」

ベラトリックスは自分の言葉がうまく伝わらないことに少しずつ苛立ちを感じていった。トリシアはこの言葉の投げ合いに既に入っていくことが出来ていなかった。

「罪悪感を感じない人間はいない」

サイサリスはただそういった。

「だが、それでもやらなければならないことがある。私はまだ任務を『完了していない』」
「――？　まさか、別の場所を攻める気なのですか！　神はそれを

許さない！」
「『神』？　『神』！」

サイサリスは何かベラトリックスの言葉に引っかかったように笑い始めた。
その様子を見ていたトリシアもそのあまりの高揚ぶりにややおびえた反応を見せ、嫌な汗を背中に感じていた。

「神が怒る？　馬鹿をいうんじゃあないさ。この世でもっとも人間を殺したのは神さね。ノアの大洪水、ソドムとゴモラの壊滅！　どれもこれも、神が殺したのさ」

どこかの人が見たら何を言っているのだろうと思うだろう。だが、ベラトリックスとトリシアが気になったのは少しだけずれた事柄だった。
ふと、思わずトリシアが口を滑らせる。

「あの、すいません。『のあ……の、大洪水』って……？」
「――？　ノアの大洪水を知らないのかい？　……ああ、この世界の聖書には書いてなかったか」
「え？」
「いいや、忘れてしまっていいさね。気にすることでもない」

首をかしげるトリシアに何かを隠しているかのように振る舞うサイサリス。他人から見ればどれほど滑稽に見えようか。
ベラトリックスにとっては未だ油断もあったものではない。光景が滑稽に見えようが、隙を見せれば殺されるのはこちらだ。現に昔一度殺されそうになったこともある。
故に、彼女は懐へ手を入れてナイフ投げの準備をしていた。一秒もかからず投げられる。

それを知ってか知らずか、サイサリスは語る。

「神は人間の運命を支配し、この世界、天象と変化によって神は自らの存在と意志を具現する。私はあくまで『神』の真似事をしているだけだ」

「そうまでして……あなたの目的は、一体……なんなんですか！」

「たった一つだけだ。その目的を成就させることこそ、私の使命、私の運命。黙示を告げる任務」

そう告げたところで、初めてサイサリスは無表情になり、どこか空しいものを感じさせる表情を見せた。ベラトリックスはそこで何か一言言ってやりたかった。罵倒でも、その他の言葉でも、何か、せめて一つぐらいは言ってやりたかった。しかしそれは無理な話だった。どこか自分の人生に絶望を見いだしているかのような彼女は、その言葉を言葉として受付はしないだろう。文字通り、彼女は戦いに生きるのだ。そういう人間なのだ。

そのうち、サイサリスはひっそりと口に出していった。

「命令する。これからお前たちは国に帰り、このジェノサイドは成功したが部隊は全滅した、と伝えろ。生存者は一人もいない、とな」

そういって、サイサリスは一冊の本を手渡してきた。

「その本に確実に反応する人間が、この世界に『二人』いることだろう。見つけ出して、その人間に士官しろ」

ベラトリックスは手渡された本を開いてみると、そこには挿絵一つない、文字だらけだった。しかも、自分では読めない文字が印刷されている。この世界の印刷技術ではないことは確かだった。

「これは一体なんですか？」
「……まぁ、そいつに聞けば教えてくれるさ。さ、行け。もう戻ってはくるな。我々は『イントレランス遺跡』へ移動する」
そうして追い出されるように彼女らはテントから出た。黒い本も一緒である。
「どうするの？　これから」
トリシアが聞いてきた。どうでもいいが下半身が未だに震えている。
自分自身はあえて「分からない」と答えておいたが。
「……全滅？」
そこでふと疑問を覚えた。
なぜ彼女たちは全滅するというのだろうか。彼女らを　掃討するだけの戦力は今の時点でどこにも無いというのに。
サイサリスが言っていた男がそうする、というのならば理解できるが――無理だろう。おそらくサイサリスを倒すことはできまい。もう既にこの町から逃走している可能性もある。
――ではだれが？　どのように？
その時、ふと松下のことが思い出された。強そうではなかったが、無駄に生き残りそうな感じではある。しかし、彼がサイサリスと対等に戦う姿が想像できはしない。
――ならば確認すべきか。
未だ夜は明けぬ。この時間帯ならば、イントレランス遺跡の周辺に偵察拠点でも作れそうだ。

トリシアにそのことを伝えると、嫌々ながらも承諾してくれた。
トリシアとしても疑問に思っていたらしい。
そうして彼女らは動き出した。

to be continued・・・

## 疑問と行動（後書き）

どうしても正義と悪と神を論じちゃう。ヤッベェよこれ……
これ言葉のキャッチボールじゃなくて打ち合いだよ。テニスのあれだよ、テニスの……第二王女様？だかの技の出し合いだよ……

なんかサイサリスに同情できたひとは評価していってね。

# 迷宮

「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。
わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。
彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」

それから、御使はわたしに言った、

「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれたものは、さいわいである」

またわたしに言った、

「これらは、神の真実の言葉である」

ｂｙ　ヨハネ黙示録

はるか北の空は雲に黒い闇を侍らせながら、また目を東に向けてみるとそこには早くも川の水のような夜明けの色が流れていた。今日という日、おそろしい結末を予感させる頭上の数々の星々は、太陽の光によって青みを帯びてきた空によって次第にその行き場をなくしていった。
歓迎すべきなのか、それとも拒絶するべきなのか。それはこの空の下にいる俺にはわからなかった。来るべき再戦、我が娘との短くも長い因縁を壊すのか、戻すのか。それは今日という日に掛かっているからだった。

冬の癖に、俺が一番嫌いな季節の癖に、その光は何処か俺を祝福しているようであったし、それは何より頼もしいことではあった。今の状況、自然環境ぐらいが俺の数少ない味方なのかもしれない。

「あら、味方なのはこっちよ」

やはりいつもどおり表情を崩さないガウェイン。俺は「そうかい」とだけ言ってまた空を見上げた。

「昼には……雪でも降るかね？」

「多分ね。ここら辺は結構降ると積もるから、厄介なことにはなりそうだけれど」

「なら、はやく終わらせるしかないな……今、七時って所か？」

「七時十二分」

現時刻、七時二十分。

現日時、十二月二十五日。クリスマス。

嫌なものだ。こういう時、俺はどんな風な顔をすればいいのだろう。ひどく悲しんだ様子で憂鬱は表情を浮かべればいいのだろうか、それとも必ず取り戻すと意気込んだ感じの表情をすればいいのか。実際、俺はそのどちらでもなく、無表情であったのだが。

これからどうしようもない戦いに行く。空しいものだ。俺はそう思いながら目の前にある『イントレランス遺跡』を見つめた。地面をほじくり返されたあげくに晒されたその遺跡の外壁が年代を感じさせた。

そしてまた別のところを見る。その遺跡からいくらか離れた場所にある洞窟、その奥にある『祠』があった。

その祠の前には、既に転送魔法が作動しているらしかった。黒い空間がその祠の前で空中に浮揚しており、それは地獄の門にも思われた。

「ガウェイン、やはり転送魔法が作動しているみたいだな。だれかしらが作動させたらしい。この先に敵がいるのは間違いはなさそうだな」
「ええ。しかもこれはイントレランス遺跡に直通になっているみたいね」

なるほど、あのサイサリスの予言とアカシックレコードの過去はこうして繋がっていたわけだ。
そう、つまりは――

「ここに、あの『究極の力』があるってわけね」

こういう状況にもなれば、やはり信じられないようなことが現実になっていくのが分かる。核のような力がこの先にあるとなれば自然と恐怖を覚える。
ガウェインたちは『究極の力』を、俺は『娘』を。
暗黒の道が目の前に広がっている。その転送魔法は依然として暗い空間を祠の前に出現させ、この中に入るなと言わんばかりに存在感を醸し出している。

「行こう。こうしていても時間が過ぎるだけだ」

俺はそれを見つめ続けたまま、ただそういった。
ガウェインとその部下たちはその暗黒空間へ手を伸ばした。警戒しているようだ。

「心配はない。俺が先に入る。お前たちは後に続いてくれ。転送のパスワードはガウェインに任せる」

俺は警戒したままの騎士団を退かし、先に入った。暗黒空間、なるほど、確かに何も見えないが実害はないらしい。それから次々に騎士団も入って来て最後にガウェインが入ってきた。

「ヴィア・ドロローサ」

暗黒の中で何も見えないはずなのに、なぜかその言葉を耳で聞いた瞬間、様々な色が脳裏に焼き付いてきた。その内自然と意識は消え失せ、全ては暗黒の中へ消えていった。

☆

まるでどこかの教会を思わせるような、それでいて悠久の時間を感じさせるような。恐らく俺たちが想像する遙か昔からこの場所は存在している――そんなことを思った。

中は思わず声を上げるような大きな空間だった。聖堂、とでも呼称しようか。その聖堂内の奥にいくつか通路があり、かなり細分化されている。そこから考えると、ここが中心部かその近くだと思われた。

やたら埃が舞っている。やはりかなり昔から存在しているらしい。俺は少し咳き込んだ。

「全く、古い建築物ならではの埃の量だ。これは、流石に……掃除したいものだ」

ガウェインらは慣れているのだろうか。割と平然としているのだ

が、やはり女性らしく気持ち悪くなったりするのだろうか。まぁ彼女を女性らしく扱ったことなど一度もないのだが。

「あの図書館と同じように、また宗教画が天井にあるな。天使が二人……」

天を仰げば、そこにどこかで見たような宗教画がある。二人の天使が何かを持って天に昇っている様子がとてもリアルに描かれ、神々しさが垣間見える。

俺はしばらく自分の成すべきことを忘れ、その絵を見つめていた。

「松下、天井ばかり見る必要はないでしょう？　ここは敵陣と同じ。ましてやあなたの娘がいるんでしょう」

ガウェインの突っぱねるような声で俺は我に返った。後ろにいつの間にかガウェインが居て、その手には剣を持って常に周りに注意を払いつつ話しかけてきたようだ。他の騎士団も同様に警戒していた。どうでもいいのだが、実は人数が足りない。なぜなら原隊の四分の一しか連れてくることが出来なかったのだ。負傷した四分の一、そして治療を行う人間四分の一。さらに彼女らを護衛する四文の一の人間。そしてここに連れてきたのはその残りの四分の一の騎士団たちだった。

彼女たちの戦力は正直分からない。だが、やはり数が少ないという思いは否めない。こうなると、やはり早急に終わらせる必要がある。

俺は天井から目を逸らし、この遺跡の内壁を見つめた。窓は無く、外の様子は分からない。

「この遺跡、今まで誰かが入ってきたことはあるのか？」

この問いは至極真っ当なものだった。エジプトのピラミッドを例にしてもどうやっても遺跡群は盗掘される運命にある。そうなればガウェインらが探している『究極の力』はないのではないのだろうか。

しかしそれを否定するように、

「この遺跡が発見されたのはつい最近らしいわ。しかも進入方法が皆無で、穴でも開けて入ろうかと言われていたほど」

ガウェインはそう答えた。ユーモア溢れた答えなのか本当なのかはその表情からは読み取れない。

「盗掘者は今までに一人もいない、か。ここに呪いでもなければいいがな」

「呪い？」

「気にするな。ただ気持ち悪い場所だと言いたいだけだ。他意はない」

ツタンカーメンを捜した発掘隊もこのような気分だったのだろうか。それにしては感動は薄いものだ。

本当にここに彼女がいるのだろうか。俺の心の中にふとした疑問が浮かんだ。ここの転送魔法は起動していたし、確かに誰かが入り込んでいることは間違いないのだ。しかもアニュスの存在は感じている。ただ自信がないだけなのだ。

俺は聖堂を抜けて狭い通路に出た。地図がないと迷いそうな作りだった。

「ガウェイン、ここからは俺は一人で行動させてもらう。お前たちは探す物を探してさっさと脱出しろ」

俺は振り返って天井を見上げているガウェインを見ながら言った。
返事はなかった。
「……せいぜい、生き残れよ」
どうせ聞こえないだろうが、とりあえず呟いてみた。いや、これはガウェインにとっては無駄な忠告か。
つまらないものだ、そう考えつつも、俺はこの遺跡の中へ飛び込んでゆくのだった。

☆

「生き残れ？　それはむしろあなたに言いたいぐらいだわ」
ただ、ガウェインはそう呟くと部下を招集し、松下と同じように迷宮へ入り込んでいった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 迷宮（後書き）

ダメじゃ、文章がイマイチじゃ。
あとで改稿しときますわ。

新しい言葉。
『源氏ってる』
訳＝モテモテなのに幼女を愛する変態人間。もしくはイケメンなのに幼女と戯れている様。

源氏が幼女である紫の上を自分の理想の嫁として育て上げたというあまりのロリコンっぷりから作者が思わず感じてしまったことに端を発する。

例文
「おい、あいつマジ源氏ってね？　幼女を肩車してるぜ！　オイオイマジ源氏ってる！」

……この作品の主人公って確実にロリコンだよね。

## 荒野の荒波

『覚悟』とは、犠牲の心ではないッ！
『覚悟』とは暗闇の荒野に進むべき道を切り開くことだッ！

ｂｙ　ジョルノ・ジョバーナ

多くの年月が経過したと思われる遺跡は、ここにいる人間を強く拒むようだった。
ヒビが入った柱や壁、そして床。そこには幾多の人間を動員して作り上げた当時の最新建築物であった建物の成れの果てだ。人間の活動がなくともいつかは全ては滅ぶ。そういうことを思わせる光景だった。
所々魔法が掛けられていてこの建物の完全なる崩壊から守っているのは先ほど知ったことだ。なるほど、未熟だとは言え、この時代まで現存させられるだけの効力はあるのだ。そう考えれば魔法とは俺の世界の科学技術を超える部分があるのかもしれない（ちなみにこの遺跡は魔法によって光が必要最低限はされていた。これは素直に感心する）。
俺はそのままいくらか通路を進んだ。途中、いくつかの部屋があったがそこにはアニュスの気配はない。
「ダメだな……どこにもいない。これじゃあアニュスを救うどころか俺までここで死にかねん」
ここで時間を浪費しても意味はない。食料を持ってきていない以上、活動時間は自然と限られる。だが、それも向こうは同じのはず

だ。同じ人間、エネルギーを消費する生物ならば排泄及び飲食は必ず行わなければならない。生物である以上、避けられない生理現象だ。

俺はそう思いつつ、更に進んでいった。

（ん？　何だ、この音）

キィィィィ――

その時、結構近くで変な音がした。どこだろう、思わず俺は振り返った。

俺はしばらくその音を聞くために身動き一つしなかった。俺の心臓の鼓動が体を伝わって聞こえてくる――

――どこだ？　この音はどこから来た？

俺の心に動揺が沸いた。これはもしかしてアニュスなのか？　それともサイサリスなのか？

思わず俺の足は動いた。そしてその足は走り始めていた。心は揺らぎつつも確認したいという気持ちが湧き上がっていたのだ。しかし、それがいずれ絶望に繋がるだろうということはどこか分かっていた。

そしてある場所で足は止まる。ある聖堂のようだ。中心に何かの箱が見える。俺は不安と共にその場所へ踏み込んだ。その場所はとても大きな空間が広がって、まるで中央にある奇妙な箱を祭る為にあると思わせる。また、この遺跡を支える支柱がいくつかあった。

俺は思わず中央の箱の部分へ歩んでいった。

それは、まるで『箱』というよりも誰かの棺桶を連想する。いや、むしろそうなのかもしれない。俺はその『箱』へひとまず触ってみた。

まるで金属のようだった。表面は丁寧に黒に塗装されて、そう感じただけかもしれないが……だが、どうにも奇妙ではあった。また、その『箱』の中央には何らかの記号が彫られていた。

俺はその記号を、何かの文字だと理解した。

「また新たなる青年の再臨。我は知る、彼はいずれこの場所に来ると。その時、この聖櫃は開かれ再びその青年を守る鎧とならん」

俺にはその意味を理解するのにしばらくかかった。するとこの箱の中に何かしらの鎧が入っているのだろうか……？

ふと、興味をもって開けてみようとしたが、どうしてもそれは開かなかった。

「まぁ無理してあける必要はないだろう。どうせ風化しているだろうしな。興味は尽きな――」

だが、その独り言を完璧に告げることはできなかった。そうだ、俺はそこで気づいたのだ。

――アニュス！

そう思ったとき、俺はこの聖堂の端に立つ一人の少女の姿を見た。体に身につけた白い服が俺の目を引いた。

アニュスは俺がここに来ることを知っていたのだろうか。その手には既にあの時身につけていた弩弓があった。そしてその弓に既に弓はつがえられている。

「……父さん」

アニュスは笑顔とも泣いているとも取れない寂しい表情を浮かべた。

――どうしてそんな表情を浮かべるんだろう。それが分からなかった己の未熟さを恥じると共にどうしようもない胸の痛みが襲って

きた。
そうだ、俺は彼女の親ではない。ただの偽物にしか過ぎない。だけども、それでも俺は覚悟したはずだ。俺は彼女の為に生きると。
空気の流れはほとんど無に等しかった。誰も動かなかった。その感覚が、俺の時間を引き伸ばしているのだろうか、三十秒が一分にも二分にも感じた。恐らく俺がその事実を認識したくないだけだ。そう思った。
彼女はその弩弓を一寸の狂いもなく俺の心臓を狙っている。撃たれれば回避できる可能性は少ないだろう。むしろ刺さって一瞬の内に絶命する可能性だってあるかもしれない。
俺はそう考えきれる自分の冷静さを悲嘆した。どうして彼女を目の前にして『生きる』『死ぬ』のことを考えるのだろう？　俺にはそんなことは一切関係ないというのに、どうしてそう考えるのだろう。俺にとって『彼女』こそが『生きる』目的なのに。

「……」

言葉は要らなかった。彼女の番えていた矢が一瞬の手の動きによって放たれた。そこに慈悲は存在しない。まっすぐ一直線に俺の心臓を射抜こうとする。俺は最低限の体の動きで何とかそれを避ける。少しだけ鏃が俺の腕をかすめ、肉を抉り取ってゆく。
選択の余地はない。もはや強制的に彼女の意識をシャットダウンさせるしかない。多少の攻撃はやむを得ないのだ。
「アニュス、俺はお前を連れて帰る。少し痛い目に会うかもしれないが、そこは我慢しろよ」
「フフ……私は父さんを導くためにここにいるのですよ？　我侭かもしれませんが、少しは子供に付き合ってもいいんじゃないでしょうか」

そこで初めてアニュスの笑みが零れた。ジョークを孕んでいるとは思えない。だが、思考コントロールを受けていないようで少し安堵してしまう。少なくとも彼女自身の意思で行動しているようだ。それならば、俺がどうにか教育すれば更生するだろう。

彼女は以前と同じように周囲に氷の矢を出現させた。そのうちの一本を掴み、弩弓に番える。

「アニュス！」

「Ｒｅｑｕｉｅｍ　ａｅｔｅｒｎａｍ！」

そうして、俺の人生における最悪の戦いが幕を上げた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 荒野の荒波（後書き）

多分ペースが遅くなると思う。
というか縦書きはＩＥだけじゃなくてクロームやＯｐｅｒａに対応しておくれ。横書きじゃ辛い。
作者は一番人口が少ないＯｐｅｒａを使用してますが、もっと待遇を良くしておくれ。

# THE BOOK

「もしも人類史上、究極の小説があるとしたら……」
「……その小説で、人を殺せるかもしれないな」

by 蓮見 琢馬

誰かに監視されているような気がして、ガウェインはふと後ろを振り返ったが、その部屋には自らの部下しか居なかった。奇妙。そう思いつつも、後ろ髪が引かれる思いだったのだが、再び読書を再開した。

その彼女が今手にしているのは黒い本だった。

さきひどからガウェインは、この埃っぽい部屋を言ったり来たりしていた。このイントレランス遺跡の最深部にあったこの部屋は、宝物庫とも図書室とも思わせる広大な空間の周囲はすべて切り立った壁だった。壁は透明なガラスで造られ、その奥の宝石をくだいてばらまいたような多彩な色と光のはんらんをみせていた。ただ奇妙だったのは、ただ一冊の本しか存在していなかったことだけだった。

どれくらいの年月が経っていたのか、既に本棚はその形を維持しておらず、また机や椅子はもはやゴミと化していた。この建物を維持するだけの魔法が効果を発揮しているのはガウェインにも理解できたのだが、どうやらこの道具の類にはその魔法はかけられていなかったらしい。

ただ、その中で目を引いたのが、この黒い本だった。

この本はただ一冊、この部屋の中央で厳重に保管されていたもの

だった。触れるだけで一発で昇天しかねない罠が多く刻まれ、その魔法の封印を解くのにどれくらいの手段を講じたか、今では思い出せない。
だがやっとの思いでその封印を解き、この本を開いた時、その本の内容は理解できないものだった。

「この言葉、読めますか？」

同じくこの本を隣で眺めていた騎士が尋ねてきた。ガウェインはいいえ、と答えた。

「これは現代語でも古語でもない……歴史の中でこの文字が使われたことがない、奇妙な文字……」
「古語でもない？」
「そう。私が知っている範囲で、この文字は使われたことがない」

その本に使われている本は奇怪でしかなかった。まるで読めない。一応何かしらの法則性が見えるものの、もはや文字として認識していいものか。
ところどころ『α』と似ている文字が出てきたのだが、読み取れたのはそれだけだった。
これが我々が求めていたものなのか、次第に疑問に思ってきた。

「読めない……」

まだ他に書物があるかもしれない。あのアカシックレコードで見た書物はこれではないかもしれない。何時までもそこにいてもしょうがないので、ガウェインはその書物を部下に持たせてその部屋を出た。ガウェインにとってもそちらのほうが建設的だと判断したのだ。

コツン……。コツン……。
その時、ガウェインの耳に遠くから音が聞こえた。人が硬質の床を歩くときの音だ。自らの部下はここにいるし、何より動いてはいない。ガウェインはふと疑問に思った。
『彼』がここに来たのだろうか。足音は一人のようだ。しかし、それにも疑問はあった。彼は自分と袂を分けたはずだ。ここに来ることと自体はおかしくはないのだが、それ自体の確立は低いと思われた。
しかしガウェインは思わず剣に触っていた。自らの体が警戒している。

しかし、その邂逅は思わぬ方向からの声により達成された。
「かつて発動した『究極魔法』アルテマ、メテオ……そしてそれが封印されている書物。手に入れたのかい？」

何処だろうとガウェインは辺りを見回した。声の発信源はすぐ近くだ。その時、彼女はまるで悪魔のような体つきをしていた女をみつけた。
身長が自らと同じくらい、やや細身の体躯をした女だった。冷たい目線でこちらを睨みつけてくる。

「ふん……どうやら、目的は達したようだねぇ」

その女の目線は後ろにいる部下の脇に抱えられている本を見下ろした。

「……あなたは敵？」
「敵？　まぁ、人間の解釈で考えればそうなるさね」

女はかすかに笑った。嫌な汗がガウェインの背中に伝った。

「中身は見ただろう」
「読めなかったけれど……知っているの？」
「何度も輪廻を繰り返せば、それぐらい簡単に予測できるさね。あんたの未来は知らないが……」

『輪廻』
その奇妙な言葉をガウェインは口の中で反芻した。

「あなたの目的は一体何……という質問は意味を成さないわね。あなたはこの本に対して何か知っているようだけれど……ということはこれは本物のようね」
「本物、というよりはこの遺跡内にそれしかないのだけれどね……ククク」

この女には何か恐るべき謎がある。おそらくそれは自分が想像できないほど深い溝の奥にあるモノなのだ。自分に知りえない、彼女の秘密――それはブラックボックスなのだろう。そしてそれが自分をここまで恐れさせている。
思わずガウェインは剣を手に、幾許かの距離を取って構えた。

「この遺跡の有様は、まるで人間の行く末をあらわしているようにみえないかい？」

ガウェインの敵対行動を見て尚、彼女はその笑みを浮かべたまま言った。

「この遺跡はどういう意図で作られたのかは私は知らない。だけれど、この遺跡を使っていた連中はもうここを使わなくなって、ここまでの荒廃を招いた。まるで、この世界のようじゃないか」

「……貴様、何を言いたい？」
「いずれは人は死ぬ。その時残った文明は多くの年月をかけて自然に消えてゆく……この遺跡のようにね。回復不可能な破局ほど実は静かにやってくる。だえれど、それを繰り返していたとしたら、あんたはどう思う？」
「繰り返す？　何を」
「崩壊と再生――神は一定の周期で崩壊と再生を行っているとしたら？　そしてそれを食い止めるために戦士を送り込んだとしたら――」

もはや彼女の言うことは理解が出来なかった。誰にいっているのか、それすらも分からなかった。
――繰り返す？　何を？　崩壊と再生だと？
何が消え、何が再生するのか。それは恐ろしくスケールの大きい話だった。普通は真に受けないだろう。いや、『だからこそ』それに疑問を呈したのだった。
女はまた高らかに笑うと、

「私はここでお前達と戦うつもりはないんだけれど……そうさねぇ、邪魔されると面倒だ」

女はいい終えると指をパチンと鳴らす。
すると、どこから出てきたのか、女の後ろから数人程の杖を構えた敵が現れた。

「ククク……さて、私は任務を行うとするかねぇ。ああ、あんた。多分そいつらは弱いよ。すぐ殺せる。殺したらさっさとここから逃げるべきさね。あの『良い男』に巻き込まれないうちに」

ガウェインはその醜悪な笑顔を二度と忘れはしなかった。そのす

ぐ後、攻撃は放たれ、ガウェインらを襲う。
悔しくてたまらなかった。どうしようもなく悔しかった。ただ五分にも満たない邂逅だというのに、この屈辱はなんだろう。私と戦うのを拒否された。それだけでもこの騎士の身にとっては屈辱だった。
突如、目の前に炎が飛来し、ガウェインは剣を一振りしてそれを容易く打ち消す。

「ククク……じゃあね」
「く……貴様！」

ガウェインはさってゆく女の背中を一瞬だけ見て、再び戦闘へ突入した。本心は追っていきたかった。だが、まず決着をつけねばならなかった。
それが、ガウェインにとってなにより歯がゆかった。

――後であの女を殺す。
そう思った。

しかし、ガウェインがサイサリスを見たのは、それが最後だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## THE BOOK（後書き）

ジョジョ八部が始まるみたいです。まだＳＢＲの文庫が発売されてないんだけれど。舞台は杜王町だとか。

いつか、サイサリスの裏側を書いてみたなぁ。この描写じゃあ訳わかんねぇ。というか書かないとヤバイ。
でも、やはり大学生になってからだろうなぁ。高校は中学生の時はラノベみたいな青春を期待していたんだけれど、あいにく私はモブキャラのようだ。例をいうなら、幼馴染が主人公に寝取られされつつも、やはり友達だからあきらめる――みたいな感じか。
この小説を読んでいる小学生・中学生のみんなは、覚悟せよ。君たちが妄想しているほど、現実は甘くない。世の中顔だ。異性の心境なんて行動ですぐ読み取れる。

……ＤＱＮにはならないでね。

## 『無限』に流れ着く者

始まりと呼ばれるものは、しばしば終末であり、終止符を打つということは、新たな始まりである。
終着点は、出発点である。

ｂｙ　トマス・スターンズ・エリオット

この俺には覚悟があった。
一人の大切な娘を守る親であること。その人生を託せるものに出会うまで守り続けること。
それこそが、この絶望した世界の中で唯一見つけ出した希望だった。なにより優先するべき、命に代えても守り続けたいと思っていた。そして、次の世代に自分の意思が託せれば。それだけが『願い』だった。
だが――その使命を今、俺はどうしているのだろう。

「Ｒｅｑｕｉｅｍ　ａｅｔｅｒｎａｍ　ｄｏｎａ　ｅｉｓ，　Ｄｏｍｉｎｅ，ｅｔ　ｌｕｘ　ｐｅｒｐｅｔｕａ　ｌｕｃｅａｔ　ｅｉｓ．」

彼女は今、その手に持つ弓で的確に俺を射抜こうとし、また魔法を使って攻撃してきていた。
現実として受け入れがたい、されどこの目で見ゆる確かな現実。この遺跡内のカラカラした空気がその現実に色を添えてくれる。これは堪らなく憂鬱にしかならない。確かな現実がそこにあり、俺はそこに存在しているのだ。
――どうして、お前はそんな顔をするんだい？　アニュス……。

攻撃してくる度に、俺はいつも見てきた愛おしい顔は、明らかに悲しみを表現していた。そしてその弓を持つ手が確かに震えているのにも気付いていた。不思議で堪らなかった。悲しかったのだ。

「……もう、戻ってくる気はないのか」

「――ッ！　Ｔｅ　ｄｅｃｅｔ　ｈｙｍｎｕｓ，　Ｄｅｕｓ，　ｉｎ　Ｓｉｏｎ，ｅｔ　ｔｉｂｉ　ｒｅｄｄｅｔｕｒ　ｖｏｔｕｍ　ｉｎ　Ｊｅｒｕｓａｌｅｍ．」

言葉を遮るように、彼女は詠唱する。

「俺は善人でもなければ悪人でもない。ただの人間だ。当たり前のように人を愛し、当たり前のように人を憎む。いつかは死に、この地面と一つになる。当たり前のことだ」

「……」

彼女の前に青白い色を伴った光の障壁が展開される。対物理バリヤーだ。この障壁があるかぎり、こちらの物理攻撃は一切通じない。この前では剣士などゴミに等しい。

しかし俺にはその障壁なぞどうでもいい事柄だった。俺はもともと切り込むつもりなぞ微塵もない。一人、娘の攻撃を踊るかのようにして避け続けていた。

「今まで俺はくだらない人生を生きてきた。だがな、アニュス。いつかは塵と消えるこの俺でさえ『人を愛する』ということをこの十数年の間で学んだ。……初恋もしたが、ただ見ているだけだったけどな」

聞こえていたらいいな、そういう気持ちでただ俺は喋りつづけた。飛来する氷の矢、槍。それらを剣で薙ぎ払い、魔法で消滅させる。

攻撃は以前と同じ一定の方向性しか持たないことからその迎撃は容易いことだった。
どうすれば彼女を我が手に取り戻せるのだろうか。反抗期になった子供は手に負えないと聞くが――などという緊迫した状況下においてもそのことを考えていたのだが……
――突如、アニュスの周りの光が氾濫し始めた。

「Ｋｙｒｉｅ　ｅｌｅｉｓｏｎ，Ｃｈｒｉｓｔｅ　ｅｌｅｉｓｏｎ．」

その光はアニュスを中心にしてではなかった。正しくはその正面――そこに、小さな球体が浮かんでいるらしかった。それ自体が強い光を放っているため、正確に視認が出来なかったのだ。
思わず俺は身構えた。段々とその光が強くなっていき、光と共に熱が体を焼く。
アニュスはその火球に、更に何処からか魔力を詰め込んだ。そして同時に恐ろしい太陽の色から青白い火球へ変化し、また膨大なエネルギーを放ち始めた。

「ディラックの海からのエネルギー転換……それを魔力として火球に更に詰め込んだか！」

一瞬の認識だった。それは紛れもなく『ディラックの海』より出でる無限のマイナス・エネルギーの産物。そのエネルギーはあの火球の内部へ魔力変換され、そしてまたその火球を殻のように取り巻く。それ故、あの火球は青白く変色しているのだ。
それが展開されれば一体どうなることか、想像する必要はないだろう。触れれば一瞬のうちに体が吹っ飛び、尚遺跡を木っ端微塵にする。彼女が手加減しないかぎり、それが一度展開されようものならどちらも死しかないであろう。

「やめろ！　お前も死ぬぞ！」

警告にもアニュスは返事をしなかった。更に火球に費やされる魔力は増えていった。俺は危険を関知すると、すぐさまバリアーを展開しようと自分の周りにあるマナを強制的に周囲へかき集め、自己の体に遍在する魔力でそれを固定化する。そしてさらに――『ディラックの海』を開き、マイナスエネルギーを彼女と同じようにバリアーの周囲へ巻き付けていった。そしてそれはほのかに蒼い光を放っていた。

その刹那、青白い光は目に見える範囲限界まで広がってゆき、さらに白熱に輝いた。マイナス・エネルギーの爆発が火球の内部の魔力を驚くべき爆風と光を生み出したのだ。

その爆風とが、俺の魔法障壁を大いに破壊しようとして、またこの世界ごと消し去ってしまおうというような意識を内包した風と炎が俺を襲う。

（……いずれは朽ち行くのみ、か）

ただただその風景をどこか呆然とした思考を巡らせながら、俺は見ていた。そして自分の目の前に展開した障壁にひびが入ってきていた。

――俺は、救えるのか？

崩れ行く障壁、強烈な光が差し込むひび割れを見ながら、少しだけ絶望と焦燥を感じ始めていた。この後に待ち受けるであろう激痛、死を覚悟しながら、全方位に散らばる光の氾濫を眺めていた。全ての運命の深淵と破壊、滅亡。恐るべき運命を孕んだその白熱を。

俺は、それが一体何であるのか分からなかった。ただ、これはアニュスが俺に課した罰なのだろうかと、そう考えていただけだった。

（アニュスはどうして俺に矢を向けたんだろう）

いよいよ障壁を破壊しつつある光は、ゆっくりと、かつ強く俺の感覚神経系を灼きはらっていった。

激しく、尚且つゆっくりと迫り来る『死』という概念に対する恐怖が迫ってきたのを感じた。その時でさえ俺の脳は呆然と回り続けていた。耐えることが出来るだろうか。分からない。

そして、全ては決壊し、俺はゆっくりと光の渦へ飲み込まれていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 『無限』に流れ着く者（後書き）

戦場のメリークリスマスでも聞いて小説読んでみてね。
クラリモサでもいいと思う。

# 煌く海

わたしが何をつくりだそうと、またそれをどんなに愛したとしてもすぐにわたしはその敵対者となり、みずからの愛を敵にまわす者とならなければならない。

フリードリヒ・ニーチェ

自分を取り巻いている光景は、その全てが水色の空間に包まれており、また俺自身の存在は人間の『カタチ』としての肉体をもってはいなかった。

意識はただ流れ、この限りなく白に近い水色の風景に同化しているような錯覚を覚えた。今見ている光景が一体何なのか、それすら分からない。空中に浮いているのか、それとも地面に倒れているのか。仰向けなのか、うつぶせなのか。それは理解の範疇を超え、ただ理解していることは『確かにここにいる』ということだけだった。

（ここはどこだろう……）

ふと、思った。見渡そうにも、体が動いている感覚は全くないし、なにより光がない。こんな眩しい空間の只中で、俺は何をしているのだろう。普通の感覚ではない。人間の個体としての存在が感じられない。

もし天国と地獄があるのならば、三途の川もあって不思議ではないのだが、ここはどうやらあの世ではないらしい。

思い立って、意識を集中してみるが、どうにも意識が果てしない遠い場所まで分かることにおかしく思った。変だ。夢ならばこう

いう明晰夢なぞすぐに終わらせられるのに。まるでこの世界全体が俺自身のようではないか。
天国か。
地獄か。
俺にとって、どちらでも良かった。ただ、俺は死んだのかよく分からなかったのだ。

（俺は確か……アニュスと戦って、火球を喰らって……それから）

それから、どうだったのだろう。思い出せない。
青白い世界が俺を侵食し、死に追いやろうとしたことだけはしっかりと覚えている。その後のことだけが、完全に記憶から抜け落ちてしまっているのだ。それが今の俺にとってとてつもなく大切な事柄だと思っていた。なぜここにいるのか、どうしてこうして意識だけがあるのか。その記憶が鍵であろうことが推測できた。

（――どういうわけだ、これは？）

まどろみの中で、俺は一つの奇妙な世界に気が付いた。

ここには、どうしてか空間のマナの存在が一切関知できない。その代わりに、溢れんばかりの『マイナス・エネルギー』が感知できた。その『マイナス・エネルギー』はこの空間で虚数空間を形成しているようだ。
この虚数空間に満たされているマイナス・エネルギーは無限にあった。俺はその『マイナス・エネルギー』の海――すなわち、『ディラックの海』に浮かんでいるのだった。
俺はその果てしない海の中を泳ぎ続けるプランクトンのように存在していたのだ。あまりにも大きすぎて比較すら出来ない。恐ろしく小さい存在。その事実はひっそりと俺の心に虚無感を否応なく感

じさせた。

その時、一瞬の心の動きがあった。その小さな動きははどこかで大きな唸りとなり、やがてそれがいくつも統合され、やがて潮流と化していく。それは海の海流の如き速さと強靭さを持ち、俺を揺さぶりかけてゆく。

次第に、俺の脳内にある出来事が浮かんできた。

光の氾濫。障壁の崩壊。そしてその障壁が守っていた者が光に包まれていく光景。そしてその者は出来る限りの魔力を持ってして自らの身を衝撃から守ろうとした。だが、それは意味を持たない行動だった。

火球が意を成し、強烈な爆風と光が周囲の空間を包みこむ。その者は数十メートルも吹っ飛び、やがて壁にぶつかった。彼の体は魔法で守られていて崩れては居なかったが、その後彼が動くことはなかった。

激しい感情の変動が、俺を襲った。そうだ、この光景はどこかで見たことがある。つい最近見たような――

やがてその記憶はある一人の少女を捕らえた。吹っ飛ばされ、壁に激突する瞬間――この瞬間に、彼は最後に見ていたのはその少女だった。

（俺は……、俺は……死んだのか？）

たった一つのシンプルな答え。そしてシンプルであるが故に考える必要のない答え。

――俺は死んでいる。

俺はそれを確信したとき、深い絶望が俺を襲った。しかし、自分が死んだことに対してではない。自分が『救う』と決めた相手に、娘に拒絶されたのだ。故に、俺は死んだのだ。

もはや進むべき道も、戻る道も、俺の目の前には提示されてはいないのだ。その時既に俺の心は酷く傷つき、また崩壊を始めていた。

やがて俺の目は何も映さなくなった。見ているものを認識することを放棄したのだ。俺の中の光は絶え果て、生きているのか、自己の存在すら分からなくなっていた。果てしない時間が流れていった。

俺は人間としてではなく、一つのエネルギーとしてディラックの海に漂い続けていた。既に自我を手放し、精神の死を迎えていた。そのことを昔は恐れていたが、今となってはどうでもいいことにしか過ぎない。生きることを手放した人間は、生きたまま死ぬのだ。今、俺は死人なのだ――

ただ、虚無しかない俺の心に一つだけ残った言葉があった。

――アニュスに、会いたい。

俺が気付いた時、目の前にあった水色の空間は、夕暮れ時の空を覆う美しい茜色へ変わっていた。無限に水素原子を生み出すこの世界がこんなに美しい世界だとは気が付かなかった。まるで朝を経て夕方であるように。

そして同時に、その世界の時の流れすら己が内に在った。

俺はこの世界の変遷の全てを司っていることを知った。

今、この虚数世界が俺の世界だということを知った。

俺がこのディラックの海そのものであることを知った。

その時、ある声を俺は聞いた。それはこの世界のどこからでもなく、俺自身に語られてきた声だった。ゆっくり、そして祈りのよう

に、その声は歌を紡いでいた。

『Ｒｅｘ』

『Ｒｅｘ　ｔｒｅｍｅｎｄａｅ　ｍａｊｅｓｔａｔｉｓ』

『Ｑｕｉ　ｓａｌｖａｎｄｏｓ　ｓａｌｖａｓ　ｇｒａｔｉｓ』

『Ｓａｌｖａ　ｍｅ，　ｆｏｎｓ　ｐｉｅａｔｉｓ』

それは幾たびの繰り返しを行ったのち、静かに俺の心から去りゆく。

「――そうか。私は行かなければならないのだな」

段々と、この世界から消えていく自分を感じていた。それは気絶するような感覚で、まるで眠るようだ。

既に幾たびの変遷を超えていったのだろう、俺の意識はディラックの海より離れていく。

『……俺は』

何処へ行くのだろう。遠い現実へ戻るのだろうか。

――分からない。だが……俺は。

そして彼はこの世界から消失した。だが、この空間は永遠に彼と共にある。これは約束だった。幾度の転輪を超えての約束された事柄だった。それは、彼は必ずここへ来なければならない運命だったのだ。

そして青年はただひたすら運命を切り開く。

運命を切り開くこと自体が運命だと知らずに。

## 煌く海（後書き）

うーん、ごめん、ちょっと分かりにくいかもしれない。

この章が終わったら人物&世界設定を書くからまってててください。

ただ、この世界は彼自身の世界だということです。

もう九十三話だというのに登場人物紹介していないとか、なんともおかしいものよ。

## 神羊誦

二人の囚人が鉄格子から外を眺めた。一人は泥を見た。一人は星を見た。

ｂｙ　不滅の詩

☆

何も見えない空間へ墜ちていく感覚を覚えた。

人類進化の過程より、遥かなる海から大いなる大地へと我々の先祖はたどり着いた。この感覚は、その先祖が感じたものと似ているのかも知れない。ただ、俺は墜ちているのだが。

やがて、その感覚は何かに吸い込めれるかのようにして掻き消えてしまった。目に見えるのは相変わらずの暗黒のみだったが、その先に何があるのか、俺は理解した。

「あの時、俺は流れ星を見たんだ――そう、この世界に来る前日の夜のことだった……」

ゆっくり、自分が生きていることを確かめながら、されども意識が朦朧としていながら、自我を保とうとして、なんとか言葉にしていた。生きていることを実感したかった。

「あの時、俺は――そう、どんな願いをしようとしたんだろう。何

か大切な願いを、大切な……」

どれくらい前だっただろう。あの時の前日だった。自分の部屋から見えた一筋の流れ星が一瞬の光を放ち、願いすら思い浮かべないうちに消え去ってゆく。ふと、気になった。俺は部屋の外に取り付けられた小さなベランダへ飛び出た。その日は熱帯夜で、とても空気が湿っていて気持ちが悪かった。町が明るかったからか、その気持ち悪いのはすぐに立ち消えた。

真っ黒な空を見上げて、また新たな星が流れないかな、と探してみるが、そう易々と偶然は起きはしない。起きぬからこそ価値があるものなのだ。俺のような一個人が、一人の願望を叶えんが為にその偶然を引き当てるなぞ愚かしいにも程があると思った。

「だが、それでも……星が見えなくても願わずには居られなかったよ。あの時は失恋していたからな……ただの傍観者には似合いの席だったかもしれない」

アニュスの放った攻撃のおかげでこの遺跡の壁は結構崩落していて、足元には砕けた石が散乱していた。それを踏み砕きながら俺は何とか立ち上がった。意識が朦朧状態からしっかりとしてきたのだが、それでも一歩間違えれば膝が折れそうだった。しかし、未だ体が死んだというわけでもあるまい、まだ戦えるはずだ。

頭から血が出ているのがなんとなく分かった。というよりも、体中血だらけで、傷が至る所にあるため分からないほうがおかしい。そうなんとなく自嘲しながら、また一歩彼女の方へと歩みを進めた。

「だが、ただ傍観しているだけではダメだったんだ。俺は、誰も傷つけたくなくて、傷つきたくなくて、ただ傍観しているだけだった。だから俺は肝心な所で何でも逃してしまう。だが……今は少なくとも傍観することはできない。立ち向かわなければいけない」

体が歩くたび軋んで、もはや人体が何時崩壊してもおかしくないような痛みが走り渡った。そしてそれが口に出す言葉を震えさせている。一応回復魔法を骨、肉体に重点的に掛けているが、正直、歩けるのが不思議であった。

アニュス・デイという少女は依然として何も語らず、ただ少しだけ目を見開いた。相変わらず愛らしいその顔が悲しみを湛えていたのは心苦しかった。

「……次は本気でお前を無力化する。気をつけておかないと痛いぞ」

自分の本気で彼女を無力化できる自信はなかったが、それでも虚勢だけは張っておきたかった。切り傷の痛みが響いて上手く口が動かなかった。

「次で、終わらせます」

アニュス・デイは弓を構えた。彼女にも相当の疲労が見えた。無理もないのかもしれない。肉体が戦闘に適していないのだから。しかし、それでも彼女は弓を持つ手に力を込め、ゆっくりと狙いを定めてゆく。

「俺は必ずお前をつれて帰る。どちらが勝とうが、俺はお前さえ生きていればそれだけでいい。それだけで俺は救われる」

俺は剣を構えた。彼女を救えるのか否か。これからの行動に全てが掛かっている。深呼吸をすると非常に冷たい乾いた空気が肺一杯に入り込んできた。鉄のような血の味が口の中でしている。

どちらが最後に立っているのか。戦局はややこちらに不利であった。俺の意識が再び外へ跳ぶ前に決着をつけなくてはならないのだ。

一瞬、空間は緊張が張り詰めた。お互いの目線が突き刺さる感覚を覚え、完全な静寂が訪れた。お互い、呼吸を忘れた。

アニュスが弓を放った。同時に俺は脚に力を入れて思い切り踏み込んだ。迫り来る矢は俺の脚を少しだけ掠めて後方へ去来していった。

――あの時、俺は何を願ったのだろう。

アニュスの周りに数多くの青白い物質で構成された剣や槍が空中で練成されていく。一つ一つが完成度の高い武具だ。彼女はそれらのうちの一振りの剣を抜き、サジタリウスの弓へ番え、刹那、放った。

「終わるわけには……行かない！！」

見えたと同時、俺は無意識下で魔法を発動させていた。ディラックの海よりマイナス・エネルギーを引きずり出し、前回の障壁とは比べ物にならないほど強固な障壁を作り上げた。

その障壁へ、彼女の放った剣という名の矢が接触し、その剣は障壁を貫くことなく爆散した。

そして絶えず俺は走った。

（……二人の囚人が鉄格子から外を眺めた。一人は泥を見た。一人は星を見た。俺はどっちだ？）

足が悲鳴を上げて俺の行動全てを阻みに掛かった。血が噴出し、来ている服がベトベトした。

（俺は彼女を生かすためなら……その為なら泥水だろうと喜んで飲んでやる……。もちろん俺は星を見る……あの時のように、星の光を見ていたい！）

これまで数え切れない出来事があった。数え切れない言葉を交わした。数え切れない昼と数え切れない夜をアニュスと見た。それはどれほどの価値があるのか今、それを理解した。
それはなによりも大切なものだったのだ。『日常』というありふれた幸せだったのだ。人はそれを無意識に享受しているが、それはどれだけ大切なことなのか理解できるものは少ない。彼女は何を求めているのだろう、それは彼女のみ知ることだ。だが、死んでしまえば全ては終わりなのだ。全て無に帰す。大切に思ってきたもの全ては何処にもたどり着くことなく永遠に消え去る。
――だからこそ、俺は……星を見る！
やがて、彼女との距離は数メートルまで短縮された。
もう迷う暇はない。
父親として、成すべきことを、然るべき者の手でやらなくてはならない。

「アニュス！！」
「父さん！！」

アニュスは周囲に展開してある武具すべてを射出する。無駄だと分かっているのかは分からない。それらの武具は無論すべてが障壁に接触し、爆散して、またそれが連鎖を引き起こし、とめどない光と爆風、熱を生み出した。それらが同時に建物を破壊してゆき、粉塵を空中へ撒き散らせた。
まだだ、まだ終わっていない！
閉鎖された遺跡の中で、力の限りにその言葉を叫んだ。生きる意義を失わないための、アニュスと自分に向けた咆哮だった。
そして、俺は更に踏み込んだ。距離にして、五メートル。
目の前に何処かで見たことのある剣が迫ってきているのが見えた。もう俺の障壁は崩れかかっていた。このままでは持たないと剣を持

ってそれを薙ぐ。
冷たい金属の音が白い煙の渦中で響いた。その中で、俺は剣を弾いて地面を蹴り上げた。

☆

彼女は何かを呟いた。呪文なのかもしれなかった。だが、それはついに発動することはなかった。

「ああ……うう、く……」

アニュスの腹に、俺の拳があった。
彼女はもう、魔法の展開は停止していた。先ほどまであった青白い武具も、既に目に見えない。俺は剣を放りすて、彼女を胸に抱く形で腕に抱いた。アニュスは苦悶の表情を見せながらも俺に抱き着こうと手を伸ばした。

やがて粉塵を含んだ白い煙は晴れていった。この遺跡から何処からか柔らかい風が吹いた。冷たい冬の冷気が俺たちを包み込んだかと思うと、それはやがて何処かへ消え去っていった。

## メメント・モリ（前書き）

死を記憶せよ。

# メメント・モリ

夢を飲み
百億の昼と千億の夜に。

ｂｙ　光瀬　龍

アニュスは、彼女自身の肉体にしばしば走っている痛みに悶えながらも、時折何処か安心したような吐息を深々と吐いた。彼女の肉体は、やはりディラックの海を使用し得るだけの耐久力はなかったようで、所々内出血を起こしているのが見えた。それが心苦しかった。

俺の肉体も、もう既に限界を通り越していたようだった。体を支えていた足が地面に折れた。

――もう、求めるべきものは何もない。これぐらいの負傷、造作もないこと。これで良かったのだ。

「あなたの勝ち……、ですね」

そして、お前の負けだ、アニュス。これで全て終わったんだ。

これまで俺は多くの出来事から逃げ続けてきた。コゼットにしても、俺の昔のことにしても。だが、俺はようやくそこから一歩を踏み出すことが出来たのだ。そしてその結果として、こうして今、アニュスをこの腕に抱いている。それが堪らなく嬉しくて仕方なかった。

そうして涙を浮かべそうになっている俺の心情を察してくれたのか、アニュスは小さな腕で俺にしがみついてきた。もういいんです

よ、泣かないでください、と。

「やっぱり、私の……いえ、『彼』の見込んだとおりでした」

そうしてアニュスは俺の顔を見上げた。そこにはいつもどおりの笑顔はなかった。彼女は何処か遠い場所を見るような目だった。その表情になにか、決定的なものが欠如している気がした。

ふと、『彼』とは誰のことなのかと気になったが、その思考は彼女が継いだ言葉で掻き消えた。

「……これで、あなたは自らの運命と向き合わなくてはなりません」

その時、アニュスの頬に涙が伝った。

ふと、一瞬だけだが奇妙な思考が頭を巡った――もしかして、アニュスはなにか俺に伝えようとしているではなかろうか、と。

彼女の語る運命とは何だ？　俺はその問いが頭から離れなかった。

一体、何だ？

アニュスが一体何を伝えようとしているのか、どうしてそれが分からないのか必死に探ろうとした。

そしてアニュスは少し掠れながらも意思の籠った口調で続けた。

「過去も未来も、どちらも変えられることはありません。ですから……一からやり直すことしかできない。だから」

「やり直す……？　一体なにを――」

「この世界の運命を、ですよ。父さん」

――運命？　俺はその言葉を復唱した。その言葉に何か意味があると思った。その言葉を語るアニュスを、俺は何処かで見たような気がした。しかし、どうしても思い出せなかった。

やがて数秒の時間が静寂と共に過ぎた。その数秒とは、一秒にも

二秒にも満たなかったが、感覚で言うなら既に三十秒を経過したようだった。そして静寂が過ぎ去ると共にアニュスは俺から離れていった。

「アニュス……そろそろ出よう。もうここにいる必要はない」

アニュスはその俺の言葉に、

「いえ、まだ……物語は終わっていません」

やがてアニュスは立ち上がり、この部屋の中心――聖堂の中心にある『箱』へと、おぼつかない足取りで近寄っていった。その箱は以前俺が見た金属のような材質で構築されているものだった。彼女はその箱の手前で止まり、そして俺のほうへ振り返った。

「アニュス！　戻れ！」

俺はその時思わず叫んでいた。どうにも俺にはその行動が理解できなかったのだが、どうしようもない、取り返しの付かないようなことが起きるような気がしたのだ。

俺はアニュスのところへ行こうと立ち上がろうとしたが、足は動かなかった。戦闘のダメージが今になって響いたとでもいうのだろうか。　どうしても力が入らない足に対して『動けよ！』と心の中で絶叫していた。

（クソッ……なんだ、どうしたっていうんだ！）

これから何かが起きる。そうだ、俺の人生のを大きく左右するであろう『何か』が起きる。それだけは間違いないのだ。

そして、俺はようやく気がついた。彼女はその時、何かを実行し

ようとしていたのだ。そしてそれは彼女の言う『運命』とかいうものに起因している。そしてそれを甘んじて受けようとしているのだ。

「やめろ……」

そうしてアニュスはその『時を待つ』ように、ゆっくりと手を広げた。

「やめろと言っているんだ！　アニュス！」

もはや、その言葉は彼女の耳には届いては居なかった。また、俺の視界の端に、なにか銀色に光るモノが見えた。それを見たとき、その後に訪れる最悪の自体を予感した。

そして、一瞬。まさにその瞬間だった。

その『銀』は回転しながらまっすぐ進み、そして……鮮やかな赤は地面に滴り落ちた。その銀は、アニュスの心臓に刺さっていた。俺は、それを止めることも出来ず、ただただ見ているしか、出来なかった。

「あ、あああ……うあああああああああ――――――ッ！」

自然と足が動いた。痛みはなかった。その足で、よろよろとアニュスの傍まで行き、彼女を抱き上げた。その体は、さきほど抱いていたときより小さく、そして軽かった。

叫びたかった。無性に泣きたかった。どうしようもないこの無力感が、体中に染み渡ってゆく。

「なぜだ……どうしてなんだ……？　こんな、こんな……アニュス

！」

こんな、どうしてこういう風になるんだ……？　どうして俺を置いて勝手に言ってしまうんだ？

俺には何も出来なかった。また……俺は一人になってしまう。やめてくれ、俺はほとんど動かなくなったアニュスに繰り返し絶叫した。俺が肉体に受けた傷の痛み以上に、俺は胸が痛かった。前が涙で霞んで何も見えない。

どうして、いつもこうなんだ。今度こそ彼女を助けて、俺に出来なかったことを未来に託すはずだったのに。今度こそ俺は彼女を守ることが出来るはずだったのに。どうしていつも人は俺から離れていくんだ？

それが、一番大切な人であってもか！？

その時、ふいに俺の顔に何かが当たった。それは……アニュスの腕だった。

「わ……たし、の……本、当の名……前は……、」

まだ、彼女は生きていた。その声は小さく響いた。

アニュスは涙を頬に伝わせながら、震える声で言った。

「名前は……イクス……イクス・ロードアゲイン……、父……さ……」

そして、その直後に――彼女の呼吸は……消えた。

それを、俺はどうすることも出来ず、ただただ……見ているしか出来なかった。

――どうしてあの時、俺は彼女と出会ってしまったんだ？
そうすればこうならなかったのに。
――なぜ俺ではなく彼女を連れて行ったんだ？
そうすれば俺は彼女を失わずに済んだのに。

――どうして俺たちは出会ってしまったんだ？

「なぜ……なぜ人と人は出会うのだ？　それが運命なのか！　では運命とはなんだ！」

息絶えたアニュスを抱く腕が震える。俺はどうしようもない無力感と絶望感に包まれていた。そしてそれ以上に――怒りに震えていた。

「これが全て運命だというのなら……呪われるべきは俺だ！　死ぬべきは俺だったんだ！　アニュスが死ぬべきじゃなかったんだ！　俺だった……全て悪いのは俺だったんだ……！」

そして、完全に俺の心は崩壊した。

「やめてくれ……彼女の命だけは……！　他のものならば何でも差し出してやる……だから、だから……！」

これまでに感じたことのない疲労感が体を襲った。頬に涙が伝う。心臓が早鐘を打ち始める。
もはや彼女は手を伸ばしても届かない遥かな場所へと逝ってしまった。俺が不甲斐ないばかりに、力がないばかりに。
冬の冷たい冷気が俺の頬を撫でる。現実を理解しろ、そういわんばかりに。
世界が止まる。

もはや息絶えたアニュスの亡骸へ優しく横たえる。
そして床に置いたままの刀を拾い、握り締める。涙を拭いた。霞んだままでは道を歩くことは出来ない。
やらなければならない。他の誰が何と言おうと、遣り通さねばならないことがある。
泣き叫びたかった。だけれども、俺にはそれをすることは出来ない。　この叫びは、全てが終わった後にしか出来ない。
俺が彼女を置いて行こうとした刹那――俺がその光景を確認しようとした矢先のことだ。俺の胸に大量の血が噴出しているのが見えた。

「な……！」

だが、その動揺は一瞬だけだった。その光景を、俺は冷ややかな目で確認していた。その傷口が心臓の真上にあるというのに、少しも動揺はしなかった。むしろ痛みで冷静になるように、とそれを歓迎したのだった。

「……あの男に貫った『矢』……ッ！」

それは鏃だった。その鏃が上着を貫通し、肉体へ至ったのだ。そしてそれは黙々と潜行し、首筋へ至る。まさに、矢自体が何かしらの意思を持っているかのように。また、そこから新たな力がわいてくるのを感じた。
それと同時に、バンッという何かが開放されるような音が後方から聞こえた。発生源はあの箱だった。その中にあったモノ、それは『光』だった。その光は俺のほうへまっすぐ飛んできて、体中へ纏わりつき始めた。やがてそれは『鎧』のような形状へ変化し――い

や、それはまさしく究極的に戦闘へ特化した形状の強化外骨格だった。この世界の技術ではありえない、完成された黒い機械鎧だった。

その時、脳内に声が響く……。

『失われた命は戻らない』
『だが、君が望むならば……遥かな意思を持っているならば……』
『運命は君を導くだろう』
『それが君の目覚め』

『時よ、汝がために運命はその願いを空しくせり。快き時よ、汝は去りてまた還らじ』

声はそれだけを告げ、消えうせた。

「目覚め……」

頭は既に冴えきっていた。怒りと冷静さが俺を支配していた。

――報復を。

自分はもう昔の俺ではない。

もう、その時には生きる意味を俺は失っていたのだ。

そして、もはやそこに従来のような人格は存在しなかった。そして、これが――歴史に謳われることのない英雄の誕生であった。

## メメント・モリ（後書き）

ダメだ、全く進まない。要点だけ解説します。

＞その中にあったモノ、それは『光』だった。その光は俺のほうへまっすぐ飛んできて～完成された黒い鎧だった。

これは光が飛んできて、纏わりついて、鎧になった。それだけです。ただ、その鎧の外見は『ＭＧＳライジング』の雷電が着ている強化外骨格をイメージすれば、作者のイメージと合致します。

本当は、『死』というものを文章で表現するのはやったことがないので書き方があまり分からないのです。文献を漁ってみても、ラノベとかは基本仲間死なないのでアテにならない。他でも参考にしにくいのばかりだったのです……。

矢に貫かれる部分はジョジョ六部を読んでおけば分かりますが、これこそが『チート』の原因です。説明は……まだ。

改訂をしていきますが……正直うーん、です。ストーリー的に、展開的に良いのか……心苦しい。アニュスが何を成そうとしたのか、それはこのあとの物語で判明していきます。多分。

そして、アニュスの本名である『イクス・ロードアゲイン』と夢の『イクス』は何かしら関係があったりして。

# 神曲

Ｄｏｍｉｎｅ　Ｑｕｏ　Ｖａｄｉｓ　？

ｂｙ　聖ペトロ

戦いのあとに残ったのは、いくつかの邪魔でしかない瓦礫ぐらいだった。この遺跡を支える支柱、あるいは神への賛美を謳った文字が刻まれているオベリスクも、その外見から見るダメージからもう限界が来ていることを物語っていた。あらゆる攻撃、あらゆる時間の経過による風化から内部を守ってきた遺跡も、内側から崩されれば意外と脆い。それはまた、人間として考えても似ているのかもしれない。

ある人間は失い、ある人間は得る。

それも、悠久の時間を経たこの世の法則であるのかもしれない。普遍で、不変。変わることはない世界の基本だった。

人は生まれ、死に行く。

それ故に人々は『死』を忌み嫌うのだ。自分が知らない場所へ行くのが怖いのだ。この世界のどこにも知っている人間はいない、その場所へ行くことに恐怖しているのだ。だが、いずれ死の淵へ行かねばいけない。

コツン……。コツン……。

俺の今歩んでいるこの一歩が、その死の淵への一歩となるのなら、

俺は構わない。不思議と怖くはなかった。そう、俺はもう死んでいることと同じなのだから。

「……今まで俺は何をしてきたのだろう」

そして俺は目の前に立つ女を見つめる。その手には銀のナイフがあった。

「これまでアニュスと接してきた時のあの時の感情……幸せ、俺はそれらを失った。俺が今まで他人に見出せなかったものを一度になくした。もう、戻ってはこない。そうだ、もう戻ってはこないんだ……」

全てに始まりがあり、終わりはある。それを痛いほど理解していた。現実に起こっているのだから、理解しなくてはならなかった。

始めは、俺は認めたくはなかった。アニュスとの別れ、それはもっと先の話だと思っていた。失うことはないと思っていた。だけれど……それはただの『甘え』にしか過ぎなかったのだ。俺はいつものようにその幻想に甘えて、結果がこの様だ。

誰を責められよう。彼女を殺したであろうサイサリスか？　それとも俺自身か？

「幻想の中で幻想という夢を見ていたのは俺だった」

俺はそう言って言葉を断ち、刀を構えた。

「――俺の完全敗北だ、サイサリス。もう生きる意味も、希望も、何もかもを破壊された。なんとかして娘を救おうと努力したが、それは全て無へと帰した。お前の計画が俺を殺すことならば、その思惑は九割果たされたと思ってもいい」

「……それで、アンタはどうするつもりだい？」

サイサリスはいつもの不気味な笑みではなく、真剣そのものの眼差しで言った。

「このまま終わるわけには、いかない。例えお前に殺されようとも……彼女が受けた苦しみ、悲しみ、それら全てを貴様に叩きつけてやる」

「希望も、生きる意味のないアンタが、死人と同じアンタがこの私を殺そうってかい？」

「殺せるさ。死人も同じっていうなら、死ぬ気で戦えるからな」

「その『死ぬ気』で私と戦った輩を何人殺してきたっけねぇ……？」

サイサリスはこちらを愚弄するかの様にニヤリと笑う。

俺にとって、その言葉は心に何も斑紋を残しては行かなかった。どうでもいいことだ。誰が何人殺そうと、それは彼らの問題だから。その中の一人に入れられようとも、返り討ちにするだけだ。

「……死人にも、意地はある」

その言葉を残し、俺は地面を蹴り上げた。

☆

サイサリスは彼から発せられる殺気を感じ、自分の感覚が警鐘を鳴らし始めた。そして途端に頭が冷静に状況を判断しようとフル回転をし始める。

ふっと何かが聞こえた。それを感じたとき、既にサイサリスは走り始めていた。視界の端に映るものがあった。だが、その人影はまばたきをするより早く懐へ侵入し、途端に腹へ強烈な痛みが走る。

「――！」

その痛みが全身に走るより早く、サイサリスは歓喜に満ち溢れていた。この痛みこそ自分が求めていた救済、自分の諸行の償いを表していた。

――これこそ。

また、深い痛みが左腕に伝わった。ふと見てみれば、それは鋭利な刃物で切断されている。瞬間に血が噴出し始めた。サイサリスは思わず残った右手で血を押さえようとしたが止まることはなかった。

――そして。

サイサリスはこの『謳われることのない英雄』について今までの輪廻の中で記憶してきたことを思い出すことになった。

それは……

☆

俺は思い出していた。希望というものを。

俺の世界はたった一つの物語を紡ぐだけの世界だ。その中に希望というモノは決して存在はしない。

『義は尊きわが造り主を動かし』

だからこそ、俺はその希望に憧れた――。

『聖なる威力、比類なき智慧』

だからこそ、俺は彼女を愛し――。

『第一の愛、我を造れり』

彼女を希望としていた――。

『永遠の物のほか物として我よりさきに造られしはなし』

しかし、それが永遠に消え去った今――。

『しかしてわれ永遠に立つ』

俺は――。

『汝等ここに入るもの一切の望みを棄てよ』

その言葉を口にした。

瞬間。

俺が今まで認識していた世界はガラスが割れるかの様に崩れ去り、そして凄まじい光を放ちながら空間を包み込んでゆく。それはみるみるうちにこの遺跡を極寒の氷の世界へと変えた。全てのものは消えうせ、代わりに凍てつく世界が出現していた。冷たい氷の世界。周りには全てを凍らせる川がある。そしてそれは恐らく『嘆きの川』を意味するのだろう。

「――！」

サイサリスのいつになく恐ろしい眼差し。彼女はこの世界をどう見るのだろうか。俺にはそれを知る術を持たない。

「この世界は、俺の中にある絶対的な空間。ディラックの海より流

れ出すエネルギーをこの空間の創造に当てて作り出した虚数空間。
俺が作り出す無限の世界……」

遥かなるエネルギーがこの世界に充満しているのが分かる。あらゆるものが俺の深層風景を具現化し、この場所を形成する。何もかもが希望を失う世界。

誰もこの世界から生きて生還することは出来ない。必ずこの世界で死を迎えるだろう。

そしてそれ故、この世界の名前は『神曲』。かつてダンテ・アリギエーリの記した神曲：地獄篇の全てを再現することの出来る虚数空間。

誰しもが恐れる、絶対無比の世界。

「――ここは、コキュートス？」

俺は小さく首を縦にふった。

「そうだ。地獄篇第九圏――裏切り者の地獄。何もかもが氷付けにされる世界。これだけだ、俺が出来ることは。だが……これだけで十分」

――貴様を殺すならば、もはや慈悲はいらぬ。

俺の周囲に氷の槍が出現した。奇しくも、それはアニュスが使った魔法と同種のもののようだ。

俺は何も言わず、それを前方へ射出する。それらの槍の雨はサイサリスを貫こうと空気を裂いて突進し、その全てはサイサリスの展開した防御バリアによって捻じ曲がり、掻き消えてまたマイナス・エネルギーへと帰依した。そしてそのエネルギーは再び槍となって襲う。無限の循環だった。この空間が松下自身が持つディラックの海、マイナス・エネルギーの塊である故に、無限の循環が可能にな

っているのだ。いちいち取り出す必要がない。それがこの世界の特徴だった。
俺は槍の射出場所を固定し、その先へ走り出した。槍の雨は一層激しさを持ち始め、サイサリスのいるであろう場所を粉砕するかの如くに攻撃する。
行く先から、銀の輝きを持つ飛翔体が見えた。それは間違いなくナイフだった。俺は小さく体を動かしてその弾道から外れ、刹那遅れてナイフが後ろへ飛んでいく。
――来たか！
突如として、足の部分の強化外骨格が稼動し始めた。小さくスパークを起こしながらも、それは俺の筋肉を強化してくれているものだと分かった。大きく踏み込むと、それはより強いエネルギーを足に与えた。

「貴様だけは……」

静かに、サイサリスは走りよってくる。

「貴様だけは……この手で殺すと決めた！」

薙ぎ払うように横から迫り来た剣は、俺自身の見切りによってその攻撃は止められた。

『……思い出したことがあるかい？　子供の時を』

だが、その停止は一秒にも満たない。すぐさま攻撃は次へ移行する。
冷たい金属音が空気を伝わり、耳に入る。心地言い訳ではないが拒絶するほどの嫌な音でもない、そんな音だ。

『その感触。そのときの。言葉そのときの気持ち。それはあの娘に抱いた感情。それらの想い』

サイサリスの刀が、俺をぶった切るように叩きつけられる。その斬撃を剣で受け流して、その繰り返しだ。いつの間にか、俺は待機させておいた氷の槍を使うことを忘れ、ただ変遷のない攻撃を繰り返した。

『それらを失ったときの悲しみ』

やがて――いつの間にか、枯れていたと思っていた涙が俺の頬を伝っていたのに気がついた。どうして、と思うこともなかった。ただ、流れていたのだ。

悲しくともないのに――どうしてだろう。意味が分からなかった。

サイサリスは、続けて言う。

『大人になっていくにつれ、何かを残して、何かを捨てていくのだろう。人は生き続ける限り、それを繰り返してゆくのだろう』

――俺は何を残せたのだろうか。

――何を捨てていったのだろうか。

俺には、分からなかった。どうしても分からなかった。

『時間は待ってはくれない。にぎりしめても』

大切な思いも、いつかは消え去っていく。

『ひらいたと同時に離れていく』

俺は。

『――そして』

「――――――！」

サイサリスは思わず目を見開いた。サイサリスの心臓部分に深々と剣の刃が埋まっている。そこから赤黒い液体が隆々と流れ出していた。

いくらかの時、お互いに動くことは出来なかった。

青白い光が空間を元通りに再現し始めた。マイナスエネルギーはディラックの海へと還元し始めていく。俺を中心として形成されていた空間はやがて元の、崩れかけた遺跡へと変貌を遂げた。

サイサリスはもう、動くことはなかった。彼女の瞳に生きている時の輝きはない。なにより、彼女の体からエネルギーが急速に消え去っていた。

彼女はもう既に死んでいたのだ。

やがて、グチャリと生々しい音を立てながら剣から外れ、サイサリスは地面に倒れた。

それからしばらくは、俺は声を出すことが出来なかった。アニュスが死んだときのような虚無感が俺を襲っていた。サイサリスは俺が殺した。確かに敵を討った。

でも、それでも俺の心は晴れなかった。確かに仇を討ったというのに、依然として何かを無性に破壊したくなるような心情に囚われていた。

――俺は正しかったのだろうか？

思わず、その問いが口から漏れた。いや、問わなくても理解しなくてはならなかったはずだ。サイサリスを殺しても彼女が戻ってくるわけではない。俺の責任を、ただ復讐心に置き換えていただけじゃないのか。サイサリスが殺したのだ、責任は彼女にある。だが――守れなかった俺は、ただの殺人鬼でしかないのだ。

「ああ……」

復讐を成し遂げてみても、サイサリスの死は何も意味はしなかった。

俺は何を残して、何を捨てていったのだろう。いつもそれは見えなかったものなのかも知れない。だが――それを知るには、まだ、時間が足りない。

「――ドミネ・クオ・ヴァディス？」

その問いは人知れず空を舞い、非常にも誰にも答えられることもなく消え去っていった……。

## 神曲（後書き）

厨二病爆発。
どうでもいいけれど、ドミネ・クオ・ヴァディスは「主よ、どこに行かれるのですか？」という意味。
ちなみにアニュス・デイというのはイエス・キリストを指し示していることばであるのさ。

つまり、最後に『ドミネ・クオ・ヴァディス？』と主人公が言った本当の意味は『アニュス、君は何処へ行くんだ？』と一人投げかけているのです。

こういう裏の意味を持っていました。伏線というやつかね。

## 帰路（前書き）

今回はあまり出来はよくない。

# 帰路

「寒いな、もう春なんて来ねえんじゃねえかな」

―光瀬龍　オホーツク２０１７年

周りで、しきりに何かの金属の音がしていた。何人かの女性のような声がその音に混じっていた。少しだけ血の臭いがする。

誰なんだろう。

誰が話しているのだろう。

俺は地面にへたり込んで、ただただ目の前の女の死体を見つめていることに気がついた。その死体の周囲の床には既に乾いて固まっている血がこびりついている。また、それに気がついたのと同じ時、しきりに「死体」だとか「彼が？」と言った驚きの声が聞こえた。どうやらこの死体と俺についての関係を話しているらしい。

ふと、ここで何が起こったか思い出そうとした。しかし、その思考は先ほどの女達のような声ではなく、もっと大きい声によって中断せねばならなくなった。

「……」

俺はそれには答えなかった。今は思い出すことが先決だ。ここでなにが――そうだ、確か俺はここで……。

『松下！』

誰だ？　俺はそう愚痴りつつ顔を上げた。

「――ガウェイン？」
「ええ、生きてる？」
「……ああ」

ガウェインは俺の顔に目をすえる。彼女は冷たい目線で俺の瞳を射抜き、それから急に目を死体のほうへ向ける。
もう動かないであろうサイサリスの死体がそこにある。
――俺が殺害した。
それだけ、俺は告げた。そのほかに言葉は必要はなかった。他の誰でもなく、俺が殺した。それだけの事実でしかない事柄だ。そのことにガウェインは何かを感じ取ったのだろうか、それ以上は追求はしてこなかった。

「どうして人と人は出会うだろう。初めから出会わなければ、悲しいことなんて起きないのに」

俺はふと、今までの出会いと別れを遠い昔のことのように思い出し始めていた。だが、しきりに思い出そうとすればするほどに、もう会うことが出来ない事実に心が張り裂けそうに痛んだ。それは人間として至極真っ当な痛みかもしれない。だが、その痛みの本質は後悔に還元するのだ。
どうして、あの時ああしていれば。俺はそのことを何度も何度も心の中で繰り返した。

「俺はあの娘を守れなかった。守らなければいけなかったのに――出来なかった」

あの時、どうして出会ってしまったのだろう。
これが運命というのならば、どうしてこんなに残酷なのだろう。

目の前で消えていく命を助けられなかった。これが運命だというのか。
俺は、いよいよ一人になってしまったことを痛いほど感じていた。
ガウェインはその独り言を、ただ肯定も否定もせず何も言わなかった。しばらく目の前で生きる気力を失っている青年の様子を伺っていた。俺はよろよろと力なく立ち上がると、別の場所で横たわっているアニュスの方をちら、と見た。

「……俺は間違ったのだろうか。ただ、俺は……復讐をやり遂げたはずなのに全く満たされないんだ……」
「――それは」
「そうだ、分かっているんだ。心の中では理解している。『復讐は更なる復讐を生む』ということは。だが、どうしてもやらなくてはならなかった。……他に道がなかったんだ」

未だ自らの犯した事実を受け入れられずに、空虚な意識のまま俺は周りを見渡す。
先ほどまで戦闘が行われていたことを指し示している証拠があちこちに散っているのが見えた。オベリスクであったり、また血、傷跡だったりと多種多様だ。その空間に冷たい空気が充満することによってその惨状を更に悲惨に演出している。
ガウェインが連れて来ていた部下たちはその状況に戸惑いつつも、実況見分を行っている。律儀なものだ。いますべきことは別にあるだろうに。
俺は後、深い溜息をついた。未だ冷め切らない空虚感が脳の働きを低下させ、悩ませていた。
ガウェインには、今の俺がどう映るのだろうか。軟弱な男としてか、それとも殺人鬼としてか。それとも、それとも、それとも。もちろん、ガウェインと俺との関係は今更説明する必要もない間柄にしか過ぎなかったためだろうか、俺にはその答えを知ることはない。

「……脱出しましょう」

その声を聞いて、俺もああ、とだけ答えた。

親の最後の務めをやらなくてはならなかった。彼女と永遠に別れることを意味する、とても大切なことを。俺はアニュスの亡骸を腕に抱き上げ、またサイサリスの亡骸も伴ってガウェインらと共に外界へ脱出した。

それは、たとえ形式でしかなくとも――彼女が存在していた証を残すために。

俺には残された者の責任を負っているのだ。

## 帰路（後書き）

区切りがいいところで投稿してます。多分次の話でこの章での全ての決着が付きます。

ところで、この作品の題名を変えようと思っているのですが、何かいい題名はありませんでしょうか。

例えば、

「謳われない英雄への鎮魂歌」

だとか

「尾を離したウロボロス」←意外とお気に入り

「円環の行き着く先は」

「塩化ベンゼンジアゾニウム」

「クメンヒドロペルオキシド」

「メギドの丘へ」

「ドロローサへの道」

など、痛い名前でもいいんで感想にかいてください。次回に投票でもしようかなと思っております。

ただし、書いてくれる読者様が居た場合の話ですが。（居なかったら独断と偏見と厨二脳で選考します）

感想とか、文章評価とかのポイント入れてくれたら二ヶ月は喜びます。

## 戦場のメリークリスマス

この世の罪を取り除く神の小羊よ
彼らに安息をお与えください

この世の罪を取り除く神の小羊よ
彼らに安息をお与えください

この世の罪を取り除く神の小羊よ
彼らに永久の安息をお与えください

ｂｙ　Ａｇｎｕｓ　Ｄｅｉ

空は暗いはずの雲を赤々と燃やしていたが、太陽は今は見えなかった。その明るい赤色の光線が雲を貫通し、まるで夕暮れであるかのような情景を生み出していた。自らの影ですら紅色に染め上げられていると一瞬思ってしまったほどに、それは美しい光景でもあった。

一人の青年が、剣の刺さった質素な墓標に黙祷を捧げていた。

彼の周りには、幾多の墓標が打ち立てられていた。その墓は、この町で死んでいった誰かの名のなき墓であった。多くの墓標にはその人物の名前さえ記載されてはいない。ただ共通しているのは、死んだ日付が一緒だということだけだった。

すでにこの町には多くの救援が駆けつけていた。この国の人間達だろうか、多くの人たちが家を取り壊してその下にいる人間を引きずり出し、墓に葬っていく。そしてまた、この厄災から僅かながらも生き残った者達もその活動に参加していた。彼もまた同じように、一人の女の子と女性を墓の下へ葬った。

彼の瞳には何が浮かんでいるのだろう。それは後悔でもあるだろうし、あるいは絶望を称えているのかもしれない。どちらにせよ、彼にとっては意味のない、自覚できない事柄だった。

「――彼女達は何を伝えたかったんだろうな、ガウェイン」

彼はそう呟くと、彼から数メートル離れた位置で見ていた女性に向けて体を向けた。ガウェインと呼ばれた女性は、己の目の前の青年を見やって目を逸らすばかりだった。

「サイサリスは俺の未来を知っているかのようだった。そしてアニュスも俺に何かを伝えようとしていた。だが、彼女達はこの世にはいない。その答えは永遠に闇に葬られたんだ。――しかし、彼女達が伝えたかったことだけは、俺は知りたいと思っている」

「それはどうして？」

「簡単なことだ」

青年はそこで区切って、息を継いだ。

「サイサリスにしても、アニュスにしても、彼女達は結果として完全には伝えられてはいない。伝える前に死んでいった。それじゃ報われないだろうよ。だからそれを知る必要がある」

彼は今、その『答え』を知りたがっていた。それは言い換えれば誰も知ることはないであろう人の存在理由を問うことであった。

無論、彼も心の隅でそのことを理解していた。答えが得られるわけでもない――ましてや、彼女たちの『伝えたいこと』を知り、どう行動するのか彼は知らなかった。それは愚かにも思えた事柄だった。しかし、彼にはそれしか出来なかった。

「……時として、神と言う絶対者は俺たちのようなちっぽけな存在に気にかけてくれる」

青年は剣の刺さっただけの墓を見下ろしていった。

「それ故に俺たちはこの地上で生き、子を育て、何をする時間もなく死んでいく。それなのに絶対者は俺のような人間に試練を与えて絶望に突き落として、それでも這い上がってくる者に生きる意味を問う。『お前は何をする？』と。では、その者は何をすればいい？　意味もなく死んでゆけというのか？　俺は嫌だ。人生に意味が無ければ作ればいい、そしてそれを貫けばいい！　俺のような人間だからこそ、成し得ることがあるはずだ。その勢いは絶対者にすら止められないはずだ」

彼はそれを確かめるように、空が赤々と燃えている雲を見上げた。

「松下、それはアンタはそれを確かめるにしても無理があると思うわ。死んだ人間の想いを知ることは、誰にもできはしない」

しかし、青年は首を振った。

「そうだろうな。長い歴史の中で死人の想いを知りうる方法を知っている人間はいないだろう。居るとすれば、それこそ超越者だ」

超越者。絶対者。神。

それらは人間の届かない遥かな言葉だった。何処にいるのか、果たして存在しているのだろうか。その存在によってどれだけの人間がその名の下において正義を見出し、散っていったのだろうか。どれだけの人間がその存在を信じ、その身を炎へ投じていったのだろうか。

青年は急に何かを思い立ったように、鋭い目つきでガウェインを見た。彼はその時、彼の脳裏に何かがよぎったのだ。それが何なのかは知ることは出来なかったが、重要な事柄なことだということは確信していた。

とうの昔に忘れていたような、何かを思い出していくように頭の中の記憶が整理されて導き出されていく感じがした。

それが。

それが俺の目的であるはず――

彼女が伝えたかったことの答えであるはず――

青年は、何かを心の中で決めた。答えであるものを導き出す過程として、それを実行する。せねばならないと。

彼は、涙を浮かべ、言った。

「ガウェイン、俺は『神』に会う。神に会って、俺は彼女達の意思を問う」

涙は、空の紅い光を受けて染まっていた。誰の目にも、それは気がつかれることはなかった。

彼は知っていた。自分は何も出来ないことを。運命を超えることはできないと。だからこそ、彼は彼なりに戦うとこの場で、今、誓ったのだ。

これが、彼の、彼自身に向けた鎮魂歌だった。これが、彼の身に受けたレクイエムだった。運命を変える――果てしない未来への覚

悟だった。

青年は、ガウェインに背を向けるように顔を背けた。自分の泣き顔を見られるのがだったからだ。声は出さなかった。

ふと、頬に冷たいものが当たったような気がした。氷のようだった。

「雪……？」

それはまるで空の涙の結晶のようだった。光で紅いように見えたけれども、それは確かに冷たい雪だった。

今日はクリスマスだった。彼女と過ごすクリスマスは遂に訪れはしなかった。誰もがいつもどおり過ぎていくと思っていた日は、もう訪れはしない。

戦場のクリスマス。

彼の脳裏にその言葉が浮かんだ。

「俺は……俺は……！」

激しい感情が湧き上がってきた。どうしても止められなかった。

どうしようもなく辛かった。

空は何処までも紅く広がっていた。

もう……子ども達の笑い声は聞こえなかった。

☆

後に、彼はガウェインにこう語ったと言われる。

「――松下という人間は、この未曾有の災害に遭って死んだ、そういうことにしてくれないか？」

その言葉に、多少の戸惑いを彼女は覚え、ガウェインはどうしてと問い返した。それに対して彼はこういった。

「現に一度死んでる。だから俺は俺であって俺じゃない。俺は名前を持たない人間だ。いわゆるジョン・ドゥ。名も無き人間。もう……戻りはしない。だから俺は別の人間として、そして彼女たちの意志を確かめる人間として生きていこうと思う」

彼の目にあふれていた涙は既に枯れていた。

手に雪が乗り、解けていくのをじっと見つめていた。しばしの静寂の後、

「だが、死んだというなら、もう俺は『松下』と名乗れないな。そうだな――」

いくらか逡巡したあと、彼は顔を上げて言った。

――俺の名前は、『メガリス・ロードアゲイン』だ、と。

この物語は、ある英雄の物語だ。誰にも賞賛されることはなく、愛する者にすら、その意志は理解されない。

誰にも感謝されず、常に恐れられ、それでもなお人を救おうとし

た歴史には語られない英雄。
彼は常にその身を犠牲にし、そして常に人々の陰でありつづける。
歴史という大きなＤＮＡの中のエクソンではなく、常にイントロンであった人間。

ここで彼は幾多の人生を超えて……生き延びていく。

全ては、神に会う為に。

## 戦場のメリークリスマス（後書き）

ひとまずここでお終い。あとはこの小説の設定などを描いていきます。
正直、最後のくだりはいらなかったかもしれない。名前を変えると読者がついてこれない気がする。

でも、どうしてもコゼットと主人公の中を険悪にしてみたいんだ。
コゼットはメガリス（松下）に対して批判して、そこで『松下』を引き合いに出して険悪なムードにしてみたい。
次の章からは、コゼットＶＳメガリス（松下）の構図にしようと企んでいます。

ちなみに、メガリスの元ネタはエスコン０４のラストの要塞、またはその時に流されるＢＧＭ『ＭＥＧＡＬＩＴＨ―Ａｇｎｕｓ　Ｄｅｉ』のオマージュ。

で、題名を変える件ですが、

・謳われない英雄への鎮魂歌
・尾を離したウロボロス
・沈黙の冬
・遙かな未来へ
・塩化ベンゼンジアゾニウム

この五つの中で好きな題名を感想で言ってください。まぁ別にタイトル変わっただけでこの作品のＰＶとかアクセスとか変わるわけでもないけれど……。

## 登場人物紹介（前書き）

すいません、題名を変えさせていただきました。
いや、いいんだ。別に誰も感想に書き込んでくれなかったことに怒ってないから……
題名が『やだ、キモい！』とか言うのでしたら、いくらでも改題するつもりではあります。もしそういうのであれば、感想へ。

## 登場人物紹介

◆松下和哉／メガリス・ロードアゲイン

身長：１６０?以上。
体重：４５キロ以上。
歳　：１８ぐらい。
血液型：Ｏ型
装備；太郎太刀という剣をマトモな人間が持てるように小さくしたような刀。切れ味が全く落ちないらしく、鞘にも入れやすく、抜きやすい魔法が掛けられているとのこと。
正式名称は『デスブリンガー』
実はその性格ゆえに女性から嫌われる傾向がある。が、意外といい奴である。
彼の鎧は黒い強化外骨格であり、銃弾ですら跳ね返す。しかも動きやすい。体の強化を自動で行うことが可能。

童貞。絶倫。本稿執筆時まで、オナ禁二ヶ月という賢者。１８ｃｍ。

フツメン。ＦＦ１３のシド・レインズに似ている。

なんだかんだで異世界にブッ飛ばされてきた青年。
なんだかんだで人の面倒を見て、なんだかんだで学校を退学。
なんだかんだで幼女を娶り、なんだかんだでハーレムキャラバンを作る。

ネコミミが似合う女性なら無条件で引かれる男。

なんだかんだであまり怒らない性格。
彼の『ロードアゲイン』という姓は娘の名前から引用したもの。
ちなみに裏設定であるが、この人物は、過去に親友に美人の幼馴染を寝取られている。しかもその幼馴染は家が隣で、朝に起こしに来るレベルであり、確かに彼女は松下のことが好きだったようだ。しかし、それは見事にその親友との出会いによって状況が変わってしまい、結局その幼馴染は親友と一夜を共にする。ちなみに、それを暗に言っているのが第九十四話である。
そのことが原因で、彼は性格が冷徹になってしまう。しかし、その親友自体はその事実を知らないでいたため、いつもどおり松下と接してくるため、無下に出来ず、ただただ傍観することしか出来なかった。
彼は結局、マトモな精神状態を維持し続け、今に至るのだが……愛する娘の死によって一層傍観しつづけた自分を恨む。スイッチング・ウィンバックという方法で彼の精神を保っているようだ。彼の場合は名前を変えることだったらしい。
実はバイセクシャルの気がある。武器が得意ではないらしく、主に氷主体の魔法攻撃で攻める。また、ディラックの海を展開することができるため、無尽蔵にエネルギーを引き出すことが出来ることから、一種の固有結界らしき空間を作り出すことが出来る。正確には固有結界ではないのだが。

好きなもの：寝ること。ゲーム。
嫌いなもの：別になし。裏切りでも許容するが、その場合は徹底的に攻撃するだけである。

女性だろうが、戦場で出会えば容赦なくぶん殴る。

ロリコン。黒髪、ヘーゼルアイ。レックス・トレメンデ。

◆矢島祐樹

身長：松下と同じぐらい
体重：上記と同じ。
歳　：同じ
血液型：Ｂ型
装備；未だ出ず。

非童貞。絶倫。結構凄い。１６ｃｍ。

いわゆる正統主人公タイプ。女性から圧倒的な人気を持つ。
この物語始まってあまり出番がないイケイケなメンズ。
この人物、松下の親友である。そして、裏設定ではあるものの過去に松下の幼馴染を寝取った人物でもある。彼自身はそうとは知らず、堂々と松下の目の前でキスをする行為をやりのけ、そのまま一夜を共にする。
やがて権力者と仲良くなり、その絶倫の能力を発揮しているとのこと。
自分の正義を見極めず、他人に流されるケースが多い。ぶん殴りたいほど嫌味のない人間である。が、それ故に嫌われる人には嫌われる。
美貌という武器で近接戦闘を仕掛けるのが得意。
作者からハブされる哀れなイケメン。というか正直扱いに困ります。

出番を増やしたいが、いちいち書いていられない哀れな人物。

◆コゼット・アナスタシア

身長：大体松下と同じぐらい。
体重：不明。
血液：Ｏ型
歳　：１８歳
装備：レイピアや細身の剣を扱う。

清純な処女。オナニーすらしたことがないという。

いわゆる本作のヒロイン。だが、ヒロインの癖に全く本編に出ないことがザラ。読者からのヒロイン待望論が日々熱くなっていく。
彼女には妹がおり、その子がこれまた可愛い。超可愛い。そのため、少しだけシスコンの気がある。父は嫌いらしい。母は既に他界。
コゼットは日々鍛錬に励むため、そこまで他人との接触を図るつもりはないようだ。しかし、姉御、とか言われるだけあって周囲の評価は高い。修行で汗臭いと彼女自身は思っているらしいが、周囲の男子はレモンに似ている匂いという。
彼女は松下が好きらしい。もの凄い純情。身持ちが堅いのなんの、オリハルコンの如く。
多分このあと出番があると思う。むしろ無ければいろいろ困る。
魔法は強化系を得意とし、直接近接戦闘を得意とする。
留学生でもある。
ネコミミが凄く似合う。金髪で、目はパープル。

騎士道精神に溢れ、裏切りを好まない。無差別殺傷など、必要以上の殺戮を糾弾する、根っからの騎士的性格。

◆フィルナ・ブランフォード

身長：１６５ｃｍ
体重：秘匿
血液：Ａ型。
装備：小さな魔法の杖。堅い。

処女。結構性知識はある。『ＢＬ』愛好家。

いわゆる金髪キャラ。ツンデレにクールを入れて二で割ったような性格。

実は彼女、学校の理事長で、直接の松下の退学の原因を作った人。悪気は無かったのだが……

『オペレーション・スク水・デイズ』という一歩間違えればドロドロの男女の仲に突入しそうな作戦の構想を立てた人物。その際、スク水を着て暴れまわっていたらしい。結構スレンダー。お嬢様でもある。

最初は矢島を気に入っていたのだが、あるとき何かを悟ったらしく、それ以来敬遠している。

得意な魔法は火。男女問わず人気が高い。しかしうっかりな人物。

松下から貰ったノートを研究しているらしい。

ネコミミが意外と似合う。

◆パス・マスティマ・クルーエル

身長：割愛
体重：検閲により削除。

血液：Ｂ型
装備：杖＋短剣

処女。ドＳ。ＳＭ願望があるとか。

その名前は『残酷な平和』を意味し、冷徹に、かつ大胆に攻める。
彼女は本編の最初で登場。松下を追い詰めた。小さいものが大好き。
氷主体で攻撃する。風紀委員。学院最強とも謳われる女性。
留学生でもある。
マスティマという名前は先祖代々らしい。

◆サージ・アメスト他男子学生。

モブ。性欲の塊。変態という名の紳士である。

◆ジャン・ルイ

１６ｃｍ。童貞。
松下が去ったあとの中心的な役割を果たす人物。
『姫騎士団』を結成しており、その統率力は計り知れない。また、変態という名の紳士の集団でもある。
クルド国出身。ちょこちょこ出てくる人物。情報を集めることに定評がある。
主に剣、炎魔法で攻撃する。
『ああ、ジャン・ルイがやられた！』

◆ノア・バラキエル・レッドフィールド

童貞。１５センチ。

その名前は『血の大地』を意味する。

いわゆるショタであり、彼を保護するための『姫騎士団』が結成されるほど可愛いというかなんというか。

金髪碧眼。クルド出身。男子からも女子からも変な目を向けられているように感じているせいか、何処か周りを気にしてしまう。

小さな剣と魔法で攻撃する。

ファンクラブ持ち、同人誌登場回数一位とのこと。

バラキエルという名前は先祖代々伝わってきたとのこと。

◆プリミル・アスモデウス・プリミッシェル

『非』処女。乱れっぷりが凄いらしい。

エンプラス国のお姫様らしく、その言動の一つ一つに威厳が少し感じられる。もっとも、今はすっかり矢島を引き込んでご満悦らしいが。

彼女の性格はまさにお姫様そのものであり、我侭といえばそうだろうし、姫らしいといえばそうだ。

アスモデウスという名前は先祖代々伝わってきた名前らしい。

◆村長／クラミス元帥

結構デカイ。

主人公が学院を出て、とある村でであった老人。
この御方は昔、クルド国においてかなりの地位にあったらしく、過去一度だけ名前をガウェインが言っている。
正式な名前は『クラミス・アルスヤラルユル・ゼネナエム』という名前。もう年老いた、元魔法剣士。今は義手を作る研究をしているそうだ。
主人公に『デスブリンガー』を託したのも彼である。

◆アニュス・デイ／イクス・ロードアゲイン

身長：測定していない。
体重：殴られた。
血液：O型
装備：白い洋服。

その出生が謎の少女。
松下が矢を入手してから約一週間後に出会った少女。
家族は皆死んでいるらしく、一人当てもなかったとのこと。
いわゆるアルビノであり、髪は銀髪、目は赤色であった。外に出るために日焼けを避ける魔法を日ごろから使用していたようだ。
ミューゼスの港町へ入港した後、戦闘が起こった。そのときに一緒に逃げていた男を殺害し、その後に松下と対峙する。そしてどうやってかは不明ながら遺跡の中へ進入し、再び松下と戦い、謎の言葉を残してサイサリスによって殺害された。
ちなみに『ロードアゲイン』という言葉はもう一度この道を、という意味（嘘）。元ネタはジョジョ。

彼女はディラックの海を展開できるらしく、無限に武器を作り上げてそれを投擲する、何処かで見たことのあるような攻撃をする。

また、火、水、風、氷といった種別の魔法はほぼ全て使用が可能だったらしい。
名前の由来はレクイエムより、『Ａｇｎｕｓ－Ｄｅｉ』。平和を願うレクイエムである。

◆ガウェイン・エムシーマ

身長：高め。
体重：関連書類が燃やされてしまっている。
血液：Ａ型
武器：『ガラティーン』という銘。青白い炎のような色彩が幻想的な片手で扱えるほど軽い剣。

処女。性知識はエロ本で収集している。

聖教都市で出会った女性。とても怖い人。上司に対しても剣を突きつけるほどである。
彼女の名前はもともと男性名であるが、それは彼女の出生に問題があった。彼女の実家は厳しく、女であろうが男であろうが差別しないという家柄で、その一環として男性名を勝手に付けられた。女尊男卑の社会にあって、それは意外なことでもあった。
最初の登場から段々と性格が変化していき、遂には超クールな女性になる。とりあえずは受け応えはするが、特に口に出さない性格である。
騎士団長らしい。

◆将軍／ピラトゥス

アカシックレコードにおいて登場した人物達。
将軍は戦場の指揮官であったが、戦場においての情勢が非常に悪化したこと、仲間の脱出を助けるために自ら出撃し、最後になって仲間の超大規模魔法によって焼死した。
ピラトゥスは上官を殺した魔法を封印すべく、各地を転々とし、最終的に自殺した。

◆ハンス・パーシヴァル

身長：高い
体重：不明
血液：不明
武器：『ライトブリンガー』という銘の剣。

童貞なのかは不明。１８センチ

いわゆる最強の抑止力。そしてまたの名を『暁の英雄』『暁の明星』とも言われる実力者。
彼の出生が何処かは不明である。昔、ふと戦場に出た時、彼の剣は光り輝き、その場に居た人間のほとんどを殺害した。その時の生き残りが彼を『光もたらす者』と言い、恐怖し、畏敬した。その後幾多の戦場を壊滅させ、最終的にクルド国へ渡った。
知略的、合理的に敵を攻撃する。
主人公に『矢』を渡した人物でもあり、主人公について何かしら知っている素振りを見せた。

この物語においてもっとも重要な人物の一人。完全数七の内、第六である。というかここまでネタバレすればその正体が誰なのか、大体検討つくはず。
ユダヤ・キリスト教において有名である。

◆エリン・（以下略）・クルド

身長：歳相応
体重：不明
歳　：１８
容姿：透き通る青い髪、青い目、ボン・キュ・ボン……？

いろいろ不遇な女王様。１８歳で女王というのは少しきついらしい。
今後の活動に期待したい。

◆イクス／スカー
松下の夢に出てきた謎の二人組。よく彼らの夢を主人公はみるという。
いつか彼らを題材にした物語を作りたいと思っている。プロットは頭の中では出来ている。

◆ベラトリックス・フルバーニアン

詳細不明

読者様からの要望で誕生したボケ担当の浅黒い肌を持つお姉さんキャラ。
意外と超美人で、酒を良く飲む。処女であるのもウリである。

おっぱい担当である。

◆トリシア・ガーベラ

詳細不明。男と女の中心。
読者様からの要望で誕生したツッコミ担当の、いわゆる男の娘キャラ。
こういう妹が居ればいいな～とかいう屈折した作者の願望のよってその原型は作られた。
処女で、酒は飲まない。エロチック関係に弱い。
貧乳。しかし、貧乳こそ美であるとの声が後を絶たない。

◆作者

穢(童貞)れ無き者　１７センチ
最近、路上で吐いたらしい。ジョジョとＳＦが好き。生粋の厨二病患者らしい。文才がないらしく、彼の書く作品は読みにくくて人気があまりない。

## 登場人物紹介（後書き）

『ＡＩＲ』の神尾観鈴の中の人が亡くなってしまったらしい。
この夏をどう過ごせというのだろう。好きな声優さんが亡くなるのは悲しいなぁ……

誰かを忘れている気がするが……これで全部でしたっけ？　思い出せない。

## 新たなる変遷へ

「諸君がわたしを公正に評価する必要が、どこにあるのだ」
――こう、孤独なあなたは言うだろう――
「不当な評価こそ、わたしにふさわしい割り当てとして、わたしが受け取るべきものだ」
ｂｙ　フリードリヒ・ニーチェ

その日は、いつにも増して空が晴れて光が何処までも照らしていた。もう年も明け、道行く人々も新たな日々の門出を祝っていた。
俺はただその風景を馬上から見つめていた。
その光景を見るのは、久しぶりのような気がした。目の前で人が笑い、子供が親に物をねだっている様子が、どこか微笑ましく感じた。
どうしてだろうか。いつもその感覚を得ていたはずだというのに、俺の心の中にはその感覚が全て消え去っているのだ。俺の中にとどめていたはずの思い出が消え去っていた。

（……結局、一人か）

見当たらないはずの娘を探すように周囲を見渡してみたのだが、無論それは徒労に終わった。もう――いないのだ。もはや俺の心にはそよ風が吹くことも、雨も降ることもない。この事実は俺が生きる限り心に残り続けることだろう。
神の、運命の指し示す未来に対して、俺の今に、明日の光は見えることはなかった。

やがて、俺の心を引き付けた風景はゆっくりと過ぎていった。馬車は絶え間なく動いていった。
依然として空は淡い藍色で染められていた。いくつもの町を行き、いくつもの人を見ていった。時折激しい風が吹いて馬車を揺らしていった。冷たい風は、まるで何者かの意思が宿っているかのように冷たい空気を残していった。

☆

数日後。
ふと、いつもならば座り心地の悪い馬車が動いていないことに気がついた。何処かについたのだろうか、と思って外を眺めてみた。
そこは、はっきり言えば町の真ん中、敢えてその情景の大々的な部分を言えば、すぐ近くに城があったことぐらいだ。恐らくは何処かの町に入ったのだろうが、如何せん、異世界人である俺が地理を知り得ているわけではなく、目の前の城が一体何処の国のものか分からなかった。
無論、俺にとっては『城』、などと言う視覚に頼る人間の権力の誇示のために作られたプロパガンダには興味はない。むしろ、その他の事へ興味は削がれていた。

「――どこだ、ここは？」

一人呟いてみるが、それに答えられる者は残念ながら俺の周囲には居なかった。騎士団の女達に聞こうと思っていたのだが、彼女らも何処かへ行ったと推測せざるを得なかった。
そこで、仕方なく、といえば俺の行動理由の全てだと言えるが、されども仕方なく外へ出た。
俺はそこで、周りを見渡してみるのだが、やはり見覚えがあるわ

けもない場所だった。周囲はいくらかの大きな建物が並び立ち、地面は舗装されていた。まるで大学のように広々としている空間がそこにあった。

以前、一人で旅をしていた頃に手に入れた地図を馬車の中に積んである俺の荷物から引っ張り出して眺めても、やはり分からない。無駄でしかない。無駄無駄である。

そこで騎士団かガウェインの姿を探してみようと歩き出してみるが、これは広すぎると百メートルほど歩いた時点で確信し、道を引き返して馬車のほうへ引き戻った。

「ここでも一人か、寂しいものだな」

一人身になって初めて感じた疎外感。学院を出たときには感じなかった孤独感。誰も救ってはくれないという虚無感。それらが俺の胸のうちに湧き上がり、遂に溜息へと変貌して体外へ出た。

くだらない。一人愚痴り続けた。

ポケットからコゼットとアニュスの写真を取り出してそれを見ようとしたが、やめた。今見てしまったらこれ以上ナイーブになってしまいそうだったからだ。思い出したくない記憶と共に、過去を回想してしまいそうだったから。綺麗な思い出も侵食されてしまいそうだと思ったのだ。今更思い出がどうだと言ってしまいそうだが、どうしてもそれだけは嫌だった。

「おい、お前。そこで何をしている？」

ふと、何処からか声が聞こえた。声がしたほうへ目線を動かすと、そこにいかにもこの国に従属しています、と主張しているような女が一人いた。

「お前、とは失礼な奴だ。初対面の人間に対してそのような言葉を

発するとはな」
「この私を侮辱するつもりか？」
「いや、別に。侮辱するつもりはないさ」
両手を挙げて、自らにそのような意思がないことを示した。
「……まぁいい。それより、お前はそこで何をしている？」
「俺か？　俺はただ置いてけぼりを喰らっただけだ。気がついたら周囲に誰もいなくてな、暇を持て余していた」
「そうか、ならばいい。だがこの城に入れるものは貴族や我々のような魔法の使える者、そして入城を許可された者だけだ。お前は許可を持っていないのならば、早々に立ち去れ」
「許可、と言われてもな。正直この場所の地理が分からない」
「なら、その仲間が帰ってくるまでそこにいろ。一応私がお前の監視をする」
監視する、と言われてもな。俺は小さく呟いた。
彼女は見たところ、この城の警備している人間らしい。小さな短剣が腰に、杖がその手に握られていた。
その女自身の人格や性格には興味はなかった。ただ、彼女の髪に目が行き、そしてまた寒かった。
「……」
ガウェインが帰ってこない以上、馬車に戻って寝ることも許されず、こうして一定の間合いを保ったまま三十分が経過した。
何も喋ることもなく。
何もするまでもない。
その三十分は一時間とも二時間とも思えた。しかし、その終焉を告げたのは、他でもなく、真後ろからの声だった。

「松下、入城の許可を取った。ついでに直接女王様が会いたいと言っているわ」

ガウェインだった。

いつ俺の後ろを取ったのか、それは定かではない。ただ――これだけは言っておかねばなるまい。

「ガウェイン、俺は『メガリス』だ」

「そう」

「それとここは何処なんだ？」

「クルド」

興味がない、と言わんばかりに、短く答えた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 新たなる変遷へ（後書き）

一応新章のつもりなんですが……ここ最近小説を書いてなかったものですから、途中からややラノベっぽくなってます。
主人公は髪フェチ。足フェチか悩みましたが無難に髪になりました。
冷徹に書こうと思ったのだけれど、やっぱ難しい。普通に会話させてしまった。やはり戦闘部はＳＦ風にして日常はラノベ風かな……。

この物語をＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ風の題名に書き換えるなら、そうだな……
『Ｄｏｏｍ／Ｌａ　Ｄｉｖｉｎａ　Ｃｏｍｍｅｄｉａ』とか
『Ｆａｔｅ／Ｐｕｒｇａｔｏｒｉｏ』とかになるんだろうね。

## 移りゆく時代の変遷の中で

ヒロイズムは虚栄と相容れない。またそれと同じ原因と結果を持たない。
虚栄が大きければ、それだけ栄光の愛は小さい。

byヴォーヴナルグ

世界で有数の美しい城を保有する国、クルド王国。確かに、俺の脳内にその国の情報はあった。
曰く、戦力を発展させるよりは国力を増大させることに着眼し、結果として世界有数の財力を保持している国家。また、そのおかげで戦力は『暁の英雄』と呼ばれるたった一人の戦力が主戦力とも言われる状態である。世界最強の戦力を保有し、尚且つ戦力がそれだけの国は、とある人が『国際武力における、最強にして最強の弱者』と評されたそうだ。
この城――ティンタジェル城はその財力の象徴である。外装は白く塗られ、清潔感が感じられた。
「……やれやれ、どうして俺がこの城主と会う必要があるというんだ」
俺はそう呟きつつ、目の前で歩いているガウェインに問うた。それにガウェインは振り向きもせず、答えた。

「知らないわ。他人の考えていることなんて分からない」
「難儀なものだな。せめて行動理由を言ってくれると助かるのだが……聞いていないのか？」
「ええ。とにかく会ってみたいとのことだったから」

少し考えてみても、それは恐らく当たり障りもない偏屈ですらない事柄に過ぎないのだ。この国を治めている統治主がどんな人物であれ、たった一人の人間を直々に召喚することなぞありはしない。考えられるのは、ただ興味本位か、それとも騎士団長であるガウェインの連れて来ていた人間に何かを思ったか。しかしそれは権力を持った人間の道楽にしか過ぎないのだろう。

「……」

権力者が俺にどのような印象を持っているのか、会ってなにがしたいのか。その事柄は依然として俺の心に複雑な疑問を投げかけてはくれたが、だからと言って今俺にできることはその権力者に直接問うこと、その一つだけしかない。
どちらにしても――俺にとってはどうでもいいことだ。相手がどのような印象を持ち、その上で俺に何を投げかけてくるのか――その答えが、俺自身の目的に合致するならば、その後のことはまた時間の経過に任せることにする。
ガウェインと俺はお互い無言の時間を共有したまま、この長い城を歩いて行った。そのうち時間が経つのを忘れ、無心のまま彼女のあとをついていった。
やがて、ガウェインは一つの大きな扉の前で立ち止まった。
彼女は振り返って言った。

「少しだけ待って」

ガウェインは俺が小さく頷くのを見届け、そして扉を開けて中に入っていった。

☆

エリン女王にとって、それはいきなりの出来事であった。いや、その場周囲にいた人間にとってもいきなりの出来事でもあった。
その時、エリンは城内の女兵士を集めて会議を開いていたのだ。その中にはありとあらゆる人種、またあらゆる階級の兵士がいた。その会議はいつもながら非常に複雑で難解なことを話し合っていた。

「――で、このリンドバーグ軍を抑えるにはどうしたらいいの？」
「それは非常に難しい問題です。なにせ敵はこちらの地理を把握し、かつ攻められにくい場所に陣を構えていますので、『英雄』による攻略であっても時間がかかるものと思います」

現在、クルド軍はその多くの拠点が攻められ、落とされていた。いくら援護の軍がいようと、こう醜態を晒し続ければ、いつ援軍が打ち切られるものか分かったものではない。こちらの国力が敵国を圧倒していようとも、戦力においては理不尽なほどの差が開いている。
いくらこちらの『英雄』に頼っていても、いつ首都に攻撃をかけられてもおかしくはない。

「なんてこと……ハンスでも力不足だと言うの？　ええい、戦力の増強はどのくらいで出来る？」
「出来てあと一か月は必要かと」

「そんなに時間はないわね……せめて半月で出撃できるように訓練してください」
「は、半月で、ですか？」
「そんなに練度は高くなくてもいいわ。でも、せめて遠距離砲撃や武器の扱い方を身につけさせておいて欲しいわね。あと弓。女は魔法で攻撃するとして、男は魔法を扱える人間はそうそういないから」
「了解しました。ではさっそく」

その兵士は女王の意向を伝えようと立ち上がり、ドアへ進み出でた。そしてドアを開けようとした時、そのドアはすでに開いていた。その兵士は誰だろう、と頭を上げると、

「ガ、ガウェイン騎士団長！？」
「そんなに驚くことかしら」

ガウェインはいつものように感情を表に出そうとはせず、その兵士に一瞥してからエリンの方へと歩み寄った。

「『彼』を連れて参りました」

ガウェインは簡潔に述べるだけだった。しかし、それを聞いたエリンは頷くと、

「――わかりました。では、彼をここへ」

それだけの言葉のやり取りだけ行って、ガウェインは元来た道を引き返していった。
唖然としている兵士たちは、一瞬何のことか理解出来なかった。だが彼らは『それも何か重大なことなんだろう』と自己完結した。
そのうち、エリンはパンパンと手を鳴らして、

「今日はここで終わりにするわ。各自、戦況の情報をかき集めてまた明日、この時間に集合よ」

☆

「許可が出たわ」

わらわらと人間が退出していくのを壁によっかかって傍目に見ながら、俺はガウェインの声を聞いた。

「――そろそろ理由ぐらい教えてもらっても？」

「自分で聞きなさい」

彼女はまた身を翻して中へ入っていった。俺も追うべきか悩んだが、ここは素直に従ったほうがいいと思ってその後を追う。

その部屋には何処かの会議室の造りになっていた。部屋の中央には縦に長いテーブルが置かれ、両端にはイスが備え付けられている。俺はその奥に居た人物を見た。

「あなたが、メガリス・ロードアゲイン？」

それはまるで少女から大人に変わる中間期の容姿をしているようだった。彼女は白い肌を持ち、やや蒼より青い髪の毛を肩まで伸ばしていた。また瞳は碧眼を揃え、まるでアニメのキャラクターを想起させた。

「――そうだ」

いくらか逡巡したのち、答えた。目の前の少女とも青年とも呼べる同世代の少女に、俺は思わず目を疑った。しかし同時に彼女がこの国の最高権力者であることを理解した。

「俺がメガリス・ロードアゲインだ」

## 移りゆく時代の変遷の中で（後書き）

２０１１年、夏。
――ソイツらは、何の前触れもなく現れた――
逃げ惑う人々。
そして武器を持ち、勇敢に立ち向かう人々。
――僕らは、取り戻せるのか――
――失われてゆく希望――
――朽ちてなお増える奴ら――
ソイツらは、音を立てず、静かに来る。
そして増え続けてゆく。
それは漆黒の羽を持つモノ達。
太古から生き延びてきたモノ達の逆襲。
『永延の漆黒、無限の蟲』
２０１１年、夏。全国ロードショー。
――君は、生き残ることができるか――
主題歌：『過去から未来へ』：Ｍｒ．ゴキブリン（ごめんなさい）
主演：ジョン・ゴッキーマン、キュレッソ・ゴキオリン、他。

なんてね、ウソウソ。つい先日、夜食で塩ラーメン食ってたらゴキブリが出たからさ。うん。
ウィキペディアのゴキブリの殺傷方法は結構面白い。あれ熱湯が弱点なのね。初めて知ったよ。
でもウィキペディアの『共存共栄』のところには吹いた。なによ、『視界に入らない範囲に生息するゴキブリと共同生活を送るのも一つの手段である。むしろ、ゴキブリを鑑賞できる美意識があればなおよい。』ってｗｗｗ

またこの映画のＰＶみたいな奴暇ならやろうかな。嫌ならしないけどさ。

## 権力の体現者と（前書き）

ちょっと前回の話は厨二過ぎだと思いまして、書き直しました。でも厨二です。

## 権力の体現者と

信頼が信頼性という母体から生まれるように、信頼性は人格と能力から来るものだ。

ｂｙ　スティーブン・Ｒ・コヴィ

俺にとって、彼女がどれほどのプレッシャーの中でこの国を支えてきたのかは知らない。彼女のような、俺とほとんど歳の変わらない少女が、どうしてこの国の女王として君臨しているのかさえも知らない。だが、知るつもりはなかった。

俺は彼女を睨みつけたまま何も言わず、また動くことはなかった。次の彼女の言葉を静かに待った。

「では、メガリスさん」

エリン女王の静かな口調は、何処か改まって聞こえた。

「この戦争という緊迫した社会情勢の中、我々の国へようこそおいでくださいました。あなたと騎士団長のガウェインがどういう経緯で出会ったのかは私の知る範疇ではありませんが、そこは今は問いません」

「……感謝する」

俺にとって、ガウェインとの初めての遭遇がまさか『誤解』によったとは知られたくなかった。知っても全く意味の成さない事柄で

あったのも本音である。
彼女はそれから言葉を続ける。
「私達の国は元々、近隣諸国の貿易を主に行い、比較的裕福な国家でした」
それから、彼女はこの戦争にまつわる出来事を話し始めた。
「ある日のこと、隣国である『リンドバーグ』は突然武力による決起を起こしたのです。我々は、隣国に対する警戒を怠っていたために、そのことがショックで堪らなかった。そして多くの犠牲を生んでしまった」
エリンはそう言って、目を伏せた。恐らく自分自身の責任を感じているのであろうことは用意に感じ取れた。
「私は、戦争を肯定することも否定することもしません。無論、戦争が生み出す経済効果も理解しているつもりです。ですが、もうこれ以上黙っているわけにはいかないんです」
彼女は、戦争を肯定する人間ではない。また、自ら進んで争う人間ではない。平和に、海が凪るように、ただ静かに生きていきたい。それこそが、彼女の望む人生の目標だった。
しかし、それは彼女自身の出生によって根本から覆されることになる。彼女は王家の娘として生を受けてしまったのだ。
それが、彼女の不幸かもしれなかった。
「私がこのような地位に着いているのも、この国の不幸かもしれません。私が女王にならなければ問題はなかったかもしれない。でも、それでも私達の運命がその様に定まっていたのなら、これも仕方の

ないことだと思います」
「……そうか」
俺はなんとなく言葉に窮した。目の前に立っている最高権力者に対して文句を言うつもりは微塵もなかった。彼女も彼女なりに戦っているのだろうか。
しかし、どうしても俺にはそのことが『甘え』としてしか見えなくなっていた。
――なぜ自分の預かり知らぬ事態を『運命』として素直に受け入れているのだろう。
エリンは俺のほうへ進み寄った。
「メガリスさん、ここにあなたを呼んだのは他でもありません」
俺には彼女の意図がはっきりと理解できていた。彼女は俺を必要としているのだ。いや、おそらく彼女自身は欲してはいないかもしれない。
だが。
それでも俺は次の言葉を待った。
「あなたはあの『レイヴン』の隊長を単独で殺害したと聞き及んでいます。ですから、どうか――我が軍にてその力を発揮してはくれませんか？」
やはりそうか。俺を駒にするつもりか。そう思わず心の中で冷ややかに思考した。
しかし、言葉には出すつもりはなかった。俺はその誘いにしばし考えたあと、首を縦に振った。
「そうですか、わかりました」

彼女は俺に対して何を思ったのかは知らない。もしかしたらいい駒が手に入って喜んでいるかもしれないし、愚直に新たな仲間が加わったと喜んでいるのかもしれない。彼女は笑顔を見せながら進み寄って、遂に俺の目の前へ来た。

「これからよろしくお願いします。メガリスさん」
「……メガリスでいい。それかロードアゲインと呼んでくれ」
「え……ああ、そうですね。では、ロードアゲイン、と呼ばせていただきます」

そういって、彼女は俺へ手を差し伸べてきた。

「握手です」
「すべきなのか？」
「我が国ではあまり馴染み深いものではありませんが、契約の成立の印としてよく行うことはありますから」

ふと、俺は数ヶ月前の出来事を思い出してそうか、と思った。この国にはあまり握手は根付いていないのだ。
俺は差し出された手を握ろうと、途中まで手を上げて――思いとどまった。

「――？　どうされましたか？」
「やはり、握手はできそうにない」

どうしても、抵抗感が拭えなかった。なぜかは分からないが、どうもその手を握る気にはなれなかった。

「……いいだろう。俺はこの国に仕官しよう。なんにでも使ってく

れ」

そう告げて、俺は彼女から離れこの部屋から退室した。

☆

「どうしました？」

「――ッえ？」

エリンはガウェインに尋ねられて、自分がビジー状態であったことに気がついた。

「あ、ああ……。すみません、ガウェイン」

「いえ」

自分がどうしてビジー状態に陥っていたのかを考えたが、今一思いつかず、ただ口を歪めるだけだった。それを見ていたガウェインも、なんら興味を示さなかった。

「ガウェイン」

「なんでしょうか」

「私は彼を、信用すべきだと思いますか？」

言ってから、エリンは自らの言ったことを恥じた。見掛けだけで、感じた事柄だけで相手を見てしまったと思った。しかし、それは間違いなく彼女の心の中に、『ロードアゲイン』という男に対しての

警戒感があったためだったことを証明していた。
ガウェインは、しばし何も言わなかった。その沈黙はエリンにとって冷たいものにも感じられた。やがて、待ちわびていた声色が聞こえた。

「それは、私が一概に言えることではありません」
「……そう、ですか」
「しかし、私は彼を信用します」

はっきりとそう言って、ガウェインは青年を追うように会議室を出て行った。
『彼は信用できるのだろうか？』
そのことに、不安を感じることはない、と否定しながらも、心のどこかに彼に対する警戒と疑問、不信感が沸いて出るのを止められなかった。

## 権力の体現者と（後書き）

やっぱり主人公は性格が暗くなったように書いていきます。
それと、多分そのうちロリ出します。

うーん、やはりテンプレのごとく水晶とかやらを出して魔力量の多さをアピールするとか……止めておこう。

あと、『レイヴン』で思い出したけれど、ベラトリックスとトリシアの顛末を書いてなかった。どうしよう……

## 遥かなる英雄と青年

民族というものは概して、かつて現代が偉人に対して犯した罪を、その場合各自が過ぎ去った既往において償う義務を感ずるもののように思われる。

かれらの生涯と努力は、感動的な感謝に満ちた驚嘆の念で追求され、特に悲観的な時代には、くじけた心や絶望的な魂をふたたび奮い立たせることができる。

ｂｙアドルフ・ヒトラー

「これが目的か？」

俺は会議室からようやく出てきたガウェインに対して、少しだけ卑下したような目線を浴びせた。

彼女はその目線を鮮やかに受け流し、無かったもののように扱う。ガウェインはその女特有の冷たい目線を逆に俺に浴びせかけながら、

「目的がどうとか、私には関係ない。私は軍人であって、女王陛下そのものでもない。女王の思惑は女王のみが知ること。軍人はそれに従うのみよ」

「……そうか、軍人気質だな」

「元々の性格よ。今更どうにも出来はしないわ。むしろこの性格は色々便利だもの、矯正するつもりは微塵もない」

「そうか。あんたがそう言うんなら、俺は何も言わないことにする」

やがて、俺達は目の前の広い廊下を歩きだす。

「さて、これからどうするつもりだ？　よもやまた旅に出るわけでもあるまいが」

ガウェインは少し首をかしげた。

どうでも良いが、歩き出したところでこの城の内部構造までは完全に把握していない。必然的にガウェインを頼りにする必要がある。だから今の俺は彼女の後ろにくっ付いているように歩いているのだった。

「どうするもこうするも、特に」

「何もしないのか？」

「そのつもり」

ガウェインは頬の筋肉一つ動かさないような冷たい表情で答えた。それは何を思っているのか分からない不思議な表情だ。深い何かを思っているのか、特に考えていないのか。

「久々なんだろう？　部屋に帰ったり事務室に戻って戦況を確認するべきじゃないのか？」

「面倒臭いわ。明日から本気を出す」

……どちらかと言うなら、何も考えてはいないらしい。扱いに困る女だ。

やがて俺達はこの長い廊下を進んで、左に曲がった。この先には彼女の事務室、つまり騎士団の部屋があるとのことだ。だが、彼女の性格から考えても仕事はしないだろう。彼女の言ったことはほとんどが事実、或いは必ず決行する事柄だ。このことから思案しても、恐らく何かの用事があってそこに行くのだと思う。

「その用事は、男の俺が行っても大丈夫なのか……はたまた女性固有のなにかが、」
「なんか言った？」
「いや、何も」

俺はそれきり黙って、そのままガウェインの後をただひたすらに追った。
やがて、その果てが見えた。
ガウェインがドアに近づいてそのドアを開け、俺も「このドアを開けるべきか」といくらか逡巡した末に、ドアを開いた。
意外にも広い室内の中央に、ガウェインと一人の長身の男が立っていた。照明によって、その姿ははっきりと見て取れた。男は日本人のような黒髪、そしてこの時代に似合わない黒いズボン。何処で入手してきたのやら。
しかし、その姿を認識した二、三秒後、ガウェインの声が聞こえた。

「どうしてアンタが私の許可も取らずにこの部屋に居るの？　死にたいの？」

ガウェインはそう言って、剣を鞘から抜刀し、その男に突きつけた。
しかし、男はそれには一切動じず、その顔の表情には薄い笑みを浮かべていた。

「よくやってくれた、ガウェイン。私の任務をよくぞ果たしてくれた」
「任務？　そんなものを受けた覚えはないわ」
「忘れていても、私は覚えている」

そして、じりじりと男に剣を近づける。その距離、約三十センチ。
「私は君に『人を探して欲しい』と頼んだはずだ。そして君は一人の男を連れてきたじゃあないか。私が言っているのはそのことだ」
「マツ……メガリスのこと？　あの男はただ道中で出会った人よ。それ以上でも、それ以下でもないわ」
「しかし、報告によると『レイヴン』の一人を倒したそうじゃないか。君の言うように、ただ道中で出会った人間にしては強すぎるだろう？」
「だとしても、それは運命にしか過ぎないわ」
「私が求めていたのはその運命そのものだ」

ガウェインは剣を遂に男の首筋へピタリと突きつけた。そのまま剣を引けば男の命は消えるだろう。だが、それでも男は笑みを浮かべていた。
すると突然、男は目線をこちらに寄越し、言った。

「また逢えたな、青年」

俺はそのときようやく気がついた。

「……！　あの時の？」
「そうだ、青年。あの時の、だ」

それは、もうどれほど昔になるだろう。俺がガウェインにも、アニュスにも出会っていなかった時、俺は彼に出会っていた。
そうだ、彼の名前は確か――『ハンス・パーシヴァル』だった。
俺に、『英雄』について少しだけ話してくれた男。

「――どうしてここに？」

「それは、私がこの国の人間だからだ」
そう。それだけのただひたすらに単純（シンプル）な答えだったのだ。
彼はこの国の軍人だった。だたそれだけだ。
「そして、私はこの国の『英雄』でもある」
『英雄』――その言葉はまた、彼の身分の証明、あるいは自己の存在理由を指し示していた。他の何者にも劣ることはなく、決して逃げず、国民を率いるカリスマ。
それが彼なのか。
彼は続ける。
「人の行いには必ず意味はある。そして出会いにしても同じだ。そうだろう？　だからこそ君はこうして、今私に剣を突きつけているガウェインにも出会ったし、また多くの出会いと別れを知ったはずだ。それは誰にも否定できはしないだろう。
じゃあ、これから君は何を成すべきなのか、どう生きていくのか、君は考えなければならない。これは君自身の問題だ」
「助言でもするつもりか？　俺自身の問題は自分自身で解決する。同情なんていらない」
そうはいったものの、彼の不敵な笑みを崩さないことへの焦りが己が内にあったのは分かっていた。
何をそんなに笑っているのか。あと少しでガウェインに首を斬られるかもしれないというのに。
「そうか？　君は急いで考えなければいけない問題が一つあるはずだが」
「俺に？」

「ああ、そうとも。君にとって重大な問題が」

そこで彼は一息分の間を空けた。

「君、今日は何処に泊まるんだい？　ついでにガウェイン、首、少し切れたぞ」

## 遥かなる英雄と青年（後書き）

最近学校の図書室にアドルフ・ヒットラーの『わが闘争』が何でか置いてあって少しだけ読んだけど、これを読んだ印象としては、ヒットラーは意外と知的な男みたい。

今回からＶｅｒｔｉｃａｌＥｄｉｔｏｒを使って執筆。多分従来より読みやすいんじゃないかと思う。変わらないならすみません。

## 騎士と英雄と青年と

我が身を犠牲に捧げる覚悟を持った英雄が戦うのでなければ、死をも恐れぬ兵士は見つけられないだろう。

ｂｙアドルフ・ヒトラー

「……ああ、そういえばそんな問題があったな」

俺は思わず溜息を漏らす。その溜息の成分は八割方が安堵と呆れだ。言わずもがな、その問題の簡単さに呆れているだけだ。

「そうさ。君はこの国に来てから間もない。だからどこに宿があるか、とか色々分からないだろう？　まぁ、まさか野宿でもするとは思えないがね」

「いや、俺は元から野宿するつもりだったが」

「そうか野宿か……ん？」

「？　どうした」

そこでハンスは首を傾げながら、

「野宿？」

「ああ」

「……まぁ、気に病むことはない。例えガウェインからいつも外で寝るように言われていてもな。そう、彼女はいつも――」

しかし、一瞬ハンスの顔が、ぶれた。

そして同じ瞬間に筆舌にし難い音が聞こえた。目でその行方を追

ってみれば、剣ではなく自らの拳で殴ったガウェイン、そして地面に倒れたハンスの姿が見える。

「それ以上、アンタが私を侮辱するのなら殺害をも止むを得ない」
「あたた……。むしろ君はそれを望んでいるようにしか見えないのだがね……」
「そちらが好みなら」
「ああ、それは困るな。なにせ私はこんな死に方で後世に伝わるわけにはいかないんでね」

と、ハンスは頬を撫でつつ立ち上がる。

「で、君はどうするつもりだ？」
「俺も死ぬか、という話か？」
「……いやまぁ、それでも良いんだがね？　流石にこれ以上話を続ければ本当に斬られそうだから、話を戻そう。
で、君は泊まるところはどうするんだい？　君さえよかったら、私が寝床を斡旋してやってもいいんだが」
「斡旋？」

その奇妙な単語に、俺は小さな突っかかりを覚えた。

「宿を斡旋してくれるのか？」
「ああ、そうだ。その様子だと、少しは興味があるようだな」

確かに、これまでの旅の中でマトモな寝床で寝た覚えがない。それは恐らくキャラバンの中で一人しか男がいなかったことに起因しているのかもしれないが、それでも布団を被って寝た回数があまりにも少ない。というかガウェインたちが宿泊まりで俺だけが野宿というのはあまりにもおかしかった。せめて幼女（アニュス）と一緒に寝たかった

のだが。

「……寝床か」

悪くはないかもしれない。これまでの不遇さから脱するためにも、これはいい機会なのかもしれない。

「悪くはないかもしれないな……分かった、紹介してもらおうか」

「それは本気なの？」

ガウェインが疑念の声を上げる。それはこの男の話を信じて良いのか、と問いかけているのだ。

俺は「そうだ」とだけ答えた。その返事に、ハンスはにやり、と顔をゆがませた。

「そうか、良かった良かった。うん、断られたらどうしようかと思っていたよ」

「だが、一つだけ条件がある」

そこで俺は溜息を漏らしながら、

「ちゃんとしたところを斡旋してくれ。もう地面とかで体を痛めつけるのはしたくない」

その言葉に、思わず噴き出したハンスは、「分かってるとも」と笑みを浮かべて、俺を連れ出した。

その後を見ていたガウェインは、溜息を一つ吐き、

「――どうして男ってこうも話を聞かないのかしら。バカじゃない？」

☆

「……案外、男は話を聞かないバカなのかもしれないな」

俺は目の前の事態を憂いて、思わずこのような愚痴が飛び出した。事実、それは無理もない事柄であった。なぜなら、二人の目の前には、巨大な建物と、立ち入るものを拒むかのような門があったからだ。はっきり言えば迎賓館のようで、何処となく人が生活しているような雰囲気を漂わせている。

「俺はマトモな寝床を斡旋してくれ、と言ったはずなんだが」

「マトモな場所じゃないか？」

「そうだな、これはマトモと呼べるかもしれん。しかしな、一般的な感覚で物事を考えれば、こんな建物を『マトモ』と呼ぶことはまずないだろうよ。むしろ豪邸だろうが」

その豪邸は、まず一般庶民の手に届かないレベルの大きさだった。例に言うなら、中世フランスの貴族階級の住んでいる物件レベル。

ハンスは、この豪邸を『何がおかしい？』と言ったように笑っている。この国の人間は裕福な人間が多いとかつて聞いたことがあったが、精神的にも裕福なのだろうか。

「で、俺はここに住むことになるのか？」

「まぁ、そういうことだ。人間は、住むところがなければ自らのモチベーションを保つことが出来なくなるからね。旅の途中で家が恋しくなるのと一緒さ」

「一緒なのかは分からんが……、ここはアンタの家なのか？」

「いや、違う」

「じゃあ誰の？」
「この国じゃ、かなり有名な一族の家だ。代々騎士として名を轟かしてきた。まぁ最近じゃそうもいかなくなって、去年騎士から商人へ転職した人物が今の頭首なんだがね」
「女か？」
「男だ」
「男か、珍しいな。しかし、戦いで食えなくなったから商売のほうへ変えたのか。色々あるんだな」
「しかし、その頭首はその人脈を通して商業で成功を収めてより一族の力を強めた。大した人物だよ」

このクルドは戦争はほとんどしなかったと言うから、それも必然のことだったのだろう。戦う人間は必要とされるときには重宝されるが、必要ないときには無価値になる。この一族は自らの価値を戦いから商業へ転換していったということか。

「人の生き方なんていくらでも変えられる。問題は、変える勇気があるかどうか、ということだ。この一族の頭首は、その点では非常に勇気があったのだと思うよ」

ハンスはそう言ってから、門を開けて入る。
俺はその後に続いた。

「ちなみに、その勇気は、身内には理解されたのか？　反対は無かったのか？」
「私の知る限りでは……確かあったはずだ。この頭首の娘の内の長女がこの案件には猛反対していたはずだと思う。そのためか、一年前ほどから長女はエンプラス国へ留学している」
「どうせ喧嘩でもしたんだろう。留学という名の家出だ」
「ああ、彼女は騎士道に憧れていたからな。それも父の騎士道には

強く惚れていたようだ」

「騎士道、か」

そういえば、かつて見知った人物にそういう騎士の家柄に生まれた人間が居たような気がしないでもない。

しかし、そんなはずはないだろう。彼女がそんな理由で留学を――

「ああ、ついでに教えておくが、この一族の名前は『アナスタシア』だ」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．．．

## 騎士と英雄と青年と（後書き）

多分ヒロインフラグ。

**外降雪**

Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｓｔａｒｄｕｓｔ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ａｎｄ　ｆａｃｅ　ｒｅａｌｉｔｙ.

甘い気持ちは捨てて現実を直視しろ。

時の流れ、というものは時として残酷なものに変貌することがある。

例えば――老化。これは誰にも止められることはない朽ち行く肉体の現れ。自らの限界を象徴している。

また、それと同じように時は運命と仲良しだ。運命は時を待ってその姿を現し、俺達の生きる道をことごとく邪魔をし、またはサポートしたりする。

この両者は、どちらにせよ人間の計る事柄の範疇には存在しない。目に見えないし、その存在を知覚することさえ敵わない。誰がどういう風に生き、何処に行き着くのさえ、この二つは密接に関係しているくせに、我々にはどうしようにも出来ないものなのだ。

特に、この二つは今までに起きてきた出来事を思い出させる。出会いや別れ、憧れと愛。遠い日の出来事を、過去に流れた時間を、運命が来るべき時に思い出させてくれる。

人がそれぞれが主人公であった時を思い出させてくれる。

（思い出す、か……）

最早あれはいつの時の出来事なのかさえ覚えてはいない。あの日――俺が出て行った日、コゼットは何を思ったのだろう。もしかして、何も思っていないのだろうか。

（だが、もう長い時間が経っている。俺がコゼットに会おうと、彼女は俺の顔さえ覚えてはいないだろうな）

時は残酷――忘れることも、時間は容赦なく、完璧にその任務を実行する。まったく、恐ろしいものだ。

「ん、どうした？　腹が痛いのか？」

そう俺の真横から尋ねてくるハンスは、何処か上機嫌に見えた。何か変なことを考えていそうな笑顔だ。薄気味悪いのか、奥が深いのか。

「いや、別になんともない。しかし……ここは本当に豪邸だな。外装から内装まで、キッチリしてある」

周囲を見渡しながら、俺は答えた。俺は今、この建物の入り口を入ったところだ。

この豪邸、もとい『アナスタシア邸』はまさに絢爛を感じさせる。真上に見えるシャンデリア、また地面の赤じゅうたんなどは筆舌に尽くしがたい高級感を感じさせる。

しかし、それを映えさせるのは、それ以外のものが質実であるということだ。部屋の隅々を見渡せば、何処も彼処も豪華というわけではなく、壁に飾られたサーベルなどは鈍い光を発して、周囲を威嚇するかのようだ。

「さすがは国の一、二を争う財力を持つ一族だな。美的センスも侮

れん。ま、この私を超えることはないがね！」

どこまで自信過剰なんだ、と俺は呟く。

そのときだった。背後に誰かが居る気配がした。女だろうか？

奇妙な気配を感じる。振り返ると、そこにはいわゆる『メイドさん』がそこに立っていた。

「君は、メイドさんか？」

ハンスは彼女に問う。

「はい。私はご主人様よりあなた方をお連れするよう言いつかっております」

そう言って、柔らかい笑顔を彼女は浮かべた。

それは俺と同年代らしい女性の笑顔だ、と俺は思わず目を見張った。まるで日本人を想起させるような黒髪、黒い目、母性に満ちた『胸』。俺が見てきたこの世界の人間の誰よりも日本人に近い容姿。ズキュゥゥンと懐かしい日本の思い出が蘇る気がした。

まぁ、気候が日本と同じだから彼女のような東洋人顔が居てもおかしくはないだろう。別段騒ぐことでもない。そう、騒ぐまでもないのだが……。

（初めて出会った気がしないな）

ふと、そんなことを思った。

「ではこちらへ。案内いたします」

「ああ、よろしく頼むよ」

そう言って、ハンスは歩き出した。それを先導するようにメイドさんも歩き出す。
俺も遅れずに着いていこうと、足を前へ、前へと動かす。この屋敷の廊下を、歩く。
そこで。俺は少しだけ立ち止まった。
――そういえば、彼はどうしてこの屋敷に来たのだろう。俺と彼の面識が無いに等しいと言うのに、この一般人の寝床を斡旋すると言い出したのだろうか。

「ん、どうした？　ついてこないのか？」

ハンスは俺が立ち止まったのに気がついて、後ろを振り返った。その顔を見ても、この男の思考は分からない。行動理由さえ見つからない。
――奇妙な男だ。
あのガウェインさえ激昂して攻撃するほどだ、それほどの何か内なるものを持っているのだろう。その内なるものの中に、俺を斡旋した理由もあると思う。

「ん……今行くさ」

メイドさんもこちらを見てきていた。俺は少しだけ恥ずかしくなって、開いた距離を少しだけ駆け足で詰めた。

☆

「こちらでございます」

メイドさんは唐突にそう言って立ち止まった。そして、その目の前にはドアがあった。

「ありがとう、メイドさん」

「いえ、こちらこそ、この国の『英雄』と話せたことを光栄に思います」

それは業務的な返答だったのか、それとも本心からか。俺にはそれを知る術はなく、ハンスはハンスでいつもの笑みをたたえていた。

やがてハンスはドアを開けて中に入る。そのあとに続くように俺もドアを開ける。

その時、ふと、あのメイドさんと目が合ったような。そんな気がした。

それから俺は顔を部屋の中央に向けた。そこには一人の男と少女が居た。

「よく来たね、ここまで」

その声は、この国の黒の正装を着込んだ男の声だった。その声はとても柔らかく、また威厳と尊厳を孕み、俺の心を大きく揺さぶる。

「あなたが、アナスタシア家の？」

「そうだよ。私が、このアナスタシア家の頭首、『セルディ・アナスタシア公爵』。気軽に『セルディさん』、とでも呼んでくれ」

その男――セルディはそう言って笑った。

公爵、といえば爵位の上位に当たる。つまりそれだけの能力があるという事実だ。俺はある種の尊敬の念を抱きつつ、これから何を言えばいいんだろうと脳の片隅で考え始めた。

そのうち、セルディは「そこに座ってくれ」と言いながら自らも

ソファに座り始め、俺達もそれに習う。
「さて――ハンスと君がここに来た、ということは……」
その言葉に、ハンスは頷く。
「ああ、この青年をここに泊めてやって欲しいんだ。しばらくでいい」
「一ヶ月ほど？」
「そのくらいで、十分宿で暮らせる分の金は稼げるよ。彼の働き次第だがね」
そうだな、とセルディは呟いた。それから、彼は俺の方を見る。
「あっと……君の名前は聞いてなかったね。聞かせてくれるかい？」
「俺――私は……」
そこでセルディは待った、と言う。
「いつも使っている言葉でいいよ。敬語は使うのも使われるのも苦手でね。この国民の特徴さ。だから『俺』で構わないよ」
「いいんですか？」
「謙譲語ならともかく、一緒に暮らすんだ。君はしばらくは『アナスタシア家』の一人になるんだよ。だから、親に言うように喋ってかまわない」
なら、と俺は一息の間を入れる。
「俺の名前は、『メガリス・ロードアゲイン』と言います。ただの一般人だけれども、よろしくお願いします」

「親子の会話で良いのになぁ……」
「親子はお互いを自己紹介なんてしませんよ」
俺達は小さな笑い声を上げた。本当に小さな声だったが、俺の心にはとても優しく響いていた。

外では、いつのまにか雪が降っていたが、それに彼らは気付くことはなく。
明日には消えてなくなっていることも知らず。
――また、それを意に介すこともない。

## 外降雪（後書き）

セルディさんとメイドさん。プラス幼女。……ギャルゲーみたいだな。ヒロインがメイドとロリしか居ないけどさ。
クドわふたー路線ならフラグも立つだろうがねぇ……ヒロインをこれ以上空気にはさせるわけには……

いや、いっそこの小説に出てくる全員（男も女も）がヒロインでいいんじゃないのか？　……なんて。

**堕ちた者たち**

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。

ｂｙ親鸞

それから俺は、セルディの隣にいる少女を見た。

「その少女は、あなたの娘ですか？」

その娘は、そう……どこかコゼットの面影を残しているよう見えた。彼女に似たパープルの瞳、子供ながらの可愛らしい顔の造り。それはアナスタシア家の一人だということを証明している。見た目はアニュスと同年齢ぐらいか。

セルディはその娘の頭をやさしく撫でながら言う。

「そうだよ。この娘の名前は『レティシア・アナスタシア』という。私の大切な娘さ。

……ほら、お兄ちゃんに挨拶してきなさい」

セルディは少女―レティシアをそういって立たせた。まるで、人を初めて見たような子猫のようだ――俺はそう思った。ついでにその様子に心がときめく。

「ん？　どうしたレティシア。怖いのかい？」

レティシアは顔を上げた。少女の美しい瞳がセルディに注がれ、

そして少女は首を横に振った。

「じゃあ、挨拶しないとな。ほらほら」

そうセルディが急かして、レティシアはこちらを向いた。その姿はアニュスを連想させる。

――超可愛い。

それは誰にも否定できぬ真実だった。日本にはまず存在しない金髪、おめめパッチリの紫色の瞳。それら一つひとつが宝石のように輝き、その場にいる全ての者の心を奪い去る。おそらく将来的に素晴らしい女性になることだろう。

彼女はしばらくの間何も言わなかったが、やがて口を開いた。

「……レティシア」

それだけ、呟いた。その直後には顔を赤く染め、逃げるようにセルディの元へ逃げ帰っていった。……俺が何かしたというのだろうか。

セルディは抱きついてきたレティシアを抱きあげた。

「やっぱりレティシアは人見知りだなぁ、そんなに怖がらなくてもいいのに」

そういうと、セルディの胸元で首を横に振る。

その様子は、お化け屋敷で親が怖いかどうか聞いたときに、無理して怖くないと言ってしまう子供のようだ。しかし、その姿も超絶に可愛らしい。

アニュスもあんな風に子供らしくなってほしかったのは心ならずも俺の抱いてしまった願望だった。

そのあと、セルディはメイドさんを召喚してレティシアを連れて行ってもらった。
だっこされているとき、ちょうどレティシアと目があったのは偶然じゃないと思いたい。

「さて、本題に入ろうか」

そういって、ハンスが切り出した。俺は驚いてハンスのほうを見た。

「本題だと？」
「そうだ。私がここに来たのもそれのためだ」
「俺はオマケ、ということか？　ハンス、それならば、本題とはなんだ？」

俺は思わず身を乗り出した。

「……君も知っているだろう。この国が抱える大きな問題をな」
「戦争……隣国との戦争か。確かリンドバーグとかいう」
「そうだ。彼らはこの国を大いに脅かしている。今でこそ戦いは一旦は中止されてはいるが、近い時にまた争いになるだろう。だから俺はアナスタシア家と今後どうするかについて話しあいに来た」

話し合い……？　俺はその言葉に、奇妙な意味合いが込められているような気がした。頭首が騎士を辞めた今のアナスタシア家に、軍事的な権限があるのだろうか、甚だ疑問だった。
いくらアナスタシア家が財政的に優れていようと、人脈が厚かろうと、できることは限られるのだ。例え、この国最高の一族だとしても。

「ハンス、君の見立てでは今後どのような敵の動きがあると思う？」
セルディはお茶を啜りながら言う。その目つきは既に騎士の物だ。
ハンスはにやりと笑って答えた。
「たぶん、一か月は敵の動きはないだろうな。こちらが切り札を手に入れたことを知っているはずだ。下手に攻撃すれば報復されると考えているだろう」
「切り札、だって？　そんなもの、この国にあったか？」
「ある。いや――手に入れたというべきかな」
そういってハンスは俺の肩に手を乗せる。
「彼がどうかしたのかい？　まさか彼が切り札とでも――」
そこで、セルディは初めて何かを悟ったという風な顔をした。
「……もう、そんな時期か」
「ああ、時が経つのは早すぎるな。いささか神も焦っておられるようだ」
そこで俺は待て、と言った。話についていくことができなかった。
「切り札が、俺だとでもいうつもりなのか？」
彼らは答えなかった。代わりに、セルディとハンスは小さく笑っただけだ。
「俺はただの一般人だぞ」
「わかっているよ。だけども……フフフ……これで鍵は揃ったよう

だね、ハンス」
「ああ、敵に対抗する力も彼によって手に入った。切り札は我々の手の内にある」
彼らは、俺の知らない俺の何かを知っているという風だ。そこが理解できないのだ。何がそんな時期なのだろうか。俺が何をするのか、彼らが俺より知っている素振りが果てしなく不気味だった。
「俺に期待するなよ、ハンス。ただの一般人に、戦争で活躍できるわけがない。それに俺は……ただの童貞だ」
「ならば尚良し、ってところだな。別に、童貞を恥じらうことはないさ。しかも戦争と童貞はなんら関係ないだろう？」
「さあ、どうだか。俺の知っている人間だと、戦場で活躍する人間はすべからくモテるのだが」
俺はどこかに引きこもりたくなった。無性に一人になりたかった。別に童貞であることをうっかりばらしてしまってそれを慰められたからではない。どこか彼らの俺に対する事を考えたかったのだ。
セルディはふとそんな俺の様子を見かねて、俺を部屋に案内するようメイドさんに言った。それから俺は席を立ち、メイドさんに連れられて部屋を退室した。

★

「彼も、それなりに悩んでいるようだね」
セルディは青年が去ったあとのドアをジッと見続けていた。
どこかその姿は、自分の子供を心配する親のようだ。その瞳は憂

いを帯びている。
　ハンスは立ち上がって窓の外に見える風景を眺めていた。そこに、いつもの笑みは見られなかった。しばしそこから動くことはなく、声だけが響いた。

「そうだろうな。彼は自分の『娘』を間接的に殺害してしまったのだからな。その真偽を知らずとも……彼は自らの行いを後悔している。精神が不安定になっているんだろう」
「娘……か。悲しいものだ」
「しかし、彼には来るべき試練が待ち受けている。しかし我々はその試練の内容は知らん。だからそれをサポートするために俺たちがいる」

　言葉が切れてから、ハンスはセルディのほうを向いた。

「物語は、決してハッピーエンドでは終わらない。試練こそ人間の特権だよ」
「それで、我々は何をすればいい？」
「まず、この戦争に勝つことだろ？　彼には辛い人生を歩んでもらうがな」
「了解した。では、神に味方した我々『グリゴリ』は、歴史を変えて見せようじゃないか」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## 堕ちた者たち（後書き）

あー、だめだ。ネタが尽きる。
さっさと戦闘パートかコゼット再開ルートを開拓せねば。

## 冗談を言う英雄

青春の夢に忠実であれ。

ｂｙフリードリヒ・フォン・シラー

「やれやれ、って奴だな……ハンス奴(め)、変なことを……」

あの後、俺はそのままメイドさんに案内されて部屋に入った。俺はその部屋のベッドに横たわりながら先ほどのことを愚痴った。

天井が遠くに見える。しかし、今ではそれが近く見えるのは幻覚に違いない。俺はそのことに嫌悪感を抱いた。

「切り札、ね……。切り札は俺じゃあなく、あの究極の力だろうな」

今現在、その究極の力がどこにあるのかは知らなかった。ガウェインが入手していることは知っている。だが、その所在が不明だった。

しかし、ハンスがそれをアテにするということはガウェインから聞いたのだろう。それか伝言か何かか。

ふと、俺は自分の手をかざして見た。

俺の体に、何か奇妙な力が溢れている。あのクリスマスの時か、あの矢に貫かれた時からこの力に纏わり付いていた。

そしてその奇妙な力は、妙に俺の体にぴったりと馴染む。馴染みすぎている。それが、そこはかとなく怖かった。

あの黒い機械鎧――今でこそ現界してはいないが、その気になれ

ば一秒も掛からずに体に装着できるだろう。これらの力が、どこか純粋さを持って体中に巡っていた。

「これがハンスによってもたらされたとしたら……、これも彼の言う切り札なのか？」

疑うとキリがない。そのことを考えて、それから考えることをやめた。

すると、その時。

「青年、少しは落ち着いたか？」

「……いたのかよ、ハンス。ドアを開ける音ぐらい出してくれ」

俺は上体を起こしてハンスをジッと睨んだ。

彼はいつの間にかドアに寄りかかってこちらを観察するかのように見ていた。

「一つ聞きたい」

ふと、先ほどまで考えていた疑問を彼に問うてみることにした。彼なら少しは分かっているかも知れないと思ったのだ。

「何を？　俺の結婚予定か？」

「そんなもん無いだろうが。俺が聞きたいのは、俺自身のことだ」

男はふと眉を微かにだがひそめた。男らしい顔付きにその表情が重なると、どんな人間でさえ戸惑いを覚えるだろう、と思った。

「なぜアンタは、俺に『矢』を託した？　あの矢には一体なんの力が込められていた？」

「答えるべきか？」
男はいつものしたり顔で言った。
俺はその言葉に頷く。
「なら答えてやろう。だが、一部だけだ」
「一部だけ？　どうして？」
「説明が長すぎるんだ。量にして、本一冊……いや、二冊ぐらいかかる。それに、理解できるかどうかも分からない。だから抜粋して大まかに説明する。これでいいかい？」
俺は思わず呆れて、それでいいと言った。
「なら掻い摘んで説明しよう。まず、君はその矢に貫かれただろう？」
「……ああ」
「あれは私が仕掛けた罠、とでもいうかな。まぁはっきり言えば、あれは一種のウイルスのようなものだ。そういう魔法とも言ってもいい」
「ウイルスみたいな魔法？　感染しないのか？」
「するものか。そんなことをすれば、死傷者がバタバタ出るからな。その魔法は、もっとも近くにいる人間の肉体・精神が脆くなったときに発動する。それからその魔法は人間の選別をするんだ」
「選別……俺はなんとか通り抜けたというわけか」
「選別、といってもシンプルだがね。生きるか死ぬか、そのどちらかの道しかない。しかし、生き残れば、優れた力を手に入れることが出来る」
俺はそこまで聞いて、自分が生き残れたことの不思議さを思った。
――生き残る、か。俺にとっては、あの娘に捧げた命だったのに。

今になって力なぞいらない。手に余るものだ。
「そのためだけに、俺に託したのか？」
「そうとも言うし、そうとも言わないさ」
彼はそう言って、部屋に備えられていたソファーに腰を下ろす。
「戦いに、英雄は必要だからな」
事実、この国にマトモな戦力と呼べるものは少なかった。元々が商業国であったし、それなりに軍備を拡張する動きもあったのだが、海外の軍拡がそれ以上だったのもある。
彼はその中で唯一の『恐れられる武力』として軍に在った。しかし、国はそのことに頼りすぎたのだった。結果、『最強の戦力』を持ちながら、その戦況は劣勢であった。
男は、自分以外の『英雄』と呼べるものが欲しかったのかも知れない。その英雄はいつも孤独だったのだ。
「青年、君は『英雄』になりたいか？」
その言葉には、いつもの陽気が感じられなかった。
「『英雄』ね。残念ながら、俺は人気が無い。人に好かれるような人間じゃないんだ。そういう職業には向いてない」
「――顔か？　顔は別に悪くはないとは……いや、どっちかといえば悪役顔だな。ライバル顔、とでも言うか」
「ライバル顔ね……」
そこで思わず矢島を思い出して違いないと素直に思った。
アイツが勇者なら、さしずめ俺はラスボスの前に出てくるライバ

ル辺りか。どちらにせよ、主人公向きではないということだ。
その時、ハンスは『あ、そうだ』と実に間抜けな声を放った。
「そういうなら……仮面をつけたらどうだ？」
その言葉に、俺も思わず『は？』と間抜けな声を放ってしまった。
「仮面？」
この歳で一体なにを言い出すんだこの英雄は。
一瞬、俺はこの英雄に対して『バカか、コイツは』と思ってしまった。これは無理からぬことであると承知してもらいたい。しかし、それほどにまで衝撃的だった。
「あ、そういえば確か城にあまった奴があったような？」
「おいおい、冗談はよしてくれ。この歳で仮面ごっこは恥ずかしいぞ」
「ああ、そこは大丈夫だと思う。あれは仮面というより頭と目元を隠す……そう、竜騎士の兜みたいなもんだから」
「いやそこじゃねーよ」
どこぞのライトノベルのようなツッコミを入れつつ、まさかな……と思わずには居られなかった。
俺は心の中でこの英雄に対して悪態をついた。どこぞの学芸会でもやらせるつもりだろうかと思うと、頭を抱えざるをえない。
「安心しろ、青年。手ごろなものを見繕ってくるから」
「本当にするつもりなのか！？」
……どういうわけか、この英雄には冗談が標準装備されているよ

うだ。
こんな英雄に守護されている国の命運を案じて、俺は思わず溜息をついた。

## 冗談を言う英雄（後書き）

お気に入りに入れてくれる人がいることに感謝感謝。
しかし・・・・・・うーん、公衆オナニー小説だから読まない人が多くいた方がいいのか？　厨二だし。元々現代文の対策目的で始めたし。

どうでもいいけど、『魔法科高校の劣等生』は売れているらしいが、昔読んだ時には私には合わなかったなぁ・・・・・。まぁ小生の作品より遙かに素晴らしいのはわかる。ただ単に私がおかしいだけだろうな。今度書店で購入するか。

# 幼い子供と青年

男がどんな理屈を並べても、女の涙一滴にはかなわない。

ｂｙボルテール

明けぬ夜は無く、日の光を浴びぬ朝もまた、永遠に来ることはなく。

晴れぬ青空も無ければ、曇らぬ空もまた、存在を許されない。

そしてまた――幼女が俺の隣に寝ていることもない。

――はずだった。

☆

「……おお、寒ッ！」

ふと、日の光の小さな刺激で目を覚ます。朝の弱い光が、薄手のカーテン越しに俺を照りつけ、覚醒させたのだろう。

いつものように上半身だけを起こし、背伸びをする。そしてその直後に、冬の刺すような冷たい空気が鼻を通り肺へ進入する。それに思わず驚いてしまって、鼻を手で覆う。

（……ん、いつから俺は寝ていたんだ？）

思わず俺はその感覚に一瞬戸惑った。どうも記憶が曖昧で、整理がつかないような。それでいて、思い出せそうで思い出せない。

「あのあと飯食って、部屋へ戻って……確か、ハンスとトランプをして、それから……」

それから。俺は何をしたんだっけ。

俺は額に手を当ててつぶやいた。

ただハンスとババ抜きをやっただけなのだ。そう、ただそれだけ。しかし、その後が妙に記憶にぼやけがあって、どうにも思い出すことができない。

強烈な違和感、とまではいかないが……突っかかりだけが異様に体に残っていた。

ふと、外を眺めた。

薄いカーテンから光がかすかに漏れている。そのカーテンの先にどんな風景があるのだろう、俺は『オ〇ニーでもしたいなー』とかどうでもいいことを思いながら、その情景をみようとベッドから出ようとして。

そこで気がついた。

「……お？」

さっきから妙に腰に違和感があるな、と思って下半身を見てみれ

ば、そこには――

――小さな女の子と大きくなった息子がいた。

……正直言おう。勃起した。いや、朝立ちだと思いたい。

ともかく、俺はそのあまりの非日常の光景に数秒間、体が動かなかった。脳がその情報を信じなかったのだ。むろん、児ポ法だとか見つかったら即刻逮捕だとかは関係なく、この光景が本当に異様過ぎたのだ。

「レ、レティシアちゃん……だっけか？　どうしてここに、いるんだ……？」

そのコゼットそっくりの顔形からして、間違いなく彼女の妹であるレティシアちゃんだ。

どうしてここにいるのだろう、俺はその疑問を何度も心の中で問いかけた。

彼女の着ている服はパジャマだ。寝間着。ネグリジェともいうかもしれない。

どうしてここに？

再三の質問を心に問いかけても、結局何もわからなかった。

俺は無意識のうちに、彼女の髪をなでていた。美しい金髪と、まるで二次元のキャラクターのような顔。それは俺の庇護欲を駆り立てていた。

「すー……すー……」

その寝顔は、幾多のアニュスの寝顔を見てきた俺でさえも萌えてしまうような可愛らしさだ。まるで人形、造形を極めたフィギュアのようだ。

また、アニュスの寝顔と彼女の寝顔はどこか似通っていた。

不思議とこの娘とアニュスは似ている。髪色は別として、顔形がどことなく似ていた。その思いは、未だ俺がアニュスとの別れを認めたくない意志があったのだろう、事実、俺はレティシアちゃんに対して、アニュスに対した時と同じような感情を持った。

「――ッは！」

そこで俺は自らの思考を遮った。

オナ禁三ヶ月の俺が、いくら幼女であろうとも襲ってしまうかもしれないと思ったからだ。

認識してしまった猛烈な性欲と戦いながら、俺は彼女を起こそうとベッドの布団へ手を伸ばしたとき、ふと人のドアを開く音を聞いて顔を向ける。

「おい青年、朝飯が――」

その者と目が合ったとき、俺は時間が止まったように思えてならなかった。その男はこの国の英雄と呼ばれている者。

――なぜ今になって来る？　どうして今来る？

彼が見ているのは、俺と、俺の腰に抱きついているようにしか見えない美少女の姿。

「……失礼」

果たして、この状況を弁明できる人間が世界にどれだけいるのだろう。ハンスはうっかり人の逢瀬の現場に出くわしてしまったような申し訳ない顔をした。

「ああ、おい！　違う！　アンタの考えていることはなにもやっていない！」

「しかし、その……『息子』はしっかりと反応しているようだが……」

「朝立ちだ！　変に考えるな！」

「だが、女の子を自分のベッドに連れ込んでいるなんてやるじゃないか。はっきり言うと驚いたぞ。……まぁ、子供は流石にやり過ぎだと――」

「連れ込む訳がない！　というか朝起きたら勝手にいただけだ！」

俺はそういったが、それが実際真実なのか、よくわからなかった。ハンスはどこがおかしかったのだろうか、急にその顔を薄い笑みへ変えた。ちょうどその時、俺の腰に抱きついていたレティシアちゃんがむくりと起き上がった。

「……あれ」

目をこすりながら彼女はそうつぶやくと、あたりをキョロキョロと見回し、首をかしげた。

「……ここはどこ？　何でお兄ちゃんがここに？」

「えっと、どう説明すればいいんだ？」

残念ながら、寝起きである俺に説明できる要素はひとかけらも無かった。

しかも俺がどうしてここにいるかをわかっていないことから、彼

女もあまりわかっていないらしい。
なので、ここは誘導尋問で問うことにする。
「え～、君はどうしてここにいるか分かっているかい？」
彼女は首を横に振る。
「そうか。じゃあ、昨夜君はどこで寝たの？」
「えっと、私の部屋」
「部屋？　じゃあトイレとか行かなかった？」
「行ったー」
「それは寝る前？」
そこでまた彼女は首を振って否定した。
「えっと、寝たあと、急におトイレに行きたくなって……メイドさんに連れて行ってもらって、部屋に戻ったと思う」
「『メイドさん』が？　じゃあその後はずっと寝てたのか……」
「メイドさんか？　それなら俺の真後ろにいるぞ」
「ってハンス、いつの間に近づいてきた！？　そしてメイドさんもか！」
と、ハンスとメイドさんは俺が気がつかないうちに俺のベッドの近くへ接近していた。
そのうち、メイドさんはハンスの真後ろから俺たちの目の前に進み出た。そして一礼して言う。
「今朝はお楽しみでしたね」
「なーにをいっとるんだメイドさんよ。俺は何もしていない。そもそも、どうしてここにレティシアがいるんだよ」

「それは、私の個人的な趣向のためです。特に深い意味はございません」
「せめて浅い意味は込めてくれ。正直心臓が止まるかと思ったんだぞ！　全く……」
「それは失礼しました。しかし、貴方様がどこか悩みを抱えているように見えましたので……」
「悩みを抱えているように見えるからって、自分の使えている主人の娘を、客人に差し出すのはどうかとは思うんだが……」

どうにも、このメイドさんは俺を客人として扱っていないような気がする。むしろ遊んでいるようにしか思えない。それでいいのかメイドさん。
どんな思考をして、どんな趣向を持ち合わせているのかは知らないが、こういうことは本当に心臓にわるい。いくらレティシアちゃんが可愛いからと言って、いきなり朝起きたら隣に女の子がいれば誰だって驚くだろう。
レティシアもいつの間にか俺の膝の上に乗ってきて話を聞いていた。出会ったときの緊張はどうしたんだろう。

「はぁ……やれやれ、ってやつだな、朝から疲れた。ほらレティシアちゃん、飯を食べに行くよ」

膝に乗ったレティシアちゃんをベッドの外へ下ろし、自身も立ち上がる。
メイドさんはレティシアちゃんの手を引いて部屋を出、残ったハンスと俺も、その後に続く。
途中、ハンスは言った。

「ま、こういうこともあるさ。私も最初見たときは本当に驚いたがね」

「俺はもっと驚いたさ。いろいろな」
「フフ……いろいろか。――ああ、そうそう、朝飯食べたら城へ行くぞ。作戦会議と被り物を探さなきゃならん」
「作戦会議で十分だろ、とは言っても無駄なんだろうな。どうせ」

こうして、青年の一日は始まった。

しかし、クルド国の隣の国、リンドバーグで、ちょっとした出来事が起きていた……。

## 幼い子供と青年（後書き）

今回はただのネタです。気晴らしです。
ああ、キャラがすぐに崩壊している。たぶんあとで書き直します。

# 冷徹な女王と女達

変化は機会と見なすべきものである。
変化を機会としてとらえたとき、初めて不安は消える。

ｂｙ　ピーター・ドラッカー

その日の朝は、ベラトリックスにとってはとても寒い朝に感じられた。外気の、剣のように鋭く、冷たい空気が彼女の肌を切り裂くようだ。外は渦巻くような風の金切り声、雪。それらがベラトリックスの気分を著しく損ねていた原因の一つだった。
しかし、彼女の気分を損ねている要因はそれだけではない。
目の前の玉座に座っている女王こそが、その原因の最たるものだった。

「ベラトリックス、そしてトリシアよ。よく帰還した」

そのえらく落ち着いた声に、ベラトリックスとトリシアは何も言わずうな垂れた。玉座に座っている女王の口から発せられる声は有無を言わさず周りのものを黙らせる力があった。ベラトリックスはその力を苦々しく思いながら跪いていた。

（帰って来るべきじゃなかったわね……）

ここはリンドバーグ国、王座。
その王座に座る、権力を思うがままに行使する、見た目四十台の女性。

――メーヴェル・エッジ・リンドバーグ。
それがこの国の最高権力者の名前だ。
彼女は、自らの願望をかなえるには、どれほどの犠牲が出ようと強行する、冷徹な女傑だ。
ベラトリックスは、その前で、あたかも不敬罪に問われてもおかしくないことを思っていた。
また声が聞こえる。

「顔を上げよ。そう恭しくするものでもあるまい」
「しかし、陛下の御前ですので」
「顔を上げよ、と私は言った」

妙に女らしくない口調でその声は言った。まるで男性のような独特の喋り方だ。
王位に着けばこのようになるものだろうか、跪くベラトリックスは心の中で呟き、また酷くその口調を嫌悪した。しかし、ここで逆らうのも自らの命に関わろう出来事なので、一応は従って女王を見る。
しかし、ベラトリックスはこれからなにを言えばいいのか途端に分からなくなった。この女王を前にして、体が縮こまってしまうのだ。考えていたことも全て吹っ飛んでしまった。
――どうしよう。
額に汗がにじむような気がした。
だが、幸運なことに、女王はベラトリックスの様子に気がつかず、言った。

「それでは、これまでの任務の成否を聞こう。これまでの長い国の統治における安全のための戦争の中、我が国の戦況を決定付ける力――『六六六の悪魔』の入手の成否を」

女性特有の高いはずの声が、今のベラトリックスにとってはそれはとても低い声に聞こえた。いささかの滞りもなく、簡潔に、しかしそれらの言葉がここにいる全ての人間の胸の内を圧するかのようだ。

ベラトリックスは深く息を吸い込んだ。圧されるかのように、空気が肺へ上手く入っていかない気がする。

そして彼女は言った。

「申し上げます」

たった一言だけ、言えばいい。

一言だけだ。何も恐れることはない。事実を報告するだけだ。恐れる必要はない。

「女王陛下の直々の勅命であった『六六六の悪魔』の入手についてでございますが――道中、クルド国の騎士団の妨害を受け……」

「それで？」

「……奪われました」

その途端、この部屋の人間は誰一人動かなくなった。いや、否――女王のかもし出す雰囲気が、動くことを許してはいなかったのだ。それから長い沈黙が流れ、ベラトリックスらはその何ともいえない威圧感に耐え忍んでいた。

やがて、女王の声が響いた。

「奪われた、だと？」

「……申し訳ございません、ですが、ミューゼス港は壊滅させることは、我が隊長が完遂しました」

「ではそのサイサリスはどこに？　よもや死んだというつもりか？」

その言葉に、ベラトリックスは震える声で「……はい」と答えた。
それから、女王は何も言わなかった。責める言葉もなく、ただ、女王は静かに時を浪費していった。
女王にとって、それは聞きたくない情報だったのかもしれない。あのサイサリスに哀悼を捧げているのか、それともこれからの戦争状況を危惧しているのか。いずれにせよ、ベラトリックス、トリシアにとっては女王の沈黙はただ単に恐怖を増長させているに過ぎなかった。
空気が乾いているのが、分かった。
唇が乾く。髪も痛み、神経が病む。この戦乙女達にとって、この部屋は地獄のようにも感じられた。

「……事態は悪化したか。いや――下手をすれば皆死ぬ。最早時間はない」

どこか、女王の態度はその究極の力の恐ろしさを知っているかのようだった。
通称『六六六の悪魔』――それは、古来より伝わった伝承でしかない。だが、それはただの恐るべき力ではないと言われている。
力ではないとなれば、それは一体なんだろうか。多くの人々がその答えを探した。あるものは武具、あるものは魔法だという。しかし、とある学者はその正体を『人間である』とした。

――その究極的な力がどんなであれ、力を使うのは人間である。武器を用いるのも人間であるし、魔法を使うのも人間である。ならば、恐るべき力を使う者こそ、『六六六の悪魔』であり、それこそ『恐るべき御稜威の王』と呼ばれる者である――

その学者は、そう言った。
女王は何を考えているのだろう。ベラトリックス達には分からな

かった。
女王は暫し何も語らなかったが、やがて顔を上げ、言った。
「クルドの者たちが手に入れた確証はないが、迂闊には手を出すことは出来ない。今は、今は――様子を見ることしか出来ないだろう」
「しかし、女王陛下。保持しているかどうか分からない戦力を恐れる必要はあるのでしょうか？　どうも私には信じられません」
「そう見くびったものではない、ベラトリックスよ。かの国には『英雄』がいる。使える戦力は惜しみなく使う化け物だ。『六六六の悪魔』の力が無くとも、現に我々はこうして戦争を一時停止している。この戦い、我々の敗北は近いだろう」
女王は、はっきりとそう、信じられないようなことを言った。
「まさか……敗北だ、などと言うものではありません。たかが一個人に我々の軍隊を破ることは出来ませんでしょう？」
「それをやってのけるからこそ、『英雄』なのだろう？」
その女王の顔は、どこか好戦的にも思えて、ベラトリックスは心で彼女を畏怖した。
そうだ、その顔こそがこの国に君臨する女王本来の顔。敵を徹底的に排斥する主義で、カリスマもある。誰にも負けない、負けるはずがないという絶対的な自信。それが国民をひきつける。
彼女は立ち上がり、そしてベラトリックスに向かってにやりと美しく整った顔を歪ませ、
「お前達『レイヴン』は諜報活動をすることを禁ずる」
一瞬、聞き間違いだと思った。
諜報活動を禁止……？

ベラトリックスたちは驚いて顔を挙げ、
「な！？　それはどうしてですか！　我々は……」
彼女らは抗議した。それでは私達の在る意味が消えてしまう、居場所がなくなってしまう。
それだけはどうしても嫌だった。戦争は情報が必要でもある。どうしてこんなことをいうのか理解できなかった。
それとも、この失敗で失望されてしまったのか……？
女王は――メーヴェル・エッジ・リンドバーグ女王は、言った。
「お前達は確かに素晴らしい人材だ。だが、これ以上収集できる情報はほとんどない。クルドに潜入するにも、向こうには英雄がいる。死は免れない。
なら、お前達はお前達で出来ることを探すがいい。――言っておくが、決して私はお前達に失望はしていない。信頼した故だ」
「それはどういうことですか！　陛下！」
だが、女王はその問いには答えることはなかった。
ベラトリックスらの前に立っていた女王は、マントをたなびかせて奥に消え、気配は遠くへ消えていった。
彼女達は、ふと周囲が先ほどより暖かくなっているような気がした。気のせいだろうが、そんなことは最早どうでもいい事柄だった。
☆
それから数時間。
ベラトリックスがふっと目を覚ます。

（ここは？）

そこは城に作られた『レイヴン』の個室。

その中のベッドの上に、彼女は横たわっていた。

（頭が……おおう、クラクラする）

この部屋の空気に漂っているのは、アルコールか何かの酒特有の匂い。嗅いでいるだけでも酔ってしまいそうで、気持ち悪く感じる。

窓の外は未だに雪が降っているが、積もってはいないようだった。

ベラトリックスはカーテンを閉め、ベッドの布団を豊満な胸に引き寄せながら上半身を起こした。

「よく寝るもんだね、全く、これだから酒飲みは困るんだ」

「トリシア？　なんでここに？」

トリシアはイスに座ってこちらを鬱陶しいように見つめてきた。

それから溜息を一つついて、

「女王と別れてから、君はすぐに酒を飲んだじゃないか。それも度数の高い奴をさ。大体、酒には元々あまり強くない体質なんだからあんまり飲まないでくれよ、僕が運ぶことになるんだから」

「ああ～、それはごめんなさいね。でも、まぁ酒はやめらんないわけで」

「全く……嫁に貰ってくれる人がいなくなるよ？」

「嫁？　私が婿を取るわよ」

その、肉食系女子的な発言に呆れながら、トリシアは笑みを浮かべる。

しかし、その笑みも数秒の後には厳しいものへと変わる。

「で、どうするのさ？」

「なにを？」

「何を、じゃないよ。僕達は実質的に活動を制限されている。戦いに出向くのもいいけれど、戦闘が止まっている今、それも出来ない。今のうちに情報を収集したいけれど、女王が制限して出来ない。だから、僕達はこれから何をすればいいのかって話！　聞いてる？」

「……」

「聞いてる？」

「……、ん、ああ聞いてるわよ勿論。あれよね、働きたくないけど働けない状況よね」

「まぁ、そういうことかな」

トリシアは半ばベラトリックスが本当に聞いているのか疑いつつ、持っていたバッグから一冊の本を取り出す。

「この本、隊長から貰ったものだけれど、何の本なんだろう？」

「さあ？　でも、一応文体を成しているようだし、何処かの国の書物なのは確かだけれど……。隊長はこの本に反応する人を探せ、っていったんだよね？」

「仕官しろ、とも言っていた」

そこで彼女に最後に会ったときを思い出す。

あのとき、確かにそう言っていた。だが、この文字を解読できるかどうかわからないのに、どうやってその人物を探すというのだろうか。

「頭が痛くなる問題ね……」

「君の頭が痛いのは酒のせいだろう！」

それがもっともらしい頭痛の原因か。

それから二人して、これからどうするのかを話し合って……結局何もせずに寝た。

## 冷徹な女王と女達（後書き）

体育祭。死んだ。腰が痛い。
このところ小説を書いていないのは体育祭の練習で帰ったらすぐに寝ていたからです。はい、すいません。

今部は女王様とベラトリックス達のお話。もっと最後の部分を書きたかったけれど、ｇｄｇｄになったのでやめた。
予定として、ヒロインフラグ、その後に主人公とベラトリックスの絡みを書きたいと思っている。

まぁ、書籍化とかされるわけないし。キチンと書ければそれ以上のことは望まない。

## 議会、青年、城にて

人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である

ｂｙウィリー・ガロン

「では、会議を始めます」

エリンとかいう女王の一声で、その場の空気が張り詰めたのを俺は感じた。

流石は王権を持っている人間だけあって、その言葉が重みを持っていた。実質的な権力を持ったのはつい最近だと聞いたが、短期間の間に成長したのだろう。

俺はその言葉を会議室の端っこで聞いていた。城内で少ない男性だけあって、流石に女性と相席して座るのもどうかと思われたのかハンスと隣同士で座っていた。

「では第一に、リンドバーグの軍の動向についてです。報告は？」

そういうと、すぐに手が上がり、それをエリンが指名する。

すると、聞こえのよい高い声が聞こえた。

「はっ！　現在のリンドバーグの動きですが、特に変化は見られません。依然として沈黙を守ったままです」

エリンはやや腑に落ちないといったような表情を湛え、リンドバーグに対する疑問を露わにする。

無理もないかもしれない。この国の情勢を見れば、今すぐに攻撃されようものならば首都はすぐに落ちる。いくら英雄の力を持ったとしても、その処理能力以上の数を投入してゴリ押しすれば、或いは。

事実、リンドバーグとクルドの戦力差は目に見えて明らかだといえる。大国と小国の戦争なのだ、軍備の質だって、比べ物にもなるはずがない。

軍事同盟を結んでいた国だって、今はそのほとんどが支援を打ち切っているらしいとの噂もある。

（やれやれ、この女王もとんでもない時期に王位継承をしたもんだ。これじゃ、前王の責任逃れの身代わりと言ったところじゃないか。。……まぁ、俺もとんでもない時期にこの国に入ったもんだが）

どこの国でも、こういう状況が多いのは旅をしていてよく分かっていた。隣国を信じれない国も多いのだそうだ。この戦争もそういった状況の一端なんだろう。

「どうだ青年、わが国の女王陛下は。可愛いだろう？」

「ハンス、上司に向かって可愛いは失礼じゃないのか？」

「そうかい？　部下が上司を褒めるのは仕事だと思っていたんだがね」

と、ハンスは笑う。

この男と出会って以来、俺はコイツはおかしいんじゃないかと疑問を抱いている。本当に強いかどうかも分かったもんじゃない。

まったく……、呆れてしまう。

その時、俺は女王がこちらにチラリと目線を送ってきたのを感じてハンスから目を逸らした。

だが、俺達の会話は少しばかり女王に探知されていたようで。

「そこのお二人、何か私に変なことを言いませんでしたか？」
「いや、まったく。言ってないよ」
「同じく」
「……怪しいものですわね。ハンスといい、メガ……メ、メガロさん？　といい」
「メガリスですが。……あと、ロードアゲインで構いません」
「――あ、ああそうでしたね。と、とりあえず会議中は静かにお願いしますわ。特に今は重大なことを話し合っていますので」

名前を間違っただけであたふたする女王は、まぁ確かに可愛い部類に入るのかもしれないが……メガロとは間違えて欲しくなかった。かっこ悪いだろう、流石に。

それから、俺達は黙ったまま会議の内容を聞き続けていた。男は黙ったほうがいい、そういう空調が出来つつあったからだ。それに、視線も心なしか冷たい。まるで高校デビューに失敗してクラス中から扱いに困られている状況――場違い感も甚だしかった。
やがて、会議も終わりを感じさせる議題の、ある時――女王はこう切り出した。

「で、戦いがストップしている現在、戦力増強を図る必要があるのですが……それについての報告は？」
「はっ！　国内外の一定以上の青年に対し、学徒動員の勧告を数ヶ月前に行っており、そろそろ有志が集まってくる予定です」

その報告に、俺はハッとした。

「ちょっと待ってくれ、学徒動員だって？」

報告をした女は、ややその顔に驚きを秘めて。

「え、ええ。そうです。学徒動員ですが、それがなにか？」

「子供を、戦争に駆り出すのか？」

「子供といえども、彼らは十分に大人の肉体を持っています。戦力の増強は図れるはずです！」

「……増強？　子供を戦場に送り出して本当に戦力になるのか？」

女の表情は、その生真面目さの裏にある愚かさをむき出しにしていた。

「よくあることです」

今度は、俺が押し黙る番だった。よくあること、つまりこの世界では第二次世界大戦のようなことが起きているのだ。端的に言えば、学徒動員は最後の切り札ともいえる。

現在の情勢で、確かに学徒動員は正しいのかもしれない。戦力が足らずに、どうやって補えというのだろうか。同盟国の力を借りられない状況で、戦力増強を行うには学徒動員が手っ取り早い。

ただそれだけのことだ。そして、よくあることだ。

「終わりましたか？」

そこに見かねた王女が割り込んできた。さしずめ、一端終止符を打っておくことで議会をスムーズに進めるつもりなんだろう。

俺はイスに座って溜息を着いた。この国の情勢は意外と厳しいものだと痛感する。

先ほどの女はこちらを睨んだ。それから再びエリンのほうへ視線を向けた。

「えっと、学徒動員と言っても、あまり重要な地位には着きません。あくまで後方支援に徹してもらう予定です。ああ、勿論参加するかどうかは個人の自由ですが」
「そう……じゃあ国外のクルド人についてはどうなの？」
「それについても、数ヶ月前にこちらに帰ってくるように通告してあります。ただ……」
「ただ？　何か問題でも？」
「はい。一箇所だけ、帰ってきてないところがあるんです」
「どこです？」

女王はそう問うたが、女はやや躊躇しつつ言った。

「……『エンプラス特殊学院』です。女王陛下」

俺はまたも、耳を疑う羽目になった。
――『エンプラス』だって？
心が胎動しはじめたのを感じる。もう、長く感じていなかったこの感覚。
彼女は今どこで何をしているのだろう。俺の親友だった矢島も、会長も、風紀委員長も、バカな面々も、キチンと彼らの青春をはたしていて、楽しんでいるだろうか。
そんな風な青春を過ごしているだろうか。俺は忘れられているかもしれない、その場所で。

「じゃあ、一人か二人を派遣する必要がありそうですね……」
「俺がいく」

女王の言葉を遮るように、俺はそう言った。
女王はやや驚いたような表情でこちらを見つめて、

「ロードアゲインさん……が？　……まぁ良いでしょう。承諾します。では、後に詳細を渡しますので受け取ったらすぐに出発準備をしてください」
「分かりました」
「あ、これで今日の議会は終了ですね。皆さんお疲れさまでした～」
と、女王は朗らかな表情を見せ、今日の議会は終結を迎えた。
俺は心の中で異様な高ぶりを覚えていた。
――彼らに会える！
それが俺を充足させていた。
また、それが奇妙な因縁を生み出すとはしらず。

## 議会、青年、城にて（後書き）

時間がタリン

## 男の持つもの、彼の想い

人生は決して、あらかじめ定められた、すなわち、ちゃんとできあがった一冊の本ではない。
各人がそこへ一字一字書いていく白紙の本だ。生きて行くそのことがすなわち人生なのだ。

ｂｙ大杉栄

その日の夜は新月で、クルドの土地の上にある空は光を人間に提供してはくれなかった。しかも生憎空は曇りだ。これでは、いくら晴れていようと光は地上に届くこともなかろう。
誰が、どんな風な表情をして、どんなことを考えているのか。それは顔すら見えない空の下では全く分からない。
俺はその空の下で、アナスタシア家の屋敷、その一角の池を眺めていた。

「流石に凍っているな」

目の前で池の水の表面がうっすらと固体化しているのを見て、冷ややかな口調で呟いた。
ふと思い立って、足を池のほうへ向ける。その足を、靴を、その氷へ接地してみる。
すると、氷はパキィ、と音を立ててヒビが入る。そしてゆっくりと力を強めて押していくごとに亀裂が大きくなり、やがて――割れた。
俺はその様子を、特になにも考えないで見ていた。

「雪でも降るんだろうかね」

――いや、考えきれなかったと言うべきだろう。

気がつけば、俺の背後に誰かが立っていた。

気配は感じられなかった。

その人物が、口を開く。

「気温は零下、新月で光もなし――冬だね、まったく。寒いったらありゃしないよ」　男の声だ。それも、俺の知っている男の声。

ハンスじゃあない。もっと柔らかい、包容力のある人間の声だ。

俺はその声のした方へ視線を向ける。その先にはアナスタシア現党首、セルディの姿があった。

「……」

とりあえず、濡れた靴を水から引っ込めた。彼は俺の行動を気にもせず、

「やぁ、メガリスくん。良い夜だね。君もそう思わないかい？」

と、彼は軽々しく話しかけてきた。まるで教師が生徒に挨拶するように。

俺はややどう返せばいいのか、ある程度考えて、返事をする。

「……ええ、そう思います」

「だろう？　……まぁ、寒くて雪が降るかもしれないけど。昨日だって、雪が降っていたという話だ。けれど、いい夜だ。この風景を彩るのには最適さ」

それがどうしたんだろう、と思った。
セルディはそれから溜息をついて、
「私も、この光景を二年前は二人の娘と見ていたんだ」
「二人？」
「ああ、言ってなかったかい？　僕には二人、可愛い娘がいるんだよ。……一人は今、この屋敷には居ないけれどね」
知っている――その言葉が声に出そうで、何とか押さえ込んだ。
もう、昼の時のような気分の高ぶりは微塵もなかった。考え直せば、そう――出会ったところで覚えているはずはない。それが俺がここに来た理由もそれだ。少し頭を冷やす必要があったからだ。
彼は知ってか知らずか、凍りついた池の水を眺め続けている。。
「少し、そのもう一人の娘について話そう」
白い息を吐きながら、言った。
「私の娘は、元々騎士道に憧れていてね、幼い頃からそういった類の本をたくさん読んでいた。私と母が騎士だったことも影響して、段々と性格も成長するにつれて、それ相応の、凛々しい性格に変わっていった」
その声は、どこか昔を懐かしんでいるように聞こえた。
「私は、娘の成長に心を躍らせたよ。この娘は必ず素晴らしい騎士になるだろう、ってね。
だから私は最大限の援助もしたし、今の騎士団長であるガウェインにも娘の稽古をつけてもらっていた。だがある時――気付いたん

だ」

彼は、そこから口調を強める。

俺に向かって、何かを語りかけようと、息を吸う。

「結局、私達は国の駒だ、人を殺す道具だってね。国の謳うような、華やかな人間じゃない。それは全て幻想だって。だが、娘は知らないんだ、そういうのを。僕はそれに恐怖を覚えた。気付いたら、私は娘に対してとんでもないことをしていたんだ」

「――――」

「全ての兵士は、騎士を夢見るものさ。私だって、それに憧れてなったんだから。でも、もう騎士を続けていくことはできなかった。だから、私はやめた。妻と結び付けてくれた騎士をやめた」

「それは……娘のため？」

「そうだよ、だって、人殺しを美化する騎士を目標にされたら精神的に娘を捻じ曲げてしまうじゃないか。でもそのせいで家出しているのも事実だけれど……君みたいに騎士から遠く離れていそうな人には関係ない話かもしれないけれどね」

あながち間違いではないだろう。俺は決して騎士ではない。心で、そのことをおかしいもんだ、と思った。

その点、コゼットは騎士らしい人ではあった。記憶も曖昧になりつつあるが、それでも彼女の顔、性格、口調は覚えていた。

『あなたはそこで何をしているのだ？』

俺達が最初に交わした会話から既に、そのことが伺えた。彼女は彼に、セルディに憧れていたのだ。

「彼女は何も知らないんだ。騎士なんていうのは全てその人の装甲

でしかないんだ。外見のいい、美しい鎧にしか過ぎない。その人の中身を、理解しようとは誰もしない――」

彼は悲しそうだった。、自分の娘に対する罪を告白しているのだと、その時理解した。

彼は池を眺めるのをやめ、こちらに向き直った。その瞳には、ゆるぎない決意があった。

「メガリスくん、私は君に頼みごとをしに来たんだ。君にしか出来ないだろうことをさ」

「……それはなんです？」

「いや、頼みごとと言っても小さなことさ。君は任務で『エンプラス特殊学院』に行くんだろう？　その時のついでに、ちょっと渡してきてもらいたいものがあるんだよ」

その時、俺は彼の腰に何か剣のようなものがあるのを見て、ぎょっとした。

まるで、何処かの英雄が使っていそうな、黄金で彩られた柄に、幻想的な揺らめきを感じさせる鞘。それは剣だった。

俺は一瞬戸惑った。この剣は最初に会ったときには身に着けていなかったはずだ。また、騎士を止めて商人に転向した時点で、彼が剣を持つ必要はない。何より、俺と話をするだけで剣は必要はない――

彼もその目線に気がついたのか、腰から剣を取る。

「私の娘は今、『エンプラス特殊学院』に居る。もし彼女がこの国に帰ってくることを拒んだ時には、これを渡してもらいたい」

「剣を、ですか？」

「そう。これは彼女の母――私の妻が使っていたものだ。銘を『オートクレール』という。私には、もう扱えない剣だが、彼女の身を

守るというのなら、母親の形見が一番いいだろう？　私の使っていた剣を渡したら逆ギレされるかもしれんからね」
（意外とそうかもしれないが……）
「変な表情をするねぇ……そういう顔をするんじゃないよ。あながち君も無関係といいきれるわけでもないだろう？　とばっちりを受けるのは君なんだから」

とばっちり、か。彼女は彼を許すのだろうか？
それ以前に、この国に戻ってくる気はあるんだろうか？　俺にはわからなかった。
彼女は彼を許すのか。いや、そもそもこの国に愛想を尽かしているのかもしれない。

（いや……わからん）

彼女の秘密を知った今、俺には彼女のことがよく分からなくなっていた。彼女があのとき見せてくれた笑顔とその凛々しさの裏には、こういう事情もあったのだろうか。

「私の娘を、頼んだよ」
「……ええ、分かりましたが――名前は？」
「――そうだったね。名前は『コゼット・アナスタシア』だ」

（……知っているさ）

そう心で呟いて、剣を受け取る。
重いとは思わなかった。だが、これは彼女の母親の騎士の証。そしてこれからのコゼットの騎士の証となるものなのだ。俺にとって軽いかもしれないが、彼女にとってはとてつもない重さを感じられずにはいられないことだろう。

（この剣が使われることがないのが、一番いいんだがな……）

それも、恐らくいつかは覆されるだろうが……今は、そう思っていても構わないだろうと思った。

## 英雄と青年

悪がわれわれに善を認識させるように、苦痛はわれわれに喜びを感じさせる。

ｂｙ　クライスト

セルディから剣を託された時より三日後のこと。

俺は女王の部下から渡された作戦詳細書を受け取り、早速エンプラス国への移動の準備を行った。

だが、主に城が馬車などの交通のための移動機関を用意してくれたので、とくにこれと言った準備物はない。あるとすれば自分の荷物ぐらいだ。

――ここはセルディ家の一室、いわゆるプライベートルーム。俺が寝るときやリラックスするときに使っている部屋である。

（……どうして、こうなっている？）

ソファーに座りながら、手にした作戦詳細を読んでいると、思わずそう思ってしまう。

その理由は、この作戦の主要な回収人物のことについてだった。

「……回収人数は七人、か。えっと……俺とクラスメイトの奴は三人？　コゼットとジャン・ルイと……ノア・バラキエル・レッドフィールドか。確か、変態紳士とショタだったな」

思い出すに、あの個性の強い面々がこのクルド出身だとはよもや予想もしなかった。
一人は日本人ばりの変態、かたや一人は腐女子にターゲットにされているショタである。これは奇跡とも、悪運とも呼べるつながりだともいえるかもしれない。

「こいつらがよりによってクルド出身だとは……いや、知っていたような気がしないでもないが……」

はぁ、と溜息を漏らす。
事実、めんどくさい輩が混じっているだけで、どことなく面倒が起きそうな予感はしている。
特にこのジャン・ルイという男。俺を覚えている可能性は高い。そのため、何かしら妙なことになるのは目に見えている。

「――まぁいいか、どうせ会うんだからな。
さて、荷物は全て積載、馬車も必要分を準備したし……足らないものは」
「私だろう？」
「そうだ、足らないのはハンス――」

ここまで言いかけて、俺は後ろのドアの方を振り返る。
そこには大きな鞄と剣を腰に携えた英雄――ハンス・パーシヴァルという男の姿があった。
彼はふむふむ、とどこか満足そうに、ドアに寄り掛かりながら頷いていた。

「……なんだ、アンタも来るのか？」
「悪いかい？」

「いや、別に。ただ、どうして俺に着いてくるのかな、と思っただけだ」

ハンスは笑い、肩をすくめる。

「いや、なーに……ちょっと行くところがあってね。丁度行き先と合致しているんだ」

「ということは、学院まで着いてくる気はないのか？」

「まあね。でも私のような大人が、君達青年の青春の場所である学校に行くこともおかしいだろう？　さらさら着いていくつもりもないよ」

無論、興味はあるがね――彼はこう付け足して、にやりと笑う。

そして、オマケに、

「一応保身のために言っておくが、私だってピチピチの十八歳の女の子を見たかった」

こういった。

俺は何も言わず、すっと立ち上がる。

そしてそばにあった『釘バット』を手にして、

「おいおい待てよ青年、流石に私でもそれを喰らったら一発で昇天してしまうぞ！」

「いいやハンス……多分アンタなら生き残ると信じているよ」

「いや信じてもらうのは光栄だが……」

「なら兵士は兵士らしく栄光の中で死んでいけ！」

と、その『釘バット』を構え、振り下ろそうとして――

そこで、既に彼が俺の射程距離外に脱出していたことを知った。

（逃げ足だけは速いやつめ……やれやれ）

冗談と殺意が交じり合った感情（殺意八十パーセント）を、溜息と共に押さえつけながら、俺は手にした『釘バット』を床に投げ捨てる。

「ったく……くだらん茶番はもう終わりにするぞ。まったく、変なことを言うな！」

「いやぁ、すまない。しかし私も一応男なのでね、興味はないわけじゃないんだが」

「それ以前に大人の対応をしてくれよ……」

気苦労は、絶えない。

だがそれも、彼が英雄であるための器の大きさなのだろう。普通、ここまで無礼な口聞きをして、敬意も払わず、彼をアンタ呼ばわりして――それでも怒らないというのは、この国の住民だから、と纏めてもややおおらか過ぎると思う。

戦場では、この笑みは何を意味するのか。

不気味でもある。

「……時間だ。行くぞ」

「ああ、そうだな」

だが、不気味だからと言って人間の性格が図れるわけでもなし。

今の状態は、保留すべきとして俺のうちにしまっておくとする。

俺は荷物を持って、この家を後にする。

腰には彼女に渡す剣と自身の剣である『デスブリンガー』を携えて。

☆

俺達は準備していた馬車を受領し、そのなかに荷物を投げ入れ、中に入る。
馬車は二台着いてきている。回収する人数的にもそのほうがいいから、という判断からだった。

馬車を走らせて、数時間。

「ふむ。雲はなし、か。良い天気だ」

ハンスは、馬車に取り付けられている窓の外から見える風景を眺めていた。
上下の蒼と土色の風景は、見渡す限りの世界を、そのコントラストによって覆いつくしていた。
雪もなく、家もない。
ただ気温が低いことも相まって、窓の外に見える風景は殺風景なものにしか見ることは出来なかった。
しかし、そのような天候でもハンスは頬杖をつきながら空を眺めていた。

「殺風景でも、青いそらが見えるのはいいことだ」

何がいいのか――いまいち俺には理解し難いが、それでも一応はああ、そうだなと答えておいた（青いそらに反応したのは秘密である）。
しかし、言われたら気になるのも人間の性である。俺も馬車の車窓から見える風景を眺めようと、窓の方を見た。

「……変なもんだな」

やや不満げに、声に出して言う。

空は確かに雲は無く、すっきりとした冬空が広がっている。

しかし、地上はほとんど何もない。あるのは山と、荒地ばかり……。特筆すべきものはなにもない。

（人はここら辺は住んでいないのか？）

見渡してみても、見えるのは廃墟ぐらいだった。流石に人間が住んでいるとは考えづらい。

ハンスはどこを見ているんだろう。空を見ているのだろうか。俺はふと疑問に思う

そのうち、ハンスの声が聞こえてきた。

「――変、か。まぁ確かにこの場所はちょっとしたいわくつきの場所だからね」

「ん……どんな場所なんだ？」

「ここは昔、刑務所と処刑場のあった場所なんだ」

「処刑場？　それがどうしてこういう風になっているんだよ」

ハンスは俺の方を横目で見て、

「分からないか？　処刑場っていうのは基本的に霊的スポットが多い。しかも、いわくつきの土地だから売れない。だからこうして荒れていく」

その時、馬車がガタッ、と大きく揺れる。車輪が石を踏んだらし

い。
だがハンスは憎たらしい笑みを浮かべると、
「こういう偶然的な揺れでも、お化けだとか幽霊のせいになるんだよね」
という言葉にしばし呆れて、俺は脱力した。
「……空と関係ないだろ、それ」
「関係はあまりないけど、大体人間ってのはこういう恐怖に支配されるものだからね。こういう風に寂れている一因も、人間の感情が関わっているのさ。……空にしたって同じだろ？　見える場所によって、見る人間によって、その時に抱く感情は変わってくる」
（それがなんなんだよ……）
心の中で、強く思う。それがどうしたんだよ、と。
だが、彼は俺のことをお構いなしに、ハンスの小さな鞄を膝に載せ、その中から何か奇妙なモノを取り出した。
「まぁ、今までの会話全てこのための話題作りだったんだけれどね」
「また変なものを俺に押し付ける気なのか！？」
俺は目を細めた。彼の持っているものは……兜、だろうか。とにかく何かいわくつきのモノのような気がする。
「押し付けるわけじゃないさ」
彼の口元がおどけた表情を見せ、

「投げつけるつもりだよ」
「いらん」
「いらんって……そう断言されても困るな。私がこれを見つけるのに二時間掛かったんだぞ？」
「ガラクタじゃないか、それ」
「いやいや、ガラクタじゃない、兜だ。そう、言うなれば……竜騎士のような」

言われてみれば、確かに『裏切りの竜騎士』として有名な人物のつけている兜にそっくりではある。通気性も抜群のようだ。蒸れて禿げる心配はない。
だが装飾品でもなんでもなければ、実用性にも疑わしい部分もある。
俺は彼の手にある兜をじっくり眺めた。

（ガラクタではなさそうだが……いかんせん、ハンスの持ってきたモノだ、怪しくないわけがない）
「ほら、付けてみろ」
「ううむ……」

半ば投げつけるように兜は俺の方へ寄越された。
手にとって、近くで鑑賞してみる。結果として、怪しい部分はなさそうだ。

（装備しろっていうのか？　恥ずかしいなぁもう……勘弁してくれよ）

だが、期待の眼差しが熱いハンスを裏切るわけにも行かず。しかたないので、その兜をゆっくりと頭の上へかぶせた。
視界は良好で、ほとんど阻害される感じはしない。ぴったり、と

いう感想だ。

「おお、似合っているじゃないか。ドラグナーを名乗っても不思議じゃない」

（やめてくれ……そんなお世辞は嫌いだ）

ちょっと恥ずかしくなって、すぐに兜を脱ぐ。そしてハンスに投げ返す。

「残念……」

しょぼーん、と言わんばかりに彼は肩を落とす。ハンスは兜を自分の座っている席の隣に置いて、外を眺めだす。

（やれやれ）

どう言ったものか、といくらか逡巡しても、結果は出なかった……。

## 英雄と青年（後書き）

兜は、まぁ……ＦＦ４に出てくる竜騎士カインの装備している兜だと思ってください。

最近朝っぱらが寒くなりましたねぇ……。

## 始まりの場所

私の成功の秘訣がひとつだけあるとすれば、
ずっと子供の心のままでいたことです。

ｂｙ　アルバート・アインシュタイン

冬の日の光を見て、ふと自殺したい気持ちに駆られた。もし整った条件――堪えがたい犯罪を犯したときの後悔や、そういう環境のことだ――がそろえば、俺は躊躇なく手元の剣を喉に突き刺しただろう。

今、俺はクルド国から渡された作戦書を読んでいる。既に内容は頭に入っているのだが、そうすると意外に落ち着くからだ。しかもやることがない。

ハンスは俺の隣でパンをかじりながら、

「家に帰りたい」

「あ？」

「おっぱい揉んでみたい」

この男は冗談が本心に聞こえるから嫌いだ。それで心が落ち着くから尚更嫌いだ。何が『家に帰りたい』だ、ただのホームシックではないか。

「いい歳して、子供染みたことを言うよな、あんた」

「まあね。だけれど、子供の心を持つって事は非常に大事なことだ。大人が成長と共に捨て去ってしまうものだからね」

だが時として、子供心は災いをもたらすこともある、とハンスは付け加えた。

「しかし、戦いにおいては、子供の心ほど不要なものはない。興味本位で特攻されちゃ困る。はっきり言えば、童心を持っている人間ってのは成長しきっていないのさ。だから部隊を壊滅させることもあるし、失敗もする。成功はほとんどない」

「よく言う。あんたこそ、子供みたいじゃないか。……もしくは人間じゃないみたいだな」

ハンスが困ったように笑って、

「そうかもな」

「人間じゃないのか、あんた」

「少なくとも、私は子供だと思っているよ」

そう言ってから、にやりと笑う。

そして彼は立ち上がって窓を開け、外で馬車を操る御者に何かを言って馬車を止める。

「降りるんだっけか。任務か？」

俺がそう聞けば、

「そうだ。だが、すぐ終わるよ。終わったらそちらの学院に行く。どうせ準備に二日ぐらい掛かるだろうから」

「歩いて大丈夫なのか？　ここから学院まで結構あると思うんだが

……」
「大丈夫だよ、私を侮っては困る」
そう、これは任務だ。国家が利益のために、保身のために、国家戦略のために行う行為。だが、それを行うのは俺達のような人間であって、決して王権を持つ人間が行うわけではない。何より、これから初の任務に向かう若輩に、そのようなことを言われる筋合いはない。ハンスはそう思ったのだろう。

「じゃ、また会おう」
「ああ、また」

彼は馬車から飛び降り、御者に合図して馬車を出立させる。
俺は彼に小さく手を振る。
ハンスもそれに気がついて、大きく手を振った。
馬車が走って、移り変わる風景を見ようと思う頃には、既にハンスは遥か彼方にいた。

☆

馬車が揺れる振動で、俺は目を覚ます。
酷い頭痛がする。頭を押さえながら上体を起こす。アニュスが死んでからこのかた、酷い頭痛が寝起きとともに起こるのだ。
別段、精神的に壊れ始めているわけでも、生活に著しい支障が出るわけでもないため、薬を飲んでそのまま放置することにしていたのだが、今回の頭痛は、何か精神が乗っ取られるかのような感覚を

生じさせている。
俺自身、体は強いほうで、風邪などはほとんど引かなかった。でも、外に出て遊ぶような体育会系の人間でもなかった。だから、この頭痛もただの一時のモノだろう。そう、勝手に結論付けた。
目蓋を持ち上げて、この世界の空間、青を湛える空を視認する。

（ここの空は……変な色が見える）

空は、青色に淡いピンクを混ぜたような色になっていた。
工業製品が製造されて出される排気ガスのせいでも、ましてや光化学スモッグのせいでもない、奇妙な空の照り具合。
俺はこのような風景が好きだった。はっきりしないものが好きだ。この空の青が綺麗に見えないのが、どこか俺の心にとって気に入っている。
不思議だ、と思った。
実は、この現象自体は、別に特別なものではない。空間中に偏在する『マナ』という――蜂蜜入りのパンではない――不可視の神秘的のエネルギーは、ある一つの特性を有する。それは酷く使いすぎると空が淡赤色を帯び始める、ということだ。通常の能力・状態に宿る神秘的な付加要素に過ぎないこのエネルギーは、自らの負担をこの蒼穹の空に吐き出しているのだ。
まあ色づくといっても、普通はこのように空が桃色が見えるだけなのだ。他に問題は起こさないという。
しかし……だとしたら、ここはクルドではない。それは確かだ。
すると、ここはどこの国なのだろうか。

「問題は無いだろうが、少し気になる……どこかで戦闘でもやっているのか？」

そうはいうものの確証はどこにもありはしない。しかし、どこか

で魔法が大規模に展開されているということは間違いはなさそうだ。

（ハンスに関係していなければいいが……）

腐っても英雄である。死なれたなら、こちらの士気が株価暴落のように二次関数で下がっていくのは目に見えているのだ。ゆくゆくは乗っ取られ、消えてしまうだろう。

（……杞憂だろうがな）

快適、とは言いづらい馬車に、薄く色づいた空。

こういう任務でなければ、到底経験できなかっただろう、そのことに奇妙な感情を得ながら、俺は小さいソファーに寝転がった。

そうして窓から見える空と、所々過ぎ去る建物、風の音があった。だが、目を瞑ったけれども、寝れそうもない。

出来ればクラシック音楽でもあれば、と思った。ベートーベンの『月光』でも、『G戦場のアリア』でも構わない。この退屈な空間をどうにかしてくれ、と心の中で願った。音楽は人を安らかにしてくれる――俺は心のどこかで苦痛を感じていたのかもしれない。

ああ、なんだか面倒になってきたな。

薄桃色の色彩が空を彩っている。これで日が暮れたらどれほど美しいのだろう。暮れ時のオレンジの光が、どのように俺を楽しませるだろう。

これから行く、己の捨てた場所がどのように変化しているのか、俺にとって、今は興味のないものになっていた。誰がどう成長していようと、今は――。

そうして、翌日。
時折、強い揺れを感じる。何だろう、と思うと同時に、ああ、馬車が止まったのかと理解する。
外に居る御者に尋ねてみれば、その回答は間違いなく目的地についた、とのことだ。

「なら、ここはもう『エンプラス特殊学院』というわけか」

どれほど眠っていたかは分からないが、今はそれは問題ではない。欠伸をして、窓に目を向けると、そこは在りし日の学院だった。
運動場では魔法の訓練を行っているのが見える。だが授業中なのか、他の生徒の姿は見えない。

「あれからどれくらいになるんだろう……、俺が居たころから……」

矢島がいて、コゼットがいて、会長がいて。度々衝突し合ってきた彼らの姿が、在りしの姿のままに思い浮かぶ。
あのときの青春を、彼らは覚えているだろうか？
それとも、過去は過去として、忘却の彼方に忘れ去っているのだろうか？

俺は馬車を降りようとした。だが、そこであることを思い出してしまった。

「そうだった……、もう『松下　和哉』という人間は、あの時に死んだんだったな……」

そうだ、俺はもう――彼らの知る人間ではない。
俺は――彼は、アニュスと共に死んだのだ。だから、今ここにいる男は俺であって、松下では、ない。

（それに、追放もされたんだったな）

どうしようか、と数秒悩んで、それから馬車のソファーを振り返った。

そうだ、兜だ。

それを手に取り、ゆっくりと頭にかぶせる。これなら、正体が露見する確立は低くなったはずだ。――すくなくとも、ハンスの見立てでは正体は分からないとのことだが。

「行くか」

今度こそ馬車を降りて、冬の日差しを浴びた。

この寒さから思うに、冬の終わりは当分見えそうもない。

## 始まりの場所（後書き）

個人的には、主人公は、例えばキャラ全員集合の時の写真に唯一出ていなかったり、アニメで言うＯＰに出演していなかったり、そういう役どころを目指します。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0366n/

---

謳われない英雄への鎮魂歌

2011年11月5日10時41分発行